社会言語科学会
第 44 回大会発表論文集

2020 年 3 月 5 日(木)･6 日(金)･7 日(土)

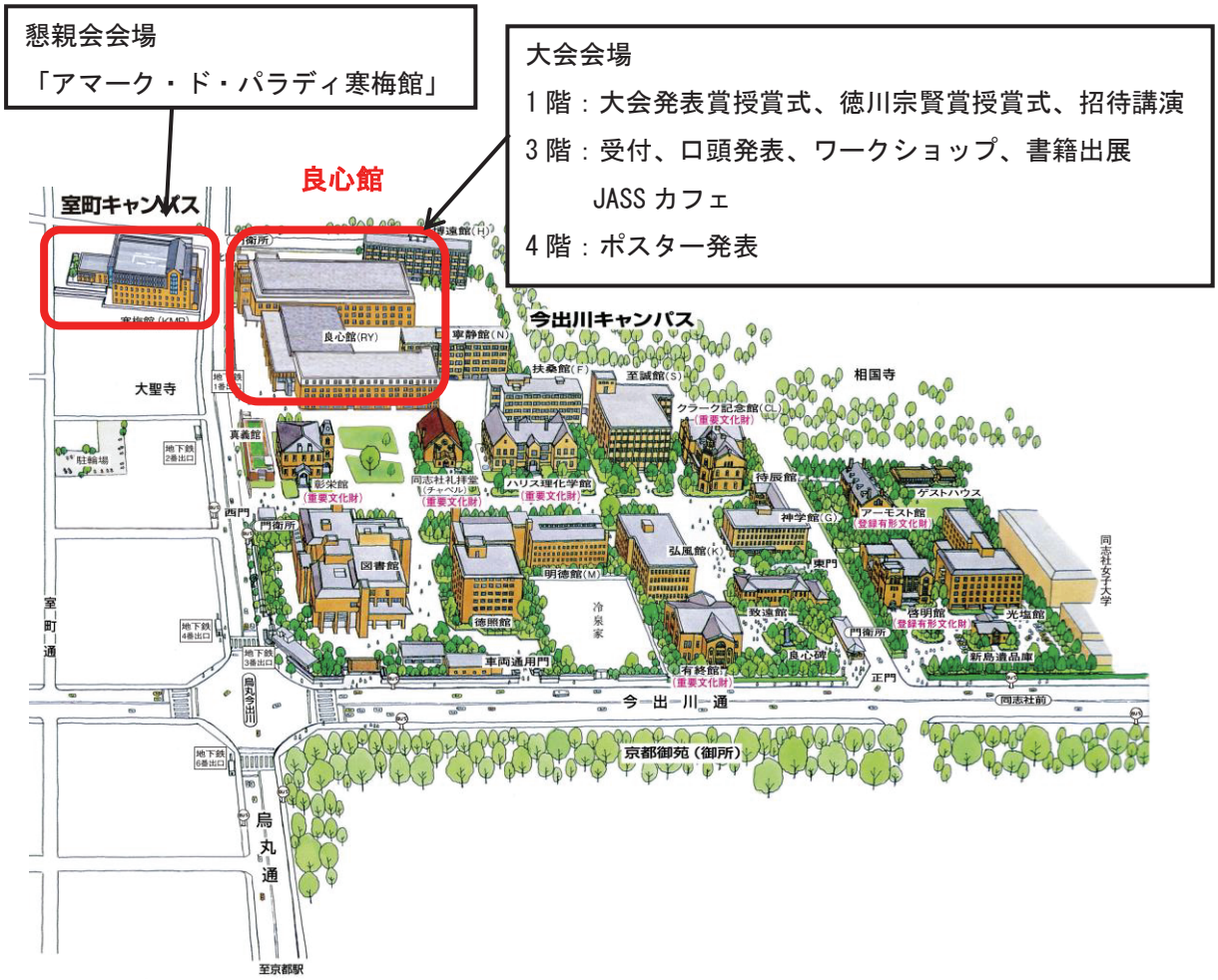
同志社大学

2020

社会言語科学会

THE JAPANESE ASSOCIATION OF SOCIOLINGUISTIC SCIENCES

同志社大学（今出川キャンパス）会場案内図



【喫煙について】

＊キャンパス内は、禁煙です。

【飲食について】

＊教室内は、原則飲食禁止ですが、蓋つきの飲み物でしたら問題ありません。

＊昼食等は、休憩室として設定されている RY304（良心館 3 階）や食堂等（良心館地下 1 階）をご利用ください。一般教室での食事はご遠慮ください。

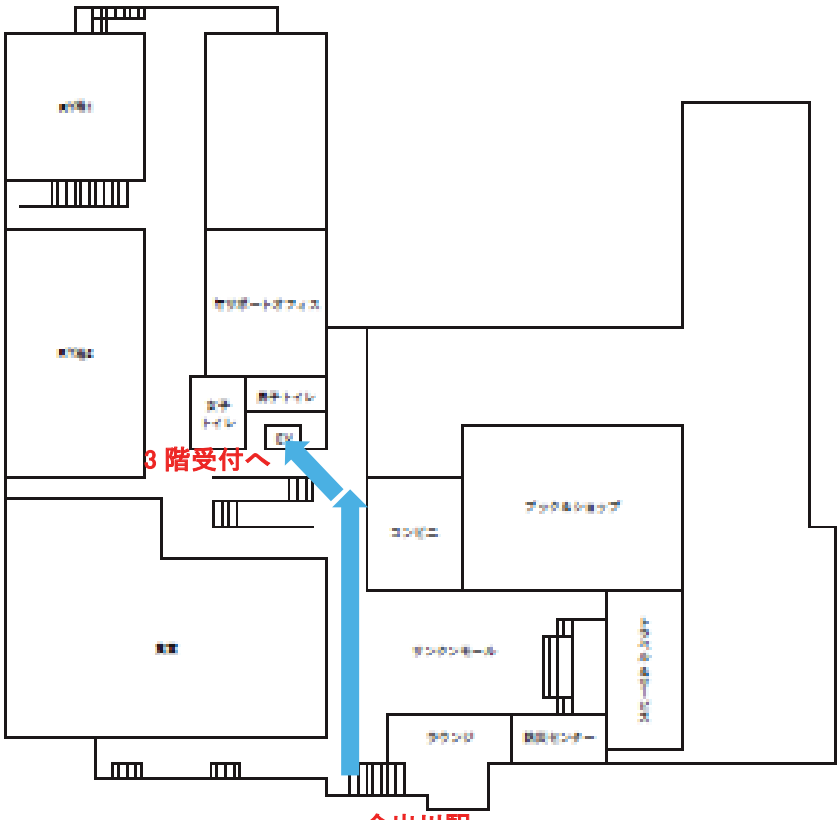
＊生協「良心館食堂」と「良心館コンビニ」（共に良心館地下 1 階）は、木曜日と金曜日は営業、土曜日は休業です。

＊「アマーク・ド・パラディ寒梅館」（＝懇親会会場）は、木曜日と金曜日、および土曜日のランチタイムも、営業しています。ただし、貸切パーティー等で通常営業を行っていない場合もあるので、直接お店にお問い合わせください。お店の詳細については、以下の URL からご確認いただけます。

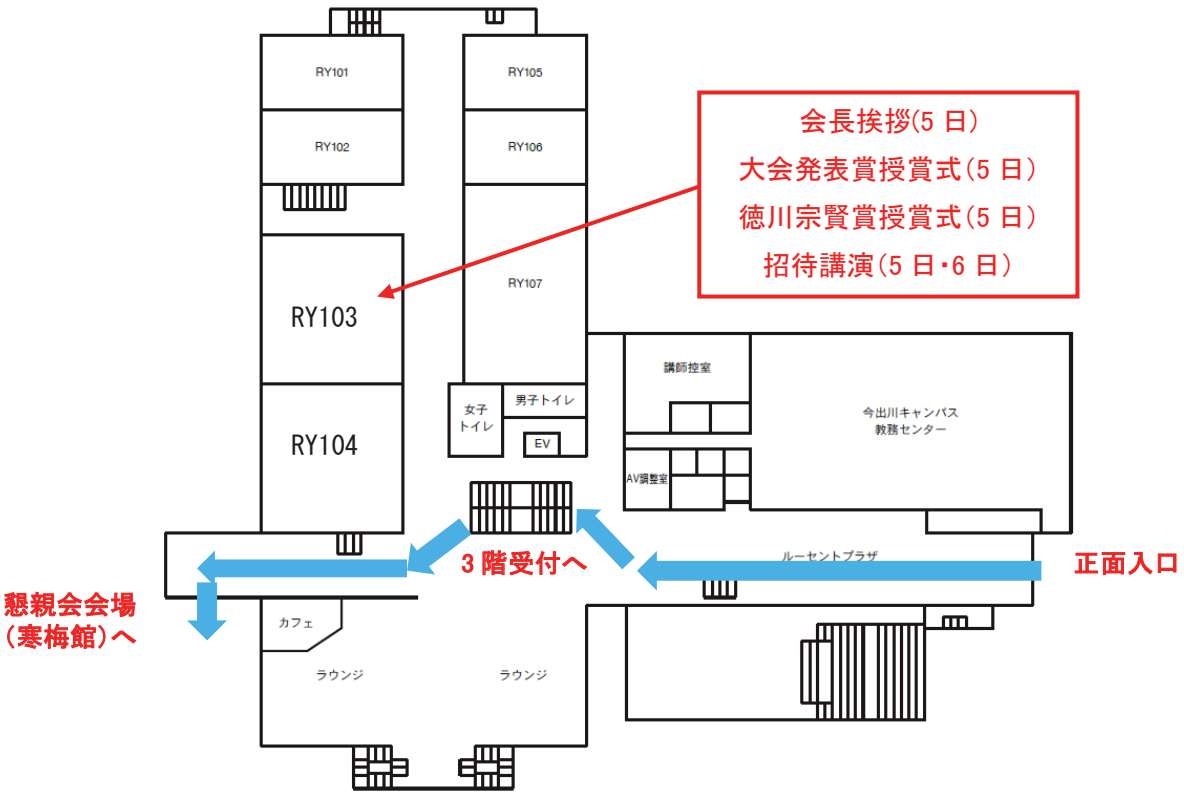
https://www.hamac-de-paradis-kanbaikan.jp/

良心館(RY)

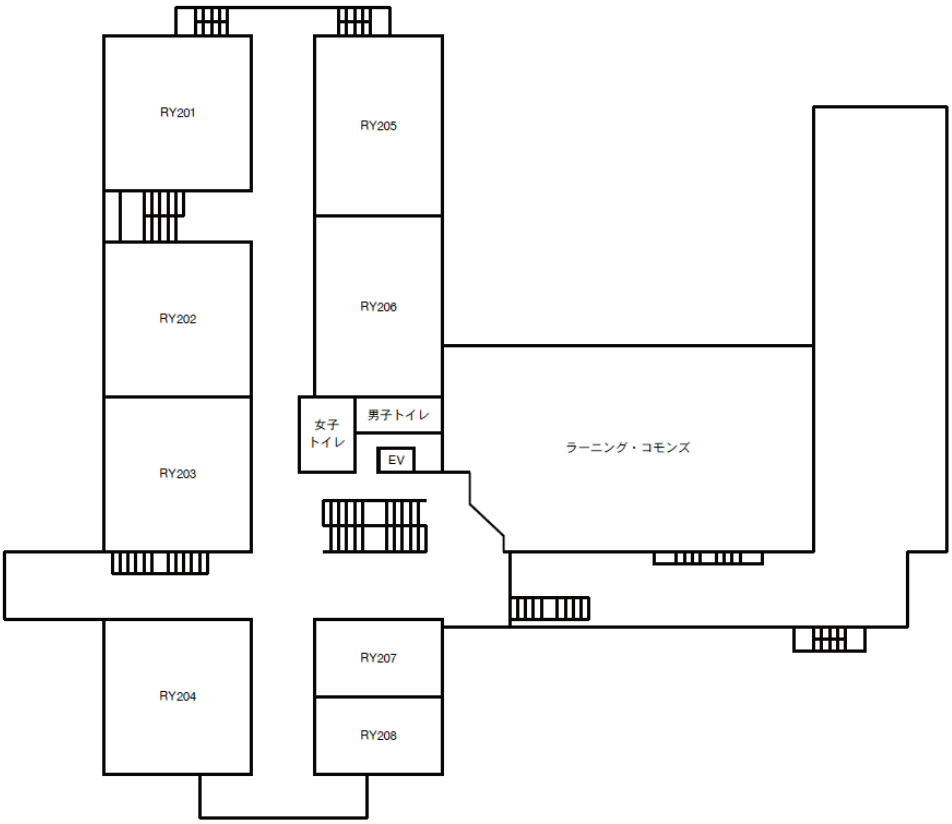
B1F


3 階受付へ
今出川駅
1 番出口

1F


RY101
RY102
RY103
RY104
RY105
RY106
RY107
会長挨拶(5 日)
大会発表賞授賞式(5 日)
徳川宗賢賞授賞式(5 日)
招待講演(5 日・6 日)
講師控室
今出川キャンパス
教務センター
AV調整室
女子トイレ
男子トイレ
EV
3 階受付へ
正面入口
懇親会会場
(寒梅館)へ
カフェ
ラウンジ
ラウンジ

2F



3F

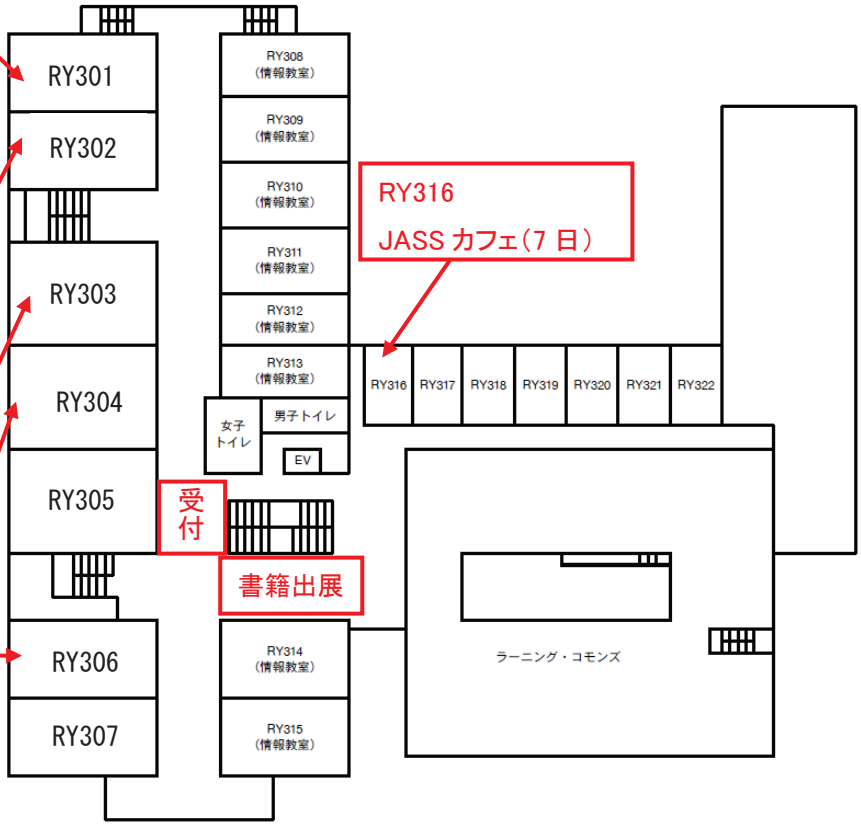
口頭発表セッション 1,5(6 日・7 日)
招待発表 1(6 日)
ワークショップ 3(7 日)

ワークショップ 1,4(5 日・7 日)
口頭発表セッション 2,6(6 日・7 日)
招待発表 2(6 日)

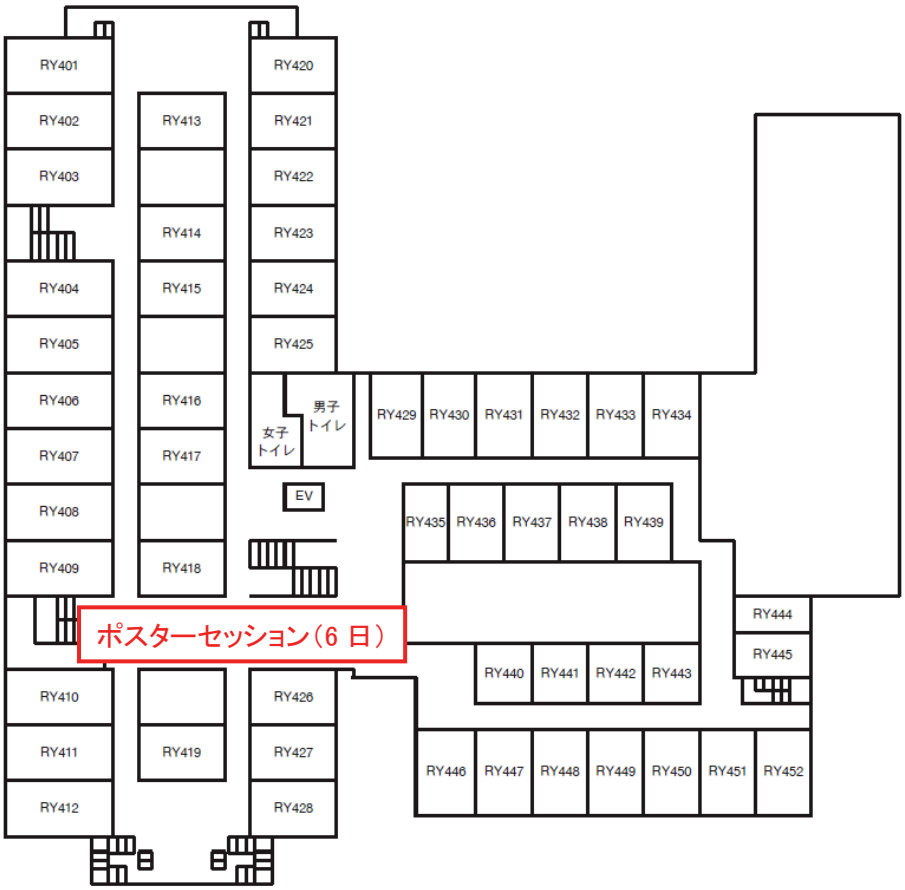
ワークショップ 2,5(5 日・7 日)
口頭発表セッション 3,7(6 日・7 日)
招待発表 3(6 日)

休 憩 室

口頭発表セッション 4,8(6 日・7 日)



4F


RY401
RY402
RY403
RY404
RY405
RY406
RY407
RY408
RY409
RY410
RY411
RY412
RY413
RY414
RY415
RY416
RY417
RY418
RY419
RY420
RY421
RY422
RY423
RY424
RY425
RY426
RY427
RY428
女子トイレ
男子トイレ
EV
RY429
RY430
RY431
RY432
RY433
RY434
RY435
RY436
RY437
RY438
RY439
RY440
RY441
RY442
RY443
RY444
RY445
RY446
RY447
RY448
RY449
RY450
RY451
RY452
ポスターセッション（6 日）

目　次

【Ⅰ】研究発表（口頭発表） 6

【Ⅱ】研究発表（ポスター発表） 158

【Ⅲ】ワークショップ

ワークショップ 1 278

診療場面における「間主観性」 ―会話分析の視点から―

ワークショップ 2 288

社会言語科学における対照研究の可能性

ワークショップ 3 297

児童作文の評価システムの構築 ―紹介文をテーマとして―

ワークショップ 4 306

言語創発学の試み

―言語の個人基盤と社会性をつなげるインターフェースの解明に向けて―

ワークショップ 5 312

話し合いの可能性 ―異なる他者との対話を通した相転移―

【Ⅳ】招待講演

招待講演 1 322

新敬語「マジヤバイっす」―日常会話からメディアへ―

招待講演 2 324

言語の哲学が社会言語学に解消しないのはなぜか

【Ⅴ】JASS カフェ 333

【Ⅵ】付録

学会誌『社会言語科学』特集論文募集のお知らせ 334

学会誌『社会言語科学』投稿規定・執筆要項（日本語・英語） 336

企業広告

1. 本発表論文集（電子版）に掲載された論文等は，本学会が電子化，または複製の形態などで公開・配布することについて，著作者から承諾を得ています．
2. 本発表論文集（電子版）の掲載は，2020 年 2 月 14 日現在のプログラムを反映しています．実際のプログラム（キャンセル情報を含む）については学会ホームページ（http://www.jass.ne.jp/）をご覧ください．

福島原発事故に関する中国テレビドキュメンタリーの批判的談話分析

－二項対立構造を中心に－

張碩（大阪大学大学院生）

1. 研究背景と目的

福島原発事故が発生した際，筆者の母国である中国のメディアは連日事故に関する情報を流し続けた．その中で，中国のメディアは原子炉の状況，汚染された物資などに関する報道をする以外に，原発の安全性についての議論に報道の重点が置かれた．本稿の目的は，中国テレビメディアが福島原発事故報道において，そのなかに隠されたイデオロギーがさまざまな二項対立を通してどう表出されたかを考察することにある．

名嶋(2015)は，事実を伝えるとされる報道には，その報道される事態に直接的に関わる行為者や関係者が存在し，その上で，報道する組織・機関や記事を執筆・報道する担当者も関わっており，報道には複数の第三者の「意図」が何らかの形で反映されていると考えるべきだと述べている．本稿は中国で最も中心的な放送局―中央電視台で放送されたドキュメンタリー『日本大地震啓示録』を研究対象とし，その内容の批判的談話分析(CDA)を行った．そしてその分析を通し，中国テレビ番組の意図や使用された二項対立構造を解明した．

2. 方法論

本研究では，中国のテレビメディアが日本政府と東京電力を批判したり，原発利用を当然視したりするイデオロギーを宣伝するために，どのような「姿勢を伴った」テキストを利用しているか分析することを目的とするため，批判的談話分析の分析手法を使用する．

批判的談話分析(CDA)は，談話を社会的実践と捉え，それによっていかなる権力関係や社会不平等が生産されているかを批判的に分析する学術・政治的な営為である（Fairclough & Wodak，1997；野呂，2001）．CDAの観点から言えば，メディアは思考操作の実践の場（van Dijk，1993）であり，イデオロギーが自然化(Fairclough，2015)され，常識化される過程の一部である．表象を通して見た「現実」の裏には，力の不均等とそれに付随するイデオロギーが存在するというCDAの基本的概念からも，メディアのディスコースにおける「現実」の提示という行為は，CDAにとって重要な課題の一つである．

本研究が依拠するもう一つの理論的枠組みとして，「二項対立」の枠組みがある．二項対立（binary opposition）とは論理学用語の一つであり，二つの意味が反対の関連する用語または概念のペアを指す(Smith，1996；拙訳)．例えば「男」と「女」，「親」と「子供」，「先生」と「生徒」，そして「善」と「悪」の対立ですべてをとらえる理論である．またDerrida(1972)は，二項対立の極を‘poles of binary opposition’と表し，その背景には一方の極が他方の極より優れているというような力関係が潜んでいると示唆している．

本稿では，これらの談話分析の手法を使用することで，中国のテレビメディアは福島原発事故および原発についてどのように報道するかを解明する．また，二項対立の枠組みを通してどのようにイデオロギーを維持するのかを明らかにする．

3. 分析対象

本研究では，3．11 についての中国メディアにおける唯一の長篇ドキュメンタリー番組シリーズである以下のテレビ番組を分析する．

分析対象：テレビ番組「日本大地震啓示録」 テレビ局：中国国営メディア中央電視台(CCTV)の 13(ニュース)チャンネル 放送日付：2011 年 4 月 23，24 日，25 日 シリーズ：　「バタフライ効果」，「福島を救う」，「核の戒め」，合計放映時間：95 分

このドキュメンタリー番組は中央電視台のニュースチャンネル（13）で放送された．

ドキュメンタリーとは，虚構によらず事実の記録に基づく作品である(スーパー大辞林 3.0，2010)．丸山(2013)は映像ドキュメンタリーをめぐる言説は出来事をありのまま描く「客観的」な立場とドキュメンタリーの製作者の「主観的」な主張

の間で揺れ動いてきたと述べる．本研究の目的の一つはテレビ番組の製作者あるいは放送局の管理者は報道の中でどのようなイデオロギーを維持するか分析することであるため，ドキュメンタリーを対象とし，報道に隠されたイデオロギーを観察する．

4. 中国のマスメディア政策

中国メディアの行政管理は，主として新聞出版総署，広播電影電視管理総局及びその各省，自治区，直轄市における下級部門によって行われている．

また，中国には専門の報道法はない．メディアに関する法的な体系は，法律，行政，地方法規，部門規則，政府や党から出されるさまざまな公文書などから構成される．

魏の『中国新聞伝播法網要』(1999)によるメディアの法的な整備において，新聞出版総署が1987年から1996年にかけて207項を作成した．それを類別によって，①メディアの管理に関する規制，②不法出版物を取り締まる規則，③守秘規則，④メディア機関の経済活動管理，⑤メディア従事者に関する規則などにまとめられる(西訳，2008:98).

さらに，中国記者協会は「中国新聞工作者職業道徳準則」を制定し，これによって，中国のジャーナリストは「憲法，法律及び宣伝規則を積極的に遵守する．党の理論，路線，方針及び政策を確固として宣伝する．自ら取り扱うメディアを利用し，党中央の決定に反する内容を宣伝してはいけない」と要求されている(金 2000: 100; 西訳，2008: 99).

5. データと分析

『日本大地震啓示録』というドキュメンタリー番組は東日本大震災が発生してから１ヶ月間の出来事を記録するものである．この番組は福島原発事故を中心にして，原発事故の始末，原発事故の処理や原発の意義について議論している．本稿では，筆者が番組の一部を文字化させ[1]，内容によって現れるイデオロギーに着目しながら分析を試みる．

5.1 天災と人災の二項対立

（抜粋１）

N＝ナレーション

1　N:　４月９日，日本原子力機関の担当者は災害に対する安全対策の不備を認めました．
2　　彼の説明によると，問題点の一つは原子力発電所の耐震措置です．福島原発では，設計上，震度７級ぐらいの
3　　地震に耐えられると想定されていましたが，津波への耐性がありませんでした．
4　　もう一つは，非常用発電機の準備が不足していたので，事故発生の直後に，電力の供給が迅速に
5　　行われませんでした．
6　　この声明に対して日本国内では幅広く疑問が出ています．この事故は一体天災なのか，それとも人災なのか．

抜粋１は2011 年４月９日の日本原子力機関の担当者の会見を元にしたものであり，この「担当者」とは，原子力安全・保安院の西山英彦である．原発事故の発生後，西山は福島第一原子力発電所事故の原子力安全・保安院記者会見に広報担当者として６月末までほぼ連日のように記者会見を行った．西山は「十分ではなかったと言わざるを得ないと思う」と言い，災害に対する安全対策の不備を認めたが，３行目の波線部のように，津波への耐性がない点については言及しなかった．津波に関しては，2011 年３月 23 日，原子力安全・保安院の記者会見において，西山は「5.4 メートルをクリアしているというか，5.4 メートルには耐えられる」と述べ，福島原発側が津波への耐性について初めて説明していた．このように，2011 年４月９日現在の西山の説明では，津波に関しての説明はなかったとみられ，この番組は保安院の記者会見を意図的に歪曲した可能性が高いと考えられる．

また，６行目では，「日本国内」に限定することで，日本原子力機関の声明に質疑するのは当番組ではなく，日本の方々であると表明する．そして，疑問の前に「幅広い」という形容詞を使用することを通して，数多くの日本人は日本原子力機関と原発事故の処理に不満を抱く様子を描く．その後，日本人の「声」―「この事故（福島原発事故）は一体天災なのか，それとも人災なのか」を引用する時に，「一体（究竟）」という副詞を使用する．張（2000）によると， 副詞「一体（究竟）」は話し手が出来事，命題に対する主観的評価及び態度を表する．疑問文の中において，「一体（究竟）」を使用することで，出来事の真実をさらに探求する意味を表す（拙訳）．また，蒋（2013）は疑問文の「一体（究竟）」は真実を追求する意味を表現する上で，話し手の疑う態度を示すと主張する（拙訳）．原発事故はそもそも自然や人為という両方の原因もあるが，ここで，天災と人災といった対立的な選択肢しか存在しないという二項対立が提示された．それをもって日本の国民は，原発

[1] 本稿で取り上げられた抜粋は拙訳である．

事故が天災であるかどうかを疑う余地が生まれ，原発事故は人為的な事故であるかもしれないというイデオロギーを暗に伝えていることになる．

5.2 加害者と被害者という二項対立

（抜粋2）

N＝ナレーション

7 N: 東日本大震災は日本経済と製造業に直接的な打撃を与えました．これは同時に，世界経済にも深刻な
8 打撃を与えたことを意味しています．
9 日本経済新聞の大まかな計算によると，今回の地震は全世界の製造業に少なくとも4760億ドルの損失を
10 もたらした．
11 日本人の言い方に換言すると，これは全世界に迷惑をかけたということです．

抜粋2は東日本大震災の経済的な影響について説明している部分である．まず，7行目で東日本大震災が日本に与えた打撃について述べる時，ナレーションは「直接的」という形容詞を使用している．それに対して，7-9行目で，東日本大震災が全世界にどのような打撃を与えたのかを論述する時に，「深刻」という抽象的な形容詞を使うと同時に，具体的な数字「4760億ドル」も用いられている．言うまでもなく，ナレーションは日本の損失より全世界に与える影響を重点的に詳しく説明している．さらに，11行目において，ナレーションは直接に東日本大震災の影響を評価するわけではなく，「日本人の言い方に換言すると」という間接引用で，今回の事故は日本人の視点から見れば，迷惑をかける行為であると説明する．本来の状況においては，地震と津波による，日本は直接被害者であり，全世界は間接被害者となったものの，日本人の言い方を引用することで，たとえ日本人の立場に立っても，日本は他国の利益を損害する加害者であると，「日本＝加害者」，「全世界＝被害者」という二項対立枠組みが作られる．それによって，ドキュメンタリーの客観性を保持した上で，視聴者の焦点を日本の状況から全世界の状況に転換させ，日本は最大の被害者だという背景から方向を逸らし，全世界の損失に注目させ，全世界が被害者であるという意識を生み出させていると考えられる．

5.3 「日本」と「国際社会」の二項対立

（抜粋3）

N＝ナレーション

12 N: 国際社会は福島50勇士に敬意を表すと同時に，日本の対応方法にも疑問を投げかけました．
13 実はこれらの作業員はもう最後の防御線となりました．もし，この防御線を失ったら，その結果を
14 負うのは決して日本だけではないのです．
(略)
15 N: 4月11日，日本大震災一ヶ月後
16 日本国内や国際社会は死者を悼むのと同時に，今回の事故に対処する東京電力や日本政府の行いおよび能力に
17 対して質疑や批判をしています．
18 今回の被災で，福島50勇士のチームは自分自身の行為をもって人間性の輝きと人類が巨大災害に臨む強靭さを
19 示してくれました．
20 影響の範囲がこんなに広い原発事故の前で，50名それぞれの人たちの命懸けの行為は世界に複雑な感銘を
21 与えました．感動と同時に，我々は却ってこのような感動が実際に起こらないことを願います．
22 もし安全で信頼性のある国際体系があったら，人類は原子力のリスクから救われるであろうか？
23 これは，国際社会にとって共通の課題となっています．

抜粋3は福島50名の作業員に対する評価である．この部分において，主に三つの主張が伝われていると明らかにした．第一に，福島50名の作業員を褒め，日本政府や東京電力の対応を批判する主張が示されている．12行目の「敬意」と18行目の「光辉」（輝き），「坚韧」（強靭さ）といった言葉が引き金となり，彼らの行為は優れているという価値が伝えられているが，12行目と21行目の波線部において，この種の救援活動という危険な行為そのものは批判される．すなわち，福島50名の作業員に救援活動を行わせる政府を批判するものとなっている．

第二に，原発事故の処理と救援は全世界に関連する事態であると強調する．まず，12行目の「国際社会」に注意すべきである．「国際社会」は，世界の政府および人々のおおまかなグループのことである．ここで，「国際社会は日本の対応方法にも疑問を投げかける」による，日本は数多くの国の非難の対象になるというイデオロギーを伝えていると考えられる．また16行目において，主語「日本国内や国際社会」によって，「日本」と「国際社会」は並列の関係であるため，ここの「国際社会」も日本を除き，他の国々を指すと言える．したがって，東京電力や日本政府を批判するのは，外国だけではなく，日本国民も東京電力や日本政府に不満を持っていると強調すると考えられる．

第三に，原発を使い続けるイデオロギーを暗に伝えている．22行目で，「救う」という言葉が使われる．「救う」は「危機

的な状況や苦しい境遇，悪い影響から抜け出させる」であることから，原発のリスクから抜け出すことが望ましいものである．しかし，ここで最も直接的な方法，脱原発のことについては一切言及されておらず，むしろ，原発の存続は当然視され，全世界は国際ルールや国際体系の構築に貢献すべきだと提唱する．

最後に着目したいのは，23 行目で再び国際社会という主語を使用することである．22 行目の「国際体系」，「人類」と 23 行目の「共通」といった言葉と掛け合わせると，ここの国際社会は日本を含む全世界を指すと考えられる．まとめると，『日本大地震啓示録』において，「国際社会」という語彙は状況によって日本を含むが基本的に日本を除くという用法をもちいており，人類という集合体の連帯感を醸成し，日本側に帰責する時に使用された．

6. 考察

本研究は中国のドキュメンタリー番組『日本大地震啓示録』の内容を抜粋として取り上げ分析を行った．分析により，『日本大地震啓示録』は福島原発事故について以下の論調で論を展開している．

まず，天災/人災の二項対立の枠組みを通し， 福島原発事故は日本政府や東京電力の不備の原因で，非常に深刻な事故になったと日本国民に指摘された．次に，日本の損失より全世界に損失を焦点に当てて，日本は加害者，全世界は被害者という対立軸を作成する．最後に，国際社会は日本の対処を批判することで，全世界は東京電力と日本政府の対処に不満を抱くと強調し，原発の存続そのものは当然視させる様子が観察された．

7. まとめ

本稿では，中国のドキュメンタリー番組『日本大地震啓示録』を対象とし，批判的談話分析の観点から，特に二項対立の枠組を使用し分析を行った．『日本大地震啓示録』という番組が福島原発事故についてどのように評価したのか，どのようなイデオロギーを持ったのか，視聴者にどのような価値観を伝達したかったのか，また視聴者に受け入れられやすいように，どのような言語ストラテジーを使用したかのかを明らかにした．

参考文献

Derrida，J．(1972)．*Positions*．IL： University of Chicago Press.

Fairclough，N．& Wodak，R (1997)．Critical discourse analysis．*Discourse as Social Interaction*．London: Sage．pp．258-284

Fairclough，Norman (2015)． *Language and Power* (third edition)． New York: Routledge

Smith，G (1996)．Binary opposition and sexual power in Paradise Lost．*Midwest Quarterly*．27 (4)．Pittsburg State University: 383

Teun A．van Dijk (1993)．*Elite discourse and racism*．Newbury Park，CA: SAGE.

Wodak，Ruth (2013)．Pragmatics and Critical Discourse Analysis: A Cross-Disciplinary Inquiry，Critical Discourse Analysis: Concepts，history，theory．Los Angeles: Sage，373-392

国立国会図書館東日本大震災アーカイブス http://kn.ndl.go.jp/#/ 参照 2017-12-15

蒋欣 (2013)．語気副詞"到底"、"毕竟"、"究竟"的对外教学，华中师范大学硕士论文

金炳華 (2000).『新聞工作者必読』文匯出版社.

丸山友美 (2013).『日本の素顔』における「よきジャーナリズム」－「客観的」ドキュメンタリーの模索―社会志林，60(3)，77-98

名嶋義直 (2015).「特定秘密保護法に関する記者会見記事の批判的談話分析 ： ミクロ面の分析を中心に」『文化』78(34)，東北大学文学会 pp．279-302

野呂香代子 (2001)．クリティカル・ディスコース・アナリシス 野呂香代子・山下仁（編）「正しさ」への問い : 批判的社会言語学の試み 三元社 pp．13-49.

『スーパー大辞林 3.0』 (2010)．三省堂

魏 (1999).『中国新聞伝播法網要』上海社会科学院出版社.

西茹 (2008).『中国の経済体制改革とメディア』集広舎 pp．95-100

张谊生 (2000)．現代漢語副詞研究， 学林出版社.

中国中央電視台（CCTV）「放送局の紹介」http://wwwcctvcn/2017/11/17/ARTIt8ZGt9MNebBmr5DHAMcd171117 shtml 参照 2017-12-15

弔辞の談話構造とコミュニケーションスタイル

利岡真帆(神戸大学)

1. はじめに

スピーチには大きく分けて二つのコミュニケーションスタイルが存在する. 一つは, これまで多くの研究がなされてきた政治演説やスピーチ大会のような一対多のコミュニケーションスタイルである. もう一つは, 結婚式の祝辞や葬儀の弔辞（以下「慶弔スピーチ」）のように「主役」となる人物（新郎新婦, 故人）と, 「参列者」が存在するスピーチである. このタイプのスピーチでは, 主役を直接的な受け手とし, 参列者を傍参与者とするコミュニケーションスタイルが成立する（岡本他（2008）は漫才対話を用いてこのタイプを「オープンコミュニケーション」と名付けている）. しかし, 慶弔スピーチでは主役だけでなく参列者に向けて語ることもあり, 二つのコミュニケーションスタイルが混在している（本研究ではこれを「切り換え型コミュニケーションスタイル」と呼ぶ）. そこで, 本研究ではスピーチの一種である弔辞を用い, その談話構造とコミュニケーションスタイルを明らかにする. また, それらを用いて組織の代表や友人代表といった話し手の立場による比較を試みる.

2. 弔辞資料の定義と収集方法

弔辞とは,『日本国語大辞典第二版』によると弔詞に同じと記載されており, 弔詞には「死者をとむらう時にのべることば. くやみの気持ちを述べることば. また, その文章や詩歌. 」と記載されている. しかし, これでは範囲が広すぎるため, 本研究における弔辞の定義は「葬儀などの弔いの場面においてプログラムに組み込まれた悔やみのスピーチ」とする.

弔辞は主に次の 4 つの形で公刊されている. ①弔辞の文例集に実例として掲載されたもの. ② 故人の追悼録に掲載されたもの. ③ 故人の所属する機関（学会等）の機関誌等に掲載されたもの. ④ 芸能人などの弔辞を集めた弔辞集に掲載されたもの. 本研究で用いる弔辞は, このような公刊された資料より収集したため, 公的な立場の人に対する弔辞が多い. しかし, 弔辞自体が主に公的な立場の人に対して読まれるものであるため, 弔辞の全体像をつかむことができると考える.

3. 弔辞談話の分析方法

3.1 弔辞談話の構造

まず, 弔辞談話の基本構造を表 1 のように整理する.

表 1　弔辞談話の基本構造

構造	内容
［導入部］	〈挨拶〉
［主題部］	〈死の説明〉〈心情説明〉〈人柄〉〈経歴〉 〈功績〉〈思い出〉〈今後の決意〉
［結び部］	〈挨拶〉〈祈り〉

弔辞の談話構造は式辞スピーチを分析した深澤・ヒルマン小林（2012）を参考に「導入部」「主題部」「結び部」の三段階でとらえ, ［　］で示す. また, 書きことばの分析で用いられる「文段」や会話分析で用いられる「話段」のように内容ごとに弔辞を区分し, 〈　〉で示す. 例 1 がその分析例である. 弔辞ごとに内容が異なることもあるが, 基本的には例 1 のような内容, 構造で語られることが多い.

例 1)

［導入部］　故能勢朝次君の霊前に謹んで申上げます.　〈挨拶〉

［主題部］　君は中世国文学特に能楽の研究に専念せられ帝国学士院恩賜賞を受けられた「能楽源流考」を始め（略）多数の著作を発表せられる斯界の権威として活躍せられ（略）我国の伝統芸能の保護行政に御尽力を煩

らわして参ったのでありますが, **〈功績〉**
今度突然君の訃に接し当委員会として誠に痛恨に堪へないばかりでなく斯道の為めに痛惜の極みであります. **〈心情説明〉**

［結び部］ 本日茲に告別の儀が営まるるに当り君の多大の功績を偲ぶと共に **〈挨拶〉**
心から君の御冥福を御祈りして私の弔詞とします. **〈祈り〉**

［導入部］では「これから弔辞を述べる」といった慣用的な〈挨拶〉が語られるが, 弔辞によっては省略されることもある. ［主題部］では, 〈死の説明〉(死因や亡くなったことの確認など), 〈人柄〉〈経歴〉〈功績〉〈思い出〉など故人がどのような人物であったかについての説明や, 残された人たちが今後どうしていくのかといった〈今後の決意〉が語られることもある. なお, 故人が亡くなったことへの驚きや悲しみを述べる〈心情説明〉に関しては［主題部］だけでなくどの位置でも語られるものである. ［結び部］では冥福や安息の〈祈り〉やこれで弔辞を終わるといった意味の形式的な〈挨拶〉が語られる.

3.2 弔辞談話の発話意図とコミュニケーションスタイル

3.2.1 発話意図の分類

談話の発話意図や機能の研究にはさまざまなものがあるが, 本研究ではK. ビューラー (Bühler) の3機能説 (表出・訴え・演述) を用い, 発話がどのような意図をもって語られているかを分析する.

佐久間 (1941) によると, 《表出》は話し手の自身の感情など内的事象の言語音声化したものである. 《訴え》は相手の反応を引き出すことを意図したもので, 「呼びかけ」「依頼」「禁止」も含まれる. 《演述》は外界の内容事物について伝える情報伝達のはたらきのことである. なお, 発話意図に関する単位は熊谷・篠崎 (2006) の機能的要素 (相手に対する働きかけの機能を担う最小部分と考えられる単位) を用いる. 以下が分析例である.

例2) 山田さん《訴え》, わたくしは今あなたのみたまの前に, 弔辞を申し述べることは甚だ残念に思います. 《表出》
例3) 先生は, 旧制の福岡高等学校から東京大学法学部に進まれ, (略) 神奈川大学に赴任されました《演述》

3.2.2 スピーチのコミュニケーションスタイル

1. でも述べた通り, スピーチには大きく分けて二つのコミュニケーションスタイルが存在し, それを図式化したものが次の図1・2である. まず, 図1は政治演説やスピーチ大会, 講義などの一対多のコミュニケーションスタイルをとるものである. 図2は慶弔スピーチのように「主役」となる人物と, 「参列者」が存在する場合のスピーチである. このタイプのスピーチでは, 主役を直接的な受け手とし, 参列者を傍参列者とするコミュニケーションスタイルが成立する (岡本他 (2008) はこのタイプを「オープンコミュニケーション」と名付けている).

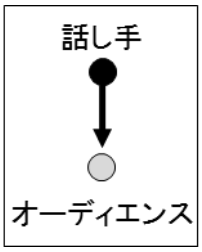


図1 一対多のコミュニケーションスタイル (タイプⅠ)

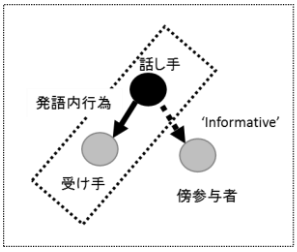
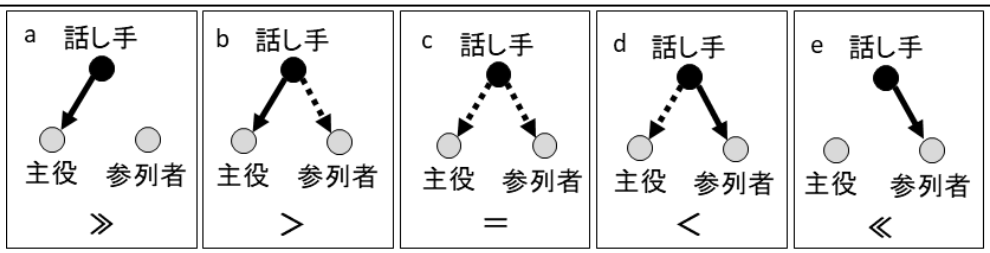


図2 オープンコミュニケーションスタイル (タイプⅡ)
岡本 (2018) 図3「発話の内部志向性と外部志向性」より作成

慶弔スピーチも受け手 (主役 (新郎新婦・故人)) に向けて語られているものを傍参与者 (参列者) に聞かせるという図2のようなコミュニケーションスタイルをとることがある. しかし, 詳しく分析すると主役だけでなく参列者へ向けて語ることもあり, 図1と図2が混在する. その混在をどちらに比重があるかで分類したものが図3のa〜eである. なお, a〜eのタイプは発話意図と関連するため, 図3ではそれぞれのタイプごとに弔辞談話を例にした発話意図を示す. 図の実戦矢印は直接的な受け手を表し, 点線矢印は間接的な受け手を表す. また, 主役とは弔辞においては故人のことである. 不等号は直接受け手の向きを示したものである. なお, 分析の際には直接受け手の向きを発話意図ごとに分類し【 】で示す (発話意図の分類は《 》で示す).



a-1 戻ってきて下さい.《訴え》【故人≫参列者】
a-2 先生！《訴え》【故人≫参列者】
a-3 何度も喧嘩をしましたね.《訴え》【故人≫参列者】

b-1 皆が待っています.《演述》【故人＞参列者】
b-2 ご冥福をお祈り申し上げます.《表出》【故人＞参列者】

c-1 まことに悲しく,残念なことであります.《表出》【故人＝参列者】
c-2 努力をつづける覚悟であります.《表出》【故人＝参列者】

d-1 ○○先生は, 明治××年東京に生まれ, △△大学を卒業し, △△大学名誉教授となられたのであります.《演述》【故人＜参列者】
d-2 謹んで哀悼の意を表します.《表出》【故人＜参列者】
d-3 恐らく本日の告別式に参列なされている方々の中には, この方面で○○先生と知りあわれた方が多いのではないかと思います.《表出》【故人＜参列者】

e-1 皆様方の悲しみは,いかばかりでありましょう.《訴え》【故人≪参列者】

図3　慶弔スピーチの切り換え型コミュニケーションスタイル（タイプⅢ）と
弔辞談話を例にした発話意図

4. 話し手の立場による弔辞談話の分析

分析する弔辞は組織の代表者, 友人, またその両者を含む立場という 3 つの異なる立場で読まれた弔辞である. 次の表 2 はそれぞれの弔辞の談話構造と発話意図, タイプⅢの a～e の分類を示したものである. なお, 【　】内の故人, 参列者は省略している.

表2　話し手の立場による弔辞比較

構造	組織の代表		友人		組織の代表かつ同僚	
導入部	挨拶	表出【＜】d			挨拶	表出【＞】b
主題部	功績	演述【＜】d	心情説明	訴え【≫】a	心情説明	訴え【≫】a
	心情説明	演述【＜】d		表出【＝】c		表出【＞】b
		表出【＝】c	晩年の様子	訴え【≫】a		表出【＝】c
	今後について	表出【＝】c		演述【＞】b	思い出	演述【＜】d
				表出【＝】c		訴え【≫】a
			人柄	表出【＝】c		演述【＞】b
			心情説明	訴え【≫】a	着任の経緯	演述【＜】d
				表出【＝】c	功績	演述【＜】d
			思い出	表出【＝】c	人柄	演述【＜】d
				演述【＜】d		表出【＝】c
				訴え【≫】a		
結び部	挨拶	表出【＜】d	挨拶	表出【＝】c	祈り	訴え【≫】a
	祈り	表出【＞】b	祈り	訴え【≫】a		表出【＞】b
						訴え【≫】a
						表出【＞】b

まず, 組織の代表からの弔辞は現学会会長から学会創立時のメンバーである故人に対しての弔辞である. この弔辞は《訴え》が使用されておらず, 故人に関する情報（《演述》）やそれに対する話し手の感情や意見（《表出》）だけを語ったものである. また, 最後の〈祈り〉でしか故人を受け手とするものがなく, 全体的に参列者を意識した弔辞であることが分かる. 談話の構造をみると, 導入部の〈挨拶〉や結び部の〈挨拶〉がしっかりと語られており, 形式的な展開の型を使用していることが分かる.

次に友人からの弔辞は研究者仲間からの弔辞である. この弔辞は導入部の〈挨拶〉が無く, 故人へ呼びかける《訴え》から始まっている. 〈晩年の様子〉では, 例 4 のように終助詞「ね」を使い相手に対する確認や同意要求をする《訴え》の発話がみられた.

例 4）でも, それは瓜生さんには決して思いがけないことではなかったのですね. 《訴え》【故≫参】

しかし, ここは晩年の様子を参列者に対して説明するところである. このような箇所で終助詞「ね」を使うのは, 故人に対して語りかけているように演出する演出効果を狙ったものだと考えられる. なお, この終助詞「ね」は〈心情説明〉や〈思い出〉でもみられる. また, 〈終了挨拶〉でも呼びかけや挨拶, 要求などの《訴え》が用いられており, 多くの段で《訴え》が使用されている. 以上のように友人からの弔辞では故人への《訴え》が随所にみられ, 弔辞全体が故人に向けて語られている. また, 代表者からの弔辞とは異なり, 〈思い出〉や〈人柄〉という故人を良く知る人物でしか語ることのできない内容が語られている.

組織の代表かつ同僚からの弔辞は, 故人が最後に所属していた大学の同僚からの弔辞であるが, 同大学からは他に読まれておらず, 実質的には所属大学の代表という位置づけでもあった. そのため, 〈心情説明〉や〈思い出〉では《訴え》が使用されており友人（同僚）としての弔辞の特徴がみられる. しかし, 〈着任の経緯〉〈功績〉〈人柄〉では故人の情報について参列者に説明する《演述》が使用されており, 組織の代表としての特徴もみられ, 組織の代表かつ同僚という複雑な立場を両者の特徴を使用することにより上手く表していると言えよう.

5. おわりに

本研究では, 弔辞談話を資料とし, 談話構造や内容, 発話意図, コミュニケーションスタイルの分析を行った. 特にコミュニケーションスタイルに関してはスピーチ中に受け手を切り替えるというコミュニケーションスタイルについて言及した. これは弔辞だけでなく漫才対話など傍参与者が存在するものであれば起こり得るコミュニケーションスタイルであり, 今後さらに調査する必要がある.

また, 本研究では立場による比較分析も試みた. その結果, 次のようなことが分かった.

組織の代表からの弔辞は, 〈経歴〉〈功績〉などがメインで語られ, 《演述》が多く使われており, コミュニケーションスタイルとしては参列者に対して語られているタイプⅢd が多い. また, 談話構造は導入部の〈挨拶〉が省略されておらず, 形式的な展開の型を用いている. それに対し友人（同僚）からの弔辞は〈思い出〉〈人柄〉など, 親しい人にしか分からない内容が語られ, 終助詞「ね」を用いるなど《訴え》の発話意図が多く見られる. そのためコミュニケーションスタイルも故人に対して語られるタイプⅢa・b に偏っている.

以上のように, 立場によって語られる内容や主な受け手が異なっていた. これは, それぞれの立場から故人を語ることによって故人の人物像を全員で作り上げているからだと思われる. 弔辞資料には話し手の立場の違いだけでなく, 故人の属性の違いや言語の違いなど比較することがたくさんあるため, 今後はそれらについても検証していきたい.

参考文献

岡本雅史・大庭真人・榎本美香・飯田仁(2008). 対話型教示エージェントモデル構築に向けた漫才対話のマルチモーダル分析 知能と情報, 20-4

岡本雅史(2018). 聞き手行動が孕む二重の他者指向性 村田和代（編）聞き手行動のコミュニケーション学 ひつじ書房

熊谷智子・篠崎晃一(2006). 依頼場面での働きかけ方における世代差・地域差 国立国語研究所（著）言語行動における「配慮」の諸相 くろしお出版

佐久間鼎(1941). 日本語の特質 育英書院

深澤のぞみ・ヒルマン小林恭子(2012). 日本語式辞スピーチの構成要素と展開パターン―日本語パブリックスピーキングの一ジャンルの特徴として― 専門日本語教育研究, 14

小学館国語辞典編集部（編）(2000-02). 日本国語大辞典第二版 小学館

詩的実践としてのユーモア

－石垣島の旧盆行事アンガマ問答のプルリモーダル分析－

武黒麻紀子(早稲田大学)

1. はじめに

ユーモアは,言語や身体, 社会関係, 事物, 環境の共創から成る詩的パフォーマンス (実践) である (cf. Beeman, 2000). ユーモアに関しては,言語学での研究を牽引してきた意味論や語用論に加え,近年は相互行為研究や社会言語学でも成果が蓄積されつつある.ただ,心理学,文芸学,人類学,医学といった他分野での議論と比較すると,言語学の(特に意味論や語用論における)ユーモア研究は言及指示やその含意に焦点を当てるあまり,ユーモアを「多様な記号的要素を介して達成されるパフォーマンス」ととらえる視点からは遠かったように思われる.儀礼的集団芸能で展開されるユーモアに着目する本研究は,ユーモアひいては詩的実践の包括的な分析を目指して,ことば・身体・事物・環境・社会文化史の融合に主眼を置く“plurimodal” (Kataoka, 2018) の概念を用いながら,沖縄県石垣島の旧盆行事の一つであるアンガマで演者と観客が交わす問答に見られるユーモアのプルリモーダルな考察を試みる.そして, 相互行為的に達成される詩的実践としてのユーモアがその地域社会での価値観を維持するのに貢献していることを示す.

2. 詩的実践

「詩」というと, 短歌や俳句のような詩歌や文学的な叙事詩や抒情詩を想像しがちであるが,Jakobson (1960) は,詩を日常の言語コミュニケーションから独立した言語芸術なのではなく,言語芸術を含む言語活動すべての構成要素の一部ととらえた.本研究は,Jakobsonの詩学の考え方から派生,発展してきた詩的実践にまつわる諸概念をベースとする.

2.1 Jakobson(1960)の詩的機能

Jakobsonは,言語の６機能の一つに,ことばそのもの,メッセージそれ自体に指向した「詩的機能」を挙げた. これは,何を言うかではなく,言語或いはコミュニケーションそのものに着目した機能である.この機能のおかげで,何でも起こりうる混沌とした言語コミュニケーションの中にも,ある種の秩序立ったパターンや浮き彫りになってくる形ー詩的構造ーが生まれる.それは往々にしてリズムや韻律,語彙の反復,繰り返しによってもたらされる.この詩的構造が生み出される仕組みを説明したのが, “[T]he poetic function projects the principle of equivalence from the axis of selection to the axis of combination” (Jakobson 1960:365) (「等価の原理を選択の軸から結合の軸に投射する」) の一節である.Jakobsonは,詩的機能の本質は「反復」と「並行性」に基づく「等価性」にある,と説き,言語学と詩学 (文学) の融合を図ろうとした.

言語の詩的特性は, 儀礼性の高い式のような場面では言うまでもなく,形式性や儀礼性が比較的低いとされる日常の相互行為の中にも見られる.詩的特性がコミュニケーション全般で広く観察される点については既に多くの研究で例証済みである (Goffman,1967; Bauman & Briggs, 1990; Silverstein, 1984, 2005; Kataoka, 2009, 2010; 浅井, 2017; 榎本, 2019). ユーモアの詩的機能を言語に限定しない形で見出いだそうする本研究では,Jakobsonの理念をもとに,より包括的で統合的な詩的実践の研究を目指して提案されたKataoka (2018)の概念を以下に紹介する.

2.2 プルリ・モダリティ “Pluri-modality” (Kataoka 2018)

マルチモーダル分析の勢いは,言及指示だけを分析対象としてきた言語学で,ジェスチャーや目線といった身体的動作へも視点を拡げていくことに大いに貢献してきた.この流れは詩的実践の分析にも通じる.Kataoka(2018)によると, 「詩」とは認識可能となる (ことばに代表されるような) 行為の「型」であるがゆえに,詩的特性はことばや身体表象 (特にジェスチャー, 身振り) のみならず,道具や機器,環境的アフォーダンスを介しても表出する,という.Kataoka(2009, 2010, 2018)では,話し手の目前の机,思い出語りで立ち現れる過去,地理,テレビカメラが映し出す人物や事物,ヴォイスオーバーといった背景(Ground)すべてが詩的実践の「型」の (再) 生産を担っていることが示された.これは「複数の伝達様式 (ことば, 身体, 事物, 環境など) を (中略) 統合的に観察し,各要素および参与者間の協調や相互作用を分析の射程に収めようとする」(片岡 2017:3) マルチモーダル分析の発想／アプローチに拠る.ここからKataoka(2018)はさらに,

相互行為の背景にはあってもこれまでのマルチモーダル分析では浮上することは少なかったが, 言語人類学ではこの包含なくしてコミュニケーション実践を語ることすらできないとされている社会文化史をも取り込むべく"pluri-modality"(プルリモダリティ)の概念を提示した. マルチモーダル分析が言語, 身体, 周辺事物, 環境といった割と見えやすい表象を取り入れていたとするならば, プルリモーダル分析はそれに加えて, 社会文化史を通して人々のコミュニケーション行動その他に刷り込まれきた有形無形の"habitus" (Bourdieu, 1977)の解明を目指す点で, かつて Jakobson が目指した地平ー言語研究と文学・文化研究の接合ーに向かっていくための今日的な概念と言えよう. 実際に, プルリモダリティという用語の使用はなくても, その神髄を体現する詩的実践の研究が言語人類学では近年増えつつあり (Harkness, 2017; Nakassis, 2017; Lempert, 2018), プルリモーダル分析の重要性は既に十分認識されている. 本研究では, プルリモダリティを念頭におき, 石垣島の旧盆行事, アンガマ芸能を見ていく.

3. 石垣島の旧盆行事ーアンガマ

3.1 アンガマ芸能

旧暦7月13日から15日は八重山地方でソーロンと呼ばれる旧盆にあたる. この期間, 石垣島では市内各地の青年会を中心に先祖供養行事の一つ, アンガマという集団芸能が繰り広げられる. アンガマは精霊を表すとされる先祖夫婦のウシュマイ (爺) とンミー (婆) が20名近い子孫 (ファーマー) を引き連れてあの世から現世を訪れるという設定の下, 精霊に扮した青年会メンバーが家々や施設 (ホテル, 保育所, 介護施設) を回って行う儀礼である. 家を訪問する先祖夫婦は家人に祝言を述べ, その家の先祖の位牌に念仏を唱え, 子孫と歌や踊りを披露し, 見物客と珍問答を交わし, 全員踊りで締め括る. 以下, 2017年と2019年の旧盆中のアンガマから, 先祖夫婦と観客との問答を取り上げ, そこでのユーモアを分析する.

3.2 問答での決まりごとほか

アンガマの問答には, 暗黙の了解で共有されている事項がある. 参与観察及びインタビューで出た主な点を列挙する.



- ウシュマイとンミーは面を被りクバの葉を持つ.
- ファーマーは体を隠す.
- 質問する見物客は顔を隠す.
- ウシュマイとンミーは口上, 会話, 問答を裏声で行う.
- 問答は「八重山の方言」で行う[1].
- 質問には「当たり前に答えてはだめ」, 「ダジャレ」や「頓智」で返す.
- ウシュマイとンミーは「島の男」しかなれない[2].
- ウシュマイとンミーの役割は「とりしきる」, 「楽しませる」こと.

3.3 アンガマの時空間



夏の太陽が沈み, 辺りが暗くなる頃, アンガマ一行は見えない死者・精霊を演じようと仮装するあまり, 目立って集落を練り歩く. 見えない設定に対し外面的に見えすぎる装いが生み出すズレ, というユーモアの典型条件を満たしたところでアンガマのユーモアは既に始まっている. 盆装飾で飾られ一階部分が開け放たれた家には, 家人や親族はもちろん, ファーマーが奏でる島唄の音を頼りに, 知り合いの近隣住民から赤の他人の島人や観光客まで大勢が押しかける. アンガマの儀礼はこうした時空間の中で行われる.

4. 問答にみられる詩的特性

(1) C:男児 U:ウシュマイ M:ンミー O:男児の親族 X, Y, Z:男児の親族

01 C: ウシュマーイ
02 U: はい
03 C: ウシュマーイ
04 U: はあい

[1]八重山方言話者が減る一方の昨今, 青年会メンバーのほとんどが八重山方言で儀礼のすべてを執り行うことはできない. 問答の最中, 「できれば標準語で教えてください」, 「標準語でいいかね?」と出てくることもあり, 方言使用は口上・念仏を唱えるときなどに限定されていた.

[2] ファーマーにはこの決まりが該当しない. ただし, 地区や青年会によって条件が異なる場合もある.

05 X: はい　ウシュマイ　はやく
06 M: 男の子が呼んでるから早くいかんと
07 U: はい　ウシュマーイって呼んだのは誰かな
08 C: ウシュマーイ（?: ウシュマーイ）
09 O: こっちこっちこっちーって
10 U: はーい　はいはいはいはい　（Y: 前出て）
11 C: ウシュマーイ
12 U: はーい
13 C: ウシュマーイ
14 C: ウシュマーイ
15 U: 名前 なに? 名前 なに?
16 C: いしがき　しまお
17 U: しまお?　はい　しまおー はい　返事は?　返事
18 C: ウシュマーイ
19　アンガマのおうちは　どこですか?
20 U: アンガマのおうちはよ　天国にあります
21 C: どうやって行くの? どうやって行くの?
22 U: どうやって行くか?
23　((ンミーを見る))どうやって天国に帰るかよ　来たのはいいけど　どうやって帰るかは 今 考え中
24 U: しまお　何歳?　今
25 C: よん
26 U: 4歳? ウシュマイも4歳　((沈黙後、しまおが両手を天に向ける))
27 U: しまお　おりこうだなあ　よー　(O: 最後にやろうね)　最後に一緒に踊りやろうな　(C: ((頷く)))
28 U: 最後にな (C: ((頷く)))
29 U: 待ってろよ　((音楽が始まる))
30 C: ありがとうございました

(2) U: ウシュマイ　S: 質問者　(紙面の都合上, 相槌は括弧の中にいれて記す)
01 S: ウシュマーイじいちゃんがよ (U: オー)　歯
02 U: は
03 S: 歯あ がよ (U: ハー) 全部抜けてないかね　ウシュマイじいちゃん　歯あが　ないさね
04 U: なんでよ　歯が ないかってよ? (U: オー) ((背後の赤ちゃんがンミーに抱かれて大泣き、皆笑う))
05　うちの? (S: アイ)　?しきよ (S: オー)　?ぎしきよ (S: オー)　?よ (S: オー)
06　むかーしからの時代　戦争のときによ (S: オー)　戦争のときによ
07 S: 日米戦争　オー
08 U: あの　田あや畑に　田の畑から (S: オー)　アメリカ軍がよ (S: オー)
09　鉄砲をよ (S: 鉄砲) 持って来とってよ (S: オー)
10　あの　ウシュマイとンミーの家によ (S: オー)
11　ダダダダって 打ってきたわけよ (S: ホホホ)
12　ウシュマイとンミーよ (S: ホー)　ファーマーかかえてよ
13 S: ファーマー抱えて
14 U: 右に左に足によ (S: ウン) 抱えてよ (S: オー) 逃げたわけよ (S: オーオー)
15　後ろからよ (S: オー)　アメリカ　ドドドドドドドドってよ
16 S: 発砲射撃
17 U: 発砲射撃でよ (S: ウン)　それもよ (S: ウン)　ウシュマイよ　歯あでよ
18　カアーッペッ　(S: ホイ)　カアーッペッてよ
19　気付いたら　歯あ 抜けとったさ
20　ファーマー守るためによ
21 S: ファーマー守るために







22 U: ファーマー守るために　みんなよ　歯あを（S: ウン）捨てたさ　(S: あー)　OK？
23 S: 分かった　(U: ヨー) どうもありがとうございます　(U: ア？)
24　　にーふぁいゆー
25 U: あー　はい　はい　はい　あー　はい　はい　はい　はい　はい　はい
26 S:ありがとうございますー

問答の詩的構造は質問者が子供と大人（特にサクラ）との場合で異なる．大人同士では先祖夫婦の短い発話が終助詞が示すイントネーションユニットを合図に，観客が相槌を打つ間へとなり，そこに一定のリズムが形成されるが，オチに近づくと終助詞や相槌が入らなくなる．（子供との問答では相槌やリズムの代わりに虚構を信じる子供の存在自体が周囲の大人を笑わせる．）その先は子供との場合も同様で，オノマトペアやボケ（ツッコミは無し），クバの葉の使い方の変化やピッチの下降があってクライマックスを迎える．１分半から 2 分以内でまとまる問答は，音楽の導入，クバの葉を揺らす動き，ウシュマイとンミーの体の向きの転換により終了し，次の演目（踊り）へと移行する．

問答内容は，どの地域のアンガマでもあの世話や道徳話に終始している。毎年島内のどこかしらで繰り返される旧盆ネタ（これ自体が詩的に形成されている）や地域のみで通じる固有名詞の使用によって観客の笑いを誘いつつ，先祖崇拝や年長者敬重が伝えられていくアンガマは，あくまでも島での日常と島の家族観に根差した詩的実践である．それは，儀礼空間に在る事物や自然条件（演者達の装い，持ち物，当該地の気候，家/施設の構造，盆関連の装飾や供物）といった視覚・聴覚・触覚・皮膚感覚を通して把握可能な要素と，参加者及び観客の共在関係，地域に伝わる民俗や道徳観といった思想文化にまつわる要素とがプルリモーダルに生み出す共創である．

参考文献

浅井優一（2017）．儀礼のセミオティクス:メラネシア・フィジーにおける神話/詩的テクストの言語人類学的研究 三元社

Bauman, R. & Briggs, C. L. (1990). Poetics and performance as critical perspectives on language and social life. *Annual Review of Anthropology* 19: 59-88.

Beeman, W. (2000). Humor. *Journal of Linguistic Anthropology* 9(1-2): 103-106.

Bourdieu, P.(1977). *Outline of a theory of practice*. Cambridge University Press.

榎本剛士（2019）．学校英語教育のコミュニケーション論:「教室で英語を学ぶ」ことの教育言語人類学試論　大阪大学出版会

Goffman, E. (1967). *Interaction ritual: Essays on face-to-face behavior*. New York: Doubleday Anchor.

Harkness, N. (2017). Transducing a sermon, inducing conversion: Billy Graham, Billy Kim, and the 1973 crusade in Seoul. *Representations* 137: 112-142.

Hanks, W. F. (1989). Text and textuality. *Annual Review of Anthropology* 18: 95-127.

Jakobson, R. (1960). Closing statement: Linguistics and poetics. In *Style in language*, ed. T. Sebeok, 350-377. Cambridge, MA: MIT Press.

Kataoka, K. (2009). A multi-modal ethnopoetic analysis (Part 1): Text, gesture, and environment in Japanese spatial narrative. *Language and Communication* 29: 287-311.

Kataoka, K. (2010). A multi-modal ethnopoetic analysis (Part 2): Catchment, prosody, and frames of reference in Japanese spatial narrative. *Language and Communication* 30: 69-89.

片岡邦好　(2017)．言語/身体表象とメディアの共謀的実践について―バラク・オバマ上院議員による 2008 年民主党党員集会演説を題材に」社会言語科学, 20(1), 84-99.

Kataoka, K. (2018). Poetics, performance, and pluri-modality: From Asia-Pacific perspectives. Paper presented at Sociolinguistics Symposium 22. The University of Auckland.

Lempert, M. (2018). On the pragmatic poetry of pose: Gesture, parallelism, politics. *Signs and Society* 6(1): 120-146.

Nakassis, C. (2017). Rajini’s finger, indexicality, and the metapragmatics of presence. Signs and Society 5(2):

Silverstein, M. (1984.) On the pragmatic ‘poetry’ of prose: Parallelism, repetition, and cohesive structure in the time course of dyadic conversation. In Meaning, Form, and Use in Context: Linguistic Applications, ed. D. Schiffrin, 181-199. Washington, DC: Georgetown University Press.

Silverstein, M. (2005) The poetics of politics: “Theirs” and “ ours.” *Journal of Anthropological Research* 61(1): 1-24.

台湾語における文字使用と言語イデオロギー

—「台湾意識」をめぐって—

吉田真悟（一橋大学大学院生／日本学術振興会）

1. 研究の背景と目的

台湾語[1]は従来台湾における多数派の母語であったが、日本語から中国語[2]へと移り変わった 2 つの国語の下で、長年に亘り使用が私的領域に限定されてきた結果、現在では世代間継承が危ぶまれており、言語復興運動が盛んになっている。その中で焦点の一つとなったのが正書法の問題であり、現在の台湾語文には大きく分けて、漢字のみで書かれる「全漢」、ローマ字のみで書かれる「全羅」、そして漢字ローマ字交じりで書かれる「漢羅」という 3 つの形態が存在する。

このように書記言語形成の只中にある台湾語について、発表者は様々な書記媒体における文字使用を調査しており、その結果漢字とローマ字それぞれにおいて、教育部（文部省に相当）が公表した規範を軸とした標準化の動きが見られる一方で、文字種の選択や配分に関しては、いまだ多様性が大きいことが明らかになってきた。このような規範化と多様性の背後にある仕組みを解明するためには、テクストの分析だけではなく、書き手の言語や文字に対する意識、思想といった、行為主体側の要因も分析する必要があると考えられる。本発表ではそれを「言語イデオロギー」[3]として捉え、その中でも特に「国族認同（ナショナルアイデンティティ）」に関わるイデオロギーである「台湾意識」に焦点を当て、それが台湾語を書く際の文字使用とどのように関わっているかについて論じる。

2. 先行研究

台湾語の書き言葉に対する読者の意識や態度を調査した研究として張學謙(2003)、また台湾語文の書き手に対するインタビューとして、楊允言他編(2008)がある。張學謙(2003)が将来の台湾語書き言葉に対する言語政策を見据えて、一般の読者に焦点を当てたのに対し、本発表は現在の状況の記述を目的としており、現時点で台湾語による読み書きが一般に普及しているとは言い難い[4]ことから、テクストの書き手を中心とした言語イデオロギーに焦点を当てることとした。また、楊允言他編（2008）はインタビュー結果に対する分析は行っておらず、本発表ではそこに「言語イデオロギー」の概念を導入し、考察を加えることを試みる。

---

[1] シナ・チベット語族シナ語派（漢語）の閩南語（閩南方言）の内、主に台湾で使用されている下位変種。他に「台湾閩南語」や「福佬（ホーロー）語」等様々に呼称されるが、本発表では「台湾語」で統一する。

[2] 本発表においては、北京方言を基礎とした標準中国語を指すこととする。

[3] この概念は Silverstein(1979)によって提起されて以来、様々な意味や文脈で使われているが、本発表では、「個人や集団の中で意識的または無意識に抱かれる、言語に関する思想や考え方」と定義する。広い定義を採用することにより、できる限り多くの対象を捉えるとともに、「イデオロギー」を否定的な意味の伴わない中立的な用語として用いることで、考え方の「正しさ」や文字の優劣に関する論争からは距離を取り、文字使用の背後にある意識を客観的に記述することを企図している。

[4] 台湾では、台湾語で読み書きをすることは未だ一般的ではない。2001 年から台湾語を含む「本土言語」が小学校の必修科目となっているが、表記法の混乱や時間数の少なさ（週 1 時限）から、本格的な読み書き教育の有無やその効果については、検証の余地がある。

3. 調査方法

言語イデオロギーを探るための方法として半構造化面接（インタビュー）を使用し、台湾語の書記や文字に関して、調査協力（被調査）者の考えを訊いていった。インタビュー時間は1人1～2時間を目安とし、主な使用言語は台湾語及び中国語である。これまでにインタビューを行った9名の内、本発表で言及するのは以下の6名であり、何れも台湾語で文章創作を行い、単著を持つ人物である[5]。

表1：面接調査協力者

氏名	面接日	面接時年齢	性別	職業	代表作品	文字使用の傾向
陳明仁	2018年8月10日	63歳	男	作家	Pha荒e故事（散文集）	全羅~全面漢羅
蔣為文	2018年8月11日	46歳	男	大学教授	喙講台語・手寫台文　台語文的台灣文學講座（論文集）	全羅~全面漢羅
呂美親	2018年8月13日	39歳	女	大学講師	落雨彼日（詩集）	全面漢羅~限定漢羅
劉承賢	2018年8月13日	43歳	男	大学講師	翻身・番身（小説）	全漢~限定漢羅~全面漢羅~全羅
陳金順	2019年2月16日	52歳	男	台湾語教師	Formosa時空演義（小説集）	全漢~限定漢羅~全面漢羅
林央敏	2019年3月12日	63歳	男	教師	胭脂淚（長編詩）	全漢

4. 漢字／ローマ字の選択と台湾意識

台湾では1980年代前半に、「台湾意識」と「中国意識」をめぐる論争が繰り広げられた（蕭阿勤 2012：180-184）。この問題は究極的に「国族認同（ナショナルアイデンティティ）として台湾人と中国人のどちらを自認するか」という問いへと繋がり、現在に至るまで台湾社会・政治にとって主要な争点であり続けている[6]。こうした民族主義（ナショナリズム）と台湾語の文字使用の関係について蕭阿勤は、日本統治時代の台湾語書記化の試みのほとんどが漢字によるものだったことは、「1930年代の提唱者はまだかなり強烈な漢文化意識を抱いていた」からであるとし、一方で「80年代末以来台湾語で書くことを主張した提唱者は、ほとんど例外無く台湾民族主義者である」ため、現代の台湾語文創作ではローマ字が多用されるようになっていると述べている（ibid.：263-264）。それに対して Klöter は、日本時代には漢字以外の文字という選択肢が、そもそもあまり議論の対象になっていなかったことや、現代の漢字による台湾語辞書の編纂者にも台湾民族主義者が多く見られることから、漢字とローマ字の選択を単純に中国民族主義か台湾民族主義かの違いに帰することはできない、と主張している（Klöter 2005：195）。

これらの指摘の通り、現代台湾語文の書き手の多くが台湾民族主義ないし台湾意識を強く有しているとするならば、上述したように文字種の選択が依然多様であることの原因は、どのように説明できるだろうか。この問いに対して当初立てていた予想は、「台湾的なもの」として想像される範囲の差異である。即ちローマ字の多用が、漢字を中国（語）に属するものとして排除するイデオロギーと結び付いているのに対して、漢字を台湾（語）の一部と考え、寧ろローマ字を外来のものとして排除するイデオロギーが、漢字多用の背景に存在するのではないか、ということである。

この問題について面接調査では、まず台湾意識は確かに幅広い書き手に見られた。陳明仁氏の、「私にとってはね、要は、「台湾国」というものを持つことが、何よりも重要なんだ」（陳明仁① 00:06-00:13）[7]という発言

[5] 表中「文字使用の傾向」の欄は、筆者が確認できた限りにおいて、協力者の書いた台湾語のテクスト（私信や SNS 上の文章も含む）を基に判断したものである。

[6] 政治大学が行っている世論調査では、自分を台湾人と考える人が、中国人及び両方と考える人を 2008 年以降一貫して上回っており、2019 年 6 月時点で台湾人 56.9%、中国人 3.6%、両方 36.5%となっている（政治大學選舉研究中心）。

[7] 以下インタビューの引用・抜粋において、通常の字体は台湾語、斜字体は中国語、太字は日本語による発話を表す。また括弧内には、調査協力者（録音が複数ファイルに分かれた場合は通し番号も）と録音ファイル内の該当時間を表示する。

は、その最も明快な表現である。呂美親氏や劉承賢氏ら比較的若い世代からは、1990 年代後半から 2000 年にかけての民主化や政権交代といった社会背景の下で、アイデンティティの転換があったとの語りが聞かれた。

そして一部の書き手においては、漢字を中国的なものとして排除する意識がローマ字の多用に繋がるのも、予想された通りであった。台湾ローマ字協会の理事長も務めた蒋為文氏はローマ字を推す理由を、台湾の「文化の主体性への考慮」であり、漢字を捨てて「中国と決別するため」であると述べている(蒋為文 15:55-17:11)。

しかし、逆に漢字の使用に関しては、ローマ字を外来のものとして排除、もしくは漢字を積極的に台湾的なものと見做して執着する意識は、あまり見られなかった。例えば現在は主に全漢で創作を行っている林央敏氏や陳金順氏は、以前はローマ字も用いており、今でもローマ字に反対しているわけではないと言う。ただ台湾の一般大衆は漢字に慣れているために、ローマ字には抵抗感や困難さが付き纏うことから、「本来それ〔文字〕は言語を記録するものに過ぎないのに、それを排斥する余り、言語も受け入れなくなる。それでは却って台湾語復興の妨げになってしまう」(林央敏 34:12-34:58) と述べており、言語の復興という目的を達するために、文字については漢字が支配的な社会の現実と折り合う選択をしたものと解釈できる。

主に漢羅で書いている呂美親氏の場合、漢字により積極的な評価を与えているが、それも漢字がローマ字より本質的に台湾的だから、という理由ではない。氏も以前は漢字を廃止すべきとの立場であったが、日本へ留学した経験が一つの契機となり、漢字はアジア共通の「文化資本」と考えるようになったと言い、台湾語と漢字の関係について以下のように語っている。

呂美親：*それから次に、台湾は畢竟漢字社会*で、私は*それは否定*できない*点*だと思います。だからもし全部…漢字の簡単な所は、少なくとも〔台湾語文が〕今まだ普及していない時に、*もしそれ*〔漢字〕*があれば良くないですか？*より*親近感が湧きますよね。一般の人も排斥しないでしょう。今現在の社会*でもしローマ字を見ても、なんじゃこりゃって感じで。
発表者：慣れていないですよね。
呂美親：そう。*だから良い文化的繋がりじゃないかと思います。単に（～ではなくて）…文化的繋がり*と言ったのは、台湾人の*文化的繋がり*のことです。それは*必ずしも中国と…中国と関係があるかどうかは*、私にとっては重要じゃありません。*漢字は畢竟台湾に長いことあって*、台湾人*共通の想像*、*想像の共同体*[8]における一つの*要素となっている。それもだから漢字の利点の一つだと思います。*
（呂美親 21:16-22:13）

呂美親：あとそれは一つの記号に過ぎない。*私達が今広めたい、もしくは救いたいのは台湾語*であって、*その記号じゃありません。問題なのは記号に固執していると、ずっと、*止まってるんじゃん[9]。
発表者：文字は言語にとっての道具、という考え方ですね。
呂美親：そうそう。本当は勿論、言語…*文字は単なる道具じゃありません。*だけど、*やっぱり道具*でもあるわけで。*文字は道具以上のものであり得ますよ。愛着とか、アイデンティティとか。*だけど*それは*また、一つの*道具*でもあり得るわけですよね。*もし自分の*言語がずっと受け継がれていって欲しいなら、言語がより大事でしょう？記号*なんかは*標準化*できて、*広め*ていけさえすればね、*それが*一番大事な事です。
（呂美親 23:38-24:25）

[8] アンダーソン(2007)が、ネイション（nation）とナショナリズム（nationalism）の形成を説明する際に使用した概念。
[9] 台湾語運動が停滞している、という意味だと思われる。

ここまでに言及した 6 名の書き手は、明示的な形で台湾意識を有しており、それが台湾語文創作と関連付けられている点、またローマ字を使用した経験があり、それに対する拒否感も持っていない点において、概ね皆共通している。そして一部の書き手については、漢字を中国的なものと見做すイデオロギーと、そこから徹底的に離れようとする戦略が、ローマ字志向を生成する一因となっている。一方漢字の使用については、文字そのものを台湾（或いは中国）と結び付けるイデオロギーと言うよりも、台湾語の読み書きの普及を優先するために、台湾人が漢字に馴染んでいる現実と妥協する、またはそれを利用するという側面が大きいようである。

5. 総括と展望

本発表で取り上げた台湾語の書き手に関する限り、漢字かローマ字かの選択は、少なくとも中国意識か台湾意識かの違いによるものではなく、台湾意識を前提とした上で、台湾の「主体性」を追求する過程で採る戦略の違いによるものと考えられる。つまり、中国的なものと徹底して距離を取る戦略がローマ字志向を生み、それよりも言語そのものの生き残り、即ち言語復興を優先する戦略が漢字の使用に繋がる、ということである。

ここで論じた 6 名の書き手は、何れも言語運動家と呼び得る人物であり、文学作品の創作や雑誌の刊行に携わっている。一方こうした民間の出版物と比べて、台湾語の学校教科書における文字使用にはより強い全漢志向が見られ、そこには本発表で見たものとは異なる言語イデオロギーが働いている可能性がある。今後はそうした文字の公的規範に纏わるイデオロギーも射程に入れて、台湾語の文字使用における多様性と規範形成の全貌を明らかにしていきたい。それにより、少数言語にとって読み書きとは何であるか、その意味を探る手掛かりが得られることが期待される。

謝辞

面接調査に御協力頂いた方々に、この場を借りて感謝申し上げる。また本発表は、台湾奨助金 MOFATF20190057、及び JSPS 科研費 19J10239 の助成を受けた研究成果の一部である。

参考文献

アンダーソン，ベネディクト（2007）．白石隆・白石さや訳 定本 想像の共同体―ナショナリズムの起源と流行 書籍工房早山

Klöter, Henning (2005). *Written Taiwanese*. Harrassowitz Verlag.

Silverstein, Michael (1979). Language Structure and Linguistic Ideology. Paul R. Clyne et al. ed. *The Elements: A Parasession on Linguistic Units and Levels*. Chicago Linguistic Society: 193-247.

蕭阿勤（2012）．重構台灣―當代民族主義的文化政治 聯經出版

楊允言・張學謙・呂美親編（2008）．台語文運動 訪談暨史料彙編 國史館

張學謙（2003）．行向多文字ê台語文―文字態度 kap 政策論文集 睿煜出版

政治大學選舉研究中心 臺灣民眾臺灣人／中國人認同趨勢分布（1992 年 06 月～2016 年 06 月）（http://esc.nccu.edu.tw/app/news.php?Sn=166 2020/1/6 閲覧）

南米日系人のコンパラブルな語りにおける言語・非言語使用特性

松田 真希子(金沢大学)

1. はじめに

地球規模の移動の世紀においては，言語文化の汽水域領域，すなわち異言語異文化間接触，あるいは複言語使用者間接触の領域が拡大している．そこではダイナミックで言語混合的な相互行為が行われており，そうした現象の研究の代表的なものに Translanguaging (García & Wei, 2014), Metrolingualism (Pennycook & Otsuji, 2015)がある．

日本語においても，こうした汽水域における言語コミュニケーションの研究が行われている．日本国内においては山下(2016)が在日パキスタン人児童のコードスイッチング(CS)[1]とスタイルシフト(SS)の状況について，エスノグラフィー的な質的研究を行っている．調査の結果，子どもたちは英語，ウルドゥー語，接触日本語変種，パラ言語，スタイルなどを縦横無尽に使用していることを報告している．また，佐藤(2018)は日本の外国人受け入れ校に在籍する複言語話者の言語意識・言語使用を調査し，複数言語話者には生活言語と学校言語 (Cummins, 2000) の使い分けを求める学校や地域社会の「期待」のもとで，あえてそれから逸脱することで繰り広げられる CS（戦略的 CS）が見られることを指摘している．

筆者は近年 JHL(Japanese as a Heritage Language)としての日本語使用者の研究を行っている．特に日本語使用者がマイノリティでありながら何世代にもわたり日本語を継承している南米地域の日系人を対象としている．彼らの複言語使用状況から，日本語研究および日本語教育研究の示唆を得ることができるのではないかと考えているためである．松田(2018)は南米の継承語話者の日本語の口頭能力を分析し，JHL の日本語使用者は JFL の日本語超級話者と比べ，関係性に応じた日本語使用のバリエーションに優れていること，特に親密な関係性を形成する日本語力に優れていることを示した．更に松田(2019)では南米の継承語話者の日本語使用における方言使用能力から，JFL との差は，家庭内・コミュニティ内での相互行為の中で獲得された「私のことば」の力の差，「主体的な言語使用」の意識の異なりにあることを示した．しかし，松田（2018, 2019）は JFL と JHL の差の検討を中心に行っており，JHL の複言語の使用の差異や CS，SS についての検討は行っていない．

そこで，本研究では，南米の継承日本語話者が複数の言語レパートリーを持つ者同士で，同じ内容の出来事語りを複数言語で行った場合（＝コンパラブルな語り[2]），どのような傾向の異なりが見られるかについて調査した結果を述べる．これはある種実験的な試みであり，現実には同一の内容を同時に複数の言語で同じ相手に話すことはない．しかし，実際に行ってみた結果，ある種の不自然な状況であっても特徴的な傾向が言語面・非言語面（パラ言語面含め）に見られた．

2. 調査概要

2.1 調査対象地

調査対象地を図１に示す. パラグアイ・シウダー・デル・エステ(Ciudad del Este, 以下エステ)はパラグアイ第二の都市でブラジル，アルゼンチンと国境を接し，世界遺産イグアスの滝にも隣接している．ブラジル側の町フォス・ド・イグアスには橋を渡って容易に移動できるため，市内ではポルトガル語が広く用いられている．



図１　調査対象地

また，国境地帯であるだけでなく南米外からの移住者が多く，台湾等のアジア系移民，レバノン・シリア等のアラブ系移民も多く住んでいる．日系人はエステでは少数派であり数十家族が小売業等で居住している. しかし 30 キロ先に日本語使用者の多い日系移住地イグアスがあるため，エステにはイグアス移住地出身者も多く，日本語能力の高い日系人が多い．この地域に住む日系人はスペイン語，ポルトガル語，現地語のグアラニー語の３言語を日常的に使用している．更に世界的観光地であるため英語も使用可能な日系人がいる．

ボリビア・サンフアン地区はボリビアの日系人が 700 名ほど居住する戦後移住地であり，農業組合が中心になり

[1] 本発表では CS を一つの発話の中での複数の言語の混在だけでなく状況や場面に応じた言語の使い分けと広くとらえて使用する.

[2] コンパラブルとはコーパス研究で用いられる術語で wikipedia のような同一内容に関してそれぞれの言語で表されたものを意味する.

営農が行われている．ボリビア人を雇って大規模農業を展開する富裕層の日系人が多い．日本人はマイノリティではあるが，社会的地位が高く，コミュニティの結束も強く，日本語・日本文化の継承が盛んである．サンフアンは西日本出身者（長崎県）が約 5 割を占め，使用される日本語には西日本方言の影響が強くみられる． 2 世同士の会話ではスペイン語と日本語の mixing が起こっており，ロング (2019)は混合言語の存在の可能性を示唆している．

2.2 インフォーマント情報

今回分析対象としたインフォーマントはパラグアイのエステ在住の日系人３名（S1～S3），ボリビアのサンフアン在住の日系人２名（S４～S5），計５名である（表１）． S１～S5 は全てスペイン語と日本語の加算的バイリンガルであるが，エステ地区の家庭内言語はスペイン語であり，サンフアン地区の家庭内言語は日本語とスペイン語である．

表１:インフォーマントの概要

	年齢	日系	居住地	使用可能言語 (左が第一言語)	発話順	語りの内容
S１	20 代	３世	エステ	スペイン語，ポルトガル語，グアラニー語，日本語	JP→ESP→POR	ブラジルに旅行に行った時「ハム」のポルトガル語を間違えた
S２	20 代	３世	エステ	スペイン語，ポルトガル語，グアラニー語，日本語，英語	ESP→JP→POR→EN	自宅の大型犬の足を車でひいてしまって病院に連れて行った
S３	40 代	２世	エステ	スペイン語，日本語，ポルトガル語，グアラニー語	JP→ESP	ポルトガル語とスペイン語で意味が違うことでいくつか失敗した
S４	40 代	２世	サンフアン	日本語，スペイン語，英語	JP→ESP	飲み会で朝 3 時に家に帰ったので家に鍵がかかっていて入れなかった
S５	40 代	２世	サンフアン	日本語，スペイン語	JP→ESP	結婚前夫の羊が自分の家にきた時，父親が羊と娘を交換したいと言った

2.3 データ収集及び分析方法

今回の語りは，定延利之氏「ちょっとおもしろい話」[3]のフォーマットに基づき，インフォーマント自身のおもしろい体験談を複数言語で語ってもらった．話し手は，同一の内容を同じメンバーに日本語→スペイン語（→ポルトガル語→英語）の順で語った（S２のみスペイン語が先）．その場にいた調査者は全員ある程度それらの言語が理解できるが，調査者１（筆者, Listner1, 以下 L1）の第一言語は日本語，調査者２（日系ブラジル 2 世, L2）の第一言語はポルトガル語，調査者３（日本在住アメリカ国籍, L3）は第一言語が英語であった．S1-S5 の会話場面の位置関係を図２に示す．

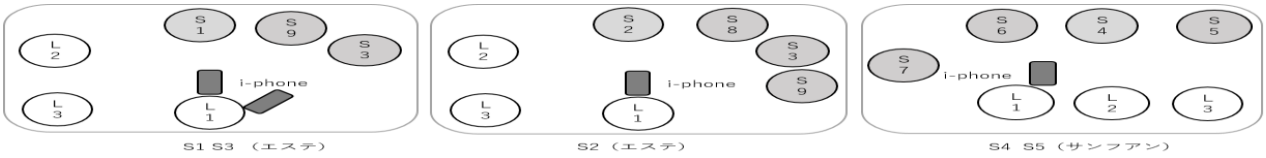


図２：会話参加者の状況

話を依頼するときは，調査者がインフォーマントに話してもらいたい言語で依頼した．録画は i-phone で行った．１言語あたりの語りは 1 分～5 分程度である．データ収集後，録画データをもとに，質的・量的な分析を行った．質的には動画をもとに発話内容，談話展開，パラ言語，非言語行動などを分析した．量的には主として非言語面の行動について談話分析ツール ELAN を使用してアノテーションし計量的に分析を行った．

3. 結果・考察

3.1 コードスイッチングと”we-code”，”they-code”

言語を指定したこともあり，表面的には当該言語の語りの間は別言語への CS は起こらなかったが，詳しくみると第一言語の言語・非言語特性が第二言語，第三言語の語りに影響していた．第二，第三言語において部分的に第一言語への CS が起こることもあった．例えば，適切な表現が浮かばなくなった際，周囲の S に支援を要請するとき CS が起こって

[3] http://www.speech-data.jp/chotto/

いた．そして自分自身の発話行為の内省やモニタリング時にも[1]の”no”のようなCSが起こっていた．

[1]ハハムが見つかーらなかったんですね.no.チズチーズ（S1）※下線は筆者

S２のスペイン語での語りでは，怪我をした犬を連れて行った現地ペットショップの名前やそこの店員の様子などが説明されていたが，L1-L3に向けられた日本語やポルトガル語での語りでは内容がカットされていた．相手との心理的距離を小さくする変種を "we-code"，大きくする変種を "they-code" と呼ぶが(Gumpers, 1982)，話の骨子は同じでもメインの聞き手との共有知識から他の聞き手にわからない地元の内容をスペイン語で話すことは調査者にとって内容面での”they-code”であった．また，言語使用による心理的距離の変化も見られた．例えばＳ１はL2（ブラジル人）にポルトガル語で体験を語る時が最も情報量が多く，動きが活性化した．言語順が最後であったというだけでなく，第一言語ではないポルトガル語でもジェスチャーが最も激しく機敏になった．それはL2がブラジル人であり，このブラジルでの失敗を最もよく理解できると思ったからだろうか．出来事再生も外国語（ポルトガル語）を混ぜる必要もない．そしてS1の視線は発話終了までＬ２しか見なかった．この時Ｌ２とS1には”we-code”ができていたと言えよう．

3.2　言語特性・パラ言語・非言語特性

日本語面についていえば，日本語母語話者と類似した言語特性や，スペイン語の談話構造の転移とみられる現象が確認された．例えば談話終結部において，日本語母語話者は「～という話です」といって終わる傾向があることが報告されているが（三枝2018），本調査でも，日本語語りで終結部にまとめの発話を行った話者がみられた([2][3])．これらの終結部の表示は，スペイン語やポルトガル語においては，手を上にあげる（S4），右手で払う（S1），両手を聞き手に見せる(S1)等のジェスチャーによって示す話者が大半であった．あるいは複合的に” eso es (That's it.)”と身振りつきで終結を示す話者（S3），日本語の終結部で手を挙げる話者もいた（S4）．こうした終結部の多様性は言語の混合状況が見える．

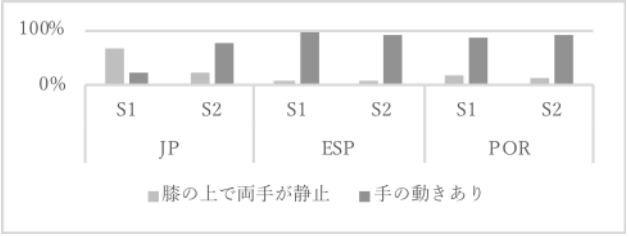
[2]それを，もう，ちょえーと，あのホテル戻ったときみんなにいったらわら笑い始めました．でーそういうーことがあったんですね一回（S1）
[3]という失敗がいっぱいありました．ということ．はい．（S3）

パラ言語的特性，非言語特性は日本語とスペイン語&ポルトガル語で異なる傾向が見られた。パラ言語特性としては，スペイン語やポルトガル語を話す時は，韻を踏んだリズムのある発話，スピードの緩急などが見られた．日本語では，相対的に間延びした発話になっていた．非流暢になった際も，語頭戻りだけでなく，[2]のような延伸続行（定延 2018）が見られた．こうした延伸続行はスペイン語JFL学習者には見られにくいためJHL話者の日本語特性の可能性がある．

非言語特性については，特に手の動きが大きく異なった。３言語による手の動きの時間差(S1,S2)を表２，図３に示す。S２のように個人差もあるが，日本語の語りの際，膝の上に両手を置く，或いは手の動きが静止するケースが多くのインフォーマントにみられた．質的に見ると，スペイン語やポルトガル語の語りになると，手の動きが活性化し，利き手である右手が常に動いており動きも素早かった．日本語の手の動きは内容の補完，内容のまとまりの可視化のために用いられているのに対し，スペイン語は内容の補完等に加えて，リズムの整備や可視化の目的に用いられているように見えた．

表２／図３　手の動きの言語差（JP, ESP, POR, 単位ミリ秒）

		発話時間	膝の上で両手が静止		手の動きあり	
JP	S1	127435	85050	67%	29837	23%
	S2	170000	41000	24%	129000	76%
ESP	S1	86176	6275	7%	79901	93%
	S2	226210	20000	9%	206210	91%
POR	S1	104219	15928	15%	88291	85%
	S2	161000	18000	11%	143000	89%



3.4　話し手による聞き手の指定行動

語りの言語を切り替える際，中心となる聞き手を変えようとするインフォーマントが多くみられた．具体的には（1）第一言語で語る時は親しい関係にある同一の第一言語話者を主な聞き手として指定して話し，（2）第二，第三言語で語る時は，その言語を母語あるいは主言語として話す人間を主な聞き手として指定して話していた．

（1）のケースにおいては，S が L1-L3 に向かって話すことはほぼなく，別の親しい数名の S に向かって話していたことがあげられる．特にS２の語りは姉のＳ８と体験した出来事であったため，S8 と内容を補完しあいながら同じ地区のＳ９に向かって語っていた．その際，S2 にとって L1-L3 は完全に視界から消え去っていた。S1－S3 にとってスペイン語での語りは”we-code”であり，日本語や他の言語での語りは”they-code”であった．そのためスペイン語での体験の共有は身内に向けられ，日本語での体験の共有は他者である調査者に向けられて語られる傾向にあった．
（2）のケースは，例えば次のようなものである．

［4］（日本語の語りを終えた後で）
L3：今の話スペイン語で
S4：ちょっと待って…（ビールを飲む）（全員笑い）
S7：そういわれるとなかなか難しい
S4：（S6 に）聞いてなかったよね．今の話　（S6：ああ聞いてない）　←聞き手指定行為
S4：ボリビア人の顔にしな．S7（名前）．そしたらボリ，スペイン語で話す．ガハハ　←聞き手指定行為
L2: me por favor, hablas en español, porque entendo espanol [*スペイン語で話してください，わかります*]
S4：no, hace un tiempo atrás…[*いや，この前…*]

ここではＳ６をもう一度話すべき聞き手として指定しようとしている．そしてその隣の S7 には「ボリビア人の顔にしな」と要求している．同じ話を二回することは不自然で，スペイン語だけでの語りは通常の関係の中で不自然であるためＳ４は整合性を持たせるために戦略的に聞き手を指定しようとしていたと思われる．L2 がスペイン語でリクエストすると，L2 に向かってスペイン語で語った．サンフアン地区の話者 S4 にとって，スペイン語だけでの語りは現地の人とのコミュニケーションで利用する”they-code”である．そのため日系人仲間にではなくよそ者の調査者に語ったと思われる．

4. まとめ

本研究では JHL としての複言語話者同士で同一内容の語りを複言語で行った際の差異について検討を行った．そこでは場を共有しつつもその語りの聞き手として最もふさわしい人間を選択しようとする行為や，相手との関係性に応じた内容調整や言語・非言語面での調整が見られた．筆者は，人間は場や相手との関係に応じてコミュニケーションのあり方，キャラのあり方を変える分人（平野,2012）の集合体であるという立場をとるが，JHL の同一空間・同一内容の異言語語りは分人の現れに見えた．日本語コミュニケーションにおいて，相手に応じて日本語を使い分けキャラやスタイルを変えるように JHL は相手に応じて言語を含め様々な調整行動を行い，境界線をダイナミックに引いている．こうしたコンパラブルな語りを分析することでそのダイナミズムの一端を分析できるのではないだろうか．

謝辞　本研究は JSPS 科研費[16H05676]の助成を受けたものである．執筆にあたり大江元貴先生から貴重な助言をいただいた．本調査にあたりエステ地区，サンフアン地区から多大な協力を得た．ここに謝意を表する．

参考文献

佐藤 美奈子(2018). 多数言語話者高校生の言語認識と「戦略的 CS」―「場」の期待と逸脱―　社会言語科学会大会予稿集, 42, 25-28.
三枝令子(2018).「わたしのちょっと面白い話」から見た話し始めと話し終わり．定延利之 限界芸術「面白い話」による音声言語・オラリティの研究. 330–339.
松田真希子(2018). ふさわしさの文法-日本語複言語話者の日本語使用から見えること-. 2018 年度日本語文法学会予稿集
松田真希子(2019).「生きたことば」の主体的使い手としてのプロフィシエンシー　第 1 回国際日本語プロフィシェンシー研究シンポジウム予稿集(PDF)
ロング・ダニエル(2019). ボリビア，パラグアイ日系調査から得られた知見―複言語状況と混合言語に注目して―. EJHIB2019 Proceeding (PDF)
山下里香(2016). 在日パキスタン人児童の多言語使用　コードスイッチングとスタイルシフトの研究　ひつじ書房
平野啓一郎 (2012)　私とは何か―「個人」から「分人」へ―　講談社現代新書
García.O., & Wei. L. (2014). *Translanguaging. Language, Bilingualism and Education*. London, England: Palgrave Macmillan.
Pennycook.A., & Otsuji. E. (2010). *Metrolingualism Language in the City*. Routledge
Gumperz, J. (1982). *Discourse Strategies*. Cambridge University Press.

授業型多人数会話における意図的なユニゾンの特徴

—大学生による模擬授業に即して—

山田雅彦（東京学芸大学）

1. 課題と問題意識

ここでいう授業型多人数会話とは,多人数会話の中でも,授業中の教師に相当する,立場の異なる 1 名が会話の順番取りシステムにおいて特権的な位置にあるタイプのものを指す.本研究の課題は,授業型多人数会話において,教師（に相当する者）の要求に応じて意図的に行われるユニゾンの特徴を明らかにすることである.

授業における会話の順番取りシステムには,他には見られない特徴がある(McHoul, 1978).生徒は教師の指名（他者選択）に応答するか,教師によって自己選択が促されたときにしか発話できない.生徒から別の生徒へと発話者が交代することは例外的で,具体的な発話者はその都度変わるものの,教師－生徒－教師－生徒－教師…と,授業中の会話は教師と生徒の間の二者間の会話に近い形で進行する.授業中の会話の順番取りでは「教師だけが創造的な発話を行う者を決定することができる(McHoul, 1978: 188)」とさえ指摘されている.

これにより,授業中の生徒の発話機会はごく制限されたものとなる.一方,多くの教師はより多くの生徒に発話機会を保証しようと試みており,その方法の一つに生徒（厳密にいえば小学校で多用される方法なので児童）によるユニゾンがある.教師が授業中に発問後のキューを使い分けることで,挙手と指名（他者選択）を経た児童単独での応答と複数の児童のユニゾンによる応答を適宜導き出していることが指摘されている（森, 2014）.ただし,森が注目するのは教師による発話順番の配分方法である.Lerner(2002)や串田(2006)のような,多人数会話におけるユニゾンがいかにして達成されているかについての考察が授業型多人数会話について試みられた先例は見当たらない.

授業型多人数会話では,教師の要求により意図的なユニゾンが行われることがある.授業前後の挨拶は慣例となっており,板書された主発問の斉読は不文律である.しかも,挨拶や斉読の際に行われる意図的なユニゾンでは,挨拶のスピードを極端に遅くしたり,斉読に際して教師が読み始めのキューを出したりというように,児童・生徒の発話があたかも一人の声に聞こえるよう促すことが頻繁に行われている.このようにしてユニゾンされる文言にテンポやブレスといった（打楽器による）楽曲としての性格を見いだすならば,ユニゾンする児童たちはともに同じ楽曲を演奏する共同演奏者の関係にある.共同演奏とは,テキスト（楽曲）に拘束されながらもテキストを自由に解釈し,同時に共同演奏者の自由な解釈による自らの自由の制限を受け入れて,それぞれが音を発して調和のとれた楽曲を演奏すること（Schutz, 1964: 175-176）であり,従うべきテキスト,そのテキストを解釈・改変する自らと他者の自由の三者の間にしばしば学校で期待される関係を見いだすことができる. 文字通り「息が合う」と表現されるような関係である.意図せざるユニゾンについてさえ「ユニゾンを行っている者同士のあいだで,自分たちが今まさに共同的関係にあるということを実演する手続き」であると指摘されている(串田, 2006: 146）が,授業型多人数会話での意図的なユニゾンは,単なる発話機会の保証にとどまらず,明らかな共同的関係の実演である.それを通じて共同的関係の構築を促す働きが期待されている可能性も指摘できる.学校教育に即していえば「学級経営」の方法の一つである.さらに共同演奏者間には「あらゆる可能なコミュニケーションの不可欠の条件ではあるが,コミュニケーション過程の内には入らず,コミュニケーション過程によっては把握できないある種の社会的相互行為(Schutz, 1964: 161)」が成立しているとさえされる.ユニゾンの達成過程の分析は,コミュニケーションの前提を追究する過程としても見いだすことができる.

その一方で,児童・生徒に一人の声に聞こえるほど息の合ったユニゾンを求めることは,通常の多人数会話に比べると二者間対話に近いと指摘されている授業型多人数会話(McHoul, 1978; 森, 2014)を,二者間対話により近づける機能を果たしている可能性を指摘できる.近年の学校では私語や不規則発言等の課題非従事行動(off-task behavior)が頻発し,従来の会話の順番取りシステムが動揺しつつある.そのような状況の内にあって,児童・生徒による意図的なユニゾンは教師への従順さ

と機敏さの象徴たり得る. 意図的なユニゾンには, 授業型多人数会話独自の秩序の維持・回復やそれに適した児童・生徒の習慣形成が期待されている可能性を指摘することもできる.

共同的関係の構築と秩序維持という, 異なる働きを見いだしうる授業型多人数会話での意図的なユニゾンが, 実際にはどのようにして達成されているのか, その達成過程に学級経営や学習規律にかかわるどのような意義を見いだせる（または見いだせない）のかを微視的に把握するのが本研究の目指すところである.

2. 方法

教育学部3年次生による, 教育実習事前指導の一環としての模擬授業を2018～19年にかけて45人分録画した. 教師役の学生を撮影するカメラを教室後方中央に設置して学生の輪番により操作を行い, 児童役の学生を撮影するカメラを教室前方左右に設置して授業開始から終了まで操作を行わず撮影を続けた. 一連の撮影は, 受講者各自が自分の模擬授業の模様を観察するために授業の一環として, 各年度とも延べ4教室に分かれて行った.

録画された動画のうち, 研究上の分析対象とすることについて受講者の了解を得られた 43 の動画から, 意図的なユニゾンが行われている場面を抽出した. 25人の模擬授業で教師役のキューによるユニゾンが行われていた（授業開始時の挨拶8, 板書された主発問の斉読 18, 教科書教材文の音読 5. 一回の模擬授業で複数のユニゾンが行われていることがあるため, 総和は模擬授業の数と一致しない）. これらの場面の音声と画像をELAN ver. 5. 7で分析し, 児童役相互のユニゾンに, 教師役の言動が及ぼしている影響を考察した. なお, 今後文中で「教師」「児童」「日直（ユニゾンのキューを出す児童） 」と表記するのは, いずれも教師役, 児童役, 日直役を務める学生である.

3. 結果と考察

授業型多人数会話において教師の求めに応じて行われるユニゾンには, 以下のような特徴が見いだされた.

3. 1. 発話冒頭でのユニゾン

授業型多人数会話で意図的に行われるユニゾンのわかりやすい特徴は, 通常のユニゾンと異なり, 発話の冒頭からユニゾンが行われることである. 串田が「ユニゾンを実現するためにはたんに発話の形状と種類に関する予測だけでは十分でない. 次に来る特定の語句が予測できなければならない」と指摘している（串田, 2006: 120）が, 授業型多人数会話ではしばしば, 発話のタイミングと発話の内容が明示される. 教師が板書（発話すべき文言）を示して「せ : の」とキューを発するといった教授行動が典型的である.

逆に, こうしたキューが明確でないとユニゾンの達成は困難である. 一例として, 教師が「道徳の授業を始めま : す」と授業の開始を宣言した際, 「ま : す」という挨拶にありがちな語尾に挨拶の意図を読み取ったであろう児童は「お願いしま : す」とユニゾンを試みている. しかし, 教師の発話がユニゾンのキューであるかどうか不明確なため, 児童の発話はそろわず, 一人は自分の挨拶が終わった後に他の児童の「お願いしま : す」にあわせて「ま : す」だけ発話するというように, 典型的なユニゾンにはならなかった.

3. 2. キューをコピーするユニゾン

教師がユニゾンで発話すべき文言だけでなく, ブレスの位置まで示すことで, 教師のブレスをコピーしたユニゾンが達成された事例が見いだされた. 小 4 国語の教科書（光村出版）掲載の「白いぼうし」を, 教師のリードで斉読する場面である. 「ほりばたで乗せたお客のしんしが」を, 教師は「ほりばたで, 乗せたお客のしんしが」と発話している. 0. 1秒に満たないブレスであるが, 特異な位置にあるので耳に残る. このブレスは文脈上重要でない「乗せた」を強調する上に, 「乗せたお客のしんし」で息が続かなくなりかねないので, 通常の音読では入らないからである. あえてブレスを入れるとすれば「ほりばたで乗せた, お客のしんしが」である. にもかかわらず, 児童は教師と同様に「ほりばたで, 乗せたお客のしんしが」とブレスを入れてユニゾンした. 教師の範読が, ユニゾンで発せられるべき文言だけでなく, ブレスの位置まで指示するものとして児童たちに受け取られている. この時の児童のユニゾンは, 児童相互に発話のテンポやブレスを調整しあった, 共同的関係の実演としてのユニゾンというよりも, 個々の児童が先行する教師の発話を模倣した結果となっている.

3.3. 自律的なユニゾン

一方で, 教師のキューがあるにもかかわらず, キューのコピーとは見なしがたいユニゾンも見られた. これを「自律的なユニゾン」と呼ぶことにする. むしろ教師のコピーとしてのユニゾンは例外的である.

典型的なのが, 授業冒頭の挨拶である. 教師が「よろしくお願いします」と挨拶しても, 児童は「お願いしま : す」とユニゾンする. ユニゾンは達成されているが教師のキューのコピーではない.「よろしく」を省略した上,「ます」の部分を教師とは異なるテンポでユニゾンしている. 教師がユニゾンに加わって「よろしくお願いしま:す」と発話しても, 児童たちの発話は「よろしく」を言い終わるタイミングでの「お願いしま:す」であった[1]. 別の事例では, 日直のキューはコピーすべきでないことがほぼ明らかな「礼」であり, これに応じたユニゾンは, 教師も含めて「お願いしま:す」であった. さらに, この時は日直の号令が「お願いします」であるにもかかわらず, 教師も参加したユニゾンは「お願いしま:す」になっていた.

一連の事例が示唆しているのは, この集団内では児童の挨拶は「お願いしま : す」であるとの暗黙の了解が成り立っている可能性である. 児童は, 本研究では特定し得なかった何らかの事情によって, なぜかユニゾンができるのである[2]. しかもそのユニゾンのテンポは, 個々が単独で発話する際のテンポとは異なっていることがある. 「ま : す」という挨拶は, 教育実習が始まると忙しい職場で機敏に行動する意思を欠く表れと見なされる恐れがあるため, 教育実習の事前指導にあたる当科目では授業担当者（発表者）が受講者に対して改めるよう再三要求していたことであるが, 単独での挨拶が「ます」になる学生はいるものの, 授業開始時に授業担当者（発表者）の「おはようございます」というキューで行われるユニゾンの「ま : す」が改善されることはなかった. ユニゾンは, 児童各自のテンポにかかわりなく,「ユニゾンそれ自体のテンポ」とでも呼ぶしかないテンポで達成されていた.

3.4. テンポのコントロールが困難

ユニゾンのテンポを教師が修正しようとすることがある. 原理上, テンポをより速くすることとより遅くすることが想定できるが, 今回の動画に記録されたのはユニゾンに参加しつつそのテンポを速めようとする働きかけのみであった. ユニゾンを通じて従順さと機敏さを求めることの効果を検討する手がかりとして位置づけることができる.

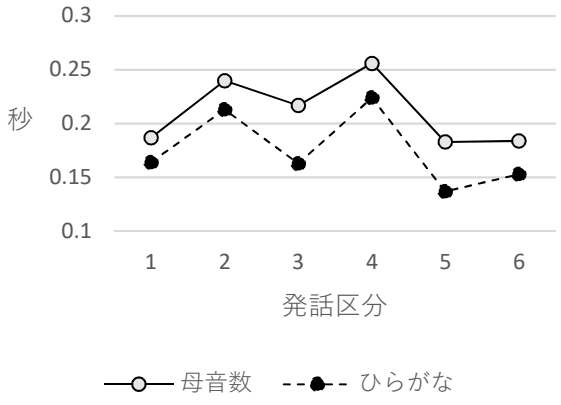


図1 一音節あたりの所要時間（秒）

教師は児童とともに板書を斉読するユニゾン「リボンの値段は, 1 メートルあたり, 80 円です, 2.4 メートルで, 何円になるか, 求めましょう」に参加するが,「何円になるか」のところで児童のユニゾンは教師のテンポについて行かず, 声量が小さくなる. ここで教師は発話のテンポを耳で聞いてもわかるほど速めている. ブレスによって区切られた発話区分ごとの一音節あたりの所要時間を図 1 に示す. 音節数は, 母音の数のほか, 小学校でしばしば行われるように長音や「ん」をはっきり発話する際を想定してひらがな表記の文字数（拗音は除く）でもカウントしている. 発話区分 4 と 5 の間（何円になるか, の前）で, ここに示す発話単位間としては最大の（最遅から最速への）テンポの変化が確認でき, 児童のユニゾンの声量はここから小さくなっている. 前項で言及した自律的なユニゾンとも関連するが, ユニゾンは「ユニゾン自体の」とでも呼ぶべきテンポで進行し, 教師を含めたユニゾン参加者個々の意思で, そのテンポを観察可能な程度にまで修正することに成功した例は記録されていなかった[3].

3.5. キーパーソンとしての日直

教師が児童の一人を「日直」として指名し[4], 日直のキューでユニゾンが行われることがあった. そのうちの一事例で, 日直

---

[1] この事例では, ユニゾン直前の日直のキューが「お願いします」であるため, 児童がこれをコピーした可能性がある. また, 教師の「よろしく」が日直の号令の語尾を食い気味に発話されているため,「よろしく」のユニゾンに参加できなかった児童が, 次に来るユニゾンのきっかけとして「お願いしま:す」を待って参加した可能性もある. ただし, 日直の号令は「お願いします」なのに, ユニゾンは「お願いしま:す」と異なるテンポであった.

[2] 「ま:す」は小売店の店員も頻繁に使う挨拶での長音であり, 児童役学生もアルバイト等でこの長音の使用に慣れている可能性がある. ただし, 長音の長さは職場毎に異なっていると想定する方が現実的であるため, 学生各自が個別に習慣化した「ま:す」が結果的にユニゾンになっているとまでは仮定できない.

[3] 一方, 今回の記録とは別の機会に, テンポを意図的に遅くできる可能性を見いだしている. 小学校での授業観察に際して, 教師が 1 年がかりで授業開始時の挨拶を「一人の声」に聞こえるよう求め続けた結果,「お経のように」テンポが遅くなったユニゾンが観察された.

[4] 通常, 日直は事前に決まっているが, 模擬授業であるためその場で教師が任意の児童を指名し, 即興で日直の役割を演じるよう求めている.

がユニゾンすべき文言として「よろしくお願いします」を明示した時のみ「よろしく」が入ったユニゾンが達成された. 会話の順番取りシステムで特権的な立場にいる教師よりも,ユニゾンに参加すべき児童たちにとって「自分たち」の一人である日直のキューの方が,ユニゾンされるべき文言を示すキューとして効果的である可能性が示唆された.

とはいえ,日直の「ます」のテンポはコピーされず,「ま:す」とユニゾンされた.この時,単独の発話では「おはよございます」と長音を省略して発話する教師でさえ,ユニゾンに参加する際は「お願いしま:す」であった.テンポのコントロールが,文言のコントロールよりも相対的に困難であることが示唆された.

4. 総合考察

一連の事例が示唆するのは,「共同的関係の実演」としてのユニゾンに教師が及ぼしうる影響の小ささである.児童は,本研究では特定し得なかった何らかの要因によってなぜかユニゾンができるのであり,教師はそのユニゾンに一員として参加することはできても,教師の意思で文言やテンポ,ブレスをコントロールできるのは,児童が教師に合わせようと身構えている時,今回の分析の範囲でいえば,ユニゾンした経験がほとんどない文言でブレスの位置をコピーした例に限られていた.また,ユニゾンの文言をコントロールするキーパーソンとして日直の役割が注目に値することが示唆された.ただし,日直がコントロールできていたのはユニゾンの文言だけで,ユニゾンのテンポを意図的に修正することの困難さがうかがえた.

結語として,分析対象の少なさゆえに慎重を期しつつも,冒頭で言及したユニゾンに期待される教育実践上の機能について考察しておく.

児童のユニゾンに教師のコントロールが及びにくいという本研究の知見は,ユニゾンに授業型多人数会話特有の秩序の回復と規律の確立を期待し難いことを示唆している.もしユニゾンの実施を通じて機敏なユニゾンの習慣を形成しようとするならば,一向にテンポが速まらずやり直しを繰り返すことで授業時間を空費するリスクが生じる.

一方,息の合った集団形成(学級経営)の手段として意図的なユニゾンを見るならば, 児童たちがどの程度息を合わせられるかの確認と,息を合わせよとのメッセージを発すること以上の効果を期待する上で,日直(キューを出す児童)の果たす役割の大きさが示唆される.日直を介した間接的な指導である.日直の出すキューがユニゾンに及ぼす影響が今後の検討に値する.

なお,今回はユニゾンの文言,テンポ,ブレスの三者に注目して分析を行ったが,授業型多人数会話におけるユニゾンでは各児童の声量にも注目する必要がある.全員が小声であったり,一部の児童が突出した大声を出したりするユニゾンは,たとえ文言,テンポ,ブレスが合っていたとしても息が合っている印象を与えにくい.声量は共同的関係の実演としてのユニゾンの成否にかかわる.今回は声量をめぐる特筆すべき場面が見いだせなかったため声量の考察に至らなかったが,声量を分析の対象とすること,そのためにも人数や学年が多様な集団(理想的には実際の小中学校の授業)のユニゾンを考察の対象とすることが,今後の課題として見いだされる.

謝辞

録画・録音に協力してくださった皆様に厚く御礼申し上げます.
本研究はJSPS科研費18K02358により助成を受けたものです.

参考文献

串田秀也(2006). 相互行為秩序と会話分析 世界思想社

Lerner, G.H. (2002) Turn-Sharing: The Choral Co-Production of Talk-in-Interaction, Edited by Ford, C.E., Fox, B.A. & Thompson S.A., *The Language of Turn and Sequence.* Oxford University Press, New York, pp.225-256.

McHoul, A. (1978) The Organization of Turns at Formal Talk in the Classroom, *Language in Society*, **7**, 183-213.

森 一平(2014) 授業会話における発話順番の配分と取得 教育社会学研究, **94**, 153-172.

Schutz, A. 1971(c1964) Making Music Together: A Study in Social Relationship, edited by Brodersen, A., *Collected Papers II: Studies in social theory.* Martinus Nijhoff, The Hague, pp.159-178.

An ethnographic examination of interaction affordances in multicultural contexts

Roehl Sybing (University of Massachusetts Amherst)

1. Introduction

The contemporary literature regarding discourse and mediation in multilingual and multicultural environments has placed an outsized focus on the spoken word. This provides the impression that observation of verbal utterances is the primary, if not exclusive, means for understanding communication between interactants. Particularly within language learning contexts, recent empirical research has devoted much time and effort on discussions of, among other topics, questioning strategies (e.g., Wangru, 2016), revoicing or recasting (e.g., Inan, 2014), and spoken humor (e.g., Le & Renandya, 2017), all of which center speech as the main form of mediated discourse.

Naturally, this has generated implications for research and practice in language education and applied linguistics, both areas in which research concerns itself over the importance of speech at the expense of other interactional resources that transcend that which the vocal tract can produce (Worgan & Moore, 2010). Within educational contexts, dialogic mediated interactions (Hall, 1993) and related, Vygotskyan approaches to teaching and learning continue to place a narrow lens on the spoken word. This approach risks decentering the importance of gestures, facial expressions, and other resources that fall under the scope of the New London Group's conceptualization of multiliteracies (Cope & Kalantzis, 2000).

A nominal portion of the sociolinguistics field has devoted some research focus on pragmatics as a source of co-construction of meaning (Arnold, 2012; Smotrova & Lantolf, 2013), indicating the possibility that the nonverbal interactional resources can play a complementary rather than supplementary role in dialogic interaction. Exploring the full range of interactional resources in this fashion can hold significant implications for both linguistics and language education. As a result, the

study presented in this paper seeks to expand that discussion through data that demonstrates the nature of various interactional resources employed to overcome shortcomings of verbal utterances in dialogic interaction.

2. Research context and design

I conducted an ethnographic study (LeCompte & Schensul, 2010) of a Japanese university EFL (English as a foreign language) classroom during the spring semester of the 2019-20 Japanese academic year. Over the course of two months at a public university in Japan, I was a participant observer in first-year, required English classes to collect interactional data between an L1 English-speaking teacher and his L1 Japanese-speaking students. I collected field notes documenting my observations and audio recordings of classes for transcription and discourse analysis, as well as conducted stimulated recall interviews of the teacher and various students to gather their perspectives on my observations.

I analyzed the body of collected data through lenses of dialogic interaction (Engin, 2017; Goldenberg, 1992), teacher-student rapport (Webb & Barrett, 2014), learner agency (Mercer, 2011), and social power (French & Raven, 1959). Relevant to this study, I sought out instances of classroom interaction where differing perspectives led to potential breakdowns in communication (Jacquemet, 2011), which prompted either the teacher or his students to employ nonverbal means of communication to mediate interaction or build dialogue.

3. Findings and implications

I analyzed 51 discrete occurrences of classroom interaction in which the teacher expanded the use of interactional resources while in dialogue with students. Of those instances, the teacher shifted from one interactional resource to another in order to address a breakdown in communication or build dialogue based on a perceived opportunity at least 16 times. This means that, when employing one interactional resource (e.g., likely a verbal utterance), the teacher perceives that his students do not understand what he is trying to communicate. In such cases, he chose to communicate through other

interactional resources (e.g., gestures, facial expressions, written text on the blackboard) to facilitate a greater sense of mutual understanding.

In 18 other instances, the teacher recast or extended meaning through the same interactional resource in order to negotiate said challenges or opportunities. This meant that the teacher employed one interactional resource in different ways to facilitate mutual understanding. For example, with respect to verbal instructions, the teacher may decide to repeat his instructions more slowly or by giving examples, demonstrating the importance of dynamically adjusting discursive practices in case of challenges in developing alignment between interactants.

Both sets of circumstances, further detailed by interview excerpts from both teacher and students, appear to indicate that the ability to employ a wide range of interactional resources affords a greater likelihood of co-constructing meaning among interactants while mitigating challenges that might impede mutual understanding. The students in class acknowledge the teacher's expansive usage of interactional resources and are, in turn, encouraged to express meaning in a similar, expansive fashion. What results is a classroom environment that allows for a greater degree of alignment between teacher and student even when they differ in knowledge and sociocultural identities.

This research proposes important implications for research regarding interaction across differences of language and culture. Particularly in multilingual and multicultural contexts, where interactants must come to a consensus on negotiated norms and customs (Lonsmann, 2017), the establishment of alignment, mutual understanding, and rapport may take place, at least in part, outside formulaic patterns of the spoken word. While evidence of extensions of interactional resources reify the importance of the conventions of conversational analysis in terms of intonation, speaking speed, and word stress, the multimodality of interactional resources requires a consideration of other affordances and resources that discourse analysis (Johnstone, 2002) may not be able to fully capture. Moreover, acknowledgment of interaction affordances also necessitates within analysis of interaction a more comprehensive accounting of the environment in which interaction takes place.

References

Arnold, L. (2012). Dialogic embodied action: Using gesture to organize sequence and participation in instructional interaction. *Research on Language & Social Interaction*, *45*(3), 269-296.

Cope, B. & Kalantzis, M. (Eds.). (2000). *Multiliteracies: Literacy learning and the design of social futures*. London: Routledge.

Engin, M. (2017). Contributions and silence in academic talk: Exploring learner experiences of dialogic interaction. *Learning, Culture and Social Interaction*, *12*, 78-86.

French, Jr., J. R. P. & Raven, B. (1959). The bases of social power. In D. Cartwright (Ed.), *Studies in social power* (pp. 150-167). Ann Arbor, MI: Research Center for Group Dynamics, Institute for Social Research.

Goldenberg, C. (1992). Instructional conversations: Promoting comprehension through discussion. *The Reading Teacher*, *46*(4), 316-326.

Hall, J. K. (1993). The role of oral practices in the accomplishment of our everyday lives: The sociocultural dimension of interaction with implications for the learning of another language. *Applied Linguistics*, *14*(2), 145-166.

Inan, B. (2014). Teacher revoicing in a foreign language teaching context: Social and academic functions. *Australian Journal of Teacher Education*, *39*(9), 53-75.

Jacquemet, M. (2011). Crosstalk 2.0: Asylum and communicative breakdowns. *Text & Talk*, *31*(4), 475-497.

Johnstone, B. (2002). *Discourse analysis*. Malden, MA: Blackwell Publishing.

Le, V. C., & Renandya, W. A. (2017). Teachers' English proficiency and classroom language use: A conversation analysis study. *RELC Journal*, *48*(1), 67-81.

LeCompte, M. D. & Schensul, J. J. (2010). *Designing and conducting ethnographic research: An introduction*. New York: AltaMira Press.

Lonsmann, D. (2017). A catalyst for change: Language socialization and norm negotiation in a transient multilingual workplace. *Journal of Linguistic Anthropology*, *27*(3), 326-343.

Mercer, S. (2011). Understanding learner agency as a complex dynamic system. *System*, *39*, 427-436.

Smotrova, T. & Lantolf, J. P. (2013). The function of gesture in lexically focused L2 instructional conversations. *The Modern Language Journal*, *97*(2), 397-416.

Wangru, C. (2016). The research on strategies of college English teachers classroom questioning. *International Education Studies*, *9*(8), 144-158.

Webb, N. G. & Barrett, L. O. (2014). Instructor-student rapport in Taiwan ESL classrooms. *Teaching & Learning Inquiry*, *2*(2), 9-23.

Worgan, S. F. & Moore, R. K. (2010). Speech and the perception of affordances. *Ecological Psychology*, *22*, 327-343.

ピア・リーディングにおけるスタンスの示し方

ーなぜ共通の理解が築けなかったのかー

久次優子(大阪大学大学院生)

1. はじめに

本研究は,日本語を第二言語として学ぶ学習者がクラスメイトとの対話を通してテキストの理解を深めるピア・リーディング(池田・舘岡, 2007)場面の相互行為を会話分析の手法で分析する.ピア・リーディングを含むピア・ラーニングでは,互いに理解し合うための対話が活動の核となるものの1つとされるが(池田・舘岡, 2007),本研究で分析するピア・リーディングの事例では,共通の理解が構築できなかったように見える.具体的には,読解テキストに関する問いについて学習者2人で検討する中で,片方の学習者から妥当な回答が提示されているにも関わらず,その回答について相互行為上の共通の理解を築くことができなかった.本研究ではその要因を探る.ピア・リーでイングにおいてどのようなことが相互行為上の問題となる可能性があるのかを明らかにすることは,それを実施する教師,学習者にとって意義のあることと考える.

2. 先行研究

ピア・ラーニングを行うにあたり,ある活動なら必ず成功するというわけではなく,その成否はあくまで具体的な相互行為の進行に伴って決定されるという指摘があるものの(義永,2017),日本語教育におけるピア・ラーニング研究の多くはその成果を検証するものであり,相互行為がどのようなやり方で構築されるのかを明らかにするものは少ない.本研究のようにピア・ラーニングにおいて相互行為上のどのようなことが問題となる可能性があるのかを明らかにする研究としては,大島(2009)がピア・レスポンスにおいてポライトネスの面からの制約により相手からの言語知識の提供は暗示的なものが多く,かつ誤用が修正されないことがあると指摘している.さらに久次(2018)ではピア・リーディングにおいて読解テキストには言及されていないカテゴリーに結びついた述部を回答の根拠としたために妥当な回答を構築できなかったこと,また,制度性を成立させつつ回答としての妥当性を追求しなければならないことの難しさを明らかにしている.

3. 分析手法とデータ

本研究ではピア・リーディングという日常とは異なる制約と明確な目的を持つ制度的場面(Heritage & Clayman, 2010)を会話分析の手法を用い分析する.会話分析ではその場の相互行為を可能としている方法・能力を内的視点から構造的に分析する(岡田, 2015).

データは2017年2月末から6月にかけて日本国内の某日本語学校の上級・中上級の読解授業で学習者の中から協力者を得て録音されたものの一つで,読解教科書『読む力中上級』(奥田, 2013)「第10課　ことばの構造,文化の構造―共時的展開と通時的展開」(鈴木, 1973)を扱ったときのものである.日本語能力試験N1,N2を取得,もしくは取得を目指すレベルの学習者10～20名程度のクラスで,テキストを正確に読む活動が行われた後,クリティカルに読めることを目指した活動として,教師の指示のもと教科書に記載されている問いをクラスメイトとペア,または3人のグループになって考えている.検討後は,教師がグループごとにどのようなことが話されたかを聞いていき,その内容をクラス全体で共有した.なお,データの学習者は2人で,両者とも母語は中国語である.また,音声は分析のため会話分析の手法を用いて書き起こしたが,個人名についてはすべて仮名とする.

読解テキストの内容は,筆者が日本在住のイタリア系アメリカ人のお宅で,食事の際白い御飯が出てきたので,日本の食事でするように御飯と肉料理を一緒に食べようとしたら,それはミネストラとして肉料理の前に食べるべきものであったという失敗談が語られ,2つの文化に同じものがあっても全体の中での位置づけが違うので,その価値は異なるということが述べられている.そして,このテキストを読んだうえで二人が検討している問いが,「2つの文化に同じものがあるが全体での位置づけが違う例として,筆者は文中の「白い御飯」の他に,同じ本の中で次のような例も挙げています.下の例を参

考に, これ以外にどのような例があるか考えてみましょう.」というものである. 問いの中に出てくる「次のような例」というのは, 日本人は挨拶のときにおじぎをするが, 西洋人が挨拶のときに握手するからといっておじぎと握手を等しい価値を持った行動と解釈して, 握手をすると誤解を生みかねないという内容のものである.

4. 分析

次の抜粋 1-1〜1-3 は学習者 E と B による上記問いを検討する一連の相互行為であるが, 連鎖が長く続くため便宜上 3 つに分けて分析する. ここでは問いへの回答の例を E が B に提示し説明している. その例は回答として妥当であるにもかかわらず, それが相互行為上, 妥当なものとしてみなされず, E は別の例の説明を始める. ここではその要因を探る.

抜粋 1-1

01	E:	これは簡単だから
02	B:	はいじゃどうぞ
03	E:	スプーン
04	B:	スプーン
05	E:	スプーンと味噌汁
06		(0.8)
07	E:	海外は, えと::す(0.8)°す°え:しゅは:, え::とスープは:,
08	B:	はい
09	E:	°えっとたぶん°よくスプーンで食べるあ:
10	B:	あ::[はい
11	E:	[でしょ?
12		必ず(.)実は必ず
13		(0.6)
14	E:	かならずと言ってもいい(.)と[思う
15	B:	[あ:::
16	E:	うん
17	B:	でも日本は箸=
18	E:	=日本は:, (0.4)場合による°でしょ°?
19	B:	あ::はい
20	E:	えっと::あい(.)えっ西洋?
21		西方((中国語))
22	B:	はい(.)西洋
23	E:	西洋なスープなら:, ( )スプーンで食べる
24	B:	はい
25	E:	でも(.)えっと味噌汁が:, え::と日本の(.)伝統的な(0.6)スープから:, (0.5)
26		これは(0.4)え:っと箸で食べる
27	B:	は:い
28		(0.6)
29	E:	そう(.)だから:わぼくすごく:えっとあ:例えば(シンガポール)では:,
30		えっと吉野家(0.4)で:, 必ずスプーンは:(プラスチックス)は:(0.4)ついてる.
31	B:	hahahaha
32	E:	でも日本は:ない.
33	B:	hahaha[hahaha
34	E:	[あ:[そう
35	B:	[そういうことか
36	E:	そ::
37	B:	hahaha
38		(1.4)

E は 01 で回答としての例を挙げることが「簡単だから」と述べることで, その例を説明するための相互行為上のスペースを作ろうとし, B も 02 でそれを促す. そして 03 からは E による回答としての例の説明が始まる. E は, まず「スプーンと味噌汁」という単語をあげるが, それに対する B の応答はなく, 0.8 秒の沈黙となる. ここでの制度的な相互行為の規範とし

て,Eが2人で構築すべき回答の候補を提示し,Bがそれを理解したならば十分に理解したという認識的スタンス(Heritage, 2012)を相手に示すことと,その回答が妥当かどうかの評価が求められる.しかし,06 で B からのそのような応答が得られなかったため,E は再びターンを取り,07〜14 で,海外でスープはスプーンで食べられることを説明する.B はそこまでの説明を聞き,15 で「あ::,」と知識状態の変化を示したうえで,17 で「海外」に対する文化として「日本」を提示し,そこではスプーンではなく箸が用いられると,E の説明の続きを予測して述べ,E が B に提示した回答を理解したという認識的スタンスを示そうとする(Lerner, 1996).しかし,それは,その直後の 18 で E 自身が自分でも説明の続きを述べることによって一部を訂正され,B もその訂正への理解を示す.その後の 26 まではその「日本では場合による」という訂正部分の E による説明である.ここまででEは,問いへの回答を述べ終えており,Eがそれを理解したのであれば,続く 27 の位置ではその回答を B がどう評価するのかが示されることが期待される.しかし,B の応答は「は:い」と答えるにとどまっているため,E はそれをさらなる説明の継続を促していると捉え(Stivers, 2008),29 から 32 で教科書の例と同じように,他の文化に自分の文化と同じものを見つけたために起こった「間違いの具体的な事例」を示し,回答の妥当性を高める.その応答として B は 35 の「そういうことか」で E のここまでの説明を理解したというスタンス,さらに 31,33,37 では笑いで面白いと感じているというスタンスを示してはいるが,それ以上の発話はなく,38 で 1.4 秒の沈黙となる.

抜粋 1-2

39	E:	おもしろいでしょ?
40	B:	台湾の吉野家はついてない
41	E:	あ::ちかい
42	B:	はい
43	E:	ちがい(があったかな)
44	B:	はいhhhhh
45		(0.8)

抜粋 1-1 で期待する反応を得られなかった E は,39 で「おもしろいでしょ?」と確認することによって,B に発話のスロットを与え,さらなる反応を求める.そこで B が行ったことは,E が提示した他の文化に自分の文化と同じものを見つけたために起こった「間違いの事例」(ソウルの吉野家ではスプーンがついているという事例)に対し,海外でも味噌汁にスプーンを使わないという「間違っていない事例」を提示するということであった.この 40 の B の応答は,即座にためらいなくなされており,非同意を示す場合に見られる特徴(Sacks, 1987)が全く見られないことを考えると,39 の E の「おもしろいでしょ?」という確認の要求に対して非同意を示すものではないと考えられる.さらに,もし,ソウルの吉野家ではスプーンがついてくるという話を,日常会話の中で聞いたならば,E の「台湾の吉野家はついてない」という応答は E が提示したソウルの吉野家の事例を理解したという認識的スタンスを示す応答として適切なものと捉えられるだろう.しかし,これは,2人で一つの問題について考えるという制度的場面での会話である.抜粋1-1の29〜32が一旦回答の説明を終えたあと,肯定的な評価を得られなかったために提示された回答の妥当性を高めるための事例であったことを考えると,ここでは E が提示した例の回答としての評価を含む認識的スタンスの提示が期待された.しかし,40 の B の発話はそのようには理解できない.ともすると,E の提示した事例に対して例外的な事例の提示となっており,否定的な評価と受け取れなくもない.提示した回答への期待する評価の得られなかった E は次の抜粋 1-3 で知り合いの日本人が味噌汁をスプーンで食べることをどう評価したかを紹介し,自身の回答としての妥当性をさらに高めようとする.

抜粋 1-3

46	E:	だだだ(だから)僕はシンガポールで:,
47		あ:え:っと友だちの:,日本人の友だちは:, すごくびっくりした
48		(0.4)
49	B:	うん
50	E:	なぜそのスプーンで(0.7)食べるの?
51	B:	あ::ま:ね:スープと言えばスプーンを使うみたいな
52	E:	そ::
53		(0.8)
54	B:	でも日本もときどきラーメンのときも:レンゲ
55		(1.0)
56		スプーンと言うけどでも彼はレンゲという

57　E:　あ:::じゃ長いスプーンな::
58　B:　う::ん
59　E:　そ::ね(.)う::んでも(.)これはう::ん(.)だいたい(.)う:ん同じのだいたい同じね
60　(1.9)
61　E:　と:::(0.8)または:,その::(1.3)ラーーラーメンのたっ
62　B:　あ::食べ方

Bからの評価が得られないEは46から知り合いの日本人の評価を提示することで,自身が提示した例の妥当性を補強している.51ではBもEが示したような間違いがなぜ起こるのかを説明し,Eが示した例を理解したことを示している.そして52でEもそれに同調している.しかし,ここでもやはりBからの回答としての妥当性に対する評価は得られないまま,54からBが「でも」という逆説の接続詞を使い,抜粋2と同様に,Eが挙げた事例に対して例外的な事例を提示する.それに対し,Eは59で異論を唱えかけつつも,その後は続けず,「だいたい同じね」とEの回答の説明とそれに対するBの応答という一連の連鎖を終わらせ,回答候補としての他の例を挙げ始めている.しかしながら,この文脈から何と何がだいたい同じと言えるのかは明らかではなく,59で異論を唱えようとしていたこと,「だいたい」と完全に同じではないと示唆していることからも,EがBの応答に満足していないことが窺える.結局,Eが提示したこの回答については妥当かどうかを検討されることなく,相互行為上,回答としての共通の理解が築かれないまま,別の「ラーメンの食べ方」に関する例の説明へと移っていった.

5. 結語

抜粋1-1の17,抜粋1-3の51などのBの応答を見る限り,Bはここで回答としてどのような例を挙げなければならないかは理解しており,Eの挙げた例についての説明も理解している.さらに,Eの考えた回答はここで構築すべき回答として妥当なものであった.それにもかかわらず,なぜ,BとEの共通の理解が築かれなかったのか.分析の結果,学習者Eが期待するここでの制度性に志向した認識的スタンスの示し方と,実際にBが示した認識的スタンスの間にズレがあり,そのズレが埋められなかったために共通の理解が築かれなかったことが明らかになった.

参考文献

Heritage, John (2012). The Epistemic Engine: Sequence Organization and Territories of Knowledge. *Research on Language and Social Interaction*, 45(1), 30-52.

Heritage, John, & Clayman, Steven (2010). *Talk in action: Interactions, identities, and institutions*. Maiden, MA: Wiley-Blackwell.

久次優子 (2019). ピア・リーディングにおける成員カテゴリー化の実践:なぜ教師の期待する対話が行われなかったのか 言語文化共同研究プロジェクト, 2018, pp.41-50.

池田玲子・舘岡洋子 (2007). ピア・ラーニング入門 創造的な学びのデザインのために ひつじ書房

Lerner, Gene H. (1996). On the ''semi-permeable'' character of grammatical units in conversation: conditional entry into the turn space of another speaker. In Ochs, Elinor, Schegloff, Emanuel A., & Thompson, Sandra A. (Eds.), *Interaction and Grammar*, pp.238- 276. Cambridge University Press, Cambridge.

岡田悠佑 (2015). アイデンティティによる尺度化:言語教師の定式化手続きの会話分析研究 JALT Journal, 37, 147-170.

奥田純子 (監) (2013). 読む力 中上級 竹田悦子・久次優子・丸山友子・八塚祥江・尾上正紀・矢田まり子 (編) くろしお出版

大島弥生 (2009). 語の選択支援の場としてピア・レスポンスの可能性を考える 日本語教育, 140, 15-25.

Sacks, Harvey. (1987). On the Preferences for Agreement and Contiguity in Sequences in Conversation. In Button, Graham & Lee, John R. E. (eds.), *Talk and Social Organisation*, pp.54-69. Clevedon: Multilingual Matters.

Stivers, Tanya. (2008). Stance, Alignment, and Affiliation during Storytelling: When Nodding Is a Token of Affiliation. *Research on Language and Social Interaction*, 41, 31-57.

鈴木孝雄 (1973). ことばと文化 岩波新書

義永美央子 (2017). 第7章 日本語教育におけるピア・ラーニングの意義と課題- メタ・エスノグラフィーによる質的研究の統合 柳町智治・岡田みさを(編) インタラクションと学習, pp.149-173. ひつじ書房

インタビューにおける応答追求場面での主観的尺度によるスタンスの示し方
ー労働条件の受容に関する質問に対する（元）日本語教師の回答からー

勝部　三奈子(大阪大学大学院生)

1. はじめに

調査を目的とする半構造化インタビューにおいて，調査者の期待するような応答が得られなかった場合，調査者は自らの期待する応答を得るべく，被調査者の前の応答を資源として用いながら再度応答を追求する場面がしばしばある(Prior, 2016)．本研究の目的は，筆者が日本語学校の非常勤の日本語教師に「授業準備に対して報酬が与えられていないこと」というデリケートなトピックに関して応答を追求している場面を取り上げ，インタビューの参加者双方に適切とみなされる応答がどのように構築されるかを「再格付け(regrading: Bilmes, 2019)」に焦点を当てて記述することである．

2. 先行研究

相互行為場面において，行為を達成するためにある特定の一つの定式がなぜ選択されたのかという定式化(formulation)については，会話分析においてすでに数多くの研究がなされている(Pomerantz, 1986; Bilmes, 2011; Deppermann, 2011)．その定式化の中でも，1 つの対象に対して 1 つの表現がある尺度の中で位置付けられた後に，2 つ目の表現がその尺度の別の場所に位置付けられる「再格付け」の分析は，連鎖の中の意味構築のプロセスや、語句そのものの含意や発話の機能の解明への新たな手がかりとして，近年多くの研究がなされている(Bilmes, 2019)．再格付けに用いられる尺度には様々なものがあるが，例えば岡田(2015)では，日本の大学の教室談話場面において出席率が悪いことを怪我のせいにする学生に対して，自らも怪我をしている教師が学生と教師の「年齢差」に基づく「怪我の回復速度」という尺度を用いて，自らを回復速度が遅い方に，学生を回復速度の速い方に位置づけることによって，出席率の悪さを怪我のせいにしないようにという注意を効果的に達成していることを明らかにしている．また Prior(2016)では，カナダのベトナム系移民が職場いじめについて語るインタビューの場面を分析し，インタビュアーやインタビュイーが「いじめの程度」,「暴力性」などの様々な尺度を用いることによって，どのようにその出来事に対するスタンスが構築されていくかを明らかにしている．本研究は日本語学校の非常勤講師に授業準備という時間外労働に報酬が支払われないことについての応答追求する場面を分析するが，先行研究にならい，その場面でどのような尺度が用いられており，それが相互行為の達成にどのようにかかわっているか，その尺度によってその場の意味がどのように構築されているかを分析する．

3. データと方法

ここではまず分析するデータの背景である国内の日本語教師の労働条件の状況について述べる．文化庁の平成 30 年度の報告では，法務省告示機関，いわゆる「日本語学校」の日本語教師[1]数は 10,503 人で，その中の約 7〜8 割が非常勤講師であるとされている．非常勤講師への報酬は学校によって違いはあるが，概ね授業を実施した教授活動にのみ時給もしくは分給が支払われる．そのほかの授業準備や進路指導，面接などは時間外労働として見なされることが多い．これらの時間外労働には多くの学校で手当が出るものの，それらへの従事時間に見合う金額を支払われることは少なく，多くの非常勤講師がそのことについて不満を持っていると考えられている．ゆえに日本語学校の非常勤講師は早期の離職率も高いが，一方で長年続けているベテランの非常勤講師が多数存在することも事実である．続けているということは，非常勤講師たちはなんらかの合理性をもって労働条件を受容していると考えられるが，不合理な労働条件が客観的事実としては明白であることによって，インタビューでこのことを質問することは，非常にデリケートな問題として取り扱われることになる．

本研究に用いるデータは日本語学校の非常勤日本語教師/元日本語教師に行った 1 対 1 のインタビュー3 組，2 対 1 フォ

1 日本語教育に携わる人材は多様だが，文化庁文化審議会国語分科会(2019)『日本語教育人材の養成・研修の在り方(報告)』では「日本語学習者に直接日本語を指導する者」を「日本語教師」として分類している．

ーカス・グループ2組(各約90分，計約450分)の録音・録画データである．この当時[2]の研究目的は，不合理な条件の中でも非常勤日本語教師を長年続けるのはなぜかを探ることであり，いずれも調査者(筆者)が「非常勤講師を続けている/やめた理由は何か」「専任講師になりたいと思ったことはないか」など約8項目を対象者に尋ねている．なお対象者は全員，調査者の元同僚である[3]．本研究では会話分析の手法を用いてこれらの録音・録画データの文字化を行い，その中で労働条件の受容についての応答追求とそれに対する応答の中でそれぞれどのような再格付けが行われているかに焦点を当てて分析した．

4. 分析

下記には日本語教師歴15年以上の非常勤講師2名(いずれも女性，インタビュー当時50代後半〜60代)に対して筆者が行なった1対1のインタビューにおける応答追求とそれに対する応答場面を記述する．(以下インタビュアー=IR/抜粋1インタビュイー=IE1/抜粋2インタビュイー=IE2)

4.1「好きっていうかおもしろい」

この抜粋1-1の直前にはIE1が親の介護で義務的に家にいたが，家にいる時間が長いからこそ好きに本を読んだり資料を整理することができ，またそれが授業準備に結びつけられていたという趣旨のことを語っている．下記の抜粋はその直後の場面で，IRはこの語りを無報酬の時間外労働というインタビュートピックの材料として取り扱い，質問を構成している．

[抜粋1-1]（インタビュー開始から45分後）（以下インタビュアー=IR/インタビュイー=IE1）

1. IR : でもなんか:,(0.3):>ほんと<それって(.)なかなかお金にならないじゃないですか:,
2. それに対してあんまり(.)別にいっかって感じですか?°
3. (1.4)
4. IR : >要するに<準備:すごい時間かかるじゃないです[か:,
5. IE1: [うん.
6. (0.3)
7. IE1:で[ももしかしたら:,
8. IR : [もう
9. IR :う:ん.
10. (1.5)
11. IE1:そうでしょ?>だから結局<(.)じゃあ分給にしたらいくらになるんだ
12. [時給にしたら 何-んなるんだっていうの[を何度も思ったことあるけど:,
13. IR :[>そそそそそそ< [う:ん.
14. IR :う:ん.
15. (1.6)
16. IE1:でもなんかs-(0.3)そうゆうふうに:.(0.9)やること好↑きだったし:,そうゆう
17. [なんか準備したりすることとかが好きだったし:,
18. IR :[う ん う ん う ん う ん(.)う ん う ん う ん.
19. IE1:.hそれがうまく授業にいかせたりする[とす↑ごく(.)喜びでもあったから:,
20. IR : [うんうんう んうん(.)そうですね:

1行目から4行目にかけてIRは授業準備に報酬がでないことについて問題にならないかを尋ねている．この質問は「じゃないですか:,」と強調を伴って発話されていることから，質問という形を取りながらも，IR自身はそのことに対して否定的見解を主張していることが理解可能である．これに対してIE1はIRの否定的見解に同意しつつ（11,12行目)も，16行目に「でも」を用いて反論を展開することを予示する．16行目から19行目にかけての応答は，IEは授業準備やそれを授業に生かすことへのスタンスを「好き」「喜び」という主観的な尺度を用いて示している．割愛した80行の間ではIE1は再度介護の話に紐付けつつ，介護生活の中で行う授業準備のどこに「好き」や「喜び」があるのかを詳細化(Bilmes, 2011)する．次の抜粋1-2の100行目の「そっか::」というIRの発話はそれに対する反応である．

[抜粋1-2](抜粋1-1から80行省略)

100. IR :そっか::
101. (0.9)
102. IR :>なんかでも<(.)そうゆう準備って:好きじゃないと続かない[んじゃない
103. IE1: [うんうん.=
104. IR :=( )思います:?[° 先 生 >なんか< °

2 本稿のデータは2016年3月に収録した．

3 筆者は2002年から2010年まで関東にある日本語学校で非常勤講師をしており，調査協力者たちとともに働いていた．調査当時筆者は修士課程の1年生であり，日本語教師はしていなかった．

105. IE1:　　[うんうん.
106. IE1:好きじゃないと:ってゆうか:(.)う:ん.
107.　(1.1)
108. IE1:そうね>な[ん か<(.)好+きってゆか(0.3)面白い+なって思えるかどうかだと=
109. IR :　　[う:ん.
110. IE1:=[思うのね,う:んう:んう:ん.
111. IR :[あなるほどう:んう:んう:んう:ん.

この100行目の「そっか::」という発話は，これまでに行われてきた語りになんらかのスタンスを示すものではなく，単なる情報の受け取りとして行われている．すなわちそれまでの語りがIRの期待する応答だったかどうかは示されていない．むしろ，一旦20行目(抜粋1)で終わったかに見えたトピックが，100行目の「そっか::」の後，0.9秒の沈黙を挟んで「>なんかでも<」と反論を投射する言葉から始まる質問によって再度やり直されていることからは，IRが応答としては不十分であるとみなしており，応答を追求していると理解できる．ここではIE1が最初の質問に対して行なった応答(17行目)の中の「好き」という定式を再利用して仮定疑問の形で質問が行われる．IE1はそれに対してこれまでの「好き」の代わりに「おもしろい」と，授業準備へのスタンスを別の定式に置き換えることによって応答が行われ，それは111行目でIRに親和的なスタンスで受け止められている．この抜粋1の一連のやりとりを「再格付け」という視点で見てみると，IRの2回目の質問は，1回目の質問を「一般性」という尺度において格上げした形で質問として組み立て直していると考えられる．それは1回目の質問がIE1個人に当てられているのに対して，2回目の質問は「好きじゃないと続かない(んじゃないか)」(102行目)と「〜と〜」という一般条件を表す表現を用いて非常勤講師一般に対して訊くものとしてデザインされているからだ．これに対して，IE1も「好き」という個人的嗜好の度合いの強い表現ではなく，「面白い」という授業準備そのものを形容することで，自らの応答の一般性を格上げして応答を構築していた．

4.2 「ただただおもしろかった」

下記の抜粋2[4]はインタビュー開始後43分後の場面である。抜粋2-1に至るまで、インタビュイー(以下IE2)は現在の勤務校での待遇の良さを挙げながら，時間外の労働についても十分に報酬が支払われるべきだと考えており，それは前からずっと考えていたことだという趣旨の話を行なっている．それに対してインタビュアー(以下IR)は前勤務校(約10年間勤務)では経済的報酬が少ないなかで、なぜ仕事を続けようと思ったのかを聞いている。

[抜粋2-1]（インタビュー開始から43分後）
1.　IR :.hでも(.)まペイもちょっと少ないし:
2.　IE2:うん[ペイも(.)うんでもね:う:ん
3.　IR :　[でも:(.)でも続けようと
4.　(0.3)
5.　IR :思った
6.　(0.5)
7.　IR :のは
8.　(0.8)
9.　IR :なぜ.
10.　(1.2)
11.　IE2:°おもしろかったから°=
12.　IR :=°おもしろかったから°(.)[ふ::ん.
13.　IE2:　[ただ
14.　IR :ただただ.
15.　IE2:ただただおもしろか(h)っ(h)[た(h)
16.　IR :　[ふ:んえ何がおもしろ°いの°
17.　(0.9)
18.　IE2:いろんな人と(.)[出会えるところがおもし[ろかったし[:
19.　IR :　[う::ん.　[あ:　[うんうん.

この抜粋の直前の，時間外労働について十分に報酬が支払われるべきだと前からずっと考えていたという応答は，それについて十分に支払ってこなかった前勤務校でも10年働いていた事実と矛盾する．1行目から9行目にかけてはIRはこれからの質問がそれに対するチャレンジであることを「でも」という接続詞(1行目)や，言い淀みを用いて(4,6,8行目)予示しつつ，この矛盾に対する応答を得るべく質問を組み立てている．その質問に対して1.2秒の長い沈黙の後，IE2はささやき声で「おもしろい」という尺度を持ち出す．さらにそれに「ただただおもしろか(h)っ(h)た(h)」と極端な定式化を行うことによって「おもしろい」の程度を格上げし回答を行なっている．しかしこの回答はIRに「ふ:ん」となんらかのスタンスを示すことなしに単に情報として受け取られたあと，「おもしろい」とは具体的にどのようなことなのか詳細化を促される．0.9秒の沈黙の後，「おもしろい」の具体的な内容を詳細化し始める．

4 勝部(2019)より一部抜粋.

[抜粋2-2] (抜粋2-1から16行削除)

36.IR :う:ん.でもそこす↑ごい大変なとこでしょ,[それこ↑そ:.h
37.IE2:　　[そ:そそ(.)そこができれば
38.IR :ないじゃん.お金
39.　(.3)
40.IR :そこに
41.　(.3)
42.IR :払われる[hペ(h)イ(h)がhaha.
43.IE2:　　[そうそうそれはもう自分のホビーですよね,(.)楽[しみ
44.IR :　　[あ**ホビー**?
45.IE2:う:ん.(.)huhu
46.IR :すばらしい考え方だ(.)[huhuhuhu(.)hu
47.IE2:　　[huhuhuhuhuだいろんなことをこう:
48.IR :うん.
49.　(.2)
50.IE2:これやってみたらどうかなと[か:どういう反応があるかなとか:
51.IR :　　[うんうんうんうんうんうんうん.

割愛した16行の間に，IE2は「おもしろい」とはどのようなことかを，どうやったら学習者にわかるように教えてあげられるか工夫をするところであると詳細化をしている．しかしそれに対してIRは沈黙や笑いを挟んでネガティブさを緩和しつつも否定的な見解を示す．この否定的見解は1回目の質問で「ペイが少ない」(抜粋1の1行目)とされていた授業準備を「ないじゃん.お金」「そこに」「払われるペイが」(36,38,40,42行目)と「経済的報酬の多寡」という尺度において極限である「ない」に再格付けすることによって行われている．それに対してIEの応答はIEはこの見解に対して「そうそう」と同意した上で，その教えるための工夫を「自分のホビー」/「楽しみ」と，「おもしろい」と再定式化する．この再定式化は，IRの行なった再格付けに志向する形で行われていると考えられる．授業準備を経済的報酬の発生するものではなく，むしろ自分が金銭を投資することもある「ホビー」や「楽しみ」に再定式化することによって，授業準備を「経済的報酬の多寡」という尺度において，応答追求でインタビュアーが位置付けた「ない」という位置に置いて応答を行なっている．それに対してIRは「あ**ホビー**?」と驚きをもって繰り返しつつ，「すばらしい考え方だ」と肯定的なスタンスを示している．

5. 議論とまとめ

本研究ではインタビューにおける応答追求とそれに対する応答がどのようになされているかを再格付けという観点から分析した．上記の分析は連鎖の中でどのような尺度が用いられ，どのようにそれが相互行為の達成に関わるかを詳述したものである．この再格付けを相互行為上どのような役割を果たしているかという観点からみてみると，インタビュアーの応答追求での再格付けは，最初の質問よりもインタビュアーの否定的見解，チャレンジの度合いを高める役割を果たしていると考えられる．一方，インタビュイーの応答では，インタビュアーの示す尺度に志向しながらも，「面白い」「ホビー」「楽しみ」といった肯定的な表現を用いていることがわかる．このことは，先の授業準備へのやりがいの語りをあくまでも「授業準備への経済的報酬が少ない」というインタビュートピックに紐づけようとするインタビュアーへの抵抗であるとも受け取れる．上記の分析からはインタビュアーの参加者がインタビュートピックに基本的には志向しつつも，実はその中でそれぞれのそのトピックに対するスタンスを示したり，またそれを示すことによって相手に同調したり抵抗したりしつつ回答を構築していくことが明らかになったといえよう．この構築の様相をつぶさに観察していくことは，今後インタビューの応答追求と応答の特定のやり方の解明とともに，そのトピックに対するインタビュー参加者の理解も明らかにできると考えられる．

6. 参考文献

Bilmes, J. (2011). Occasioned Semantics: A Systematic Approach to Meaning in Talk. *Human Studies*, **34**, 129-153.

Bilmes, J. (2019). Regrading as a conversational practice. *Journal of Pragmatics*, **150**, 80-91.

Deppermann, A. (2011). The study of formulations as a key to an interactional semantics. *Human studies*, **34**, 115-128.

勝部三奈子 (2019). 時間外労働の「ホビー」というカテゴリー化: 日本語教師へのインタビューにおける成員カテゴリー化実践. 言語文化共同研究プロジェクト2018, 31-40.

Pomerantz, A. (1986). Extreme case formulations: A way of legitimizing claims. *Human studies*, **9**(2-3), 219-229.

Prior, M. T. (2016). Formulating and scaling emotionality in L2 qualitative research interviews. In M.T. Prior & G. Kasper(Eds.), *Emotion in multilingual interaction* (pp.203-236). Amsterdam: Benjamins.

日本語オノマトペは国際化できるか

ー音象徴の実験研究からー

篠原和子(東京農工大学)

1. はじめに

日本語はオノマトペが豊富な言語のひとつである．ただしオノマトペが豊富な「唯一の」言語ではないし，オノマトペが「圧倒的に豊富な」言語でもないのだが，オノマトペに対する関心・敏感さは，欧米言語話者と比べれば日本語話者の特徴的傾向と言えるかもしれない．本発表では，オノマトペは国際化「すべきか」ではなく「できるか」に焦点をあてる．オノマトペの感覚的なわかりやすさを支えている「音象徴性」を中心に，他言語話者による直観的理解の可能性，あるいは困難さについて，実験研究をもとに考える．

2. 背景と目的

2.1 言語記号の恣意性と有契性

Saussure(1916)は言語記号の第 1 特性として「恣意性」を挙げた．これには(1)能記（記号の音声的側面）と所記（記号の概念的側面）の結びつきが言語共同体の慣習に基づいており言語外の動機づけがないこと，(2)複数の言語記号による世界の分節の仕方に言語外の動機づけがないこと，の 2 側面がある．特に(1)については，Saussure はオノマトペを例外として枠外に置き，かつ現実の音声を模倣しているとはいえ形式面では言語間で違いがあることを指摘して，オノマトペといえども恣意的側面があると論じている．

一方，(1)，(2)ともに，恣意性とは逆の傾向，すなわち言語外の（特に身体的な）動機づけをもつ言語現象があるという議論が，認知心理学や言語学から提案されてきた．特に(2)については，Berlin and Kay(1969)や Kay and McDaniel(1978)の基本色彩語研究，Berlin et al.(1973)，Brown (1958)，Rosch et al. (1976)らの基本レベルカテゴリーの研究などが認知言語学の草創期から取り上げられてきた（Lakoff, 1987）．また，(1)の反例すなわち言語音と意味の非恣意的（有契的・類像的）関係性は，「音象徴」と呼ばれる現象を中心に盛んに研究されている（Hinton, Nichols, & Ohara, 2006）．音象徴は，Saussure 後，比較的早い時期から研究されており，特に Sapir(1929)の実験や，Köhler (1929/1947)の図形形状の音象徴研究が知られている（図 1a）．さらに，Berlin (2006) が報告しているように，実在する語彙にみられる音の分布がランダムではなく，一定の音象徴的イメージと合致するような偏りが観察される場合があることも，(1)の恣意性への反例となる．

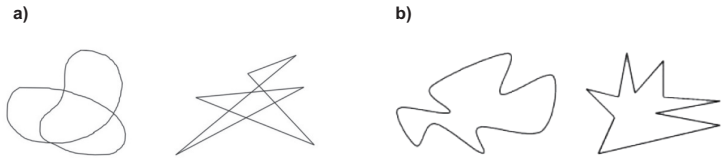


図１．図形と言語音の非恣意的関係
a) ″maluma″ vs. ″takete″ (Köhler, 1929/1947)；
b) ″bouba″ vs. ″kiki″ (Ramachandran & Hubbard, 2001)

音象徴は，言語の違いをこえた人間に共通の直観に基づくこと，またこれには調音動作や音響知覚など言語システム外の身体的動機づけがあることが，これまでくり返し論じられてきた(篠原・秋田, 2019; 秋田, 2013)．

21 世紀初頭に Ramachandran & Hubbard(2001)が指摘した「ブーバ・キキ効果」（図 1b）が火付け役となり，脳神経学，認知科学，人工知能，ロボット工学など多くの分野に研究が広がった（篠原・宇野，2013）．さらに近年では，スポーツ科学や食品工学などの分野でも応用研究が行われている（Shinohara, Uno, Kobayashi, & Odake, 2016; Shinohara, Yamauchi, Kawahara, & Tanaka, 2017; Shinohara & Tanaka, 2017; Yamauchi et al, 2019）．これらの研究では，音象徴的特徴を強くもつ語彙群としてオノマトペへの注目が集まっている．

2.2 他言語話者によるオノマトペの意味予測問題

Saussure が指摘したように，オノマトペは少なくとも幾分かは恣意的側面をもつ．しかし近年，認知心理学などの厳密な統制下での実験的研究では，知らないはずの他言語のオノマトペの意味を誤差の範囲を超えて正しく推測できるなど，音象徴的性質が意味理解に寄与している可能性が示唆されている（Lockwood et al, 2016）．

音象徴は身体的動機づけをもつと考えられるため，オノマトペの音象徴的意味はある程度人間に共通の直観を引き出すと予測される．発表者はこの方向で音象徴の言語普遍的側面を実験により研究してきた．一方，研究の過程で，同種の子音から感じ取るイメージが言語によって異なる（またはズレる）可能性があることがわかってきた．たとえば，食品の食感について「パリパリ」と「バリバリ」ではどちらが「硬い」と感じるかと問うと，日本語話者はほぼ例外なく「バリバリ」の方が硬いと答えるが，英語話者は逆に「パリパリ」の方が硬いと感じる傾向がある（Shinohara et al, 2017）．

本発表では，この２点，すなわち音象徴の言語普遍的側面と，言語によって異なる側面について，これまでの実験研究および進行中のプロジェクトを概観しつつ，音象徴から見たオノマトペの意味予測問題を考える．

3. 音象徴の実験研究

3.1 阻害音と共鳴音

音象徴について，Sapir（1929）の先駆的研究は主に母音を扱っていたが，本発表で取り上げるのは子音の音象徴である．上記の Köhler（1929/1947）の研究は，[m, l]などの共鳴音（鼻音，側音，接近音を含む）と[t,k]などの阻害音（破裂音，破擦音，摩擦音を含む）によって喚起される図形の形のイメージ対立であった．その後の多くの追実験により，形に関するこの音象徴傾向はほぼ普遍的と考えられている．

阻害音と共鳴音の対立が生む音象徴現象は，形のような視覚イメージのほかに，「硬い vs.柔らかい」などの触覚イメージ（篠原 et al, 2007），「男性的 vs.女性的」などのジェンダーイメージ（Shinohara & Kawahara, 2013; 上村, 1965），「近寄りづらい厳しそうな性格 vs.近寄りやすいやさしそうな性格」のようなパーソナリティの印象（Kawahara et al, 2015; Shinohara & Kawahara, 2013），「突然始まる感情 vs.ゆるやかに始まる感情」（たとえば，驚きやショック vs.うれしさや悲しさ等）などの内面的状態（Kawahara & Shinohara, 2012）といった，様々な知覚モードやレベルのイメージに関わることがわかっている．いずれも日本語だけでなく英語を含む他言語でも確認されており，逆の対応関係が明らかに優勢となるような例は，これまで報告されていない．

3.2 有声阻害音と無声阻害音

子音のうち阻害音には有声と無声の対立があるが（[b, d, g, z] vs. [p, t, k, s]など），この対立についても多くの先行研究が行われてきた．有声阻害音のほうが無声阻害音よりも「大きい」「暗い」「硬い」「重い」「汚い」といったイメージを喚起しやすいことがわかっている（Kawahara & Shinohara, 2016; 佐藤, 2010; Kumagai et al, 2018; Kawahara et al, 2018; Kawahara et al, 2008）．そのほか，アニメーションやゲームのキャラクター名では有声阻害音の方が無声阻害音よりも「悪役」に用いられる傾向が強いことが確認されている（Hosokawa et al, 2018）．これらの多くは日本語だけでなく複数の言語で共通の傾向がみられる．

4. 日本語オノマトペの国際化問題

日本語オノマトペについて，異なる言語間での意味の予測可能性を阻害する要因として，(1)オノマトペの意味の文化負荷性，(2)音象徴の言語間差異，の 2 点が少なくとも考えられる．

4.1 オノマトペの意味の文化負荷性

宇野 et al.(to appear)は，食感を表す日本語オノマトペ（バリバリ，パリパリ，サクサクなど）が米菓の硬

さをどう表すかを実験により調査し，煎餅のサンプルを実食しているときと，実際は食べていないが食べていることを想像しているときとでは，用いられるオノマトペが異なる分布を示すことを明らかにした．これは，想像時には，「煎餅」とはどういうものかという文化的・慣習的イメージが想起されやすいのに対し，実食時には，そのときの口内知覚に意識が向き，類像性の高い音象徴的感覚が喚起されやすいためだと考えられる．日本人が熟知している食品の食感などを表すオノマトペが談話で用いられる際には，実食時よりも文化負荷性が強くなることが予想される．食品以外の領域にも同様の傾向がみられる可能性がある．

4.2 音象徴の言語間差異

2.2で述べたように，子音の有声性による「硬さ」のイメージ喚起の傾向が日本語と英語で逆になる現象が発見されている（Shinohara et al, 2017）．日本語話者は有声阻害音（[b, d, g]など）の方が無声阻害音（[p, t, k]など）よりも「硬い」と感じる傾向があるが，英語話者ではその逆になる．この原因は現在調査中だが，英語の[p]が日本語よりも強い帯気性をもち，呼気噴出のエネルギーが強いためではないかと考えられる．このように，音韻論的には同種の音でも調音や音響など音声学的な特性が異なるために，言語間でイメージ喚起に差異が生じるのではないかと予測される．つまり，これまで音象徴の普遍性の根拠と考えられてきた身体的動機づけそのものを詳細にみると，その一部に言語相対性がありうるということである．

5. まとめと展望

以上のように，音象徴現象には，普遍的側面と言語により異なる面とが併存する．オノマトペは通常の語彙よりも知覚内容に近い意味をもち，身体的動機づけがあるため，異なる言語間でも直観的にわかりやすい．だが，日本語オノマトペが外国語話者にすんなり理解されるとは限らない．なぜなら状況やコンテクストによってオノマトペ使用には文化負荷性が伴い，音象徴にも少なくとも一部に言語間差異がみられるためである．これらは，日本語オノマトペが他の言語の話者に直観的に理解されるかどうかに影響するため，その詳細を明らかにしてゆく必要がある．

近年，国外での日本語学習の盛り上がりの要因のひとつに，日本のマンガやアニメーションの世界的人気があるが，これらのメディアでは，オノマトペが多用される傾向があるうえ，新奇で独創的なオノマトペ使用も多くみられる（夏目, 2013）．国外のファンによる日本のマンガやアニメーションの受容と理解，オノマトペ翻訳の問題など，社会言語学や言語コミュニケーションに関連する研究課題は多い．また，日本語の食感オノマトペが他の言語の話者にどのように理解されうるかの研究を通じ，海外における日本の食品の受容拡大に貢献することを目指す研究も行われている（小竹, 2018）．このようなオノマトペ研究の基盤として，今後さらに音象徴の言語間比較研究の発展が望まれる．

謝辞　本稿の内容の多くは，これまで共同研究として実施してきた実験研究，および現在進行中のプロジェクトをもとにしたものである．共同研究者諸氏に，この場を借りて感謝する．

参考文献

秋田喜美（2013）．オノマトペ・音象徴の研究史　篠原和子・宇野良子（編）pp.333－364.

Berlin, B.(2006).The first congress of ethonozoological nomenclature. Journal of Royal Anthropological Institution, 12: 23－44.

Berlin, B., Breedlove, D., & Raven, P. (1973). General principles of classification and nomenclature in folk biology. American Anthropologist, 75(1): 214－242.

Brown, R. (1958). How shall a thing be called? Psychological Review, 65: 14－21.

Hinton, L., Nichols, J., & Ohala, J. (2006). Sound symbolism (2nd ed.). Cambridge University Press.

Hosokawa, Y., Atsumi, N., Uno, R., & Shinohara, K. (2018). Evil or not? Sound symbolism in Pokémon and Disney character names. Presentation at The First Conference on Pokémonastics. Keio University, Japan.

Kay, P., & McDaniel, C. K. (1978). The linguistic significance of the meanings of basic color terms. Language, 54(3): 610－646.

Kawahara, S. & Shinohara, K. (2012). A tripartite trans-modal relationship between sounds, shapes and

emotions: A case of abrupt modulation. The proceedings of the 34th annual meeting of Cognitive Science Society, pp.569－574.
Kawahara, S., Noto, A., & Kumagai, G. (2018). Sound symbolic patterns in Pokémon names. Phonetica, 75(3): 481－522.
Kawahara, S., Shinohara, K., & Grady, J. (2015). Iconic inferences about personality: From sounds and shapes. In M. Hiraga, W. Herlofsky, K. Shinohara, & K. Akita (Eds.), Iconicity: East meets west. Amsterdam: John Benjamins, pp.57－69.
Kawahara, S., Shinohara, K. & Uchimoto, Y. (2008). A positional effect in sound symbolism: An experimental study. Proceedings of the Japan Cognitive Linguistics Association, 8: 417－427.
Köhler, W. (1929/1947). Gestalt psychology: An introduction to new concepts in modern psychology. New York: Liveright.
Kumagai, G., Uno, R., & Shinohara, K. (2018). The sound-symbolic effect of consonant voicing on the naming of snacks in Japanese: An experimental study. Presentation at Conference on the Language of Japanese Food. York University, Canada.
Lakoff, G. (1987). Women, fire, and dangerous things. University of Chicago Press.
Lockwood, G., Dingemanse, M., & Hagoort, P. (2016). Sound-symbolism boosts novel word learning. Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition, 42(8): 1274－1281.
夏目房之介 (2013). マンガにおけるオノマトペ　篠原・宇野 (編) pp.217－241.
小竹佐知子 (2018). 食感日本語表現の多言語辞書作りー食感表現学習教材セットの創作も目指してー　科学研究費補助金実績報告書.
Ramachandran, V. S. & Hubbard, E.M. (2001). Synesthesia: a window into perception, thought, and language. Journal of Consciousness Studies, 8: 3－34.
Rosch, E., Mervis, C. B., Gray, W. D., Johnson, D. M., & Boyes-Braem, P. (1976). Basic objects in natural categories. Cognitive Psychology, 8: 382－452.
Sapir, E. (1929). A study in phonetic symbolism. Journal of Experimental Psychology, 12: 225－239.
佐藤允彦 (2010). 色彩明度と子音の有声性にみられる音象徴的関係　東京農工大学修士論文.
Saussure, F.de. (1916). Cours de linguistique générale. Paris: Payot.
篠原和子・秋田喜美 (2019) 音象徴・オノマトペと認知言語学　辻幸夫 (編) 認知言語学大事典　朝倉書店 4B-1.
篠原和子・川原繁人・中山晃・松中義大 (2007).　音象徴と身体性　ことばと人間, 6: 1－12.
篠原和子・宇野良子 (編) (2013). オノマトペ研究の射程―近づく音と意味　ひつじ書房.
Shinohara, K., & Kawahara, S. (2013). The sound symbolic nature of Japanese maid names. Proceedings of the 13th Annual Meeting of the Japanese Cognitive Linguistics Association, 13: 183－193.
Shinohara, K., & Kawahara, S. (2016). A cross-linguistic study of sound symbolism: The images of size. Proceedings of the 36th annual meeting of the Berkeley Linguistics Society, pp.396－410.
Shinohara, K., & Tanaka, H. (2017). Sound symbolism beyond size and shape: Acceleration affects sound preferences. Presentation at The 43rd Annual Meeting of Berkeley Linguistics Society. University of California, Berkeley.
Shinohara, K., Uno, R., Kobayashi, F., & Odake, S. (2017). Sound symbolism of food texture: Cross-linguistic differences in hardness. Presentation at The 14th International Cognitive Linguistics Conference. University of Tartu, Estonia.
Shinohara, K., Yamauchi, N., Kawahara, S., & Tanaka, H. (2016). Takete and maluma in action: A cross-modal relationship between gestures and sounds. PLoS ONE, 11(9): e0163525.
上村幸雄 (1965). 音声の表象性について　言語生活 12 月号　筑摩書房 pp.66－70.
Uno, R., Kobayashi, F., Shinohara, K., & Odake, S. (to appear). Analysis of the use of Japanese mimetics in the eating and imagined eating of rice crackers. In K. Toratani (Ed.) Language of Japanese Food: Cognitive Perspectives and Beyond. John Benjamins.
Yamauchi, N., Shinohara, K., Tanaka, H. (2019). Crossmodal association between linguistic sounds and motion imagery: Voicing in obstruents connects with different strengths of motor execution. Perception, 48(6): 530－540.

テレビのスポーツ実況中継におけるカット切り替え後の見どころ候補提案連鎖

劉礫岩(NICT 研究員)

1. はじめに

カーレースのテレビ中継では，しばしば次の断片１のようなシーンが見られる．テレビ画面の映像が予告なく切り替わり，それまでとは別の競技車両が映し出される(図 1→図 2)．その直後に，アナウンサーと解説者は同時に「あっと」と驚く(10,11 行目)．

断片１(2018-01)　アナウンサー：J　解説者：Y，P　　＊「【C】」はカット切り替えが起きたタイミングである

07　Y　　.hh 昨日の( )真逆な::[状態が起きつつある(.)ような気がします=面白そう【C】ですよ.

08　P　　[そうですね：.

09　　(0.4)

10→J　　[↑あ：：：っと RUNUP：！(.)クラッシュ：！

11→Y　　[↑(あ/お)っと：



→【C】→



図１(断片１カット切り替え直前)　　図２(断片１カット切り替え直後)

カーレースは，競技車両が広い競技場に散らばって高速で走行するため，競技中の出来事をテレビの視聴者に見やすい大きさで提供するためには，競技場全体を一望するのではなく，見どころがありそうな車両に焦点を絞って追従して撮影する必要がある．また，多数の競技車両が同時に競争するため，レースの見どころとなる映像も競技場のあちこちに散在しやすい．そのため，断片１のようなカット前後の映像が異なる競技車両を被写体とする切り替えは，レース全体を通して繰り返し生じる．本報告では，このようなカット切り替えの後に生じるアナウンサーと解説者のことばのやりとりを相互行為の視点から考察する．次の断片 2 がその例である．アナウンサーG が 05 行目の発話を始めた直後に，画面が図 3 の映像から図４の映像に切り替わり，その後 G は解説者 Y を名指して，新たに映し出された競技者の１人である「本山」

断片２　アナウンサー：G　解説者：Y，F

05　G　　でそ【C】のうし-(0.5)あっとこちら GT：：500 クラスです..h(え)<本山>(1.0)その後から RAYBRIG=

06→　　=本山も：>由良さん<良いんじゃないですか?[>これ<

07⇒Y　　[いやすごく良いですね：：.

08　　(0.7)

09　G　　早くもギャップを広げているこの[本山です.



→【C】→



図３(断片２カット切り替え直前)　　図４(断片２カット切り替え直後)

選手に対する自身の見方を差し出し，反応を求める(06 行目)．それにY が応じる(07 行目)．G の 06 行目の発話を，暫定的に「見どころ候補の提案」と呼ぶことにする．これまでの実況研究(たとえば岡田, 2002 ; 是永, 2012 ; 劉 & 細馬, 2017)では，このような発話連鎖を対象とした研究は行われていない．そこで本発表では，この発話連鎖を事例分析する．

2. データについて

データとするのは，「Super GT」という日本で行われるカーレースである．出場車両約 40 台がエンジン出力によって「GT500」(約 15 台)と「GT300」(約 25 台)の 2 クラスに分かれ，同時に同じコースを混走し，それぞれのクラス内で順位を争う．実況は，アナウンサー1 人と解説者 2 人計 3 人で行われる．2 人の解説者のうち，1 人はプロレーサー，もう 1 人はレースのエンジニアを本業とする．対象のやりとりを書き起こし，コレクションを作成し，分析した．

3. 分析

問題の発話連鎖を分析するにあたり，まずテレビ画面の映像とカット切り替え自体の性質を考えなくてはならない．テレビ画面に映し出されているのは，同時に走行している約 40 台の競技車両から選び出された数台である．ほかではなく，その数台が選び出されているということは，少なくともその時点においては，ほかの競技車両よりも視聴者に見せるに値するということができる．また映像が切り替わるということは，それまでの映像を断ち切ることでもあり，この意味でも切り替え後の映像は，何らかの意味でレースにとって重要であり，わざわざ視聴者に見せるに値するものと考えられる．実際，断片 1 ではカット切り替え後の映像は，「クラッシュ」という緊急事態であった．であれば，カット切り替えの後，アナウンサーと解説者は映像から見どころを見つけ出すという課題に直面することになる．

カット切り替え後の映像は，2 種類に分類することができる．タイプ 1 は，断片 1 で見たような，見どころが一瞥してすぐに分かるものである．断片 1 の場合は，アナウンサーと解説者はまず「↑あっと」と驚くことによって，切り替え後の映像に反応し，同時に切り替え後の映像の見どころは，ほかの通常走行をしている車両ではなく，イレギュラーな部分であることを示している．次に，アナウンサーが「クラッシュ」という表現によって見どころを定式化している．タイプ 2 は，断片 2 で見たような，一見すると通常の走行シーンに見えるものである．本報告の記述対象となる発話連鎖は，すべてタイプ 2 の後で生じている．だが，タイプ 2 の後に対象の発話連鎖とは異なる特徴を持ったやりとりも観察される．次の断片 3 がその例である．

アナウンサーT が図 5 の映像に映っている車両に言及した後(01 行目)，画面が図 6 の映像に切り替わり，通常走行している 2 台の車両が映し出された．これに対して，T はまず「さあ」という区切りをつける間投詞によって反応し，次に「これ」によって映像内の状況を指し，「立川」選手の車両が先行の車両に迫ってきていると述べる(03 行目)．この発話によって，T は切り替え後の映像をただの走行シーンではなく，「立川」選手が先行車両に迫っているものとして構造化し，視聴者に提示していることが分かる．

断片 3(2010-2)　アナウンサー：T　解説者：Y, L

01　T　　ガライヤを追うのが RX7 谷口．【C】
02　　(2.8)
03→T　　さあそしてこれ迫ってきてますね：ZENT 立川が迫ってきているぞ：
04　　(1.2)
05　Y　　そうですね：.(1.4)
06　　いや：ぼくは：(.)ガァ：と逃げちゃうのかなと思ったら意外と：そんな楽な戦いはしてないですね[：.



図 5(断片 3 カット切り替え直前)

→【C】→

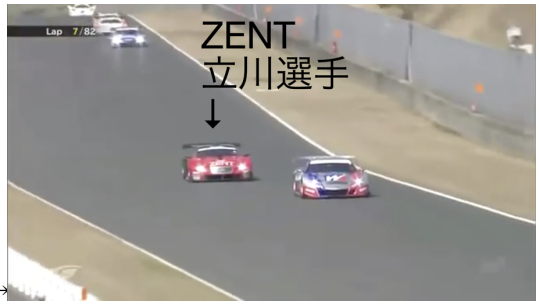


図 6(断片 3 カット切り替え直後)

断片3におけるTの見どころ提示と比較すると，断片2の切り替え直後のアナウンサーGの発話(05行目)が異なる特徴を持っていることが分かる．Gは「あっと」という間投詞を発した後，「こちら」という指示表現によって切り替え後の映像を指しているものの，次に述べたのは映し出された車両のクラス(GT500クラス)，選手名(本山)とチーム名(RAYBRIG)，およびそれらの映像内での配置(その後)である．つまりGは映像の見どころそのものではなく，まず何の映像を見ているかに関する情報をアナウンスしている．見どころに先行してこのような情報提供が行われることは，ほかの事例(4,5)でも見られる．

では断片2では，映像の見どころがどのように特定されたのだろうか．Gは映像内の2人の競技者の1人である「本山」選手に対する「良いんじゃないですか?」という見方を，Yに差し出している(6行目)．評価語「良い」は，すなわち「本山」選手が何らかの意味で優勢であると聞くことができ，これによって，Gは切り替え後の映像の見どころ候補を提案し，それに専門家である解説者Yに対して承認を求めている．実際Yが「いやすごく良いですね」と承認を与えると(07行目)，Gは「早くもギャップを広げているこの本山です」と見どころをアナウンスしている(09行目)．その一方で，この評価は，本山選手のどの部分が，どのように良いかといった詳細を欠き，その意味で「大雑把」ということができる．この特徴によって，解説者は単に承認するだけでなく，むしろ映像に対してより詳しい見方をしているのなら，それを反応で述べることが適切である．この点については，次の断片4を見てみよう．

図7の映像から図8の映像に切り替わると，アナウンサーSはまず映し出された車両のクラス，順位，選手名といった情報提供を行い(3,4行目)，次に，そのうちの1人である「金石年宏選手」が良いという見方をYに差し出す(05行目)．

断片4(2013-1　0:34:59)　アナウンサー：S　解説者：Y，F

01　S　　その【C】後に：,(.)ベンツ GAINER DIXCEL の姿も見えます.
02　　(0.6)
03　S　　sさて:(1.5)トップはGT500:MOTUL AUTECH GTR
04　　.h二番手EPSON HSV .h HSVの隊列三台です=KEIHINがいてRAYBRIG
05→　　これはでも:金石年宏もKEIHINがですね：由良さん，良[いですね:[:.
06⇒Y　　[はい.　　[これは行くでしょうね:.
07⇒　　でも：まあ道上選手(も)よく頑張ってますね.(>これは<)[くる-(.)苦しいと思いますよ.
08　S　　[お-
09　S　　抑える道上：(.)後から金石年宏：(0.3)[このヘアピンは後につくだけです.



図7(断片4カット切り替え直前)

→【C】→



図8(断片4カット切り替え直後)

それに対して，Yはまず「これは行くでしょうね」という「金石選手」に関する予想を述べる(04行目)．これによって，Sの提案した見どころに対して承認を与えるだけでなく，映像により具体的な見方を与えている．そして，Yはさらに「でも：まあ」と逆接し，前を走る「道上選手」について，「よく頑張っている」と述べ，「苦しいと思いますよ」と続ける(05行目)．これによって，Yは現在の映像を，単に「金石選手が優勢」と見るべきだけでなく，「道上選手も苦しいながら頑張っている」という見方を示している．つまりYはSの提案した見どころ候補を承認した上でさらに補足し，専門家としての見方を提供している．それに対して，Sは「抑える道上，後から金石年宏」というふうに，Yの補足を取り入れた定式化を行い，切り替え後の映像の見どころをアナウンスしている(09行目)．このように，見どころ候補の提案が「良い」のような大雑把な評価語であることによって，解説者から専門家としての見方を引き出していることが分かる．

アナウンサーの見どころ候補の提案に対して，解説者は承認以上のことを述べないこともできれば(断片2)，予想を述べたり補足したりすることもできる(断片4)．この意味では，アナウンサーの候補提案は，解説者にとって応答しやすくデザインされている．なぜこのようなデザインがなされているかを考えるために，次の断片5を見てみよう．33行目の末

尾でカットが切り替わり，切り替え後の映像内の 2 台の車両について，アナウンサーJ が 35,37 行目で情報提供を行う．しかし続くはずの見どころ候補の提案を待たずに，38 行目から解説者 P が後追いの「HOPPY が(先行車両)に食らいついている」という見どころを提示し，続いてもう 1 人の解説者 Y も補足する(39 行目)．

断片5(2018-01)　アナウンサー：J　解説者：Y，P
33　J　　これはレクサス勢同士の争いということですね 【C】
34　　(1.5)
35　J　　さあ：,300に画面変わりました.
36　　(1.3)
37　J　　GAINER： TANAX GTR(.)トップそして後からはHOPPY[86：
38　P　　[あ：結構HOPPY食らいついてますね：.
39　Y　　そうですね：.(.)やっぱり小さく回り[ますね　：　：　]

つまり解説者は必ずしもアナウンサーの提案を待っているだけとは限らず，自ら見どころを提示することができる．であれば，アナウンサーが見どころ候補を提案する前に，解説者にも潜在的に見どころを提示する機会があり，それが断片 2 と 4 では利用されなかったということになる．だからこそ，アナウンサーは見どころ候補を提案する際に，解説者の意見の不確実性を高く見積もり，答えやすいよう発話をデザインしていると考えられる．

4. むすび

カット切り替えは，アナウンサーと解説者に映像から見どころを見つけ出し，視聴者に提供するという課題を課す．この課題に対して，見どころ候補提案連鎖はその準備として用いられる．このことは，特に解説者による応答の後の，アナウンサーによる見どころのアナウンスから見やすい．このアナウンスは視聴者を主たる受け手とし，たとえ断片 4 のように補足を受けた場合であっても，それを明示的に解説者に向けて反応するのではなく，暗黙裡にアナウンスに反映しているにすぎない．このような仕方によって，解説者が応答において専門家として述べた意見は，映像の見方として視聴者に屈折されているということもできる(deflect，Clayman & Heritage，2002)．

活動において，アナウンサーが率先して課題に取り掛かっているだけでなく，解説者を名指して明示的に反応を求めたり，解説者の意見を視聴者に屈折させたりできる．これらの特徴は，アナウンサーの司会者的な役割(三宅，2004)に対する志向と見ることができる．しかし解説者も常にアナウンサーの先導を待つのではなく，自己選択によって課題の解決に参加できる(断片 5)．一方，見どころの特定においては，多くの場合解説者にその権限があるように見えるが，これは，解説者の競技の専門家的な性格に対する志向と見ることができる．しかしアナウンサーも確信があれば，解説者に承認を求めることなく見どころをアナウンスすることがある(断片 3)のみならず，解説者が応答しやすいよう，候補提案の発話をデザインしている．つまりアナウンサーと解説者はそれぞれが持つイニシアティブと権威に志向しつつも，それのみに依拠しておらず微妙に交渉がなされている(串田，2017)．この交渉のあり様をさらに詳らかにすることを今後の課題とする．

参考文献

Clayman, Steven & Heritage, John (2002). The News Interview: Journalists and public figures on the air. Cambridge: Cambridge University Press.

是永論 (2012). メディア上の表現行為をどのように分析・評価するか：スポーツ実況放送を事例に 日本マス・コミュニケーション学会 2012 年度秋季研究発表会研究発表論文

串田秀也・平本毅・林誠 (2017). 会話分析入門. 勁草書房.

三宅和子 (2004). スポーツ実況放送のフレーム -放送に向けられた視聴者の不快感を手がかりに- 三宅和子・岡本能里子・佐藤彰(編) メディアとことば 第 1 巻 「マス」メディアのディスコース，pp. 94-126. ひつじ書房

劉礫岩・細馬宏通 (2017). カーレース実況における発話による出来事の指し示し - 「こ」系指示表現と間投詞「ほら」の相互行為上の働き- 質的心理学研究，16，46-62.

Sacks, Harvey, Schegloff, Emanuel, & Jefferson, Gail (1974). A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language*, 50 (4). 696-735.

岡田光弘 (2002). スポーツ実況中継の会話分析 橋本純一(編) 現代メディアスポーツ論，pp. 163-195. 世界思想社

話し合い場面における相互行為としての「不同意」の分析
―各聞き手が初めて意見を述べることが期待される位置を中心に―

馮　佳誉（関西学院大学大学院生）

1. はじめに

日本語は「曖昧で自分の考えをはっきり言わない」と思われているが，話し合いのように自分の反対意見を言わざるを得ない場面において，どのように「不同意」が行われているのか.これまでの研究では，ポライトネスの観点から言語形式やストラテジーに関する語用論的な分析が多く行われているが，話し合い場面において，何が不同意であるかという判断は，各研究者のアドホックな定義に委ねられている.リアルタイムの会話の展開において，会話参加者の視点から見て，ある発話がなぜ「不同意行為」として認識可能なのかという根本的な疑問について言及されたものは少ない.

そこで，本研究では，会話分析の手法を使い，話し合い場面における不同意行為の解明に向けた最初のステップとして，「提案に対して，各聞き手が初めて意見を述べる」という位置に限定して分析を行う．この位置で不同意行為として認識可能な発話にはどのような特徴があるか，また，その不同意行為に対して，「提案者―聞き手」の相互行為がどのように展開していくかを明らかにすることを目的とする.

本研究で用いるデータは，「交換留学生に対して 4 回分の日本語授業を行うための授業デザインを決める」ために，7 人の参加者が話し合っている場面の録画データである(計約 540 分)．この場面での話し合いは，「提案→提案に対する議論」というパターンで進行していた.その中で，研究対象とする発話は，各提案に対して，各聞き手が初めて意見を述べる位置でなされる，提案そのものに関する新しい意見である.

2. 「各聞き手が初めて意見を述べることが期待される位置」とは

事例分析を通して，こうした位置は，聞き手が単に初めて意見を述べているだけではなく，意見が述べることが期待されており，参加者もそのことに志向していることがわかったため，本研究は「各聞き手が初めて意見を述べることが期待される位置」と名付けている.そのことを，実際の事例を見ながら説明する.

断片１は U が自分の提案を述べ終わった後の場面である．U は「インタビューの表現を教えるために，授業中，学生にテレビ局のスタッフを演じさせ，お互いにインタビューをする」という提案をした.09 行目 U の発話に注目してほしい.

【断片１】「ニュース」の提案 1:34-1:48

((K はその日の話し合いの進行役である))
01　U　で,撮影したデータ↑を:学生にプレゼントし↑て,(0.3)まあ,み
02　　んなで共有して楽しんでもらえればいいんじゃないか↑な (0.2)<
03　　と思います:>
04　　(0.6)
05　U　以上です.((視線→K+nod))
06　　(3.3)
07　?　°emmmmmm°
08　　(0.6)
09 →U　emmmmmm¿>としか言わない.<hhh.((笑い声))

断片の 01,02,03 行目は，U が述べた提案の最後の部分である.03 行目で，U は「と思います」と言い，提案を言い終えたことを示している.0.6 秒の沈黙が生じた後，U は「以上です.」と付け加えた後，視線は進行役の K に向けられ，「これ以上言わないので，進行してください」ということを示して自分の順番を終わらせる(05 行目).その後の位置は，各聞き手にとって提案に対して意見を表明することが可能な位置と考えられるが，誰もターンを取らなかったため，3.3 秒の沈黙が生じた.その後，07 行目，聞き手は「emmmmmm」と言ったが，明確な意見が産出されなかったため，09 行目で U は再びターンを取り，「emmmmmm としか言わない」と 07 行目の反応が不十分であることを示し，提案に関する意見の産出を促している.こうしたU の振舞いから，提案に対する聞き手の意見が期待されていることが分かる.

3. 相互行為としての「不同意」の分析

上記のような位置において，提案に対して不同意行為が行われる場合，提案者と聞き手が明確な不同意を行う

ことを共同で避けていることがわかった.その際に，聞き手の発話の組み立て方には二つがあることが明らかになった.一つは「質問による不同意行為」であり，もう一つは「条件表現による不同意行為」である.それぞれの特徴とそれに対する提案者の反応の特徴について以下の二つの事例で説明する.

3.1 質問による不同意行為

【断片２】「ニュース」の提案 1:34-2:30

```
01  U  で,撮影したデータ↑を:学生にプレゼントし↑て,(0.3)まあ,み
02     んなで共有して楽しんでもらえればいいんじゃないか↑な (0.2)<
03     と思います:>
04     (0.6)
05  U  以上です. ((視線→K+nod))
06     (3.3)
07  ?  ° emmmmmm°
08     (0.6)
09  U  emmmmmm¿>としか言わない.<hhh.((笑い声))
10     (2.4)
11  Y  なんか,ニュ-,ニュースって?((手元のプリントを捲っている))
12     (0.7)
13  H  これ[サブ(0.2)3,
14  U      [あ::,
15  Y      [°>あ,そういうことか.<°
16     (0.2)
17  U  あ,よん,4のほうですね.[まず,まあ,ちょうど今,(0.3)>ホチキ
18  ?                        [emmmmm.
19  U  スで<とめちゃったので.
20     (1.0)
21→H  えっ,スタッフは:なんか,インタビュー:¿
22     (1.2)
23  U  うん::[す-
24→H        [だけ(.)ですか?
25     (0.9)
26  U  スタッフ:はですね,いや,いろいろカメラマンとかも考えたんです
27     けど.>カメラマンがずっと撮ってるだけ,<[話さないなぁ:とお[もっ
28  H                                          [そうですね.      [はい.
29  U  たので:(0.8)そこ外したんですね.=わざと,(0.3)そこを
30     [外したん:ですよね.
31  H   [emm::
32  U  >だからn-<(0.2)とにかくが-く:せい::が(0.4)とにかく:(.)話
33     す.
34     (0.4)
35  H  うん::
36     (0.5)
37  U  役割にもっていきたいので,ここはもう少し:(0.2)考える必要が
38     [°あるかなぁと思います.°
39  H  [うんうんうん.
40  C  [うんうんうん.
```

断片２は断片１の続きである.21,24 行目 H の発話に注目してほしい. H の発話順番は「えっ」から開始され，何かに今気づいたことを表している．そうすることによって，H は今までの会話の何かが自分の想定と食い違っていたことを示している（Hayashi 2009）．それに続き，「スタッフは」と U の提案の中で出た言葉を取り上げ，強く言うことで，これからスタッフのことについて何かを言おうとしていることを予示する．また，話している際に，「は:」のような語尾の引き延ばしや，「なんか」の使用など言いよどみ表現が続くことで，発話の産出が遅延されている．21 行目の最後の「インタビュー：¿」は，語尾がやや伸びて音調が少し上がることで，発話が一旦区切られ，相手の反応を引き出そうとしているが，この時点で，何の質問なのかがまだ不明であり，それについて詳しく説明する行為が続くことが強く投射されているため，22 行目の相手が反応できる位置で，U は反応していない．だが，ここで，H はすぐに詳しい説明を言い加えなかったため，1.2 秒の間が生じている．その後，23 行目で，「うん::」と 21 行目 H が一旦区切られている発話に遅れて反応し，その後「す-」と何か言い始めるが，24 行目 H の発話とオーバーラップをしたことで，U の発話が中断されている．

24 行目の発話で H は，21 行目の発話に，「だけ(.)ですか?」と統語的につながる表現を付け加えることで，「スタッフはインタビュアーしか考えていないのか」という，役割の構成について確認要求を行っている．また，「だけ」と強く言うことで，言おうとしていることが単なる確認要求ではなく，「それだけでは何か足りない」という提案への指摘としても理解可能である．

上述の分析から，聞き手 H は「自分が言おうとしている内容は提案の問題点である」ということを明示せずに，提案者自身にそれを予測させるような仕方で，確認要求の発話を組み立て，明確な「不同意行為」を行うことを避けていることがわかったが，受け手である提案者がそれを不同意として理解しなければ，その不同意行為は実現されない可能性がある．そのため，26-38 行目の提案者 U の発話に注目してほしい.

H の「スタッフはなんかインタビューだけですか?」という確認要求に対して，26 行目から，U は「はい・いいえ」で答えず，提案の説明を始める.26 行目，U の発話は「スタッフ:はですね,」と 21 行目 H の発話と同じ「スタッフ」という言葉から開始され，問題点の対象がスタッフであることへの理解を示した．その後産出された「いや」は，H の質問が体現する前提について何らかの抵抗を示している（串田・林 2015）．つまり，U は H の「スタッフ」に関する想定が誤っていることを示し，これからその誤りについて説明を行おうとしていることが見てとれる.

説明する際に，U は「いろいろカメラマンとかも考えたんですけど」と H の「他の役割を考えていないのか」という前提を否定し，自分が最初から「スタッフはインタビュアーだけである」ことを想定したのではなく，

色々と検討した上で，今の提案に至ったことを表明している．

それに続き，U は理由を表す従属節「ので」を用いて，「スタッフはインタビュアーだけである」という提案内容を支える理由を提示している（27,29 行目）．その後，「わざと」を付け加えたことで，H が指摘しようとしている問題点は検討した上での決断であることが示されている．その後，0.3 秒の間が生じ，「そこを外したんですよね.」と先述の理由から辿り着いた結果を繰り返す．この後切れ目なく 32 行目の発話を産出している．

32 行目の発話は「だから」で開始され，今まで述べた内容をまとめようとしている．それに続き，U は「とにかく，学生がとにかく話す役割を持っていきたいので」と言い，提案が「学生が話す」ために作られているものであることを示し，提案の正当性について弁明している．最後に，「ここはもう少し考える必要があるかなぁと思います.」と言い，H が指摘した問題点を受け入れ，「今後の課題」として考えることを表明し，その問題点についてさらなる不同意の産出の可能性をブロックし，その後に明確な不同意が来ることを避けていることができる．

3.2　条件表現による不同意行為

【断片３】「オノマトペ」の提案 1:53-2:47

```
01  H  あの「日本のアニメ::漫画のせ-界へ」という:(0.3)サブコン te-
02     セプトの内容として，
03     (1.6)
04  H  [° 今考えています.°
05  U  [うん::
06  Y  [うん::
07  U  ° なるほど.°
08  H  ° はい.°
09  U  >° オノマトペといのは° <私は面白いなぁ:> ° と思う° <この四
10     人はオノマトペの[研究(  )ですし↑ね.＝
11  H                  [¥>そうですね.<¥
12  H  ＝° うん: °
   ((50 行省略))
63  U   =オノマトペに関する，(1.2)まあ:
64  u  ((視線は手元のプリントに向けられている))
65→ C  60 ぷん::¿の授業で[:(1.2) ° >なんか<° 紹介↑:: (0.8)なん
66→    か，好きな作品について話すと:オノマトペ，
67        (0.7)
68→ C  [の楽しめ方，
69  H  [そう.(.)オノマト-ペ:一つ::だけもう 60 ぷん:
70  C  そう.
71  H  の授業を作 ru-[れる.
72  U                [>° それだと° <
73  U  そう.>そうそう<それだけで終わって=
74  U   =[しまう可能性::[が↑::あるので:
75  H     [そう.
76  C     [そうですね.° [うん:: 好きな作品について話す::¿ ° =
77  H  =>° とりあえず° <今回は:その，(0.6)>まあ<出来るだけ多くの
78     ことを考えて:，
79  U  うん::
80  H  ° >入れました.<°
81  ?  うん.
82        (0.6)
83  U  >オノマトペそれだけで二時間でも¥三時間でも
84     [(やれそうな/取れそうな)気がするから=
85  H  [そうですね
86  U  =[.h まあ::¥
87  H    [うん:
```

断片 3 は H が自分の提案を述べ終わった後の場面である．H は「日本のアニメと漫画の世界へ」という授業サブコンセプトを考え，学生に好きな作品について話してもらった上で，作品によく出てくるオノマトペを教えるという提案をした.注目したいのは 65,66,68 行目の C の発話である．この発話が産出される前に，提案に対して意見を述べていのは U だけである.ここで，C は順番を取り，H の提案に対して初めて意見を述べ始めた(65 行目)．

C の発話の組み立て方を見てみよう．冒頭で「60 ぷん::¿」という授業の時間について言及することによって，これから，時間の長さに関連する何かを話そうとしていることが示されている．後の発話が産出される際に，C は「X すると Y」という構造の条件表現を使い，H の提案の中で内容を引用しつつ自分の意見を述べようとしている．その際，「なんか」を二回繰り返したり，「紹介」を「好きな作品について話す」に言い変えて，H の配布したレジュメ[1]に書かれた二つの項目について話していることをより明示することで，C は自分の意見を慎重に産出している．

ではなぜ，その組み立て方が「不同意行為と関連づけている」と言えるのかを，09 行目 で U が同意を表している発話と比較しながら考えてみたい．H の提案に対して，09 行目で U は「私は面白いなぁ:」という肯定的な評価を先に明確に示している．その際に，肯定的な評価だけを産出するのではなく，なぜこのような評価を行ったのかも「この四人はオノマトペの研究ですしね」と述べて明示している．

一方，65,66,68 行目 C の発話では，評価を示さず，冒頭で「60 分」という，会話参加者全員にとって既知のことを取り上げて述べている．その後，C は提案の内容を言及し始めた．そうすることで，これからの発話は，時間に関わることであり，それは「授業で取り扱おうとしている内容と時間が合わない」という提案に否定的な意

[1] H の提案のレジュメは次のようにまとめる.
サブコンセプト：日本のアニメ・漫画の世界へ
内容：①好きな作品について話す　　②オノマトペの楽しめ方
好きな作品を紹介する　　オノマトペクイズ
自分の国の作品との比較　　オノマトペを教える

味を含んでいることが予測できるだろう.

次に,「X すると Y」の「Y」の部分を産出した際の,C と H の間の相互行為に注目する[2]. 66,68 行目で,C は「オノマトペの楽しめ方,」と言い,自分の発話を完成させようとしているが,69 行目 H の「そう.」と重なり,発話は中断された.この「そう」という発話で,H は,C が言いかけたことを自分はもうわかっていたことを表明している.続いて,H は 66 行目の C の発話の中の「オノマトペ」を取り出し,「オノマトペ:一つ::だけもう 60 ぷん:」と述べ,自ら提案の問題点を明示し,C の発話を先取りして完成させている.それを聞いた C は「そう.」と強く言うことによって,H が述べた提案に関する問題点に同意を示している (70 行目).ここまでのやりとりから,H は C の発話が提案に対しての不同意であることが分かっただけではなく,不同意の内容も理解できたことで先取りして表明している.その後,C は「うん:: 好きな作品について話す::¿」と語尾をやや伸ばし,内容についてまた何か言おうとしているが,H はそのまま発話を続け(77 行目),それにより,C の発話が中断されている.

77 行目 H の発話は「とりあえず」で始められている.『大辞林』(2006) の説明によると,「とりあえず」の意味は「十分な対処は後回しにして暫定的に対応する」ことである.ここで H は「とりあえず」を使うことで,中断された C の発話が自分の提案内容に関わっていることへの理解を示しつつも,提案に関する議論を終わらせようとしている.それに続き,H は「今回は」と述べることで,自分の提案が暫定的なものであることを表している.またその後に,「できるだけ多くのことを考えて入れました」と理由を付け加え,C が述べようとしていた問題点も,できるだけ多くのアイディアを考えるために入れたものであることを述べて,このような提案をしたことの正当性を主張し,提案について弁明をしている.以上をまとめると,H は C が指摘した問題点を受け入れつつも,「提案が今回だけの暫定的なものである」ことを表明し,C の不同意の進行をブロックしている.

4. 考察

本研究の分析から,各聞き手が初めて意見を述べることが期待される位置において,不同意行為のやり方には上述の二つのパターンがあることが明らかになった.二つのパターンは,どちらも長い提案のどの部分に異見を持つのかを他の参加者に明確にするためになされている仕方であると考えられるが,使われている文脈に違いがあった.「質問による不同意行為」の仕方は,提案の中で直接含まれていないことを問題の対象とし,かつ意見の宛てが提案者のみである場合で使われており,「条件表現による不同意行為」の仕方は,提案の中に既に出た内容を問題対象とし,その内容が何かよくない帰結に辿り着く可能性があることを示す場合で用いられている.

5. おわりに

今回「話し合い場面における不同意行為」に関して,「各聞き手が初めて意見を述べることが期待される位置」に焦点を当て,事例を挙げながら分析を行ってきた.結論としては,その位置での不同意行為のパターンは「質問による不同意行為」と「条件表現による不同意行為」の二つがあることが判明した.また,そのような不同意行為に対して,受け手である提案者は提案について弁明を行い,不同意行為の進行をブロックすることも明らかになった.今回の分析を通して,話し合い場面において,各聞き手も,提案者も,「発話が不同意の表明である」ということを,双方に理解可能な形で発話を組み立て,対立する状況が目立たないように,双方が明確な「不同意行為」を避けながら会話を進めていくことが明らかになった.

また,今回の研究を通して,従来の研究でよく使われている「不同意行為」のストラテジーや構成要素の分類の仕方に対して,「なぜそれらのストラテジーや構成要素が不同意行為として理解可能なのか」という問いに対する答えの一端が明らかになった.今後の研究において,他の位置での「不同意行為」を分析することで,話し合い場面での「不同意行為」の全体像を明らかにしたい.それは,話し合い場面のスムーズな進め方の解明にもつながり,非常に有意義なものであると考えられる.

参考文献

串田秀也・林誠 (2015)「WH 質問への抵抗―感動詞『いや』の相互行為上の働き」『感動詞の言語学』友定賢治編 pp.169-211 ひつじ書房

Lerner, G.H. (1996).On the "semi-permeable" character of grammatical units in conversation: conditional entry into the turn space of another speaker. *Interaction and grammar* pp.238-pp.276 Cambridge University Press.

Hayashi, M.(2009). Marking a 'noticing of departure' in talk: Eh-prefaced turns in Japanese conversation. *Journal of Pragmatics* ,41 pp.2100-pp.2129

松村明・三省堂編修所編 (2006)『大辞林』第 3 版 三省堂

[2] その際に,U の発話も見られるが,その発話が提案に初めての意見ではなかったため,研究対象外とする.

情報の受け取りで用いられる「か」と「かー」の相互行為上の働きについて

中馬隼人(名古屋大学大学院生)

1. はじめに

ある事柄についてより知識を持っている者が，相対的に知識が少ない者に対して何かを伝える行為は，情報提示(informings)と呼ばれ，それに対する情報の受け取り(information receipt)の様々な方法について，主に会話分析の観点から研究が行われている(Heritage, 1984; Maynard, 2003; Thompson, Fox & Couper-Kuhlen, 2015; Yokomori, Yasui & Hajikano, 2018 など)．例えば，Heritage(1984)は，情報提示の後の受け取りの位置や，質問によって引き出された情報提示の後の受け取りの位置で，"oh"を用いることで，先行する情報提示が価値のあるものであり，自らの認識が変化したことを表示することを示した．また，Yokomori, Yasui & Hajikano(2018)は，日本語の情報の受け取りの方法である「あ＋相手の発話の繰り返し」と「あ＋相手の発話の繰り返し＋ね」について分析し，前者は先行する情報提示が情報価値のあることを示し，後者は情報価値がないものとして情報提示を受け取るものであると述べた．

本発表は，日本語会話で用いられる情報の受け取りの方法の一つである，「情報提示の一部の繰り返し」＋終助詞「か」で構成される応答発話を対象とする．終助詞「か」の機能については，森山(1992: 41-42)が「他者からの情報伝達は，新情報であるがゆえ，それに対する断定の留保を行う」と述べているが，「か」を用いた情報の受け取りが，実際の相互行為の場面で参与者たちが何をするために用いられているかは明らかになっていない．

本発表では，「情報提示の一部の繰り返し＋か」という発話形式を用いて情報の受け取りをすることにより，自らが持っていた想定を修正したことを表示することを示す．加えて，「か」のプロソディが異なる「かー[1]」を用いた情報の受け取りが，相互行為上どのような働きを持つのかについても着目する．さらに，「か」を用いた情報の受け取りが，相互行為の資源として働きうることについても検討したい．

2. データと方法論

本研究に使用したデータは以下の通り：(i)筆者が収録した日常会話のビデオデータ（4 時間），(ii)Callfriend および Callhome Japanese コーパスの電話会話の音声データ（12 時間），(iii)Sakura コーパスのビデオデータ（2 時間）[2]．(i)~(iii)の合計 18 時間のデータから，情報の受け取りに「か」が用いられているものを抽出し，その中から「情報提示の一部の繰り返し＋か」の事例 18 例，「情報提示の一部の繰り返し＋かー」の事例 6 例を考察対象とした．分析については，会話分析の手法を用いる．ちなみに，トランスクリプト上で，「->」と「=>」という記号を用いるが，前者は情報提示，後者は情報の受け取りを示すものである．書き起こし記号は，基本的に Jefferson(2004)に基づいている．

3. 分析

3.1 「情報提示の一部の繰り返し＋か」

まずは，先行発話である情報提示の一部を繰り返し，終助詞「か」を用いて情報の受け取りをする事例について見る．

断片(1) [snackparty] ((30 代男性 2 名による日常会話．リュウタが、以前勤めていた工事現場での仕事についてタカシに話しており，それについてタカシが質問する．))

```
01      タカシ              なかなか大変だよな:::(.)工事現場って建築関係だったの?
02      リュウタ    ->      んー うち土木.
03      タカシ      =>      土木か.=
```

[1] 本稿において，終助詞「か」の母音部分が引き延ばされ，なおかつ下降調で産出されるものを便宜上「かー」と表記する（トランスクリプト上では，「か:.」のような表記になる）．

[2] (ii)と(iii)については，Talkbank(MacWhinney, 2007)にてアクセス可能である．

01 行目のタカシの極性疑問文「工場現場って建築関係だったの?」は，リュウタが建築関係の仕事に就いていたということを前提とした形式の質問である（ただし，タカシはそれについての知識が今は不確かであることを「っけ」を用いて示し(Hayashi, 2012)，リュウタに質問している）．しかし，02 行目で，リュウタが建築ではなく，土木関係の仕事に就いていたという情報を提示する．03 行目で，タカシは，リュウタによる情報提示の一部（「土木」）を繰り返し，それを受け取っている．このとき，終助詞「か」を用いることにより，自らが持っていた「リュウタは，建築関係の仕事に就いていた」という想定を修正し，認識を新たにしていることが理解可能である．

次も，「情報提示の一部の繰り返し＋か」の発話形式の情報の受け取りの例である．

断片(2) [callhome1713] ((アメリカ在住の男性 A と日本在住の男性 B による電話会話．断片の直前では，A が以前の恋人である女性に手紙を出したことを B に伝えている．それに対してどんな返事があったのかを 01 行目で B が質問している．))

```
01    B          んで::(1.0) hh どうだった?
02               (0.4)
03    A    ->    え? (.) あの::まだ出したばっかりだよ．
04               (0.4)
05    B    =>    >まだ出したばっかり[か.<
06    A                              [まだ日本に:行ってないでしょ．
07               (0.7)
08    B          ああ::.
```

01 行目の B による疑問詞疑問文「どうだった?」に対して，03 行目で A が「まだ出したばっかりだよ.」という応答をすることで，女性からの返信はまだ来ていないという情報を提示している．B は 05 行目で，03 行目の A の発話の一部（「まだ出したばっかり」）を繰り返し，「か」を用いて情報の受け取りを行っている．

このやりとりから理解可能であることが 2 点ある．まず 01 行目の B の発話の組み立てから，B は，A がすでに女性から返事をもらったと想定しているということ．もう 1 つは，その B の想定が，A にとっては予想外であったということが，03 行目の「え?」の使用から分かる(Hayashi, 2009)．これらの観察から，B の想定が間違っていたことが，A による情報提示により認識可能となり，B が自分の想定を修正し，A の情報提示を受け取っていると記述できる．

この二つの断片から示した「情報提示の一部の繰り返し＋か」という形式による情報の受け取りと，終助詞「か」が無い形式の「情報提示の一部の繰り返し」による情報の受け取りとを比較してみると，より多くのことが分かる．

断片(3) [Sakura07] ((女子大学生 4 名による日常会話．話題は最近放送されたドラマの話である．B が自身の好きな俳優が出演していたドラマを誰か見ていないか尋ねると，C と D は観ていないことが分かった．しかし，A はそのドラマの一部をたまたま観ており，自分が観たシーンについての説明を 01 行目で行っている．))

```
01    A          なんか::あれよく分かんないけどワイン:::>なんか<飲んで泣いてた．
02               (0.9)
03    A          hh[hh
04    B            [泣いてた泣い[てた=うんうんうん=そうそう]そう．
05    A                         [ところ::し か 見 て な い.]
06    D          メイちゃん[は-
07    A                      [あれなんなの?(.)あれなんのドラマ?
08               (1.3)
09    A          どうゆう[話な-
010   B    ->          [ワインのドラマ．
011   A    =>    ワインのド[ラマ((頷き))
012   B                    [うん
013              (1.1)
014   B          すごい面白い．
```

07 行目で A は，話題となっているドラマを全て観た B に対してそれがどんなドラマなのかを質問し，情報を求める．B は，10 行目で「ワインのドラマ.」という情報提示をし，A が 11 行目で B の発話を繰り返す形で情報の受け取りを行う．

このやりとりから理解できることは，A は 01 行目で，たまたま観たドラマのワンシーンにワインが出てきたことを報告しているので，10 行目の B による情報提示は，A にとって新しいものでもなく，B が持っていたドラマについての断片的な知識と異なるものでもないということである．よって，11 行目の A による情報の受け取りは，相手が提示した情報をシンプルに受け取っているものとして理解可能である．

ここまで提示してきた三つのデータを検討すると，断片(1)(2)と，断片(3)との間に大きな相違点が観察可能となる．つ

まり，「か」を用いた情報の受け取りは，情報を受け取った参与者の知識や想定が修正されるのに対し，「か」を用いない情報の受け取りではそのようなことがなされず，シンプルに情報を受け取っているだけだということである．

3.2 「情報提示の一部の繰り返し＋かー」

次の断片は，情報提示があった後，その一部を繰り返し，終助詞「か」を用いるという点では3.1のデータ（断片(1)と(2)）と同じである．しかし，「か」の母音部分(a)が引き延ばされ，なおかつ下降調で産出されるという点が異なる．森山(2008)によると，相手の発話の一部を繰り返す「エコー表現」に「ね」が付加すると，伝達の了解だけを表す．一方で，「ねえ」のように長く，下げる発音だと，相手の発話を受け取り，何らかのコメントをする段階で思考に時間がかかっていることを表示するという．同様に，「か」を用いた情報の受け取りについても，プロソディが異なれば，異なる働きがあることが観察できる．

断片(4) [プロポーズ] ((30代男性3名による日常会話．ギリシャで彼女にプロポーズをする予定であるマサキに対して、タカシが冗談で現地へお祝いに行くと話しており、具体的な日程を尋ねている))

```
01  タカシ                ゴー ゴールデンウイーク?
02                        (0.4)
03  マサキ      ->        ゴールデンウイーク=27 から．
04  タカシ      =>        27 から¿ (0.3) >ちょっと待ってよ< (0.6)
05              =>        .hhh <にじゅう>ななからか:::. (1.1) 俺が休みになるの::30 からだでな:::.
```

05行目でタカシが，03行目のマサキによる情報提示の一部を繰り返し、さらに終助詞「か」の音を引き延ばし，下降調で産出することで、情報の受け取りを行っている[3]。このとき、情報の受け取りだけでなく、これからしようと考えていたこと（ギリシャにマサキのお祝いへ行くこと）が困難であることの表明を投射しているように聞こえる。実際に、1.1秒の間の後、06行目では、タカシが30日から始まる自分の休みの日程を説明することで、27日からギリシャには行けないことを間接的に示していることからも，そのように考えることは合理的である．

このように，「情報提示の一部の繰り返し＋か」の「か」の音が延ばされ，下降調で産出されるときには，自らの想定が修正されたことを示すだけでなく，その情報を受け取ることによって生じる何らかの行為の可能性を投射することができると考えられる．

3.3 「情報提示の一部の繰り返し＋か」が相互行為の資源として用いられるとき

最後に，情報の受け取りに「か」を用いることが，相互行為の資源として利用されることについて検討したい．次の断片は，断片(2)の数分後の会話の一部である．

断片(5) [callhome1713]

```
01   A          >そういえば< 明日俺誕生日なんだよ．
02              (0.7)
03   B          hhhh
04   A          25 歳の．
05              (1.2)
06   B          10 月にじゅう::(>なんだった<は-) (0.3) (     )はち?
07              (0.7)
08   A          え?
09              (0.5)
010  B          じゅ[うがつにじゅ↑う?
011  A              [いつ?
012       ->    にじゅうしち．
013  B    =>    しちか．
014  A          ああ．(0.4) あだまだこっち 26 だからな．
```

01行目で，Aが明日は自分の誕生日であることをBに伝え，断片の直前とは断絶したトピックを導入している．06, 10

[3] 05行目の情報の受け取りは，2回目であると考えられる．というのも，04行目のタカシによる「27 から¿」は，他者修復開始の形式を用いた驚きを伴う情報の受け取りであると考えられ (Thompson, Fox & Couper-Kuhlen, 2015など)，この1回目の情報の受け取りを「>ちょっと待ってよ<」によってキャンセルし，やり直しをしていると考えられる..

行目でBが，Aの誕生日が何月何日であるかを質問している．これら2つの質問形式から理解可能であることは，Bは，Aの誕生日が10月20~29日のうち，いつであるかの知識が不確かであるということである．ここで重要なことは，Aがアメリカに在住，Bが日本に在住しているという事実である．アメリカと日本には，十数時間の時差があるため，Aが「明日」と言った場合，それが何月何日になるのかを同定することに少し困難が生じる可能性がある．Bは06行目の質問では，「28日」と言おうとしていることが，発話から推測できる．しかし，Bの発話に言い淀みが生じて，聞き取りにくかったため，08行目でAが他者修復を開始している（「え?」）．それにより，Bは自らの発話の間違いの可能性（または，正しい答えを提示しているという自信が無いこと）に指向し，06行目で示した「Aの誕生日が10月28日である」という想定をキャンセルし，10行目で「じゅうがつにじゅ↑う?」と，二十以降の数字をAに委ねている．その後，12行目でAは自分の誕生日が10月27日であるという情報提示を行う（「27」）．13行目でBは，その情報の受け取りを「か」を用いて行い，自らの想定を修正したことを示している．

ここで重要なことは，Bが一旦持っていた想定を放棄し，Aに答えの提示を委ねたという点である（06→10行目）．言い換えると，Bはアメリカと日本の時差から来る，日時を同定することを困難だと感じ，それを解決することを放棄したということである．しかし，Bの「しちか」という情報の受け入れの組み立てから，「10月27日」という情報において，20の部分は理解していた，ということをBが主張していることが分かる．つまり，Bは日時の同定という活動を完全に放棄したわけではなく，部分的には従事し続けていたことを主張していると考えられる．

これらをまとめると，「か」を用いて，相手の情報提示によって自らの認識が修正されたことを示す（「27」における「7」の部分）が，情報提示のどの部分を繰り返すかによって，情報の受け取りを行う参与者が元々部分的には理解していた（「にじゅう」の部分）ことを主張することができるということである．つまり，この発話形式による情報の受け取りを戦略的に用いることにより，認識的権威(Heritage, 2002)を，微細なレベルで表示することができると考えられる．

4. おわりに

本発表では，日本語会話の情報の受け取りの発話形式の一つである，「情報提示の一部の繰り返し＋か」が相互行為上どのように用いられているのかを示した．今後の課題としては，「か」が用いられる他の連鎖環境についても分析を進めていくことや，情報の受け取りに用いられる他の発話形式との比較を行うことが挙げられる．

参考文献

Hayashi, M. (2009). Marking a 'noticing of departure' in talk: eh-prefaced turns in Japanese conversation. *Journal of Pragmatics,* **41**, 2100–2129.

Hayashi, M. (2012). "Claiming uncertainty in recollection: a study of kke-marked utterances in Japanese interaction." *Discourse Processes,* **49**, 391–425.

Heritage, J. (1984). A change-of-state token and aspects of its sequential placement. In Atkinson, J.M., & Heritage, J. (Eds.), *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*. Cambridge: Cambridge University Press, 299–345.

Heritage, J. (2002). Oh-prefaced responses to assessments: a method of modifying agreement/disagreement. In Ford, C. E., Fox, B. A. & Thompson, S. A. (Eds.), *The Language of Turn and Sequence*, Oxford: Oxford University Press, p. 196-224

Jefferson, G. (2004). Glossary of transcript symbols with an introduction. In: Lerner, G. H. (Ed.), *Conversation Analysis: Studies from the First Generation*. John Benjamins: Amsterdam & Philadelphia, pp. 13–23.

MacWhinney, B. (2007). The TalkBank Project. In J. C. Beal, P. Corrigan. & H. L. Moisl (Eds.), Creating and Digitizing Language Corpora, volume 1, Synchronic Databases, 163-180. Houndmills: Palgrave Macmillan.

Maynard, D. W. (2003). *Bad News, Good News: Conversational Order in Everyday Talk and Clinical Settings*. Chicago: The University of Chicago Press.

森山卓郎 (1992). 疑問型情報受容文をめぐって 語文，35-44.

森山卓郎. (2008). 談話におけるエコー表現―相手発話を受ける「ね」「ねえ」「か」を中心に― 「単位」としての文と発話 ひつじ書房 pp.27-44.

Thompson, S. A., Fox, B. A. & Couper-Kuhlen, E. (2015). *Grammar in Everyday Talk: Building Responsive Actions*. Cambridge: Cambridge University Press.

Yokomori, D., Yasui, E. & Hajikano, A. (2018). Registering the receipt of information with a modulated stance: A study of ne-marked other-repetitions in Japanese talk-in-interaction. *Journal of Pragmatics,* **123**, 167-191.

職業訓練活動での雑談における支援者の立場表明

岩田　夏穂(東京大学)

1. はじめに

若者の就労支援のための NPO 団体で実施される内職活動などの職業訓練活動には，団体の利用者（就労を目指す若者）だけでなく，支援者（ボランティア，団体運営関係者）も参加する．そのような現場では，参加者が作業しながら雑談する様子がしばしば観察される．本報告では，ボランティアと運営関係者の雑談を取り上げ，雑談という活動の展開とそこでの支援者としての立場表明の実践を記述することを目指す．さらに，利用者のいる場で雑談が行われる意味を探る．

2. 内職作業における「雑談」

雑談は，一般的にその場を共有する他者との関係構築のための会話（筒井，2012）と考えられ，日常談話だけでなく，公の場や職場といった制度的な場面における会話の中にも見られる（村田・井出，2016）.制度的場面での会話で，どのようなやり取りを「雑談」とするのか．平本・山内（2016）は，エスノメソドロジーの会話分析の立場では，「雑談」をはじめに定義づけ，それに基づいて現象を見るというよりも，あるやり取りが「雑談」に見えるなら，それはどのようにしてそう見えるのかに注目すべきである（p.78）と述べている．そして，鮨屋での雑談を対象に，仕事を遂行する行為連鎖から切り離されることで，やり取りが雑談として聞きうること，それは，そこにいる参加者が「板前」や「客」といった役割から距離をとることと関連することを明らかにした．

本報告が対象とする内職場面において，目下取り組んでいる作業の円滑な遂行に直接関係するやり取りとしては，例えば，作業が初めての参加者に，経験のある利用者がやり方を説明するといったものが考えられる．そのような会話では，参加者と利用者が，それぞれ作業の「素人」と「経験者」としての立場を志向することを通して，その場を内職作業遂行の場として構成するといえよう．雑談も，職業訓練の一環としての内職の作業中に他の利用者やボランティアも同席している場でなされることから，公的／制度的な場から切り離されているわけではない．では，雑談と聞きうる活動では，参加者は，どのように雑談を目下取り組んでいる作業の中に組み入れ，また，その立場をどのように表明するのだろうか．

本報告では，職業訓練の作業現場で，雑談がどのように行われるのかを検討する．具体的には，互いに異なる立場で作業に従事する参加者が，どのようにやり取りを開始し，自分の立場や関わり方をどのように示し合いしながら展開することで「雑談」と聞きうる活動を達成しているのか，という点に注目して分析を行う．

3. 研究方法

データは，東北地方で活動する若者の就労支援のための NPO 団体で収集した職業訓練活動の映像と，その音声を詳細に書き起こした文字化資料である（用いられている記号は資料 1 を参照）．その中から注目する現象が見られる支援者間のやり取りを抽出し，ルール[1]に従って文字化し，会話分析の手法を用いて分析する．対象とした断片は，いずれも 10 名前後（利用者 5，6 名，NPO 団体の運営関係者 2 名，ボランティア 3 名）でラベルの袋詰めの内職作業をしている場面である.参加者は大きい机を取り巻くようにして着席し，各自ラベルと小袋の束，セロテープを手元に置き，作業する（次頁の図参照）．

[1] 文字化のルールは，次の通りである（好井・山田・西阪(1999)を参考に作成）．[重なり，(.) ごく短い間合い，: ：直前の音の伸び，？語尾の上昇，「.」（ピリオド）語尾の音の下降で区切りがついたことを示す，「,」（カンマ）音が少し下降していることを示す,_(下線）音に強勢がおかれている,hh　呼気音（主に笑い），.h 吸気音，。。 音が小さい，↓音調が急に下がる，(( )) 説明，非言語行動



図　袋詰めの内職作業の参加者の位置

4. 結果

4.1 「ねぎらい」を通した立場表明

分析の結果，運営関係者とボランティアは，その場にレリバントな質問と応答をすることで雑談を展開し，利用者へのねぎらいや，作業に時間がかかっている理由の説明に聞こえうるやり方を用いることで，自らの立場を示しつつ，その場が内職作業の場であることを志向していることが分かった.

次に示すのは，関係者 1(NPO 団体の責任者の家族，推定 70 代女性)とボランティア（推定 70 代男性）のやり取りである．この日に彼らが利用者とともに行っていた作業には，当初の想定以上の時間がかかっていた. 関係者 1 は，収録開始後にボランティアの隣に着席し，ボランティアからラベルを袋に入れる一連の手続きの指示を受けて作業を開始した．断片 1 は，その後 2 分半程度の沈黙の後のやり取りである.

【断片 1】

01　ボランティア：きの-(.)昨日もやられたんです[か?
02　関係者 1：　[はい，きのう::きのうちょっと手↓伝いまし[た.
03　ボランティア：　[え 大変ですね
04→　関係者 1：い:hhh え hhh　.h みな:[さん一生懸命やってくださいます
05　ボランティア：　[hh

ボランティアは，隣席の関係者 1 に，この作業を今日だけでなく，昨日もしたのかと質問する（01 行目）. 通常，団体責任者の家族が朝の開始直後から内職作業に参加することはそれほどないと思われる，したがって，このボランティアの質問は，この時間的に切迫したイレギュラーな事態の程度を探るという意味でレリバントなものとなりうる．関係者 1 は，この質問に対して肯定（02 行目）し，ボランティアは，その応答を「え」と意外なこと（Heritage, 1984）として受け止め，続けて「大変ですね」と，その作業状況の否定的評価と聞きうる反応を示す（03 行目）．この反応は，作業の進捗にかなりの問題があったがために，（本来なら参加しなくてもよい）団体責任者の家族が作業に加わったのだろうというボランティアの理解を示している. それに対し，関係者は，04 行目でこの理解を笑いを伴って明示的に否定する「第 3 の位置での修復」（Schegloff, 1992）を通して，「みなさん」が「一生懸命」やってくれる（したがって，事態は「大変」ということはない）という正しい実態を示す.

関係者 1 の発話の組み立てに注目しよう．02 行目の応答では，「しました」ではなく，「手伝いました」という自身の参加の程度を低める表現を用いることで，自分自身をこの作業の遂行を中心的に担う当事者としてではなく，必要に応じて援助する者として示している. それは，自分も関わらざるを得なくなるような，通常の作業進捗とは異なる状況を示唆している．さらに，04 行目に，通常その場にいる人に対しての呼びかけ表現で話し手自身は含まない「みなさん」と，「やってくださいます」という行為の授受表現を用いることで，自分がその行為の受益者としての感謝（益岡，2001）を表現している.

関係者 1 は，自分以外の参加者（すなわち利用者（とボランティア））の作業に対する熱心で積極的な態度を評価することで，今の状況が参加者の取り組み方によって引き起こされたものものではないと主張している．さら

に，ボランティアの自分が関係者（責任者の家族）として，その場にいる利用者やボランティアを含む参加者の態度を肯定的に評価し感謝する，すなわちねぎらうことが適切であるという自身の立場を示している．

4.2 仕事の受注に関するやり取りを通した立場表明

次に取り上げる事例は，【事例 1】の後に続く場面で，ボランティアと関係者 1 は【事例 1】と同一人物，関係者 2 は，内職作業の受注や管理を担当している団体の職員（40 代女性）で，着席せずに作業の進捗に合わせて適宜移動しながら参加している．

【断片２】

01　ボランティア：あ（..）な:んぜん枚あったの，これ
02　関係者１：な［ん-
03　　（(ボランティアと関係者２の視線が合う)）
04　関係者２：　［いちまんぷく［ろ
05　ボランティア：　　［khh　hhh huhu
06　利用者１：　　［((ボラを見て))。いち。
07　ボランティア：いちまん，ふくろ，これ（(ラベルを入れた袋を持った手を挙げて)）これに
08　　して［huhu
09→　関係者１：　［わりと軽く請け負ったんだよね？［hh　なんか hh
10→　関係者２：　　［まあ，でも::言われ:た:
11→　　時間は::［よんじゅう時間ぐらいだ［からって::
12　関係者１：　［あん　　［ああ::
13→　関係者１：やっぱ［り::
14→　関係者２：　［できると思ったら 1.5 倍::［hh
15　関係者１：　　［う:んうん
16　関係者２：で:　終わらなかった.
17　関係者１：ね:

ボランティアは，01 行目でラベルを袋に入れながら，視線を下げたまま，受注したラベルの量を尋ね，02 行目で隣の関係者１が反応しかける．この質問は，作業の遂行自体には直接関連してはいないが，決められた時間内に作業を終わらせなければならない利用者やボランティアからすれば，なぜそのような大量の作業量の仕事を無理のあるスケジュールで引き受けたのか，という疑問を持つことは不思議ではない．ボランティアの質問は，作業の支援者としてそのような注文を受けた運営側に理由説明を求める，いわば挑戦にもなりうるものである．

ボランティアの質問に使われている形式を見ると，「あったの」と普通体の文末になっている．【事例１】で見たように，ボランティアは，団体責任者の家族である関係者１には，「やられたんですか」と丁寧体で話していたこと，またその質問の内容が仕事の受注の詳細に関することであることから，関係者１以外の参加者を宛先として組み立てているように見える．ボランティアは，02 行目の関係者１の反応を聞いてすぐに視線を上げて移動させ，01 行目の「これ」のあたりでボランティアのほうを向いた関係者２と視線を合わせる（図は，その瞬間の状況である）．関係者２が，ボランティアの質問を自分に宛てたものと受け止めた，その振る舞いを通して，自身がその業務を担当する者であることを表明している．そして，ボランティアは，関係者２の回答（04 行目）で，こなさなければならない作業量が，自分が質問で示したもの（「何千枚」）よりはるかに多いこと[2]を知り，それを笑い(05 行目)とともに意外なこととして受け止める（07,08 行目）．ボランティアの応答における笑いは，その意外さが何らかの「問題」，すなわち責任の問題を示唆しているように見える．

09 行目で，関係者１が次の話し手として自己選択し（Sacks, Schegloff & Jefferson, 1974），関係者２に宛てて「軽く請け負ったんだよね」という確認を求める．これは，ボランティアの示す責任の所在の問題に応接し，受注のいきさつの説明を促しているように聞こえる．また，「よね」の終助詞の使用により，自分自身も，請け負

[2] １袋あたり４枚のラベルを入れるため，「１万袋」だとラベルは４万枚あることを意味する．

った状況に独自にアクセス可能な者(Hayano,2017)として，その場に臨んでいることを示している．

それに対して，関係者２は，発注先から示された時間（10,11 行目）を示し，団体がこの業務を「軽く」請け負ったことには，根拠があることを主張する．実際にその時間を上回る時間がかかっている(14 行目)目下の状況の責任は，団体側のものではないと聞こえうる．この説明のあとに続く関係者１の反応（10,11 行目）は，このような事態になったことに妥当な理由があり，関係者２をはじめとする職員の責任ではないことを，自分がもともとわかっており，関係者２の答えでそれが確認されたと主張している．

次に，このやり取りが，他の利用者やボランティアがいる作業の場でなされたことの意味について考えてみたい．ここで注目すべき点は，利用者１が，06 行目で関係者２の発話に反応していることである．利用者１は，この雑談には参加してはいないが，やり取りを見聞きできる位置にいる「傍観者」(Bystander)（Goffman, 1981;高田, 2015）であると考えられる．自分に発話が向けられていないにもかかわらず，利用者１は，視線をボランティアに向けて，「いち」と小さく繰り返すことで，その情報を自分も聞き手として受け止めたことを表している．先述したように，ボランティアの 01 行目の質問は，作業する者が持つであろう疑問であることから，それに対する関係者の回答も，その場にいる他の利用者にとって有意味であると考えられる．関係者とボランティアの雑談を通して，内職作業に取り組む利用者に情報が提示され，受け止められることがうかがえる．

5. まとめ

本報告では，職業訓練のための内職活動での雑談に注目し，連鎖構造と発話の組み立てを検討した．データの観察から，雑談が作業遂行のための連鎖から離れて行われていること，その中で団体を運営する者，内職業務を管理する者，作業を支援する者が，それぞれの立場を表明しつつ展開していることを示した．そして，雑談が，他の利用者に対するねぎらいや，仕事の受注に関する情報提供の機会になっていることを示唆した．今後の課題として，目下の作業と全く関連性がない雑談との対比や，雑談の収束のしかた等の分析を行い，内職活動で雑談が果たす役割を探りたい．

謝辞　本研究は JSPS 科研費 JP18K01992「若者の就労支援活動における相互行為の分析」(代表者　岩田夏穂)の助成を受けたものである.なお，本稿の執筆にあたって,黒嶋智美氏，須永将史氏，三部光太郎氏から貴重なコメントを頂いた．ここに感謝する.

参考文献

Hayano, K. (2017). When (not) to claim epistemic independence: The use of *ne* and *yone* in Japanese conversation. *EAST ASIAN PRAGMATICS*, VOL 2, NO 2, pp.163-193.

平本毅・山内裕 (2016).鮨屋のサービス文化と雑談 村田和代・井出里咲子 (編著) 雑談の美学　ひつじ書房

Heritage, J. (1984). A Change-of-State Token and Aspects of its Sequential Placement, In *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis* (J. Maxwell Atkinson, John Heritage, eds.), Cambridge, U.K., Cambridge University.

Goffman, A. (1981). *Forms of Talk*. Oxford, England: Basil Blackwell.

益岡隆志 (2001) .日本語における授受動詞と恩恵性 月刊言語, 4 月号, Vol. 30, No.5, pp.26-32.

村田和代・井出里咲子(2016).雑談の美学 ひつじ書房

Sacks,H., Schegloff, E.A. & Jefferson, G.(1974). A Simple Systematic for the Organisation of Turn Taking in Conversation. in *Language* 50(4), pp.696-735.

Schegloff, E.A. (1992). Repair After Next Turn: The Last Structurally Provided Defense of Intersubjectivity in Conversation. *American Journal of Sociology*, 97(5).pp.1295-1345.

高田明(2015).ゴフマンのクラフトワーク　中河伸俊・渡辺克典(編) 触発するゴフマン 新曜社 pp. 229- 255.

筒井佐代 (2012).雑談の構造分析 くろしお出版

好井裕明・山田富秋・西阪仰編著(1999).会話分析への招待 世界思想社

会話における否定表現の使用傾向

野田春美（神戸学院大学）

1. はじめに

本発表では，漫画と会話コーパスを資料として，日本語の会話における否定表現の使用傾向を見る．狭義の否定文だけでなく，否定辞「ない」「ぬ（ん）」「ず」を含む表現を広く調査の対象とする．

2. 否定を含む疑問表現の概観

否定を含む疑問表現には，「寒くない？」のような否定疑問だけでなく，「風邪ひいたんじゃない？」のようなノデハナイカ，「だから気をつけなさいって言ったじゃない！」のようなジャナイカがある．

ジャナイカは，日本語記述文法研究会（編）(2003）によると，次の(1)のように「話し手と聞き手が同一の知識状態にある事態を聞き手に想起させたり，気づかせたりする」(p. 40）いわゆる確認要求の機能と，(2)のように「話し手がその場で発見したことをさまざまな感情表出を伴いながら述べる独話用法」(p. 182）がある，

(1)　ほら，高校の同級生で田中さんっていたじゃない．覚えてない？

(2)　［探し物が見つかって］なんだ，こんなところにあるじゃないか.

否定疑問とノデハナイカは話し手が事態の肯定に傾いていることを表すという共通点がある．ただし，宮崎（2002:206）が指摘するように，否定疑問は「話し手の認識が文脈と対立する方向に傾いている場合」に使われるのに対し，ノデハナイカの使用にはそういった制約はない.

(3)　髪が濡れてるけど，君，傘｛*持ってたか／持ってなかったか｝？　（宮崎 2002:206）

(4)　［震えている人に］｛寒い／#寒くない／寒いんじゃない｝？　（宮崎 2002:206）

宮崎（2004）は，否定疑問とノデハナイカを次のように整理している．広義名詞述語の否定疑問形式は，思考動詞の引用文中の生起や「タブン」との共起が可能であるといった特徴があるという.

表１　宮崎（2004）による否定疑問とノデハナイカの関係（一部簡略化）

動詞・形容詞述語の否定疑問形式	広義名詞述語の否定疑問形式	
	名詞述語の否定疑問形式	ノデハナイカ
降っていないか 寒くないか	雨ではないか	降っているのではないか 寒いのではないか 雨なのではないか

また，名詞述語の否定疑問形式と同じ形であっても，事態の肯定に傾かない場合もある.

(5)　（１ガ素数デナイト君ハ言ウガ得心デキナイ.）本当に１は素数じゃないか？　（田野村 1988:122）

3. 日本語の漫画とそのフランス語訳における否定表現の異同（野田 2019）

3.1　調査の概要

［調査対象］　『アオハライド　１』，咲坂伊緒（作），集英社，2011

Blue spring ride 1, Misato Raillard（訳），Kana, 2013

『四月は君の嘘　１』，新川直司（作），講談社，2011

Your lie in April 1, Géraldine Oudin（訳），K-oon, 2015

『リアル　１』，井上雅彦（作），集英社，2001

Real 1, Thibaud Desbief（訳），Kana, 2005

［調査項目］

いわゆる否定文だけでなく，テクレナイカによる依頼，ジャナイカ，ノデハナイカ，カモシレナイ，ナケレバナラナイ等も含む.

表２　３作品全体の否定表現とフランス語訳の対応と非対応

日本語の否定表現 460	139	（フランス語の否定表現なし）
	321	フランス語の否定表現 567
（日本語の否定表現なし）	246	

［調査結果の概観］

・否定表現は日本語のみで使われている例より，フランス語訳のみで使われている例のほうが多い.

・フランス語訳のみ否定表現になっている 246 例のなかには，次のようなものがある.

日本語のほうにも否定的な性質がある例（否定的語彙，否定接辞等）：108 例

(6)　今だめ　（アオハライド，p. 10）

Pas maintenant.（直訳：今じゃない.）

情報の補足による否定の出現：54 例

(7)　男子なんかとはちょっと…　（アオハライド，p. 8）

Je n'ai pas envie de me mêler aux garçons.（直訳：私は男子の中に混じりたくない.）

・日本語のみ否定表現になっている 139 例のなかには，次のようなものがある.

日本語の基本的な否定表現のフランス語訳が通常の肯定になっているもの：28 例

(8)　俺がいなけりゃ車は買わなかっただろう　（リアル，p. 138）

C'est à cause de moi que tu as acheté une voiture.（直訳：お前が車を買ったのは俺のためだ.）

3.2　確認要求と付加疑問

表３　確認要求表現のフランス語訳の内訳（調査対象部分のみ）

	じゃない（か）	じゃん	だろう	ね／な	よね
確認要求→［対応なし］	10	―	―	―	―
確認要求→非難疑問	2	―	―	―	―
確認要求→付加疑問	0	3	11	4	3

(9)　楽しくやればそれでいーじゃねーかよ　（リアル，p. 72）

Le plus important, c'est de s'amuser.（直訳：いちばん大切なのは楽しむことだ.）

(10)　部活中でしょ　（四月は君の嘘，p. 17）

Tu es en plein entraînement, non?!

確認要求表現はフランス語訳で付加疑問になることがあるが，ジャナイカが付加疑問で訳された例はない.

4. 会話コーパスにおける否定表現

4.1　先行研究

ザトラウスキー（2019）は，試食会の談話コーパスを資料として「P ない？」（否定疑問，デハナイカ，ノデハナイカ含む）「P じゃん」「P だろう」の使用を観察している.「P ない？」の使用が 30 歳未満の発話者に多く，主張を表す例があること，「P ない？」に他の発話者の「P ない？」が続く例があること等が指摘されている.

4.2 調査の概要

［調査対象コーパス］

名大会話コーパス（大曽美恵子代表による．合計約 100 時間の日本語母語話者同士の雑談を文字化したコーパス．方言含む．親しい間柄の雑談が多いが，初対面や先輩・後輩の会話も含む）

現日研・職場談話コーパス（現代日本語研究会（編）『女性のことば・職場編』『男性のことば・職場編』（ひつじ書房，合本 2011）が元．女性 19 名，男性 21 名の職場での朝，会議・打ち合わせ，休憩時の談話）

［検索方法と件数］

中納言 2.4.2 の短単位検索を利用．語彙素「ない／ず／無い」及び「じゃん」で検索．

名大会話　検索総数　28823 件　除外（誤解析，意味不明）436 件　→　考察対象　28387 件

職場談話　検索総数　4068 件　除外（誤解析，意味不明）　46 件　→　考察対象　4022 件

［調査結果］　　表４　会話コーパスにおける否定表現の出現状況

名大会話				職場談話			
分類	件数	割合	疑問	分類	件数	割合	疑問
基本的な否定	18722	66.0%	838	基本的な否定	2620	65.1%	61
ジャナイカ類	3494	12.3%		ジャナイカ類	344	8.6%	
評価（必要）	1654	5.8%	3	評価（必要）	316	7.9%	
ノデハナイカ類	1554	5.5%		ノデハナイカ類	269	6.7%	
語内・慣用	967	3.4%	3	語内・慣用	213	5.3%	
モダリティ	840	3.0%	1	モダリティ	109	2.7%	
モダリティ否定	304	1.1%	3	モダリティ否定	49	1.2%	
評価（不必要）	193	0.7%		評価（非許容）	22	0.5%	
二重否定	160	0.6%	41	イケナイ類	19	0.5%	
評価（非許容）	142	0.5%	2	ノダ否定	18	0.4%	
イケナイ類	135	0.5%	2	評価（不必要）	18	0.4%	
ノダ否定	95	0.3%		否定依頼・禁止	10	0.2%	
否定依頼・禁止	82	0.3%		評価（許容）	8	0.2%	
依頼・勧誘	23	0.1%	23	二重否定	3	0.1%	
評価（許容）	11	0.0%		依頼・勧誘	2	0.0%	2
後悔	11	0.0%	1	後悔	2	0.0%	
	28387		917（3.2%）		4022		63（1.6%）

・基本的な否定には，形容詞「ない」による非存在も含む（名大会話 3478 件，職場談話 483 件）．

・評価（必要）はナケレバナラナイのように否定辞を２つ含む形が多いため，実数は表の約１／２である．

・二重否定も同様に，実数は表の１／２である．二重否定の疑問の 41 例は「やること，なくない？」のような否定疑問の例であり，通常の「できなくはない」のような二重否定ではない．

・「モダリティ」は主にカモシレナイ類，「モダリティ否定」は主にワケダの否定である．

・「疑問」には，ノカ疑問文，納得のカは含まない．傾きのある文もない文も含む．

［調査結果の概観］

・２種のコーパスにおける否定表現の使用の傾向は類似している．

・否定疑問より，ジャナイカ類（「じゃん」含む），ノデハナイカ類（「名詞＋デハナイカ」含む）の使用が多い．ジャナイカは共有知識を確認してその後の話の前提とする用法があること，2.で見た宮崎（2002）の指摘のように，ノデハナイカ類は否定疑問に比べて使用の制約がないことが関係していると考えられる．
・評価のモダリティ表現（ナケレバナラナイ（必要），ナクテモイイ（不必要）等），否定辞を含む語（スミマセン，ショウガナイ等）や慣用表現（アリエナイ等）のように多様な表現が現れている．

4.3 会話例の観察

ジャナイカ類による確認要求に対して，話を促すようにあいづちを重ねて打つ例が多く見られる．

（11）F013（女性 60 代前半）：で，そういうことは全然わたしなんか知らないじゃない．
　　F098（女性 60 代前半）：うんうんうん．（名大会話）

一方，ジャナイカ類による確認要求に対して，異なる意見をジャナイカ類で返す例も見られる．

（12）F050（女性 20 代後半）：いろいろ起きるじゃない．
　　F042（女性 50 代後半）：でも飽きるじゃない．（名大会話）

ノデハナイカ類にも同様の例がある（例（13））．直接の応答はせずに会話を続ける例もある（例（14））．

（13）M034（男性 20 代後半）：先生に対する不信感なんて別に持たないんじゃない？
　　F004（女性 20 代後半）：持つんじゃなーい？（名大会話）
（14）F032（女性 60 代後半）：向こうも慣れてんじゃない，そういう人多いんじゃない？〈笑い〉
　　F098（女性 60 代前半）：でも後ろの人がかわいそうよ．（名大会話）

名大会話のほうが否定疑問の割合が高いのは，相手が考えていないことについて話し手の傾きを示しながら問う次のような文が雑談に多いからだという可能性がある．

（15）F033（女性 20 代後半）：大体，バス道から行くなって思わん？
　　F056（女性 20 代前半）：あの時間にね，まちがっているよねえ．（名大会話）

5. おわりに

日本語の広義の否定表現は円滑な会話のために重要であり，音声面も含めたさらなる考察が必要である．

付記　本研究は，科学研究費（学術研究助成基金助成金）基盤研究(C)「話し言葉における使用実態調査に基づく日本語の否定表現の使用傾向の研究」(2018-2020 年度，課題番号 18K00630，研究代表者：野田春美）の成果の一部である．

参考文献

藤村逸子・大曽美恵子・大島ディヴィッド義和（2011）「会話コーパスの構築によるコミュニケーション研究 」藤村逸子・滝沢直宏（編）『言語研究の技法：データの収集と分析』ひつじ書房，pp. 43-72.
宮崎和人 (2002)「確認要求」宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃『モダリティ』くろしお出版, pp. 203-227.
宮崎和人（2004）「否定疑問文の類型について」『岡山大学言語学論叢』11，pp. 1-15.
日本語記述文法研究会（編）(2003)『現代日本語文法 4 第 8 部モダリティ』くろしお出版
野田春美（2019）「日本語の漫画とフランス語訳における否定表現の異同」『人文学部紀要』38，神戸学院大学人文学部，pp. 51-66.
ザトラウスキー，ポリー（2019）「自然談話に見られる否定疑問文の形式，使用数，相互作用における機能」『日本語学会 2019 年度春季大会予稿集』pp. 73-80.
田野村忠温（1988）「否定疑問文小考」『国語学』152，pp.（左）16-30.

多言語社会ブータン王国における市場の言語

—歩み寄りの言語選択　裏通り市場の言語調査を中心に—

佐藤　美奈子（京都大学大学院生）

1 目的

本研究は，19 もの言語民族を擁する多言語社会ブータンの市場で展開される商人と客の言語行動と言語認識を明らかにすることを目的とする．ブータンは現在，ゾンカ語（国語） を国民アイデンティティの核とすべく一言語一民族政策を展開する国家と，伝統的な多言語社会で二極化しつつある．本研究は，ゾンカ語，民族語，英語，ヒンディ語という位相の異なる複数の言語が売り手と買い手という立場の相違がある市場のコミュニケーションにおいてどのように用いられているかに着目する．それにより，急速に変化するマクロな社会構造とミクロな個人の言語実践の間で市場というメゾ構造がいかに作用するかを明らかにする．

2. 理論的枠組み

2.1 複言語主義

本研究では，欧州評議会が提唱する複言語主義の複言語能力（Coste, et al. 2009）を第 1 の理論的枠組みとする．部分能力とその相補的使用（Grosjean 2018; 2008），生涯を視野に入れた言語習得と変化の過程（「個人史」(Coste，et al. 2009）の概念）に着目することにより複数の言語が機能的に棲み分けるブータンの多言語社会において複数の言語能力をもつ話者がどのように言語を切り替え，その部分能力を相補的に用いているかを明らかにする．

2.2　言語社会化

本研究が依拠する第 2 の理論，言語社会化論は，「言語を適切に用いるための社会化」と「言語の使用を通した社会化」の 2 つから定義される（Ochs, E. & Bambi, S. 2012）．本研究では，民族の全国的な移動が活発化するブータンの首都ティンプーにおける国内移民とホストコミュニティ双方の言語社会化に着目する．全国の民族言語地域から集まった移民がどのように主流社会の言語を身に着け「ティンプー市民」となっていくか，さらに移民を受け入れるホスト側が移民の民族語にどのように対応し，両者の相互作用として現在ティンプーにおいてどのような言語変化が生じているかを明らかにする．さらに移民同士の相互扶助としての言語社会化ストラテジーも取り上げる．

3. 現地調査： 第 1 回調査 2016, 3~4　10days （西部）， 第 2 回調査 2017.3~4　10days　（西部～中央部）

3.1　観察調査とインタビュー調査の組合せ

調査は，観察調査とインタビュー調査を組み合わせておこなった．第 1 に，観察調査により，商人と客の間の会話でどの言語（ゾンカ語，民族語，英語，ヒンディ語）がどれほど，どのように用いられているのか（目的：呼びかけ，商談，雑談），第 1 発話からその後の会話の展開における言語の切り替え，商人と客の言語のズレや混在の形（「サンドイッチ型」や「相互乗り入れ型」（泉，2004：44））に着目した．第 2 に，観察したやり取りの第 1 発話者とその対話者に対してその場で質問票とインタビューによる調査をおこなった．なぜその言語を選択したのか（理由：自分の都合，相手の都合，共通語だから，その他・無意識），言語選択と対話者間の言語のズレや混在に対する意識の有無をたずねた．第 3 に，第 1 と第 2 の調査のズレとその理由に着目した．「ある言語を実際に使用すること」（実践）と「使用すると述べること」（報告）あるいは「使用していると考えること」（使用感）のズレ（カルヴェ 2000）から，ある社会である言語を使用することや使用する人に対して付加される価値やその価値に対する認識（ブルデュー1957, 1982）を明らかにする．それにより，複数の言語の社会的位相や話者人口が変化しつつあるブータンの「今」における，それぞれの言語の過渡的な位置付けや人びとの認識を明らかにする．

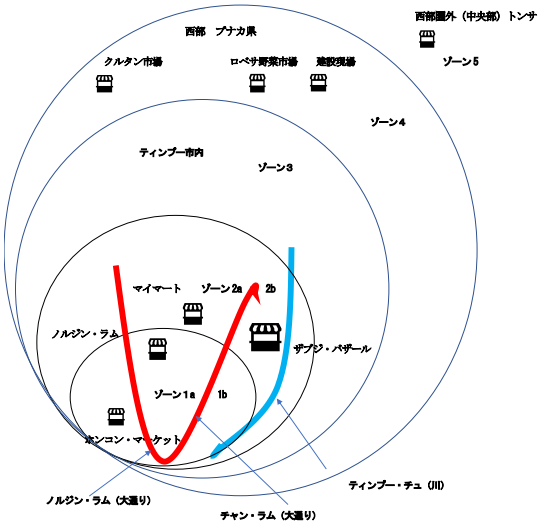


図1　ティンプー市内およびゾーン１～５

表１　市場とゾーンの特徴

		市場名	ゾーン	特徴
西部・ゾンカ語圏	ティンプー	ザブジ・バザール（午前）	2b	リバーサイド地区．日曜総合市場．全国各地から売り手・買い手が集まる．午前：週末の買い物をする主婦．午後：建設現場労働者（インド人・国内労働者）
		ザブジ・バザール（午後）		
		ホンコン・マーケット	1a	裏通り商店街・市場．長期滞在者用イン・移民集住地区、
		ノルジン・ラム	1b	表通り・オフィスビル、ショッピングモール
	プナカ県	マイマート	2	低所得者用集合住宅・移民１世～2 世定住地
		ロベサ野菜市場	4	水田地区
		プナツァンチュ建設現場	4	東西縦貫道路・水力発電所建設現場
		クルタン市場	4	近隣都市，新興住宅地
中央部トンサ		トンサ商店街	5	旧街道沿い

3.2　分析の方法と着眼点

(1)　分析の方法―ゾーン分析と 9 つの市場

調査は，都市開発が進むティンプーをその都市機能の布置から 5 つのゾーン，8 つの地区にわけ，それぞれの地域に位置する特徴的な 9 つの市場を対象に，観察調査とインタビュー調査をおこなった．ブータンの首都ティンプーは南北に延びる 2 本の大通り（ノルジン・ラムとチャン・ラム）と川（ティンプー・チュ）が交差する中心点（時計塔広場）から同心円状に開発が進められている．中心の商業地区（ゾーン 1）はノルジン・ラムの表通り（中心業務地区 CBD-1a）と裏通り（インナーシティ-1b）にわかれる．ノルジン・ラムの表通りは，近代的なショッピングモールが開発され昼間は若者が賑わうおしゃれな繁華街であるが夜は人気のない商業ビルとなる．裏通りには開発から取り残された狭い路地に古い商店とその上階の長期滞在者用インが並ぶ．かつてはインド人労働者が滞在していたが現在は全国の民族地区から集った国内労働者移民の集住地区となっている．新来移民は，まずこの下町に一時的に身を寄せ，先に到着した先発移民のサポートを受けながら仕事の斡旋と言葉を習得する（「スポンサー付きの移民」（ミルロイ＆ウェイ　1992：88)）．移民は単独で移住してくるのではない．多くの場合，先発の移民が後続移民である同郷の移民を呼び寄せ，仕事を紹介したり，言葉を助ける等のサポートをしてエスニックネットワークを形成しているのである．その後移民のなかの「成功者」は，ゾーン 1 の外縁に建設されつつある低賃金労働者の集合住宅（ゾーン 2）に移動し，地方から家族を呼び寄せる．そして「ティンプー市民」となり定住化する．学校帰りにノルジン・ラムに集い，英語とゾンカ語を自由に操る若者たちの多くは，これら移民 1 世を親にもつ移民 2 世たちである．ゾーン 2 の外側には文教地区と 1 戸建ての新興住宅地（ゾーン 3）が広がる．労働者移民とは異なる経緯でここティンプーに住むことになった高学歴の「知識人」の居住区である．ゾーン 4 は西部圏ではあるが近隣のプナカ県となる．国内唯一の空港があるパロとティンプーを結ぶ地の利から近年開発が進み，新興住宅地が建設されている．さらにその向こう，ゾーン 5 は，民族語圏となる．市場調査は，ノルジン・ラムの表と裏（ゾーン 1a, b），チャン・ラムの表と裏（ゾーン 2a, b），ゾーン 4，ゾーン 5 の各地区，9 つの市場でおこなった。

(2)　着眼点―都市開発・移民の移動・言語習得と使用

本研究では，ティンプーの都市開発ゾーンを空間的，時間的に「移動する行為者」として移民を据え，その「移民過程」と「言語社会化の過程」を重ねる．すなわち全国の民族地区出身の民族話者（移民一世）がティンプーの下町の移民地区に集住し，1～3 年の間，エスニックネットワークに支えられる形でどのようにゾンカ語を習得し，仕事を得るか，その後 3～5 年して中堅移民のなかの成功者がいかにして集合住宅に移動して家族をもち，定住化して「ティンプー新市民」となっていくか，さらにその子どもたち（移民二世）がゾンカ語を第一言語とする「ティンプー市民」として育っていくかの過程を，言語習得と使用の実践，さらにそれに対するそれぞれの意識に着目して明らかに

する。さらに，「市場」を「場」とすることで，ホストコミュニティと移民という「古参者―新参者」の関係に，市場独自の論理―「売り手と買い手」の関係―がどのように関わるかにも着目する．

3.3 分析の手順―マクロ構造からメゾ構造１・２

第１に総合市場（ザブジ・バザール午前）の言語調査を中心に，一般的な言語使用とは異なる「市場」独自の典型的なパターンを抽出する．それによりゾンカ語を共通語とするマクロな構造とは別次元のメゾ構造１として「市場の論理」を明らかにする．第２に，全国の９つの市場調査から「市場」の論理に加えて，それぞれの市場独自の地域的特徴としてメゾ構造２が言語使用に与える影響を明らかにする．

4. 調査結果

4.1　9 つの市場と 6 つのテーマ

市場ごとに独自の言語状況が観察された：（1）総合市場**「ザブジ・バザール 午前」**では，商人は流れる客の足を止めるために最大公約数的にゾンカ語を用いて客に呼びかける．その後客の言語に切り替えることで心情を掴んだり，自身に有利に商談を運ぶために自身の言語を選択する「戦略的言語切り替え」が観察された．（2）**「ザブジバザール 午後」**になると俄然ヒンディ語が目立つようになる．ブータンでは建築労働や下層労働をインド人移民労働者が支えてきた。日曜午前は１週間分の買い出しをするブータン人主婦が主な客であるが，建築現場が休みとなる日曜午後の主な客層はインド人となる．それに応じて市場の言語もヒンディ語へと変わる．「外」の世界では低賃金労働を強いられてきたインド人もここ市場では「客」となり，ヒンディ語を用いて客におもねるのは売り手側となる．それが「市場」の論理である。（3）開発が進む表通りのショッピングモール**「ノルジン・ラム」**では移民２世の若者たちが「教育を受けた新世代」のアイデンティティを確かめ合うように英語を用いる「群居機能」（カルヴェ 2001）としての英語が観察された．（4）新市街のスーパーマーケット**「マイマート」**では移民から 3～5 年の主婦たちがゾンカ語使用に徹する．レジの店員も買い手の主婦も共に地方出身者であるがゾンカ語の使用はティンプー新市民としてのアイデンティティであり，自己確認機能としてのゾンカ語使用が観察された．（5）農村の**「ロベサの朝市」**では地元の農家の主婦が野菜を売る．彼女らは昼時になると**「プナツァンチュ建設現場」**のインド人労働者に片言のヒンディ語を交えながら無言で弁当を売り歩く，サイレントトレードをおこなう．農村も近代化の渦中にある．

4.2　ティンプー裏通り「ホンコンマーケット」– 今回の発表

ティンプー裏通りのホンコンマーケットではゾンカ語話者である下町商店街の売り手とその上階のアパートに住む地方移民たちが独自のコミュニケーションを展開する．今回の発表では，特に当マーケットに特徴的に観察された２種類のやり取りを「言語社会化と共生」という観点から分析する．第１は，ホスト社会と移民という関係に売り手と買い手という市場の論理が影響した結果，どちらの言語でもないリンガフランカ（広域民族語）が両者の媒介語となった「歩み寄りの言語選択」である．主流言語であり国語であるゾンカ語を第一言語とするホスト社会側の商人も，客に対しては民族語をもって歩み寄る．ただし個々の民族語には対応し得ないことから最大限の努力として選択されたのがブータンの２大民族語―シャーショップカ語とネパール語（共に話者人口 20～30%でゾンカ語と並ぶ）―である．民族言語話者である移民側も，未熟なゾンカ語を交えながらそれに応じる．結局，誰の言語でもない第３の言語が互いの媒介語となっている。古参者側と新参者側双方による，共生のための言語社会化の成果といえる．

第２は，エスニックコミュニティ内において移民過程の異なる段階にある，新来移民と中堅移民の間で観察された言語社会化ストラテジー―「代弁」と「促し」―である．ゾンカ語が未熟な新人に代わり，「＊＊＊＊と言っている」と「代弁」したり，適切な表現をモデル化（「誘導模倣（elicited imitation）」や「誘導質問（leading question）」），語句の一部を言いかけたり引き継いだり（「空スロット empty slot）」）する「促し（プロンプト）」が観察された．中堅移民は，これらの言語社会化ストラテジーを新来移民の言語社会化過程に応じて使い分けることで，新来移民の言語社会化をサポートするのである．本研究ではこれを異郷で共に助け合うエスニックコミュニティ内での「共生のためのストラテジー」であるとともに，中堅移民が，新来移民とホストコミュニティとの関係を構築するために講じた仲介ストラテジーであると捉え，共に共生のための言語社会化と考える．

（1） 言語社会化１－商人（ホスト・ゾンカ語話者）客（移民・民族語話者）の歩み寄り

表２ 商人（ホスト・ゾンカ語話者）客（移民・民族語話者）の歩み寄り

可能言語：◎第１習得語，○商取引可能レベル，△限定的，×不可

誰から		誰に
商人 40代・女 ゾンカ語：◎ 民族語： ○（シャーショップ、ネパリ） 英語：× ヒンディ：×	NO.1 呼びかけ ゾンカ語 NO2 応答 ゾンカ語 NO.3~NO7 商談 民族語２(ネパリ) NO8 ゾンカ語 NO9 ゾンカ語	商人 30代・男 ゾンカ語：○~△ 民族語： チョチャガチャカ (Choca-nga-ca-kha) ◎、 シャーショップ○ 英語：× ヒンディ：×

NO.1 商人：kuzu zanpo（こんにちは）.
NO.2 客 ：kuzu zanpo（こんにちは）.
la: be da -i. dato tsha-i
(仕事に行ってきたんだ、今、終わった)

商人 客
＊ 値段交渉、など

NO.8 商人：・・・・la. na-pa pchiru ji-ge
(へえそうなの、じゃあ、また明日の夜ね).
NO.9 客：kadrinche (ありがとう)

会話の最初と最後はゾンカ語による定型の挨拶表現となるが，中心となる商談部分は商人（ホスト側―ゾンカ語話者），客（移民―民族語チョチャガチャカ語話者）どちらの言語でもない第３の言語―リンガフランカ（ネパール語）が用いられている．商人は，ホスト側であり主流言語派であるが売り手として客となる移民の多くが用いる２大リンガフランカ（ネパール語かシャーショプカ語）を習得し，商取引に臨む．移民側も，自身の少数派言語では通じないことは承知しつつ，ゾンカ語も未熟なことから自身の地域のリンガフランカであるネパール語で臨む．双方が互いに妥協し，歩み寄ることで会話が成り立っている．

（2）言語社会化１－中堅移民による新人移民の「代弁」：「・・・ze ‘lp-de」（・・・って言っている）

表３ 中堅移民による新人移民の「代弁」

可能言語：◎第１習得語，○商取引可能レベル，△限定的，×不可

誰から		誰に
客１ 40代・男 ゾンカ語：○~△ 民族語： ◎（ブムタンカ）、 英語：× ヒンディ：× 客２ 30代・男 ゾンカ語：○ 民族語： ◎（ブムタンカ） 英語：× ヒンディ語：×	NO.1 客１ 呼びかけ ゾンカ語) NO2 応答 ゾンカ語 NO.3 客１ 商談 民族語（ブムタンカ） NO4 客１ブムタンカ＋客２ゾンカ語 ゾンカ語	商人 50代・女 ゾンカ語：◎ 民族語：○（ネパリ） シャーショップ△ 英語：× ヒンディ：×

NO.1 客１：kuzu zanpo
(こんにちは).
NO.2 商人：kuzu zanpo
(こんにちは).
chö-lu gaci go-ni
(何がご入用で)
NO3 客１：＊＊＊＊＊＊＊
(あの赤いのが欲しい)
NO4 客２：・・・ ‘ma:p ci go. kho di go-ni le
(・・・赤いの、彼は、これが欲しいとのことです)
NO5 商人：・・・la. kadrinche
(そうですか、ありがとうございます)

ゾンカ語の習得途上にある新来移民の能力に応じて言語社会化を助けるためのさまざまな言語社会化ストラテジーが講じられるさまが観察された．ゾンカ語能力が低い移民に対しては「～と言っている」と通訳したり，買い物を代行する「代弁」となる．ゾンカ語が少し上達すると「ほら，何て？」（誘導質問），「・・・って（言いなさい）」（誘導模倣），あるいは新来移民が言いかけた言葉を中堅移民が引き継いで文を完結させる，逆に中堅移民が出だしを言い，新人移民に言葉を継がせて文を簡潔させる形 「空きスロット」が講じられる．

5. 結論

ホンコンマーケットで観察された２つの特徴的な言語実践―（1）ホスト社会と移民の間で交わされる誰の言語でもない媒介語としてのリンガフランカの使用と（2）段階の異なる移民間で講じられる「代弁」と「促し」ーは，前者は，ホスト社会と移民双方の歩み寄りの言語選択であり，後者はエスニックコミュニティ内の言語社会化ストラテジーとして解釈ができる．移民が 80%を超える（OCC 2006）ティンプーで観察されるさまざまな言語選択と言語使用の実践は，異なる民族出身のブータン人がそれぞれの位相で試みる共生の試行錯誤を反映しているといえる．

【引用文献】Office of the Census Commissioner Royal Government of Bhutan（OCC）.（2006）. *Results of Population & Housing Census of Bhutan 2005,* Office of the Census Commissioner. <http://www.bhutancensus.gov.bt>（2018 年 7 月 30 日）他.

「問い」と「答え」のズレからみるアイデンティティ

―在日コリアン親子によるナラティブの分析から―

薛桃子(大阪大学大学院)

1. 研究の背景と目的

現在日本には朝鮮半島にルーツを持ち，日本による植民地政策の影響を直接的・間接的に受け，1910 年代から 1945 年前後に日本へ渡ってきた者およびその子孫である「狭義の在日コリアン[1]」(オールドカマー，特別永住者とも称される)が約 31 万人存在する．これまで在日コリアンのアイデンティティについては，福岡(1993)や福岡・金(1997)に代表される量的調査によってアイデンティティを類型化し，その傾向を探る研究や，金(1999)や李(2016)のインタビュー調査から民族アイデンティティの揺れを描きだした研究等，社会学的な視点から多くの研究がなされてきた．本研究の目的は従来の研究ではあまり見られなかった社会言語学的観点からナラティブという相互行為の中で構築されるアイデンティティとそこから垣間見える在日コリアンが生きる社会的現実を明らかにすることである．

2. 研究方法

2. 1 調査方法

本研究では在日コリアン 3 世である調査者と在日コリアン 2 世である筆者の父親(以下，桓一：仮名)によるナラティブを収録（録音・録画）し，分析した．桓一の基礎情報を表 1 に示した．

表 1　桓一の基礎情報

年代・国籍	60 代・韓国籍
居住地	過疎化の進む地方Aに生まれ，現在も在住している．
名前	民団[2]等の活動の際は本名(韓国名)を，仕事等では通名(日本名)を使用し，2 つの名前を使い分ける．
家族	同じく在日コリアン 2 世の妻と結婚．桓一の子は日本人と結婚し，ダブル(ハーフ)の孫がいる．
言語	第一言語：日本語，第二言語：韓国語　40 代以降に韓国語学習を開始し，現在は意思疎通が可能．
民族団体活動	民団A地方本部の団長を長年務め，現在も日韓交流事業や在日コリアンシンポジウム等の企画・運営に携わっている．民団中央では幹部役員を歴任．地方参政権運動等の権益擁護運動に携わってきた活動家．

2. 2 分析枠組み・分析方法

本稿では，スモール・ストーリーの概念（Bamberg, 2004; Georgakopoulou, 2007）を援用して，桓一と調査者が協働してナラティブを構築する過程を分析し，ポジショニング理論（Davies & Harré, 1990）の観点からナラティブの中で自己をどのように見せ，位置づけているのかを探る．

3. データと分析

本研究では，桓一にとっての「母国語」という言葉のとらえ方，定義について確認するやりとりが行われた後，桓一にとっての「母国」はどこかという話題に発展した部分を分析した．

---

1 日本に在住する朝鮮半島にルーツをもつ人々を指す呼称としては，「在日朝鮮人」「在日韓国人」「在日韓国・朝鮮人」「在日コリアン」「在日」等，様々な言葉が存在するが，いずれもある程度政治的な色彩を帯びた言葉であるといえる．本研究においては，分断国家のどちらかの政府やその思想への支持を示す呼称や，分断的・二分法的思考に基づく呼称を避け，「在日コリアン」という呼称を採用することとした．また，広義の在日コリアンには，主に 1980 年代以降日本に渡り長期滞在する韓国人(ニューカマー)や，本人あるいは親が帰化したり，国際結婚の出生(ダブル)により「日本国籍」をもつ者が含まれる．

2 名称は「在日本大韓民国民団」．日本で唯一の韓国政府公認の民族団体であり，差別をなくす運動，在日韓国人(帰化同胞含む)の権益擁護運動，民族教育・次世代育成事業，在日韓国人の生活支援サービス，日韓交流の促進事業等を展開している．

データ１:「祖国・故国・母国」ナラティブ （調査者：桃子　分析対象者：桓一）

1. 桃子: じゃあ(.)お父さんにとっての母国は韓国なの？
2. 桓一: (..) 難しい質問だ[な
3. 桃子: [@@@@@(.)>なんか<私はあえてあの(.)母語という言葉は使うけど
4. 母国語って言う言葉は使わないようにしてて＝
5. 桓一: ＝↑ん：
6. 桃子: あまり(.)使いたくない@@@
7. 桓一: ↑ほんとだな
8. 桃子: ↑母国って↑何？っ¥ていう¥(.)感じがしてhhh(..)
9. 桓一: あの:田中克彦という言語学者が(.)あの:ま古い言葉でえ:(..)国家と言語だったかな言葉と国家だったかな
10. 岩波新書か岩波文庫で出てるけど古い本なんだけどそこで(.)きれいにその在日のその(..)あの(.)まあ
11. 古い本だから70年代の本だったかな初めのその当時外国人ってやっぱしほとんどが在日だったから
12. 日本でそこでの在日の実態を照らして(..)母国故国祖国っていうのを分けてたけども概念を3つ(..)
13. あの祖国っていうのは(..)やっぱし:両親ふる両親や祖父母の国(.)祖国(.)ということなんだろうしじゃあ
14. 故国っていうのは(.)故国っていうのはどこなのか(..)1世にとっては故郷の故だから(.)韓国朝鮮だろうし
15. (.)>だけど<我々2世にとってはどうだろう(..)で今言った母国語の母国って(..)どこだろう
16. で2世や3世にとっての故国はやっぱり(.)私は(.)あの：ここ(.)ふるさとA(出身地，現在の居住地域名)
17. [じゃないかなと思うんだけどな]
18. 桃子: [((大きく頷く))]
19. 桓一: で母国っていうのはま：解釈の問題もあるだろうけども:(.)え：ま国籍国(..)
20. 韓国っていう国：の国籍国を選んでいるから(.)
21. 自分が選んだんじゃない両親が選んだんだけど(..)だからま：母国はとりあえずは韓国かな>ただ<
22. ふるさとの国である故国¥は¥Aかな日本(.)日本っていう国の中のAなんだろうけど
23. 当然国民国家の上での日本とは言えないな(.)なぜかって私は(.)あの韓国籍いまだに保持しているし
24. (.)だから(..)ま:あの(.)あリージョナルな地域性でふるさとを語る↑なら故国としてのAかなっと思う(.)
25. 桃子: そ：よくなんかふるさとはどこですかとかって聞かれるときにたぶん聞いてる方は
26. 韓国のどこっていうのを¥聞いてるんだけど¥＝
27. 桓一: ＝そうだろうな
28. 桃子: ¥いやいやいあ：hh>゜みたいな<゜Aです¥てよく答えるけど
29. 桓一: と言うしかないと思うんだけどな
30. 桃子: ((頷く))

3.1 「故国」スモール・ストーリーⅡと「故郷について尋ねられる」スモール・ストーリー

1行目「お父さんにとっての母国は韓国なの？」という桃子の質問に対して，桓一は「難しい質問だな」として即答せず，9行目から田中克彦氏の『ことばと国家』という本でまとめられている「祖国」「故国」「母国」の定義を借りて，桓一にとっての「祖国」「故国」「母国」がどこなのかを整理しながら述べている．本稿では「祖国」「母国」「故国」について語るそれぞれの語りをスモール・ストーリーとして捉える(表2).

表２　「祖国」・「故国」・「母国」スモール・ストーリー

	行	スモール・ストーリー	桓一にとって祖国・故国・母国はどこなのか(田中克彦の定義を参考に)
①	13	「祖国」ストーリー	「祖父母の国」＝ 朝鮮 (分断される国家が成立する以前の朝鮮)
②	16	「故国」ストーリーⅠ	「ふるさとA」＝ 日本の中のA (日本の出身地域，現在の居住地域)
③	19~21	「母国」ストーリー	「とりあえずは韓国かな」＝ 韓国 (母国を国籍国として定義した場合)
④	22,23	「故国」ストーリーⅡ	②と同様

まず，「祖国」については，祖父母の国であると述べているので，現在の分断国家になる以前の朝鮮を指していると推測する(表2の①). 続いて「故国」については「ふるさとA」と述べ，出身地であり現在の居住地である日本のAという地域名で答えている(②「故国」ストーリーⅠ). 次に，本ナラティブのテーマである「母国」については母国を国籍国として解釈した場合としたうえで，「とりあえずは韓国かな」と述べている(③). そして，「母国」について語った直後に畳みかけるように「ただ」(「ただし」)という接続詞をつづけて，再び「故国」ストーリーに話を戻している(④「故国」ストーリーⅡ).

さらに桃子は「故国」ストーリーⅡの直後（25~28行）に「故郷について尋ねられる」スモール・ストーリーを挿入している．本稿では，「故国」ストーリーⅡと「故郷について尋ねられる」スモール・ストーリーに着目し，これらのスモー

ル・ストーリーにはどのような機能があるのか，なぜ語られたのか，そして，これらのスモール・ストーリーを挿入することによって会話参与者が協働してナラティブを構築していく過程を分析していく．

3. 2 「母国」ストーリーの矮小化（後景化）と「故国」ストーリーの補強（前景化）

スモール・ストーリーはこれまで「前述の言説を例示する」「意見を補強する」「詳細に説明する」等の機能(De Fina and Georgakopoulou，2012)や，「自分や他者の前言を撤回したり矮小化させたりする機能」(秦，2017)が例証されている．「故国」ストーリーⅡは，「母国」ストーリーが話された直後，速いスピードで「ただ(し)」という接続語を続けることで聞き手の意識を母国から故国へと引き戻し，既に語った内容を再び語っており，桓一にとって重要なのは「故国はAである」ということを強調していると分析できる．したがって「故国」ストーリーⅡは「母国」ストーリーを「矮小化させる」機能と同時に，前言した「故国」ストーリーⅠを「補強する」機能を担っていると考えられる．「故国」ストーリーⅡが語られた要因としては，国籍という制度上の母国よりも地域としての「ふるさとA」に愛着を感じる桓一の思いをあげることができるが，別の要因としてナラティブの協働構築者である桃子の影響も考えられる．続いては桃子が桓一の「故国」ストーリーⅡの発話にどのように影響を与えているのかを見ていく．

桃子は 3～8 行目で「↑母国って↑何？っていう感じがして」母国語という言葉をあえて使わないようにしているとして「母国語」という言葉に対する違和感を述べている．桓一は桃子の 4 行目の発話に対し声のトーンを高くして 5 行目「↑ん：」と間髪入れずに反応しており，7 行目では「↑ほんとだな」と同意しており，桃子の「母国語」という言葉に対する違和感に共感を示しているとみられる．しかしながら，桓一の「母国」ストーリー（19～21 行目）では，母国を国籍国として捉えた場合「とりあえずは韓国」と答えている．つまり，3～8 行目の時点では「母国語」という言葉に対する違和感を互いに確認しており，立場の均衡を保てていたが，「母国」ストーリーが始まると，桓一と桃子との間に意見のズレ，不一致が生じてしまったのである．秦(2017)では，意見の不一致が生じた会話において，「話題の微細なシフトにより不一致以外の話題を前景化させて意見の食い違いを暗黙裡に封じ込めてしまうストラテジー」としてスモール・ストーリーが現れるとしている．また，本データの 18 行目では，桓一の「故国はAである」という発言に対して桃子は大きく頷いて「故国」ストーリーに共感を示している．これらのことを鑑みたとき，桓一は「母国」ストーリーから，共感を得られるであろう「故国」ストーリーへ即座にシフトすることで，「母国」ストーリーを「矮小化させ」，「母国」に対する桃子との意見の不一致状態からいちはやく脱却することを図っていると分析できる．つまりこのナラティブの協働構築者である桃子が「母国」に違和感を呈し，「故国」ストーリーに共感を示しているということが，「故国」ストーリーⅡの出現に影響していた可能性を示している．以上のことから，「故国」ストーリーⅡは「母国」ストーリーを「矮小化」させ，「故国」ストーリーⅠで述べた「故国はAである」という意見を「補強する」機能を果たしており，その背景には桓一の思いのみならず聞き手である桃子の存在も影響していることが確認できる．

さらに，「故国」ストーリーⅡの直後，桃子によって語られる「故郷について尋ねられる」スモール・ストーリー（25~28 行目）は，桃子が誰かから「故郷」について尋ねられる際，尋ねる側は朝鮮半島のどこなのかを尋ねているのだが，尋ねる側の期待に反して日本の出身地域名で答えるという内容である．このスモール・ストーリーも桓一の「故国はAである」という桓一の「意見を補強」する作用を果たしていると考えられる．また同時に，結果的に桓一の狙った「母国」ストーリーの「矮小化」を手助けしたことにもなっている．つまり，この「故郷について尋ねられる」ストーリーも「故国」ストーリーⅡと同様，「母国」ストーリーの「矮小化」と同時に「故国」ストーリーⅠを「補強する」働きをしているのである．以上の分析から，桓一と桃子が協働して「母国」ストーリーを後景化し，「故国はAである」という「故国」ストーリーを前景化していることが分かる．

3. 3 「問い」と「答え」のズレからみるアイデンティティ

本データの全体的な流れを俯瞰してみると，当初の問いは「母国はどこか」であったにもかかわらず，まるで「母国はどこか」という問いに対する答えが「故国はA(地域名)」であるかのように，まったく違和感なく受け入れられ，収束している．これは，桓一の「故国」ストーリーⅡと桃子の「故郷について尋ねられる」ストーリーという二つのスモール・ストーリーが「母国」ストーリーを矮小化し「故国」ストーリーⅠを補強する働きをしていることによって，本来の問いからズレた「故国はAである」という答えが前面に押し出されているのである．本節では，このズレから見えてくるアイデンティティをポジショニング理論の観点から分析していく．

前述したズレは二つの点においてズレている．一つ目は，テーマが「母国」から「故国」にすり替わっているという点であり，二つ目は，故国について桓一は「日本っていう国の中のAなんだけど，当然国民国家の上での日本とは言えない」

とし「地域性で故郷を語」っている点，つまり，「故国」について「国名」ではなく「地域名」で答えるという矛盾である．

ポジショニング理論(Davies & Harré，1990)は，ナラティブの中で話し手が自己をどのように位置づけようとしているのか，つまり，どのように自己を示そうとしているのかに焦点をあてる．一点目の「母国」から「故国」へのテーマのすり替え，つまり「母国」ストーリーの後景化と「故国」ストーリーの前景化は，桓一，桃子にとっての示したい自己を反映している．「母国」に違和感をもつ両者にとって「母国」ストーリーよりも「故国」ストーリーを語る自己を示したかったからだと分析することができる．

そして，「故国」をAという日本の地域名で語ることで，生まれ育ったAという地域を故郷として捉える自己を示すと同時に，国民国家という枠組みで故郷を語れない自己を示している．国民国家という枠組みで故郷を語れない自己とは，「いまだに韓国籍を保持し」ている社会的立場ゆえに語れないのであるが，このような社会的立場だからこそ，「母国」「故国」という言葉に違和感をもち，国民国家という枠組みを意識的に捉え、近代に創られたこのシステムから一歩離れた位置から故郷を捉えられる自己となりえたともいえるだろう．このような桓一の自己の位置づけから，故郷を国民国家という枠組みではなく，地域性で語るディアスポラとしてのアイデンティティを表出していると分析できる．

そして「母国」という言葉からは，本質主義的なナショナリティやエスニシティが連想され，ディアスポラ・アイデンティティを見せる自己とは相いれないものであり，その意味で，「母国」ストーリーは後景化したいストーリーであったと分析できる．

4. まとめ

本研究では，桓一と桃子がスモール・ストーリーを挿入することで協働して「母国はどこか」という本来のテーマ(問い)からズレた「故国はAである」というストーリーへ導いていることを分析することができた．そしてこのズレの背景には，そもそも国民国家の枠組みで故郷やアイデンティティを語る言説自体が在日コリアンの社会的現実と合致しないことも相まって，これを批判的に捉え，地域で故郷を捉えるディアスポラとしての自己を示していることが確認できた．

トランスクリプト記号

(.)	小休止	(. .)	0．5秒以上のポーズ	:	伸ばした声
?	疑問形の上昇イントネーション	[	発話の重複の開始箇所	=	ラッチング
↑↓	イントネーションの上昇と下降	＞ ＜	スピードが速い箇所	h	呼気・吸気
＿＿	強調的に発音される箇所(下線)	¥—¥	笑いながらの発話	@	笑い
°ああ°	声が小さい箇所	(( ))	身体動作		

参考文献

Bamberg，Michael.（2004）Talk，small stories，and adolescent identities. Human Development，vol. 47，pp. 331-353.

Davies，B.，& Harré，R.（1990）Positioning：The Discursive Construction of Selves. Journal for the Theory of Social Behavior，20：43-63.

De Fina，Anna and Alexandra Georgakopoulou．（2012）Analyzing Narrative：Discourse and Sociolinguistic Perspectives. London：Cambridge University Press.

福岡安則（1993）『在日韓国・朝鮮人　若い世代のアイデンティティ』中公新書

福岡安則・金明秀(1997)『在日韓国人青年の生活と意識』東京大学出版会

Georgakopoulou，Alexandra.（2007）Small Stories，Interaction and Identities（Studies in Narrative），John Benjamins Pub Co.

秦かおり(2017)「「みんな同じがみんないい」を解読する―ナラティブにみる不一致調整機能についての一考察」鈴木亮子他編『話しことばへのアプローチ―創発的・学際的談話研究への新たなる挑戦』pp．217-248．ひつじ書房

金泰泳（1999）『アイデンティティ・ポリティクスを超えて――在日朝鮮人のエスニシティ』世界思想社

李洪章（2016）『在日朝鮮人という民族経験―個人に立脚した共同性の再考へ』生活書院

在日コリアン二世の方言接触

－首都圏に在住する慶尚道出身者の事例から－

吉田さち(跡見学園女子大学)　松本和子(東京大学)　金延姫(東京大学大学院研究生)

1. はじめに

本稿は首都圏在住の在日コリアンにおける方言接触とコイネー形成に関する研究の途中経過を報告するものである．オールドカマー[1]における朝鮮語の方言変容に関する研究は，これまで大阪府生野区など関西で済州道方言話者を対象に行われてきた(金美善 2001，康貞姫 2003，宋実成 2010)．しかし関西に次いで在日コリアンが集中する首都圏[2]を調査地とした方言研究や，戦前から最も多くの移民を送り出した慶尚道の出身者を対象とした方言研究は管見の限り見当たらない．そこで本研究はそうした先行研究の穴を埋めるため，首都圏に在住する慶尚道出身者二世の朝鮮語の語彙・音韻に関する調査研究に着手した．本発表では 9 名の話者を対象とした事例研究という位置づけで，慶尚道方言が日本の地で朝鮮語の諸方言や南北の標準語，さらに日本語との接触も加わりながら，どのような変容を遂げているかを考察していく．

本研究は在日ブラジル人コミュニティの方言・言語接触とコイネー化の研究(松本・奥村, 2019)で用いられた理論的枠組みのうち「フィーチャープール(feature pool)」(Mufwene 2001, 2008)と「平準化(leveling)」(Trudgill 1986, Britain 2018)を採用するとともに，新たに「ダイナミックモデル(Dynamic Model)」(Schneider 2007)の「傍層ストランド(adstrate strand)」の概念を加え分析を行う．日本国内の複数の移民コミュニティの研究で同様の理論的枠組みを用いた分析を行うことは，将来的に国内の移民言語間の比較研究を可能にするとともに，国内外の社会言語学研究の理論構築にも役立つものだと考える．

2. 在日コリアンの背景

2.1 在日コリアンの移住前と移住後の言語生活

朝鮮半島では 1910 年の植民地化以後，1938 年に「第三次教育令」が公布される頃まで「国語」(日本語)の普及政策は主に学校教育を通じて進められたが，初等教育への進学率は低い状態が続き日本語の普及は進んでいなかったという(熊谷 2006)．その後，日本語の常用運動は全国的に展開され，全ての民衆に日本語を習得させ，公私問わずあらゆる場面で日本語使用を促す「国語全解・国語常用」運動が実施された(熊谷 2006)．一方，朝鮮語の教育は 1938 年から随意科目となるものの漸次廃止されたこともあり，当時の朝鮮人児童の朝鮮語の識字率は低かったという(李炯喆 2016)．学校や公的場面では日本語，家庭や民族内のやり取りは朝鮮語を用いるダイグロシアの状況にあったことが伺える．すなわち，在日一世は家庭や近隣で地元の朝鮮語の方言を第一言語として身に着け，学校教育で日本語をある程度学習した後に渡日したと考えられる．本研究の調査対象者である日本生まれの二世は，方言話者である一世に育てられ，主に家庭で朝鮮語の方言を自然習得したが，日本の学校で習得した日本語がその後の日本での生活の中で優勢な言語になっていったという．現在では日本語が第一言語であり，朝鮮語は必ずしも話せるレベルではなく記憶の中に断片的に留まっているという話者が多い．

2.2 在日コリアン一世の出身地と方言的背景

オールドカマー一世の渡航は 1910 年の韓国併合が契機となり，それまで数千人規模だった移住者の人口は増加の一途を辿り，とりわけ 1930 年から 1940 年にかけて 29 万 8 千人から約 119 万人へと激増した(在日本大韓民国民団，以降「民団」，2019)．1937 年当時，在日コリアンの本籍地は慶尚南道，慶尚北道，全羅南道，全羅北道，忠清南道の順に多かった(坪江, 1965)．特に慶尚道，全羅道等の南部出身者の人口が圧倒的に多い．図 1 は当時の行政区画にほぼ合致した朝鮮語の方言区画を示している．韓国政府国家記録院(2019)によると，当時，親類・知り合い等の社会的ネットワークにより朝鮮半島で同郷の者が日本においても同じ地域で共に暮らし，働いていたといわれている．2011 年時点の本籍地は，最も人口の多い道から順に，慶尚南道，慶尚北道，済州道，ソウル特別市，全羅南道となっている(法務省, 2012)．当時も現在も慶

[1] 本稿では生越(2005)等を参考に「オールドカマー」を日本統治下の朝鮮半島(1910～1945)からの移民とその子孫と定義し，その二世を調査対象とする．
[2] 2018 年末現在，在日コリアンの人口の多い都道府県は，大阪府，東京都，兵庫県，愛知県，神奈川県，京都府，千葉県，埼玉県である(法務省 2019)．東京都，神奈川県，千葉県，埼玉県等の首都圏にも多くの在日コリアンが居住していることが分かる．

尚道出身者が最も多く，次いで済州道出身者[3]が多い．こうした一世の方言背景は南部の諸方言が在日コリアンの朝鮮語変種の形成に影響を及ぼす可能性を示唆している．

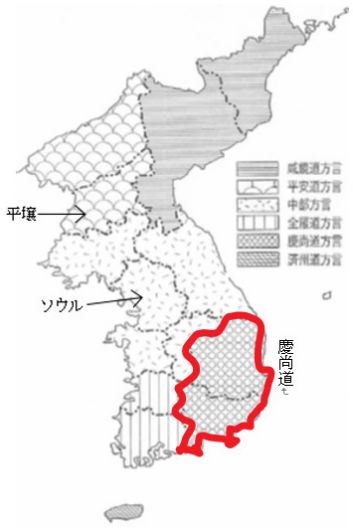


図 1. 朝鮮半島の六大方言
(李翊燮・李相億・蔡琬 2004 を改編)

3. 分析の枠組み

本稿では在日ブラジル人コミュニティの方言・言語接触とコイネー化の研究(松本・奥村 2019)で採用した理論的枠組みのうち，「平準化」と「フィーチャープール」を用いて分析を行う．まず Trudgill (1986) や Britain (2018)は方言接触によって新たなコイネーが形成される際にたどる言語的プロセスを類型化し，これらを総称して「コイネー化のプロセス (koineisation processes)[4]」と呼ぶ．その中で最も一般的なプロセスとして「平準化」が挙げられる．これは方言混合において多数派の変異形が生き残り，有標な変異形が消失する現象を指す．この文脈における有標性とは，①新天地において数の面で少数派であること，②世界的に見て稀な言語的性質を有すること，③明確にステレオタイプの対象とされていること，④子供の言語習得において後に習得されるもの等を意味する(松本・奥村 2019: 253)．幼少期に親から習得した慶尚道方言に対し，韓流ブームによる韓国ドラマの視聴やニューカマーとの交流を通じて後に習得された変異形が消失するか，あるいは生き残るかどうかを検証していく．

一方，Mufwene (2001, 2008)は方言接触・言語接触の状況下で，様々な方言・言語要素が話者の頭の中に蓄積されている状況を抽象的に表わす「フィーチャープール」という概念を提唱している．話者はフィーチャープールから既存の要素を選択したり，複数の要素を組み合わせ新たな構造を作り出したりする．ここで重要なのは，言語接触の環境下においては「外来言語要素(xenolectal feature)」もさらに加えられる点である(松本・奥村 2019: 252-3)．つまり在日コリアンの二世の優勢言語である日本語からの言語要素も彼らの朝鮮語のフィーチャープールに含まれることが予測される．さらに本研究では Schneider (2007)の提唱するコロニアル英語変種の形成過程をモデル化した「ダイナミックモデル(Dynamic Model)」の「傍層ストランド(adstrate strand)」の概念を加える．これは初期の移住者よりも遅れて入植する集団からの言語的影響を加味するために用いられた概念で，現在の韓国南部にルーツを持つ在日コリアンの場合，戦後，朝鮮学校へ通った経験のある二世に北朝鮮の言語要素が含まれる場合「傍層言語要素(adstrate feature)」として扱う．

4. 調査の概要

調査は 2019 年 7 月～12 月にかけてインフォーマントの自宅，慶尚北道道民会会場，民団支部等で実施した．中間報告として本発表では在日コリアン二世 9 名(男 3 名，女 6 名)から収集した①アンケート，②語彙調査(翻訳式・なぞなぞ式)を分析する．年齢は 73 歳～86 歳，全員が家で親から朝鮮語を学んだと証言している．また，9 名中 8 名は両親ともに慶尚道出身者，9 名中 6 名の配偶者が慶尚道出身の親を持つことから，当時の同郷の者同士の強いつながりが伺える．

本研究では日本統治下の 1910 年代から 1930 年代にかけて小倉(1944ab)が朝鮮半島全土で行った方言調査を基礎資料として用いる．これは移住者の方言接触と変容を分析するためには，現在の祖国の方言・標準語との比較だけではなく，移住当初の方言との比較を行うことが重要であるためである(松本 2016)．小倉(1944ab)を基とした 2 つの言語地図(中井・亀山, 2007; 福井 2017, 2018)を活用し，①慶尚道方言の音韻的特徴が見られること，②日常生活でよく使われる語彙であること，という 2 つの基準を満たす 62 項目を選んだ．さらに，金由美(2005)・金美善(2001)等や首都圏在住の在日コリアン四世との予備調査を参考にして，オールドカマー独自の音韻・語彙的特徴が見られる語彙・表現 74 項目を加え，計 123 項目を本研究の調査語彙とした．

本発表では音節核のヴァリエーションを考察する．日本統治下に作られた朝鮮語の標準語[5]では半母音(/j/と/w/)を含む多重母音で発音されていた音節核が，慶尚道方言等では半母音無しの単独母音で発音される傾向にあった．調査語彙のうち音節核のヴァリエーションが見られる単語延べ 10 語(뼈(骨) [ʔpjɔ]など/j/を含み得る単語延べ 6 語，ᄀᆡ(耳) [kwi]など/ w/を含み得る単語 4 語)を対象とし，計 87 トークン[6]を分析していく．

---

[3] 行政区画上，済州道は 1937 年時点では慶尚道に次いで多くの移民を送り出した全羅南道の中に組み込まれていた．

[4] 紙幅の制限のため，ここでは本稿で関連のあるプロセスだけを取り上げた．

[5] 朝鮮語における標準語の制定は，日本統治下である 1912 年の「普通学校用諺文綴字法」まで遡る(李翊燮・李相億・蔡琬, 2004)．当初はソウル方言を標準語とし韓国ではそれを継承したが，北朝鮮では後に平壌方言を標準語として定めるとともに「文化語」と命名した (李翊燮・李相億・蔡琬 2004)．しかし当時作成された方言地図が以下で示すように，当時の標準語とされる変異形が必ずしもソウルで観察されるわけではない点に留意されたい．

[6] 本発表では暫定的に，語彙を覚えていない場合はカウントせず，方言形と標準形の両者を発話した際はそれぞれカウントした．また，잎사귀(葉)[ip-ʔsa-gwi]，뼈다귀(骨)[ʔpjɔ-da-gwi]はそれぞれ半母音/w/を含み得ない語形を回答したものが 12 トークンあり，暫定的に「その他」としてカウントした．今後方針を固めていきたい．

表 1. 半母音/j/を含む多重母音と半母音/j/無しの単独母音のトークン数と割合

位置	語頭	語中	語中	語中	語中	語中	合計
調査語彙	양념장(ヤンニョムジャン) [jaŋ-njɔm-dʒaŋ]		뼈(骨) [ʔpjɔ]	비녀(かんざし) [pi-njɔ]	병아리(ひよこ) [pjɔŋ-a-ri]	며느리(嫁) [mjɔ-nɯ-ri]	(語中)
[j]を含む多重母音	14 (100%)	5 (35.7%)	6 (66.7%)	2 (22.2%)	3 (50.0%)	2 (18.2%)	18 (36.7%)
[j]無しの単独母音	0 (0.0%)	9 (64.3%)	3 (33.3%)	7 (77.8%)	3 (50.0%)	7 (63.6%)	29 (59.2%)
その他	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	2 (18.2%)	2 (4.1%)
計	14 (100%)	14 (100%)	9 (100%)	9 (100%)	6 (100%)	11 (100%)	49 (100%)

5. 分析

5.1 単語間のゆれ

図 2 は 1910 年代から 1930 年代当時の「비녀(かんざし)」[pi-njɔ]の分布を示した方言地図である(福井 2018: 32). 慶尚道やソウル周辺の中部方言では半母音を伴わない単独母音の[pi-nɛ]や[pi-na]が優勢であるが，標準形[pi-njɔ]はごく僅か中部方言で確認される少数派であることが分かる．表 1 は二世の半母音/j/を含む多重母音と半母音無しの単独母音の出現数と割合を単語ごと・位置ごとに示したものである．結果は語頭と語中では明確な違いを示した．語頭(ヤンニョムジャン[jaŋ-njɔm-dʒaŋ])では 100%半母音/j/を含む多重母音で発音され，語中では「뼈(骨)」[ʔpjɔ]以外の 4 語全てが 50%以上半母音を伴わない単独母音で発音された．つまり，語中では半母音無しの単独母音，語頭では半母音を伴う多重母音が多いという分析結果は，慶尚道方言の半母音/j/は語頭ではよく現れるが，子音・母音間では現れにくいという出現の制約(趙義成 2007)に一致している．これは慶尚道出身者二世が慶尚道方言の言語的制約も継承していることを示唆する．

一方，図 3 は当時の「잎사귀(葉)」[ip-ʔsa-gwi]の分布を示した方言地図である(中井・亀山 2007: 231). 凡例では[gwi]が[gui]と表されているので留意されたい．これは複数の変異形を持つ単語で，慶尚北道方言では半母音を伴わない単独母音の[ip-sa-gu]が，慶尚南道方言と中部方言では[ip-pʰa-ri]が優勢形であるが，忠清道・全羅道では標準形[ip-ʔsa-gwi]が確認される．9 名の発音を分析した結果，興味深いことに慶尚北道出身の親を持つ在日二世であっても，慶尚南道方言と中部方言で使われていた[ip-pʰa-ri]が圧倒的優勢形で，慶尚北道方言の[ip-sa-gu]は少数派であることが判明した．さらに標準形[ip-ʔsa-gwi]を用いた話者はいなかった．このことから，二世は必ずしも親の出身方言をそのまま継承するわけではなく，コリアン集住地などで多様な方言が接触した結果，方言混合が起きていた様子が伺える．

表 2 は半母音/w/を含む多重母音と半母音無しの単独母音のトークン数と割合を単語ごとに示したものである．結果は二分され，半母音/w/無しの単独母音が 50%以上現れた単語は 4 単語中귀(耳)[kwi]と까마귀(カラス)[ʔka-ma-gwi]の 2 語で，残りの 2 語は「その他」が多かった．後者の뻐다귀(骨)[ʔpjɔ-da-gwi]は「뼈」(骨)だけで単語として成り立つため，半母音/w/を含みうる接尾辞[-da-gwi]を用いない語形を回答したことによる [7]. 一方，잎사귀(葉)[ip-ʔsa-gwi]は前述の通り本調査では慶尚南道方言と中部方言の変異形[ip-pʰa-ri]が優勢形であったため[gwi]を用いない語形を回答したことによる．実際に半母音/w/を含みうる語形を含めた回答をしたものは全て[w]を含まない単独母音で発音されている．つまり，これは慶尚道方言で多数派であった発音が優勢形として二世の間で生き残っているこ

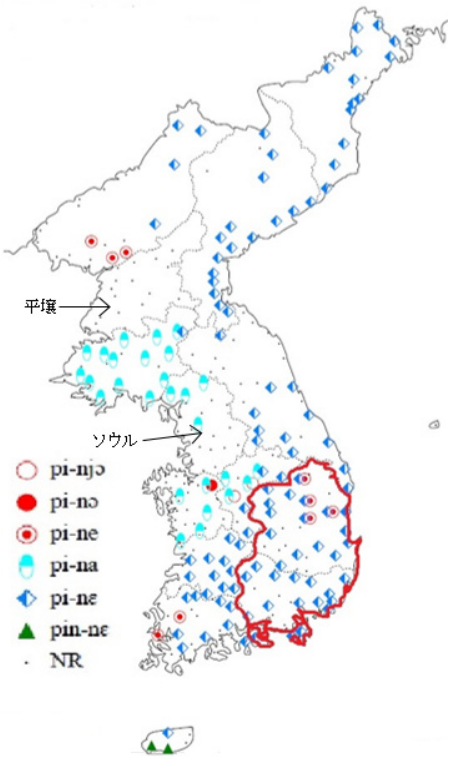


図 2. 비녀(かんざし)の分布 (福井 2018 を改編)

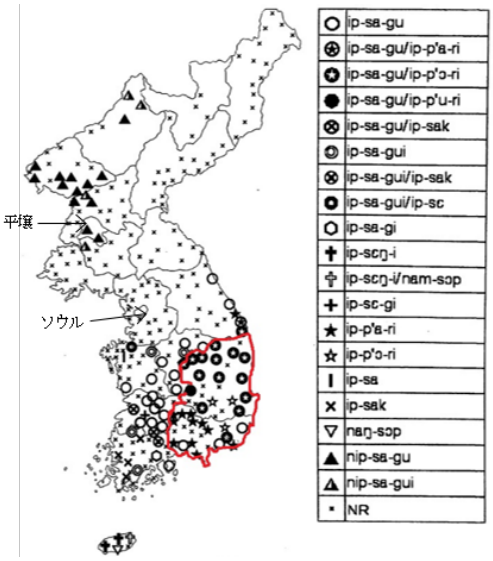


図 3. 잎사귀(葉)の分布 (中井・亀山 2007 を改

[7] ハングルは字母が弁別的素性と対応していて読み上げ式は適切ではないため，翻訳式・なぞなぞ式の形式で調査を行った.

表 2. 半母音/w/を含む多重母音と半母音/w/無しの単独母音のトークン数と割合

調査語彙	귀(耳) [kwi]	잎사귀(葉) [ip-ʔsa-gwi]	까마귀(カラス) [ʔka-ma-gwi]	뼈다귀(骨) [ʔpjɔ-da-gwi]	合計
[w]を含む多重母音	2 (25.0%)	0 (0.0%)	2 (16.7%)	0 (0.0%)	4 (10.5%)
[w]無しの単独母音	6 (75.0%)	2 (22.2%)	10 (83.3%)	4 (44.4%)	22 (57.9%)
その他	0 (0.0%)	7 (77.8%)	0 (0.0%)	5 (55.6%)	12 (31.6%)
計	8 (100%)	9 (100%)	12 (100%)	9 (100%)	38 (100%)

とを示しており，平準化が起きていた推察される．

もう一つ特筆すべき点は日本語の要素が今回の調査語彙の発音の中で僅かながら観察されたことである．例えば「양념장(ヤンニョムジャン)」[jaŋ-njɔm-dʒaŋ]の第二音節末の子音は[m]と[n]が混在し，「뼈(骨)」[ʔpjɔ]の語末の母音は[ɔ]だけでなく[o]の発音も観察された．二世にとって優勢言語である日本語からの外来言語要素が話者のフィーチャープールに取り入れられ採用されたと考えられる．また「까마귀(カラス)」の語頭には方言形[ʔka-ma-gu]・標準語[ʔka-ma-gwi]いずれにおいても本来[ʔ]が入るが，在日コリアン二世では[ʔ]を発音せずに[ka-ma-gu]と日本語風に発音するケースが多々あった．

5.2 話者間の揺れ

図 4 は半母音の/j/と/w/を含み得る単語の全トークンの発音を話者ごとに示したものである．結果は韓国へ短期留学の経験を持つ話者 8 を除く全話者で単独母音のトークン数が半母音を含む多重母音のトークン数を上回っていた．つまり一世の出身方言の特徴である半母音無しの単独母音が優勢形として二世において生き残り継承されていることを示している．特に半母音を用いなかった話者 1・3 は言語形成期を在日コリアン集住地で過ごし，結婚後もしばらくは朝鮮語を家庭である程度用いていたという共通点がある．対照的に半母音を含む多重母音を多く使用した話者 5・7 は，朝鮮語学校やラジオ番組を通じて朝鮮語を学習した経歴を持つとともに，民団や道民会への参加も積極的でニューカマーとの交流の機会が多く，韓国の親戚に会いに頻繁に訪韓しているという共通点を持つ．つまり前者はかつての慶尚道出身者が集う近隣や家庭で朝鮮語を使用していたため当時の慶尚道方言がそのまま記憶に残っているが，後者は現在に至るまで朝鮮語を使い続ける中で現在のソウルやその他の地域からの多様なインプット要素が話者のフィーチャープールに取り混まれたことが考えられる．なお朝鮮学校へ通っていた話者を含め，今回の調査で当時の平壌の変異形，例えば[pgŋ-a-ri] (ひよこ)や[nip-sa-gu] (葉)を用いた話者はいなかった．現在の韓国にルーツを持つ在日コリアン二世の中で朝鮮語が流暢な話者が，北朝鮮の変異形ではなく現在のソウルの変異形をフィーチャープールに取り込む傾向があることは理にかなっていると言えるだろう．

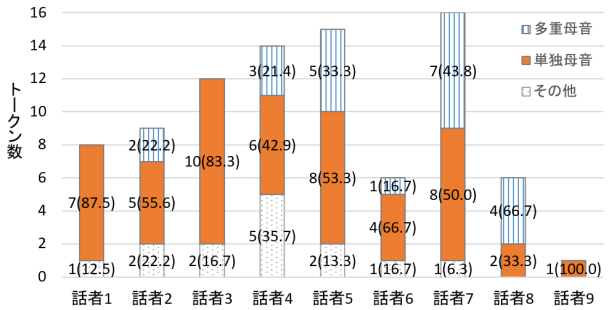


図 4. 多重母音と単独母音の話者別トークン数と割合

6. 結論

移民一世がもたらした朝鮮語の諸方言が首都圏の家庭やコリアン集住地で接触した結果，方言混合が起こり，二世は一世の親の出身地の変異形のみならず，多様な変異形を含むフィーチャープールを保持している事例を提供した．さらに朝鮮学校，韓国ドラマ，訪韓によってソウルやその他の地域で使われている変異形を取り入れている話者もいること，二世にとっての優勢言語である日本語からの影響も僅かながら観察されることを示した．しかし全体的には，後に習得した変異形よりも両親・隣人等から最も多くインプットされていた慶尚道方言の変異形が大半を占めるため，多数派の変異形が生き残るという「平準化」が起きていたと考えられる．今後はより多くの被験者からデータを収集し，言語内的・言語外的要因との関連を詳細に分析していきたい．

参考文献 (Selected References)

Britain, D. (2018) Dialect contact and new dialect formation. In C. Boberg *et al.* (eds.), *Handbook of dialectology*. Oxford: Blackwell.

福井玲 編 (2017) (2018)「小倉進平『朝鮮語方言の研究』所載資料による言語地図とその解釈―第 1・2 集」，東京大学人文社会系研究科　韓国朝鮮文化研究室.

李翊燮・李相億・蔡琬 (2004)『朝鮮語概説』，大修館書店

松本和子 (2016)「社会言語学の研究動向と方言研究との接点―接触日本語変種の研究を中心に―」『方言の研究』2: 131-150.

松本和子・奥村晶子 (2019). 在日ブラジル人移民のコイネー形成―方言接触，創始者効果，フィーチャープールの検証― 『社会言語科学』22(1): 249–262.

Mufwene, S. (2001) *The ecology of language evolution*. Cambridge: Cambridge University Press.

Mufwene, S. (2008). *Language evolution: Contact, competition and change*. London: Bloomsbury.

中井精一・亀山大輔 編 (2007)『朝鮮半島言語地図』，富山大学

小倉進平 (1944ab)『朝鮮語方言の研究』上下巻，岩波書店

Schneider, E. (2007) *Postcolonial English: Varieties around the world*. Cambridge: CUP.

Trudgill, P. (1986) *Dialects in contact*. Oxford: Blackwell.

坪江汕二(1965)『在日本朝鮮人概況』，巌南堂書店

コイネー化における社会的意味と社会階層の役割

―日本のブラジルポルトガル語変種の事例―

松本　和子(東京大学)　奥村　晶子(東京大学)

1. はじめに

本稿は在日ブラジル人コミュニティにおける方言接触とコイネー形成に関する研究の途中経過を報告するものである．日系移民の受け入れが開始されて以来，さまざまな視点から在日ブラジル人に関する社会言語学的研究がなされてきた．しかしブラジル各地からもたらされたポルトガル語の諸方言が日本各地で接触し，さらに日本語との接触も加わりながら，どのようなコイネー(接触方言)が形成されつつあるか，という観点からの言語学的調査は見当たらない．本研究はまさにそうした先行研究の穴を埋めようとするものである．

いわゆる「ディアスポラ言語」としてのポルトガル語で使用される R 音の研究は社会言語学的に非常に興味深い．なぜならば多様な「variants (変異形)」が言語的環境によって，またブラジルの地域によって異なる分布を見せているため，方言接触とその結果を考察するのに適しているからである．松本・奥村(2019)は R 音の中でも「Strong-R[1]」に焦点を当てた研究の中で，祖国を離れ新天地で変容を遂げるディアスポラ言語変種の変化の過程と結果を理解するためには，①移民の出身地と方言の特定，その数・割合を調査究明すること，そして②祖国の言語変化の歴史的変遷を考察することの重要性を指摘した．本発表では「Coda」つまり音節末の R 音へと分析対象を広げ，上記①②のみならず，さらに③話者の「社会階層(social class)」および祖国で各変異形が帯びている「社会的意味(social meaning)」を精査することが「移民コイネー(immigrant koine)」(Siegel 1985)の形成のプロセスと帰結を理解するうえで有益であることを論じる．

2. 在日ブラジル人コミュニティ

本研究が調査対象としている茨城県常総市は外国人居住者が人口の 7.7%を占める地域であるが，その中でもブラジル人が最多で，その多くが食品工場で就労している．ブラジル人を顧客とするスーパー，レストラン，美容院，スポーツジム，ポルトガル語で利用できる教会，ブラジル人学校などが揃い，ポルトガル語だけで生活を営む人もいる．

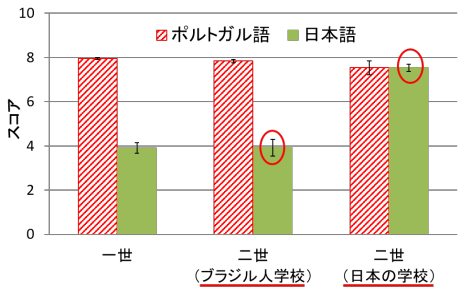


図 1：口頭言語能力への自己評価 (松本・奥村 2019: 252)

当該地で行った一連の予備調査の結果 (図 1)[2]，①ポルトガル語は二世へも継承されていること，②日本語能力に関しては，日本の学校へ通う二世とブラジル人学校へ通う二世では有意な差があることが判明した(松本・奥村 2019: 251)[3]．本研究ではブラジルからもたらされたポルトガル語変種が日本でどのような変容を遂げているか，その変化の過程と結果および諸要因を解明することを目指している．具体的には，①起点として位置づけられる祖国ブラジルのポルトガル語の諸方言の特徴と変化のありさまを捉えたうえで，②移民一世がどのようなポルトガル語の方言を常総市へもたらしたのか，③二世がそれを継承する過程でどのような変容が観察されるのか，を主に方言接触と方言変化の観点から精査していく．また日本語も流暢な話者もいることから，言語接触の視点より日本語の影響が見られるかどうかにも注視する．

3.　分析の枠組み

本研究では方言接触および言語接触に関する以下の理論的枠組みを採用する．まず，Mufwene (2008)の提唱する「フィーチャープール」である．これは方言接触の状況下において様々な方言要素が話者の頭の中に蓄積されている状況を抽象的に表現したものである．ここで重要なのは言語接触の環境下においては「外来言語要素(xenolectal feature)」と呼ばれる

---

[1] ブラジルポルトガル語における R 音に関する研究では，音節構造に基づき一般的に「Strong-R」「Weak-r」「Coda」の 3 つに分けて分析される(詳細は松本・奥村 2019: 254-255 を参照)．「Strong-R」は軟口蓋，口蓋垂，声門にかけての後部位置で発音される摩擦音を指し，語頭の<r>と母音間の<rr>で現れる．

[2] 図 1 は一世と二世の 138 名を対象に行った Feijo (2016)のアンケート調査を再分析したものである．詳細は松本・奥村(2019: 260)を参照されたい．

[3] Mann-Whitney U Test ($U=93.500, N_1=26, N_2=37, p<.0005$, two-tailed).

非母語システムからの要素もさらに加えられることである．話者はそうしたフィーチャープールにある既存の要素を維持・選択することもあれば，複数の要素を組み合わせるなどしてインプット方言にはなかった新たな構造を作り出すこともある．さらに Mufwene (1996)は，移民が長期間定住した地域で形成される新たな言語変種が初期の移民のもたらした方言要素を基盤とする傾向を指摘し，これを「創始者効果」と称する．

一方，Trudgill (1986)や Britain (2018)は，方言接触によって生み出される新たな方言が形成される際に起きる言語的過程を類型化し，これを「コイネー化のプロセス(koineization processes)[4]」と呼ぶ．最も一般的なプロセスとして「平準化(levelling)」が挙げられる．これは「方言混合(dialect mixing)」において多数派の変異形が生き残り，「有標な(salient)」変異形が消失する現象を指す．この文脈における「有標性」とは，①新天地において数の面で少数派であること，②世界的に見て稀な言語的性質を有すること，③明確にステレオタイプの対象とされていることなどを意味する．

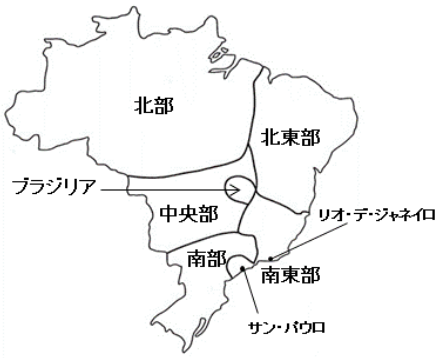


図 2: ブラジルの方言区画 (Canepari 2017)

4. 調査の概要

本研究では茨城県常総市のブラジル人コミュニティにおいて一世と二世 (18 名，42 名[5])の計 60 名より①アンケート，②単語の読み上げ，③談話データを収集した．今回は①出生地・居住歴・就学歴・職歴に関する質問への回答，② R 音の中でも「Coda」，つまり音節末に<r>を含む単語の読み上げデータに絞って定量・定性分析を行う．ブラジルポルトガル語の音節末/r/はどの変異形でも入りうる言語的環境と見なされ(Rennicke 2015)バリエーション研究が盛んに行われている．本発表では porta (ドア)などの語中の音節末<r>，mar (海)などの語末の音節末<r>を含む延べ 29 語 (語中 12 語，語末 17 語)を対象とし，計 1,740 トークンを分析していく．

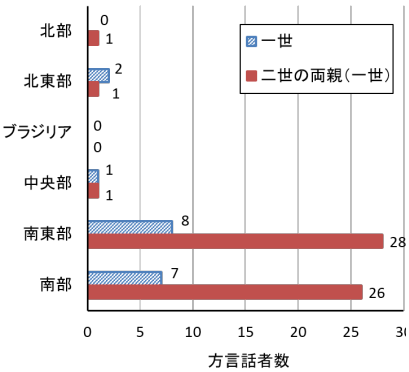


図 3: 常総市の移民一世の出身方言

5. 分析

5.1 コミュニティの方言的背景

「創始者効果」を検証するため，まず常総市へ移住したブラジル人移民一世がどのようなポルトガル語の方言を日本へ持ち込んだのかを探る．図 2 の音韻に基づいた方言区画(Canapari 2017)によると，ブラジルのポルトガル語の方言は「北部」「北東部」「中央部」「ブラジリア」「南東部」「南部」の 6 つに区分される．

次にこの方言区画と照らし合わせ，常総市の移民一世の方言に関する背景を整理していく．出生地・居住歴に関する質問への回答を参照し，臨界期以前に最も長く時間を過ごした地域の方言を話者の出身方言とした．対象としたのは常総市の移民一世 102 名である(一世 18 名と二世 42 名の両親 84 名)[6]．整理の結果，サン・パウロ州やパラナ州の出身者が圧倒的に多いことが判明した(詳細な出身地は Matsumoto & Okumura 2020 を参照)．図 3 は一世の回答を上記の方言区画に分けて示したものである．ここから常総市の移民一世はブラジルポルトガル語の南東部方言と南部方言話者が大多数を占めることが明らかになった．こうした一世の方言は，現在形成しつつある二世のポルトガル語変種へ強い影響を与え得ると予測される[7]．

5.2 ブラジルにおける音節末/r/の地理的分布・通時的変化・社会的意味

図 4 は音節末/r/の地理的分布を示している．ここからブラジルでは全国的に軟口蓋摩擦音[x]が優勢形であるが，常総市の移民一世の主な出身地域(赤い丸で囲んだ地域)では歯茎はじき音[ɾ]とそり舌接近音[ɻ]の併用が南部から南東部に広がり，[x]はリオ・デ・ジャネイロやその北側にあるミナス・ジェライス州に限られていることがわかる．

一方，Rennicke (2015: 45-46)は音節末/r/の通時的変化の研究の中で Noll (2012)を引用しながら，①[ɾ]はポルトガル本土からもたらされた最古の変異形であるが，現在それが残存しているのは特定の地域に限られていることを指摘している．さらに，②リオ・ジ

---

[4] 紙幅の制限のため，ここでは本稿で関連のあるプロセスだけを取り上げた．

[5] 話者がどこで言語形成期を過ごしたかがその後の言語使用へ大きな影響を及ぼすことから，本研究では①日本で生育した二世 21 名と②ブラジル生まれではあるが，幼少期に来日し言語形成期を日本で過ごした 21 名を二世として分析する．

[6] 本研究で扱う一世と二世の多くは親子関係にない．二世は親に連れられて来日したことから，当然ながら二世の親も常総市のブラジル人コミュニティの一員(一世)であるため調査対象とした．なお「両親の出身地が不明」「父親がペルー人」などの場合を除いた計 75 名に関する回答に基づき図 3 を作成した．

[7] 松本・奥村(2019: 259)はブラジルへ渡った邦人移民が上記の地域に集住する傾向がある(Sakurai & Coelho 2008)ことから，日本国内に誕生した他の在日日系ブラジル人コミュニティにおいても類似した方言構成，しいては類似したコイネーが形成される可能性を示唆している．

ャネイロやその北部にあるミナス・ジェライス州中部以北では音節末/r/は「Strong-R」と同様に後部位置で発音され[x, h]のように摩擦音化し，③ミナス・ジェライス州西部以南の多くの地域では接近音[ɻ]へ変容しつつも古い[ɾ]と共存しているという．

さらに Oushiro & Guy (2015), Oushiro & Parafita Couto (2018)はこれらの変異形の社会的意味を指摘している．商業・文化の拠点であるリオ・デ・ジャネイロとサン・パウロでそれぞれ使用される[x]と[ɾ]はメディア各種・公人に用いられており，「顕在的威信(overt prestige)」形として都市部を中心に社会階層の高い話者に好まれるという．対照的にサン・パウロの郊外や南部方言地域に居住する社会階層の低い話者に好まれてきた[ɻ]は，従来「田舎の教養のない(rural, uneducated)」話し方という評価が付与されてきたが，近年そうした評価が薄れ「連帯感(solidarity)」を醸し出す「潜在的威信(covert prestige)」形として都市部へもその使用が拡大しているという．以下，異なる社会的意味を持つ複数の変異形が接触する常総市の状況を見ていく．

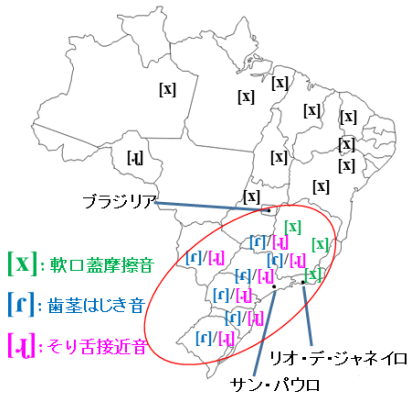


図 4: 音節末/r/の地理的分布 (Noll 2008 を改編)

5.3 常総市在住一世の音節末/r/の分布と社会階層

表 1: 一世の音節末/r/の分布 出現数 (出現率)

	[ɾ]	[x]	[h]	[ɾ]	[ɻ]	Ø
語中	3 (1.4%)	0 (0.0%)	1 (0.5%)	113 (52.3%)	92 (42.6%)	2 (0.9%)
語末	9 (2.9%)	1 (0.3%)	2 (0.7%)	67 (21.9%)	179 (58.5%)	34 (11.1%)

表 1 は一世の単語リストの読み上げ結果を語中・語末別に示したものである[8]．結果はサン・パウロ州やパラナ州を含む南東部・南部方言地域で併用されている[ɾ]と[ɻ]が一世の間で多数派を占めていることを示した．具体的には，[ɾ]は語中では 5 割強，語末では 2 割強の使用率を，[ɻ]は語中では 4 割強，語末では 6 割弱の使用率を示し，二つとも甲乙付け難い優勢形だと言える．一方，リオ・デ・ジャネイロや北部・北東部方言地域で広く浸透している「Strong-R」化した変異形([x]や声門摩擦音[h]，歯茎ふるえ音[r])は語中で 1.9% (N=4)，語末で 3.9% (N=12)の使用に限られていた．言い換えれば，これはサン・パウロ州やパラナ州の出身者が圧倒的に多い常総市における方言接触の中でそれ以外の地域で使用される変異形は少数派であり，平準化のプロセスの中で消失したと解釈することができる．つまり，これはコイネー化のプロセスに合致した結果だと言える．

ここから一世の職歴および就学歴を整理し，音節末/r/の実現形と話者の社会階層の関係を考察する．まず職種に関しては，常総市の移民一世 102 名(一世 18 名と二世 42 名の両親 84 名)[9]を対象とし，移住前と移住後の職業を調べた．整理の結果，ブラジルでは店員が最も多く，次に事務職と工場勤務が多かったが，日本での雇用は工場が圧倒的大多数を占めることが判明した．つまりブラジルの職場では同僚にならなかったような話者同士が常総市の工場で共に働いている状況が浮かび上がってきた．一方，就学歴に関しては言語データを収集した一世 18 名のみを対象としたため小規模で一般化はできないが，過半数は高卒(11 名，61.1%)，残りは大卒(5 名，27.8%)，専門学校卒・中卒(各 1 名)であった．

ここから話者ごとの音節末/r/の使用を考察してみると，語中では主に[ɾ]，語末では主に[ɻ]といった使い分けをした話者は 3 名のみであり，大半の一世は[ɾ]あるいは[ɻ]のいずれかを主に使用する話者であることが判明した．語中・語末の(いずれかの)位置で 8 割以上[ɾ]を使用する話者は 5 名おり，その学歴は大卒と専門学校卒が大半を占め，現職は自営業者と教員であった．一方，圧倒的に[ɻ]を使用する話者は 7 名おり，二名を除き全員が中卒か高卒，大半が現在工場で従事していることが判明した．このことから話者の学歴・職業が一世の音節末/r/の実現形に関与していることが浮かび上がってきた．つまり，祖国ブラジルと同様に常総市においても社会階層の高い話者は[ɾ]を好み，社会階層の低い話者は[ɻ]を好む傾向が確認された．これは本国で各変異形が帯びている社会的意味が少なくとも移民一世の間では踏襲されていることを示唆している．

5.4 常総市在住二世の音節末/r/の分布

表 2: 二世の音節末/r/の分布 出現数 (出現率)

	[x]	[h]	[ɾ]	[ɻ]	Ø
語中	0 (0.0%)	0 (0.0%)	23 (4.6%)	453 (89.9%)	7 (1.4%)
語末	2 (0.3%)	1 (0.1%)	4 (0.6%)	680 (95.2%)	13 (1.8%)

次世代ではこうした傾向はどのように継承されるのだろう．表 2 は二世の単語リストの読み上げ結果を語中・語末別に示したものである．結果は二世の間では[ɻ]の使用率が語中・語末いずれの位置においても 9 割前後まで高まり，急速に収束していることを示している．それとは対照的に一世の間では甲乙付け難い優勢形のひとつであった[ɾ]は語中で 4.6%，語末では 0.6%まで使用が激減し，さらに一世の間で少数形であった[x, h, r]に関しては[r]は使用されず，[x, h]の使用(0.4%)は語末に限定されるなど，優勢形の[ɻ]との競争に敗れ平準化が急速に進行していることが見て取れる．

ではなぜ一世と二世で著しい世代差が生じたのか．その疑問を解く鍵は本国ブラジルにおける[ɻ]の社会的意味にありそう

[8] 紙幅の制限により，本稿の表から「その他」は除いた．表 1 では 19 トークン(語中 5 トークン，語末 14 トークン)，表 2 では 35 トークン(語中 21 トークン，語末 14 トークン)不明瞭な発音や non-rhotics などが見られた．後者に関しては表 1・2 にある「ø (zero variant)」とともに今後より詳細に分析する予定である．

[9] 詳細は注 6 を参照されたい．なお転職したものを含むため，合計数は被験者数と合致していない点に留意されたい．

だ．一世は祖国での生活を通じて従来[ɻ]の持つ「田舎の教養のない話し方」というステレオタイプを認識しており，仮に普段は[ɻ]を使っていても単語の読み上げタスクではそれを意識的に回避し，あえて威信のある都会的な[ɾ]を発音した可能性がある．実際に一世で100%[ɾ]を使用した話者から「このリストを読んだら田舎者だってばれちゃうじゃない」とい発言も聞かれた．今後は自然談話データの分析を進め，一世にスタイルシフトが見られるかどうかを究明していきたい．

では常総市でなぜ[ɾ]ではなく[ɻ]が勝ち抜いたのか．その手掛かりは①移住前と移住後の一世の職業の変容と②本国で進行中の言語変化にありそうだ．[ɾ]と[ɻ]を用いる話者が工場などで共存する常総市で生まれ育った二世には，話者の社会階層と各変異形の結びつきが明確ではなく，またブラジルにおける[ɻ]の従来のステレオタイプを認識していない可能性がある．その一方で，通信機器の発達により本国の現代風の話し方に触れる機会に溢れる移民社会で，二世がサン・パウロの若者の間で使用が拡大している[ɻ]を今風の話し方だと認識し，常総市においても連帯感を醸し出す潜在的威信形として積極的に取り入れている可能性も考えられる．今後は話者の意識(perception)に関する実験などを行い，より詳細に分析していきたい．

もう一つ特筆すべき点は日本語が流暢で日本の小学校へ通う二世が preferir (好む)という単語の語末の<r>を歯茎側面接近音[l]のように発音したことである．[l]は移民一世が祖国ブラジルから持ち出した音節末/ɾ/の変異形には存在しておらず，さらに日本語話者が英語を学習する際に/l/と/ɾ/を混乱する現象を彷彿させる．この話者は「Strong-R」の研究(松本・奥村2019)では rural (田舎の)という単語の語頭の<r>を日本語の「フ」のように両唇摩擦音[ɸ]で発音し，pirraça (意地悪)という単語の母音間の<rr>を日本語の「ラ」のように[ɾ]で発音している．Mufwene (2008)の主張するように，日本語との接触によって非母語システムの影響を受けインプット方言にはなかった新たな構造を作り出している可能性も考えられる．この点も自然談話データの分析を進め精査していきたい．

6. 結論

本稿は前回の「Strong-R」の研究(松本・奥村2019)と同様に音節末/ɾ/の研究においても，移民一世のもたらしたブラジルポルトガル語の諸方言が常総市で接触した結果，平準化が起こり，それが二世に継承されてさらに収束の方向へ変化が加速する一方で，競合する言語である日本語からの影響も示唆されたという事例を提供した．同時に，平準化のプロセスを経た一世の方言が，二世のポルトガル語変種の基盤となっていることを示し，在日ブラジル人コニュニティのコイネー形成における創始者効果の概念およびコイネー化のプロセスの有効性を実証した．前回の「Strong-R」(松本・奥村2019)および本発表の音節末/ɾ/の考察から，祖国を離れ新天地で変容を遂げるディアスポラ言語変種の変化の過程と結果を理解するためには，①移民の出身地と方言の特定，その数・割合を調査究明すること，②祖国の言語変化の諸相，③各変異形の社会的意味とその変容，④話者の社会階層に関する知見を加味することが重要だと言えるであろう．

参考文献

Britain, D. (2018). Dialect contact and new dialect formation. In C. Boberg *et al.* (eds.), *Handbook of dialectology.* Oxford: Blackwell.

Canepari, L. (2017). *Portuguese pronunciation and accents: Geo-social applications of the natural phonetics & tonetics method*. Muenchen: LINCOM GmbH.

Feijo, F. (2016). A sociolinguistic investigation of the Brazilian community in Ibaraki, Japan. MA thesis. Tokyo: University of Tokyo.

松本和子・奥村晶子 (2019). 在日ブラジル人移民のコイネー形成―方言接触, 創始者効果, フィーチャープールの検証―『社会言語科学』22(1): 249–262.

Matsumoto, K. & Okumura, A. (2020). Ecology and identity in koineization: Cake baking in a diaspora Brazilian Portuguese speech community in Japan. *Asian and African Languages and Linguistics* 14.

Mufwene, S. (1996). The founder principle in creole genesis. *Diachronica* 13(1): 83–134.

Mufwene, S. (2008). *Language evolution: Contact, competition and change*. London: Continuum.

Noll, V. (2008). *O português brasileiro: Formação e contrastes*. Sao Paulo: Globo.

Noll, V. (2012). Mudanças na realização de /r/, /ɾ/ em português. In T. C. F. Lobo *et al.* (eds.), *ROSAE: linguística histórica, história das línguas e outras histórias*. Salvador: EDUFBA.

Oushiro, L. & Guy, G. R. (2015). The effect of salience on co-variation in Brazilian Portuguese. *University of Pennsylvania Working Papers in Linguistics (Selected Papers from New Ways of Analyzing Variation)* 21(2): 157–166.

Oushiro, L. & Parafita Couto, M. C. (2018). Old variants, new meanings: Resignification of rural speech variants in São Paulo's urban ecology. In D. Smakman *et al.* (eds.)*, Urban sociolinguistics: The city as a linguistic process and experience*. London: Routledge.

Rennicke, I. E. (2015). Variation and change in the rhotics of Brazilian Portuguese. PhD dissertation. Minas Gerais: Universidade Federal de Minas Gerais.

Sakurai, C. & Coelho, M. P. (2008). *Resistência & integração: 100 anos de imigração japonesa no Brasil*. Rio de Janeiro, RJ: Instituto Brasileiro de Geografia e Estatística (IBGE).

Siegel, J. (1985). Koines and koineization. *Language in Society* 14(3): 357–378.

Trudgill, P. (1986). *Dialects in contact*. Oxford: Blackwell.

日本アニメに対する英語字幕翻訳の年代による変化
－日本語のセリフと複数の英語字幕翻訳のテキストマイニング－

保坂敏子（日本大学）　島田めぐみ（日本大学）

1. 研究の背景と目的

日本アニメが海外で高い人気を集めるようになって久しい。例えば，宮崎駿監督の作品は，アメリカにおいて1985年に『風の谷のナウシカ』(1984) が公開されたことを皮切りに，1993年には『となりのトトロ』(1988) がG指定[1]を受けて一般的にも広く受け入れられるようになった．その後，2001 年に公開された『千と千尋の神隠し』は，2002年のベルリン国際映画祭で金熊賞を受賞し，さらに2003年にはアカデミー賞長編アニメーション部門賞を受賞するなど，映像作品としても高い評価を得ている．また最近では，新海誠監督の『君の名は。』(2016) が，世界135の国と地域で海外配給され，日本映画として全世界での興行収入が歴代最高になるほどの注目を集めた．このような日本アニメの海外展開を支え，海外の視聴者を惹き付けるのに大きな役割を担っているものとして，各国語版に訳された「字幕翻訳」が挙げられるだろう．では，ことばと文化の壁を越えて，世界中の視聴者が日本アニメを楽しめるようにするために，字幕翻訳ではどのようなストラテジーが施されているのだろうか．

字幕翻訳では，視聴者への分かりやすさが重要視されるため，起点テクストである日本語のセリフを目標テクストのことばや文化に同化させる「同化翻訳（domestication)」が行われると言われている．同化翻訳とは，起点テスクトの異質性を排除し、受け手に翻訳であることがわからないようにするためのマクロレベルの翻訳ストラテジーのことで，同化翻訳された作品では視聴者はまるで翻訳ではないかのように作品を楽しむことができるという．字幕翻訳者は，起点のセリフを目標文化に同化させるために，個々の語の意味よりも発話の全体的なコミュニケーション上の意図を優先し，元の発話の削除，凝縮，改変といったミクロレベルの翻訳ストラテジーを使用すると言われている（ベイカー&サルダーニャ編 藤濤監訳 2013)．しかし，近年，この同化翻訳については，言葉に込められた重要な側面や異質性を排除し，徹底的に単純化された「意味」を尊重するものであり，観客の読み取る力を信頼していないという批判の声も出てきている（武田編著2017)．

では，世界に広く流通している日本アニメ作品において，字幕翻訳はどのような様相を示しているのだろうか．オリジナルの日本語のセリフは翻訳によりどのように変容しているのか．そして，それは時代によって変わっているものなのか．本研究では，このような問題意識から，世界の視聴者に受容されている一つの日本アニメ作品の時代の異なる英語字幕を取り上げ，日本語のセリフと複数の英語字幕翻訳のテクスト間の変容と英語字幕の時代的な変化について，テキストマイニングによる分析を行う．研究の目的は、英語の字幕翻訳について時代による差異があるかを明らかにし、さらに、その変化の背景について探ることである。これまでオリジナルの日本語のセリフと英語字幕翻訳について質的に分析した研究はあるが，量的に分析したものは少なく，また，同じ作品の時代の異なる2種類の英語翻訳を量的に比較した研究は，管見の限り見当たらない．

2. 研究の方法

2.1　分析の対象作品

本研究の分析の対象は，1988年に公開されたアニメ映画『となりのトトロ』（宮崎駿監督　以下：『トトロ』）で，日本語のセリフと以下の２つの時代の異なる英語字幕を分析資料とした。

①ブエナ・ビスタ・ホーム・エンターテイメント版DVD（2001年版）に収録された英語字幕（以下『ブエナ版』）

②ウォルト・ディズニー・スタジオ版DVD（2014年版）に収録された英語字幕（以下『ディズニー版』）

[1] 映画には，鑑賞可能な年齢層を細かく規定したレーティングシステムがある．G指定とは，年齢の制限なく，誰でも鑑賞可能な映画であることを指す区分である．

『トトロ』は，昭和 30 年代前半の日本を舞台に、田舎へ引っ越してきた草壁一家と、不思議な生き物トトロとの交流を描いた作品で，前述の通り，アメリカでも G 指定を受けるなど，子供から大人まで幅広い年齢層に愛されている作品である．英語の字幕は，日本で公開された後に，まず 1993 年に Streamline Pictures により最初の英語字幕が作成された．その後，宮崎監督の作品の制作会社であるスタジオジブリと提携を結んだウォルト・ディズニー・カンパニー（WDC）が 2006 年に字幕を全面的に改定している．『ブエ版』は，Streamline Pictures の字幕翻訳を採用しており，『ディズニー版』は新しく作成された字幕である．本研究では，この 2 つの英語字幕テクストを，時代の異なる英語字幕翻訳テクストとして分析を行う．

2.2　分析の方法

DVD に収録されている日本語のセリフと２種類の英語字幕テクストの文字化資料を作成し，KH Coder を用いてテキストマイニングを行った．分析は①「語彙の出現頻度」の分析と，②「登場人物ごとの抽出語による対応分析」の２種類を行った．①は，語彙の出現頻度から変容の全体像を検証するため，また，②は，主要な登場人物の関係性に変容があるかを明らかにするためである．日本語の分析項目は内容語を中心に動詞，名詞，形容詞，形容動詞，副詞，感動詞，を取り上げた．英語の分析の枠組では，日本語の項目に人称代名詞を別立として加えた．

3.　分析の結果と考察

3.1　語彙の出現頻度

語彙の出現頻度から変容の全体像を検証するため，『トトロ』の日本語のセリフと『ブエナ版』『ディズニー版』の２つの英語字幕翻訳に対してテキストマイニングを適用した．分析の結果，抽出された語彙は，日本語 1,584 語，『ブエナ版』3,403 語，『ディズニー版』2,110 語であった．それぞれのデータについて語彙の出頻度順に並べ，上位 20 語を取り出した．名詞を出現頻度順に並べた結果は表１，表２，表３のとおりである．

表１　日本語セリフの名詞

1	メイ	タグ	91
2	する	動詞B	52
3	あっ	感動詞	42
4	お父さん	名詞	32
5	お母さん	名詞	28
	いる	動詞B	28
7	なる	動詞B	25
8	うん	感動詞	24
9	トトロ	タグ	21
10	おばあちゃん	タグ	18
	ある	動詞B	18
12	あ	感動詞	17
13	行く	動詞	16
14	家	名詞C	16
15	出る	動詞	15
16	待つ	動詞	14
17	病院	名詞	13
	サツキ	タグ	13
	そう	副詞B	13
20	木	名詞C	12

表２　『ブエナ版』字幕の名詞

1	be	Verb	291
2	I	PRP	186
3	you	PRP	163
4	ha	Foreign	102
5	it	PRP	94
6	not	Adv	67
7	we	PRP	63
8	MaI	ProperNou	58
	she	PRP	58
10	have	Verb	49
11	do	Verb	46
12	go	Verb	42
13	they	PRP	41
14	what	W	39
15	he	PRP	38
16	come	Verb	36
17	get	Verb	31
18	see	Verb	30
19	my	PRP	28
20	here	Adv	26

表３　『ディズニー版』字幕の名詞

1	be	Verb	229
2	I	PRP	131
3	you	PRP	106
4	it	PRP	72
5	not	Adv	58
6	she	PRP	49
7	MEI	ProperNoun	39
8	do	Verb	37
9	here	Adv	32
10	we	PRP	31
11	come	Verb	30
12	they	PRP	28
13	get	Verb	24
14	go	Verb	23
	have	Verb	23
16	Dad	ProperNoun	19
	too	Adv	19
	see	Verb	19
19	he	PRP	16
	my	PRP	16

分析の結果，日本語のセリフに６種類見られた呼称（メイ，お父さん，お母さん等）について，等価の人名・親族名称に訳したものは，『ブエナ版』では１つ，『ディズニー版』では３つで，抽出語総数の多い『ブエナ版』の方が少ない『ディズニー版』より人名・親族名称への直訳が少なかった。これは呼称に関する変容は『ブエナ版』の方が大きいことを意味すると思われる．また，英語翻訳では両者とも人称代名詞が多く出現しており，日本語の呼称はこれに置き換えられたことが窺える．

3.2　登場人物ごとの抽出語による対応分析

登場人物の使用する言葉による関係性に変化があるかを見るために対応分析を試みた．その結果が，図１，図２，図３である．日本語版では，お母さんとカンタのおばあちゃんは重なりが強く，他の人物はそれぞれ独立していた．これに対し，『ブエナ版』では，お父さんとサツキが重なり，『ディズニー版』では，サツキとカンタが重なるという違った結果となった．全体的には，『ディズニー版』の方がオリジナルの日本語の関係性に近いことがうかがえる．



図１　日本語セリフの登場人物の対応分析

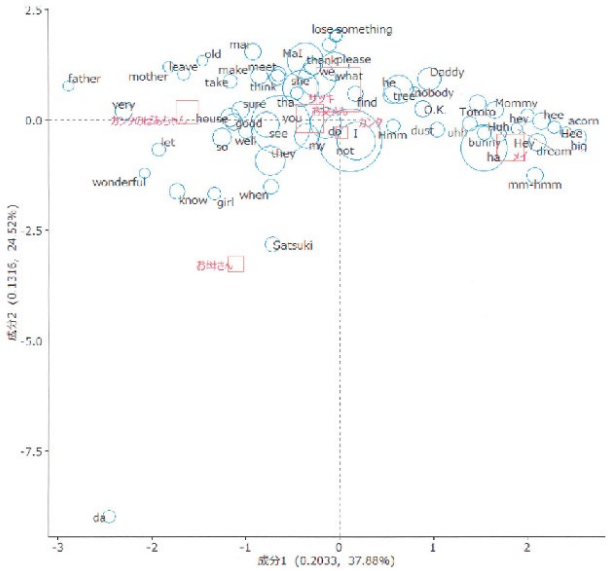


図２　『ブエナ版』の登場人物の対応分析

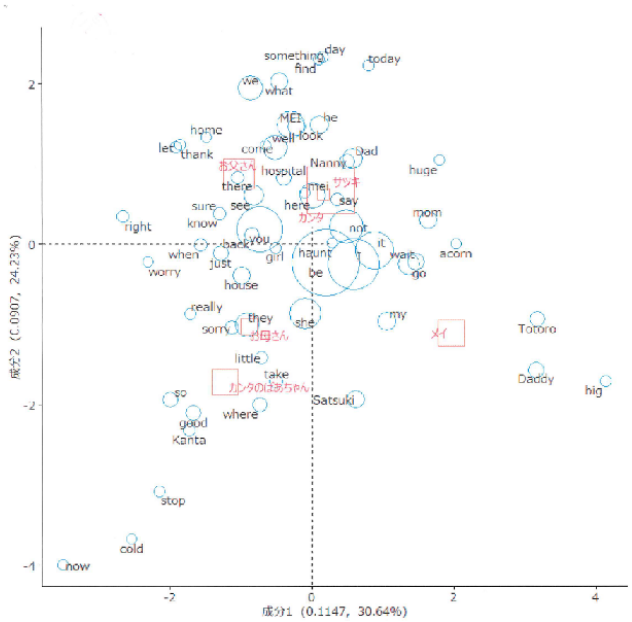


図３　『ディズニー版』の登場人物の対応分析

4.　おわりに

今回の分析で，日本語のセリフで出現頻度の高い呼称について，『ブエナ版』の方が『ディズニー版』より起点テクストからの変容が大きいことが分かった．また，登場人物の関係は，『ディズニー版』の方が『ブエナ版』より日本後のセリフと類似性が高く，『ブエナ版』の方が『ディズニー版』より変容が大きいことが分かった．これらの結果から，年代の古い『ブエナ版』字幕翻訳の方が英語への同化の傾向が強く，年代の新しい『ディズニー版』字幕翻訳の

方がオリジナルを保持していることが窺えた．映画の字幕翻訳は，これまで同化翻訳のストラテジーが適応されるとされてきたが，今回の量的分析により，新しい時代の字幕翻訳は，より起点テクストに近い翻訳になっていると言えるのかもしれない．では，その変化はどうして起こったのであろうか．

字幕翻訳に同化翻訳の傾向が少なくなった背景には，まず，研究の背景に述べたような，映画の観客に対する字幕翻訳家の認識が変化していることが挙げられるだろう．ICT やメディア環境が進展し，世界各地の情報へのアクセス，異文化間の接触が容易になった現在，映画の視聴者は映像から異文化要素を読み取る能力が一段と高くなっているのかもしれない．その場合，必然的に，字幕翻訳も同化翻訳ではなく異質なものを残すことが可能になるだろう．また，日本アニメに特化してその背景を考えてみると，『トトロ』が最初にアメリカで公開されるために字幕翻訳が作成された 1993 年頃は，日本アニメはまだそれほど世界で注目されておらず，そのため単なるアニメーションとして，目標言語の視聴者が楽しめるように言語と文化の同化翻訳が施されていたのかもしれない．その後，日本アニメが世界で親しまれるようになり，それが日本への興味を引き出し，日本語学習のきっかけとなるような時代になると，視聴者の側に，オリジナルの要素，視聴者にとっては異質な要素をそのまま楽しみたい，つまり，日本アニメから日本文化を感じたいという気持ちが強くなってきたのかもしれない．

本研究は，字幕翻訳の傾向が年代により異なることの一端を示すことができたと思われるが，それが，どのような背景や理由によるものかを知るためにも，今後，時代の異なる日本映画や日本アニメの字幕翻訳を対象に，字幕翻訳の分析を続けていきたい．

謝辞　本研究は JSPS 科学研究費・基盤(C)17K02867 の助成を受けたものである．

参考文献

武田 珂代子編著（2017）．翻訳通訳研究の新地平　映画，ゲーム，テクノロジー，戦争，教育と翻訳通訳　晃洋書房
ベイカー，M. & サルダーニャ，G.（編）藤濤文子監訳（2013）．翻訳研究のキーワード　研究社

社会文化的側面から見る翻訳シフト分析

―ノーベル賞受賞スピーチの英日翻訳を事例に―

長谷川　泰子（大阪大学大学院生）

1.　はじめに

1.1 研究の背景と目的

「起点テクストを目標テクストに翻訳するときに起きる小さな言語的変化」(Catford, 1965; Munday, 2008/2012/2016)と定義される「翻訳シフト」は、翻訳等価性理論の言語等価的側面を中心とした概念として扱われてきた。実際、言語間距離のかけ離れた日本語と英語の翻訳では、等価を実現するために様々なシフトを生じさせる必要がある。そもそも「翻訳シフト」という用語を最初に使用したのは J.C.Catford(1965)であるが、それ以降も翻訳シフト論は展開されている。たとえば、Vinay and Darbelnet は著書‘Comparative Stylistics of French and English: A Methodology for Translation’(1958/1995)の中で、一般的翻訳方略として、7 つの翻訳手順（直接的翻訳・間接的翻訳）で構成された翻訳ストラテジーを特定しており、翻訳シフトについて記述している。さらに、Bulm-Kulka(1986; 19)はテクストの結束性と一貫性のシフトにおける明示化仮説を提唱している。翻訳者が起点テクストを解釈するプロセスが目標テクストを冗長にし、この冗長性を表現するには、目標テクストで結束性の明示度を上げることで可能となるとしている。

だが、これらは翻訳の言語面にフォーカスした等価を扱ったものであり、「静的な構造レベル、ラングレベルでの対照言語学的性格を有していること、機能・状況・文化などのコミュニケーション行為としての翻訳の特徴を等閑視していること、分析例が自ら作例した理想化されたテクストを対象にしていること」（河原, 2017, p.132）などの批判がなされている。そこで、本研究では、翻訳学が社会的転回を経験した現在、翻訳の社会的側面から具体的な翻訳テクストの言表に現れている翻訳シフトを分析したいと考える。

また、Katharina Reiss が提唱したテクスト・タイプ（情報型・表現型・効力型）のちょうど中間に位置する “official speech”(「公式演説」)にあたるノーベル賞受賞スピーチの翻訳を分析対象とする。これによって、テクストレベルにおける各メディアや翻訳者のシフトの比較分析が可能となる。Reiss は、テクストレベルでの等価性を強調し、言語機能をテクスト・タイプと翻訳方略に結びつけている。(Reiss, 1977/1989; Munday, 2008/2012/2016)そして、それらのシフトを訳出物から抽出して分析することによって、翻訳の方略（ストラテジー）や目的（スコポス）を同定することが可能となる。なぜなら、翻訳者は両言語間にどのような言語やテクスト体系間の差異、社会文化的差異があるのか把握した上で、意識的あるいは無意識に、翻訳シフトを選択しているため、これらのシフトを分析することによって明らかにすることが可能となるからである。また、スコポスとストラテジーの関係を考察することも可能となる。

本研究では、各メディアが提供しているノーベル文学賞受賞スピーチの英日翻訳の事例を題材にして翻訳シフトを抽出し、語彙レベルやセンテンスレベルの言語的側面だけではなく、談話レベルやテクストレベルにおけるテクスト機能や翻訳の目的など、翻訳の社会行為的側面からも比較分析して行く。そのうえで、翻訳と社会文化的コンテクストとの関係に着目しつつ、シフトが目標読者にどのような影響を与えているのかについて考察して行く。

1.2 リサーチクエスチョン

以上のことに鑑みて、3つのリサーチクエスチョンを設定する。

1) コミュニケーション形態、言語機能、翻訳の目的（スコポス）などが、どのようなタイプの翻訳シフトを生じさせているのだろうか。
2) 1)について、各メディア（翻訳者）間でどのような違いがあるのだろうか。
3) 各メディアの翻訳者が選択したシフトが、目標読者に影響を与えているとしたら、それはどのようなものだろうか。

2.　研究の方法

本研究では、分析対象として、ボブ・ディランとカズオ・イシグロのノーベル文学賞受賞スピーチの英日翻訳を使用する。スウェーデン・ストックホルムで 2016 年 12 月 10 日にノーベル賞授章式が開かれた。そこで、ノーベル文学賞を受賞したが式

に欠席したボブ・ディラン(Bob Dylan)のスピーチが、在スウェーデン米国大使 Azita Raji 氏により代読された。彼はアメリカのミュージシャン(シンガーソングライター)であり小説家ではないので、ノーベル文学賞を受賞したと聞かれた人の中には驚いた人も多いと思うが、ディランはシンガーとしてではなく、詩人として受賞している。彼はスピーチの中で、シェイクスピアと自分を重ね合わせながら、これまでの自分の音楽人生を振り返っている。語彙や文法はこのようなスピーチで一般的に使用されるレベルのもので、語数は 825words である。分析対象の英日翻訳データは、朝日新聞、日経新聞(ともに 2016 年 12 月 11 日付)、ソニーミュージック、NME Japan[1]、Rolling Stone Japan[2]、BARKS[3]がそれぞれ提供している翻訳を使用する。

また、スウェーデン・ストックホルムで 2017年 12 月 10 日にノーベル賞授章式が開かれた。そこで、ノーベル文学賞を受賞したカズオ・イシグロが、受賞スピーチを行った。長崎県出身の日系イギリス人小説家である彼はスピーチの中で、ノーベル賞創設者がダイナマイトの発明者であること、生まれ故郷である長崎が原爆投下により壊滅的被害を受けたことに触れ、この賞の精神である「平和」と彼のノーベル文学賞受賞が持つ意味を、結びつけている。語彙や文法はこのようなスピーチで一般的に使用されるレベルのもので、語数は 432words である。分析対象の英日翻訳データは、朝日新聞、毎日新聞がそれぞれ提供している翻訳(ともに 2017 年 12 月 11 日付)を使用する。

朝日新聞、日経新聞、毎日新聞は一般購読者を対象としていると思われるが、ソニーミュージック、NME Japan、Rolling Stone Japan、BARKS は、ディランファンや音楽ファンを目標読者に想定していると思われる。各メディアが提供しているボブ・ディランとカズオ・イシグロのノーベル文学賞受賞スピーチの英日翻訳から翻訳シフトを抽出し、比較・分析することによって、翻訳のストラテジーとスコポスを同定し、翻訳等価性の社会等価的側面に着目して行く。これによって、スピーチというコミュニケーション形態がもつ特徴とスコポスやストラテジーの関係を翻訳シフトからあぶり出し、各メディアの翻訳者が社会文化的コンテクストを背景に生じさせたシフトが、目標読者にどのような影響を与えているのかを考察して行く。

3. 分析の結果と考察

まず、ボブ・ディランのスピーチの序論に相当するパラグラフからシフトを抽出して比較分析して行く。例として、日経新聞とソニーミュージックの例を挙げている。起点テクストを ST、目標テクストは TT と表記する。

表 1 ボブ・ディランのスピーチの翻訳比較

	ST	TT(日経新聞)	TT(ソニーミュージック)
1	Good evening, everyone.	皆さん、こんばんは。	
2	I extend my warmest greetings to the members of the Swedish Academy and to all of the other distinguished guests in attendance tonight.	スウェーデン・アカデミーのメンバーと、今晩ご臨席の素晴らしいゲストの皆さまに心からのごあいさつを申し上げます。	
3	I'm sorry I can't be with you in person, but please know that I am most definitely with you in spirit and honored to be receiving such a prestigious prize.	出席できずに申し訳ありません。しかし私の心は皆さんと共にあり、名誉ある賞を光栄に感じていることをご理解ください。	今回同席できないことを残念に思いますが、気持ちの上では間違いなく皆さんと共にいること、またこのような名誉ある賞を光栄に思っていることをご承知おきください。
4	Being awarded the Nobel Prize for Literature is something I never could have imagined or seen coming.	ノーベル文学賞の受賞を、想像したり予想したりすることはできませんでした。	ノーベル文学賞を受賞することは、私がこれまで想像も予測もし得なかったことでした。
5	From an early age, I've been familiar with and reading and absorbing the works of those who were deemed worthy of such a distinction: Kipling, Shaw, Thomas Mann, Pearl Buck,	私は幼い頃から、このような栄誉に値すると見なされた人たちの作品に親しみ、愛読し、吸収してきました。キプリングや(バーナード・)ショー、トーマス・マン、パール・	私は幼い頃から、(ラドヤード・)キップリング、(バーナード・)ショー、トーマス・マン、パール・バック、アルベール・カミュ、(アーネスト・)ヘミングウェイといった、そのような栄

1 1952 年から続くイギリスの老舗音楽雑誌であり音楽メディアとして世界的な影響力があると言われている、『NME(ニュー・ミュージカル・エクスプレス)』が運営する音楽サイト「NME.com」の日本版である。

2 1967 年に創刊された音楽や政治、大衆文化を扱うアメリカの隔週発行の情報誌の日本版である。

3 ジャパンミュージックネットワーク株式会社が運営する音楽情報サイトである。日本で発表されている音楽作品を邦楽・洋楽問わず紹介している。

	Albert Camus, Hemingway.	バック、アルベール・カミュ、ヘミングウェーなどです。	誉に相応しいと判断された人々の作品を読み、吸収してきました。
6	These giants of literature whose works are taught in the schoolroom, housed in libraries around the world and spoken of in reverent tones have always made a deep impression.	作品が教材となり、世界中の図書館に置かれ、恭しい口調で語られる文学界の巨人たちには、常に深い感銘を受けてきました。	学校の教室で教えられ、世界中の図書館に置かれ、敬意を込めて語られてきた彼ら文学の巨匠たちの作品には、常に深い感銘を与えられてきました。

一般購読者が目標読者である日経新聞では、スピーチというコミュニケーション形態の文体、結束性や情報構造などが訳文でも比較的維持されており、英語と日本語のテクスト構造の相違から生じる必然的なシフトが生じていると思われる。新聞の主たる目的である情報提供という観点から、語彙レベルで補足説明(情報の追加)のシフトが生じている。また、ディランファンや音楽ファンが目標読者であると想定されるソニーミュージックでは、スピーチというコミュニケーション形態の文体、結束性や情報構造などセンテンスレベルや談話レベルの等価には拘らず、ディランのメッセージの伝達を目的とした訳文になっていると思われる。

次に、カズオ・イシグロのスピーチの結論に相当するパラグラフからシフトを抽出して比較分析して行く。

表 2 カズオ・イシグロのスピーチの翻訳比較

	ST	TT(朝日新聞)	TT(毎日新聞)
19	I am happy to receive the Nobel Sho, as I instinctively called it when, minutes after receiving my astounding news I telephoned my mother, now 91 years old.	驚きのニュースを受け取った数分後、９１歳となる母に電話をかけた際、自分でも気づかないうちにそう呼んでいたように、「ノーベルショウ」を受けたことを、たいへんに幸せに思っています。	私は受賞の知らせを受けて直感的に、「のーべるしょう」と声に出し、その直後に、いま９１歳の母親に電話しました。
20	I more or less grasped its meaning back then in Nagasaki, and I believe I do so now.	ノーベル賞というものが持つ意味を、幼かったあの日の長崎で直感的に悟ったのと同じように、自分が今この賞の精神を理解できていると信じています。	私は長崎にいた時、既に多少なりとも賞の意味を理解しており、今も理解していると思っています。
21	I stand here awed that I've been allowed to become part of its story.	そしてその歴史の一つに連なることを許されたことに、畏怖（いふ）の念を感じながらここに立っています。	ここに立って、その歴史の一部になることを許されたことに感動しております。
22	Thank you.	ありがとうございました。	ありがとうございます。

彼はスピーチの序論で、5 歳の時初めて、「ノーベルショウ」という名を耳にしたと語っている。また、彼はスピーチの中で、"the Nobel Sho"を一貫して使用するのではなく、"the Nobel Sho"と"the Nobel Prize"を使い分けることによって、時間や空間、ひいては異文化間の異動を表現していると思われる。だが、 目標読者を一般購読者に想定していると思われる点では同じである朝日新聞と毎日新聞の翻訳において、その表現の意図の伝達に違いが見られた。つまり、朝日新聞では、スピーチというコミュニケーション形態の文体、結束性や情報構造などを比較的維持しつつ、さらに暗示的情報を明示化するシフトを選択することによって、スピーチの序論にある5歳の時の彼と、今ここ(スウェーデン・ストックホルムで2017年12月10日に開かれたノーベル賞授章式)に立っている彼を、時間的・空間的に対比あるいは異動させている。

4. 結語

これまでの比較分析結果に基づいて、先に挙げたリサーチクエスチョンに対し回答していく。

1) 「コミュニケーション形態、言語機能、翻訳の目的（スコポス）などが、どのようなタイプの翻訳シフトを生じさせているのだろうか。」については、テクストレベルでは、スピーチというコミュニケーション形態の文体、結束性や情報構造などは比較的維持されているが、英語と日本語のテクスト構造の相違から生じる必然的なシフトが生じていた。語彙レベルでは補足説明(情報の追加)のシフトが見られた。また、スピーチというコミュニケーション形態の文体、結束性や情報構造などセンテンスレベルや談話レベルの等価には拘らず、メッセージの伝達にフォーカスしていると思われるシフトも見られた。

2)　「1）について、各メディア間でどのような違いがあるのだろうか。」については、目標読者層や翻訳の目的などが各メディア間で異なり、この違いが翻訳者による翻訳ストラテジーや翻訳シフトの選択に影響を与えていると考えられる。つまり、一般購読者を目標読者に想定する新聞では、スピーチというコミュニケーション形態の文体、結束性や情報構造などは比較的維持されているが、英語と日本語のテクスト構造の相違から生じる必然的なシフトが生じており、比較的原文に忠実な翻訳スタイルが採用されていると思われる。また、新聞の主たる目的が情報提供だと考えられる点から、語彙レベルでは補足説明（情報の追加）のシフトが見られた。音楽ファンを目標読者に想定すると思われる音楽情報媒体では、スピーチというコミュニケーション形態の文体、結束性や情報構造などセンテンスレベルや談話レベルの等価には拘らず、メッセージの伝達を目的としていると思われるシフトが見られた。

3)　「各メディアの翻訳者が選択したシフトが、目標読者に影響を与えているとしたら、それはどのようなものだろうか。」については、一般購読者を目標読者に想定した新聞では、テクスト構造の相違から生じる必然的なシフトや新聞の主たる目的である情報提供に基づくシフトなどを除いては、スピーチの文体が保持されて、談話レベルやテクストレベルの結束性などが訳文でも維持されており、読者の視点の揺らぎが音楽情報媒体と比べて少ないと考えられる。だが、カズオ・イシグロのスピーチのように、“the Nobel Sho”や “heiwa”といった日本語で表現することによって、時間や空間、ひいては異文化間の異動、さらにノーベル賞というものが持つ意味までも表現しようとした彼の意図が、読者に伝えきれていない箇所も見られた。また、音楽ファンを目標読者に想定する音楽情報媒体では、テクストレベルでのメッセージの伝達を主な目的としていると考えられ、練られたスピーチの構成や文章の意図が伝えられていないと思われる箇所もあった。

本研究では、新聞や音楽情報媒体が提供する、2016年、2017年と比較的最近のノーベル文学賞受賞スピーチの翻訳を分析対象とし、テクスト構造や結束性、情報構造などのシフトが目標読者に与える影響の一端を考察したに過ぎないが、ノーベル文学賞受賞スピーチが持つテクスト・タイプ（情報型・表現型・効力型）の変容性が、どのようなシフトを翻訳者に選択させ、目標読者に影響をもたらすかについて考察する際の示唆が得られた。今後さらに、ノーベル文学賞受賞スピーチの英日翻訳を題材にして、翻訳を社会行為として捉えた社会等価的側面から見た翻訳シフト分析を行っていく。

参考文献

Blum-Kulka, S. (1986). *“Shifts of Cohesion and Coherence in Translation”* in Julian House and Shoshana Blum-Kulka (eds). Interlingual and Intercultural Communication: Discourse and Cognition in Translation and Second Language Acquisition Studies. Tubingen: Gunter Narr.

Catford, J.C. (1965). *A Linguistic Theory of Translation An Essay in Applied Linguistics*. London: Oxford University Press.

河原清志(2017). 『翻訳等価再考　翻訳の言語・社会・思想』晃洋書房

Munday, J. (2008/2012). *Introduction to translation studies: Theories and Applications*. London/New York: Routledge. (= 鳥飼玖美子監訳（2009）『翻訳学入門』みすず書房)

Reiss, K. (1971/89). *“Text types, translation types and translation assessment”*, translated by A. Chesterman, in A. Chesterman (ed).

Vinay, J.-P. & Darbelnet, J. (1958). *Stylistique comparée du français et de l’anglais. Paris: Didier*. translated and edited into English by Sager, J.C. & Hamel, M.J. (1995). *Comparative stylistics of French and English: A methodology for translation.* Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

対話通訳実践中の通訳者の自発的発言についての考察
―新生児訪問模擬通訳場面における通訳規範の分析から―

飯田奈美子　日本学術振興会/立教大学

１．はじめに

日本語ができないクライエントと専門家が対話を行う対人援助場面において，通訳者が両者のやりとり（対話）を通訳する．このような対話通訳実践において，通訳者は両者の発言を訳出する「通訳行為」だけでなく，通訳者自身が発言を行う「自発的発言」も行っている．通訳者の自発的発言は，通訳規範や通訳倫理の「正確性・中立性」から逸脱するものである．通訳規範や通訳倫理の逸脱についての研究は，通訳者に対するインタビュー調査により，通訳者が異文化コミュニケーションの橋渡しの役割を担っているという現状を報告しているものが多い（瀧本 2006,灘光 2008,水野 2013 など）．他方，通訳規範逸脱に関する通訳実践の分析を行った研究としては，吉田（2007）や新崎（2010）がある．吉田（2007）は，Goffman (1981)のフッティングの概念を援用し，通訳を介した談話の分析により，レジスターを保持した訳出を困難にしている要因を考察すると同時に法廷相互行為の特徴を記述している．また，新崎 (2010) は，会議通訳者の訳出内容を分析し，通訳者が訳出中に意図的に行う「不変・不介入原則」からの「逸脱行為」は「コミュニケーション仲介者」の役割を果たすコミュニケーション調整として，コミュニケーション調整理論（Communication Accommodation Theory）を用いて分析している．上記の研究では，おもに訳出における通訳規範の逸脱についての分析が行われていて，通訳者の自発的発言についての分析は行われていない．対話通訳実践においては，程度の差はあれ，通訳者は何かしらの自発的発言を行っているにもかかわらず，通訳者がどのような自発的発言を行っているかについての具体的な研究はなされていない．そこで，本研究は対話通訳実践中に行われる通訳者の自発的発言に注目し，どのような自発的発言があり，それが通訳行為にどのように影響を与え，通訳実践をどのように組織化し秩序立てているかを明らかにすることを目的とする．

２．研究方法

本研究は，新生児訪問場面を再現し，保健師とクライエントの会話を通訳者が通訳を行い，その様子を録音・録画し会話分析の表記法に則って作成したトランスクリプトを用いて，通訳者が通訳実践中に訳出行為ではない行為を行った場面を収集し，会話分析・相互行為分析法にて分析を行った．新生児訪問は,保健師が母子の健康状態を把握し,世帯の状況にあった助言指導をすることが目的となっている．近年，育児の孤立化により過度の育児不安や育児ストレスを抱える母親が増加していることから，保健師や助産師による新生児訪問の全戸訪問指導が展開されている．母親が外国人等で日本語ができない，子育て協力者や相談する人がいない場合，リスクが高まるため支援対象となり，通訳を介したコミュニケーションがとても重要となる．また，出産や子育ては文化的影響を大きく受けるライフイベントであるため，要通訳者両方の言語や文化を理解している通訳者の介入が起こりやすい場面でもあることから，新生児訪問場面を設定しデータ採取を行った．

３．通訳規範

通訳研究において通訳規範については翻訳規範理論が援用されている．ギデオン・トゥウリーによれば，翻訳規範は，翻訳に関して「何が正しいか間違っているか，何が適切か不適切かについて，コミュニティ内で共有されている一般的な価値や志向であり，ある状況にとって適正で適用可能な行為の指針」であると述べている（Toury 1995: 54-55）．佐藤美希は，社会や文化がどのような翻訳を求めるかは様々な交渉によってその合意が形成され慣例化し，その結果としてある翻訳規範が生じると述べる（佐藤 2005:65）．通訳規範の生成も通訳者が社会や文化が一定の性質をもった通訳を求めて，様々な交渉を通じて合意が形成されて通訳規範が生じると考えられる．通訳倫理は守るべき原則や価値が抽象的に記されているのに対し，通訳規範は現場のフィードバックを基に，通訳者がより良い対応と認識する具体的な行為について通訳の対象者たちと合意が得られたものであると言える．

本研究では，通訳者が自発的発言によって，２つの通訳規範を遵守や逸脱を行っていることがわかった．その通訳

規範とは,〈A.通訳者は直前の発話を訳出するという〉と〈B.通訳者は原語で理解されたときに起きる反応を目標言語の聞き手に起こす〉というものである.〈A〉は、発話者が発言をしたら、次の発話の順番は通訳者になることである.つまり,発話の順番が通訳者に来たら,通訳者は直前の発話者の発話内容を訳出することが要請されるのである.〈A〉が通訳を介する発話連鎖構造の特徴であるのに対し,〈B〉は通訳内容に関する規範になる.サンドラ・ヘイルは,通訳行為を通して言語の障壁を取り除くことで話し手同士がコミュニケーションできるようにすることを通訳の目的とし,対話通訳は原語で発せられたメッセージが原語で理解されたときに起きる反応を目標言語の聞き手に起こすために,もともとの意図(発話要 点)と発話の効力の再生を目指すと述べる(Hale 2007=2014:18).しかし,分析の結果,Bの通訳規範を遵守することで, Aの通訳規範から逸脱されることが明らかになった.

4. 訳出行為と自発的発言

通訳者の自発的発言には「①聞き返し、理解の確認」「②トラブルの発生・処理の報告」「③訂正」「④介入行為」「⑤コミュニケーションの支配」があると考える.「①聞き返し、理解の確認」とは、通訳者が発言者に対して,正確な通訳を行うために発言内容について確認したり,聞き取りに問題があった場合に聞き返すことである.「②トラブル発生・処理の報告」は,訳出中に質問が入り訳出がすぐに完了できなかった場合にどの時点で訳出が完了されたかについて発言者に対して報告するものである.これにより通訳者は訳出の位置がずれるというトラブルがあったことを報告し,その処理(訳出が完了した)がなされたことも併せて報告する.「③訂正」は,通訳者の訳出が不適切などの理由により,聞き手が原発言の意図を理解できず,求められる返答と異なる発話をした場合に,その発言を訳出せず,通訳者が原発言の意味を説明し,求められる返答を引き出すことである.「④介入行為」は,対人援助の専門家とクライエントの情報量の差を埋めるためや,クライエントの発言権を保障するために行われる(飯田 2016)ものであり,「⑤コミュニケーションの支配」は,通訳者自らの意見や指示などを発言する不適切な発話のことである.

なお,調査では①〜③の行為を収集することができ,下記で,②と③について分析を行う.

5. 分析と考察

5.1 通訳規範〈A. 通訳者は直前の発話を訳出する〉

「②トラブルの発生・処理の報告」は、本来の訳出完了の位置で訳出が完了できなかった報告を行うというのであるが,これは,〈A.通訳者は直前の発話を訳出するという〉の通訳規範が強く働くことによって起こる行為である.通訳者の訳出がどの位置でも行われていいのであれば,通訳者はわざわざトラブルの発生したことやその処理の報告はしなくてもよい.しかし,この行為が行われることによって通訳者はAの通訳規範を遵守していることを表示している.

【抜粋1】

01 保健師:=分かりました。あのですね↓、あの:、ご自身で決められてなければ、あの:、最寄りの、あの保健セ
02 ンターのほう[で、
03 父親: [un
04 保健師:=クリニックの(.)一覧表がありますので、そこでお尋ねいただいた[ら、
05 通訳者: [aa
06 保健師:=近い所に行っていただいたらいいです。
(07行−31行中略)
32 通訳者:对,咨询处问一问。e那边有保健所。那,保健所里面呢,e保健中心他们可以e给你介绍:那个小儿科。她
33 们那边有那个:小儿科的:,e很多小儿科e:,小儿科的:e::住址啊,[联系方式什么的,都有的。
(日本語訳):そうです。受け付けできいてください。そこに保健所があるので。あの、保健所の中には、保健センターでは、小児科を紹介してくれます。そこには、小児科の、たくさんの小児科の、小児科の住所や連絡方法などがあります。
34 父親 : [a、a 那挺好,那我就可以去找得到去哪
35 里打针了。
(日本語訳):それはいい。どこで受けられるか自分で探すことができるのだね。
36→通訳者:a,对。あの::、まあ、先ほどの、あの::、e:、小児科の(.)リストのことを[伝えました。
37 保健師: [そうですか↓、はい。
38 通訳者:それでちょっと、まあ、自分が行きたいところを探していけばいいかなと。

【抜粋1】は、通訳者が自らの行為の説明を表示しているものである. 32-33行目の通訳者の発話は,1-6行目にかけての保健師による予防接種を行っている小児科のリストが保健センターにあるという発話の訳出である.7-31 行目は通訳者の訳出の途中で,父親が保健センターがどこにあるのかわからないと質問し,保健師がその説明を行い,そ

の訳出をするという発話連鎖が挿入されている.この発話連鎖が入ることで発話が拡張され,もともとの保健師の発言（1- 6 行目）の訳出（32-33 行目）が後ろにきているのである. そして,36 行目の通訳者の発話は, 直前の父親の発話（34-35 行目）を訳出するのではなく, 通訳者の自らの行動を説明する発話になっている. 通訳者が小児科リストが保健センターにあるという説明を父親に通訳した後, 父親がそれに対して応答しているのだが（34 - 35 行目）, 通訳者はその位置で父親の発言を訳出せずに,「小児科リストのことを伝えた」と保健師に自分の行動を説明した後に父親の発言を訳出している（38 行目）. 36 行目の発話の「伝えました」は直前に行った自分の行為（どこの部分を訳出したか）を説明し, さらにそれが終了したことも表している. これにより, 訳出の位置がずれたことを説明し（トラブル発生）, さらにそれが処理されたことも併せて報告されている. そして, この報告があることで, 34-35 行目の父親の発言は, 1-6 行目の保健師の発言に対する応答であることがわかるようにデザインされているのであった.

このように本来ならば, 訳出を行わなければならない発話順番において, 自分の行為を保健師に説明するのは, 訳出すべき原発話がだいぶ以前に産出されており, 挿入連鎖が入ることで通訳行為が長くなり, 訳出が遅れたことを伝えるためであった. 逆に言えば, このように説明しないときは, 通訳者は直前に発話されたものを訳出しているということができる. 通訳者は, 直前に発話されたものを訳出するという規範があることによって, 訳出が遅れるなどすぐに訳出ができない場合は, そのことに対しての説明を負う義務が生じてくるのだ. 直前に発話されたものを訳出するという規範は, 通訳者要通訳者ともに持っており, 通訳者はその規範に沿うように通訳を行っていくことを目指していることを表している。しかし,通訳者がどのタイミングで訳出（発話）できるのかは,保健師とクライエントと通訳者の 3 者の共同的達成で決まるものであり, 必ずしも要通訳者が発話をした直後に訳出ができるとは限らない. そのため, 規範から逸脱する（直後に訳出ができない）場合は, 自らの行為を説明する（どこで訳出したか）必要がでてくるのである.

5. 2 通訳規範〈B. 通訳者は原語で理解されたときに起きる反応を目標言語の聞き手に起こす〉

「③訂正」は, 発言が終わればすぐに訳出が開始されなければならないのだが, 発言内容が求められる返答ではないと考えられる場合, 通訳者は次の順番に求められること（訳出）をせず, 発言者に対して訂正を開始するのである.

【抜粋 2】

01 保健師：aa、分かりました。お母さんが::、えーと、いらっしゃるときというのは、具体的にはいつになります？
02 あの、大学も行ってらっしゃるんですよね。
03 通訳者：a 她妈妈在的时候是:, 大概是什么时候呢？（日本語訳）彼女のお母さんがいるときは、だいたいいつですか？
04 父親 ：en:::
05 通訳者： [现在去大学,（日本語訳）今は大学にいっている、
06 父親 ：[日本的(.)日本的制度就是, 三个月以内。在日本在留时间。
（日本語訳）日本の制度は 3 か月以内、日本に滞在できる時間。
07 通訳者：en,en
08 父親 ：短期在留, 三个月以内。（日本語訳）短期滞在は 3 か月以内。
09 通訳者：en
10 父親 ：如果我:也去学校, 然后:妻子也去学校。这个时候, 就有:::妻子的妈妈带,看小孩儿。
（日本語訳）私が学校にいき、妻も学校に行く、このようなとき妻のお母さんが子どもをみる。
11 →通訳者：o 她:的意思呢, 就说, e 在学校, 是什么时候, 大概是什么时候, 在学校。什么时候, 在家里, 照顾小孩
12 儿。
（日本語訳）彼女の言っている意味は、学校はいつあるのですか。大体いつ学校にいますか？いつ家にいて子どもの世話をしますか？
13 父親 ：o↓一般是上午::十点:到:十一、十二点, 这一段时间去学校。或者是下午的: 一点, 两点半到四点,[去学校。
（日本語訳）一般的に午前は 10 時から 11、12 時までこの間に学校にいきます。または午後は 1 時か 2 時半から 4 時まで学校にいきます。
（14-19 中略）
20 通訳者：あの、先ほどですね、あの、ちょっと:まあ、回答が:、あの::、お聞きになられた回答ではなかったので、
21 もう一度聞いたん(h)ですけれども(h)。
22 保健師：ええ、ええ、ええ。

【抜粋 2】は, 保健師が新生児訪問の際に家に不在にしている子どもの母親についての質問を行なっている場面である. 父親は,保健師の質問の訳出（3 行目）を聞いて,「彼女のお母さん」は子どもの祖母だと思い, 祖母について答えるのであった. しかし, 通訳者は父親の発話を訳出せずに自発的発言にて訂正を行っている.

この抜粋の前段で, 保健師は父親に対して授乳（おっぱいとミルク）について質問を行い, 父親から回答を得て, 1-2 行目の質問が行われた. そのためこの質問の意図は, ただお母さんの在宅を質問したものではなく, いつ母乳をあげ

るのかをきくための質問という構図がデザインされていたのである．従って，ここでの「お母さん」は子どもの母親を指しており，通訳者もそれを理解して訳出をしている．しかし,父親はそのようには理解しなかった．それは，通訳者が保健師の発話のすべてを訳出しきれてないうちに父親が回答を始めたことによる．3行目の「大概是什么时候呢？」は疑問形となっているため父親は順番構成単位が終了に近づいていると理解してターンの移行を予期し，4 行目の「en:::」と発話しターンを取得しようとする．しかし,すぐに通訳者が5行目で残りの部分の訳出をしたが，この部分に重なるように父親が発話を開始し(6 行目)，通訳者の5行目の訳出は聞こえていない，もしくは3行目の発話のみで回答を準備したといえる．5行目の訳出を聞かずに発話を行っているので，父親は成員カテゴリー装置(Sacks 1972/=1989)における家族カテゴリーとしての「母親」しか理解しておらず，学校カテゴリーの「学生」の部分については聞いていなかったのである.この世帯では赤ちゃんの世話をする女性は母親と祖母の二人おり，その二人を区別するには「学生」である母親という表現が重要になってくる．それを父親が聞きのがしたことにより理解の相違がでてきたと推測される．このように訳出の途中で次の発話が始まってしまい十分に理解されないことは対話通訳の実践においてよく発生することである．そして，13 行目で父親は，通訳者の発話(11 行目)を聞き「状態の変化を示すトークン（change-of-state token)」である「o↓」を示す．これにより父親は自分の理解が間違っていたことを認識して，保健師が求めている「子どもの母親」についての状況を述べていくのである.そして，通訳者は 20-21 行目で保健師に対してトラブルが発生し，その処理を行ったことを報告している．そしてトラブル処理の理由を保健師が「お聞きになられた回答」ではなかったと説明している．

〈A〉の通訳規範を遵守するならば，求められる返答ではないと考えられる場合でも直前の発話内容の訳出を行い，聞き手（保健師）から訂正が行われるべきだが，通訳者はそのようにしなかった．この行為により，通訳者は〈A〉の通訳規範を逸脱しても，〈B〉の通訳規範を遵守することを優先していることがわかった．

6．おわりに

「②トラブルの発生・処理の報告」によって，通訳者がオリジナル発言を発話しているのではなく，発話者の発言を訳出するということを志向していることがわかり，それにより,〈A〉の通訳規範は，通訳者とはどのような存在であるかを提示する規範となっていると言える．しかし，「③訂正」の行為によって，通訳者は〈A〉の通訳規範を逸脱しても,〈B〉の通訳規範を遵守することを優先している．このことにより通訳行為の目的は、ただ訳出を行うだけでなく、その場のコミュニケーションの目的を達成させるための相互行為を行っていることがわかる。このような通訳者の行為は、翻訳理論におけるスコポス理論では、翻訳はコミュニケーションの目的を達成させるために行うべきとされており、そのような機能主義的観点に立てば、通訳者自身の自発的発言のその一部は「通訳行為」として捉えることができるのではないかと考える。

参考文献

Hale, Sandra Beatriz, (2007). Community Interpreting, Hampshire: Palgrave Macmillan.（= 2014, 飯田奈美子編,コミュニティ通訳――オーストラリアの視点による理論・技術・実践, 文理閣.）

飯田奈美子 (2016). 対人援助におけるコミュニティ通訳者の役割考察――通訳の公正介入基準の検討,立命館大学大学院先端総合学術研究科課程博士学位請求論文, 2016.

Goffman, E. (1981). Forms of talk. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.

水野真木子 (2013). 医療通訳者の異文化仲介者としての役割について，金城学院大学論集,10(1) : 1-15.

灘光洋子 (2008) . 医療通訳者の立場、役割、動機について―インタビュー調査をもとに 通訳翻訳研究, 8: 73-95.

Sacks, H., (1972). An initial investigation of the usability of conversational data for doing sociology. In Sudnow, D. (Ed.), Studies in social interaction, Free Press, 31-73.= [北沢裕・西阪仰 訳(1989). 会話データの利用法 ,日常性の解剖学, マルジュ社,93-173.]

佐藤美希 (2005). 英文学研究と翻訳規範――W.B. イェイツ At the Hawk's Well の日本語訳から，北海道大学大学院国際広報メディア研究 科院生論集 1: 64-82.

新崎隆子 (2010) .通訳のコミュニケーション調整仮説――英日逐次通訳の事例から.青山学院大学大学院国際政治経済学研究科国際コミュニケーション専攻 2010 年度博士論文.

瀧本眞人 (2006) .AUSIT 倫理規程と通訳者の行動―ビジネス分野におけるダイアログ通訳の場合，通訳研究. 6: 143-154.

Toury, Gideon., (1995), Descriptive Translation Studies and Beyond, Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.

吉田 理加(2007). 法廷相互行為を通訳する ―法廷通訳人の役割再考－，通訳研究 ,(7) 19-38.

見出し文で商用的にはたらく語句について

―雑誌記事見出しの場合―

大谷鉄平(長崎外国語大学)

1. はじめに

雑誌記事や web ニュースの見出し文を目に留め本文を閲覧したところ,実際はある商材の広告[1]であった,という経験はないだろうか.あるいは,広告を謳っていない記事見出し文に対し文言から広告的な印象を得た経験はないだろうか.

メディアが発信する情報には「見えない広告(谷村,2005)」が盛り込まれるものも多い一方,情報リテラシーの重要性が浸透した昨今では,疑り深い消費者(佐藤,2008)をそれとなく誘引するための方略や実践も認められる.その一例に,発信側が広告を企図して制作したと解される見出し文に,従来の宣伝・広告文研究が考察対象とした「〜ませんか(〈勧誘〉)」「〜てください(〈依頼〉)」などのモダリティ形式を用いた説得に依らないものがあり,これは広告の「逆説的性格(辻,1998)」を背景とする[2].そのうえで,本研究では,当該の**事実上の**広告文となり得る見出し文に用いられる語句に注目し,これらが文脈において商用的[3]に作用する可能性を論じる.具体的には,Web OYA-bunko(https://www.oya-bunko.com/ 以下,OYA)収録の雑誌記事見出し文を言語資料としたテキストマイニング[4]による量的調査,ならびに批判的談話分析 Critical Discourse Analysis(以下,CDA)の立場からの個別事例に対する精緻な読みの結果からの考察を提示する.なお,本要旨文では紙幅の都合上,具体例の掲載を最小限まで省略した.これに関しては発表時に補足・追加的に紹介したい.

2. 前提的議論

本研究の率直な動機は冒頭の2文であり,発表者の関心は「ことば―メディア―マーケティング」の相互影響性にある.また,個人や団体が自らの利得のためにメディアを通じあることばを社会に流通させる実態を背景に,「**消費財としてのことば**」との概念を提案するとともに,同概念の妥当性を担保するための検討を進めている.さらに,本研究で用いる言語資料は雑誌の記事見出し文であり,先行する広告文研究が主に用いた「明らかな」広告媒体ではない.これは,閲覧側における文面の解釈の際,前提的に媒体的特徴への意識(=広告に書かれたものだ)が影響する,との可能性を排除する目的があるとともに,見出しに文は基本的に字数制限があり個別例ごとの量的な多寡が少ない,との分析上の優位点もある.

一方,本研究では複数の語句に関し考察結果を提出しているが,本発表ではこのうち具体例として「ご存じ」と「〜ないと損」の2つを取り上げる.これらは大谷(2019a)(2019b)に検討結果があるが,以下の 3. 4. はこれらを若干の修正のうえ整理したものである.そして,5. では他の語句を含めた包括的な「商用的にはたらく語彙」の特徴に関し言及する.

3. 見出し文において商用的にはたらく「ご存じ」について

3.1 量的調査

OYA 収録の雑誌記事見出しにおいて,「ご存じ(ご存知)」を伴うものは計 1323 件(ご存じ:827 件,ご存知:496 件)であり,9割以上[5]が例1などの「誰もが知る(=自明型)」,例2などの「質問型」という内容上2種類の文脈構成が確認された.また,

---

[1] 一般に「広告」との語は,広告活動 advertising と広告表現 advertisement を包括する(亀井・疋田,2005)とされるが,本発表での同語の定義はこのうち前者,なかでも特に閲覧側(=消費者)の消費活動による発信側(=マーケターならびにメディア)の利得の発生につながる活動,とする.

[2] 辻(1998)によれば,広告内のメッセージの解釈・受容において,本来言語化されない「広告である」とのメタ・メッセージが意識されることで,基層的メッセージの信頼性を損なうという.ゆえに,ただしこれは,記載媒体がそもそも広告である際の閲覧側によるアドホックな想定 assumption である場合も含まれる.本研究では当該の場合を排除するため,言語資料として一瞥して広告か否かを判別できない雑誌記事見出しを採用し,分析対象としている.

[3] 本研究で鍵となる「商用的 commercial」については,「宣伝・広告 advertising や販促 sales promotion,周知 dissemination など,発信側の営利 profit に結びつく一連の特徴」,と定義する.これは,2.に示す発表者の研究射程(ことば―メディア―マーケティングの相互影響性)に基づくものである.

[4] なお,分析ツールとしては樋口耕一氏作成の KH Coder(http://khc.sourceforge.net/)を用いる.また,言語資料は OYA 収録の雑誌記事見出し文を独自に text 化し収集したものであり,収集作業は 2013 年 9 月 1 日〜2014 年 10 月 14 日のほぼ 1 年間であり,これ以降追加された事例は反映されていない.

[5] 「自明型」「質問型」以外(表2「その他」)には例3のようなものがあるが,少数であるため本研究では考察対象外とする.

同語を含む表現形式の多様性と「自明型」「質問型」などの出現数と割合をまとめたものが表1と表2である.

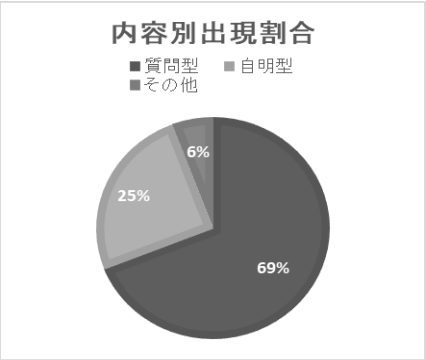
例1 私,生まれも育ちも大阪です.ご存知,新世界で番はります,大西ユカリです(雑誌名:Switch,発行日:2001年12月,144-145)
例2 ご存じですか?砂糖のすごーい実力　これ以上太りたくない!ならば,砂糖マジックで上手にダイエット(雑誌名:MINE,発行日:2003年10月,170-171)

(左) 表1 内容別の表現形式のバリエーションと出現数　(右) 表2 内容別の出現割合

自明型	出現数
ご存じ	139
ご存知!	96
ご存知	95
ご存じ!	5
合計	335

質問型	出現数
ご存じですか	383
ご存知ですか	141
ご存じ?	98
ご存知か	84
ご存じか	75
ご存知?	40
ご存じでしたか	35
ご存じでした?	15
ご存知でしたか	10
ご存じだろうか	9
ご存じでしょうか	7
ご存知でした?	4
ご存知でしょうか	3
ご存知だろうか	3
ご存じない?	3
ご存じだった?	2
ご存知ない?	1
合計	913

その他	出現数
ご存じ	56
ご存知	19
合計	75



加えて,同語の見出し文中での出現位置については,文頭(複数の文から成るものについては,2文目以降の冒頭も含む)での出現が目立った.これに関し,発表者は表1の結果をもとに,「自明型」のすべての事例(計335例),ないし「質問型」のうち事例数の多い「ご存じですか/ご存知ですか」と「ご存じ?/ご存知?」との表現形式を伴う事例(計662例)を対象に,KWICコンコーダンス機能を用い再調査・集計を行った結果,表3の通りとなった.なお,同表の「出現」は全例の再観察の結果確認された総出現数,「割合」は表1の出現数を全体とした割合である(例:「自明型」ご存じ=114/139).

表3 文頭に出現する「ご存じ/ご存知」

	表現形式	出現	割合	表現形式	出現	割合
自明型	ご存じ	114	82.0%	ご存じ!	2	40.0%
	ご存知	82	86.3%	ご存知!	92	95.8%
	表現形式	出現	割合	表現形式	出現	割合
質問型	ご存じですか	182	47.5%	ご存じ?	43	43.9%
	ご存知ですか	62	44.0%	ご存知?	9	22.5%

以上より,雑誌記事見出し上での「ご存じ」の使用としては,例1など「誰もが知る○○」との文脈を構築する「自明型」,例2など「質問型」の傾向が強く,さらに,特に文頭に多く配置されることが分かった.なお,KH Coderにより関連語との共起関係に関する分析を行ったが,結果としては「ご存じ/ご存知」ともに「!」「?」との共起関係のみが突出して強く,特定の話題のジャンルへの偏向は認められなかった.このことは,あらゆるジャンルの話題において,同語が雑誌記事見出し文の常套句として流通している実態を示唆しよう.

3.2 質的調査

量的調査の結果を踏まえ,CDAに基づく再観察を行った結果,「ご存じ」を伴う文脈が事実上の広告としてはたらく背景として,閲覧側への「既知/未知へのはたらきかけ」が指摘された.また,文頭への配置傾向に関しては,閲覧側の目に留まりやすい箇所への配置により関心を惹起させることで,読み飛ばす(=意識しない)ことを防ぐ,という発信側の方略が窺われた.例えば例1の場合,「大西ユカリ」を知る人々の一部は,当人に関する情報に関心を寄せ,記事本文の閲覧や雑誌購入の意思決定を下すであろう.逆に「大西ユカリ」を知らない人々の一部は,「自身以外の既知」を意識し,追随欲求[6]から当人に関しweb検索を行う,あるいは同様に雑誌購入の意思決定を下すであろう.一方,(記事中の話題の対象への)既知の

例3 本誌だけが掴んだ!　雅子さまもご存知ない側近の“おせっかい”と追っかけの“排除”　あの騒動は水面下で続いていた…(雑誌名:週刊女性,発行日:2000年05月30日,32-33.)

[6] 他者への同調心理(ないし集団心理)に基づく追随的な消費行動を,行動経済学では「ハーディング現象」と呼ぶ.ふと見かけたラーメン屋に行列ができて

決めつけや問いかけの「唐突さ」は,一部の閲覧者には押しつけがましさとして映り,見出し文全体への不快感や違和感を醸成し得る.ただし,重要なこととして,いずれの場合であれ,閲覧側が「読み飛ばす」ことなく見出し文の内容を自身と関連付けて意識する点では,発信側の商用目的を成就する契機を得ていることを強調したい.

4. 見出し文において商用的にはたらく「～ないと損」について

4.1 量的調査

OYA収録の雑誌記事見出しにおいて,「～ないと損」を伴うものは計484件であり,このうち「～」にあたる「ないと損」に前接する動詞に関する調査(＝何をしないと損なのか,という文脈構成に関する調査)の結果,例4をはじめ「知る」の前接が過半数を占め,「知らないと損」との文言が雑誌記事見出し文での常套句として流通している実態が示唆された.[7]調査・分析の結果得られた「～ないと損」に前接する動詞のバリエーションならびに出現数は,表3, 表4の通りである.

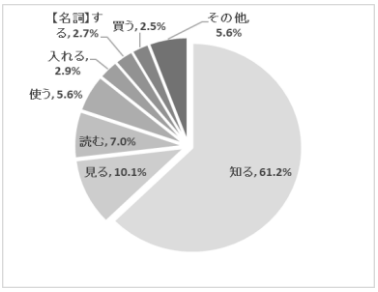
例 4 知らないと損する情報　実行厳禁「激裏情報」管理人の,知ったら危険なウラ情報(執筆者:本堂昌哉,雑誌名:SPA!,発行日:2012年06月19日,45.)

(左)表3 「～ないと損」に前接する動詞と出現数

順位	抽出語	総数	順位	抽出語	総数	順位	抽出語	総数
1	知る	296	10	楽しむ	2	19	選ぶ	1
2	見る	49	11	知っている	2	20	遭う	1
3	読む	34	12	気がつく	1	21	調べる	1
4	使う	27	13	見つける	1	22	変える	1
5	入れる	14	14	遣う	1	23	抑える	1
6	【名詞】する	13	15	住む	1	24	やる	1
7	買う	12	16	食べる	1	25	乗り換える	1
8	【動詞】ておく	5	17	生まれる	1	26	観る	1
9	聴く	2	18	生る	1		合計	471

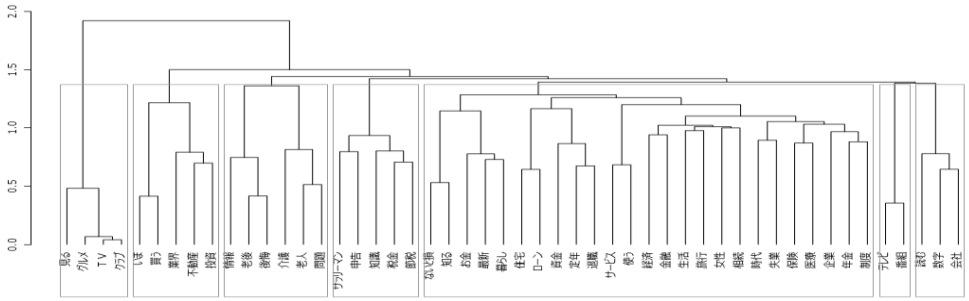
※この他、【名詞】じゃないと損:13

(右)表4「～ないと損」に前接する動詞の割合



一方,文脈構成の傾向を捉えるためにKH Coderの階層的クラスター分析を行った結果,表5の結果を得た.同表からは「(Ⅰ)見る～クラブ」「(Ⅱ)いま～投資」「(Ⅲ)情報～老人」「(Ⅳ)サラリーマン～節税」「(Ⅴ)ないと損～制度」「(Ⅵ)テレビ,番組」「(Ⅶ)読む～会社」,以上7つの記事中の話題に関するクラスターが確認される.

表5 「ないと損」を含む雑誌記事見出しに対する階層的クラスター分析の結果



4.2 量的調査

4.1の結果を踏まえ(Ⅰ)～(Ⅶ)の分類枠を念頭にCDAに基づく再観察を行った結果,「知る」との共起により「不動産(Ⅱ)」「老人介護(Ⅲ)」「税金・年金保険・ローン(Ⅳ)(Ⅴ)」といった金銭・健康・常識面に特化した情報や知識への「未知に伴う不利益」が生じるとの文脈(ないし)を構築し易いことが分かった(例5など).これらでの「～ないと損」は,知識・情報に関する仔細を提供する点で,記事本文の閲覧や雑誌購入の意思決定の誘引に資すると考えられる.一方,(Ⅰ)(Ⅶ)に範疇化される見出し文では,表5の語群からも推察されるように,具体的なコンテンツの「未取得に伴う不利益」を謳う見出

いたら自身も並んでしまう,翌日の仲間との会話で仲間外れにならないように「観るつもりのない」ドラマを視聴してしまう,などがこれにあたる.

[7] 表層的メッセージに関し,以下,便宜的に「知らないと損」を伴う場合を「未知に伴う不利益」,それ以外を「未取得に伴う不利益」と称する.

し文が多数観察された(例 6 など). これらでの「～ないと損」は, 記事本文の閲覧や雑誌購入に加え, 当該の商材に対する閲覧側の認知や関心を醸成し得る点で, より販促面での商用的性質を伴うものと考えられる.

例 5 テレビ番組発, ブームになった健康食材 15 の真実　正しく知らないと損をする効能と弊害を専門家が徹底分析(雑誌名:テレビ・サライ, 発行日:2003 年 12 月, 13-29.)

例 6 エンターテインメントグルメクラブ　見ないと損する！必見 TV　土曜ドラマ『涙をたたえて微笑せよ』明治の息子・島田清次郎(雑誌名:週刊現代, 発行日:1995 年 04 月 22 日, 118.)

例 7 山海の湯宿が待つ豪華冬列車の旅　男女ペア用フリーきっぷもお目見え　知らないと損する“お得切符”あれこれ(雑誌名:日経おとなの OFF, 発行日:2003 年 02 月, 46-47.)

さらに浮き彫りとなった点としては, 「～ないと損」をともなう文脈が構築する「不利益」の度合いがある. すなわち, 例 4 や例 5 では「未知・未取得が閲覧側に直接的な不利益を及ぼす」, との基層的メッセージが認められ, これを「『絶対的』不利益」としよう. 対して, 例 6, 7 では未知・未取得であれ閲覧側への直接的不利益を提示するものではなく, 例 7 ではむしろ「対象の既知・取得状態が閲覧側に利益を及ぼす」との基層的メッセージが認められる. これらを「『相対的』不利益」とし, 両者を基準とした OYA 収録の雑誌記事見出し文の分類結果が表 6 である(Ⅷは Ⅰ～Ⅶに分類できないもの).

表 4 記事ジャンル別の「不利益」の【絶対性／相対性】

	Ⅰ・Ⅵ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅶ	Ⅷ	合計
絶対的	0	10	26	31	73	13	49	202
相対的	25	15	23	15	45	9	150	282
合計	25	25	49	46	118	22	199	484

特に, 「『相対的』不利益」に分類される見出し文では, 真逆の表現である「～すると得」と置き換えても内容面に差異は認められない[8]. 敢えて「～すると得」ではなく否定的な「～ないと損」が用いられる理由としては, 第一に, 1. に辻(1998)の議論を踏まえ論じたように, 既存の広告に広く流通する語として「得」との語があり, 閲覧側においてメッセージの解釈以前に「これは広告である」との意識が前掲化する可能性があることが考えられる. 第二に, 小池(2008)が提示した広告中の日本語表現の分類のうち「強迫型[9]」に準ずるメッセージ効果を担い得ることが考えられる.

5. 結語

本発表では, 宣伝・広告を謳わずとも事実上の広告文としてはたらき得る文章として雑誌記事見出しを取り上げ, 特に「ご存じ」「～ないと損」を伴う文脈構成に関する調査結果を報告した. 発表者の研究では他にも「話題」「おなじみ」「注目」等の検討結果があるが, 今回は紙幅の都合上, これら 2 語の再検討報告となったことをお詫び申し上げたい.

参考文献

大谷鉄平(2019a). 宣伝文に用いられる語彙の商用的作用―雑誌の記事見出しにみられる「ご存じ」の場合― 韓国日本語学会第 39 回国際学術大会発表予稿集, 119-124

大谷鉄平(2019b). 宣伝文に用いられる語句の商用的作用 ―雑誌記事見出しにみられる「～ないと損」の場合― 比較文化研究, **139**, 論文審査中

亀井昭宏・疋田聰(2005). 新広告論 日経広告研究所

小池康(2008). ネット広告の日本語表現 日本語学, **27-6**, 4-12

佐藤尚之(2008). 明日の広告 アスキー

谷村智康(2005). CM 化するニッポン WAVE 出版

辻大介(1998). 言語行為としての広告:その逆説的性格 マス・コミュニケーション研究, **52**, 104-111

[8] 例 6 の「知らないと損する“お得切符”あれこれ」を「知って得する“お得切符”あれこれ」と置き換えても文意に差異が無いことを確認されたい.

[9] 当該類型は閲覧側を「不穏 (発表者注 : 原文ママ. 『不安』か) な気持ちにさせ, それを解決できるのは広告商品であるということを暗示的にアピールするタイプ (p. 9, 抜粋)」とされ, 「化粧品会社の広告」「情報セキュリティ対策のキャンペーン」の 2 例を挙げている.

感動詞「あら」の音調と機能

―『日本語日常会話コーパス』を例として―[1]

加藤恵梨(大手前大学)　石山友之(国際交流基金日本語国際センター)

1. はじめに

本研究は，小磯他(2019)による『日本語日常会話コーパス』モニター公開版(以下，『CEJC』)をもとに，感動詞「あら」が会話で用いられる際の音調の型を分類する．また，「あら」が有する機能にはどのようなものがあるのかを明示し，それらと音調との関連性について記述する．

先行研究では，「あら」の音調は高低という下降型と，低高という上昇型に分類されている(郡，2018；浅田，2017；田窪・金水，1997 など)．浅田(2017)は，下降型は主に中年以上の女性が用いて「問題に気づき驚く声」を表すのに対し，上昇型は男女を問わず使われ，「意外な真実に気づき，問題視する声」を表すと述べている．また，郡(2018)は下降型の「あら」は「予想外の状況になったとき」に使い，「理解や納得ができない気持ちをあらわす感動詞は，アクセントの下げをなくして，疑問型上昇調を付ける」と述べている．このように，音調型によって使われ方や使用されやすい性別などが指摘されている．さらに，浅田(2017)は，「あら」の中に上昇や下降がなく，「あ」と「ら」がともに「話し手の音域での高い声」や「中ぐらいの声」となるものがあることを指摘している．この型は，「あら，どっこいしょ」や「あら，よっと」のように，「後ろに続く『どっこいしょ』『よっ』を導き出すための勢いづけの声」であると述べている．

2. 分析の方法

『CEJC』から，品詞が「感動詞－一般」である「あら」の用例を抽出した．その際，「あらー」「あらま」などは除外し，書字形が「あら」であるもののみを対象とした．その後，音声解析プログラム Praat で「あら」のピッチ曲線を抽出し，ピッチ曲線と聴覚印象をもとに音調を分析し，型の分類を行った．また，前後の文脈から「あら」の機能を分析した．

3. 全体的な結果

『CEJC』で「あら」を抽出した際に，検索結果には現れるものの該当する音声が見つからないものが 1 件あった．また，話者が自身の過去の発言を引用する中で「あら」が使用されているものが 3 件あった．今回の分析からはこれら 4 件を除外した．その結果，『CEJC』では 37 名による 95 件の「あら」が見つかった．『CEJC』の異なり話者数は 237 名，総語数は約 609，327 語（短単位）であることからすると(小磯他，2019)，非常に少ない数である．

表 1 は，「あら」の使用者数，使用回数を話者の年代別に示したものである．

表 1　話者の年代別の「あら」の使用者数と使用回数

	使用話者数			使用回数		
年代	女性	男性	合計	女性	男性	合計
20 代	2	3	5	3	19	22
30 代	6	1	7	8	1	9
40 代	6	0	6	21	0	21
50 代	9	1	10	18	3	21
60 代	5	0	5	17	0	17
70 代	2	1	3	3	1	4
80 代以上	0	1	1	0	1	1
合計	30	7	37	70	25	95

[1] 本研究は『日本語日常会話コーパス』モニター公開版(小磯他，2019)を利用して行われたものである．

表の通り，男女別の使用者数，使用回数は，男性が 7 名 25 回，女性が 30 名 70 回であり，女性の使用者数，使用回数の方が多かった．

4. 「あら」の音調の分析

『CEJC』で抽出した 95 件の「あら」の音調を分析した結果，周囲の雑音や話し声によってピッチが正確に計測できないものが 1 件あった．これを除く 94 件の「あら」の音調は，5 つの型に分類できることがわかった．各音調型と使用回数は表 2 の通りである．最も多かったのは下降型で，全体の約 47%を占めていた．その次に多かったのは上昇型で，以下，上昇下降型，不明型，平坦型という順であった．話者の性別を見ると，音調に関係なく男女の使用があった．

表 2　各音調型とその使用回数

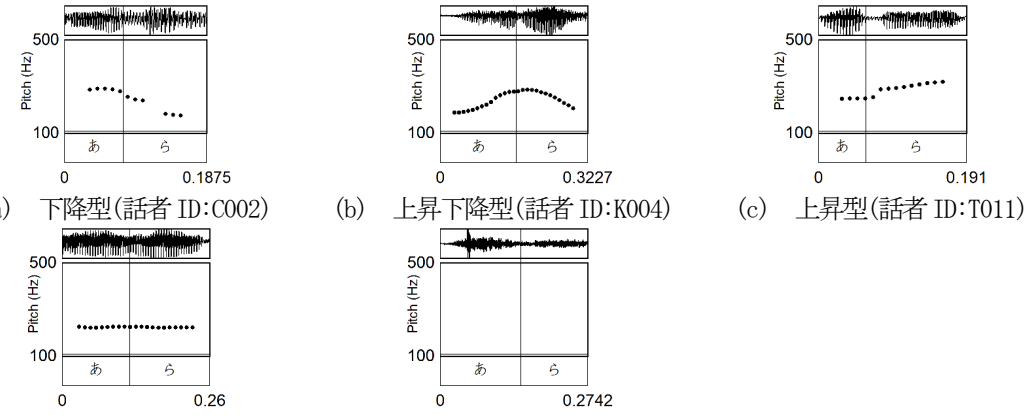
音調型	説明	使用回数		
		全体	女性	男性
Ⅰ　下降型	「あ」のピッチが高く始まり，「ら」で下降する	44	29	15
Ⅱ　上昇下降型	「あ」でピッチが上昇し，「ら」は下降する	13	9	4
Ⅲ　上昇型	「あ」のピッチが低く始まり，「ら」で上昇する	20	16	4
Ⅳ　平坦型	顕著なピッチの上下がなく，平坦なピッチ曲線となる型	8	7	1
Ⅴ　不明型	無声化等の要因により，ピッチ曲線が現れない型	9	8	1
	(合計)	94	69	25

Praat で抽出した各音調型の典型例の波形とピッチ曲線は，以下の図 1(a)から(e)の通りである．図 1(a)は下降型の例である．ピッチ曲線を見ると，「あ」が高い位置から始まっており，「ら」でピッチが下降している．図 1(b)は上昇下降型の例である．ピッチ曲線を見ると，「ら」でピッチが下降する点は下降型と共通するものの，上昇下降型では「あ」の中でピッチの上昇がある点が異なる．図 1(c)は上昇型の例である．「あ」の中ではピッチに大きな変化がなく，「ら」でピッチが上昇している．

これまでの 3 つの型はピッチ曲線からピッチに上昇または下降がある型であった．しかし，図 1(d)のように，顕著な上下動がない，平坦なピッチ曲線となっているものがあった．このような音調を平坦型とした．浅田(2017)もピッチが平坦な型の存在を指摘していたが，勢いづけのために用いられると述べていた．しかし，『CEJC』に現れていた平坦型は，「あら忘れちゃった」「あら楽しそう」のように，勢いづけとは考えられない場合に使用されていた．

さらに，「あら」という発話で無声化，「きしみ声」化が起きているものもあり，このような場合，図 1(e)のように，ピッチ曲線を正しく描写することが不可能となる．このような例を不明型とした．

先行研究では「あら」の音調は上昇型と下降型のみか，もしくは浅井(2017)のようにそれらに加えて平坦型を挙げていた．しかし，実際の会話の中では先行研究で指摘されているよりも多様な音調型が現れることが明らかになった．以下では，便宜上，図 1(a)から(d)までの音調型を，ピッチの動きに合わせて「↓」「↑↓」「↑」「→」という記号を用いて示すこととし，図(e)の不明型は，無声化，「きしみ声」化をそれぞれ「devoiced」「creaky」と示すこととする．また，雑音と話し声によって除外した 1 例を「noise」と示すこととする．



(a)　下降型(話者 ID:C002)　(b)　上昇下降型(話者 ID:K004)　(c)　上昇型(話者 ID:T011)

(d)　平坦型(話者 ID:K004)　(e)　不明型(話者 ID:C002_011)

図 1　各音調型の波形とピッチ曲線

5. 「あら」の機能と音調との関連性の分析

男女別の「あら」の機能と音調についての詳細は，表3と表4のように記述することができる．

表3は，女性が「あら」を誰に対して，どのような機能で用いているのか，またその際，どのような音調が使われているかをまとめたものである．

表3　女性の「あら」の使用

「あら」の機能		音調	人数	使用者の年代（会話の相手）
何かに驚く	相手の発言に驚く	↓	9	20代(20代友人男)，30代3名(40代友人女2回，40代友人男)，40代2名(40代友人女2回)，50代2名(60代姉3回，30代友人女)，60代(60代知人女)
		↑	3	30代(30代友人女)，40代(40代義妹)，50代(50代友人女)
		→	3	30代(30代友人女)，40代2名(70代母，40代友人女)
		↑↓	2	50代2名(40代友人女，60代姉，80代母)
		creaky	1	50代(50代友人女)
		devoiced	1	60代(50代妹)
	ある物事を見て驚く	↑	2	50代(独り言)，60代(5歳未満孫娘)
		→	1	60代(5歳未満孫娘)
何かに気づく	ある物事に気づく	↓	3	30代（独り言），40代（独り言），50代（独り言）
		↑	3	40代（独り言），50代(独り言)，60代(独り言)5回
		devoiced	1	70代（独り言）
	自身の失敗に気づく	↓	3	60代2名（独り言），70代（独り言）
		→	2	40代（独り言），70代（独り言）
相手の発言・行為に喜ぶ		noise	1	50代(50代友人女)
		↓	1	50代(80代母)
		↑↓	1	40代(ペット)
あいづちをうつ		↓	4	20代(50代上司男)，40代(40代友人女)，50代(50代友人男)，60代(50代妹)
		devoiced	1	30代(10代息子)
相手の意識を向ける	相手に声をかける	devoiced	2	20代（ペット），60代(5歳未満孫娘)2回
		↑	1	40代（ペット）
		↓	1	60代(5歳未満孫娘)3回
	相手の注意を引く	↑↓	4	40代(40代友人女)，50代2名(40代と50代同僚女2回，40代友人女)，60代(5歳未満孫娘)
		↓	2	30代(20代職場の後輩女)，40代(40代友人女)2回
		↑	2	40代2名(40代友人女，10代息子)

表3のように，『CEJC』において女性は，「何かに驚く」「何かに気づく」「相手の発言・行為に喜ぶ」「あいづちをうつ」「相手の意識を向ける」時に「あら」と発している．「何かに驚く」「何かに気づく」「相手の発言・行為に喜ぶ」のように，ある物事によって「あら」という発話が引き起こされる場合と，「あいづちをうつ」「相手の意識を向ける」のように，話し手が意識的に「あら」という語を使用する場合がある．また，「あら」が誰との会話で用いられているのかについて見ると，「何かに驚く」「相手の発言・行為に喜ぶ」「あいづちをうつ」「相手の意識を向ける」時の「あら」は，主に家族や友人といった親しい人との会話の中で見られる．それに対して，「何かに気づく」時に発せられる「あら」はすべて独り言で用いられている．

20代から60代という幅広い年代に最も多く使われているのは，「何かに驚く」際の「あら」である．「何かに驚く」は「相手の発言に驚く」と「ある物事を見て驚く」に下位分類することができる．浅田(2017)は，下降型の「あら」は主に中年以上の女性が用いて「問題に気づき驚く声」を表すと述べていた．『CEJC』では，「相手の発言に驚く」時には下降型が最も多く使われているが，「ある物事を見て驚く」場合には下降型は使われていない．

二番目に多く使われているのは「何かに気づく」と「相手の意識を向ける」である．「何かに気づく」は，「ある物事に

気づく」と「自身の失敗に気づく」に下位分類することができる．「何かに気づく」際には下降型が最も多く使われている．一方の 「相手の意識を向ける」は，「相手に声をかける」と「相手の注意を引く」に下位分類することができる．「相手の注意を引く」際に上昇下降型が多く用いられているのが特徴である．

続いて，男性の場合を見る．表4は男性が「あら」を誰に対して，どのような機能で用いているのか，またその際，どのような音調が使われているかをまとめたものである．

表4　男性の「あら」の使用

「あら」の機能		音調	人数	使用者の年代（会話の相手）
何かに驚く	相手の発言に驚く	↓	3	20代2名（50代母，20代後輩男2回，50代男性教員），50代（20代娘）2回
		↑	2	20代2名（50代母，20代後輩男）
		↑↓	1	20代（20代後輩男2回，50代教員男，20代友人男）
	ある物事を見て驚く	↑	1	20代（独り言）
何かに気づく	ある物事に気づく	↓	1	30代（5歳未満の娘）
		devoiced	1	70代（独り言）
	自身の失敗に気づく	↑	1	50代（独り事）
		→	1	80代（独り言）
あいづちをうつ		↓	1	20代（20代後輩）8回

表4のように，男性は，「何かに驚く」「何かに気づく」「あいづちをうつ」際に「あら」と発している．男性が「あら」を誰との会話でどのように用いているのかについて見ると，女性と同様，主に家族や親しい人との会話で，「何かに驚く」「あいづちをうつ」時に用いている．また，「何かに気づく」時も1例を除き，独り言で用いている．しかし，女性が用いていた「相手の発言・行為に喜ぶ」「相手の意識を向ける」という機能は男性では見られなかった。最もよく使われているのは女性と同様，「何かに驚く」時であり，その中でも「相手の発言に驚く」時に多く用いられている．音調は下降型が多いが，その他の型も見られた．

6. まとめ

本研究は，『CEJC』をもとに，感動詞「あら」が実際の会話で用いられる際の音調の型の分類と，「あら」の機能と音調との関連性について分析を行った．その結果，音調に関しては，先行研究で指摘されていた下降型、上昇型、平坦型に加えて、上昇下降型、無声化や「きしみ声」化による不明型という5つの型に分類が可能であることがわかった．また，『CEJC』で用いられている「あら」の機能には，「何かに驚く」「何かに気づく」「相手の発言・行為に喜ぶ」「あいづちをうつ」「相手の意識を向ける」という5つがあることがわかった．女性が使用している「あら」はそれら5つに分類できるが，男性が使用している「あら」はその中の「何かに驚く」「何かに気づく」「あいづちをうつ」という3つのみであった．男女ともに最も多く使われているのは「何かに驚く」時の「あら」であり，その中でも下降型の音調の「相手の発言に驚く」時の「あら」が多く使われていることがわかった．

今後は，今回考察の対象としなかった「あらー」「あらま」などについても調査および分析を行い，「あら」との共通点，相違点についても明らかにしたいと考えている．

参考文献

浅田秀子（2017）．現代感動詞用法事典 東京堂出版

小磯花絵・天谷晴香・石本祐一・居關友里子・臼田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・伝康晴・西川賢哉（2019）．『日本語日常会話コーパス』モニター公開版の設計と特徴 言語処理学会第25回年次大会発表論文集，367-370.

郡史郎（2018）．感動詞の高さの動きから見る日本語の会話表現のイントネーションの特徴 大阪大学言語文化学，**27**，69-81.

田窪行則・金水敏（1997）．応答詞・感動詞の談話的機能 音声文法研究会（編） 文法と音声 くろしお出版 pp. 257－279.

「あなた」から見られるキャラクタ性について
―「品位」の観点から―

都賢娥(北海道大学大学院生)

1. はじめに

日本語は対称詞の種類が豊富な言語であり，人称が述部との一致を求める文法的制約もないため，対称詞の使用には話し手の選択意図が反映されると考えられる．その中でも，その使用が複雑だとされている「あなた」に関しては，普段の話し手と聞き手における関係や発話場面とは異なる場合での使用が多いと言われている(小林，2016； 米沢，2016)．また，「あなた」を含む「あんた，きみ，おまえ」などのような語類は，既知関係の人物に対する無標の聞き手指示形式としての使用が考えにくい．澤田(2019)では，普段使用している無標の人称指示形式から有標の指示形式へと「カテゴリー転換」(categorical shift)がなされた場合，そこには，聞き手に対する話し手の何らかの特別な伝達意図が含まれ得ると説明する．つまり，既知関係における聞き手指示方法が一時的に「あなた」にシフトする際には、話し手が聞き手に対して，この瞬間は普段とは違うということを伝えるため，意図的に選択している場合があると考えられる．本研究では，このような「あなた」の使用について，話し手が聞き手に対して普段とは異なるスタンスを示していると解釈する．そして，「あなた」の変異形である「あんた」との比較を通し，各表現の使用者が聞き手に対するスタンスを示す際，どのように異なるのかについて「品位」という観点から社会語用論的に考察し，その発話意図と「あなた」の使用から見えてくるキャラクタ性を明らかにする．また，既知関係における一時的な「あなた」の使用を見るため，本研究では人物間の関係の把握が比較的容易である日本のテレビドラマからの用例を中心に分析する．

2. 「あなた」について

先述のように，「あなた，あんた，きみ」などのような表現は，個人差は考えられるものの，知人に対する無標の聞き手指示方法とは考えにくい[1]．実際に，知っている相手のことを指す場合，その人物の名前(固有名詞)や親族名・役職名(普通名詞)などのような表現を用いることが一般的である．小林(2016)では，談話資料(現代日本語研究会，2016)に出現する「あなた」の使用意識について，年齢や地位の上下による選択の意識があると述べており，使用文脈としては，相手への指示・批判などの文脈が目立つ点から，近い相手ではあるが，上位的立場に立つからこそ，指示・批判などが遠慮なく行えると分析している．また，「あなた」の使用に関するアンケート調査を行った米沢(2016)では，同等以下の相手に対する「あなた」の使用場面として，アドバイスをする場面が最も多く，その一方「あなた」の不使用の理由としては，相手と距離を作るためだというタイプが多く見られたと報告している．これらから，話し手は聞き手に一種の「不満」を表示したい際，一時的に「あなた」を使う場合があると考えられる．そして，その「不満」は相手へのアドバイス・批判などにつながることになり，また，これは話し手の聞き手への「スタンスが有標」であることを示していると言える．聞き手への不満のスタンスを表示するため，普段の呼び方ではない，相手に距離を置く「あなた」を一時的に用いることになり，このような友好性または親密性の欠けているスタンスに基づく「あなた」の使用は，キャラクタが成立しやすいと言える．以下では，これについて用例を基に分析および考察する．

1 妻が夫を呼ぶ際の「あなた」など，「あなた，おまえ」などの語類が無標の呼称として考えられる場合もあるが，小林(2016)によると，談話資料(現代日本語研究会，2016)における出現数の少なさからも分かるように，夫婦における「あなた」と「おまえ」は旧来的なステレオタイプだと言えるとしている．

3. 分析データ

「あなた」の発話意図とその使用から見えてくるキャラクタ性の考察のため，本研究では，職場を舞台とする日本のテレビドラマからの用例を収集及び分析した．これは，「あなた」が話し手の同等以下の人物に対して指示や忠告などができる場合での使用が多いことから，学生などによる使用よりは，部下・後輩または同僚の存在が想定できる上位者，つまり「大人のワード」だという特徴が考えられるためであり，そこで銀行と出版社という職場が舞台となっている『半沢直樹2013(以下，半沢とする)』と『地味にスゴイ！校閲ガール・河野悦子2016(以下，校閲とする)』の二つの作品を選別した．そして，登場人物のうち，同等以下の人物に対する不満を示す際「あなた」の使用が見られた人物の使用例を選別し，さらに，普段は聞き手のことを名前で表す話し手が，一時的に「あなた」を使う用例を収集した．以下の表1に，分析するデータの詳細を示す．

表 1　分析データの詳細

	「あなた」の 使用者，話し手	聞き手	話し手の聞き手 に対する 無標の呼び方	「あなた」の 共起文体	「あなた」の 使用場面
『半沢』	銀行の支店長A (男性，50代)	同じ支店の融資課長B (男性，40代)	半沢君，きみ	敬体(1)	仕事に関する話(1)
『校閲』	出版社校閲部の 社員C，先輩 (女性，30代)	同じ部署の 新入社員D，後輩 (女性，20代)	河野さん	敬体(6) 常体(1)	仕事に関する話(5) 雑談(2)

()は出現数

4. データの分析と考察

4.1 「あなた」

まず，各ドラマからの「あなた」の用例を一部示す．

(1)「間違えているのはあなたです．
そうやって自分のミスを他人のせいにすることはよくないですねえ、半沢融資課長！」 『半沢』

(2)「校閲とは，本造りを陰で支える存在です．(中略)
あなたのように作家と直接会うべきではないし，ましてや編集者のように内容に口を挟み，
新たなアイデアを出すなんてもってのほかです．」『校閲』

(3)「今日のあなたの服装はとても仕事向きの服装とは思えませんが．」『校閲』

(1)は，話し手Aから聞き手Bに対する「あなた」の使用例であり，銀行の融資損失を部下であるBの責任にするため，Aが計画した国税調査に備えるように指示するが，何かの間違いではないかと聞くBに対するAの発話であり，普段の呼び方である「半沢君，きみ」の代わりに「あなた」を選択している．(2)と(3)は，話し手Cから聞き手Dに対する「あなた」の使用例であり，(2)では，編集部と校閲部の仕事をわきまえていないDの行動を望ましくないと判断したCの発話であり，(3)は，仕事に向いていないDの服装を指摘するCの発話であり，どちらも普段の呼び方である「河野さん」の代わりに「あなた」を選択している．そしてこれらは，話し手が聞き手に対して何らかの不満を示す場合であり，(1)では，Bを出向させようとするAと，それに頑固に耐えるBは，融資損失事件が起こる前の上司と部下という関係から対敵関係に移ったと見ることが可能であり，自分の計画通りに動かないBに対するAの不満・望ましくないというスタンスが考えられる．(2)と(3)でも，Dの仕事や仕事への姿勢に対するCの不満のスタンスが考えられる．そして，不満のスタンスを持つことは，普段の聞き手との関係と離れたいことにもつながり，そのような聞き手への距離感を示すため，AとCは，相手に距離を

置く「あなた」を選択していると考えられる．この距離を置く機能は，滝浦(2008)による「遠隔化[2]」としても考えられる．

一方，「あなた」の選択による有標性について，表1の項目の中の「無標の呼び方」とも関連させて考えたいと思う．各ドラマの中で，普段話し手は聞き手のことを「名字＋敬称」の形で呼んでおり，中年男性同士の対話が多い『半沢』では，「きみ」も使われていた．そこから，話し手における「あなた」の使用は有標性を帯びることになるが，話し手AとCの年齢とジェンダー，また職場での職位などの違いから，AとCの聞き手BとDに対する対称詞の選択可能範囲が異なることが考えられる．そして，職場での話し手AとCの聞き手BとDに対する呼び方について，実際に出現しなかったものまでを範囲に入れて想定してみると，以下のように考えられる．

(4)A→B：半沢，半沢さん，半沢君，半沢融資課長(会議などの場合)，あなた，きみ，あんた，おまえ等
C→D：河野，河野さん，あなた，あんた等

(4)から，AとCのBとDに対する呼び方の選択肢の範囲が明らかに異なることが分かる．これは，AとCにとって「あなた」の使用が有標ではあるが，その有標性には程度差，つまり，段階性があると言える．特に，Aは「あなた，きみ，あんた，おまえ」の四つがすべて使用可能であり，その中でも男性同士に使える「きみ」を多用しているため，選択肢の対立による「あなた」の使用の有標性が高まり，これは「あなた」の使用の少なさにもつながると考えられる．つまり，発話場面に加え，話し手と聞き手のジェンダーや年齢などの諸要素が「あなた」の有標性をより際立てると言える．

4.2 「あんた」との比較

次に，「あなた」の変異形である「あんた」との比較を行う．分析対象のドラマの中のAとCによる「あんた」の使用は，以下の(5)の例のみであった．

(5)「勘違いしないでください．別にあんたのためじゃないから．」『校閲』

(5)は，Dのミスに校閲部の社員たちが対応している最中，休暇中だったCが復帰するのを見たDが感謝と詫びの気持ちを伝えた際のCの発話である．そして，CとDにおける(5)の直前の文脈が，(6)となる．

(6)「私があなたのことを妬む？そんなわけがないでしょ？バカも休み休みに言いなさいよ！」『校閲』

(6)は，Dの仕事の方法に関して忠告をしたCに，Dが実は嫉妬しているのかと聞くと，Cが怒りを表出する場面であり，Cが自分の感情を強く表出している場面だと言える．そして，表1での「あなた」が常体と共起した唯一の例でもある．また，(6)でのDの強い怒りの感情は，(5)の場面で結局ミスを犯したDへのマイナスの感情の表出につながっていると言える．つまり，「あなた」の使用による不満の表出が，(6)のように強い感情の表出となることがあると言える．そして，「あんた」は話し手の感情を表出する点で，「あなた」と共通する部分があるとは言えるが，これらからは敬体と常体という，共起文体の違い[3]が考えられる．そこで，この違いについて「品位」という観点から考察する．

---

2 滝浦(2008)では，Brown&Levinson(1987)によるポライトネス理論から対人関係の言語表現に関する「距離」の理論が生まれると説明し，対人関係における配慮すべき要素をフェイス(face)だとする場合，その対人関係の距離に関わる社会制度としては，文化人類学での「冗談関係・忌避関係」の区分があると説明する．冗談関係(joking relationship)は，冗談を言ったり，冷やかしたり，悪態をついたりすることが許される関係(典型的な関係：祖父母と孫)であるのに対して，忌避関係(avoidance relationship)は，避けたり尊敬することが義務付けられている関係(典型的な関係：義理の母)であり，この冗談・忌避関係がおのおのの対人関係における距離の「近接化」と「遠隔化」を導き，言語においても同様の機能を果たす道具立てが発達すると説明している．

3 小林(2016)では，「あなた，きみ，あんた，おまえ」の使用におけるステレオタイプのうち，共起文体について，「あなた，きみ」は敬体・常体と共起し，「あんた，おまえ」は常体のみと共起すると説明している．

4.3 品位との関係

言葉遣いによる話し手の品位の調整が最も容易に見られる言語形式としては，「文体」における敬体と常体の中の選択が考えられる．先述のように，「あなた」は敬体・常体と共起するのに対して，「あんた」は常に常体と共起すると言える．そして，「あなた」は聞き手に対する不満を表示するという，話し手の有標のスタンスを示すと述べたが，このスタンスを示す際，「あなた」の使用には有標な場面においても「品位を保つ理性的・中立的な上位者」でありたいという発話意図が反映されているのに対して，「あんた」は品位を犠牲にしてまで伝えたい本音を言っているという意図が考えられる．そして，「あなた」の場合，遠隔化によって相手に一時的に距離を置くことによって，話し手は「不満を理性的に言う品のある上位者」を演じていると考えられる．加藤(2019)では，ある集団の中で見られる多様なキャラクタについて，似たような属性を持つ者が集まる職場の中では，自然にキャラクタの分担が生じるが，それが本来の人格につながる場合も，場面ごとに異なる場合もあると説明する．本研究での「あなた」の使用によるキャラクタ性の表出は後者の方である可能性が高く，話し手は不満という普段とは違うスタンスを伝えるやや特殊な場面でも，品位を保ちながら，自分は指摘やアドバイスなどができる上位の立場にあることを聞き手に伝えていると考えられる．

5. おわりに

本研究では、日本語の「あなた」が話し手と同等以下の人物に対する一時的な有標のスタンスを示すという，やや特殊な場面においても，「品位を保ちたい」という発話意図から，「品のある理性的上位者」というキャラクタを一時的に演じていることを考察した．今後の課題としては，(5)と(6)のように，「あなた」と「あんた」から見られる「感情の表出」という部分の連続性の論証と，より多様な場面での「あなた」の使用を分析し，その発話意図を明らかにしたいと思う．

参考文献

Brown, P. , & S. C. Levinson (1987).
Politeness: Some universals in language usage. Cambridge, Cambridge University Press.

現代日本語研究会 (2016). 談話資料日常生活のことば ひつじ書房

加藤重広 (2019). 言語学講義―その起源と未来― ちくま新書

小林美恵子 (2016). 「日常生活」の呼称 ことば, 37, 14－32.

澤田淳(2019). 親族名称の子供中心的用法の類型と場面，視点―対照語用論的アプローチ― 澤田治美・仁田義雄・山梨正明(編) 場面と主体性・主観性 ひつじ書房 pp.107－159.

滝浦真人 (2008). ポライトネス入門 研究社

米澤陽子 (2016). 二人称代名詞「あなた」に関する調査報告 日本語教育, 163, 64－78.

分析用例

TBSテレビ『半沢直樹』(2013)

日本テレビ『地味にスゴイ！校閲ガール・河野悦子』(2016)

インドネシア語会話における指示詞 *gitu* の談話的機能

―引用標識としての機能に基づく「説得」と「和らげ」―

藤崎拓海（大阪大学大学院生）

1. はじめに

インドネシア語の口語的な会話には，*gitu* という語が非常に頻繁に現れる．これは「そのような」という意味を表す指示詞 *begitu* の短縮形である．*begitu* は文法書の記述によると，代名詞として述語を構成する（Alwi et al. 2003）か，様態の副詞として述語を修飾する（Sneddon et al. 2010）のが基本的な用法である．こうした用法は，*gitu* にも同様に見受けられる．下の事例⑴と事例⑵は筆者のデータ（第 2 章で詳述）からの抜粋であり，それぞれ *gitu* が単独で述語を構成する例（事例⑴），述語を修飾する例（事例⑵）である．

(1) Maksud gue *gitu.*
意図 1SG そのような
[主語] 述語
俺が言っているのはそういうこと．[SPRD 05:47]

(2) Gue bilang *gitu.*
1SG 言う そのような
主語 [述語]
私はそのように言った．[SBRG 04:44]

一方，*gitu* はそれら基本的な用法に加え，文の義務的構成要素である主語と述語の外に特に頻繁に現れる．下の事例⑶で，*gitu* は直前の述語 *masih nggak ngerti*「まだわからない」を修飾しているのではなく，文の構成要素の外に現れているとみることができる．このような場合，*gitu* は直前に述べられた内容を指し示している．筆者の収集したデータにおける *gitu* の出現回数全体の約 7 割がこの用法で現れる．

(3) Gue juga masih nggak ngerti *gitu.*
1SG ~もまた まだ 否定詞 理解する そのような
[主語] [述語]
俺にもまだわからない（ということ）．[KTRH 09:28]

この短縮形に特有の用法について，口語インドネシア語に特徴的な要素を記述した Ewing（2005: 249-250）及び Sneddon（2006: 132）は，*gitu* が主にイントネーション・ユニット[1]の末に現れ，ユニットの区切りを示すと述べている．特に Sneddon は，*gitu* が直前の発話に対する「強調（strength）」を表す談話的な小辞（particle）のように機能していると述べている．しかし，*gitu* がどのような意味の「強調」なのか，またどのようなメカニズムで発話を「強調」するのかについては明らかにされていない．そこで，それら 2 つの問いを明らかにすることを本発表の目的とする．

2. 対象とする会話データと分析方法

分析に用いるデータは，友人同士 2 人ペアによる対面自由会話 9 ケース（約 106 分）である．会話は，2017 年から 2019 年にかけて大阪及びインドネシアの首都ジャカルタで収集した．参加者は，インドネシア語を第一言語とする大学(院)生合計 17 名である．会話は音声の録音に加えて，音声に現れない聞き手の反応などを確認するために録画も行った．また，会話の自然さをできる限り担保するために，筆者は部屋の外あるいは会話参加者の視界に入らない場所で待機した．音声データは，ポーズや言い淀みなどの情報を含めて詳細に文字化した．本稿に掲載する事例において用いられる記号は，4 ページ目にまとめてある．

以上のように収集したデータをもとに，*gitu* が指し示す直前の内容や前後のやりとり，*gitu* と共起する要素などに注目して分析を行った．特に本発表では，上で挙げた例⑶のように発話の末に現れる *gitu* が引用標識としての機能を持つことに着目して，先の問いを明らかにすることを試みる．

[1] Intonation unit. 単一のイントネーション曲線で発話されるまとまり．

3. *gitu* の引用標識としての特徴

そこでまず，今述べた *gitu* の引用標識としての特徴について本章で詳しく論じておく．

gitu は，自己や他者の過去の発言や心情を表す発話の末に現れた場合，引用標識として機能する．Ginanjar（2016）は，インドネシア語の自然会話における引用の特徴を述べる中で，「バーバル引用マーカー」つまり語句の形で現れる引用標識の中では *gitu* が最も多く現れることを指摘している．

筆者のデータにおいて，引用標識として現れる *gitu* は例えば下の例(4)に見られる．この発話は，交際中であることを周囲に隠している共通の友人カップル，つまりその場にいない第三者について参加者同士が意見を述べ合う中でなされたものである．発話末に引用標識 *gitu* があることで，直前の *lebih open aja*「もっとオープンにやれ」が，その場にいる聞き手に向けた発話ではなく，話題となっている第三者に対する“心の声”を引用したものとして伝達される．

(4) 交際中であることを周囲に隠している友人のカップル（その場にいない第三者）についてDとNが意見を述べ合う中で． [DNND 05:04]

N	: “Lebih	open	aja,”	*gitu*	loh.
	より	オープン	だけ	そのような	particle

「もっとオープンにやれ」ってのよ．

この例のように，*gitu* は，他者（客体化した自己を含む）の声を取り入れる文脈において頻繁に現れる．Goffman（1981）[2] の言葉を借りて言えば，話し手は *gitu* を発話末に置くことによって，声に出して発話を伝達する役割のみを担う animator「発声者」として自分自身を配役し，それを通して，今その場にいる自分が創り出したのではない発話を伝達していることを示しているのである．

また，*gitu* 以外のインドネシア語の引用標識は bilang「言う」，pikir「思う」などの動詞である．それら動詞の引用標識を用いる場合はもちろん「言う」「思う」などの行為が明示されることになるし，原則として元話者も示される．例えば下の例(5)では，引用発話の前にある動詞 *bilang*「言う」で行為が，そして元話者が 1 人称代名詞の *gue* で明示されている．

(5)

A : Habis	itu	gue	bilang,	“Mau	nggak	temenin	gue	ke	Umeda?”
尽きる	それ	1SG	言う	～したい	否定詞	付き添う	1SG	へ	地名

その後俺は言った．「梅田まで一緒に来てくれないか．」[JFAR 02:23]

これに対して，先の事例(4)のように *gitu* だけが引用標識として現れる場合は，元話者が誰なのか，さらには「言った」のか，「思った」のかなどの行為も明示することなく引用発話を提示することができる点が特徴である．

4. *gitu* の談話的機能

発話末に現れる *gitu* の中には，第 3 章で述べたような引用標識としての機能及び特徴に基づいた談話的機能を持っていると考えられるものがある．それらを詳細に分析した結果，「説得」機能及び「和らげ」機能が考察された．それぞれ以下 4.1 節及び 4.2 節において，具体的な事例を挙げながら説明する．

4.1 説得

筆者のデータでは，*gitu* が，先行する文脈の内容を別の形で言い換えた発話や，先行する文脈から論理的に導かれる帰結を表す発話の末に現れ，さらに *gitu* が現れた直後にはその情報を受容したことを明示する聞き手の反応が続くという事例が散見された．そのような場合，*gitu* は後述するようなメカニズムによって発話を説得的に伝達する機能を持っていると考えられる．このことについて，下の事例(6)で確認しよう．

(6) ジャカルタにごみが散らかる原因を考えるやりとり． [LFAD 08:16]

01 L :	Mungkin,	apa,	mereka	lebih	aware	nggak	sih,	kalo	di	daerah?
	多分	何	3PL	より	自覚的な	否定詞	particle	~なら	で	地方

多分，何，彼ら（地方からジャカルタに移住した人々）はもっと自覚的じゃない？地方だったら？

02	Apa	karena	di	Jakarta	tuh	imigran?
	疑問	～だから	で	地名	particle	移民

ジャカルタは移民だからか？

[2] Goffman（1981）は，「話し手」と言われる中には言葉を選択し発話の表現を創作する「作者（author）」，実際に声を出して伝達する「発声者（animator）」，発せられた言葉に対する責任を担う「本人（principal）」の役割の区別があるとした．

03 Maksudnya mereka, mereka kan datang dari luar kan?
つまり 3PL 3PL particle 来る から 外 particle
つまり彼ら，彼らは外から来てるじゃん？

04 D : He'eh [He'eh.]
うん，うん．

05 L : [Orang] luar semua kan yang datang?
人 外 全て particle 関係詞 来る
全部外の人たちじゃん（ジャカルタに）来てるのは？

06 ⇒ Jadi, mereka nggak ada rasa memiliki, *gitu* loh.
だから 3PL 否定詞 ある 感覚 所有する そのような particle
だから，彼らには所有している感覚がないってわけよ．

07 D : He::::::::m, mungkin ya.
可能性がある particle
う〜ん，かもね．

上の事例では 06 行目に *gitu* が現れているが，*gitu* の直前部分 *mereka nggak ada rasa memiliki*「彼ら（ジャカルタの住民）には所有している感覚がない」は，接続詞 *jadi*「だから」で導入されていることからもわかるように，さらに先行する 05 行目までの内容から導かれる論理的な帰結を述べようとしたものである．この事例における話し手 L の主張は，「ジャカルタの住民は外の地域からの移住者ばかりである（03, 05 行目）」⇒「彼らはジャカルタが自分のものであるという感覚がない（06 行目）」という論理の流れを持っている．そしてその帰結を表す発話の末に *gitu* が現れているのである．

このように，先行する文脈から論理的に導かれる帰結に現れる *gitu* は，*gitu* が引用標識であることと関連付けてその機能を考えることが可能である．すなわち，引用標識である *gitu* を発話末に置くことで話し手は自身を animator（Goffman, 1981）として配役し，その発話の出どころが自分ではないことを示す．さらに，元話者を特定しないという *gitu* の特徴によって，直前に述べられた内容がただ単に話し手による主観的な考えや主張を表すものではなく，あたかも「誰もがそのように言う／思う」当然のことであるかのような印象をもたらし，説得の効果を高めていると考えられるのである．

以上のように本節では，Sneddon（2006）が言う「強調」が，「説得」すなわち，*gitu* が持つ引用標識としての特徴に基づいて発話に客観性をもたらし，聞き手の理解を促すという意味での「強調」であることを提案する．

4.2 和らげ

前節では，Sneddon（2006）がいう「強調」が，*gitu* が引用標識として持つ特徴に基づく「説得」であることを論じた．一方本節では，いわゆる「強調」や「断言」というよりはむしろ，*gitu* があることによってその発話がもつ直接的な印象が和らいでいる事例について論じる．それは具体的には，*gitu* が聞き手への非難あるいは否定的な意見を表す発話の末に現れる場合である．1 例として下の事例(7)が挙げられる．

(7) 同期の R が自分よりも先に卒業してしまうことを，S が嘆いている．[SBRG 01:33]

01 S : Istilahnya lu, lu udah,
いわば 2SG 2SG すでに
いわばあんたはもう，

02 Lu udah ngulang tiga kali, [gue dua kali.]
2SG すでに 繰り返す 3 回 1SG 2 回
あんたは 3 回（試験を）やり直しになって，私は 2 回．

03 R : [((笑い))]

04 S : ⇒ Tapi kenapa lu lulus duluan, *gitu*. =
しかし なぜ 2SG 卒業する 先に そのような
なのに何であんたが先に卒業するのっていう．

05 =¥Lu jahat. Lu nggak nungguin gue.¥
2SG ひどい 2SG 否定 待つ 1SG
あんたひどい．あんた私を待ってくれなかった．

上の事例において話し手 S は，自分より聞き手 R の方が卒業試験を不合格になった回数が多いことを指摘した上で（01-02 行目），にもかかわらず先に卒業してしまう R のことを 04 行目で非難している．この 04 行目の *gitu* の直前部分 *kenapa lu lulus duluan*「何であんたが先に卒業するの」は，聞き手 R を指す 2 人称代名詞 lu の使用や，理由を尋ねる疑問文の形式をとっていることから詰問のようにも聞かれかねないものである．しかし，発話末に *gitu* が置かれていることによって，そうした印象が和らいでいるように感じられる．

このような効果が生じるメカニズムも，*gitu* が引用標識であることと関連付けて考えることが可能である．すなわち，元話者を特定しないという特徴を帯びた引用標識 *gitu* を発話の末に置くことで，話し手は出どころのわからない発話を単に伝達する animator（Goffman, 1981）として振る舞う．それによって，その発話が話し手によって創作されたものでないかのように表され，さらにそれが誰に向けられたものなのかも不明になるため，結果として非難が和らぐと説明できる．

したがって本節では，*gitu* が聞き手に対する非難や否定的な意見を表す発話の末に置かれた場合，引用標識としての特徴に基づき発話の創作者と受け手をあいまいにすることによる「和らげ」機能を持つことを提案する．

5. 結論

以上のように，*gitu* の引用標識としての機能及び特徴に着目したことによって，今まで単に「強調」（Sneddon, 2006）とされていた *gitu* の機能が，他者の声を借りて客観性をもたらすというメカニズムによる「説得」であるとわかった．さらに，*gitu* が聞き手に対する非難や意見を述べる発話の末に現れる場合は，必ずしも「強調」や「断言」ではなく，むしろ，それら行為を和らげる機能を持っていることが新たに明らかになった．これらは一見矛盾するようにも見えるが，実は表裏一体の機能である．すなわち，話し手が *gitu* によって自分自身を animator（Goffman, 1981）として位置づけ，発話の出どころを不特定にすることが，主張という局面では客観性をもたらして説得の効果を高める一方，聞き手に対する非難や否定的な意見を述べるという局面ではそれらが直接的すぎるのを調節するという作用をもたらすのである．

事例中で用いられる記号

[　　]	発話の重なり.	言-,	不完全な状態で途切れた発話.
(0.3)	ポーズの秒数.	言葉: :	直前の音が引き延ばされていることを表す.
＝	2 つの発話が途切れなく密着していることを表す.	¥言葉¥	¥¥で囲まれた部分が，にやにやしながらあるいは笑い声で発話されていることを表す.

参考文献

Alwi, Hasan., Dardjowodjojo, Soenjono., Lapoliwa, Hans and Moeliono, Anton M. (2003). *Tata Bahasa Baku Bahasa Indonesia*（『インドネシア語標準文法』）第 3 版. Balai Pustaka.

Ewing, C. Michael. (2005). Colloquial Indonesian. In Adelaar and N. Himmelmann. (ed.) *The Austronesian Languages of Asia and Madagaskar*, pp.227-258

Ginanjar, Pika Yestia. (2016). 自然会話における引用発話の形式 : 日本語とインドネシア語の対照研究 大阪大学博士論文（未公刊）

Goffman, Erving. (1981). Footing. *Forms of Talk*, pp.124-159

Sneddon, J., Adelaar, A., Djenar, D. N., Ewing, M. C. (2010). *Indonesian: A Comprehensive Grammar*. Routledge.

Sneddon, James. (2006). *Colloquial Jakartan Indonesian.* Pacific Linguistics.

体験談におけるカラ・ノデの機能の違いについて

小玉　安恵(カリフォルニア州立大学サンノゼ校)

1. はじめに

体験談が語る価値があり(reportability)，より聞き手を惹きつける効果的な語りになるためには，話の内容自体が面白いだけでなく，Labov(1972)の評価という要素が重要であると言われている(Cortazzi and Jin 2000:103)．Labov(同左:371)によれば，語る価値とは聞き手にとって話が意外性のあるものであることであり，評価とはその話の意外性を伝える手段であるとされている.その評価方法には語り手が物語の進行を一旦止め，その出来事の評価を聞き手に明示的に伝える外在的評価(external evaluation)と，ナラティブ内で相対的に使用頻度の少ない文法を用いることによってその出来事の相対的重要性を暗に示す内在的評価(internal evaluation)がある．この後者の評価装置については，否定(Yamada2003)や事実用法のタラ・ソシタラ(加藤2003[1]，金田他2018)，歴史的現在形(小玉2011)などが取り上げられ，その評価的機能が明らかにされている.しかしながら，Labovが内在的評価装置として挙げている因果の接続詞sinceやbecause，それに匹敵する日本語の接続助詞カラ，ノデの評価装置としての機能はまだ検証されていない.さらに，因果の接続詞は元来事態間の論理的で不可避的な展開や関係をマークすることが本務であり，話の展開に信憑性を与える重要な論理的構成要素であるとされている(Causality in Labov1997:408)．つまり，因果の接続助詞はタラ・ソシタラや否定などの評価装置とは対照的に想定内の展開を示すことが想定されているのである．ならば，なぜLabov(1972)は因果の接続詞をalthoughやwhileなどの逆接的接続詞と同様，評価装置の代表例として挙げたのか．本研究では，因果の接続助詞カラ・ノデの話の展開の仕方や意外性を表す評価との関わり方を検証する.

2. ノデとカラの違いに関する先行研究

日本語教科書(ex.An Introduction to Advanced Spoken Japanese)や国立国語研究所の「日本語の文法(下)」(1981)などに代表されるように，従来ノデは客観的な原因理由を，カラは主観的な原因理由を表すと説明されてきた.その先鋒となった永野(1952:38)によると，ノデとカラの違いは以下のように説明されている.

「から」は表現者が前件を後件の原因・理由として主観的に措定して結び付けられる言い方，「ので」は前件と後件とが原因・結果，理由・帰結の関係にあることが，表現者の主観を超えて存在する場合，その事態における因果関係をありのままに，主観を交えずに描写する言い方である(:38).

それに対し，国広(1992)はノデをノダの変異形として捉え，従来の説とは対照的にノデが主観的かつ間接的な接続助詞で，カラが客観的かつ直接的な接続助詞であるとし，カラはそのぶっきらぼうな印象から客観的であり，ノデはその間接性(ノ)と主観性(ダ)によって丁寧で柔らかい性質を帯びることになると主張した.これらは，ノデとカラの違いを主観性と客観性という概念によって説明しようとしている点で共通性を持つが，これらの見解の相違は，一体主観や客観，あるいは直接性間接性とは何なのか，はたまた因果関係とは何なのかという，関係する全ての観念への根本的な問いをもたらした.哲学の分野においては，因果とは何かはまだ完全には解決を見ていないテーマであり(一ノ瀬2001)，Hume(2011)によれば，因果関係とは話し手の過去の経験に照らし合わせて結び付けられた二つの事象の近接的で恒常的な結合関係に過ぎず，その連結は話者の期待や思考の癖というような思い込みに基づいた関係であるとされている.その一方で，国広(同上)のノデをノダの変異形として捉える見方は，認知言語学や関連性理論に基づいた池上(1987)，菊池(2000)や名嶋(2007)等によるノダの研究が明らかにしているように，ノデがノダと同様，話者の主観である因果関係を聞き手も体験しその関係を了承しているかのような間主観的なものとして提示する可能性を示唆している[2].

---

1 加藤(2003)は事実的なタラ，ソシタラはテ形に次ぐ使用頻度を持ち，意外性という評価及び心的態度の表示機能は後件述語のコントロール不可能性という統語的・意味的性質に基づくものであるとしている.

2 本稿では，体験談という語りにおける主観的・客観的という術語を，話者が認識の場面の中に認識主体である自己の客体化の度合いと時空間的な視点の二つの観点から用いる.最も主観的な語りとは，自己が客体化されておらず物語世界の今ここの視点から語られる語りで，最も客観的な語りとは自己が客体化

その他にも，山本(2001)など，ブラウン＆レビンソンの丁寧さの原理からそれぞれカラが積極的丁寧さ(positive politeness)を，ノデが消極的丁寧さ(negative politeness)を示すとし，それらの違いを丁寧さの原理によって説明しようとする試みもある.

本稿では，新しいアプローチとして，口語の体験談を分析の対象とし，口語ナラティブにおけるカラ・ノデの使われ方を，ラボビアンモデルを用いて話の展開や評価という観点から分析していくことで，それらの機能の違いを明らかにする.

3. 本研究のデータと研究方法

テレビ番組「ごきげんよう」から取った 44 の芸能人の体験談をラボビアンモデルでナラティブ構造分析し，まず，接続助詞カラ・ノデがそれぞれナラティブの全体構造においてどの部分によく現れるかをみた.それらは話の登場人物，時，場所及び初期状況について述べるオリエンテーション部，実際に物事が動き始め結末を迎えるまでのコンプリケーション部（以後CA部）と，結末の出来事を述べて以後話が終了するまでの終結部(Coda)である[3]. 次に，特にデータの最も多いCA部内の節構造のうち，オリエンテーション節，コンプリケーション節(以後 CA 節)，出来事への評価や心情を述べる評価節のうちどのタイプの節によく現れるのかを見た.さらに，前件であるカラ節ノデ節と後件の間で，主語人称が登場人物である「私」の1人称と，事物や第三者の登場人物を含む3人称の間でどのようにシフトするかを見た[4]. 最後に，体験談におけるカラとノデの使われ方の違いを具体的な例を基に質的に分析した.

4. 分析結果

44の体験談の中にはノデ45，カラ72の使用例があった. 平均するとノデは一話につき1個，カラは1から2個という使用頻度である. これは，使用頻度に基づいた有標性をその評価のメカニズムとする内在的評価装置としては，適当な頻度であると思われる. 44話中，カラ・ノデの使用のない体験談は6話あり，ノデのみのものが11話，カラのみのものが14話，カラ・ノデが両方使われている体験談は13話あった. カラ・ノデの現れたセクション及び節構造は以下の通りである.

表1 セクション毎に現れるノデ・カラの割合

	オリエンテーション部	コンプリケーション部	終結部	計
カラ	7 (9.7%)	61(84.7%)	**4(5.6%)**	72 (100%)
ノデ	**9 (20%)**	35(77%)	1(2.2%)	45 (100%)
計	16	96	5	117

表2 CA部に現れる節の種類毎のノデ・カラの割合

	オリエンテーション節	コンプリケーション節	評価節	計
カラ	22(36.1%)	**25(41.0%)**	14(23.0%)	61(100%)
ノデ	**18(51.4%)**	8(22.9%)	9(25.7%)	35(100%)
計	40	33	23	96

これらの結果からは，カラよりもノデが後景となるオリエンテーション部やオリエンテーション節により使用されていること，一方，カラはナラティブの前景となるCA部のCA節により多く現れていることが分かる.

次に，カラ・ノデで結ばれる前件と後件の人称の変化を見てみると，カラ・ノデ共に3人称から1人称へのシフトが最も多く，ついで1人称から1人称で，3人称から3人称へのシフトは少なく，1人称から3人称へのシフトに至っては観察されなかった. これらのことは，カラ・ノデが共に体験談において自己の状況や行為，評価の正当化に使用されていることを示している.

されており語りの世界の視点から語られる語りである. そして間主観的とは主観的な見えが他者と共有されていることを指す. 本稿においては，話者による複数の事象間の因果関係の主観的認定を示すカラ・ノデは，主観客観の別ではなく，主観・間主観の別に関わっていると考える.

3 ラボビアンモデルではこの他，結末部(Resolution section)と評価部(Evaluation section)があるが，本研究ではCA部と結末部を分ける必要性がないため結末部はCA部に含まれている. 評価部は結末部の前にある場合はCA部内に，結末部の後にある場合には，終結部に含まれている.

4 カラ・ノデの直後に挿入節がある場合には，その後にある意味的に繋がる節を後件として認定した.

表3 ノデ・カラの前件と後件の人称の割合

	3人称→1人称	1人称→1人称	3人称→3人称	計
カラ	36(50%)	25(34.7%)	11(15.3%)	72(100%)
ノデ	20(44%)	23 (51.1%)	2(4.4%)	45(100%)
計	56	48	13	117

さらに，これらのそれぞれの例を見ていくと，CA節のカラノデの3人称から1人称にシフトする場合に，その使われ方に差異が見られた．カラの場合，ル形のカラ節内の3人称の言動に，意表を突かれてどう反応したらよいか迷っていたり，意味がよくわからないにもかかわらず，とりあえず言われた通りにしたりする場面が多いのに対し，ノデは予想通りの展開になっていることである．例えば，以下の場面では，登場人物の「私」は，夫婦喧嘩の最中に妻に苦手なことを問われ，それが意表を突いた質問だったため，登場人物の「私」は答えに窮した後に，自分の苦手なことを答えているのだが，この答えがのちに妻の突然のイギリス留学という予想もしていなかった事態へとつながっていく．

【英語(カラ)：3人称から1人称へ，(ノデ)：1人称から1人称へ】
N：ほんとにささいなことでなんかこうかみさんを言いくるめたら(CA) 1
M: うん.
N:「いつもあなたはえばってる」と(CA). 3
M:ほう.
N: で，「私はあなたの苦手なことを一つでもいいから，あなたより上のことを作りたい.」って話し始めて. (CA) 3
M：はあ.
N:「あっ，そりゃーいいことだから，すればいいじゃん.」(CA) 1
で「苦手なこと何?」って言うから(CA), 3
「何かなあ?
一番苦手なのは英語が全く喋れないのでー(O)，1
英語とかだめだよ」って言ったら(CA), 1
「私絶対あなたより英語上手になる.
M: おー.
N: 私の得意分野にする.」って言うんですよ(CA).3

それに対してノデの場合，以下の例のように，登場人物でありかつてアイドル歌手だった「私」が病気で医者に行った際，医者が通常聞く質問にノデが使用されており，後件では 病状を説明している.
【素顔(ノデ):3人称から1人称へ】
N: そいでもって「そいでまた今日はどうしましたー?」って言うんで (CA)
「あっ，風邪引いちゃってちょっと調子が悪くて.」(CA)
「あっ，そうですか.僕同世代なんですよー.」って言われて.

また以下のように引用以外の例でも，カラの場合は，相手の行動が登場人物の「私」の予想と異なっていたため，その相手の行動の意図が読み取れないまま，とりあえず相手に言う通りにする場合に使われている.以下の場面は，ゴルフ場への行き方の分からない「私」が先輩と待ち合わせて，一緒に車で行こうとしている場面である.
【ゴルフ(カラ)：3人称から1人称へ】
N:して，平松さんの車来たんですよ.(CA)
M:あっはいはい.
N:「おっ」ってしたら，(CA) 1
パーッと走ってくるんですよ，急に.(CA) 3
「行くぞ」って
M:うーん.
N:「行くぞ」って言えばいいのに，(E)
は，走ってきて，(Repetition CA)

こうやってやるから，（CA）｛車の窓を開けるように指示する仕草｝3
ほいでブーっと開けたんですよ.（CA）1
「あーどうしたんですか?」って言ったら，（CA）1
「お前顔色悪いよ.」って言うんですよ.（CA）3

＜N=語り手，M＝司会者，ー＝長音，｛ ｝＝ジェスチャー，1＝一人称，3＝三人称( )＝節構造，CA＝CA 節，E＝評価節，O＝オリエンテーション節＞

5. おわりに

本稿では，44 の体験談をラボビアンモデルで量的にかつ質的に分析することにより，話の展開や評価という観点からカラノデの機能の違いを明らかにすることを試みた.その結果，ノデはカラよりも背景となるオリエンテーション情報に起こりやすいこと，カラはノデより話の前景となる CA 節に起こりやすいこと，また前件と後件の主語のシフトの仕方から両方とも登場人物「私」の状況，言動，評価の正当化に使用されていることがわかった.またその一方で，その CA 節においては，ノデは予想通りの展開に使用されているのに対し，カラの場合は，話者にとって予想外の第三者の言動にル形と共にカラが用いられていることが判明した．これは，カラ節が構造的にも独立しており，因果関係を自分の個人的な主観として提示するため予想外の出来事をマークし強調できるのに対し，ノデは聞き手もその因果関係を体験し了承しているかのように提示する間主観的な接続助詞であるが故に予想外の展開には用いられないからだと思われる[5].

参考文献

Cortazzi,Martin & Lixian Jin.(2000).Evaluating Evaluation in Narrative.In Hunston,Susan and Geoff Thompson (eds.), *Evaluation in Text:Authorial Stance and the Construction of Discourse.* pp.102-219, New York:Oxford University Press.

Hume,David & Selby-Bigge,L.A.(2011) An Enquiry concerning human understanding and the principles of morals. *An Enquiry Concerning Human Understanding.* http://www.gutenberg.org/files/9662/9662-h/9662-h.htm

一ノ瀬正樹(2001).原因と結果の迷宮 東京，勁草書房

池上嘉彦(1986).日本語の語りのテクストにおける時制の転換について．記号学研究**6**，61-74.

金田純平他(2018).笑い話における言語・非言語行動の特徴-関西の一般人と関西芸人の比較から- 定延利之(編) 限界芸術「面白い話」による音声言語オラリティの研究.ひつじ書房，pp.130-147.

加藤陽子(2003).日本語母語話者の体験談の語りについて：談話に現れる事実的な「タラ」「ソシタラ」の機能と使用動機.世界の日本語教育 **13**，57-74.

菊池康人(2000).のだ(んです)の本質 東京大学留学生センター紀要，**10**，25-51.

小玉安恵(2011).体験談における歴史的現在形の機能と視点 日本語教育**148**,114-128.

小玉安恵(forthcoming).非難の因果構文におけるル形の生起条件と非難のニュアンスのメカニズム.

国立国語研究所(1981).日本語教育指導参考書5 日本語の文法(下) 東京:大蔵省印刷局

国広哲弥(1992).「のだ」から「のに」・「ので」.カッケンブッシュ寛子他(編)日本語研究と日本語教育 名古屋大学出版会，pp.17-34.

Labov,William.(1972).The Transformation of Experience in Narrative Syntax. In *Language in the Inner city: Studies in the Black English Vernacular*.pp.354-396, Philadelphia: University of Pennsylvania Press.

Labov,William.(1997).Some Further Steps in Narrative Analysis. *Journal of Narrative and Life Story* **7**，395-415.

永野賢(1952). 「から」と「ので」はどう違うか. 國語と國文学，**29**(2)，30-41.

名嶋義直(2007).ノダの意味・機能―関連性理論の観点から―. くろしお出版.

田窪行則(1987).統語構造と文脈情報. 日本語学，**6**(5),明治書院,37-48.

Yamada,Masamichi.(2003).The Pragmatics of Negation: its Functions in Narrative. Hitsuji Shobo

山本もと子(2001).接続助詞「から」と「ので」の違い―丁寧さによる分析―.信州大学留学生センター紀要，**2**，9-2

5 田窪(1987)は，カラ節のみがノダが文末に来ることによって初めてカラ節内の情報が焦点化される構造になりうることを，小玉(forthcoming)は，カラ文の後件文完成テストを日本語母語話者に対し行った結果，前件の内容にかかわらず，ル形のカラ節はタ形のカラ節の場合よりも望ましくない因果関係を日本語母語話者に想起させると指摘している.

日本語, スウェーデン語とハンガリー語における現在パーフェクトの比較
―「現在との関連性」と結果性の相関関係 ―

トート マルトン (大阪大学大学院生)

1. はじめに

○英語やスウェーデン語における現在完了形（以下現在パーフェクト形）の研究は盛んだが,当形式を持つ言語と持たない言語の比較研究は少ない. 当形式を持たない日本語とハンガリー語も（以下ハン語）もスウェーデン語(以下スウェ語）の現在パーフェクト形が表す「現在との関連性」（以下 CR）表しうる. (1a-c)を参照されたい.

(1a) Brevet har kommit. (スウェ語）
letter-DEFINITE has come
(1b) 手紙が届いた.
(1c) Megjött a levél. (ハン語）
PREFIX-come-PAST the letter

・問い I) なぜ過去形として考えられている日本語のタ形とハン語の過去形はスウェ語の現在パーフェクト形と同様のことを表しうるのか
II) これはどのような場合に可能なのか
III) そもそも現在パーフェクト形が表すのは何なのか

・目的 I) 現在パーフェクト形が表す CR を定義し, その判断基準を提案し,評価すること
II) 3言語が CR をどのように表しうるのかを分析し, CR は事象の結果とどれほど関連しているのかを分析すること

2. 理論的背景

○ 現在パーフェクト形の4用法. Comrie (1976:56-61)を参照.

表 1: 現在パーフェクト形の4用法

分類	例文
1. 結果のパーフェクト (結果 P)	John has arrived. 「ジョンが着いた」
2. 経験のパーフェクト (経験 P)	Bill has been to America. 「ビルはアメリカに行ったことがある」
3. 存続場面のパーフェクト (存続 P)	We've lived here for ten years. 「ここに住んでいて,10 年間になる」
4. 近接過去のパーフェクト (近接 P)	I have recently learned that the match is to be postponed. 「試合が延期されることを最近知った」

○ 現在パーフェクト形の特徴
・現在パーフェクト形(2a)を過去形(2b)と比較すれば,その違いが見てとれる

(2a) I have lost my knife. (Comrie 1976:52)
「ナイフをなくした (今手元にない)」
(2b) I lost my knife. (Comrie 1976:52)
「(その時)ナイフをなくした」

→ (2a)は発話時点（以下 ST)に関連性があるが, (2b)は関連性がない

○ パーフェクトの定義
・工藤(1995:99)によれば「ある設定された時点において,それよりも前に実現した運動がひきつづき関わり,効力を持っていること」である.
→ 設定された時点とは発話時点である.

・現在パーフェクト形は出来事時点（event time = 以下 ET）と発話時点（speech time = 以下 ST)の関係を捉える. 出来事が発生したことが発話時点で何らかの意味で重要性がある.

○ 本発表の CR の定義
・CR は状態であり,Target State（以下 TS, または Perfect State (以下 PS)である.
→ Parsons (1990:234-235)「ボールを屋根の上に投げた」では

PS:「ボールを投げたという出来事が発生した」という状態が続き, この状態は終わることがない
TS: [ボールは屋根の上にある」という(一時的な)結果状態

・表1では結果 P は TS を表し, 経験 P と近接 P は PS を表す.
・存続 P は他のカテゴリーと異なり, 完成部分がなく, ST で事象がまだ継続していることを表す. そのため, 本発表では PS でも TS でも表さないという立場を取る.
→ 存続 P が表す状態は Persistent State(存続状態)であると見なす.
→ また,存続状態は「実現して,設定された時点で効力を持つ」という意味ではなく,ST でまだ継続しているため, CR を表さないと見なす.

3. 資料と手法

3.1 資料

表 2: 本発表で使用したコーパス

言語	コーパス	選択したサブコーパス	検索の仕方
スウェ語	Språkbanken	「Diskussionsforum」フォーラム	検索の仕方:「har」+ 完了形 例:har anländ「着いた」
日本語	BCCWJ: Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese	“Yahoo ブログ” (2008) ブログ	[動詞 + た・ました]. 例: 壊れた・壊れました
ハン語	Magyar Nemzeti Szövegtár (MNSZ)	「Személyes」(「個人的」,フォーラム	動詞,過去形の設定. 例:megérkezett「着いた」

○ コーパスの選択:近代的かつ日常的な言葉遣いが分析できる.また,ST に関連性のある話もない話も出現すると予測される.

1) 表 2 が示しているコーパスで,スウェ語の現在パーフェクト形,日本語のタ形とハン語の過去形を検索する. 表 3 に対象となる動詞が示されている.
2) 表 4 の基準にしたがい,CR を判断する.
3) TS と PS による件数の頻度を表で示す.分類が難しい例を「他」として分類する.

表 3: 対象となる動詞

		スウェーデン語	日本語	ハンガリー語	頻度
結果性が高い動詞	1	Har gått sönder	壊れた	Tönkrement	10
	2	Har anländ	着いた	Megérkezett	10
	3	Har försvunnit	消えた	Eltűnt	10
	4	Har stannat	止まった	Megállt	10
結果性が低い動詞	1	Har sprungit	走った	Futott	10
	2	Har sett	見た	Nézett	10
	3	Har blinkat	光った	Villant	4
	4	Har ringt	鳴った	Csörgött	7
	5	Har knackat	叩いた	Kopogtatott	4
	6	Har ropat	叫んだ	Kiáltott	5

○ 動詞の選択:Rothstein (2008:157)を参照した.結果性が高い動詞とは結果状態を表しうる到達動詞である. 結果性が低い動詞とは結果状態を基本的には表さない行為動詞と単一相動詞(semelfactives)である.
→ 結果性が低い動詞の件数が少なかったため,動詞の数を増やし,結果性が高い動詞と低い動詞の件数が各言語でそれぞれ 40 件になるように設定した.
→ 疑問文,従属節や否定文を対象外としたため,日本語とハン語では少数の例に絞ることができた.スウェ語は妥当な例がより多かったが,可能な限りフォーラムの様々なトピックから例を抽出した.
→ 分け方の理由: Dahl & Hedin (2000)によれば, 結果継続を表す事象の方が CR を表しやすい.

表 4: CR の基準

基準	CR		CR ではない
	Target State	Perfect State	Persistent State
1. 事象が完成する(完了的	○	○	×

である)			
2. 事象が時間副詞と共起せず,出来事時点が不特定である. 副詞と共起する場合でも,過去を表す副詞であってはならない(例:昨日)	○	○	○
3. 前後の文脈は出来事時点が過去に設定されていることを示さない	○	○	○
4. 事象には結果性が高い動詞が出現する	○	○/×	×
5. 文脈は,事象に明らかな結果があり,その結果が ST において続くことを示す	○	×	×

○ 表4の基準は先行研究(Comrie 1976 や Declerck 1991 など)を参照した.
→ 現在パーフェクトの時間設定は過去ではなく, 現在(ST)である (Declerck 1991:326-327).

4. 結果

表 5: 3言語の結果

動詞の分類	スウェーデン語			日本語			ハンガリー語		
	Target State	**Perfect State**	**他**	**Target State**	**Perfect State**	**他**	**Target State**	**Perfect State**	**他**
結果性が高い動詞	38.8%	6.2%	5%	20%	0%	30%	16.25%	0%	33.75%
結果性が低い動詞	-	35%	15%	-	8.7%	41.3%	-	11.25%	38.75%
合計	38.8%	41.2%	20%	20%	8.7%	71.3%	16.25%	11.25%	72.5%

○「他」とは
・スウェ語の場合は存続状態の例が多く, いわゆる「歴史的現在」の例もいくつかあった.また,TS・PS なのか,存続状態・歴史的現在かどうか不明な例もあった.
・日本語の「他」の 67.5%が単純過去形であり,2.5%は TS・PS の間で曖昧であった.
・ハン語の「他」の 68.75%が単純過去形であり,3.75%は TS・PS の間で曖昧であった.

○ 具体例
→ a = スウェ語 b = 日本語 c = ハン語

・Target State

(3a) Min vigselring **har gått sönder** .. så tänkte slå stort med att köpa en ny ..
my marriage.ring has gone apart... so thought hit big with to buy a new...
「結婚指輪が壊れてしまったから,すごいことをして新しいのを買おうと思っている」

(3b) この暑い中,キッチンの換気扇レンジフードが**壊れました**.これから買いに行って来ます.やれやれ.

(3c) Nekem meg szintén **eltűnt** a beírásom a topikkal együtt,
me-DAT and similarly dissapear-PAST the comment-POSS the topic-SOC together,
de megismétlem, hogy: [...]
but repeat, that: [...]
「私もトピックごとにコメントが**消えてしまった**が, 再び書く. つまり ...」

・Perfect State

(4a) Jag **har sett** dokumentärer på tv om de rika damerna i USA som håller galor o
I have seen documentaries on TV about the rich ladies in USA who keep galas and
middagar mm och skänker allt till välgörenhet… FANTASTISKT!
dinners etc and donate everything to charity... FANTASTIC!
「催し物や宴会などを主催して,すべて寄付するアメリカのお金持ちの女性についてのドキュメンタリーをテレビで**見た**.素晴らしい!」

(4b) 今日も**走った**よ.多分,毎日走ると思う.

(4c) **Csörgött** az órám!:) Vége az időmnek! A holnapi viszontlátást!
ring-PAST the clock-POSS! End the time-POSS! The yesterday-POSS again-see
「目覚まし時計が鳴った!私の時間はもう終わりだ.また明日!」

・他

(5a) Ja det är jobbigt det **har ringt** folk från över en veckas tid till oss suck men men
yes it is annoying it has called people from over one week's time to oss sigh but but
sen är det bara att skita i att svara Gud så trött jag är i dag […]
then is it only to shit in to reply God so tired I am today [...]
「たしかに迷惑だ,一週間以上前から**電話がかかってくる**.まあ無視するしかないな.今日はもうくたびれだ.」

(5b) スタッフルームで仕事をしていたら,電話が**鳴った**.その時,私が一番電話の近くにいたから私が取った.

(5c) Tegnap **megállt** egy busz az ablakom előtt. Hogy milyen jó pasi volt vele!
yesterday stop-PAST a bus the window-POSS before. that how good guy was with.it!
「昨日, 私の窓の外でバスが止まった.とても素敵な男が乗っていた!」

5. 考察

○ 判断基準

・表4の判断基準でほとんどの文を分類できた点から,これは CR の判断基準として妥当であると考えられる. しかし, 文脈の影響が大きく,どのような文脈が CR を除外するのか, また, どのような用法の読みを生み出すのかをあらかじめ予測するのが難しい.

○ スウェ語

・基本的には CR を表すとされているが,本発表の CR の定義では,CR を表さない場合もある.
・TS・PS・「他」のいずれなのか不明な例も見られた.

○ 日本語とハン語

・CR のある例が見られたが,ほとんどの例は CR ではなく,過去に設定されている出来事(単純過去)を表していた.
・表4の基準2と基準3が重要であった.文の時間設定は ST に近い方が CR を表しやすかった.副詞,または文脈は明示的に時間を過去に設定しない場合は,ST との関連性が高くなり,CR と分類されることが多かった.
・CR がある文では,特に先行文脈がないものが多かった.また,後続文脈に現在形,または未来形が出現することが多かったため, 過去の出来事が発生したということが発話時点で今後の行為に影響を与えることが分かった.

○ 3 言語とも結果性が高い動詞の方が CR を表しやすかった.ただし,スウェ語は TS より PS の方が多かったのに対し, 日本語とハン語は TS が最も多かった.

・結果性が高い動詞はスウェ語では PS を表すことがあったが,日本語とハン語では必ず TS を表した.また, スウェ語は存続状態を表す例が見られたのに対し,ハン語は1件しか現れず,日本語は0件であった.
→ 現在パーフェクト形を持たない言語の方が動詞のアスペクト的特徴に敏感なのか. TS を表しうる動詞は基本的には TS を表すのか.
→ タ形とハン語の過去形は存続状態を基本的には表さないと考えられる(McCawley 1971: 105, Comrie 1976:60).

・3言語において TS を表す例は時間副詞と共起しないことが多かったのに対し, PS を表す例は時間副詞と共起することが TS よりは多かった.この点から,TS の方が無標であり, 現在パーフェクトの最も典型的な用法であると考えられる.

6. 結論

① 表4の判断基準は妥当であったが,どのような文脈が CR の解釈を引き起こすのかさらなる研究が必要である.

② 結果性が高い動詞の方が CR を表しやすかった.また,結果性が高い動詞しか表し得ない TS は無標であったため,結果性は CR に関連していると考えられる.

③ 日本語のタ形とハン語の過去形は CR を表しうるため,単なる過去形ではないが, 基本的には単純過去形の機能を果たすことが多いと考えられる. 結果性の高い動詞,また,副詞や文脈による文の時間設定は過去ではなく ST に近い方が CR を表しやすい.

参考文献

Comrie, Bernard (1976). *Aspect: An Introduction to the Study of Verbal Aspect and Problems.* CUP. Cambridge.

Dahl, Östen & Hedin, Eva (2000). Current relevance and event reference. In: (ed) Dahl, Östen (2000). *Tense and Aspect in the Languages of Europe*, Mouton de Gryuter, Berlin ・ New York, 385-402

Declerck, Renaat (1991). *Tense in English*. Routledge, London

工藤 真由美 (1995).『アスペクト・テンス体系とタクスト』ひつじ書房

McCawley, James D (1971). Tense and time reference in English. In: CJ Fillmore & D.T Langendoen, eds*, Studies in Linguistic Semantics.* New York: Holt, Rinehart & Winston.

Parsons, Terence (1990). *Events in the semantics of English.* Cambdrige MA: The MIT Press.

高齢者の想定外の言語行動に対する調整の分析

－グループホームの外国人介護職員を対象に－

大場美和子（昭和女子大学）

１．研究の目的

要介護高齢者が利用する介護のサービスには，高齢者の状態に応じて多様な種類がある．その中で，認知症高齢者グループホーム（以下，GH）では，入居している高齢者（以下，高齢者）は，少人数単位の共同生活において介護を受けつつ日常生活を営んでいる．この日常生活では，高齢者が何らかの理由で食事や服薬を拒んだり，部屋や衣服の不満を述べたりして，業務が必ずしも予定通りに進まないこともある．よって，介護職員は，日常の決まった業務だけでなく，このような高齢者の想定外の言語行動に対する調整を行うことも求められる．そこで，本研究の目的は，GH で就労する外国人介護職員を対象に，高齢者の介助を行う際に，高齢者からの想定外の言語行動で介助の遂行が予測通りに進まなくなった際に，どのようなやりとりを通して調整していくのか，そこにどのような特徴があるのかを，会話データから明らかにすることとする．高齢者の想定外の言語行動とその調整の特徴を実際の会話データから分析し，新人の介護職員や近年増加する外国人介護職員の研修などの人材育成につなげる基礎データにしたいと考える．

２．先行研究

高齢者と介護職員のやりとりについては，特定の介助や行動に着目した研究がある．まず，Backhaus・鈴木（2010）は，介護老人保健施設でのモーニングケアのやりとりに着目し，利用者が起床に明示的・暗示的な拒否のサインを提示するものの，介護職員は利用者の起床の同意を促し，起床の活動を行っていくプロセスを記述している．介護職員は利用者の起床の承諾の獲得に表面上は成功しているが，半ば強要している可能性も指摘している．次に，細馬（2010）は，GH の高齢者の立ち上がり行動に着目し，高齢者が目の前のお盆に執着して立ち上がれずにいる際に，介護職員が隣のテーブルにお盆を置くよう声をかけ，最終的に高齢者が立ち上りを達成するプロセスを記述している．介護職員は，高齢者のお盆への執着という問題行動の制止はせず，お盆を置くという短期的な目標を設定する解決策を取ったとしている．以上は特定の介助や行動を詳細に記述しているが，GH では少人数の介護職員によるシフト制で勤務を行っており，交替勤務の中で身体介助や生活援助など全業務を遂行することが期待され，分業化は馴染みにくい．よって，特定の介助や行動の分析を参考にしつつ，GH の一日の業務全体のデータを対象に，高齢者の想定外の言語行動を検討する必要があると考える．

大場（2019）は，介護技術講習会の 5 種類の介助（移動，排泄，衣服の着脱，食事，入浴）のロールプレイの 24 談話の全発話を対象に発話機能（国立国語研究所 1994）を付与し，介助の談話の構造を分析している．この結果，介助の種類自体は異なっても，介助の談話に共通する構造があることを指摘している．大場（2019）のデータは介護技術講習会で，利用者役は介助者役に協力的な言語行動であるが，実際の介護の現場では必ずしもスムーズに介助が遂行されるわけではない（Backhaus・鈴木，2010；細馬，2010）．しかし，高齢者の想定外の言語行動やそれに対する介護職員の調整も無秩序に行われるわけではなく，表面上は異なる言語行動にも何らかの共通する特徴が観察されるものと予測される．

３．調査の概要

調査対象者は，GH（職員 8 名程度，入居者 9 名程度）で就労する新人の外国人介護職員 M（ミャンマー語母語話者，日本在住 25 年程度，40 代女性）である．調査では，まず，インタビュー調査を M や M の職場関係者に複数回行い（2018 年 8 月～11 月），M に関する状況を確認したうえで就労場面調査（2018 年 12 月－2019 年 1 月）を行った．このインタビュー調査より，M は以前は介護とは関係のない会社で就労しており（日本語で業務），調査時点で介護の経験もなく，関連する資格も未取得であることを確認した．次に，就労場面調査では，M に IC レコーダーを装着し，勤務中（早番，遅番，夜勤）の音声を連続収集した（計 32 時間）．IC レコーダーの操作は M に委ね，調査者 2 名は業務に介入しないよう業務の様子を記録しつつ参与観察を行った．本報告では入浴介助の含まれる早番（7:30－16:30，休憩 1 時間）に着目する．

4．分析

分析では，早番8時間分の全文字化資料と参与観察の記録から，業務表の業務をMが遂行している際に，高齢者が何らかの想定外の言語行動を行い，業務の遂行が予測通りに進まなくなった際のMとのやりとりの談話を23例抽出した．そして，この23例を帰納的に，(1)行為拒否／改善・変更要求，(2)不満表明の2つに分類した．(1)行為拒否／改善・変更要求とは，高齢者が進行中の介助を拒否したり，改善や変更を求めたりする言語行動である．例えば，服薬や食事の拒否，移動先の変更の要求などである．(2)不満表明とは，食事をしていない，部屋が寒いなどとその状況に対する不満を高齢者が述べる言語行動である．(1)(2)ともMは高齢者の発話の内容を確認し，要求や不満に応えたり，応えることが望ましくない場合は，高齢者の気持ちに配慮しつつ現行の介助を継続したりするなどの調整を行う必要が生じる．そこで，抽出した23例における高齢者とMの発話に対し，国立国語研究所（1994），大場（2019）をふまえて発話機能を付与し，想定外の言語行動とその調整のやりとりの特徴を分析した．

表1は，高齢者の想定外の言語行動とMの調整をまとめたものである．食事や服薬の拒否からエアコンの不調まで，(1)(2)の内容や程度は多様である．「No.」は抽出した談話の通し番号である．「機能」は，「拒否」（行為拒否），「改善」（改善要求），「変更」（変更要求），「不満」（不満表明）の分類である．「予定上の言語行動」は高齢者が本来行うことが予定された言語行動であるのに対し，「高齢者の想定外の発話内容」はその予定に対する高齢者の想定外の言語行動時の発話の内容である．不満表明の場合，状況への不満で「予定上の言語行動」と直接的には関連がないため「ー」としている．「介護職員の調整結果」は調整の結果で，「遂行」と記入がある場合，予定された介助の業務が遂行されたことを示す．

表1　高齢者の想定外の言語行動と介護職員の調整

No.	機能	予定上の言語行動	高齢者の想定外の発話内容	介護職員の調整結果
1	行為	居室からフロアへ移動	衣服が整っていないので移動できない	遂行：着替えて移動
2	行為	食事	「わからない」（意図不明）	遂行：食事継続
3	行為	居室からフロアへ移動	衣服を整えてから移動したい	遂行：着替えて移動
4	行為	食事	満腹なので食べたくない	遂行：食事継続
5	行為	食事	食べたくない	食事は終了してお茶で水分補給
6	行為	服薬	既に飲んだ（偽情報）ので飲まない	遂行：服薬
7	行為	水分補給	飲みたくない	遂行：水分補給
8	行為	尿取りパッドの取り換え	汚れていないので取り換えない	取り換えの必要ないことを確認
9	行為	おやつ	食べたくない	遂行：おやつ
10	行為	衣類の受け取って畳む	畳めない	話題のずれ
11	改善	口腔ケア	痛い，冷たい（ので歯磨をやめてほしい）	遂行：歯磨き継続
12	改善	着替えて入浴準備	衣服が合わない	遂行：衣服を確認して準備
13	改善	着替えて入浴準備	衣服が合わない	話題のずれ
14	改善	着替えて入浴準備	衣服が合わない	遂行：衣服を確認して準備
15	改善	着替えを確認して入浴	準備した着替えの服を変えたい	遂行：準備した服のままで問題ない
16	改善	シャワー	苦しい（のでシャワーを止めてほしい）	遂行：姿勢を調整してシャワー継続
17	改善	移動して排泄	鞄がないので取りに行きたい	遂行：鞄は後で届けると伝えて先に排泄
18	変更	トイレからフロアへ移動	フロアへ戻らず居室へ行きたい	遂行：居室へ移動
19	変更	トイレからフロアへ移動	フロアへ戻らず居室へ行きたい	遂行：居室へ移動
20	不満	ー	エアコンがついていない	ー　ACの確認
21	不満	ー	エアコンがついていない	ー　ACの状態の説明（問題ない）
22	不満	ー	屋上に行きたい	ー　話題のずれ
23	不満	ー	食事をしていない（偽情報）	ー　次の食事の説明

表1より，高齢者の想定外の言語行動に対してMの調整が行われ，(1)行為拒否／改善・変更要求の19例中15例は，予定されていた介助も結果的に遂行されていることがわかる．談話10，13，22は調整結果に「話題のずれ」とあるが，全て同一の高齢者の例である．この高齢者はMに常に話しかけており，3例とも深刻な内容ではなく，Mと話すことを目的としているような様子であった．Mもそれを理解しており，冗談も含めた会話で対応しており，結果的に話題がずれたものである．談話5は，高齢者がほぼ食事を終えた状態であったため食事介助は継続されなかったが，お茶の水分補給を行っている．談話8は，尿取りパッドを取り換えるようMが言ったものの，「汚れていない」という高齢者の発話が実は正しいことが判明したものである．よって，排泄介助としてのパッド取り換えの「遂行」はなかったが，必要のなかったものである．つまり，高齢者の想定外の言語行動によって予定されていた介助に遅延は生じたとしても，基本的に介助の

内容自体は予定通り遂行されるようMが調整を行っていることがわかる．しかし，これらの調整は特にMが高齢者に介助の遂行を強要するということはなく，むしろ，高齢者の発話を承認したり，情報要求によって高齢者の想定外の言語行動の意図を確認したりした上で，介助を進めているように観察された．以下，会話例をあげて述べる．なお，会話例の「,」は短いポーズ，「↑」は上昇イントネーション，×は聞き取り不能発話を示す．高齢者の想定外の言語行動の発話には下線を付す．右列は付与した発話機能である．

例(1)は，朝食時にフロアへ出てこない高齢者E1をMが居室まで呼びに行った場面である．MがE1に朝食の時間であることを伝えると（01），E1は服装を理由に居室から出られないとフロアへの移動を拒否する（02）．Mは，それを「うん」と承認し，着替えるよう行為要求を行う（03）．そして，再度E1が拒否した際もMは同様に対応しており（08-09），E1の発話に対するMの発話は，優先的な応答となっている．そして，Mが他のみんなと一緒に食べるという行為要求を行うと，E1は感謝を述べ，実際にE1はフロアへ移動して食事をとった．朝食の業務が遅延する状況で，E1が衣服を理由に居室からの移動を拒否しても，MはそのE1の発話を承認し，情報提供をしたうえで行為要求を行い，E1の着替えや移動の自己決定を確認している．結果として，E1の適切に着替えてから移動したいという欲求と，E1にフロアに移動して食事をしてもらうというMの介護職員としての業務の遂行を円滑に達成している．

例(1)談話1　行為拒否→高齢者承認（居室からフロアへ移動→着替えて移動）

番号	発話	発話機能
01 M	Eさん，おはようございます，ご飯です，朝ご飯	呼びかけ，挨拶，情報提供
02 E1	まだ駄目だ，こんな格好だから	情報提供（行為拒否）
03 M	うん，だから着替えて	承認，行為要求
04 E1	ええ，着替えていく	承認，情報提供
05 M	ね，うん，いいよ	承認，情報提供
06 E1	ごはんだったら喜んで行くんだけど	情報提供
07 M	いいよ，ご飯いっぱい入れてあげた，ね	承認，情報提供
08 E1	駄目だ	情報提供（行為拒否）
09 M	いいよ，これで，これで着替えて	承認，行為要求
10 E1	うん，うん，ありがとう	承認，感謝
11 M	ね，いいよ	承認
12 E1	ごめんね	謝罪
13 M	うん，来てね，早く，みんなと一緒に食べよう，いい↑　ね，一緒に食べたいから，一緒に食べたいから早く来て，ね，うん，来て，用意してあるからね	承諾，行為要求，情報提供，行為要求，情報提供
14 E1	どうもありがとね	感謝

例(2)は，高齢者E2のトイレへの移動をMが介助する場面である．トイレに入った際に，E2は「なんか，あたしのなんか」（02）と断片的な発話で鞄を取って来たいと改善要求を行う．Mはこの時点でE2の意図がわからず，「何がある」（03）「身の回りのものがどうした」（07）と情報要求を行って，E2の要求を確認する．E2の08の発話で鞄のことだとわかると後から持っていくと述べ，E2も先に排泄を行うことを承認している（15）．認知症の高齢者の場合，発話が断片的になる傾向があるが，Mは情報要求を繰り返してE2の改善要求の内容を確認している．実はE2は常に鞄を気にする傾向にあり，その鞄はほぼ何も入っておらず，現行の排泄にも鞄は必要ない．しかし，Mはその事実を述べるのではなく，鞄にも後で対応すると情報提供を行ったうえで，排泄介助へつなげるよう行為要求でE2の移動を促している．結果として，E2の改善要求は後で達成されることが約束され，先に行うべき排泄介助の業務もE2の承認を得てMは遂行している．

例(2)談話17　改善要求→高齢者承認（移動して排泄→鞄は後で届けると伝えて先に排泄）

番号	発話	発話機能
01 M	はい，おしっこです	情報提供
02 E2	なんか，あたしのなんか	情報提供（改善要求）
03 M	何がある	情報要求
04 E2	身の回りのね	情報提供
05 M	うん，こっち	承認，情報提供
06	（間）	―
07 M	身の回りのものがどうした	情報要求
08 E2	いつも持ってくんだけど	情報提供
09 M	ああ，あるある，大丈夫，後で取ってあげるから，こっち，もうちょっとこっちに移動して，うん	情報提供，行為要求
10	（間）	―
11 M	あのバッグでしょ	情報要求

12 E2	うん	承認
13 M	持ってくるから大丈夫	情報提供
14 M	いいよ，座って	情報提供，行為要求
15 E1	はい	承認

例(3)は，高齢者 E3 が食事をしていないと不満表明を行った場面である．食事は既に済んでおり，また同様の不満表明はよく起こるため，M は笑いながら食べたという事実を伝えるが（03），E3 の不満表明に合わせて「それは大変だ」という否定的評価の情報提供や次の食事は早めに多く出すという妥協した情報提供を行う（05，07）．E3 の断片的な発話に対し，M は E3 の食事に対する不満に応えるように情報要求や情報提供を行い，結果的に E3 の承認（08）を得ている．

例(3)談話 23 不満表明→高齢者承認（次の食事の説明）

番号	発話	発話機能
01 M	なんか探してた↑さっき	情報要求
02 E3	俺は朝飯も昼飯も食ってねーぞ，ええ↑	情報提供（不満表明）
03 M	（笑）そう↑だってスパゲティ食べたよ	情報提供
04 E3	いつ	情報要求
05 M	さっきー，（笑）本当↑だったらいっぱいあげるよ，今日，ね，おなかすいちゃったの↑	情報提供，情報要求
06 E3	お腹〈×××〉	情報提供
07 M	本当ーそれは大変だ，じゃあ，早めにあれするね，なんか食べようね，うん	情報提供，行為要求
08 E3	うん	承認

5．結論と今後の課題

GH における就労場面調査の会話データから，高齢者の想定外の言語行動は，内容やその程度は多様性であるものの，大きく，(1)行為拒否／改善・変更要求と(2)不満表明の 2 つに分類された．異なる種類の介護の業務中に発生する多様な想定外の言語行動であるように見えるが，共通するパターンとして帰納的に分類されるものと考える．

この高齢者の想定外の言語行動に対する介護職員 M の調整の特徴として 3 点指摘できる．1 点目に，M は高齢者の想定外の言語行動に対し，高齢者の自己決定を行いつつ，高齢者の承認を得た上で予定された業務遂行も両立して達成する傾向にあるといえる（表 1）．この両立の背景として，2 点目に，M は情報提供と情報要求を繰り返して高齢者の想定外の言語行動の内容の確認を行い，その確認をふまえてさらに情報提供や行為要求を行っていることが指摘できる（例(1)(2)(3)）．高齢者の発話は断片的で不明瞭となる傾向もあり，内容の確認までに発話上のやりとり自体は増える．しかし，結果的には高齢者の承認を得て業務の遂行につなげている．3 点目に，高齢者の想定外の言語行動の内容が合理的でなくても，M は基本的に否定せず，高齢者のフェイスを保ったやりとりを行っているといえる（例(1)(2)(3)）．M と高齢者はやりとりの増加を通して信頼関係も構築し，長期的には，現場の円滑な業務遂行に影響するものと考えられる．例(3)の冗談のやりとりも，それまでの M と高齢者の間の共有情報や人間関係が有効に活用されているものと考えられる．

本分析結果は早番のデータを対象としたものであり，今後は，遅番と夜勤のデータも合わせて数量的な分析を行うこと，在留資格の異なる外国人介護職員の分析結果と比較することが課題として指摘できる．例えば技能実習生の場合，在住歴や日本語能力は異なるが，介護の経験や資格がほぼないという点では M と共通すると考えられる．言語能力の違いが調整に影響する可能性も考えられるが，調整の特徴の要因を単純に対象者の属性に求めてしまうのではなく，多様な背景の介護職員の会話データから調整の特徴を抽出し，人材育成に還元する可能性を検討していきたいと考える．

謝辞　本発表は，2018～2021 年度科研費（基盤研究(C)）「教材開発を目指した高齢者介護施設における新人介護人材育成のプロセスの実態調査」（研究代表者：大場美和子，18K02118）の助成を受けています．

参考文献

大場美和子(2019)．介護技術講習会における介助の談話の構造と日本語の問題の分析ーEPA 介護福祉士候補者を対象にー　社会言語科学，22(1)，107-124.

国立国語研究所(1994)．日本語教育映像教材 中級編 関連教材 伝え合うことば 4 機能一覧表　大蔵省印刷局

細馬宏通(2010)．認知症高齢者はいかに立つことを了解するかー介護施設における立ち上がり行動の会話とジェスチャーー　社会言語科学会第 25 回大会発表論文集，142-145.

Backhaus，Peter・鈴木理恵（2010)．起きる時間 ： 施設介護における承諾獲得，社会言語科学，13(1)，48-57.

参与者の人間関係が制度的場面のやりとりに与える影響

－地域の食料品店における入店から商品選択までの雑談に着目して－

酒井晴香（筑波大学大学院生）

1. はじめに

店は，買物の場であると同時に，そこにいる店員や居合わせた客同士による会話の場にもなり得る．また，食料品店等の生活必需品を扱う店では，日常的に顔を合わせる常連客と店員が，買物に関係のない雑談を行う様子がよくみられる．これまで雑談は，Malinowski(1923)が交感的な言語使用(phatic communion)と呼ぶように，私たちの人間関係を維持・構築するものとして位置付けられ，その内部での話題推移の方法や選択される話題の特徴等が分析されてきた．しかし，制度的場面(institutional settings，Drew & Heritage 1992)での雑談のような，雑談と制度的なやりとりが織り交ぜて行われる場合の，それらの関係や移行の方法に注目した研究は少ない．そこで本研究では制度的場面の一つとして買物場面を取り上げ，雑談に着目して，客が入店してから商品選択へと移行する際の手続きを記述する．分析を通して，移行手続きにおける店員の働きを明らかにし，また，会話終結研究との比較から買物行動の中に埋め込まれた雑談という視点を提示する．

2. 先行研究

日本語会話における制度的場面での雑談について，制度的なやりとりとの関連から述べた津田(1984)と平本・山内(2016)を紹介する．津田(1984)は，薬屋をはじめとする個人商店での会話から常連客と店員による買物会話の全体構造を示している．その中で，雑談について，客が店に来てから商品を選ぶまで，また，購入してから店を出るまでの位置に生起可能な要素であることを指摘している．また，平本・山内(2016)では，鮨屋の雑談に焦点を当て，雑談の開始は，単にその場に関係のない話題を取り入れるだけでなく，注文伺いや注文等の制度的なやりとりの行為連鎖から切り離す形をとることが観察されている．

このように，買物会話内における雑談の生起可能な位置や，制度的なやりとりとは別の雑談を開始する方法が明らかになっている一方で，雑談がどのような手続きで終結し，その後に続く制度的なやりとりへ移行していくかは十分明らかになっていない．本研究では上記の先行研究を踏まえ，特に，客が店に来てから商品を選ぶまでに注目し，雑談が生じる場合はその終結の方法を含めて移行手続きを分析する．

3. 研究方法

本研究では，顔見知りの常連客と店員が雑談と制度的なやりとりを織り交ぜながら進める買物会話を分析するため，広島県呉市の島しょ地域(瀬戸内海芸予諸島)の食料品店で収集したデータを用いる．収集方法について，レジに設置したICレコーダーで音声を記録し，身体動作等は，店内で筆記によって記録した(図1，写真1)．収集は，2018年9月14日に行い，音声データの総時間は約10時間30分，収集日の総来店客数は延べ48名であった．

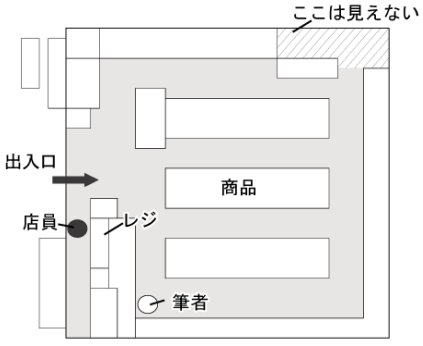


図1　店舗の見取図



写真1　店内から見たレジと出入口付近

雑談について，筒井(2012)等では課題の達成に志向しているか否かといった観点から定義している．本研究ではこれを援用し，会話を含めた買物場面で達成すべき 2 つの課題として，①ある商品の購入意思を客が伝え，店員が受諾すること(以下，商品選択)，②店員が会計作業を遂行することを設定したうえで，これらの達成に向かう行為を制度に志向した行為，また，制度に志向していない会話を雑談と呼ぶこととする．

4. 分析

まず，雑談が行われずに，商品選択へと移行する事例をみていく．事例(1)は女性客 F12 が店に来たところである．

事例(1)

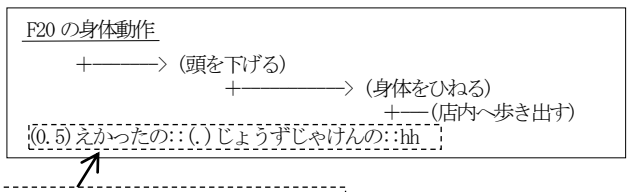
01	→	F12 ：	こんにちは:
02	→	店員:	はいいらしゃいませおばちゃん.
03	→		(18.0) ((F12 は店を歩きながら見ている))
04	→	店員:	おばちゃん何本?
05	→	F12 ：	2 本.
06		店員:	((店の奥へ歩いていく))
07		店員:	2 本?
08		店員:	((店の奥から戻ってきて牛乳をレジに置く))
09		店員:	おばちゃん(.)さんまがおるけん.
10		店員:	さんまがおる.

あいさつの交換(1，2 行目)をして会話開始の手続きを終えた参与者らは，この時点でこれ以上会話を続けていない．F12 が店内を歩いて見ている間，18 秒の沈黙が生じている(3 行目)一方で，両者は店内で互いを視認する状況にあり，また，広くない店内で発話すれば会話を再開できることから，「いつトークが起きても良い状態(continuing states of incipient talk)」(Schegloff & Sacks 1973)にある．この後，店員は沈黙を破って「おばちゃん何本?」と何かの本数を尋ねる質問をし，何に言及しているか正確に理解した客は，不自然な間を開けることなく「2 本」と応答する(4，5 行目)．8 行目で店員が牛乳 2 本をレジに置いたことから，この 4 行目の質問は牛乳を「何本」購入するか尋ねるものであったと分かる．これは，客が日常的に購入する商品(牛乳)を店員が把握し，また，客もそのことを理解しているために可能なやりとりと言える．このようにして，事例(1)では，入店後すぐに客が店を見始め，会話がいつでも再開できるような状態へと移行することで，雑談を行わずに商品選択へと移行している．

次に，入店後に雑談が行われる場合，どのように商品選択へ移行するかみていく．事例(2)では，女性客 F20 に気づいた店員が閉まっていたドアを開け(1，2 行目)，F20 に声をかける(3 行目)．F20 は，3〜5 行目でゆっくりと店の中に入る．なお，12 行目でみられた F20 の身体動作については，別枠を設けて転記する．＋は動作の開始，−は継続，>は終了を示している．

事例(2)

01		店員:	((ドアの方に体を向けて外を見る))
02		店員:	((ドアを開ける))
03		店員:	はいおばちゃん.
04		F20 ：	(……)
05		店員:	ん?
06			(3.0)
07		店員:	おばちゃん昨日ありがと::
08			(2.0)
09		店員:	おでんがおいしかった.
10		F20 ：	え?
11		店員:	おでんがおいしかった.
12	→	F20 ：	ほっか::えかったの:::(0.5)えかったの::(.)じょうずじゃけんの::hh
13	→	店員:	ぺろりと食べたわありがとね::
14	→	F20 ：	じょうずじゃけんの[:
15	→	店員:	[うん:
16		F20 ：	((店内を見る))



事例(2)では，店員が「昨日ありがと::」と会話開始の手続きとして前回の接触への言及を行う(7行目)．一方でこれに客は返答せず，2秒の沈黙が生じる．店員は「おでん」について「おいしかった」と肯定的に評価し(9行目)，対して客は「ほっか::えかったの::(＝そっかーよかったねー)」と発話をした後，「おでん」について「じょうずじゃけんの::(＝じょうずだからねー)」と言い，笑う様子がみられる(12行目)．これは，F20自身の料理能力を肯定的に評価する冗談の発話で，続く笑いからもこれが裏付けられる．

ここで，客の身体動作に注目する．客が店に入ってから11行目までのやりとりは，店員と客が向き合って行われている．しかし，12行目で客は，2回目の「えかったの::」と発話しながら頭を下げ，「じょうずじゃけんの::」と発話しながら身体をひねって(body torque, Schegloff 1998)，店内へ歩き出そうとする．これに対して店員は，「ぺろりと食べたわ」に急いで「ありがとね」を付け加えているが(13行目)，これは客の身体動作を起点として，現行の雑談が終結することに志向した発話と考えられる．そして，客の「じょうずじゃけんの:」という発話が繰り返され（14行目），それに続く店員の「うん」という相づち(15行目)によって雑談は終結する．

ここでは，客が店内の方へ身体を向けた11行目から商品選択が開始しており，16行目で雑談が終結するまで，一時的に雑談と商品選択が並行して行われている．実際には，客は雑談をしながら商品選択を行うことも不可能ではない．しかし，このように複数の活動へ参与するとき，客はその認知的資源を双方に割く必要に迫られる．そこで店員は，客が商品選択だけに参与できるよう，雑談の終結に向けて会話を組み立てていると考えられる[1]．

最後に，入店後の雑談で客が商品選択への志向をみせず，店員が商品選択への移行を促す事例(3)をみていく．

事例(3)

01		店員:	いらっしゃい
02		M5 :	〈いらっしゃい:[::?〉(.)いぬるわい.
03		店員:	[hhhh
04		店員:	hhh いらっしゃい.
05		M5 :	んだ::
06		店員:	歩いたん?
07		M5 :	歩きょ:たんじゃがや:めたんよ.
08		店員:	どしたん.
09		M5 :	たいぎんよ.
10		店員:	たいぎん?
11		M5 :	う::.
12		店員:	うん:
13		店員:	気を付け:にゃ.
			(12行省略)
25		店員:	毎日歩きよん.
26		M5 :	(……)
27	→	店員:	あれほんま(.)私が遅いんじゃね::毎日出勤が hhh[h
28	→	M5 :	[ほ:よ.
29	→	店員:	hhh もっと遅いもんね:.
30	→		(4.0)
31	→	店員:	いるもんないん.
32	→	M5 :	な::.
33	→	店員:	食べたいもん.
34		M5 :	ん?
35		店員:	食べたいもん.
36		M5 :	(……[…)
37		店員:	[うん::
38		M5 :	嫁さんが（……[…) [うん::
39		店員:	[あ::(.)ほんま[.

会話開始部では店員の「いらっしゃい」(1行目)に対して，客の「いぬるわい(＝帰るよ)」(3行目)といった冗談の発話，その後M5の歩く習慣についてのやりとり(6〜13行目)[2]，25行目以降では店員と客の共通の知人に関して，

[1] ここでは，客が複数の活動に参与することがないように店員が会話を管理していたと考えられるが，接客サービスがみられる場面においては，反対に店員が複数の活動に参与し，さらに作業よりも雑談を優先することが平本・山内(2016)で報告されている．

[2] 7行目「歩きょ:たんじゃがや:めたんよ」は共通語で「歩いていたんだけどやめたんだよ」，また，9，10行目「たいぎ」は「しんどい／疲れる」である．

その人が毎日歩いているのかといったやりとりが行われている.

25 行目の後，店員のターンが続き(27,29 行目)，さらに店員の「もっと遅いもんね」(29 行目)に対して，M5 が反応を示さないことから 4 秒の沈黙が生じている(30 行目)．この後店員は，話題を変えて「いるもんないん(＝いるものはないか)」(31 行目)と質問をして，M5 に何か必要なものはないか尋ねている．このように，客が商品選択への志向を見せない場合，沈黙の後に，店員はこの場で買うものを新しい話題として取り上げ，商品選択へ移行するよう促す．なお，客は「な::(＝ない)」(32 行目)と答えており，「食べたいもん」(33,35 行目)と質問を続ける店員に対して，「嫁さんが」(38 行目)と別の話題を提示して，商品選択へは移行せずに雑談を継続しようとしている.

5. 考察

事例(1)では，入店後すぐに商品選択へ移行するやりとり，事例(2)では，商品選択への志向をみせた客の身体動作を起点として，それまでの雑談が終結するやりとり，そして事例(3)では，商品選択への志向をみせない客に対して，店員が店内を見るよう促す発話を行うことで，商品選択へ移行するよう促すやりとりをみた.

上記に示した雑談からの移行手続きは，その後も参与者のコミュニケーションが継続するにもかかわらず，これまで明らかにされてきた会話終結の手続きといくつか共通点がある．入店してから商品選択までの雑談は，店に来て，商品を選択し，会計し，店を出るといった「買物行動」の構造の中に埋め込まれたものと捉えられる．これは，私たちの日常生活の様々な活動の中に埋め込まれる会話と類似している．これまで会話終結研究では，会話とほかの活動との境界が明らかにされてきた．居關(2015)は，偶然移動中に出会った際の立ち話で，参与者が遠ざかりながら急いで会話を終わらせることを,会話以外の活動から会話が圧迫を受けたものとして述べている.事例(2)では，客がみせた商品選択への志向に対して，店員は雑談が終結するよう「ぺろりと食べたわ」に「ありがとね」を間髪入れずに付け加えている．これは，進行中の雑談が，次に予想される商品選択という買物行動から圧迫を受けたものと言える．また，それまでの活動から一度切り離されて行われる電話会話の終結部では，電話が開始する以前に行っていた活動に意識を向けさせるように「会話の始まりや会話中の話題を呼びもどす」(岡本 1990)ことがある．事例(3)では，客との雑談，言い換えれば本来の買物行動から切り離されたやりとりが続く中で，店員は客を本来の買物行動へ「戻す」ため，「いるもんないん」と店を見るよう促し，商品選択への移行を試みていたと言える.

6. おわりに

本研究では，入店から商品選択までの手続きを 3 つの事例から記述し，店員が雑談の終結に向けて会話を管理することを示した．さらに，買物行動に埋め込まれた会話という視点から雑談を捉え，最終交換こそみられないものの，会話終結の手続きと類似する点があることを明らかにした．今回扱った入店から商品選択までは，商品の購入前であり，制度への志向がより強くみられたものと考えられる．今後，会計作業から店を出るまでの雑談や商品を選びながらの雑談に分析範囲を広げ，買物行動の中に埋め込まれた雑談の多様な有り方を明らかにしたい.

参考文献

Drew, P. & J. Heritage. (Eds.) (1992) *Talk at Work: Interaction in Institutional Settings.* Cambridge: Cambridge University Press.

居關友里子 (2015). 日常生活に生じる会話終結の記述ー活動の連続からみる会話の組織ー 筑波大学博士学位請求論文

平本毅・山内裕 (2016).鮨屋のサービス文化と雑談 村田和代・井出里咲子(編) 雑談の美学 言語研究からの再考 ひつじ書房, 73-95.

Malinowski, B. (1923). The problem of meaning in primitive languages. In C.K. Ogden and Ivor. A. Richards.(Eds.) *The meaning of meaning: A study of the Influence of Language upon Thought and of the Science of Symbolism*, 296-336. New York: Harcourt, Brace & World Inc.

岡本能里子 (1990). 電話による会話終結の研究 日本語教育, **72**, 145-159.

Schegloff, E. A. (1998) Body Torque *Social Research*, **65**(3), 535-596.

Schegloff, E. A. & Sacks, H. (1973). Opening up closings *Semiotica* **8**(4) 289-327. 北澤裕・西坂仰(訳) (1997). 会話はどのように終了されるのか 日常性の解剖学ー知と会話, マルジュ社, 175-241.

津田葵 (1984).説得型談話にみられる日米比較ーセールスマンとお客の談話分析ー F. C. パン(編) 言語のダイナミックス 文化評論出版, 20-36.

仮説のシナリオ(hypothetical scenario)の相互構築において発生する笑い

―20 代の女性多人数会話で共有される転職に関する意識を事例に―

児島麦穂（大阪大学大学院）

1. はじめに

本研究は，20 代の女性友人同士の会話において発生した，転職に関する仮説のシナリオ(hypothetical scenario)(Georgakopoulou, 2001)が笑いを伴って相互的に構築される過程をデータとして談話分析を行う．この分析により，①20 代女性である会話参与者が多人数会話で共有する転職に対しての意識，②この過程で表出する参与者の立ち位置，③仮説のシナリオの相互的な構築の過程で発生する笑いの意味・機能を明らかにする．

Georgakopoulou (2001)によると仮説のシナリオ(hypothetical scenario)とは，「もしXが起こったとしたら/起こったと仮定して」展開する，実際には起こっていない出来事のシナリオである (Georgakopoulou, 2001: 1892-1893)．また先行研究において笑いは，ラポールを構築する機能，会話の進行を円滑にする機能，笑いの対象を傷つける機能などを持つことが明らかになっている(Boxer & Cortés-Conde, 1997; Murata & Hori, 2007)．

2. 研究の理論的枠組み

本研究は，相互行為のナラティブ分析の流れをくむBamberg (1997, 2004)らを参考にしている．Bamberg (2004)が提唱したポジショニング理論は，会話参与者たちが相互行為としてのナラティブを行う際に，立ち現れる立ち位置を分析する理論である．立ち位置は，相互行為の場において3つのレベルで構築される．ポジショニング・レベル1とは，ストーリーの世界の登場人物として自己を何者として描くのかという話し手の立ち位置である．ポジショニング・レベル2とは，参与者たちとのやりとりにより今，ここで構築される相互行為の場においての立ち位置である．その場での相互行為により，会話参与者たちの関係性が設定される．ポジショニング・レベル3とは，ストーリー世界の自己を相互行為の場で聞き手に表明することにより立ち現れる包括的な自己である．この理論により参与者たちの表出するアイデンティティの解明が可能となる．

本研究が依拠するもう一つの理論的枠組みとして，共通基盤(common ground)(Clark, 1996)がある．共通基盤(common ground)とは，人が相互的にコミュニケーションを行う際に，相手と自分の背景知識を基盤として互いに理解し合うことである．会話参与者たちの共同行為 (joint action)などにより，共通基盤が確立されることを共通基盤化 (grounding)と言う(Clark, 1996, 92-121)．児島(2019)では，共通基盤と笑いの関係を分析し，共通基盤化が行われる過程，行われた後に発生する笑いが．共通基盤化を確認・強化する機能を持つことを明らかにしている．

本研究では，ポジショニング理論と共通基盤の視点から仮説のシナリオが構築される様子を談話分析することにより，会話参与者の立ち位置がどのように表出するのか，参与者間でどのように共通基盤化が確立されるのか，またそれらがどのように笑いに反映されるのかを詳察し，これらが仮説のシナリオの相互構築に与える影響を明らかにする．

3. 調査概要と方法

本稿は，研究者が 2018 年から実施している女性友人同士の多人数会話の継続・縦断調査の一貫として収録した，高等学校時代の友人4名による自然談話をデータとしている．彼女らは収録を行った2019年8月時点で，24歳もしくは25歳で，入社2年目である．本調査の目的は友人同士の私的な相互行為における偶発的な笑いの収録であったため，研究者が不在の環境にビデオカメラとレコーダーを設置し，30分程度自由に語るよう依頼した．

4. データと分析

本稿で扱うデータは，最近婚約したMNが婚約に到るまでの話を語る場面を抜粋したものである．MNとMNの婚約相手は異なる地方の会社に勤めていたため，MNは婚約以前から勤務地の変更を目指し転職活動を行なっていた．結局MNは，元から勤務する会社内で希望する勤務地へ移動することとなり，実際に転職することはなかった．本場面ではMNによるこの話題がきっかけとなり，入社2年目である参与者たちが，転職活動の際の面接において転職志望理由をどのように説明するかという仮説のシナリオを構築していく．なお，YTは転職活動及び転職を経験しており，KFは転職活動の経験はないものの人事部に勤めているため採用面接を行った経験がある．KHは転職活動の経験はない．

4.1 仮説のシナリオ開始前の共通基盤化

[データ 1]

353. MN: まず[転職のりゆう::を
354. [((右手を出しながら親指を折る))
355. [$_1$ちゃんと言わなあかんし:
356. [$_1$((右手をテーブルに置く))
357. YT: [$_1$((数回頷く))
358. KF: [$_2$なんて言ってたん?
359. MN: [$_2$まだけっ-
360. その:転勤(.)結婚したいから:
361. (.8)転勤(.)を考えてますみたいな
362. それじゃ多分弱いねん
363. KF: そやな
364. YT: [$_3$((笑顔))
365. MN: [$_3$そう
366. [$_4$その会社じゃないとあかん理由を
367. [$_4$((右手でテーブルに置く))
368. [$_5$多分ゆって欲しいねんけど:
369. [$_5$((右手を自分の方へ振る))
370. こっちからしてみたら[ないねん
371. KF: [ないよな
372. MN: [そやねん. ないねん[だから.
373. YT: [huhu
374. MN: [((KF を指差す))
375. なんか勤務地を変えないとあかんので:みたいなんで
376. やってたけど:それは全部もうあかんくて:
377. KF: そやな. 勤務地はあかんな
378. MN: そう:
379. (2.2)
380. MN: それ以外にでも理由が[ほんまにない
381. KH: [ない

MN が自身の転職活動について語る中，KF が「なんて言ってたん?」(358 行目)と，MN が面接で述べていた転職志望理由について質問を行う．MN が結婚を機に転職をしたいという自身が面接で述べていた転職の理由を答え(360 行目)，その理由が採用されるには「弱い」(362 行目)と自己評価を行うと，KF はそれに「そやな」(363 行目)と同意する．その後 MN が，採用面接において説明することが求められる，転職先がその会社でないといけない理由が 「こっちからしてみたらないねん」(370 行目)と発言すると，それに KF がオーバーラップで「ないよな(371 行目)」と同意する．さらに， KH も加わり，「それ以外にでも理由がほんまにない」(MN, 380 行目)，「ない」(KH, 381 行目)と，勤務地を変えたいこと以外に面接で述べるような転職理由がないことにオーバーラップで同意する．これらのオーバーラップは秦(2019)が明らかにした，共通基盤化の確立を示す同時発話だと言える．つまり，これまでのやりとりにより共通基盤が確立されたため，参与者が互いの発言を予測することが可能となり MN, KF 間，MN, KH 間でオーバーラップが発生したと考えられる．この過程により，「入社 2 年目である参与者らにとって採用されるような転職理由を挙げること/説明することが難しい」という転職に関する認識が共有され KF, MN, KH の間で共通基盤化されたと言える．また，この共通基盤化に，転職活動を成功させた経験がある YT は参加していない．

4.2 仮説のシナリオの構築と笑いの関係性

[データ 2]

384. KF: 今んとこでも正味いいんですけど:
385. YT: [$_1$hhh
386. KH: [$_1$huhu
387. YT: [$_2$hahaha
388. MN: [$_2$そうそうそう
389. KF: なにも:文句ないし:( )て満足してるんですけど:
390. (1.1)ん:::でももうちょっとできるかな:と
391. 思ったん[ですよね:
392. MN: [ん::
393. (.6)
394. KF: て言ったらいいんちゃうん?
395. YT: haha[haha
396. MN: [それじゃ
397. [$_1$なんか
398. KH: [$_1$haha
399. MN: [$_2$突っ込まれそうちゃう?
400. [$_2$((右手を自分に向けてへ振る))
401. KF: なんでですか. どういう
402. [ものですか:? どういうことがしたいんですか:?
403. MN: [どういう- そうそう. どういうこと
404. KF: そ(ういうの)はてきとうに
(中略)
413. KF: まだまだスキルが足りてないのもわかるし:
414. あの:あれなんですけど:
415. 御社であればもっと経験がつめると思うし:
416. YT: huhu[¥めっちゃよいしょするやん¥
417. [((両手を上にあげる))
418. KH: [((笑顔で YT を見る))
419. YT: [hahahaha=
420. MN: [((笑顔で数回頷く))
421. KF =もう今のところでは学びきりまし[た
422. YT: [ahahahaha
423. KF: hahaha
424. [やりきりました
425. KH: [huhuhuhuhu
426. YT: [¥学びきりました¥
427. ¥たかが 2 年でって[言われるわ¥ahahaha
428. MN: [¥そうそうそう¥
429. [((数回頷く))
430. [¥ほんまにってなるよな¥
431. KF: [2 年ですかみたいな. はい.
432. 自分としてはやりきりました.
433. YT: huhahaha
434. KF: もっと難しい環境でやりたい
435. [hahahaha
436. [((手を口元に当てる))
437. YT: [hahaha[hahahaha
438. MN: [hahaha
439. KH: [huhu
(中略)

455. KF: あとはあれちゃう?
456. なんかちょっと嘘ついたらいいんちゃう?
457. KF: う::ん残業代もつかないんですよね:(とか)
458. YT: あ::それはでもあり[やと思う
459. MN: [まあ確かに

データ 2 では，KF により「採用されるためには面接で転職理由をどう説明すればいいか」という仮説のシナリオが開始される． まず，KF が 389-391 行目で「今の職場に不満はないが，(自分の能力的に) もうちょっと (高いレベルの仕事が) できるかなと思った」と転職理由についてのシナリオを展開する．ポジショニング理論で言うところのレベル 1(物語世界)であるこのシナリオ内の転職志望者としての言動に対し，KF は「て言ったらいいんちゃうん?」(394 行目)と自身を，会話の場において「転職のための採用面接についての知識を有している者」(レベル 2)，「(人事部に勤務しており知識が豊富という意味で) エキスパート」(レベル 3)として位置付け，389-391 行目で挙げた転職理由が面接で述べるのに妥当なものであると評価する．

しかしながらこの KF による仮説のシナリオに，YT は笑いで反応し(395 行目)，MN は「それじゃなんか突っ込まれそうちゃう?」(396, 397, 399 行目)と KF の挙げた転職理由は，実際の面接において十分ではなく，更なる説明が求められると指摘する．これらの笑いと指摘により YT と MN は自分たちを「KF よりも転職のための採用面接についての知識を有している者」(レベル 2)，「実際の転職活動を経験した者」(レベル 3)として位置付け，KF が展開した仮説のシナリオにおける転職理由を面接で述べることは，現実的ではないと評価したと言える．

ポジショニング・レベル 2 においての「転職のための採用面接についての知識を有している者」としての位置付けが承認されなかった KF は，その後のシナリオを展開する．402 行目でシナリオ内の面接官として「どういうことがしたいんですか?」とその後の展開として予想される質問を挙げ，それに対する転職志望者の言動を「てきとうに: (中略)まだまだスキルが足りてないのもわかるし: 御社であればもっと経験がつめると思うし:」(404, 413-415 行目)と構築する．KF はこのシナリオを自ら構築することにより採用面接がどのように展開するかを理解していることを示し，先ほど失敗した「採用面接についての知識を有している者」としての位置付け(レベル 2)を再度獲得しようとしたと考えられる．しかしながら YT は，KF がシナリオ内で構築する「転職先で更に経験を積みたい」という転職理由に笑いながら「huhu¥めっちゃよいしょするやん¥」(416 行目)と両手を上げるジェスチャーと共に発言する．これらの YT による笑いと発言は，KF が構築したシナリオ内の転職志望者が述べる転職理由を「非現実的なもの，相応しくないもの」として扱っており，YT はこれらの行動により自身を「KF より転職のための面接についての知識を有している者」(レベル 2)，「転職(活動)経験がある者」(レベル 3)として位置付けていると言える．

これまでの過程により，「転職のための採用面接についての知識を有している者」としての立ち位置が獲得できなかった KF は，「もう今のところでは学びきりました hahaha」(421, 423 行目)と採用面接で述べるには非現実的な転職理由を挙げる．この発言が笑いながら行われているため，KF はシナリオ構築の方向性を，採用されるための妥当な転職理由を挙げるのではなく，非現実的な採用面接の場面を描くことで笑いを志向するものへと変更したと分析できる．YT, MN もこのシナリオの方向付けに同調し，「¥たかが 2 年でって言われるわ¥ahahaha」(YT, 427 行目)，「¥ほんまにってなるよな¥」(MN, 430 行目)とシナリオ内で採用面接を行う面接官の言動や心情を笑いながら構築する．これを受けて KF も「2 年ですかみたいな. はい. 自分としてはやりきりました.」(431, 432 行目)，「もっと難しい環境でやりたい」(434 行目)と仮説のシナリオ内での面接官と転職志望者の言動を非現実的に描くことで，滑稽な場面を作り上げる．この KF が展開したシナリオに参与者全員が笑いで反応する (433, 435, 437-439 行目)．この笑いの共有が可能となったのは，この場で構築された「転職のための面接で転職理由をどう説明するか」という仮説のシナリオが非現実的で，シナリオ内の面接志望者の言動では実際には採用されない，ということを参与者たち全員が理解していたためだと言える．さらにこの笑いの共有により，仮説のシナリオの開始以前に参与者たちの間で共通基盤化されていた「入社 2 年目である参与者らにとって採用されるような転職理由を挙げること/説明することは難しい」という認識が強化されたと言える．

最終的にこの仮説のシナリオは，KF により嘘だとしても「残業代もつかない」(457 行目)といった理由を述べるのが妥当であるとされ，これに YT と MN が同意したことで終了する．この同意は，仮説のシナリオ「採用されるためには面接で転職理由をどう説明すればいいか」の結末であると同時に，参与者間の「転職のための面接についての知識を有している者」としての立ち位置を巡る交渉の決着とも言える．つまり，これまで KF の「転職のための採用面接についての知識を有している者」としての立ち位置が承認されなかったが，KF が妥当な転職理由を提案し，KF, YT, MN 間でそれが妥当であると同意しあったことにより 3 名共が会話の場において「転職のための採用面接についての知識を有している者」(レベル 2)として均衡に位置付けられたと言える．また，KH は転職や採用に関する経験が他の参与者に比べ少ないため，今回分析した場面においてあまり発言が見られなかった．

本節では仮説のシナリオが構築される中で，参与者らの立ち位置が笑いなどの行動によって表出，交渉され，それがシナリオの方向付けに影響する様子を分析した．本場面では，「転職(活動)経験者」，「人事部勤務者」というポジショニング・レベル 3 における立ち位置の差異から，「転職のための採用面接についての知識を(より)有している者」というレベル 2 の立ち位置が交渉されていた．その過程で，「入社 2 年目の参与者らにとって妥当な転職理由を挙げること/説明することは難しい」という共通基盤化された認識に基づいた笑いが共有されることで，「入社 2 年目の者」同士という参与者全員が共有するレベル 3 においての立ち位置が表面化していた．これを経て最終的には参与者間で，「転職のための採用面接についての知識を有している者」(レベル 2)を巡る交渉が同意に至り，シナリオにおいての妥当な転職理由が挙げられたことにより仮

説のシナリオが終了した.

5. 考察

本データでは，参与者らが転職活動に関しての仮説のシナリオを導入する過程で，「入社 2 年目である参与者たちには会社から求められているような転職理由を採用面接で挙げること/説明することは難しい」といった転職に関する認識が共有され，共通基盤となっていることが明らかになった.

ポジショニング理論を用いた分析から，「転職(活動)経験者」，「人事部勤務者」といった立ち位置(レベル 3)に差異がある参与者らが，会話の場において「転職のための面接についての知識を(より)有している者」としての位置付け(レベル 2)を巡って交渉を行い，これが仮説のシナリオの方向付けに影響を与えていることが明らかになった. 人事部勤務の参与者 KF が語る仮説のシナリオに，転職(活動)経験者 YT，MN が笑いや非現実性の指摘を行うことにより，「KF より面接についての知識を有している者」としての立ち位置を表出したことことで，KF の面接についての知識の優位性が承認されなかった. また，この笑いと指摘により仮説のシナリオが「非現実的で転職理由として通用しないもの，笑いの対象となるもの」として意味付けされ，笑いを志向するものとして方向付けされた. このような仮説のシナリオの相互的な構築のプロセスにより，参与者の知識の優位性を反映する笑いには仮説のシナリオの意味付け，方向付けに影響を与える機能があると言える.

さらに，この仮説のシナリオを構築するプロセスにおいて，笑いの共有が共通基盤化を強化する機能があることも確認された. 仮説のシナリオが開始される前に参与者間で共通基盤化されていた「入社 2 年目の参与者らにとって，採用面接で妥当な転職理由を説明するのは難しい」という認識が，仮説のシナリオが笑いを志向するものとして相互構築され，笑いが共有されたことにより強化されていた. この共通基盤に基づく笑いは，「入社 2 年目の者」同士(レベル 3)を表面化する笑いであった.

6. まとめ

本稿では，転職活動経験の有無において立ち位置の異なる 24，25 歳で入社 2 年目である参与者 4 名が，転職活動に関しての仮説のシナリオを相互的に構築する様子を分析した. 仮説のシナリオを構築する過程で発生した，共通基盤化 (強化)，笑いの共有などにより，参与者たちは「転職活動の難しさ」，特に「入社 2 年目の参与者らにとって，採用面接で妥当な転職理由を挙げること/説明することの難しさ」といった転職に関する意識をそれぞれの立ち位置から共有していた. また本データでは，転職のための採用面接をどの程度知っているかといった経験の違いが，参与者らの立ち位置の交渉となり，これらが仮説のシナリオの構築において笑いとして表出することで，シナリオの意味づけ，方向付けに影響を与えることが明らかになった. このように本稿の分析から，転職に関しての仮説のシナリオに笑いが含まれることで，参与者たちはシナリオを相互的に構築し，それぞれの立ち位置から転職に関しての意識を共有することが解明された.

トランスクリプト記号

[	オーバーラップ記号	¥ ¥	笑いながらの発話	,	音節の区切り
(.)	0.2 秒以下の沈黙	(())	ジェスチャー	?	質問
(0.0)	それ以上の沈黙	:	長音	( )	不明瞭な発話
-	言い淀み	=	続けて聞こえる発話		

参考文献

Bamberg, Michael. (1997). Positioning between structure and performance. In Bamberg, Michael (Ed.) Oral versions of personal experience: three decades of narrative analysis, *Journal of Narrative and Life History*, 7, 335-42.

Bamberg, Michael. (2004). Form and Functions of 'Slut Bashing' in Male Identity Constructions in 15-Year-Olds, *Human Development* 47, 331-353.

Boxer, Diana. & Cortés-Conde, Florencia. (1997). From Bonding to Biting: Conversational Joking and Identity Display, *Journal of Pragmatics*, 27, (3), 275-294.

Clark, H., Herbert. (1996). *Using language*, Cambridge: Cambridge University Press.

Georgakopoulou, Alexandra. (2001). Arguing about future: On indirect disagreement in conversations, *Journal of Pragmatics 33,* 1881-1900.

秦かおり. (2019). 「タスク達成場面における共同行為―折り紙場面を事例に―」, 田中廣明・秦かおり・吉田悦子・山口征孝編『動的語用論の構築に向けて第 1 巻』, 47-66, 開拓社.

児島麦穂. (2019). 「笑いの相互行為性―多人数会話における不均衡状態から笑いの共有に至るプロセス―」, 『社会言語科学会第 43 回大会発表論文集』, 66-69.

Murata, Kazuyo. & Motoko, Hori. (2007). Functions of laughter in intercultural communication: An analysis of laughter as communicative strategy, 『国際社会文化研究紀要』9 号, 115-124.

「対話の一体感」をもたらす音声インタラクションの時間的特徴
―ロボットと人の漫才対話データの分析から―

本井佑衣（立命館大学学部生）　岡本雅史（立命館大学）

1. はじめに

これまで，話者交替がいつ行われるかや相槌を打つタイミングについての対話研究は数多く行われてきたが，話者交替や相槌のタイミングが対話全体の中で経時的にどのように変化しているのかについてはあまり考察されていない．こうした対話インタラクションの時間的特徴を捉える上で，二者間で発話ターンを交替させる際に各々の話者がもつ固有のリズムの相互調整に着目する必要がある．これまでの研究では，Szatrowski (1987) で発話に音楽的なリズムが存在することや，小磯・伝 (2000) らの研究で話者交替に規則的な法則があることが示されている．そこで本研究では，これらの研究を踏まえて，漫才対話における音声インタラクションが紡ぐ「対話の一体感」がどのような要因から生じるのかを明らかにする．

漫才対話を分析対象にする理由は２つある．一つは漫才が基本的に二者間での話者交替によって構成される音声インタラクションであるため，日常会話よりも環境要因に左右されずに分析を行うことができるからである．一方，テンポがいい対話としての規範的モデルとして日常対話との比較を行うことも可能である．漫才の演者はそれぞれ発話ターンや間を随時相手に合わせて変化させながら「息の合った」インタラクションを作り上げていると考えられる．お互いに「息の合った」対話，つまり「対話の一体感」を感じさせる要因は一体何であるのかを解明することで，最終的には日常場面におけるコミュニケーションでリズムやテンポの良い対話を行う手がかりとなることが期待される．

2. 関連研究

従来の研究では，我々が日常のコミュニケーションにおける発話の中にも音楽的なリズムがあることが示されているが，一体何がそうしたリズムを作っているのかは明確ではない．本井・岡本 (2019) では，漫才対話データの分析からリズム主導者が作るリズムをもう一方の対話者が合わせる同調の動きがあることが示された．ここでは，モーラや高低アクセントから生まれるミクロなリズムが分析されていたが，対話の重層的なインタラクションリズムを捉えるためには，発話長や交替潜時から作られる，よりマクロなリズムにも着目する必要がある．

小磯・伝 (2000) では，話者交替に規則的な法則があることが示されており，対話の自律モデルとして提案されていた．これは，話し手が発話をやめるときの行動傾向を文末度として数値に表したものである．文末度が高いほど話し手は発話を停止し聞き手は発話を開始する傾向にあり，非円滑な移行においても同じメカニズムで生じることも示唆されている．自律モデルによると発話者それぞれが異なる発話関数をもっていると考えられており，この関数が認知環境や対話相手などによって行動特性として現れる．

石本・榎本 (2017) は，話者移行適格場の到来を予測させる発話中の韻律変化の解明を行った．次話者となる聞き手は動詞部までの情報から発話末要素が後続するかどうかを音響的な要素から判断していることが判明した．また発話の最終アクセント句付近で話者の韻律が大きな変化を見せることも示している．これらは話者の移行がどこで起こるのかを予測するための研究であるが，本研究では，対話における円滑なタイミングを超えた，コミュニケーション全体を支配するインタラクション・リズムの存在を仮定している．

Erickson & Shultz (1982) は，会話の言語的・非言語的な行動は，音楽と同じような小節に分けることができ，メトロノームで計ることのできる正確なリズムを持って進展していくと述べており，発話を小節に分けることができるということを示した．また，ザトラウスキー (1989) は，この研究を踏まえ，日本語の対話を拍子付けする方法について示した．スロー再生した音声に適切な拍子を決め，さらにそれらを音符とリズム譜で表現し，原則として一語につき一音符を対応させている．これらの分析の中で，相槌を打つ適切なタイミングは前の発話が終わったすぐ後の拍子であり，相槌以外の応答タイミングは一小節分あけることが適切であると述べられている．

3. 研究目的と研究手法

本研究の目的は，対話のインタラクションリズムが二人の演者間でどのように生成・修復されているのかを分析すること

で「対話の一体感」を認知させる要因を解明することにある．漫才対話において二者はどのようにテンポの良さを共同的に作り上げているのかを分析することで，漫才に留まらず，日常場面のコミュニケーションにおいて息の合うやりとりの本質を探るヒントとなることが予想される．

表 1：データ情報

組み合わせ	ターン数	発話長(ms)	分析対象時間
かまいたち（THBH）	48	T：103593　B：74369	3:16
濱家×ペッパー（THBR）	37	T：109859　B：93799	3:48
山内×ペッパー（TRBH）	35	T：64362　B：53813	3:48

テンポが良い対話とは両者が交替潜時を作らずに次々に発話インタラクションを行うことではなく，相手の固有のリズムに合わせていくものであると考えられる．マクロな視点から，対話を構成する発話ターンと交替潜時をそれぞれ一つの分析単位とみなし，それらの長さや組み合わせによってインタラクションリズムが生み出されていると仮定し分析を行った．

具体的には，(1) 発話長と交替潜時によって作られるインタラクションリズムが経時的に変化すること，(2) インタラクションリズムと相槌との対応関係，の両者によって「対話の一体感」が生まれることを示す．漫才対話を分析するにあたって，プロの漫才師「かまいたち[1]」とヒューマノイドロボットPepperによる3本の映像音声データを利用し，音声分析ツールPraat[2]によって発話の書き起こしと音声データの分析を行った．データは2018年11月に立命館大学で収録したものである．Pepperの操作は対話データを収録する際の手法として知られるWizard of Oz (WOZ) 方式によって行った．WOZ方式では，ロボットになりすました人（Wizard）が人間の発話に対して応答するため，二名の操作者が舞台裏から発話タイミングを操作した．長岡ら (2002) で，対話においては音声的情報が二者間の交替潜時を類似させる要因とであると示されていることから，今回は音声情報に絞って分析を行った．そして，それぞれボケ役がロボットである場合とツッコミ役がロボットである場合と人間同士での漫才対話の３つのパターンでの比較を行った．各パターンのデータ情報を表１に示す．

分析手順として，まずボケ役の発話，ツッコミ役の発話，交替潜時がどのような頻度で生起し，時間的に占有しているかを求めた．交替潜時は次話者が調整可能であるため，直後の次発話に依存するものと規定する．発話重複によって交替潜時がマイナスとなる場合は，次発話が遮ったところからを発話交替とみなし，その分だけ当該ターンの時間を削る．また，交替潜時は50ms以上の休止から生じるとし，それ以下の休止時間は存在しないものとみなした．以下，ボケ役の発話ターンをB，ツッコミ役の発話ターンをT，交替潜時をPとする．これらの配列で対話全体の時間的特徴を捉えることができる．対象とする配列は全部でTPB，TBP，BPT，BTP，PTB，PBT，TBT，BTB，PBP，PTPであり，配列ごとの合計時間の占有率と配列の生起頻度を計測した．また，B，P，Tそれぞれの要素からどの要素に遷移するのかも観察した．

4. 結果と考察

4.1 漫才対話要素の時間的占有率

分析の結果，人間 (Human) 同士の対話データ（以下，TH-BH）とツッコミ役が人間でボケ役がロボット (Robot) の対話データ（以下，TH-BR），ツッコミ役がロボットでボケ役が人間の対話データ（以下，TR-BH）の３つのデータでそれぞれ異なる特徴が見られた．表2より，TH-BHで時間的占有率が最も大きかった配列はTBTで次にBTB，BPTと続く．TH-BRで最も多かったのはBTBの配列で次にTBT，BPTと続く．この２つのデータでは全体を多く占有する配列が類似しており，全体的に交替潜時を作らずに連続した発話が行われる傾向がある．TH-BHとTR-BHではPからTへの遷移がTH-BRと比較して多い（表3）．つまり通常はツッコミ役の方が交替潜時を調整する傾向が強いが，ボケ役がロボットの場合はロボット自身がタイミングよく発話交替できないことを示している．このことは，TR-BHで最も多かったのがBPTの配列で次にPTB，TBPと続くことから，前の２つのデータと比較するとツッコミ役のロボットの発話ターンがほとんど交替潜時をおいてからの開始となっていることからも示唆される．一方，表3を見るとTR-BHのP→Tの遷移頻度はTH-BHとほぼ同じように見えるが，Pを挟まずにB→Tとなる流れがかなり少ない．このことからも，ツッコミ役の発話が全体を通して交替潜時をとってから行われていることが読み取れる．

表 2：配列の時間的占有率と生起頻度

		TPB	TBP	BPT	BTP	PTB	PBT	TBT	BTB	PBP	PTP
TH-BH	全体比 生起頻度(回)	6% (9)	10% (13)	13% (20)	3% (5)	10% (15)	3% (3)	**22%** **(22)**	**27%** **(24)**	4% (8)	3% (7)
TH-BR	全体比 生起頻度(回)	9% (10)	9% (9)	14% (14)	3% (5)	6% (7)	7% (7)	**23%** **(15)**	**21%** **(15)**	2% (4)	5% (6)
TR-BH	全体比 生起頻度(回)	12% (14)	16% (14)	**28%** **(27)**	2% (3)	**19%** **(16)**	1% (2)	3% (4)	5% (5)	6% (12)	7% (10)

表 3：遷移頻度

	B→T	B→P	T→B	T→P	P→T	P→B
TH-BH	27	21	38	11	22	9
TH-BR	22	14	24	12	14	12
TR-BH	7	27	20	14	27	14

[1] よしもとクリエイティブ・エージェンシー所属．

[2] Praat [ver.6.0.43]（http://www.fon.hum.uva.nl/praat/）最終アクセス日： 2019/12/20

4.2 発話長と交替潜時によって作られるインタラクションリズム

次に発話長と交替潜時それぞれを一つのリズム構成要素とみなして分析を行った．前話者の発話長に対して次話者は交替潜時と発話長をどのようにとるかでグローバルなリズムの変化が見られると考える．そこでこのリズムの変動度を，現話者の発話長(L_n)，次話者に依存する交替潜時(P_n)，次話者の発話長(L_{n+1})の３つの要素を元に次式で定義する．

$$\text{リズム変動率 } x = \frac{P_n\ (\text{次話者に依存する交替潜時}) + L_{n+1}\ (\text{次話者の発話長})}{L_n\ (\text{現話者の発話長})}$$

この式で求まるｘ値が大きくなるほど L_n に対しての次話者ターンが長く，ｘの値が１から０に近づくにつれて L_n に対しての次和者ターンが短くなる．またｘが１に近づくほど L_n と次話者のターン長が等しくなっていることがわかる．さらに時系列でどのように変化しているかを見ることでリズム変動率がどちらに寄っているのかも観察することができる．P_n がないときは L_n: L_{n+1} の比率となる．

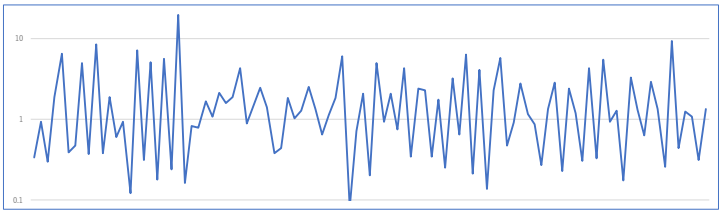


図 3 : TH-BH のリズム変動の推移

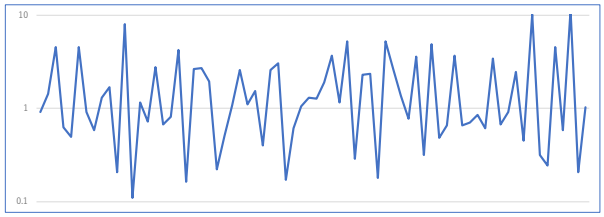


図 2 : TH-BR のリズム変動の推移

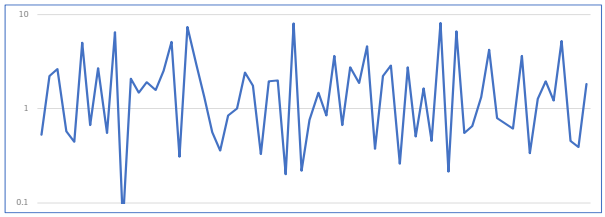


図 1 : TR-BH のリズム変動の推移

この値を元に時系列でどのように変動率が推移しているかをグラフに表した．変動率 $x=1$ を基準としてどれだけの差異があるのかを見るために対数目盛りで表示する．変動率の値による横幅と縦幅が等しく続くと同じようなリズム構成で対話が行われていることを示す．TH-BH のデータ数が他の２つと比べておよそ 1.3 倍あったのでグラフの横幅もそれに対応するようにした．

TH-BH（図１）では変動率が前半 1/4 は大きいが途中からプラスの変動率が続いており，L_n に対して次話者のターンが長いことを示している．ネタの内容と照らし合わせると，１個目のネタの開始と一致していた．前半のフリの部分で TH に対して BH の発話ターンが短かったのに対してここから BH の発話ターンが徐々に増えていく．およそ半分のところでマイナスの変動率が大きくなっており，2 個目のネタが始まる箇所と一致している．後半は連続して変動しており，発話内容は TH のたたみかけである．TH が話す量が増えるため，BH は自分の発話ターンを短くすることで調整していると考えられる．後半もグラフの縦幅と横幅がほぼ同じようになっていることからも同じリズムが数ターン繰り返されていることがわかる．変動率が高くなる部分の L_n は TH がマイナス変動率 15 とプラス変動率 5，BH はマイナス変動率 20 とプラス変動率 5 となっており TH がプラスのリズム変動をつくる確率のほうが高かった．TH-BR のデータ（図 2）と TR-BH（図 3）を見ると全体を通して変動の幅がバラバラであり，プラスの変動を作る傾向にある．TH-BH ほどの緩急は見られないが１個目のネタ導入前と２個目のネタ導入前の変動率の動きがでほぼ一致していた．変動の緩急がないのはロボットが人間の作るターン長に合わせて交替潜時や自分のターン長を合わせたり崩したりする調整が行われていないからではないかと考えられる．また表１からもわかるように TR-BH では T と B の全体を通しての発話長が他の２つと比べて短く，分析対象時間が同じことからも交替潜時がとても長いことがわかる．TR が発話内の間を含めた発話ターンを長めにとっているために BH は変動率が大きくなりすぎないように交替潜時をとったり，TR の発話に対して相槌を打つことで調整していると考えられる．

4.3 相槌と発話内休止によるセグメンテーション

インタラクションリズムの変動率の分析を元に，発話長は現話者ではない方の相槌によって分割されるのではないかと考え，相槌によってセグメントした場合のリズム変動率も求めた．また，対ロボットの対話になったときに人間が発話内休止

をとることが特徴的であったため，発話ターン内で50ms 以上の休止が取られた場合も発話内休止としてセグメントを行った．３つとも変動率の縦幅は小さくなり，さらに細かい変動になった．これはセグメントによってｘ値の調整が行われたからであると考えられる．特に TH-BH（図 4）では前半と中盤のリズム変動が主軸を基準に上下対称の動きになったことがわかる．図 5,6 を見ると前節のグラフよりも緩急がついたことによってロボット対人間の対話データが人間同士の対話データのリズム変動の形に近づいていることがわかる．これにより，人間がロボットの発話に対して相槌を入れたりロボットの発話に合わせた発話内休止を入れることでリズムを保とうとする動きがあるのではないかと考えられる．相槌や発話内休止が入ることによって前節の分析ではわからなかった変動率の差を埋めようとする動きがあることがわかった．

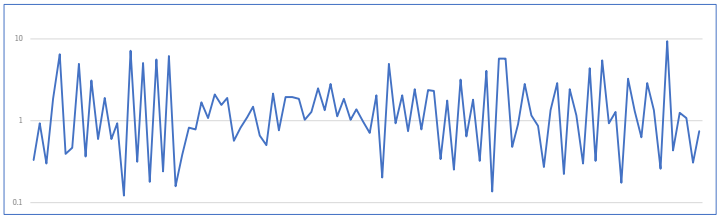


図 4：TH-BH リズム変動の推移（セグメンテーション後）

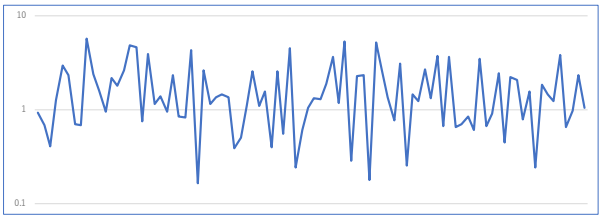


図 5：TH-BR リズム変動の推移（セグメンテーション後）

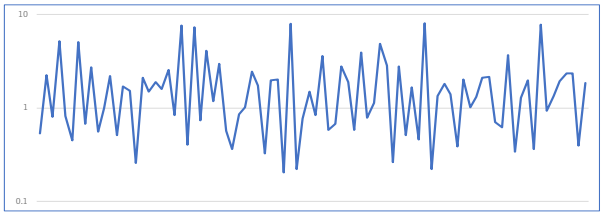


図 6：TR-BH リズム変動の推移（セグメンテーション後）

5. おわりに

対話におけるリズム変動率をグラフ化することで，対話の中で変調が生じる箇所や同じリズムが繰り返される部分が変動率の動きとして可視化が実現した．人間同士の対話データでは前話者の発話ターンの長さに対して交替潜時を含めた発話ターンの長さを一定に保とうとする収束の動きが対ロボットの対話と比べて特に強く存在することが判明した．

今後の課題として，マクロな視点からのリズムの分析をふまえたミクロな視点で高低アクセントを含めた分析や，ジェスチャーなどの非言語情報も含めることで，コミュニケーション全体のリズムについての解明をすすめることができると考える．

謝辞

本研究は JSPS 科研費 17KT0143 の助成を受けたものである．またデータ収録において，吉本興業ホールディングス㈱，神奈川工科大学の大塚真吾研究室，ならびによしもと工学プロジェクトの協力を得たことを特記し，ここに感謝する．

参考文献

Erickson, F. & Shultz, J. J. (1982). *The counselor as gatekeeper: social interaction in interviews.* NY: Academic Press Inc.
平出昌嗣 (2017). 発音とリズム―学校文法を超えて(2) 千葉大学教育学部研究紀要, **66**(1), 345-350.
石本祐一・榎本美香 (2017). 話者移行適格場の到来を予測させる発話中の韻律変化の解明 日本認知科学会, **2**(2), 31-37.
鹿島央 (2010). 日本語リズムの派生について―初級教材の分析と音声教育への応用をめざして― 名古屋大学留学生センター紀要, **8**, 5-14.
加藤雅代・古村光夫・橋本新一郎 (1994). 母音部エネルギー重心点に着目したリズム規則 日本音響学会誌, **50**(11), 888-896.
小磯花絵・伝康晴 (2000). 円滑な話者交替はいかにして成立するか―会話コーパスの分析にもとづく考察― 認知科学, **7**(1), 93-106.
本井佑衣・岡本雅史 (2019). 漫才対話の「テンポの良さ」を支える発話リズムの同期・変調パターン 社会言語科学会第43回大会発表論文集, 170-173.
長岡千賀・小森政嗣・中村敏枝 (2002). 対話における交替潜時の２者間相互影響 日本人間工学会誌, **38**(6), 316-323.
中村敏枝 (2009). コミュニケーションにおける「間」の感性情報心理学 音声研究, **13**(1), 40-52.
岡本雅史 (2008). 会話構造理解のための分析単位―実践：漫才対話のマルチモーダル分析― 人工知能学会誌, **23**(4), 552-558.
羅希・定延利之 (2018). ボケ役，ツッコミ役の発話タイミングから見る面白さに対する認識―日本語母語話者，日本語学習者，中国語母語話者の比較から― 日本認知科学会第35回大会論文集, 943-951.
宿利由希子・ヴォーゲ ヨーラン・林良子・定延利之 (2018). ユーモアを生み出すための『間』―ボケとツッコミのタイミングに関する考察 日本認知科学会第35回大会論文集 , 912-918.
Szatrowski, P. (1987). A Discourse Analysis of Japanese Invitations, *Berkeley Linguistics Society*, **13**, 270-284.
ザトラウスキー，ポリー (1989). 相づちとそのリズム 月刊日本語, **3**, 32-35, アルク出版

思考とコミュニケーションは文法で出会う

— 複雑な事態の表現手段としての文法 —

吉川 正人 (慶應義塾大学)

1. はじめに

日常我々が用いる表現の多くは定型的なもので，一説には日常会話の 7 割程度が定型表現の使用で成立しているとする算定もある (Wray, 2002)．一方で，ヒトの言語は創造的 (creative) であり，要素を無限に組み合わせることで新奇な表現を作り出せることに特異性があるとする議論も根強い．確かに，言語使用の実態としての定型性が顕著な特徴であったとしても，ヒトが創造的な言語使用も可能なのだとすれば，創造的側面の存在に関しても何らかの説明原理が必要となる．一般的に，創造的な言語使用を可能にしている能力や原理は，「文法 (grammar)」と呼ばれる．

本稿では，このような意味での文法の起源を，「イマ・ココにない事態を表現する手段」を発達させるためのものとする仮説を提示し，いくつかの観点からその妥当性について議論する．これは，例えば文法の起源を経験の「言語化 (verbalization)」に求めた議論 (Croft, 2007) や，人類進化の文脈で，複雑な道具作成 (tool-making) を「教える」ことによって複雑な言語が進化する道筋が出来上がったとする「認知的結合仮説 (Cognitive Coupling Hypothesis: Kolodny & Edelman, 2018)」を理論的背景として，即時的な感情や情報の伝達，あるいは交感的コミュニケーションを超えて，体験/伝聞した出来事や複雑なプランニングを要する構造体の説明をすることが，それに形態的に相応しい言語の産出・理解を可能にする方向に働いた，とする仮説である．

この仮説から得られる一つの帰結は，日常的な会話場面であっても，「語り (storytelling/narrative)」と呼べるような発話モードになった場合は，非定型的で「文法」の発露と言えるような言語産出が起こりやすくなる，ということである．本稿ではその検証のため，会話データのコーパス集から語りに特化したものを選定し，他の一般的な会話データとの対照分析を行った結果を示す．

2. 思考，コミュニケーション，文法

2.1 思考かコミュニケーションか

「文法」を兼ね備えた複雑なヒトの言語が「何のために」存在しているのか，という点において，対立する二つの立場が存在する．一方はこの問いに対し「思考」，あるいはより一般的に，認知的演算処理である，と回答し (e.g., Everaert, Huybregts, Chomsky, Berwick, & Bolhuis, 2015)，もう一方は，「コミュニケーション」である，と回答する (e.g., Du Bois, 1985)．ここでは両陣営による実際の論争には立ち入らないが，言語，あるいは文法と思考・コミュニケーションの関係性について簡単な整理を行う．

聴者の親のもとに生まれた聾児は家庭内で通用する独自の身体言語であるホームサインを発達させるが，Goldin-Meadow & Feldman (1977) が示すように，ホームサインにも行為の主述関係を表す「文法」と呼べるような構造が備わっていることが分かっている．ところがこのような「文法」によって表現される行為の動作主や受領者のような関係性は，ホームサインの受け手である聾児たちの母親には，それほど効率的には「伝わっていない」ことが報告されている (Carrigan & Coppola, 2017)．これが事実であれば，聾児が自ら文法を「編み出した」のは「コミュニケーションを効果的に行いたいからだ」と結論付けることは難しい．

しかし一方で，文法の存在目的がコミュニケーションでなく，頭の中だけで完結する認知的演算や思考の道具なのであれば，そもそもなぜ敢えて「言語」という形で「外在化」させる必要があるのかについて説明する必要が生じる．コミュニケーションの効率化に必ずしも資さないとしても，言語が公共的である以上，何らかのコミュニケーション上の要因がその背後に存在すると考えなければ辻褄が合わない．

2.2 思考もコミュニケーションも

ここから導かれる結論は，文法には「思考もコミュニケーションも必要である」という折衷案である．しかし問題は，文法に関して思考とコミュニケーションがどのように結びつくのか，という点である．この問題の解答として有力な説明となりうるのが，Kolodny & Edelman (2018) の提示する認知的結合仮説 (Cognitive Coupling Hypothesis: COCO) である．旧石器時代に分類されるアシュール後期文化 (約 70–25 万年前) における石斧などの複雑な石器は，

作成するために系列的で階層的，そして再帰的な構造の理解と，それに基づくプランニングが必要であることが先行研究 (Stout, 2011) によって示されており，文法的な言語の成立以前に系列的・階層的・再帰的構造の理解と行動は可能であったことが示唆されるが，COCO は，そのような複雑な石器の作成法を身内に「教える」という言語的な活動が，再帰的構造の処理とコミュニケーションの必然的な接合点となり，両者が (神経回路的な意味で)「結合する」ことになった，と考えるものである．

関連する議論として，文法の起源を，経験した事柄を他人に伝える，経験の「言語化 (verbalization)」に見出しているものがある (Croft, 2007)．互いに共有していない経験を語るには，「誰が何をどうしたのか」といった事柄を分節化し構造化して説明する必要があり，このような，内容的，あるいは意味的な分節化がそれを表現する言語の形式的構造化に対応づけられることで，文法が生まれた，とする考えである．

COCO と言語化説に共通するのは，「イマ・ココにない事物について言語化すること」が，言語に文法が備わるに至った要因だという考えである．まだ目の前に存在していない複雑な石器の作り方や，聞き手は体験していない過去の出来事について語るには，十分に構造化されたコミュニケーションツールが必要となるということである．このような考えは，Dunbar (1998) による言語の「ゴシップ起源」説ともつながるものである．ゴシップとは要するに，同一コミュニティの成員でありながら，会話の場に「いない」人物についての語りであり，必然的に「イマ・ココ」にない出来事についての描写を含む．

3. 語り (storytelling) と文法

Croft (2007) の主張するように文法の起源が「言語化」に求められるのであれば，他の状況と比べて，経験を語る場面 (storytelling) においてはより「文法」の存在感が前面に出てくることが予想される．そこで本稿では，話し言葉における語りデータに特化したコーパスと，他の一般的な話し言葉 (主に会話) データとの対照分析を行う．このコーパス調査では，上述の先行研究の知見から得られる以下の予測を検証する:

(1) 語りデータは他の話し言葉データより成文性が高い

これは，日常会話では必ずしも「文法的」ではない断片的な発話や破格的表現も比較的多様される傾向があると思われるが，語りの場面ではそのような発話が抑制され，文として適格な構造を持つ発話が多く産出される，と言う予測である．

調査には，話し言葉のデータを幅広く収録し一貫したフォーマットで提供している，`CABank` (MacWhinney & Wagner, 2010) 内のコーパスを利用した．語りに特化したデータとしては Bradford Corpus [1] を利用し，比較のため，The Michigan Corpus of Academic Spoken English (MICASE: Simpson, Briggs, Ovens, & Swales, 1999) を利用した．MICASE を比較に利用した経緯については後述する．

表 **1**: 各コーパスの基本情報

コーパス	発話数	総語数	ジャンル	備考
Bradford	2,893	22,268	ナラティブ	ワシントン DC のアフリカンアメリカン
MICASE	151,389	1,602,977	アカデミック	講義・議論・相談など多様

データは以下の要領で前処理を行った:

(2) a. 対象となるコーパスのデータを読み込み，発話を抽出した上で，
b. 書き起こしに用いられている種々の記号 (e.g., .+, [/])，および特殊文字 (e.g., ↗, ≡, °) を全て削除し，[2]
c. 文字表記を全て小文字で統一させた．
d. 発話の抽出に際しては，話者情報を表すヘッダー (e.g., "*S:") が付されているものを一つの「発話」としてカウントし，複数行に渡る発話は全て一つの発話として統合した．

各コーパスにおける前処理後の発話数と総語数を，ジャンル等の特徴と共に表 1 に示す．

次に，成文性の調査であるが，テキストデータのみから構造に関する概念である「成文性」を定量的に判定することは困難であるため，コーパスに付与されている統語解析データを利用することとした．尤も，統語解析済みのコーパスは Bradford Corpus と MICASE のみであったため，この両者のみの比較を行った．

[1] `https://ca.talkbank.org/access/bradford.html`
[2] CABank の "Special CA characters" ページ `https://ca.talkbank.org/codes.html` より抽出した．

CABank のコーパスにおける統語解析は依存構造 (dependency structure) を表すものであり，発話ごとに，他の単語との関係性を表す統語タグ (e.g., SUBJ, OBJ, PRED) が付与されている．文法的に適格な発話であった場合，root となる単語に ROOT というタグが付され．逆に文断片などの場合には，INCROOT というタグが付されるため，全発話中，ROOT というタグが付されている単語が含まれる発話がどれくらいの割合で存在しているかを計算すれば，「成文率」を算定することができる．以下に，INCROOT タグが付された発話のサンプルを MICASE を提示する:

(3) a. *S1: no but that's not what the +// (MICASE:mtg270sg049.cha)
b. *S2: some kind of control character (MICASE:mtg270sg049.cha)

調査の手順を以下に示す:

(4) a. 各コーパスの発話集合 U をランダムに並び替える (結果を U_R とする)
b. U_R から発話を一つずつ抽出し，その発話が 5 語以上の長さであれば，別の発話集合 T に加える
c. T の発話数が 100 になった時点で処理をストップし，T を対象データとして成文率 f を計算する
d. a-c を 100 回繰り返し，得られた f の値の平均 $\bar{f}$ を分析対象とする

(4b) において発話の選定に語数の基準を入れているのは，極端に短い発話は "yes" などの断片的発話である可能性が高く，結果に大きく影響を与える可能性があるための措置である．

なお，本稿の仮説の通りであれば成文性には「語り」であることが影響すると考えられるが，そのほかにも，発話のフォーマリティも関連する可能性が高い．その点，MICASE コーパスはアカデミックジャンルの話し言葉コーパスであり，日常会話などと比べるとフォーマリティが高いことが予想されるため，比較対象としては好都合である．ただし，MICASE には講義のようなフォーマリティの高いものから，相談やツアーなど比較的カジュアルなものまで幅広く含まれるため，特にフォーマリティの高いと思われるセミナー (seminars) と大規模の講義 (lel) のサブコーパスを別途比較対象として選定した．

調査の結果を表 2 に示す．本稿の予測 (1) の通り，語りデータである Bradford Corpus はの MICASE よりも相当に高い成文率を示した．seminars と lel に関しては，予想通り高い成文率を示しているが，Bradford Corpus の値よりはやや下回る．これが有意な差かどうか，平均の差の検定である Mann-Whitney の U 検定によって検証した結果，Bradford Corpus と seminars では $U = 6863.5$, $p = 2.24e-06$，lel では $U = 8194.5$, $p = 2.16e-15$ となり，Bradford Corpus が統計的にも有意に成文率が高いことが確認された．

表 **2**: 各 (サブ) コーパスの平均成文率 ($\bar{f}$) と平均発話長 (語数) 及び 5 語以上の発話が占める全体の割合 (5+)

コーパス	$\bar{f}$	平均発話長	発話数	総語数	5^+	コーパス	$\bar{f}$	平均発話長	発話数	総語数	5^+
Bradford	0.95	10.18	2893	22268	0.63	seminars	0.93	17.7	12022	132067	0.58
MICASE	0.76	14.11	151389	1602977	0.56	lel	0.91	19.31	16736	249691	0.75

ただし，今回語りデータとして用いた Bradford Corpus は会話ではなく独話における語りであることから，今回の調査結果が「語り」であることではなく，「独話」であることに由来している可能性は否定しきれない．また，話し手がアフリカン・アメリカンに限定されていることから，言語変種上の差異が影響している可能性も考えられる．今後は語りデータの拡充，及び，同一のコーパス内でも「語り」とみられる部分とそうでない部分など，より近い条件での比較を行うことでさらなる検証を進めて行きたい．

参考文献

Carrigan, E. M., & Coppola, M. (2017). Successful communication does not drive language development: Evidence from adult homesign. *Cognition*, *158*, 10–27.

Croft, W. (2007). The origins of grammar in the verbalization of experience. *Cognitive Linguistics*, *18*(3), 339–382.

Du Bois, J. W. (1985). Competing motivations. In J. Haiman (Ed.), *Iconicity in syntax* (pp. 343–365). Amsterdam: John Benjamin.

Dunbar, R. (1998). *Grooming, gossip, and the evolution of language.* Cambride, MA.: Harvard University Press.

Everaert, M. B., Huybregts, M. A., Chomsky, N., Berwick, R. C., & Bolhuis, J. J. (2015). Structures, not strings: linguistics as part of the cognitive sciences. *Trends in cognitive sciences*, *19*(12), 729–743.

Goldin-Meadow, S., & Feldman, H. (1977). The development of language-like communication without a language model. *Science*, *197*(4301), 401–403.

Kolodny, O., & Edelman, S. (2018). The evolution of the capacity for language: the ecological context and adaptive value of a process of cognitive hijacking. *Philosophical Transactions of the Royal Society B: Biological Sciences*, *373*(1743), 20170052.

MacWhinney, B., & Wagner, J. (2010). Transcribing, searching and data sharing: The clan software and the talkbank data repository. *Gesprachsforschung*.

Simpson, R. C., Briggs, S. L., Ovens, J., & Swales, J. M. (1999). *The michigan corpus of academic spoken english.* Ann Arbor, MI: The Regents of the University of Michigan.

Stout, D. (2011). Stone toolmaking and the evolution of human culture and cognition. *Philosophical Transactions of the Royal Society B: Biological Sciences*, *366*(1567), 1050–1059.

Wray, A. (2002). *Formulaic language and the lexicon.* Cambridge: Cambridge University Press.

対人関係の観点から見た依頼に用いる可能形式の発話効果

李　娜(北海道大学大学院)

1. はじめに

日本語の可能形式は可能の意味のみならず,「そこの本,取れる？」のように依頼に解釈することもできる.可能形式を用いることで間接的に依頼を表すことは通言語的に見られる現象である.例えば,英語を例として Can you pass the salt という表現は可能の意味を表すより,慣習的に依頼を行う言語行為になっている.Brown&Levinson(1987) は,このような間接的な依頼行為について,Be conventionally indirect という 1 つの FTA (face-threatening acts) を緩和するストラテジーとしてあげている.日本語の場合について,渋谷(2005)によれば,依頼はネガティブ・フェイスを潰す行為であり,可能形式を依頼の用法に用いられる動機が丁寧さにあると述べている.しかしながら,日本語の可能形式は英語ほど慣習化が進んでおらず,依頼に解釈する制約をまず明らかにする必要がある.

また,日本語において行為要求である依頼を行う言語形式が複数存在する.例えば,「てください」「てくれる/てもらう・ていただく」の形式がある.これらの表現は動作に関する要求の度合いが異なるが,発話目的の観点から行為要求という点に共通している.したがって,このように同様な発話目的いわゆる,類似している機能を有している異なる形式の間の差異を明らかにする必要がある.さらに,日本語に関する文体の特徴を考えると,各形式と普通体・丁寧体との組み合わせによって発話効果も異なると思われる.

これらの問題点を踏まえて,本発表は以下の 2 つの課題を立てる.

① 可能形式が依頼に用いられる際に,可能本来の意味との関係を明らかにする.
② 「てくれる/てもらう・ていただく」「てください」と比較しながら,依頼に用いられる可能形式の発話効果について論じる.そのうち,文体との関係を考慮し,権限や距離の側面から分析を進める.

2. 先行研究

我々は日常生活の中,効率良く会話すると同時に,会話参加者の間の人間関係を保つ必要がある.Brown&Levinson(1987) はこのような現象について,ポライトネス理論を提案した.ポライトネス理論において,フェイスは 1 つ重要な概念として議論されてきた.Brown&Levinson の枠組みでは,全ての言語行為は潜在的にフェイスを侵害する可能性があると理解できる.このような FTA を回避するため,多様なストラテジーが提示されている.本発表で扱う研究対象である依頼を表す言語行為は,未来に起きる相手が行う動作に関与するため,相手のネガティブ・フェイスを侵害することとなる.相手のネガティブ・フェイスを補償するネガティブ・ポライトネス・ストラテジーの内,可能形式を用いて間接的に依頼を表す表現は「習慣に基づき間接的であれ」と「質問せよ,ヘッジを用いよ」の 2 つのストラテジーに関わると思われる.Brown&Levinson(1987)によれば,慣習的間接性は「間接的にいうことによって相手に「逃げ道」を与えてやりたいという欲求」と「オン・レコードで事を成り遂げたいという欲求」の衝突をコード化している.また,発話内効力のヘッジとして機能していると述べている.

日本語における可能形式が依頼に用いられる動機を丁寧さに裏付けられることは確かに Brown&Levinson(1987)で提唱しているストラテジーに一致している.しかしながら,丁寧さという概念は相対的なものであり,ありゆる場面で丁寧さに解釈することが難しい.さらに,可能形式は全ての場面では依頼を表せるわけではない.例えば,職場では目上の人に対して,冒頭で示した「そこの本,取れる？」を発すると,不適切な発話となってしまう.潜在的にフェイスを侵害するよりは,

発話者の間の距離や権限を無視しており，意図的に相手のフェイスを侵害するイポライトとなる．このように，可能形式が依頼を表す際に FTA の深刻度に関わる要素である距離・権限と関連付けて議論する必要がある．したがって，本発表はポライトネスの観点のみならず，他形式の使用と比較しながらインポライトネスの概念を導入し分析を行う．次節から，可能形式が依頼に用いられる用法と可能との関係を検討したうえで，可能形式の発話効果を考察する．

3. 可能の意味との関係

可能形式が表す意味は，大きく「能力可能」と「状況可能」に分けることが多い．可能形式が依頼を表す場合，当該可能形式が担う可能の意味は状況可能ということが指摘されている（渋谷，2005）．しかしながら，例(1)は「晴れた日なら綺麗な写真が撮れる．」という状況可能を表す平叙文に対する疑問文であるが，聞き手の能力について尋ねる能力可能にも解釈できる．すなわち，疑問文において能力可能と状況可能の区分が難しい．さらに，例(1)は依頼に解釈しにくい．一方，例(2)と例(3)において表面上は聞き手の能力を尋ねているが，「取る」や「行く」が一般的に誰でも有している能力であるため，(2)は「手が届くか」の状態を聞いており，(3)は「今，行ける状態」かどうかについて確認している．つまり，この 2 つの発話場面において，聞き手に関する能力が明らかに存在しており，話し手は聞き手が可能の状況にいると推定し，可能であれば，「取ってほしい，行ってほしい」という依頼の意味が成立する．このように，動作主である聞き手に関する能力が明確な場合では，状況を確認することで依頼の代行となる．このような依頼は即時的な要求であり，発話状況に強く依存する．動作主が能力を有していることが不明な場合は，能力可能の確認が優先されると考えられる．

(1) 晴れた日なら綺麗な写真が撮れる？
(2) そこの本，取れる？
(3) 今，レジに行ける？

4. 可能形式の選択による発話効果

3 節では日本語における可能形式が依頼を表す際の制約条件を見てきた．本節では，依頼を表す他形式と比較しながら，可能形式の発話効果について議論する．

4.1 可能形式の使用特徴

可能形式が依頼を表す場合では，疑問文を使わないといけない．話し手は自分の意図を明示しないままで聞き手について，可能であるかどうかの情報を確認することによって依頼を行う．(4)のように「行くことが可能であれば，行って欲しい」という依頼の解釈が成立する．つまり，直接に依頼するのではなく相手の状況を尋ねることで聞き手に自分の意図を読み取ってほしいという意味を伝達している．さらに，疑問文の使用することで，聞き手にNOと答えた選択肢を与えることができる．このように，聞き手が行う動作に関するネガティブ・フェイスへの侵害を回避することができる．これで，従来のように丁寧さという理由に帰着するのであろう．しかし，聞き手の能力を聞くことは，聞き手のポジティブ・フェイスを脅す可能性が高いと思われる．このように相手の領域に触れることによって，話し手と聞き手との間の距離を縮める効果がある．

(4) 今，レジに行ける？ （＝ (3)）

そのため，権限の観点から見れば，上位者から下位者に可能形式を用いて依頼を表すことが可能であるが，下位者から上位者に対する場合は使いにくいと考える．また，文体の選択によって発話効果も異なってくる．丁寧体と普通体の使用は話し手と聞き手との間の距離を影響することが言われている（日本語記述文法研究会(2003)，滝浦(2016)など）．すなわち，上位者は丁寧体を使うと，聞き手との間に距離を置くこととなる．このように，遠隔化の機能によって聞き手への敬意を示す

ことができる. また, 普通体が使われると, 話し手と聞き手の間の距離が近くなり, 近接化の効果を帯びる.

我々の日常生活では, 権限は常に存在するわけではない. 上下関係以外に親疎関係もある. 親しい関係において依頼を表す際に, 目下の人は目上の人と同様の言語表現を選択することが可能である. 例えば, (5) のように家族の間の発話であれば, 人間関係に関する制約は比較的に少ない. ただし, 文体によって発話効果が異なる.

(5) あそこの塩, 取れる？

4.2 他形式との比較

本発表では, 可能形式以外に依頼を表す形式として「てください」, 「てくれる/てもらう・ていただく」の三種類の形式を取り上げる. 「てください」は純粋な依頼というよりも, 立場的ないし業務上の権限がある「命令」や「指示」の丁寧な表現, また金銭を介して「注文」における指定などに用いられる形式であると言われている（近藤・姫野, 2012）. オン・レコードであからさまな命令形を使用することを避けて, 慣習的な「てください」を用いることで聞き手のネガティブ・フェイスへの侵害を緩和することができる. 権限に関わる関係において, 上位者から下位者に対して, 中立的な形式として捉えられるであろう. しかし, 「てください」はオン・レコードに近い慣習的形式であるため, 話し手と聞き手との距離は保っている. 同じ平叙文である(7)は恩恵表現を使う例である. 「てもらう・ていただく」の形式を用いて話し手への恩恵を明示することで, 聞き手への配慮を表している. そこで聞き手のネガティブ・フェイスへの侵害を緩和できると考えられる. また, 相手の恩恵を言及することで相手のことを認めると理解でき, 聞き手のポジティブ・フェイスに対するポジティブ・ポライトネスのストラテジーとして捉えられる. つまり, (6)のような中立的な表現に比べ, (6)はより配慮した言語表現である. しかし, 下位者がこのような平叙文を使って上位者に対して明確的に依頼を示すことは難しい.

(6) レジに行ってください.
(7) ちょっとレジに行ってもらう. /いただきく.

平叙文に比べ, 疑問文を用いて依頼を表すとより丁寧になるであろう. 疑問文の使用は, 聞き手にその行為をしない選択肢を与えることができる. このように, 平叙文より聞き手のネガティブ・フェイスへの侵害を緩和するストラテジーとして機能している. しかしながら, 以下の例で示すように, 疑問文は「てもらう・ていただく/てくれる」「可能形式」の2種類の形式と共起できる. そのうち, 恩恵表現と可能表現と異なる点は, ポジティブ・フェイスへの効果である. 恩恵表現が相手のポジティブ・フェイスを充足する機能があり, 可能表現は聞き手のポジティブ・フェイスを侵害する可能性がある. そして, 可能表現は自分の意図を明示しないことで聞き手に行為を要求している. また, 恩恵表現である「てくれる」と「てもらう・ていただく」について, 両者の主語が異なる. 滝浦(2016)によれば「日本語は, 敬語の「意味論」が遠隔化であるように, なるべく相手に触れたくない言語だから, 相手が主語の場合, 言わなければ触れずに済むが, 言えば必ず触れてしまう」. 逆から考えれば, 「てくれる」を用いて相手を触れることによって話し手と聞き手との間の距離を縮めることができる. この点は可能表現と共通している.

(8) 今, レジに行ってもらえる？/行っていただける？
(9) 今, レジに行ってくれる？
(10)今, レジに行ける？

権限の側面から見ると, 上位者は下位者に対して各ストラテジーを自由に選択できる一方, 下位者の選択肢が限られている. 以上であげた表現のうち, 下位者が選択できるのは恩恵表現にある「てもらう・ていただく」の形式であり, さらに丁寧体の使用が一般的である.

4.3 インポライトネスとしての解釈

4.1 節では可能形式が依頼を表す場合の使用状況を確認してきた. 上下関係において, 下位者から上位者に向けて, 可能形式が使われると本来保つべきである距離はなくなり, さらに聞き手のポジティブ・フェイスを侵害する可能性もある. このように, 中立的な形式よりインポライトとして捉えられるため, 使用場面が限られていると思われる. また, ポライトな形式を使っているのに, インポライトネスの解釈になる場合もある. 例えば, 次の例(10)である. (10)は, 丁寧に依頼を表している. しかし, 仲が親しい親友の間に, 敬語かつ丁寧体の使用により遠隔化の効果が生じる. この場合は, 冗談や皮肉の 2 通りの解釈がある. 皮肉の意味を帯びるとやはりインポライトネスとなる. このように本来の関係にある中立的な用法から逸脱したもののうち, 敬語の使用によりインポライトネスに解釈する場合もある.

(11)あそこの塩, 取っていただけますでしょうか.

5. まとめ

以上では, 可能形式が依頼を表す場合の発話効果について議論してきた. 冒頭で設定した 2 つの課題に関する考察結果は以下の通りである.

① 可能形式が依頼に用いられる際に, 可能本来の意味との関係
動作主である聞き手に関する能力が明確な場合において, 表面上は聞き手に能力を尋ねているが状況を確認することによって依頼を行う. このような依頼は即時的な要求であり, 発話状況に強く依存する. 動作主が能力を有していることが不明な場合は, 能力可能の確認が優先されると考えられる. 依頼に解釈しにくい.

② 他形式と比較し, 可能形式の発話効果
可能形式が依頼を表す際に, 話し手は自分の意図を明示しないままで依頼を行う. 聞き手が行う動作に関するネガティブ・フェイスへの侵害を回避することができる. しかしながら, 聞き手の能力を聞くことは, 聞き手のポジティブ・フェイスを脅す可能性が高いと思われる. そのため, 上位者から下位者へ依頼する場合, このように相手の領域に触れることによって, 話し手と聞き手との間の距離を縮める効果がある. さらに, 普通体の選択によってより近接化の効果が見られる. そして, 下位者から上位者へ依頼する場合, 可能形式を選択するとインポライトネスとなる可能性が高いため, 恩恵表現の「てもらえる・ていただく」の丁寧体を選ぶのは一般的である. また, 親疎関係において, 親しい関係であれば依頼を表す際に, 目下の人は目上の人と同様の言語表現を選択することができる. ただし, 文体によって発話効果が異なる. 仲が親しい親友の間に, 敬語かつ丁寧体の使用により遠隔化の効果が生じるため, 冗談や皮肉の 2 通りの解釈がある. 皮肉の意味を帯びるとインポライトネスの解釈となる.

参考文献

近藤安月子・姫野伴子(2012). 「日本語の論点 43―「日本語らしさのナゾが氷解する」」研究社

渋谷勝己 (2005). 「日本語の可能形式にみる文法化の諸相」『日本語の研究』 1-3 32-46

Jonathan Culpeper (2011). *Impoliteness : Using Language to Cause Offence.* Cambridge University Press

滝浦真人(2016). 「社会語用論」加藤重広・滝浦真人(編)『語用論研究法ガイドブック』77-103 ひつじ書房

日本語記述文法研究会(2003). 『現代日本語文法 4 第 8 部モダリティ』くろしお出版

Brown Penelope and Stephen C. Levinson(1987) *Politeness: Some universals in language usage.* Cambridge University Press

依頼会話における両話者の心的状態の変化過程
－不快感の発生と変容を焦点に－

滕越（東京大学大学院生）

1　はじめに

依頼は，Brown & Levinson (1987) のポライトネス理論において，本質的に相手のフェイスを侵害する言語行為とされ，中間言語語用論や対照語用論分野での研究の蓄積が進んでいる．これらの研究では，異なる言語間で用いられるストラテジーの違いが焦点であり，その違いが話者の不快感を生むことがあるため，特に自分の母語と異なる言語で依頼をする際には語用論的転移に気を配るべき，という提言がなされていることが多い．

一方で，実際の会話参加者の心の動きに焦点を当て，依頼や断りの過程において不快感がどのように生じ，変容しているのかを明らかにしようとする研究は少ない．そこで本研究では依頼会話の両話者（依頼主体，依頼の受け手[1]）へのインタビューを分析することによって，1. 会話の進行に伴う話者の心的状態の変化，及び 2. 不快感の種類及び不快感が生じた際の両話者の心的状態の特徴を明らかにすることを目的とする．

2　先行研究

Brown & Levinson (1987) のポライトネス理論において，依頼は，本質的に，ネガティブ・フェイス（自分の行動を他者から邪魔されたくないという欲求）を侵害する行為であり，依頼の否定的な反応である断りは，本質的にポジティブ・フェイス（自分の欲求が少なくとも何人かの他者にとって好ましいものであってほしいという欲求）への侵害行為とされている．依頼やそれに伴う断りは，フェイス侵害の度合いが高く，ミスコミュニケーションや不快感を招きやすいとされており（Beebe *et al.*, 1990; 猪崎, 2000; 張, 2013 など），多くの研究の対象となっている．

これらの研究の多くは，あらかじめ会話の流れや結果が指定されている談話完成テストによって収集されたデータを用いて，ある言語で典型的・平均的に使用されるストラテジーを明らかにし，ほかの言語との比較を目指した対照研究である．日本語母語話者の依頼や断りは，英語や中国語などの言語と比べ，ネガティブ・フェイス・ストラテジーを重視するとされており，具体例としては，謝罪が多い（Beebe *et al.*, 1990; 国立国語研究所, 2006; 李, 2013），間接的な話法を用いる（国立国語研究所, 2006; 李, 2013），依頼の先行発話をよく用いる（猪崎, 2000; 柳, 2012）などの特徴があると指摘されている．

一方で，言語行為への評価や，言語行為に対する意識に焦点を当てた研究では，ある言語において典型的と認識されている言語表現やスタイルが，すべての場合において高く評価されるとは限らない，という結果が提示されている．例えば，日本語母語話者が，日本語の典型的なスタイルとされている間接的な話法による受諾や断りを必ずしも高く評価していない（国立国語研究所，2006），日本人英語学習者が想定する典型的な英語での断り（直接的で主張的な方略）が，必ずしも母語話者によって高く評価されない（古村，2011），といった研究結果が報告されている．

これらの先行研究から，言語表現やストラテジーが「典型的かどうか」と，「不快感が生じるか」を同列に扱うことはできないことがわかる．よって筆者は，依頼研究において暗黙裡に前提となっている「不快感」に改めて焦点を当て，依頼の過程での両話者の心的状態の変容をモデル化し，不快感が生じた際の両話者の心的状態の特徴を明らかにすることを目指す．なお，滕（2020, 印刷中）では，依頼の受け手の不快感の発生と変容について，相手の発話を受けてから自らの発話をするまでに，「発話への解釈→発話への評価→評価の調整」という心的状態変化のプロセスを経験し，相手の性格，相手との関係性，相手から受ける発話等が受け手の話者の不快感の発生を回避する要因であると論じている．本稿は，さらにそこから範囲を広げ，依頼主体及び受け手の両話者に焦点を当て，依頼における不快感をより全面的にとらえることを目標とする．

3　本稿の目的

以上を踏まえ，本稿では以下の二点を目的とする．

---

1 依頼主体は依頼を行う側の話者，依頼の受け手（以下，「受け手」と表記）は依頼を受ける側の話者を指す．また，「話し手」，「聞き手」という用語を用いる場合，依頼という言語行為での役割ではなく，発話をする話者（話し手），発話を受ける話者（聞き手）を指す．

1. 会話の進行に伴う話者の心的状態の変化を図式化する；
2. 依頼における話者の不快感を分類し，それぞれのタイプの不快感が生じた際の両話者の心的状態の特徴を解明する．

なお，本稿においては「不快感」を，依頼の過程で生じる様々な負の感情を包括的に指す用語として用いる．

4　研究方法

4.1　データ収集方法

本研究のデータは，オープン・ロールプレイ（役割と場面のみを指定し，会話のプロセスと結果は事前に決められていないロールプレイ，Félix-Brasdefer, 2010, p. 47, 筆者訳）及び刺激再生法によるアンケート，インタビューを通して収集した．調査協力者は，日本語を母語とし，実際に友人同士である大学（院）生 20 名・10 ペア（男女各 5 ペア）であった[2]．

具体的には，まず，会話の目的が両話者間で異なる【課題協力】，【エアコン】，【引っ越し】[3]という 3 つの場面でロールプレイ音声を収録し，その直後に，収録したロールプレイの音声を流しながらアンケートとインタビューを行った．本稿では，不快感の有無の判断に，アンケートの「会話全体を振り返ってどの程度不快に感じたかの 5 段階評価」データを用いた．インタビューでは，先行研究において依頼会話で典型的とみなされる構成要素や，それぞれの会話の特徴的な言語表現などについて，両話者にロールプレイ中の発話理由や発話を受けての心の動きを尋ねた．また，与えられた役割や場面に関して，場面設定への理解や感じたことなどを質問した．以下，本稿では主に，インタビューデータの分析結果を報告する．

4.2　データ分析方法

データ分析は，佐藤（2008）を参考に，話者の語りからコードを立ち上げていく帰納的コーディング法を採用した．帰納的コーディング法とは，既存の理論的枠組みから導かれるコードではなく，データそのものから浮かび上がるコードを用いたコーディングである（佐藤, 2008, p. 91 より，筆者が再構成）[4]．また，宇佐美（2014）を参考に，1 つの切片（インタビューデータを一定の意味のまとまりの下で切り分けたもの）に対し，「着目点（依頼にまつわるどのような点についての言及か）」及び「心的状態（着目点に対してどのような心の動きが生じているか）」の主に 2 つの角度からコーディングを行った[5]．コーディングの過程では，「会話の流れに伴う心的状態の整理」及び「不快感が生じた際の両話者の心的状態の特徴の解明」という 2 つの目的を鑑み，随時コードシステムの調整を行った．コーディング例を以下に示す．

例 1　【Ka エアコン】より

なんか，**笑いながら「大丈夫」とか言ってて**．本当に心配だったら，「大丈夫，エアコン下げるの止めようか」みたいな事言うと思うんですけど，なんか，「大丈夫（笑）」って言いながら下げたので，**心配していないように聞こえました**．

コーディング[6]：

［着目点：相手の発話方式（笑いながらの発話）；心的状態：解釈・他者評価（嘘っぽい，自分への配慮が不十分）］

5　研究結果

5.1 コードシステムの全体像

検討と調整の結果，依頼会話における話者の心的状態を説明する三層構造のコードを付すことができた．紙幅の関係上，上位二層までのコードシステムの構造を図 1 に示す．なお，上位二層のカテゴリーは依頼主体と受

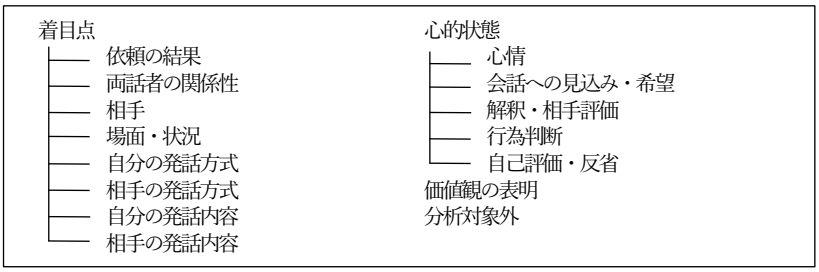


図 1　コードシステム（中カテゴリーまで）

---

[2] 以降，話者を区別する際，ペア名を表すアルファベット大文字 1 桁と，受け手（a）か依頼主体（b）かを表すアルファベット小文字 1 桁の組み合わせで表示する．例えば，ペア C の受け手を，「Ca」で表す．

[3] 具体的には，【課題協力】依頼主体：2 日以内に 2 時間かかる課題の協力を依頼する，受け手：指定された期間は忙しい；【エアコン】依頼主体：夏・寒がりの相手にエアコンの温度を下げることを依頼する，受け手：今エアコンの設定温度がちょうどよい；【引っ越し】依頼主体：以前約束した引っ越しの依頼について詳細を説明する，受け手：指定された日時に予定が入ってしまった，の 3 場面である．

[4] なお，本稿におけるコーディングでは，基本的に帰納的コーディングの方法を用いるが，理論的枠組みの援用を完全に排除するものではない．後述の「着目点」と「心的状態」を二分する構造は宇佐美（2014）を参照した．コードのキーワードとなっている「負担度」，「謝罪」，「妥協案」などは，ポライトネス理論や対照語用論の研究に見られるキーワードである．

[5] コーディングは，質的データ分析の補助ソフトウェア「MAXQDA2020」を用いた．また，以上の 2 つの観点からコーディングできない切片については，「価値観の表明」あるいは「分析対象外」とコードを付した．「分析対象外」のコードを付したものは，ロールプレイというデータ収集方式に対するメタ的な発言などであり，全体の約 5.2%であった．

[6] 最も階層が上位のコードを大カテゴリー，次の階層のコードを中カテゴリー，最も下位の階層のコードを小カテゴリーと称す．また，付したコードについて論じる際，［大カテゴリー：中カテゴリー（小カテゴリー）］，［中カテゴリー（小カテゴリー）］，［大カテゴリー］，［中カテゴリー］，［（小カテゴリー）］という表記を用いる．

け手に同じコードを付したが，よりデータに密接に関連する小カテゴリーには，依頼主体と受け手で異なるコードを付しているものがある．

5.2 会話の進行に伴う話者の心的状態の変化

次に，会話の進行に伴って，両話者の心的状態がどのように変化していくかについて，同一の着目点に対し，両話者にそれぞれどのような心的状態が生じているのかを考慮しながら整理した．その結果，図2に示すようなモデル図を作成することができた．図2は以下の流れを表している．

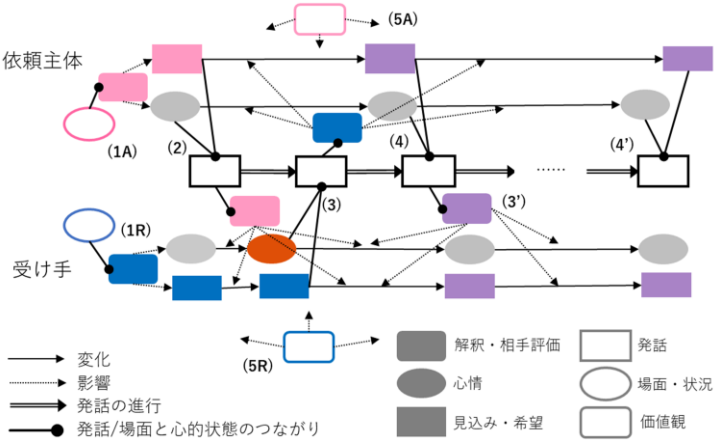


図2　話者の心的状態の変化のモデル図

(1) 依頼主体(A)及び受け手(R)は発話前に，**場面状況**への**解釈・評価**を行う．その際，各々会話に対して一定の**見込み・希望**を抱くと同時に，特定の**心情**が生じる（依頼主体：図2の1A，受け手：同1R）；
(2) 依頼主体が(1)で生じた心情や見込み・希望を伴って発話する（図2の2）；
(3) 受け手が，依頼主体の発話を受けて発話をする．その間，依頼主体の発話の一部に**着目**し，**解釈・相手評価**を加え，**当初の心情や見込みの変容**を変えることがある．発話後自らの発話に対し，**自己評価・反省**を行う場合もある[7]（図2の3）；
(4) 同様に，依頼主体も，受け手の発話を受けて発話をする間に，受け手の発話への着目，解釈・相手評価を経て，心情や見込みの変容が起こる．自らの発話に対し，自己評価・反省を行う場合もある（図2の4）；
(5) (3)と(4)のプロセスが会話の終結まで繰り返される．また，話者の**価値観**がプロセス全体に影響する（図2の5A，5R）．

5.3 不快感の種類及び不快感が生じた際の両話者の心的状態の特徴

それでは，依頼会話における不快感はどのように分類できるのだろうか．本節では，不快感発生の原因に着目し，**場面状況による不快感**と**相互行為による不快感**の2つのタイプの不快感について両話者の心的状態の特徴を論じる[8]．

5.3.1 場面状況による不快感

場面状況による不快感とは，［場面・状況］が着目点となって，会話開始以前に生じている不快感を指す．例として図3【ペアG　引っ越し】では，受け手Ga氏がGb［場面・状況］の［解釈・他者評価（自分に責任がある）］を行った結果，［(申し訳ない)］という不快感が生じる．その後，やり取りの中で両話者の［見込み・希望］が，［(自分の目的達成)］のみから，［(自分と相手両者の目的達成)］へと調整される．最終的に，両者の目的は納得のいく形で達成されるが，［場面・状況］によって最初にGa氏に生じた［(申し訳ない)］という不快感は会話の終結まで消えることなく残ってしまう．

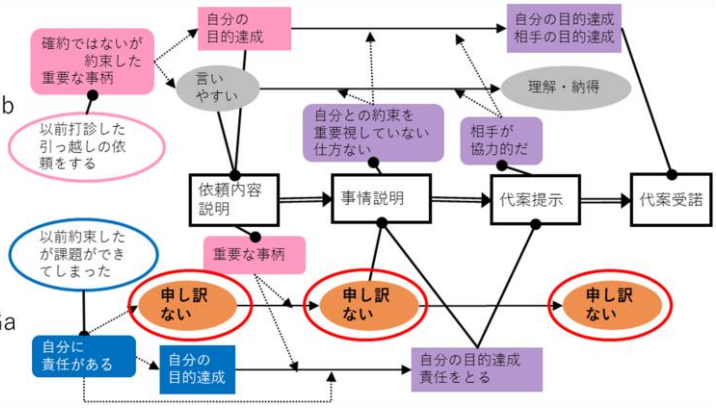


図3　【ペアG　引っ越し】会話における両話者の心的状態の変化

5.3.2 相互行為による不快感

一方，**相互行為による不快感**とは，相互行為において発生したこと[9]が契機となって生じる不快感を指す．例として図4【ペアD　課題協力】では，受け手Da氏が，相手の依頼に対し，自分が忙しいという［(事情説明)］をし，［(相手の目的達成)］も考慮して［(妥協案提示)］を行う．対して，依頼主体のDb氏は，自らの［会話の見込み・希望（自分の目的達成)］に沿って相手の発話を解釈し，［(自分の目的達成)］のために相手に［(代案要求)］をする．その発話がDa氏に［(自分の事情

[7] ［自己評価・反省］について，これらの自己評価や反省はインタビューによって引き出されたものである可能性があり，必ずしも会話時に行われていたとは言い難く，図の複雑化を避けるため，図2に加えなかった．
[8] 本稿で例示するのは2例とも受け手に不快感が生じた例であるが，依頼主体も類似したプロセスをたどる．
[9] 具体的には，［相手の発話方式］，［自分の発話方式］，［相手の発話内容］，［自分の発話内容］，［依頼の結果］という5つの中カテゴリーへの着目が契機となって生じる不快感を指す．

への配慮不足)］と解釈され，［(驚き・戸惑い)］という不快感を生む．最終的に Db 氏の目的は達成されるが，Da 氏の不快感は会話の終結まで解消されない[10]．

相互行為による不快感が生じている例では，話し手の発話への［見込み・希望］と，聞き手の［解釈・他者評価］の間に不一致が生じていることが多かった．提示した例のほかに「依頼を断る理由の説得力に対する評価の両話者間での違い」や「謝罪なしに解決策を提示したことに対して配慮が足りないと解釈した行為主体と，相手の目的達成を見込んで発話していた受け手の違い」などが観察された．

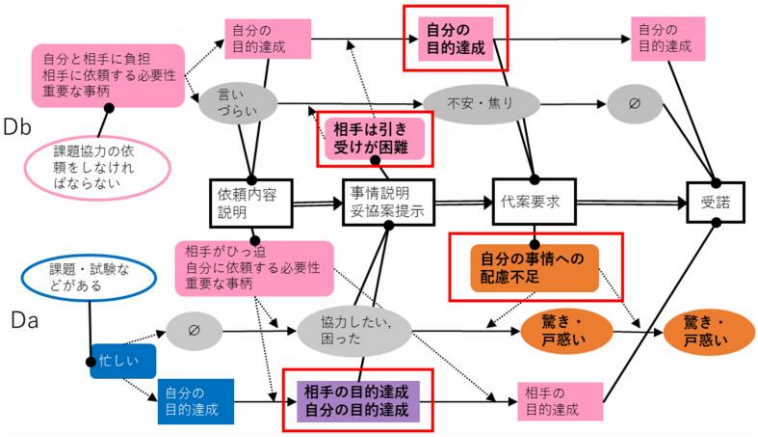


図4　【ペアD　課題協力】会話における両話者の心的状態の変化

6　おわりに

本稿では依頼における両話者の不快感に焦点を当て，会話の進行に伴う話者の心的状態の変化を図式化し，不快感が生じた際の両話者の心的状態の特徴を明らかにすることを目的として，依頼における話者の心の動きに関するインタビューデータのコーディング・分析を行った．その結果，両話者は会話前に［場面・状況］の［解釈・評価］を行うことで会話への［見込み・希望］や［心情］を抱き，会話の進行中に相手の発話に対し［解釈・他者評価］を行うことで，当初の［見込み・希望］や［心情］を調整していることが分かった．また，依頼会話における不快感は，「場面状況による不快感」と「相互行為による不快感」に分類できた．さらに，相互行為による不快感が生じている例では，話し手の発話への［見込み・希望］と，聞き手の［解釈・他者評価］の間に不一致があることが明らかになった．

本稿では十分に論じることができなかったが，発話への［見込み・希望］や［解釈・他者評価］の不一致の背後には，両話者間での価値観の違い（目的達成重視か配慮重視か，相手重視か自分重視か，など）があるものと考えられる．この点に関しては今後さらに考察を深めていきたい．

参考文献

Beebe, L. M., Takahashi, T., & Uliss-Weltz, R. (1990). Pragmatic transfer in ESL refusals. In Robin Scarcella, Elaine S. Andersen, and Stephen D. Krashen. (eds.) Developing communicative competence in a second language. New York: Newbury House, pp. 55–73.

Brown, P., & Levinson, S. C. (1987). *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge, MA: Cambridge University Press.

Félix-Brasdefer, J. (2010). Data collection methods in speech act performance. In A. Martínez-Flor and E. Usó-Juan. (eds.), Speech act performance: Theoretical, empirical and methodological issues. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company, pp. 41–56.

古村由美子 (2011). 成人バイリンガルの「断り」場面における対人葛藤対処方法に関する研究―英語母語話者は日本人英語話者の対処方法をどう評価するのか―　花書院.

猪崎保子 (2000). 接触場面における「依頼」のストラテジー ―日本人とフランス人日本語学習者の場合―　世界の日本語教育　日本語教育論集, 10, 129–145.

国立国語研究所 (2006). 言語行動における「配慮」の諸相　くろしお出版.

佐藤郁哉 (2008). 質的データ分析法　新曜社.

滕越 (印刷中). 依頼会話における不快感の発生と変容のプロセス：会話の諸特徴，話者の心的状態の変化からの考察　待遇コミュニケーション研究, 17.

宇佐美洋 (2014).「非母語話者の日本語」は，どのように評価されているか―評価プロセスの多様性を捉えることの意義―　ココ出版.

柳慧政 (2012). 依頼談話の日韓対照研究: 談話の構造・ストラテジーの観点から　笠間書院.

張雪梅 (2013). 日本語と延辺朝鮮語における依頼談話の展開について: 談話構造とストラテジーの考察を中心に　広島大学博士論文.

[10] 図4の例では観察されないが，相互行為による不快感が生じている例では，会話の進行に伴って不快感が解消される例もある．場面状況による不快感では，会話の進行に伴って不快感が解消される例はまれであった．本稿では紙幅の関係で論じないが，会話の進行に伴う不快感の解消の有無も，相互行為による不快感と，場面状況による不快感の違いと考えられる．

LINEの依頼におけるコミュニケーションの特徴
―メディア特性と状況による異なり―

三宅　和子(東洋大学)

1. はじめに

近年利用が急増しているSNSの中でも顕著な伸びをみせているのがLINEである．総務省情報通信政策研究所(2019)の調査によると，20代の若者の98.1%と，ほぼ全員が利用しているが，近年は熟・高年層の伸びもめざましく，全年代平均でも82.3%となっている．このように，日常的なコミュニケーションの大きな部分を，電子メディア，特にモバイル・メディアが担うようになっているが，そのコミュニケーションを言語学的に考察した研究は非常に少ない． LINEひとつを取っても，例を取り上げて特徴を指摘したり，スタンプに注目してその機能を考察したりするものが散見されるが，実証的に解明された研究はほんのわずかである．このような状況の中，携帯メールの登場以来20年を経過したモバイル・メディア利用の実態の言語的側面を注視し，現代的な課題の解明に資する研究の積み重ねが期待される．本研究は，語用論研究で頻繁に取り上げられ，携帯メールでも研究された「依頼」にテーマを絞り，LINE談話に現れる言語的特徴を質的・量的両面から分析している．LINE談話の特徴については三宅（2019）で指摘したが，今回は性差を軸に，トークに現れる依頼の談話パターン，トークの長さ，被依頼者の負担感，ヴィジュアル要素の使われ方について考えていく．

2. 研究の概要

本研究はLINE上で若者が取り交わした依頼の談話を対象とする．調査方法は，筆者のゼミの受講生たちが自らデータ収集に関わることを前提に，親疎，負担の軽重などの変数をコントロールしやすいロールプレイを選択した．依頼の負担が大きい場合は実際に相手の反応の様子が分かり，相手の出方によって交渉できる対面会話を選択するという意見が多かったため，昨今大学生が頻繁に行う「WEBアンケート調査に答える」というロールプレイを採用した．若者にとって最も自然な状況や内容でのロールプレイをめざし，相手に合わせて自然に依頼が行えるように文言や展開については任せ，依頼のやりとりが行われている間は，そのやりとりがデータとなることについては相手には知らせていない．依頼が承諾されるとURLが伝えられる．相手方がそこに行くと依頼のやりとり自体がデータになる旨が説明され，改めて調査協力の可否が問われる．協力する場合はフェイスシートの基本情報（男女、年齢、LINE使用歴，依頼に対する負担感など）に答えて調査終了となる。今回は依頼を受けた全員が協力を承諾した。こうして収集した依頼談話200件を、全体構造として開始部、主要部、収束部、終了部に分け、分析の単位として機能的要素を設け、コミュニケーション機能で分類した。

データ収集時期：2018年7月～10月
データ量：200件：調査者25名（女16名、男9名）が8名の相手に依頼
調査者・参加者年齢：21～23歳男女
親疎関係：親しい友人（男女）vs. あまり親しくない友人（男女）
依頼内容：ゼミの活動で若者のLINE使用に関して簡単なアンケートをすることになったので協力してほしい
負担差：選択方式で所要2～3分程度／自由記述式で所要10分程度

3. 調査結果と分析

3.1 依頼のパターン

トーク画面をみていると，対面やLINE上のおしゃべりのときと異なり，依頼を一気に行っている例が目につく（図1参照）．そこでここでは情報を吹出内にどのように配置して依頼を行っているかをみる．相手が承諾するまでの吹出と内容の配置のパターンをみると、以下のように，大きく「単発一気型」、「多発一気型」、「混合型」、「往還型」の４種に分か

れる[1]。

①単発一気型：一つの吹出で切り出し（挨拶/呼びかけなど）から依頼までを行い，相手から了承を得ているもの（図1）

②多発一気型：切り出し（挨拶/呼びかけなど）から依頼まで吹出を2つ以上分けて，相手からの反応を待たずに依頼を行い，相手から了承を得ているもの（図2）

③混合型（2種類）．③-1．混合単発一気型：最初に（挨拶や依頼の前置きなどの）相手との往還があるが，依頼部分は一つの吹出で行っているもの（図3）　③-2．混合多発一気型：（挨拶や依頼の前置きなどの）相手との往還があるが，依頼部分は複数の吹出に分けて相手からの反応を待たずに一気に依頼しているもの

④往還型：相手と複数回のやりとりや交渉を往還させて了承を得ているもの（図4）

200件のトークの内訳を表1に示す．①と②は一気型とまとめることができ，③も最初の挨拶や呼びかけなどのやりとりが終わると一気に依頼を行う型であるため，状況説明，依頼説明，補償，依頼などの要素が一気に一つの吹出内に詰め込まれるという意味で一気型に近い．①と②を合わせて全体の60.5%，③を加えると81.0%が一気型あるいはそれに近い形で依頼をしているということである．すなわち，LINEでは対面とは大きく異なり，相手の反応を待たずに一気に依頼するパターンが圧倒的に多いのである．その理由をフォローアップインタビューで聞いてみたところ，情報を小出しにして相手の反応を待つというやり方では話が終わらないところで相手が反応してきて，やりとりに時間がかかり煩雑になる上，無駄な憶測や心配を抱かせてしまう．一気に用事を述べるほうが効率的で相手にも配慮しているという回答が多かった．目前に相手がいる場合は様子や反応を踏まえて次を決めるがLINEの場合は異なる配慮と留意が必要であることが分かる．



図1．単発一気型



図2．多発一気型





[1] 三宅（2019）でも類似の考察を行っているが、今回は相手の承諾を得るまでにどのような吹出と内容配置のパターンをみたものである．

図3. 混合型（往還＋単発一気）　　図4. 往還型

表1. 相手が承諾するまでの依頼パターン（件）

1	単独一気型	46
2	多発一気型	75
3	混合型	41
4	往還型	38
合計		200

3.2 トークの長さ

1トークの平均吹出数と平均発話数を表1〜2にまとめた．Mは男性，Fは女性を表す．1トーク中の吹出数（表1）は最小で3〜4個，多いものは33個である．女性（特に女性同士）のほうが、男性よりも吹出数に個人差が大きい．また女性，男性ともに異性に対しては吹出数が少なくなる傾向がある．男性から女性へのトークで吹出数の個人差が最も少ない．1トーク中の発話数（表2）は最小で6〜7発話，最大で36発話である．女性同士の平均発話数が最も多いことが分かると共に，女性は相手の性の如何によらず男性よりも発話数に個人差が大きいことも分かる．女性，男性ともに異性に対しては発話数が少なくなる傾向がある．ここでも，男性から女性へのトークで発話数の個人差が最も少ない．

表1と表2を比較すると、男性は吹出数が女性とさほど変わらないのに発話数は少なめである．これは吹出に入っている発話が少ないということである．なお，今回は語数をカウントしていないために顕著に差が見えないが，男性の発話は感動詞「うん？」や「なに」など非常に短いものが多く，これらも1発話と数えているため，実際に画面で見ると，文字量の男女差はさらに大きい．

表1. トーク中の平均吹出数

関係	吹出数	吹出数の個人差
M-M	8.50	4〜23
M-F	8.31	3〜16
F-M	8.22	3〜27
F-F	8.73	3〜33

表2. 1トーク中の平均発話数

関係	発話数	発話数の個人差
M-M	11.31	6〜25
M-F	10.87	6〜19
F-M	11.73	6〜33
F-F	12.35	7〜36

表3. 吹出中の発話数平均

関係	発話平均／吹出平均
M-M	1.33
M-F	1.31
F-M	1.43
F-F	1.41

3.3 被依頼者の負担感

この調査では，「WEB アンケート調査に答える」というタスクを「選択式で所要 2〜3 分程度」と「自由記述で所要 10 分程度」として軽い負担，重い負担に分けて相手の負担の感じ方をみている．負担度の男女差をまとめたのが表4である(%)．

表4. 協力者が感じた負担度：性差(%)

関係 / 負担度	F-F	F-M	M-F	M-M
1	72.41	60.00	75.00	36.11
2	20.68	28.33	22.22	50.00
3	5.17	10.00	2.77	13.88
4	1.72	1.66	0.00	0.00
合計	99.99	99.99	99.99	99.99

負担感
1＝まったく負担を感じなかった
2＝あまり負担を感じなかった
3＝少し負担を感じた
4＝非常に負担を感じた

表4では，例えばF-Mの場合，女性から依頼された場合に男性が感じた負担度という見方をすることになる．女性は依頼主の性別によらずまったく負担に感じなかった人が大半であるが，非常に負担に感じた人も含まれており，負担度の感じ方に振れ幅が大きい．これに対し男性は，負担に感じる度合いが女性より高い傾向がある．特に男性からの依頼に対し

てはこの傾向が強い．この結果の判断は難しいところだが，男性同士のざっくばらんさから負担を感じやすいのかもしれない．

3.4 ヴィジュアル要素の使われ方

ヴィジュアル要素である絵記号（絵文字，顔文字，記号）とスタンプの使われ方を表5にみる．データの全体構造を開始部，主要部，収束部，終了部（詳細は三宅，2019参照）に分けて分析すると，絵記号とスタンプの使用のされ方に異なりがみられることが分かる（表中，「開始：絵」は「開始部で使用された絵記号数」，「開始：ス」は「開始部で使用されたスタンプ数」を表す．以下同様）．開始部では絵記号に比べてスタンプの使用は少ない．一方主要部では絵記号が頻繁に，配慮が必要な箇所で使われている（三宅，2019）．スタンプが最も多く使われているのは収束部である．絵文字を凌駕する数で使われているが，スタンプがサイズや表現性，動きの幅などにおいて絵文字を遙かに超えるインパクトをもつことを考えると，収束部におけるスタンプの使われ方は注目に値する．ここでは依頼者の感謝や相手が今後の予定を了解したときなどの後に非常に多く使われており，収束部におけるやりとりの終結を示す役割を担っているということができよう。

ここでも男女差をみておきたい．女性が圧倒的な数でヴィジュアル要素を使っている．男女の数が異なることを差し引いてもこれは変わらない．表5の右端に使用の平均を出しているが，女性は女性に対して最も多くヴィジュアル要素を使用しており，男性に対してはヴィジュアル要素使用が少なく抑えられている．一方男性のヴィジュアル要素使用は非常に少なく，特に男同士のトークには最も少なくなる．しかし女性に対してはヴィジュアル要素の使用が増加しており，この結果はケータイメール隆盛時のヴィジュアル要素使用と類似しており（三宅 2005 参照），興味深い．

表5．ヴィジュアル要素使用（件）

	開始：絵	開始：ス	主要：絵	主要：ス	収束：絵	収束：ス	終了：絵	終了：ス	計	平均
F-F	31	7	81	33	34	38	0	0	244	3.50
F-M	24	4	75	17	30	25	0	1	176	2.75
M-F	3	0	17	4	3	10	0	1	38	1.06
M-M	2	0	12	6	4	4	0	0	28	0.78
計	60	11	185	60	71	77	0	2	466	2.33

F-F64件，F-M64名，M-F36件，M-M36件

4. まとめ

以上概観したように，LINEにおけるコミュニケーションは対面のコミュニケーションとは様々に異なる側面がある．対面との最も顕著な違いは①イントネーション，リズム，ポーズ，声質といったパラ言語情報がない，②非言語情報がない，③タイムラグがあるといったことであろう．①と②の要素を補完するために絵記号やスタンプなどのヴィジュアル要素が利用されるとはよくいわれることだが，モバイル・メディアのヴィジュアル要素は対面要素欠落の補強以上のものをもっている（三宅，2005）．また，タイムラグは不都合さのみではなく，推敲する時間の確保や自己表現の自由さやときには情報操作も可能にする．このような特性を考慮に入れながらモバイル・メディアの研究は進めていく必要があるだろう．

参考文献

総務省情報通信政策研究所（2019）．平成30年度 情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査報告書，http://www.soumu.go.jp/main_content/000644166.pdf(2019.09.20)

三宅和子（2005）．携帯メールの話しことばと書きことばー電子メディア時代のヴィジュアル・コミュニケーションー 三宅和子他(編著)．メディアとことば，2，234-261.

三宅和子（2019）．モバイル・メディアにおける配慮ーLINEの依頼談話の特徴ー 山岡政紀(編) 日本語配慮表現の原理と諸相 くろしお出版pp.163-180.

メディアの機能は言語使用をどのように変えるか？

―LINE チャット・携帯メール・対面会話における終助詞の使用と不使用を例に―

落合哉人(筑波大学大学院生)

1. 研究の位置付け

コンピューターや携帯電話等を介した言語使用について，Herring(2007)は大きく，メディアの機能に規定される側面（方向性，記録性，使用可能なモード……）と，その機能を用いる際の状況に規定される側面（参加者の数，属性，目的……）があることを論じている．本研究は，特に前者に着目しつつ言語使用が具体的にどのように変わるか検討するものである．研究の対象として，2000 年代以降の日本国内で広く普及したコミュニケーション系メディアである携帯メールと LINE（特にそのチャット機能）を取り上げ，終助詞の使用（または不使用）の観点から両者における言語使用を分析する．

携帯メールは2000 年代前半～中頃を中心に(三宅，2005；佐竹，2005 等)，LINE は 2010 年代後半を中心に(加納ら，2017；岡本・服部，2017 等）それぞれ一定の分析があるが，①注目される要素に偏りがある点と②メディアの比較に不足がある点の 2 点に関して更なる検討の余地がある．①について，両者に関しては絵記号・スタンプ等の装飾的要素や（表記的側面も含む）特殊な語彙・表現から分析が進んできたが，一見して指摘しにくい，一般的な言語的要素の使用に関する特殊性に対しては関心が薄い問題がある．また，②について，携帯メールは 2000 年代の，LINE は 2010 年代の，日本語における「打ちことば」（田中，2014）を代表するメディアと言えるが，前者と後者で言語使用がどのように変わったかということや，それは（音声発話を想定する概念としての）「話しことば」の変化とどの程度沿うものかということは実証的な検討に乏しい．本研究は（用いられることは指摘されるものの，どのように用いられるかは分析が乏しい）一般的な言語的要素として終助詞に着目するほか，対面会話の「話しことば」も調査対象に含めることで，ふたつの問題の克服をはかる．

2. 調査の対象と内容

本研究では，三宅(2006)が公開している携帯メールのデータ（343 談話／計 1920 発信／2120 ターン）と，筆者が独自に集めた LINE のデータ（66 談話／計 7963 発信／5127 ターン）を扱う[1]．前者は 2003 年～2005 年に東京の大学生から収集されたものであり，後者は 2014 年～2019 年に東京・千葉・茨城の，大学生及び 20 代前半の社会人から収集されたものである．また，それらと概ね同時期の「話しことば」として『名大会話コーパス』(NUCC)に含まれる会話（8 会話／計 296 分／4567 ターン）と『日本語日常会話コーパス（モニター公開版）』(CEJC)に含まれる会話（7 会話／計 162 分／2747 ターン[2]）を扱う．NUCC は 2001 年下旬～2003 年上旬に収録された日常会話の書き起こしデータを収めたコーパスであり（藤村・大曽・大島，2011)，CEJC は 2016 年以降に録音・録画された日常会話を収めたコーパスである(田中ら，2018；小磯ら，2019)．本研究ではふたつのコーパスに含まれるデータのうちⅠ）すべての参加者が 10 代後半～20 代後半の東京方言話者であり，非初対面であること，Ⅱ）移動中や接客中ではないこと，Ⅲ）ゴールが事前に設定されていないこと，の 3 点を満たす対面

---

[1] やりとりのあり方を大きく特定の課題解決等，ゴールがあらかじめあるものと，ないものに分けると，携帯メールでは 264 談話が前者に，79 談話が後者に，それぞれ該当し，LINE では 26 談話が前者に，40 談話が後者に，それぞれ該当する．なお，携帯メールの談話 1 件の長さは平均して 3 往復程度である．一方で，LINE の談話はスマートフォンを用いたもののみを対象とし，スクリーンショットで 20 枚程度のやりとりを集めた．また，携帯メールと LINE ともにターンは同一の話者が同一の話題に言及する範囲に基づいて数えた．たとえば(ア)では，A，B それぞれが一度の発話で 2 回ずつターンを獲得するものとみなした．これは，このような複数の話題の同時進行が基本的に生じない対面会話との比較を考慮する処理である（詳しくは，落合(2019)を参照されたい）．

(ア)　(出身高校の場所について｜A が同級生に話しかけられないことについて)
A1：こちら田舎ですから（笑）
A2：恥ずかしがり屋なんですよ
　　シャイボーイだから（笑）
B1：やーいやーい田舎者～
B2：がんばって（笑）　(LINE，009)

[2] ターンは NUCC を基準に数えた．具体的には，NUCC においてあいづち相当の発話がターンとして記述されていないことを踏まえ，CEJC においても明らかにあいづちと思われる発話を除いた上，連続する同一話者の発話をまとめて 1 ターンとして数えた．但し，NUCC でも一部，あいづちであるとは考えにくい発話（質問に対する応答等）があいづちとして記述される例が見られたため，会話の相手の後続する反応から明確なものに限り，人手で修正を行った．

会話をすべて対象とした[3]．なお，携帯メール及びNUCCではすべてのデータが1対1のやりとりであるのに対して，LINEでは66談話中27談話において，CEJCでは7会話中4会話において，それぞれ3人以上の参加者が関わっている．

調査では，以上の各データに含まれる終助詞のうち特に形容動詞を除く活用語（動詞・形容詞・助動詞）が主節の末尾で終止形として現れた際に後接するものを観察した[4]．その際，終助詞とみなす語は，国立国語研究所(1951)で言及される語とその複合形を主に取り上げたが[5]，何も付かない言い切りの終止形（Ø）も数えた．なお，携帯メールやLINEでは音調の違いを観察し難いことを踏まえ，音調の区別はすべてのデータで一律に措いた（同様に，延伸と非延伸も区別しない）．また，短い間に同じ形式が繰り返される場合（「あるねあるね」等），終助詞及び前接要素の出現は一度のみと見なした．

3. 調査の結果と分析

表1　対面会話の主節末尾における活用語終止形に付加された終助詞の出現傾向

NUCC					CEJC				
順	語	用例数	割合	調整頻度	順	語	用例数	割合	調整頻度
1	Ø	1648	48.7%	36.1	1	Ø	735	42.0%	26.8
2	よね	573	16.9%	12.6	2	よ	308	17.6%	11.2
3	よ	460	13.6%	10.1	3	ね	217	12.4%	7.9
4	ね	356	10.5%	7.8	4	よね	179	10.2%	6.5
5	な	70	2.1%	1.5	5	か	88	5.0%	3.2
6	っけ	61	1.8%	1.3	6	っけ	64	3.7%	2.3
19	ぜ	1	0.0%	0.0	15	べ	1	0.1%	0.0
	Øあり計	3387	100.0%	74.2		Øあり計	1638	100.0%	63.7
	Øなし計	1739	51.3%	38.1		Øなし計	1016	58.0%	37.0

まず，NUCCとCEJCにおける終助詞の出現傾向を表1に示す[6]．表1から，終助詞が付いたものに限って見た場合，100ターンあたりで換算した全体的な用例数（以下，調整頻度）はほぼ同じであるが，終助詞が付かない言い切りの終止形（Ø）は調整頻度に若干の差があることがわかる．また，個別の語のうち相対的に出現が多いものでは，「よね」の調整頻度，順位に差があることが読み取れる．これを踏まえ個々の用例を詳しく見ると，Øについては特に形容詞「ない」に付く際に2倍以上の調整頻度の差が確認された（NUCC：4.5例／CEJC：1.9例）．一方で，そのような「ない」の中心的な現れ方はNUCC，CEJCともに「じゃない」の一部や補助形容詞として(1)のように何らかの認識への確認を求めるものである様子が見られた[7]．同様に，「よね」についても(2)のように全般的に何らかの認識について確認したり，確認を求めたりする形で観察された[8]．　従ってNUCCとCEJCの間にある終助詞の出現傾向の違いは認識の確認という行為に依るところが大きいことが示唆される．但し，A）両者は概ね同じ状況でなされた対面会話であることと，B）一方で，やりとりに関わる人数に関しては違いがあることの2点を踏まえると，そのような確認のあり方の違いは聞き手の数に対応して生じる発話展開の特徴（どの程度細かく認識の共有を行いながら話を進めることができるか）を反映しているに過ぎない可能性も否めない[9]．

(1)（若者らしい言葉遣いで話すべきか否かについて）[10]

F147：若者らしく。
F114：でも、うちら、（うん）別に、ふ、普段からこうじゃない？
F147：＜笑い＞そうだよね。
F114：何か、無理に若者にしなくてもよくない？
F147：そう、そう、そう。（うん）そうだよね。((後略))

(NUCC, 065)

(2)（地元にあった馴染みの駄菓子屋について）

古賀：駄菓子屋さ：（0.382）かなりなくなったよね。
金子：やばいよね：。
尾形：ないね。
金子：かなりやられてるよね：。
尾形：うん。

(CEJC, T006_008a)

[3] 対面会話のデータでゴールが事前に設定されるものを対象としないのは，NUCCにおいてそのような会話がほとんど見られないことに基づく．
[4] 用例の抽出においては，全文検索システム『ひまわり』(NUCC：ver.1.6.1／CEJC：ver.1.6.4)及び形態素解析器MeCab(ver.0.996)（辞書情報はUniDicを使用）を補助として用いた．なお，形容動詞は特に終止形の場合，「名詞+だ」との区別を明確に行えない用例が多いことから対象に含めなかった．
[5] 禁止・命令・勧告を表す「な」及びその他の品詞と捉え得る「の」「のに」「たら」「けれども」「って」「て（で）」「てば」「が」「に」「ばこそ」「やら」は対象外とした．また，調査の都合上，複数の終助詞の複合と捉え得る「よね」「かな」等と単独で見られる「よ」「ね」「か」「な」等は別の語として数えた．
[6] 表中の「割合」は出現数全体に占める割合を，「調整頻度」は100ターンあたりで換算した用例数を，それぞれ示す．これは後述の表2も同様．
[7] 特にNUCCにおける音調の記述に起因して曖昧なものもあるが，NUCC，CEJCともに少なくとも「形容詞ない+Ø」の6割以上がそのような用例であった．
[8] NUCCでは全用例（573例）中556例（97.0%）が，CEJCでは全用例（179例）中162例（90.5%）が，そのような用例であった．
[9] 但し，データの母数に限りがあることから，確認に関わる発話の数と会話に関わる人数の相関はより広く検証する必要がある．

表2　携帯メールとLINEの主節末尾における活用語終止形に付加された終助詞の出現傾向

携帯メール					LINE				
順	語	用例数	割合	調整頻度	順	語	用例数	割合	調整頻度
1	Ø	826	46.8%	39.0	1	Ø	2295	62.5%	44.4
2	よ	349	19.8%	16.5	2	よ	351	9.6%	6.8
3	ね	174	9.9%	8.2	3	ね	204	5.6%	3.9
4	よね	85	4.8%	4.0	4	な	186	5.1%	3.6
5	な	79	4.5%	3.7	5	わ	166	4.5%	3.2
6	か	65	3.7%	3.1	6	よね	139	3.8%	2.7
27	わな	1	0.1%	0.1	26	わよ	1	0.0%	0.0
	Øあり計	1765	100.0%	83.3		Øあり計	3672	100.0%	71.0
	Øなし計	939	53.2%	44.3		Øなし計	1377	37.5%	26.6

次に，携帯メールとLINEにおける終助詞の出現傾向を表2に示す．表2から，終助詞が付いたものに限って見ると，携帯メールとLINEでは用例全体の調整頻度に約1.7倍の差があることがわかる（NUCCとCEJCの結果も参照すると，携帯メール＞対面会話＞LINEという並びになる）[10]．一方，終助詞が付かないØに関しては僅かながらLINEの方が携帯メールより調整頻度が高いことが読み取れる．先に述べた通り1対1の会話のみ含むNUCCのデータと半数以上が3人以上による会話であるCEJCのデータでは，前者の方がØが多いことを踏まえると（仮にそのような人数と終助詞の出現傾向の関係が確かにあるとしても），1対1の談話のみ含む携帯メールと半数程度が3人以上による談話であるLINEでは対面会話と別の傾向があるものと捉えられる．また，個別の語のうち特に「よね」は相対的に携帯メールで多いが，調整頻度，順位ともにNUCC及びCEJCよりは低い．これらをまとめると，対面会話を基準として，携帯メールでは終助詞全体の増加が，LINEでは終助詞全体の減少が，それぞれ見られるが，両者ともにすべての語が一律に増減するわけではないと言える．

以上を踏まえ個々の用例を詳しく見ると，Øに関しては品詞別で動詞と形容詞に付く場合に関して，携帯メールとLINEで前接要素全般の調整頻度に違いが見られ（【動詞】携帯メール：3.7例／LINE：6.4例，【形容詞】携帯メール：3.2例／LINE：6.8例），具体的な現れ方としてはLINEで特に(3)(4)のような一語文の増加が観察された（調整頻度は携帯メール：1.3例／LINE：4.0例）[11]．また，「よね」に関しては認識の確認に関わらない(5)のような用例の出現全体に占める割合がLINE，携帯メールともに対面会話より高い様子が見られた（携帯メール：27.1%／LINE：17.3%）．但し，「よね」全体は両者ともに対面会話より少ないことから，そのような傾向は認識の確認に関わる用例が少ないことを反映したものと解釈できる．

(3)（知人Iと一緒に写真に写る人物について）
A：死相みえてるｗ
B：やばいよな
A：やばい
B：Iさんが活き活きしてるから際立つ
（LINE，005）

(4)（必修の授業について）
A：先生違うよねー
A：やってることも違うのかー
B：違う
B：Cでしょ？
A：せやで
（LINE，010）

(5)（談話の始発部で）
A：今度、カラオケ行かない(>_<)？
B：いいねぇ～。でもなぁ、今お金ないんだよね…来月くらいなら大丈夫なんだけど(^-^;)
A：ホントに(>_<)？じゃあ、来月行かない(^^)？
（携帯メール，2004，28-30）

4. 考察

ここでは，各データにおけるØ及び「よね」の現れ方について，メディアの機能と結びつけて考察する．まず，ふたつの形式のうち認識の確認に関わる「よね」の，携帯メール及びLINEでの相対的な減少は「話しことば」と「打ちことば」における時間の共有のあり方から捉えられる．話し手と聞き手が時間を共有する対面会話では何らかの確認要求に対して，

[10] なお，LINEのデータを1対1の談話に絞った場合の調整頻度は30.3例であった．
[11] 助動詞の終止形に何も付かない（=Øが付く）ものの調整頻度は携帯メールで32.0例，LINEで31.2例であり，あまり差が見られなかった．その要因の一端には，そもそも単独で現れ得るものが限られることがあると思われる．一方，対面会話の結果はNUCCで20.3例，CEJCで15.6例であり，携帯メールとLINEより少なかった．このことから，携帯メールとLINEでは単なる事実説明や宣言等，必ずしも聞き手目当てはない形式が相対的に多いことが窺える．

直ちに反応がなされることを見込めるが，時間の共有が基本的になされない携帯メール及び LINE ではそのような対応の見込みを立てにくい．そのため認識の確認を基調としたやりとりは行いにくいと言え，「よね」の減少はこの点から理解できる．但し，携帯メールと LINE におけるそのような時間の非共有は，それ自体所与の特徴ではなく[12]，主要なモードが文字であり，記録性が高いというメディアの機能から生じる問題と言える．実際，両者の間でも，「よね」の出現傾向に若干の違いが見いだされることは（少なくとも参加者の意識の上で）時間の非共有が相対的なものであることを示唆する．

次に，以上のような携帯メールと LINE の違いはØを含むその他の形式からも確かめられる．特に LINE で一語文が多いことや終助詞全体の出現が少ないことはターンの相対的な短さを示唆しており，（少なくとも利用者の意識の上で）素早いやりとりが求められることと結びつけて理解できる．一方で，携帯メールで相対的に終助詞が多い実態はそのような要請が乏しいと推測することで統一的に説明を行える．また，仮にそのような推測が確かであれば，両者の違いの背後にはⅰ）表示形式（スレッド形式／チャット形式）に起因して複数の発信を同時に参照できるかどうか（少ない操作でやりとりの展開を追えるかどうか）違いがある点と，ⅱ）既読表示機能（自らの発信が他者の端末で開かれたかどうか示す機能）に起因して他者の行動を窺えるかどうか違いがある点の，少なくとも 2 点の機能の違いがあるものと思われる．

5. まとめ

本研究では，2000 年代の携帯メールと 2010 年代の LINE 及び，それらと概ね同時期の対面会話における終助詞の使用を観察し，各データでØと「よね」の出現傾向に違いがあることを示した．また，特に携帯メールと LINE におけるそれらふたつの形式の現れ方を踏まえると，認識の確認という行為と，メディアの機能（表示形式・既読表示機能）に起因するターンの長さや時間共有のあり方との結びつきを見いだせることを論じた．一方で，そもそもデータの母数に限りがあることや既に終わったやりとりを扱う方法上の制約にも起因して，未だ十分な裏付けを得られていない論点も少なくない．今後とも幅広い要素に目を向けることで，メディアの機能と言語使用の関係について体系的な分析を行っていきたい．

参考文献

藤村逸子・大曽美恵子・大島ディヴィッド義和（2011）．会話コーパスの構築によるコミュニケーション研究　藤村逸子・滝沢直宏(編) 言語研究の技法―データの収集と分析― ひつじ書房 pp. 43-72.

Herring, S. C. (2007). A faceted classification scheme for computer-mediated discourse. *Language @Internet*, **4**, article 1 〈https://www.languageatinternet.org/articles/2007/761〉(2020 年 1 月 3 日)．

加納なおみ・佐々木泰子・楊虹・船戸はるな（2017）．「打ち言葉」における句点の役割―日本人の大学生の LINE メッセージを巡る一考察 人文科学研究，**13**，27-40.

小磯花絵・天谷晴香・石本祐一・居關友里子・臼田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・伝康晴・西川賢哉（2019）．『日本語日常会話コーパス』モニター公開版―コーパスの設計と特徴―　国立国語研究所日常会話コーパスプロジェクト報告書 3.

国立国語研究所（1951）．現代語の助詞・助動詞―用法と実例― 秀英出版

近藤泰弘（1993）．パソコン通信のメッセージの伝達様式―電話・手紙・ファックスと対比して― 日本語学，**12**(13)，48-54.

三宅和子（2005）．携帯メールの話しことばと書きことば―電子メディア時代のヴィジュアルコミュニケーション― 三宅和子・岡本能里子・佐藤彰(編) メディアとことば 2 ひつじ書房 pp. 234－261.

三宅和子（2006）．携帯メール分析共有データ 2003 年度版，2004 年度版，2005 年度版 文部省科学研究費補助金研究成果報告書 携帯電話利用が若者の言語行動と対人関係におよぼす影響に関する調査・研究（課題番号：15520271），67-145.

落合哉人（2019）．LINE テキストチャットにおける分析単位の規定と接続表現の使用傾向 筑波日本語研究，**13**，83-112.

岡本能里子・服部圭子（2017）．雑談のビジュアルコミュニケーション―スタンプ機能に着目した相互行為分析を中心に―　柳町智治・岡田みさを(編) インタクションと学習 ひつじ書房 pp. 129－148.

佐竹秀雄（2005）．メール文体とそれを支えるもの 橋本良明(編) 講座社会言語科学 2 メディア ひつじ書房 pp. 56-68.

田中弥生・柏野和佳子・角田ゆかり・伝康晴・小磯花絵（2018）．『日本語日常会話コーパス』の構築―会話収録法に着目して―　国立国語研究所論集，**14**，275-292.

田中ゆかり（2014）．ヴァーチャル方言の 3 用法―「打ちことば」を例として― 石黒圭・橋本行洋(編) 話し言葉と書き言葉の接点 ひつじ書房 pp. 37-55.

[12] 近藤(1993)は，メールやチャットを含む「パソコン通信」について論じる中で，メッセージを書いた時刻と読む時刻が同時でないこと（非同期性）と，メッセージの送受信が同時であること（即時性）を分けている．両者のうち即時性はメディアの機能に絶対的に規定される特徴であるが，非同期性は機能を踏まえた利用行動の問題であり，相対的な特徴と言える．実際，携帯メールや LINE でもそのように意識すれば，同期的なやりとりを行うことはできる．

SNS による文字チャットの会話における感動詞の日中対照

楊虹(鹿児島県立短期大学)

1. はじめに

SNS による文字チャットの会話は，書き言葉でありながら，話し言葉の要素がよく見られる．例えば，相づち，終助詞，くだけた表現，擬態語・擬声語，感情を表す感動詞などが挙げられる．本研究は，感動詞に注目し，中でも，話し手の感情や，評価的スタンスを示すものではなく，話し手内部の情報処理状態を表す感動詞を取り上げる．

音声会話において，話し手内部の情報処理状態を表す「あ」「えっと」などの感動詞は，急に何か思いついたことや，発話の内容を考えている最中であることなどを示し，それらによって，会話の方向性を具体的な内容を話す前に相手に知らせる（田窪・金水 1997）機能を持つ．音声会話に見られるこれら感動詞の機能は，同期の相互行為を前提としたものであり，すなわち会話の方向性をその場その場で互いに調整しながら進める際，発話する瞬間における発話者の情報処理の状態を表す感動詞を使用することによって，相手が会話の方向性を認識しやすくなる．では，基本的に非同期状態にある SNS の文字チャットの場合でもこれらの感動詞は同じ役割を果たすのか．本研究では，典型的な話し言葉の一つである「感動詞」に着目し，日本語と中国語の SNS による文字チャット（LINE・Wechat）での会話において，話し手の内部の情報処理状態を表す感動詞の使用について分析し，日中それぞれの文字チャットの会話の特徴を明らかにする．

2. 先行研究と本研究の対象

本章では，感動詞の分類について先行研究を整理し，本研究で分析対象とする話し手内部の情報処理状態を表す感動詞に相当するものが何かを示す．田窪（1995）では，感動詞を心的情報処理の操作に関わる標識という捉え方で，二つのタイプの感動詞，すなわち「入出力制御系」と「言いよどみ系」を指摘した．前者は，対話相手の発話を話し手がどのように処理しているか，あるいはしたかを示すもので，後者は，検索，演算，編集などに関する作業バッファの管理に関する心的モニターとして捉えられ，作業記憶の性質と関係するという．

富樫（2001）は，田窪の「入出力制御系」感動詞を，「あ」系，「ふーん」系，「はい」系に分け，より詳細に分析している．「あ」系は情報の書き込みという一次的処理を示すが，１モーラで音声閉鎖音を伴う場合が多い．また，「あ」と「え」「お」の機能に違いがみられ，「え」「お」には，話し手の情報に対する評価のニュアンスが聞き手に伝わる．また，「ふーん」系は，獲得した情報を，話し手の評価とともにデータベースに書き込むという二次的な処理を示す．そして，「はい」系は応答の側面が強く現れる．富樫（2001）の分析から，単純な情報の獲得を示し，話し手の評価的ニュアンスを伴わない感動詞は「あ」のみであると考えられる．

一方，「言いよどみ系」は，「ええ」「あの」「ええと」「まあ」[1]などの感動詞でフィラーとも呼ばれている．田窪（2002）では，これらの感動詞は，発話権保持と関わるが，スピーチなどにも多く見られ，発話処理の速さと相関しているという．また，「あの」と「ええと」については，どちらも発話の産出に時間がかかることを示すが，前者は情報処理において適切な表現を検討していることを示しているのに対し，後者は発話内容について検討中であることを示すという違いがある（定延・田窪 1995）．また，山根（2002）は，「あ」や「はい」等も含めてより幅広くフィラーを捉えており，その役割は，情報処理，テクスト構成，対人関係という 3 点に関わると指摘している．ただし，山根（2002）によると，上述の「あ」「えーと型」は，情報処理ではなく，「テクスト構成」及び「対人関係」に関わるという．しかし，定延（2005）では，感動詞「あの」を例に，その働きを「自分の心の状態を相手にあからさまにしている」と指摘してとおり，本研究は，情報処理の操作に関わるこれらの感動詞の使用は，同時に対人関係にも関わりうるという前提で論を進める．

一方，中国語では，感動詞の研究は少なく，感動詞を情報処理の操作に関わる標識として捉えて分析した研究は楊・中川（2014）のみである．楊・中川（2014）は，感動詞（感嘆詞）を 1 感情表出，2 働きかけ，3 認識の変化を示すという３つに分類し，そのうち「認識の変化を示す」という機能は，田窪（1995）等で用いる心的情報処理の操作と同じものを指していると考えられる．楊・中川（2014）は，中国語の「啊 “a”」「唉/欸 “ai/ei”」「哦 “o”」には，日本語の情報の単純獲得を示す「あ」と同様の用法があると指摘している．ただし，中国語のこれらの感動詞は「同じ語形で異なる複数の

[1] 「まあ」「なんか」等副詞から転じたフィラーは，それ自体が感情や命題に対する評価的態度を伝えるため，本研究では対象としない．

語彙と機能を担う，未分化の状態」であるため，同時に「え」や「お」などとも対応し，意外や賞賛など複数の語意を持つとも指摘している．

また，中国語の言いよどみ系には，非語彙的要素で，母音の引き延ばしや相づち，応答としての機能も持つ「嗯」のほか，指示詞から転じた「这个」「那个」，副詞から転じた「就是」がある．楊（2009）は話題導入におけるこれらの言いよどみ表現の使用を指摘しており，また，姚（2012）は，副詞から転じた「就是」の場つなぎの機能と注目喚起機能を指摘している．

本研究では，情報処理の操作に関わり，感動詞自体では特定の感情表出や評価的表現として用いられないものの日中比較を行うため，入出力制御系の「あ」，「啊“a”」「唉/欸 “ai/ei”」「哦“o”」，言いよどみ系の「えーと」（「うーん」「うんと」）「あのう」（「そのう」），「嗯」（相づちでない場合）「这个/那个」「就是」を分析対象とする．ただし，入出力制御系のうち，相手の発話から新規情報を獲得したことを示す「応答」（楊・中川 2014）の「あ」及び「啊“a”」「唉/欸 “ai/ei”」「哦“o”」[2]は，相づち的表現としても捉えられるため，分析対象としない．

これらの感動詞は，自らの発話を産出するまでの情報処理の状態をその瞬間において相手に示すもので，会話において相互行為のリソースとして利用されるが，非同期的な会話である SNS チャットにおいては，その場で相手がメッセージを見るとは限らず，命題内容を含む発話と同時に一気に見る場合も多いため，これら感動詞本来の働きが弱まる可能性が高い．しかし，実際のチャット会話において，「えーと」「あのー」などのフィラーが多く出現しているとの報告もある（岡本 2016）．これらのフィラーを，石黒（2007）は，「文字によってあたかも声が聞こえるかのような雰囲気を出す方法」（石黒 2007）の一つであり，即興的表現として捉え，このような「不整とも思える表現」を，書き言葉で敢えて入れることにより臨場感を高める役割を持つと指摘している．はたして，SNS チャットの会話におけるこれらの感動詞の役割は，臨場感を高めることだけであろうか．また，中国語のチャットにおいても，これらの感動詞が同様に多くみられるのだろうか．この研究では，感動詞の使用実態の分析から日本語と中国語のチャットのコミュニケーションの特徴の一端を明らかにすること目指す．

3. 目的と研究方法

本研究では，日本語と中国語の SNS による文字チャットでの会話において，発話者の情報処理の状態を表す感動詞の使用実態を明らかにすることを目的とする．データは，日本語と中国語のチャット（女性，19～27 歳）の会話履歴（日本語 10 組，中国語 12 組）で，自然会話である．日本語母語場面の会話提供者は学生（大学，短大，専門学校）または社会人である．中国語母語場面の会話提供者は，中国在住の大学生または社会人及び日本在住の中国人留学生である．データは一回の送信を１メッセージとし，各組のメッセージ数は 300 以上で，日本語計 4333，中国語計 4102 メッセージである．

分析は，まず該当の感動詞の生起頻度を分析し，次に，生起する文脈を分析し，談話展開及び相互行為上の生起位置から分析を行い，チャットにおける役割を考察する．なお，チャット会話において，音声を文字で表現する際に記号類の使用が多くみられ，本研究において，「あ！」は１モーラの「あ」とみなし分析対象とする．また，「あ～」は，２モーラの「あー」に相当すると捉え，対象外とする．

4. 結果と考察

4.1 生起頻度

分析の結果，日本語では，「あ」「あっ」「あ！」等入出力制御系が 39 回，「んー」（または「んーと」）(7)「うーん」(4)「えーと」（または「えっと」「えっとね」）(4)「あの」(1) などの言いよどみ系が 16 回見られた．それに対し，中国語では，「哦 /o/ (2)，「啊 /a/」(1) の計 3 回みられ，言いよどみ系はみられず，日中において使用頻度に大きな差が見られた．

音声会話におけるこれらの感動詞の使用頻度について，楊（2009）は，話題開始における「認識の変化を示す表現」，「言いよどみ表現」を分析したところ，日本語と比べ，中国語では使用頻度が低かったとしている．ただし，楊の分析は話題開始部に限っており，会話全体における日中の比較をしていない．また，葛・松村（2017）では，テレビ番組（インタビュー）の会話における「「あのー」と「那个」を分析した結果，総発話数における使用率では，中国語は日本語の半分以下であると報告している．感動詞の日中対照研究そのものが少ないため，音声会話における日中の使用傾向について，まだ断言できないが，本研究の結果からは，話し手の内部の情報処理状態を表す感動詞は音声会話でみられた差以上に，中国語のチャットでは，ほとんど用いられないことがわかった．

[2] 中国語のこれらの感動詞は単純獲得のほか，話し手の驚き，不満などの感情を表出する場合がある．それらは本研究では対象外とする．

4.2 生起する場面

4.2.1 入出力制御系

入出力制御系は，外部から新規の情報の入力があった場合や想起したことを示すのに用いられるものであるが，談話展開における話題の管理に関わることも指摘されている（楊 2006 など）．本研究では，談話展開を質的に分析した結果，話題管理との関わりから表１のとおり４つの異なる場面に生起することがわかった．日本語ではすべて見られたが，中国語では，会話継続中でのみ使用がみられ，会話再開における使用はみられなかった．

表１　入出力制御系感動詞の生起場面の日中比較

	会話継続中		会話再開（30 分以上の間隔あり）		計
	話題継続	話題転換	話題継続	話題転換	
日	28	6	3	2	39
中	2	1	—	—	3

日本語の「あ」は，現在進行中の話題に関するなんらかの事柄を想起した際に用いられるものが最も多くみられ，会話進行中の新規話題の導入における「あ」は，それまでの会話の流れと関連性を持たない急な話題の導入に用いられるストラテジーとして，音声会話でもよくみられ，発話者の「今，現在」の認知状態を示し，会話の一貫性を保つ装置である．一方で，発話が線条的に流れて消えていく音声会話と異なり，文字を媒介するため，ログ画面にメッセージが残るチャットの会話ならではの「あ」の使用もみられた．それは，「あ」を１メッセージとして単独で送信し，続くメッセージで新規の話題を導入するというものである．ここでの「あ」は，唐突な話題転換を行う際に，先行話題との間に視覚的に話題の境界を示す役割を果たす．

会話中断後の会話再開の場合，先行話題を継続する場合と話題転換を行う場合がある．「あ」の使用によって，一旦終結した会話が瞬時に適切に再開される．LINE の会話では，メッセージのやり取りが途切れた場合，会話が終結したのか，まだ続くのか，その判断が難しい．西川・中村（2015）では，LINE の会話は，中断した場合，ログ画面があるため，間断なく会話が続いていたかのように再開することができると指摘している．西川・中村（2015）では，深夜に途絶えた会話を，何らのマーカーも用いずに再開する例が挙げられているが，それは先行話題について未決の事柄について質問するという場面であった．本研究では，「あ」を用いる場合，一旦終結した会話に関連する事柄を，今現在気づいたこととして示すことによって，瞬時に会話を再開し，直前の話題を継続することができる．会話再開と話題転換を同時に行う場合は，「あ」＋話題転換を示す接続表現を用いて，中断した会話の再開と新規話題の導入を一回の送信で行うこと場合がみられた．会話を途絶えた後の新規話題の導入を新たな会話の立ち上げより，あたかも一続きの会話であるように見せかけるのに「あ」が用いられる．

以上のように，日本語のチャットにおける「あ」は，チャットという「記録性のある」メディアの特性をリソースとして，会話の流れをわかりやすく示すことにも用いられ，会話を，一貫性を保ちながら瞬時に再開したり，話題転換を行ったりする役割を担う．一方，中国語のチャットでは，一か所のみ新規話題を導入した例がみられたが，基本的には，感動詞によって，話題の転換や会話のつながりを示す必要がない．中国語では，会話の一貫性を保つ装置として感動詞があまり用いられないことが示唆される．

4.2.1 言いよどみ系

日本語のチャットにのみ生起した言いよどみ系感動詞についてみると，最も多くみられたのは，相手の質問または情報要求のメッセージの後に送信するもので，本研究では応答型とした．また，数は少ないものの，質問などに対する応答でない場合，すなわち非応答型もみられた（表２参照）．

表２　日本語の言いよどみ系感動詞の生起場面

	応答型				非応答型		計
生起形式	あの	うーん	えーと	んー（んーと）	えっと（えっとね）	うーん	
生起数	1	3	2	7	2	1	16

言いよどみの音声会話における基本的な機能は「検討中」を示すものであり，チャットにおいて最も多く生起した応答型は，相手の質問に応答する前に，検討中であるという特定の心的操作状態を伝えるものである．実際に即答できず，言いよどみの後，挿入連鎖の第一発話（修復）が産出される場合もみられれば，質問に対する否定的な応答が産出される場合もある．

一方，非応答型では，相手をからかったり，相手の発話内容に対して否定的なことを述べたりする場面でみられた．こ

のうち2回は「えーと」系である.「えーと」について，定延・田窪（1995）は，聞き手が存在する場合，「えーと」は「話し手が心的操作のために聞き手とのインターフェイスを一時的に遮断する宣言として働」き，「慎重にいろいろ考えている（そのために頭の中の余計な情報を追いやっている）という態度を表すのに効果的である．こういった態度の表出が，発話のぞんざいさ・さしでがましさを回避する」と指摘している[3]．上記定延・田窪（1995）の指摘は，音声会話における隣接ペアの第二発話での生起を想定したものであり，本研究の応答型における言いよどみの働きの説明に有効である．音声会話において，「インターフェイスの一時的遮断」という時間の経過は話し手と聞き手により共有されているが，さらに，産出の際の話し手の表情や，イントネーション等非言語，パラ言語的要素が加わり，はじめて話し手の「慎重にいろいろ考えている」という態度が伝わる．一方，チャットでは，相手の質問への応答という文脈ではなく，さらに「話しにくそうにしている」非言語，パラ言語的要素が欠如し，話し手の「慎重にいろいろ考えている」という時間は聞き手には共有されていない．そこでの「えーと」の送信は，これから「ぞんざいな・さしでがましいこと」を言うよというあからさまな予告ではあるが，「ぞんざいさ・さしでがましさ」の軽減にはならない．そこで，ここでの言いよどみがからかいの文脈の構築における一種のお膳立てのような役割を果たす.

中国語のチャットでは，相手を責めたり，からかったりする場合においても言いよどみによる前置き・予告なく行っている場面がみられた．言いよどみは音声会話における「不整表現」として回避されていることが推察される.

5. まとめと今後の課題

本研究は，日本語と中国語のSNSチャットの会話における情報処理の操作に関わる感動詞の分析を行い，日中両言語の相違を明らかにした．分析の結果，日本語では，入出力制御系が比較多くみられ，言いよどみ系も一定数みられた．日本語のチャットの会話において，音声会話で指摘されている情報処理に関わる心的操作の状態を示す機能，談話展開や対人関係に関わる使用がみられたほか，話題の境界をビジュアル的に示したり，からかいの文脈をあからさまに予告したりする文字チャットならではの使い方もみられた．一方，中国語のチャットでは，感動詞の生起数が少なく，文字チャットならではの使い方はみられなかった．日本語と中国語のコミュニケーションスタイルについて，音声会話を対象とした研究では，さまざまな知見がみられたが，SNSの社会的浸透により，今後，日中間のSNSを使用した文字チャットによるコミュニケーションも増えていくことが予想され，この分野における両言語の特徴の解明が待たれる．本研究は感動詞の使用という切り口から両言語の会話のスタイルの違いをある程度明らかにしたが，今後データを増やして，分析の精緻化を図っていきたい.

謝辞　本研究は科学研究費基盤研究（C）「LINE をプラットフォームとした多言語多文化社会におけるネットワーク構築」（平成28年度～30年度課題番号：16K02803　研究代表者：佐々木泰子）による研究の一部である．ここに感謝する.

参考文献

岡本能里子(2016)．雑談のビジュアルコミュニケーション―LINE チャットの分析を通して 村田和代・井出里咲子（編）雑談の美学：言語研究からの再考 ひつじ書房，213-236
葛欣燕・松村・瑞子(2017)．指示詞型フィラーの用法についての日中対照分析：日本語「あのー」と中国語「那个nage」の機能を中心に 言語文化論究，38，41-58
小出慶一(2009)．「えーと」再考―談話運営という観点から 埼玉大学紀要教養学部，45(1)，45-57
定延利行(2005)．ささやく恋人，りきむレポーター　口の中の文化 岩波書店
田窪行則(1995)．談話における心的操作モニター機構：心的操作標識「ええと」と「あの（―）」 言語研究，108，74-93
田窪行則・金水敏(1997)．応答詞・感動詞の談話的機能 音声文法研究会（編）文法と音声 くろしお出版 pp. 257-278.
富樫純一(2001)．情報の獲得を示す談話標識について 筑波日本語研究，6，19-41
楊虹(2006)．「日本語母語場面の会話に見られる話題開始表現」『人間文化論叢』8，327-336
楊虹(2009)．「中日接触場面における話題転換の研究」，博士学位論文，1-167
楊虹・中川正之(2014)．中国語と日本語の感嘆表現 日中言語研究と日本語教育，7，50-60
山根知恵(2002)．日本語の談話におけるフィラー くろしお出版
姚双雲(2012)．自然口語中的関連標記研究 中国社会科学出版社

[3] 定延・田窪（1995）に対し，小出（2009）は，談話運営というより上位の行動と関わると異なる見解を述べているが，本研究のデータではこの機能はみられなかった.

外国人日本語学習者の意見表明における合意形成について

－初対面の日本語母語話者との意見述べの会話を通して－

許　明子(名古屋大学)　肖　宇彤(名古屋大学大学院生)

1. はじめに

本研究は，初対面同士の日本語母語話者と日本語学習者が互いの意見交換を行う場面で，両者の合意形成の有無と過程，合意形成を表明する言語形式について分析することを目的とする．日本語母語話者と日本語学習者がコミュニケーションを行う際に，いつ合意が行われたのか分からない，または合意がなされないまま会話が進むことは少なくない．それが相手に対する誤解につながることもあれば，場合によっては異文化間の摩擦に発展することもある．

本研究では，初対面の日本語母語話者と外国人日本語学習者が日本事情等について日本語で意見交換を行う場面を設定し，会話調査を行った．その会話において，外国人日本語学習者はどのように自分の意見を表出するのか，相手である日本語母語話者の意見をどのように受け入れるのか，また両者の合意形成がなされるのか否かについて分析を行う．

2. 先行研究および調査概要

大浜（2000）では，日本人学生20人と外国人留学生20人を対象に，それぞれ2人1組で行った依頼場面のロールプレイ談話を分析した．ロールプレイのテーマは友人に「卒業論文のためのアンケート調査に協力してもらうよう依頼をし，調査日時と場所を決める」であった．分析をさらに具体的に見ると，分析範囲は実施のための日時場所についての相談が開始するところから合意を見るまでの相談局面であった．また，相談局面は「テーマ導入」「提案」「合意時の表現比較」の３つの部分に分けられている．大浜（2000）の分析結果から見ると，以下のことがわかった．

①談話者の役割意識において，日本人が役割分担の意識が高いのに対し，留学生は対話者の間に役割の違いがない
②提案の仕方において，日本人は非限定的提案をする傾向があるのに対し，留学生は限定的提案をする傾向がある
③提案に合意する際に，日本人は非明示的な表現をする傾向があるのに対し，留学生は明示的な合意表現をする

以上の大浜（2000）の分析を踏まえ，本研究では外国人日本語学習者と日本語母語話者が意見交換を行った会話データを対象に分析を行った．

調査概要は以下の表1のようになる．

表1　調査概要

	1回目	2回目
実施時間	2013年	2016年
調査対象	中国人・韓国人学習者，日本語母語話者（それぞれ6名）	中国人（C）・韓国人（K）・オランダ人（H）・日系アメリカ人学習者（U）各1名・日本語母語話者（J）2名
データ数	会話データ18ペア（2人のペアで対面式会話）	会話データ6ペア（2人のペアで対面会話）
調査内容	調査対象を2人ずつペアになってもらい，自己紹介をお互いにしてもらい，与えたリストから話し合いでトピックを選択するか，くじ引きでテーマを決めるかを被検者間で決めて，自由に意見交換を行う．リストとくじにあるテーマは以下の7つである． ①成人の年齢を下げるべきか否か ②就学年齢を現在の6歳から下げるべきかどうか ③消費税率を上げるべきか下げるべきか ④海外留学を必修科目として指定するべきかどうか	

	⑤人は外見が大事だという意見についてどう思うか ⑥美容整形について賛成かどうか ⑦韓国の成人男性の兵役義務についてどう思うか

会話参加者は初対面同士であり,外国人同士の会話と日本語母語話者との会話の2回に分けて会話調査を行った.

本研究の目的は,相談局面において合意形成がどのように行われていたかについて考察することであるため,「会話開始」から「トピック決定」までの内容を「相談局面」と定義し(大浜 2000),その会話の部分について分析を行った.分析対象となった会話データは主に2回目の会話調査である.具体的には,「テーマ導入」「トピックの選び方の提案」「トピック決定時の合意形成」の3つの局面に分けて,合意形成がどのように表出しているかについて考察を行った.また,調査対象者の個人差があり,テーマ導入の時点が早いペアと遅いペアがあったため,本研究ではデータの「会話開始」から「トピック決定」までを相談局面として分析の対象とした.

3. 分析結果および考察

3.1 会話開始からトピック決定までの平均時間

データの平均時間は01分12秒であった.相談局面の時間を表でまとめると表2の通りである.

表2 データの相談局面の時間

	グループ	相談局面の時間	グループ	相談局面の時間
2回目 6ペア (2016)	C1(中)-J1(日)	01分11秒	K(韓)-J3(日)	01分10秒
	H(オランダ)-J2(日)	01分41秒	H(オランダ)-C1(中)	00分56秒
	U(日系アメリカ)-C2(中)	01分30秒	U(日系アメリカ)-J1(日)	01分41秒

3.2 テーマ導入

相談局面のデータ導入の部分を中心に,どのような表現を用いて,誰から誰にテーマを導入したかを見た.本研究で扱ったデータを具体的に見ると,テーマ導入は「どのように「トピックを選ぶ」というテーマを導入したか」を指す.また,テーマ導入時の表現について,大浜(2000)の「伺い表現」と「問いかけ表現」[1]の分類を援用した.結果は表3のようになる.

表3 テーマ導入の分析結果

グループ	場面	相談局面	方向	表現
C1(中)-J1(日)	接	J1:「前回どれを話しました?1回目の時」	日→外	問いかけ
K(韓)-J3(日)	接	J3:「どうしましょうね?」	日→外	伺い
H(オランダ)-J2(日)	接	J2:「なんか,どっちから選びたいですか?」	日→外	問いかけ
H(オランダ)-C1(中)		H:「では,早速,トピックを見ますか?」		問いかけ
U(日系アメリカ)-C2(中)		C2:「では,これ どっちに?」		問いかけ
U(日系アメリカ)-J1(日)	接	U:「じゃあ,どうします?」	外→日	伺い

ここでは接触場面を中心に見ていく.まず,テーマ導入時の表現から見ると,日本語母語話者から外国人日本語学習者への会話には問いかけは2例,伺い表現は1例であった.一方,外国人日本語学習者から日本語母語話者への会話は伺い表現の1例になっている.会話の方向性から見ると,日本語母語話者からの発話が多いが,その理由として,日本語母語話者には外国人学習者への配慮があったので積極的に発話しようとしたことが考えられる.また,表現形式から見ると,問いかけ表現が3例で伺い表現より多かった.

大浜(2000)の分析では,テーマ導入の際に,日本人学生の中では伺い表現の多用が目立った.本調査の分析結果から見ると,日本語母語話者からの問いかけ表現が多かったことを一見では不自然に思う可能性があるが,外国人学習者への配慮の上,既決を前提にした質問表現をすることも配慮に一種と考えられ,その質問の選択権を外国人学習者に渡すことも考えられる.

3.3 トピックの選び方の提案

ここでいう「トピックの選び方」とは「リストからトピックを選ぶか」「くじを引いてトピックを選ぶか」のどち

[1] 大浜(2000)によると,「伺い表現」とは未決を前提にしたものであり,「問いかけ表現」とは既決を前提にしたものである.

らを選択する局面である．本研究では分析する際，「トピックの選び方の提案」を限定的提案と非限定的提案[2]に分けて分析したが，結果は以下の表４の通りである．

表４　限定的提案（下線部）

グループ	場面	相談局面	方向
C1（中）-J1（日）	接	C1：じゃ，１から（笑い） J1：１から行きますか？ C1：はい.	外→日
K（韓）-J3（日）	接	J3：えーと，どうしましょうね？ K：じゃ，くじで J3：くじでやりますか？せっかくだから.（笑い）	外→日
H（オランダ）-J2（日）	接	J2：なんか，どっちから選びたいですか？ H：えっじゃこのリストを見よう？ J2：リストWO見ながらやりますか？	外→日
U(日系アメリカ)-J1(日)	接	U：えっじゃ，どうします？ J1：く U：くじ J1：僕くじ，くじが U：くじ？くじ J1：はい	日→外

表５　非限定的提案（下線部）

グループ	場面	相談局面	方向
C1（中）-J1（日）	接	J1：じゃ，どれを話します？ C1：うん，あ，前回はくじしましたけど J1：そうですよね，僕もくじして，前回 C1：うん J1：うん，だから，これの，くじの方が楽だったなあっていう C1：そうですね J1：(笑い)	日→外
K（韓）-J3（日）	接	J3：あ，どうしましょう？ K：うんー J3：その順番に，まあ１からやるか，どうしようか？それか，なんか話したいことありますか？これが面白そうってやつ K：そうですね.これはどうでしょうかね？４番目	日→外

会話の方向性から見ると,限定的提案においては外国人学習者から日本語母語話者への限定的な提案は３例あり，日本語母語話者から外国人学習者への１例より多かった．非限定的提案においては，２例とも日本語母語話者から外国人学習者への発話であった．また，表４から見ると，外国人学習者はいきなり限定的な提案をする点では大浜（2000）と一致した.表５では,日本人母語話者は一方的に非限定的提案をする傾向が見えたが,ここでは大浜(2000)と違う結果が出た．大浜（2000）によると，日本人は限定的提案をする前に非限定的提案を重ねる傾向があると述べられているが，その理由として，例え日本人がいくつもの非限定的提案をしたとしても，それらが留学生に提案と理解されないことがあるのではないかとのことであった.

3.4　トピック決定時の合意形成

本研究では合意時の表現を中心に，その表現が明示的か否かを分析した．結果は以下の通りである.

[2] 大浜（2000）によると，「限定的提案」とは提案の内容が限定できるものであり，「非限定的提案」とは曖昧でさらなる提案で絞り込む必要があるものである.

表6 合意時の表現

グループ	場面	相談局面	表現形式
C1（中）-J1（日）	接	C1：じゃ，１から（笑い） J1：１からいきますか？ C1：はい	非明示
K（韓）-J3（日）	接	J3：くじでやりますか？せっかくだから.（笑い） K：（笑い）この後何をしたか J3：じゃ，これにします. K：笑い	非明示
H（オランダ）-J2（日）	接	H：これはどうでしょうかね？４番目. J2：国際交流… H：はい. J2：じゃそれにしましょう. H：はい.	明示
U（日系アメリカ）-J1（日）	接	J1：うんじゃ（くじを選ぶ）一番下にしよう，ちょっと，これ. U：えー	非明示

表6から見ると，接触場面においては合意時には非明示的な表現を用いる例が3例であった，特に　　の部分は日本語母語話者からの発話になり，その内容は合意を求めているものと考えられる．つまり，例えば「1 から行きますか?」を聞くことにより，「わかりました，1 からいきましょう.」のような表現を発話者が望んでいると推測できる．しかし，外国人学習者がその望みに応えられずに，次の段階に行ったため，日本語母語話者にとっては多少違和感を覚える可能性があるだろう分析の結果，各局面において特徴が明らかになった.

4. おわりに

以上の分析結果をまとめると以下の通りである.

まず「テーマ導入」については，1）日本人母語話者からの問いかけは学習者より多かった，2）日本語学習者と比べると日本人母語話者の会話では交替不可・日本語学習者では対等な関係となった，3）伺い表現より問いかけ表現が圧倒的に多かった，ということが明らかになった.

次に，「トピックの選び方の提案」については，「限定的提案」と「非限定的提案」に分けて分析を行ったが，日本語学習者から日本人母語話者への提案には限定的提案が多く，日本人母語話者から日本語学習者への提案には非限定的提案が多かった.

最後に，「トピック決定時の合意形成」では，非明示的な合意が多く，合意形成を示す言語形式を用いていない会話データが多かった.合意形成がなされていた会話であっても，中にはお互いの発話の意図に対して異なる理解をしている例も含まれており，話し手と聞き手の合意形成の理解にずれが存在するケースもあった.

以上の分析結果から，日本語学習者と日本人母語話者の合意形成には相違点があることが明確なり，接触場面における意見交換のコミュニケーション活動に示唆が得られた.母語場面と接触場面での合意形成の特徴の相違については呉（2016）でも指摘されているが，本研究でも同様な結果が得られた.

異文化を背景とした外国人日本語学習者と日本語母語話者の初対面同士のコミュニケーションには言語行動のパターンや表現形式の使用面等で様々な違いがあると予想される.その違いについて詳細を明らかにし，明示していくことは外国人日本語学習者に対する日本語教育や，日本人を対象とする異文化教育の現場にも応用することができる.本研究の分析結果は日本語教育や異文化教育の現場にも応用可能であると期待される.

主要参考文献

大浜るい子（2000）．日本人学生と外国人留学生における合意形成過程の比較，広島大学日本語教育学科紀要，10，65-71.

呉映璇（2016）.接触場面における台湾人と日本人による合意形成談話の特徴，人間文化創成科学論叢，第19巻，29-36

付記

本研究は科学研究費（19K00707，研究代表者：許明子）の助成を受けている.

修復シークエンスにおいてトラブルソースを常識的知識として扱うことの分析
－日本人学生と留学生によるグループディスカッションデータを対象として－

嶋原耕一(立教大学)

1. はじめに

近年国内の大学では,「国際共修」または「多文化共修」という名を冠する授業が新設されつつある．それらの授業では,「学生の文化的多様性は学習上の潜在的資源となる」(末松他, 2019, p.4)という考えから，主に日本人学生と留学生とが相互に学び合うことを通して，異文化間能力（intercultural competency）を身につけることが期待されている．日本国内の国際共修教育はまだ手探りの段階であり，特にその方法論については，まだ確立されているとはいいがたい．本研究では，国際共修教育の方法論の一つとして採用されることのある，グループディスカッションを分析対象とする．

お互いに文化的及び言語的な多様性を有することが,予め「期待されている」といえるグループディスカッションでは,様々な語が「～という／ていう」という形式で，差し出される．例えば以下の断片1を見ていただきたい．

断片1「宮城」(AとBは日本人学生，CとDは留学生)

```
01  A:    <出身は:>
02        (.)
03  A:    宮城県>という<[北の方  [で:
04  B:                  [お:::  [゜そう゜
05  D:                          [゜↑ん:::゜=
06  C:    =宮城[( )       [うん
07  A:         [今一人暮らし[して[ます
```

断片1の01-03行目で話者Aは，自身の出身地についての情報を,「宮城という北の方で」と差し出している．ここで話者Aは,「という」という形式を用いることによって,「宮城」という固有名詞を，聞き手の少なくとも1名が「知らないだろうこと」として差し出しているといえる．

一方で，そのような形式をとらない場合，つまり単に「宮城です」と答える場合，話し手はそれを，聞き手が「知っていてよいもの」として差し出しているといえる．本稿ではこの「知っていてよいもの」を，常識的知識としてとらえる．常識的知識を平本(2016)は,「当事者がそれを，取り立てて説明を加えずとも日常会話の中で相手が知っていて当然のものとみなしているという性質」(p.5)を意味するものとして用いており，本稿でもその定義に従うこととする．

そして，その常識的知識として差し出された語がある話者にとってのトラブルソースとなり，他者開始修復（other-initiated repair）が生じる断片を，分析する．そのような修復連鎖を記述することで，国際共修教育の方法論についての議論に資することを目指す．

2. データについて

続いて，本研究で分析対象とするデータについて記す．所属大学では，日本人学生と留学生の授業外での様々な協働は試みられているものの，2019年度現在,「国際共修」または「多文化共修」という名を冠した授業は始まっていない．そこで研究者は2018年5月～7月に，そのような授業に興味のある学生を教室に集め，模擬的な国際共修の授業を3度実施した．今回分析対象とするデータは，その際の日本人学生と留学生によるディスカッションの，録画データである．各回の学生人数は16～17名であり，4～5名のグループを毎回4グループ作った．4名のグループは日本人学生と留学生2名ずつ,5名のグループは日本人学生2名と留学生3名だった．グループに分かれた後で研究者の指示により，自己紹介（10

分)，ディスカッション① (20 分)，ディスカッション② (20 分) の計 60 分の活動に参与してもらった．ディスカッションでは「小学生がスマートフォンを持つことのメリットとデメリット」や「大学教育の問題点」などのテーマを，具体的な質問とともに提示した．ディスカッションの前には研究者による短い講義，後にはグループで話したことを代表者が簡潔に発表する時間を設けた．データは全 12 グループ分であり，その長さは合計で約 720 分である．なお録画データは図 1 に示すような構図となっている．



図 1. ビデオデータの構図

3. 分析

それでは，分析に移る．本節で提示する断片 2 と断片 3 では，ある固有名詞が「～という／っていう」という形式を伴わずに，認識用指示表現 (recognitionals, Sacks & Schegloff, 1979) としてそのまま差し出され，それがある話者にとってのトラブルソースとなっている．

まず断片 2 は，必修の授業で毎週顔を合わせるクラスメイトとの，学期終了時の打ち上げについて話している場面である．なお，以下断片 2 と断片 3 では，トラブルソースのターンに「⇒」，他者開始修復を含むターンに「→」を付す．

断片 2「湘南」(A と D は留学生，B と C は日本人学生)

```
01  C:     うんやるやる
02  A:     あ:やるんだ:
03  C:     <飲↑み:↓は:> 飲まない子がいるから飲まないー(.)>飲まないけど:<
04  A:     °う [うん°
05⇒C:          [なんか夏湘南行こってなってる
06          (.)
07→A:     あ:: >湘南いこ?< ((B を見てから C に視線を戻す))°何?°=
08  C:     =湘南 湘南ってい[う
09  B:                      [海=
10  C:     =>そ海海<=
11  A:     =あ:[::
```

断片 2 では，日本人学生である C が 03-05 行目で，夏に湘南に行くという情報提供をしている．そして 07 行目において，C の発話の一部を繰り返すことと「何」という疑問詞によって，留学生 A による他者開始修復が生じている．ここで A は，音声的な区切りを入れず一続きで「湘南いこ」と繰り返しており，そのような繰り返し方は，それを「湘南」と「いこ」に分けることができないことを，表していると考えられる．さらに，その他者開始修復の宛先として，A は視線により B と C を選択している．他者開始修復の宛先をトラブルソース話者以外の者にすることについて，Bolden (2011) は social epistemics の視点から分析を進めている．断片 2 では，B と C を他者開始修復の宛先とすることにより，A がその 2 者を，トラブルを解消することができる話者としているといえるだろう．つまりここで A は，B により差し出された常識的知識「湘南」が，C にも共有されているものとしている．続いて 08 行目の修復実行の方法を見ると，「湘南」という地名が 2 回繰り返されており，「いこ」についての説明は観察されない．そうすることは，A の理解を妨げるトラブルソースが「湘南」という名詞であることを示している．そして C は，「～っていう」を用いることで，「湘南」が何の固有名詞であるのか説明を試みている．09 行目では，トラブルソースの話者ではないが，他者開始修復の宛先とされた日本人学生 B も修復を実行し，10 行目でトラブルソースの話者 C は，「そう」という語と「海」を繰り返すことにより，B による修復の実行を承認している．ここで B は，先に他者開始修復の宛先とされたことにより引き起こされた「常識的知識を共有している」という知識状態を，実演しているといえる．断片 2 のように，ある名詞が常識的知識として差し出され，それが一人の話者にとってのトラブルソースとなり他者開始修復が始められ，トラブルソースの話者以外も修復実行の担い手となる，という断片は他にもいくつか見ることができた．この結果は，平本(2016) とも共通している．

続いて以下の断片 3 でも，断片 2 と同様に，常識的知識として提示された情報がトラブルソースとなり，留学生による他者開始修復が生じていた．断片 2 と異なるのは，他者開始修復が何度も試みられていることである．

断片 3「少林寺拳法」(A と C は留学生，B と D は日本人学生)

02　A　　[>なんか< 部活とか゜入ってますか゜？
03　⇒B　部活↑は 少林寺゜です゜
04①→A　゜ん゜　((A が B に向けて首を突き出す,C は小さくうなづく))
05　B　少林寺拳法
06②→A　それって: >あのスポーツ:?<
07　B　(ひん) 部活です((B 両手を広げる))
08③→A　なん- <なにを>する- なん
09　B　¥なにをする¥ hhh:
10　C　↑そういえば少林[寺拳法 [ってあの:なんか]
11④→A　　[゜s:: ゜[ってなんですか?]
12　(.)
13　C　お母↑さん会 >なんか<レディース↑クラブのときに: [やってましたか?=
14　A　　[゜.h: ゜((鼻すする音))
15　B　=あ::なんかやってたって [いって-
((中略))
21　C　　[あ:そうですか:
22⑤→A　それって なんですか:？hhh=
23　B　=う:::::ん ↑空手に近い[感じ=>イメージは<
24　A　　[↑あ:::::::::::((C と D 大きくうなづく))
25　B　そんな感じです゜武道゜
26　(1.6)
27⑥→A　なんとか拳法?
28　B　少[林寺
29　C　[゜少林寺゜
30　A　少林寺[:
31　B　[少林寺[です
32　A　[゜あ::<少林寺拳法>゜

断片 3 ではまず 03 行目で，相手が「知っていてよいもの」として「少林寺」という名詞が差し出されている．つまりここで「少林寺」は，B により常識的知識として扱われている．そして，その次ターンで A による他者開始修復が生じている．04 行目の他者開始修復は無限定（open-class）のタイプであり，05 行目で B が「少林寺拳法」を繰り返していることから，B はその他者開始修復を聞き取りの問題としてとらえていることが分かる．

続く 06 行目での 2 回目の他者開始修復「スポーツ:?」は，自身の理解候補を提示する，という方法によりなされている．Shcegloff 他（1977）は，複数の他者開始修復が実行される際，トラブルソースを特定する強度が低いものから高いものの順で用いられることを示しているが，ここで 04 行目の無限定のタイプと 06 行目の理解候補提示も，その順に生起している．理解候補の提示という方法でなされた他者開始修復に対して，トラブルソースの話者である B は，その A の理解が正しいことを承認するか，正しくなければその理解を修正することが適切になる．07 行目での B による実際の修復実行を見ると，B は「部活です」と答えることで，A の他者開始修復に応じている．ここで B は，A が提示した理解候補を，修正しているようである．しかし，この他者開始修復と修復実行の間には，食い違いが生じている．A の「スポーツ:?」という他者開始修復は，少林寺拳法がスポーツか否かを問うているが，07 行目「部活です」では，それが部活か否かに焦点が当てられている．しかし，そもそものトラブルソースである 03 行目は，02 行目の「なんか部活とか入ってますか」に対する答えであり，それが部活であることはここで明白である．それでは B は，ここでなぜ「部活です」という方法で，修復を実行したのだろうか．それについては，後でもう一度考えることとしたい．

08 行目は A による三度目の他者開始修復である．08 行目の特徴として，07 行目の情報を受け取ったことを示すようなトークンがないことと，発話上の非流暢性を伴っていることが挙げられる．そのような特徴を持つターンでは，A がトラブルソースとなっている語がまだ十分に理解できていないこと，さらに他者開始修復の方法に難しさを感じていることが，

示されているといえよう．また疑問詞を伴う他者開始修復は，理解候補提示よりもトラブルソースを特定する強度が低く(Schegloff 他，1977)，ここで話者 A は，何が自身にとってのトラブルソースとなっているのか，つまりどこまで理解できていて何が理解できていないかの提示を，後退させているといえよう．そのような 08 行目の他者開始修復に，B は 09 行目で，笑いながら繰り返すという方法で応じる．この，相手の他者開始修復を「笑えるもの laughable」とすることにより，B はそれが不適切な他者開始修復であることを示している．この 08-09 行目の連鎖についても，後で立ち戻ることとする．

4 回目と 5 回目の他者開始修復については簡潔に記すのみとするが，4 回目の 11 行目で A は，C の「そういえば少林寺拳法」という文頭を利用するかたちで，文を産出している．しかしその他者開始修復は取り上げられることなく，話題は学内イベントにおける少林寺拳法部の実演に移ってしまう．そして 22 行目で 5 回目の他者開始修復が生じ，23 行目での B の説明を受け，24 行目で十分な理解が得られたことが示される．23 行目の B の「う:::::ん」には，修復を実行することの難しさが示されているといえよう．

それではもう一度，07 行目で B が「部活です」と答えたことに戻りたい．これは 06 行目での「スポーツ:?」に対する修復の実行であるが，この会話全体を通じて B は，自身が取り組んでいる少林寺拳法を，スポーツというカテゴリーとして提示することはなかった．その代わりにそれを含むカテゴリーとして用いられていたのが，25 行目にもある武道というカテゴリーである．武道はときにスポーツに含まれる概念であるが，それを区別する者もいるだろう．それを考慮すると，07 行目で「部活です」と B が答えたのは，A による質問に沿ってスポーツであるか否かを答えることへの，抵抗だった可能性が考えられる．つまりスポーツか否か答えることを避けるために，「部活です」と述べた可能性である．そして，そのようなカテゴリーの違いへの B の志向は，A が少林寺拳法に対してある程度の知識を持っているという想定に立脚している．そうでなければ，ここで B はカテゴリーの違いに志向するのではなく，少林寺拳法について説明することに志向するのが自然だと考えられるからだ．そのように考えると，08 行目の 3 回目の他者開始修復が，なぜ不適切なものとされたのかも，見えてくる．A が少林寺拳法に対してある程度の知識を持っていると想定し，さらにそれが「部活です」の直後に配置されれば，08 行目の「何をする」は，「部活で何をするのか」という意味として理解される．しかし少林寺拳法の部活では，その練習をするのが当然のことであるし，その具体的な練習の内容を自己紹介場面で質問するのも，一般的ではないだろう．そのように理解されたからこそ，その問いはここで不適切なものとされたのかもしれない．そうであれば，06 行目から 09 行目までの修復連鎖において，B は自身が常識的知識として差し出した「少林寺拳法」という語を，A にも共有されているもの，つまり A にとっても常識的知識であるものとしていたといえるだろう．

4. おわりに

本稿では，常識的知識として差し出された名詞が，ある話者（ここでは 2 例とも留学生だった）にとってのトラブルソースとなり，他者開始修復が生じる断片を 2 つ分析した．そしてそれぞれの断片において，修復シークエンス内でも，ときにそれが常識的なものとして扱われる様子を，記述しようとした．ただ，本稿で用いた常識的知識という概念を，話者が実際にその場で志向していたのかについては，慎重に検討する必要がある．今後はその概念の再考も含めて，より詳細にデータを分析していきたい．ただ，自分にとっての常識や，相手が知らないかもしれないもの，知っているだろうと期待するものなどに関するやり取りを見ていくことは，はじめに述べたように，文化的及び言語的に多様であることが「期待されている」場面において，意味のあることだと考えている．今後もそのようなやり取りを記述することによって，どのように「文化的多様性」がその場その場で形成され，学生がどのような学びをえるのかに迫りたい．

参考文献

末松和子・秋庭裕子・米沢由香子 (2019)．国際共修 文化的多様性を生かした授業実践へのアプローチ 東信堂

平本毅 (2016)．物を知らないことの相互行為的編成 フォーラム現代社会学，**15**，3-17.

Bolden, G. B. (2011). On the organization of repair in multiperson conversation: the case of “other”-selection in other-initiated repair sequences, *Research on Language and Social Interaction*, 44(3), 237-262.

Sacks, H. & Schegloff, E. A. (1979). Two preferences in the organization of reference to persons in conversation and their interaction, *Everyday Language: Studies in Ethnomethodology* (George Psathas, ed.). New York, Irvington, pp. 15-21.

Schegloff, E. A., Jefferson, G. & Sacks, H. (1977). The preference for self-correction in the organization of repair in conversation, *Language*, 53(2), 361-382.

介護福祉士養成課程学生が利用者に拒否されたと感じたコミュニケーション
ー介護実習のやり取りの分析ー

吉田輝美(新潟医療福祉大学)　大場美和子(昭和女子大学)

1. 研究の目的

介護現場では尊厳ある介護が求められ，利用者の人間としての権利を保障することを，学生は介護実習を通じて学んでいる．介護実習で学生は，利用者と信頼関係を形成するためにコミュニケーションすることを知識として理解している．しかし，介護現場では利用者から提案を断られたり指示を理解してもらえなかったりなど、やり取りが学生の想定通りに展開せず，学生は利用者とのコミュニケーションに悩むことが多くある．本研究の目的は，4 年生大学で介護福祉士国家資格取得をめざす学生を対象に，介護実習の場面でのコミュニケーション時に，利用者から拒否され会話が展開しなかったと学生が感じたやり取りには，どのような特徴があるのかを明らかにすることである．

2. 先行研究

介護福祉士養成課程は，1987 年社会福祉士及び介護福祉士法制定により 1988 年度より開始した．介護サービスを提供する際は，本人が自己選択と自己決定できる状態を自立と考えられている（西村，2018）．また，介護保険法第 1 条には，「尊厳を保持し，その有する能力に応じ自立した日常生活を営むことができるよう」になることをめざし「自立支援」が位置づけられている．このことから，従来のやってあげる介護から本人とともにどうすれば自立できるようになるか一緒に取り組む介護が求められるようになった。利用者の自立をめざすためには，介護職員による声かけが利用者の自立意欲に関係することもある．そのために介護職員は，意欲を引き出すような意図的なコミュニケーションを展開することが求められる（櫻井，2016）．つまり，介護職員による利用者への声かけには，利用者に何かを行うことや利用者に何かをやってもらうなど，介護職員が達成しようとする目的がある．

芝田（2016）は，介護実習生がコミュニケーションに難しさを感じる場面として，認知症高齢者とのコミュニケーションが多くあると指摘している．認知症高齢者には，病気の特徴に起因する行動・心理症状として暴力や暴言などが出現したり，認知機能低下によるコミュニケーションの成立のしにくさがあげられたりする．介護現場に十分慣れていない介護実習生の場合には，特にコミュニケーションに難しさを感じるようである．このような点から介護福祉士養成課程では，利用者を理解する方法のひとつに，介護実習中の利用者とのコミュニケーション場面を振り返るプロセスレコードを用いて，基礎的なコミュニケーション技術習得訓練を行うことがある．プロセスレコードの発祥は，アメリカの精神看護分野で 1950 年代頃より看護教育における省察方法として発展したもので，木村（1973）によれば，プロセスレコードとは「看護師が経験した間主観的な場を，シナリオ形態に再構成する（客観化する）ことで，潜在的な看護師自身の思いや，看護師ー患者間の相互作用を探索できるようにした，訓練・学習方法」と述べられている．介護福祉士養成課程では，この看護教育のプロセスレコードを援用し，介護実習における省察方法として用いられている．

3. 調査の概要

本研究では，介護福祉士養成課程の介護実習の場面に着目する．本研究での介護実習カリキュラムは表1の通りである．ここから 2019 年 2 月から 3 月に行われた介護実習Ⅱの中で，学生が「利用者から会話を拒否された」と感じた利用者とのコミュニケーション場面を調査対象としプロセスレコードを作成した．プロセスレコードには，(1) 会話のきっかけとなった声かけ前の利用者の状況，(2) 学生の発話意図，(3) 学生の発話，(4) 利用者の発話を記載した．(1) の利用者の状況において，学生が何を意図して声をかけたのか (2)，その際に具体的に学生と利用者でどのような発話のやり取りがあったのかを示す (3) (4) ものである（後述例 1～5 参照）．作成されたプロセスレコードは 19 例となり，そのプロセスレコード 1 例ごとに，国立国語研究所（1994）を参考にして，学生の発話と利用者の発話に発話機能を付与し，学生が

拒否されたと感じたやり取りのパターンを抽出した.

表1　介護実習カリキュラム

科目名	配当年次　期間	主な配属種別
介護実習ⅠA	1年次前期8月～9月（96時間・12日間）	在宅系（デイサービス）
介護実習ⅠB	1年次後期2月～3月（96時間・12日間）	在宅系（小規模多機能型・認知症高齢者GH）
介護実習ⅠC	2年次前期8月～9月（96時間・12日間）	施設系（高齢・障害分野）
介護実習Ⅱ	2年次後期2月～3月（176時間・22日間）	施設系（高齢・障害分野）

4 分析結果

4.1 利用者から拒否されたと感じた介護実習でのやり取りのパターン

学生が利用者から拒否されたと感じた場面では，表2に示すように，学生と利用者のどちらかが声をかけて会話を開始するかによって，（1）学生から利用者に声をかけるパターン（14例）と，（2）利用者から学生が声をかけられるパターン（5例）の2つのパターンにわけられた．さらに，2つのパターンの中にも，付与した発話機能からさらに①から⑤に下位分類された．表2の【　】内は、付与した発話機能である.

表2　利用者から拒否されたと感じた介護実習でのやり取りのパターン

（1）学生から利用者に声をかけるパターン：14例	（2）利用者から学生が声をかけられるパターン：5例
①利用者からの拒否に反応できない:2例 【学生の声かけ→利用者の不満表明・拒否・断り】 **②利用者の拒否へ働きかけ再度拒否され反応できない:8例** 【学生の声かけ→利用者の不満表明・拒否・断り→学生の再度の働きかけ→利用者の不満表明・拒否・断り】 **③利用者の肯定的反応へ働きかけた後に利用者から拒否され反応できない:4例** 【学生の声かけ→利用者の肯定的回答→学生の再度の働きかけ→利用者の不満表明・拒否・断り】	**④利用者からの声かけに反応した後に利用者から拒否される:3例** 【利用者からの受け入れ難い行為要求→学生の情報提供（断り）→利用者からの学生に対する否定的評価】 **⑤利用者からの声かけに反応し学生が拒否するが再度の声かけに反応できない:2例** 【利用者からの声かけ→学生の情報提供→利用者の再度の働きかけ】

4.2 利用者からの拒否に反応できない学生のやり取り例

例1は，学生が利用者へ声をかけたものの，利用者からの拒否で反応できなくなってしまった例である．学生は利用者の行動を観察したところ，利用者はいすに座ってテレビを見ていたことから，何かをした方が良いのではないかと考え，過去にこの利用者と折り紙をしたことを思い出した．そこで，折り紙を媒体としてコミュニケーションを図ろうと「一緒に折り紙やりませんか」（共同行為要求）と声かけをした．利用者からの反応は「やらない」という断りであり，当初利用者へ声かけした時の学生は，利用者が折り紙をすることに承諾することを予想していたと考えられ，想定外の利用者の返答に会話が終了してしまったと考えられる.

例1　利用者からの拒否に反応できない学生のやり取り例

声かけ前の利用者	学生の発話意図	学生の発話	利用者の発話
イスに座ってテレビを見ていた.	以前，折り紙の活動を通してコミュニケーションを図ることができたため，折り紙をしようとした.	**一緒に折り紙やりませんか.**	**やらない.**

4.3 利用者の拒否へ働きかけ再度拒否され反応できない学生のやり取り例

例2は，学生が利用者へ声をかけ利用者から拒否されたものの，利用者へ働きかけ声をかけたところ，利用者からの再度拒否に反応できなくなってしまった例である．学生は，ボーとしている利用者を観察して何か一緒にした方が良いと考え，「一緒にパズルしませんか」（共同行為要求）と声かけたところ，「私頭悪いからそんなのしないわ」とすぐに断られてしまった．ここで学生は，認知症のためにパズルがどういう物であるか言葉だけではイメージできない可能性を考え，実際に利用者に見せることでパズルを理解してもらえば，一緒にできるのではないかと期待したと考えられる．また，脳を活性化させるために何か刺激を与えることは良いことという介護知識を思い出し，「簡単ですからやってみませんか」と，再度パズルをすることを声かけしたと考えられる．しかし，利用者の返答は「私頭悪いからやらない」と，拒否が繰り返され会話が終了してしまい，学生の期待通りの結果とはならなったと考えられる.

例2　利用者の拒否へ働きかけ再度拒否され反応できない学生のやり取り例

声かけ前の利用者	学生の発話意図	学生の発話	利用者の発話

一人でボーとしていた利用者さん	暇そうにしていたので声をかけた.	**一緒にパズルしませんか.**	**私頭悪いからそんなのしないわ.**
	実際に見てもらって，簡単だと思ってもらいやってもらおうと思った.	**簡単ですからやってみませんか.**	**私頭悪いからやらない.**

4.4 利用者の肯定的反応へ働きかけた後に利用者から拒否され反応できない学生のやり取り例

例3は，学生が利用者へ声をかけところ，利用者から肯定的な反応が得られ，学生は利用者へ肯定的に反応したところ，利用者から拒否さら反応できなくなってしまった例である．学生は利用者から一度受け入れられた後に拒否される典型例である．この学生は，いつも一人席で雑誌をちぎっている利用者に関心を寄せ，利用者のその行為を理解するために「何をされているんですか.」（情報要求）と声かけしたところ，「こうやってちぎってるんだ.」（情報提供）と利用者の肯定的回答を受けることができた．ここまでは，利用者が学生の情報要求に対し否定せずに，自分の行為を説明するように回答している．このことから学生は，自分の声かけに対して利用者から受け入れられたと感じたが，自分の声かけに対する明確な答えではなく，雑誌をちぎって何をしたいのかが十分に理解できなかったのである．そこで，学生はもっと利用者を理解するために情報を得たいと思いながら，ここで再度聞き返すことは一生懸命に取り組んでいる利用者に対して否定的な言葉になる可能性があると考えたのである．そこで，本来知りたかった雑誌をちぎることで何をしたいのか情報を得ることにチャレンジして，「そうねんですね．一生懸命なんですね」（肯定的評価）と，利用者へ声をかけた．しかし，「何もしないでそこで見ててくれ！」と利用者に言われ，反応できなくなって会話が終了している．この時点で学生は，利用者からさらに情報を得られるだろうという期待を持ち，拒否されることを想定していなかったため，期待と違った状況に返答できず会話が終了してしまったと考えられる．

例3　利用者の肯定的反応へ働きかけた後に利用者から拒否され反応できない学生のやり取り例

声かけ前の利用者	学生の発話意図	学生の発話	利用者の発話
いつも一人席で雑誌をちぎっている	雑誌をひたすらちぎっていた．何がしたいのだろうか.	**何をされているんですか.**	**こうやってちぎってるんだ.**
	何をしたかったのかわからなかった．だが，一生懸命取り組んでいるから否定的なことは言えない.	**そうねんですね.** **一生懸命なんですね.**	**何もしないでそこで見ててくれ！**

4.5 利用者からの声かけに反応した後に利用者から拒否される学生のやり取り例

例4は，利用者から学生が声をかけられ，学生が反応しところ，利用者から拒否され反応できなくなってしまった例である．学生は利用者から手招きされたため利用者の所へ向かったところ，「いつになったら家に帰れるのですか」（情報要求）と聞かれた．この利用者の問いかけは，いわゆる帰宅願望と呼ばれる認知症の人が示す症状のひとつである．利用者は自分がいる場所が自宅ではないことを認識しているものの，自分が施設入所していることが理解できない状況で混乱している状態で声かけしている．学生は利用者の混乱状態を把握しているものの，利用者の帰りたい願望を叶えることはできないことを知っているため，どのように返答すべきかジレンマに陥りながら「今日は1日泊まりですよ」（情報提供）と答えている．学生の返答に納得できない利用者は「いつになったら家族が迎えにきますか」と，再度の情報要求をしたため，学生は利用者からの情報要求に対する返答に苦慮した．その結果，自分の立場を正直に「僕は学生です．ここで勉強させてもらっています」（情報提供）述べたところ，「じゃあダメだ．あてにできん」（否定的評価）と利用者からかかわりを遮断され，会話が終了してしまった．学生は，認知症の利用者への対応について，嘘をついてはいけないと正しい情報提供を心掛けたにもかかわらず，利用者から最終的に拒否されてしまった． 学生は，正しい情報を利用者に提供することによって，利用者は状況を理解し帰宅願望が軽減するだろうと期待を持っていたと考えられる．そのことから，利用者から拒否されることは想定されず，利用者からの否定的評価に返答できず会話が終了してしまったと考えられる．

例4　利用者からの声かけに反応した後に利用者から拒否される学生のやり取り例

声かけ前の利用者	学生の発話意図	学生の発話	利用者の発話
「お姉ちゃん」と呼び，私のことを手招きした.			**いつになったら家に帰れるのですか.**
	施設暮らしが長かったため，家に帰りたかったのだと思う．私に聞けばいつ帰れるか知ることができると考えたのではないか．しかし，実際には帰れない.	**今日は1日泊まりですよ.**	**いつになったら家族が迎えにきますか.**

	知らない人に言われても信用できないだろう．私のことをしっかり伝え，知ってもらおう．	**僕は学生です．ここで勉強させてもらっています．**	**じゃあダメだ．あてにできん．**

4.6 利用者からの声かけに反応し学生が拒否するが再度の声かけに反応できない学生のやり取り例

例5は，利用者から学生が声をかけられ，学生が断りの反応しところ，利用者から繰り返し声をかけられ，学生が反応できなくなってしまった例である．利用者から「お腹すかない？何か食べ物を持って来ようか？」（情報要求）と声をかけられた学生は，食べ物を必要としていない状況であったため「僕は食べてきたので大丈夫です」（情報提供）と伝えた．しかし，利用者は学生の言葉を受け入れずに，「いやいや君のことが心配だから，台所で何か作ってくるよ．ちょっと待ってて」と言い，何としても学生に何かを食べさせようとした．学生は，利用者の行為を受け入れられないが，そのことを繰り返し利用者に伝えることもできずに，会話が終了したと考えられる．学生は，利用者へ一度断ることによって，利用者はその断りを受け入れてくれるだろうという期待をしたが，想定外の反応を求められ，学生は戸惑い反応ができなくなったと考えられる．

例5　利用者からの声かけに反応し学生が拒否するが再度の声かけに反応できない学生のやり取り例

声かけ前の利用者	学生の発話意図	学生の発話	利用者の発話
テレビを見ていた．			**お腹すかない？何か食べ物を持って来ようか？**
	私が食べる姿を見ていないから気を使ってくれたんだと思う．	**僕は食べてきたので大丈夫です．**	**いやいや君のことが心配だから，台所で何か作ってくるよ．ちょっと待ってて．**

5. 結論と今後の課題

本研究では，学生の介護実習中に起きた利用者とのコミュニケーションにおいて，利用者から拒否され会話が展開しなかったと学生が感じた場面から，利用者の状況とそれを踏まえた学生の意図と双方の発話を記述し，そこで何が起こっていたのかを分析した．学生が「拒否された」と感じる背景には，自分が期待していた利用者の反応を得ることができない，想定外の利用者の反応や行動が影響していることが明らかとなった（例(1)-(5)）．学生が利用者に拒否されたと感じたコミュニケーションには，学生と利用者のいずれがやり取りを開始したとしても，学生が唐突に利用者に何らかの要求をした（例(1)-(2)），利用者に対する情報提供が適切にできなかった（例(3)-(4)），利用者からの親切心による言葉の押し売りをされた（例(5)）場合に，やり取りが停滞し，学生は何も返答できなくなり会話が終了してしまった．その結果，学生は利用者に「拒否された」と感じることが特徴的として見いだされた．以上は，19例のプロセスレコードから見られた傾向を分析したものであり，数量的な分析が十分ではない．今後，介護現場で職員が利用者から拒否されたと感じるコミュニケーションについてデータを検討することが課題として指摘できる．利用者から拒否されたと感じてコミュニケーションが終了してしまうのではなく，介護におけるコミュニケーションとは，意図的に展開していく専門技術であるという視点から，職員がどのように対応しているのかという解決パターンの検討が今後の課題である．

謝辞　本稿は，科学研究費補助金基盤研究（C）「教材開発を目指した高齢者介護施設における新人介護人材育成のプロセスの実態調査」（課題番号ＪＰ18K02118 代表大場美和子）の一部である．調査協力者に感謝申し上げます．

参考文献

西村洋子編集（2018）．介護の基本　メヂカルフレンド社

櫻井恵美（2016）．介護福祉士養成カリキュラムにおけるコミュニケーション技術の教育内容に関する一考察：介護実習巡回指導と実習後のインタビュー調査の分析を通して　大妻女子大学人間関係学部紀要，18，39-48.

芝田郁子（2016）．介護実習Ⅱ』における実習生の認知症高齢者とのコミュニケーションの特徴ープロセスレコードの分析からー　名古屋柳城短期大学研究紀要，38，139-152.

国立国語研究所（1994）．日本語教育映像教材 中級編 関連教材 伝え合うことば 4機能一覧表　大蔵省印刷局

木村文代（1973）．プロセス・レコード　信州大学医学部附属病院看護研究集録，34-44.

吃音者の相互行為

ー吃音に対処するための工夫に注目してー

澤井雪乃(筑波大学大学院生)

1. はじめに

吃音はことばの流暢性の障害である．吃音の主な症状は，①音や音節の繰り返し，②音の引き伸ばし，③話している最中に生じる呼吸や声のブロックである(Guitar, 2006)。以下に発話例を示す。

［発話例］
01　T：そう hhhhhh(.)そうそう hh それ僕も昨日からずっとおもって,:あれって-
02　(0.4)
03　T：ぼ::::::↑僕らの<中間発表>の>はなし<してんのか:,

03 行目で吃音者 T は「僕」の語頭音「ぼ」を引き伸ばしている．これは吃音症状の②音の引き伸ばしにあたる．思春期以降になると，吃音者は①繰り返し，②引き伸ばし，③ブロックの症状が目立たないように工夫を試みる(Guitar,2006)．例えば，発話場面を避ける，特定の語を避ける，別の言葉に言い換える，「ええと」「あのー」など挿入語を使用するなどの行動が報告されている(e.g., Lowe,et al.,2017；Vanryckeghem,et al., 2004)．このように吃音に対処する行為は，「二次的行動(Secondary behavior)」 (Guitar,2006)と言われ，早ければ 6～13 歳ごろに自然と習得する (Guitar,2006)．なお，二次的行動には，フィラーのように比較的観察可能な行為から，発話場面を避ける，特定の語を避けるといった本人の報告によってしか特定できない行為もある．本研究では観察および報告可能で，かつ発話に関連する二次的行動に注目する．

これまで吃音者が発話を工夫する理由として，多くの研究者がどもることへの恐怖心や羞恥心を挙げてきた(e.g.,Corcoran & Stewart, 1998；Crichton-Smith & Isobel, 2002；Guitar, 2006)．例えば Guitar(2006)は，自分の吃音に対して聞き手がイライラしている，不満に思っているなどの否定的な思い込みを挙げている．このような心理学的な研究が盛んな一方で，近年吃音者の相互行為を分析する重要性も指摘されている (e.g.,Acton,2004；Hayhow & Stewart,2006；Starkweather,1999)．例えば Acton(2004)は，工夫の働きや生起理由を説明するには，電話会話や対面会話などの相互行為場面の分析が有効であることを指摘する．しかし，筆者が知る限りでは工夫の働きや生起理由について相互行為の視点から実証的に示した研究は見られない．そこで本研究は，吃音者が用いる発話を工夫する行為を精密に分析し，相互行為においてどのように用いられているかを明らかにする．

2. データ・分析方法

吃音者 5 名と非吃音者 2 名に会話の録音を依頼した。会話を録音する前に 7 名に対して紙面上で研究の目的を説明し，同意を得た．本研究で用いるデータは，計 3 組の電話会話である(合計約 60 分)．会話は吃音者によって録音されたもので，各組には吃音者が一人以上含まれている．なお，吃音症状および吃音に対処する工夫を同定するために，国内で広く用いられている吃音検査法(小澤ほか，2013)を参照した．分析手法は会話分析を用いた．

3. 分析

具体的な分析に入る前に，さきにデータから分かったことを述べておきたい．分析を進めるなかで以下のような位置で吃音症状およびフィラー系の発話が繰り返し観察された．

［作例］((吃音症状を**太文字**でフィラーを網掛けで示す．))
私は，**だー**　ええと　大学生です

作例のように，ターン構成単位(TCU)の途中に吃音症状が生じ，その直後に「ええと」や「あのー」などのフィラー系の発話が生じる．筆者は吃音検査法を参照し，吃音症状の直後にフィラー系の発話を差しはさむ行為を吃音に対処するための工夫と判断した．この位置で見られる吃音症状およびフィラー系の発話を詳細に分析した結果，次の三点が明らかになった．一点目に吃音者は，吃音症状によって語の産出が困難になった場合，それ以上吃音症状が長引かないように語の産出を一旦中断する．二点目に，発話を中断した直後にフィラーを用いることで，吃音によるトラブルを言葉探しのトラブルとして受け手に表明する．三点目に，このように吃音のトラブルを言葉探しの活動に組み込むことで，吃音によって中断した語を再度産出する機会を確保していた．では断片(1)を見てみよう．

(1)［服のセンス］((吃音者Aと非吃音者Bの電話会話である．二人は共通の友人Cの服装がいつもおしゃれであることについて話している．Bはこの会話の直前に，実はCの服のほとんどがもらい物であることをAに伝えた))

01→A：もらいものに.hhhhh しても[::，**mg-mg-mg-(0.4)**>なんだろうく,
02　B：　　[うん
03　(0.5)
04　B：う[ん
05　A：　[<もらう服の>:センスが¥いいっていうのかな．¥

01行目でAは「もらいものにしても」の後に「mg-mg-mg-」と言い淀んだ後，0.4秒の間合いを空けて「なんだろう」を産出する。筆者は，この「mg-mg-mg-」+間合い(0.4秒)について吃音検査法を参照し，「ブロック」の吃音症状と判断した．そして03行目でAは0.5秒の間合いを産出し，04行目でBは「うん」と相槌を打つ．そしてAは05行目で「もらう服のセンスがいいっていうのかな」と発話を産出し終える．まず，「mg-」の音と05行目の「もらう」に注目して頂きたい．まず「mg-mg-mg-」は「もらいものにしても」に続いていることから，「mg」はある単語の語頭を発していると考えられる．事実，吃音が生じる位置の90%が単語の語頭であることが報告されている(e.g.，菊池ら，2013；Weiner,1984)．さらに，筆者が確認したところ「mg」は「もらう」の語頭「も」の準備音として聞き取れる．これらを考慮すると，01行目の「mg-mg-mg-」は「もらう」の産出を試みていると言えよう．したがって，01行目でAは吃音が顕現しないように，発話を中断して目標語の産出を延期したことが分かる．続いて，Aが発話を中断した直後に発した「なんだろう」に注目してほしい．Hayashi(2003)によると「なんだろう」は言葉探しに従事していることを示す自問型の形式であり，次の発話の産出にトラブルがあることを表明する．さらにAの「>なんだろうく，」は速いスピードで，なおかつ末尾の音が落ちないように産出されている．したがって この「なんだろう」は受け手Bに協力や助けを求めていない言葉探しとして認識可能である．このように言い淀みを，助け船を求めない言葉探しとして標示することで，02行目以降ではAの発話を待つことが公然となる．実際に，Bは04行目で「うん」と受け手としてふるまっていることから，Aの言葉探しを待つことに志向したといえる．

以上をまとめると，Aは吃音症状が顕現しないように目標語の産出を一旦中止し，即座に「なんだろう」を用いることで，言葉探しの活動に入ることを会話参加者Bに表明した．これによって，Bが受け手としてふるまうことを公然化し，目標語「もらう」をもう一度産出する機会を確保したといえる．続く断片(2)では，「吃音症状＋フィラー系の発話」が繰り返し用いられている．

(2)［名前］((MとKの電話会話であり，M，K共に吃音者である．MがKの子どもの名前の由来を尋ねる場面である．))

01→M：あっあのさ:::(.)あの::[>ええとく**sh:::::::::**えっと::**ん-(・・・・・)((震え))**
02　K：　　[>うんうんうんく
03→M：>なんていうかく**その::**.hhhh えっと::.hhh **sh:::::::::::::**その::.hhh ええと::
04　(0.7)
05　M：゜ちょっと゜.hhhhh(あれ)゜**sh-sh-sh-sh-**゜しりたい(.)ことがあってね.=
06　K：=うん

07　(0.5)
08　K：　[> *うんうんうん.* <]
09　M：　[　*あ*の:::　　]あの:::**え**-ええと::<*名前の*::>(3.0)° **y-y-y-y-y-y**°
10　　由来って::[.hhhh **ん**::何なんやろうと思って.

01行目でMは「あっ」と新たに話題を想起したことを示す．そして「あのさーあのーええと」を挟んで，具体的な内容に入ろうとする．しかし冒頭で「sh:::::::::」と引き伸ばしの症状が生じる．その直後に「えっとー」とフィラーを産出する．このような吃音症状＋フィラーの組み合わせが，01行目と03行目においてさらに2回生じる．2回目は「吃音症状＋なんていうかそのーえっとー」であり，3回目は「吃音症状＋そのーええとー」であった．最終的に05行目で「sh-sh-sh-sh-」とブロックの症状を伴いながら「しりたい，ことがあってね」と発話を産出し終える．断片(1)と同じく，01行目と03行目に生じる吃音症状「sh」と05行目の「しりたい」に注目してほしい．筆者が確認したところ，「sh」の音は明らかに「しりたい」の語頭「し」の準備音として聞き取れた．したがって，Mは当初「しりたい」を産出する予定であったが，「し」の音で吃音が生じたため産出を一度中断したといえる．続いて，吃音症状の直後に生じる一連のフィラーに注目してみよう．Hayashi(2003；113)によると日本語における言葉探しは，通常音の引き伸ばしや中止などによって開始され，その際「あの」，「なんか」そして「なんだ(った)っけ」などの形式と共起することが多い．この断片で見られるフィラーも「sh:::::::」という引き伸ばし，そして発話の中止の後に続いている．したがって，言葉探しに従事することを表明するフィラーであるといえる．以上のことから，断片(2)においても吃音症状が長引かないように吃音が伴う発話の産出を一旦中止し，フィラーを用いて言葉探しの活動に入ることを受け手Kに表明していた．最後に断片(3)を見てみよう．断片(3)は，言葉探しの活動を効果的に利用する例である．

(3) [Golden Week] ((吃音者Yと非吃音者Hの会話である．YとHはゴールデンウィーク中に会う約束をしており，この会話では日時を相談している．01行目の直前にYの方から日程を提案した))

01　H：*うん*(.)全然いい　[よ::.
02　Y：　　[>なんか<ゴールデンウィーク中:::,(0.7)けっこう:,
03　　° **a-a-a-a-a-°** ***あ-°*** **a-a-a-a-a°**　((力み))　あの:::::>天気が悪い::<みたいで.
04　(1.0)
05　H：あ:あ:あ:::,
06　(0.8)
07　Y：前半はずっと::,(.)>なんか<(.)曇りとか,
08　(0.6)
09　H：うん=
10　Y：=***あ***めとか?((語頭の力み))
11　(0.5)
12　H：う::ん↓=
13　Y：=降ってる::,

01行目でHは「うん，全然良いよ」とYが提案した日程を承諾する．そしてYは02行目からその日を選んだ理由を説明する．02行目でYは「なんかゴールデンウィーク中，けっこう」と言い，直後に「a-a-a-a-a-° *あ-*° a-a-a-a-a」とブロックの症状が出る．その直後に言葉探しを標示するフィラー「あのー」を産出し，「天気が悪いみたいで」とそもそも休暇中は天気が悪いことを説明する．Hはそれに対して「あーあーあー」とYの説明を受け止める．さらにYは07行目から所々間合いを挟みながら「前半はずっとーなんか曇りとかあめとか? 降ってる」と03行目の発話に対して詳細な説明を加える．実際に，Yが提示した日程はゴールデンウィーク休暇の後半であることから，Yは休暇前半の悪天候を考慮したのだろう．

ここで03行目の吃音症状「a-a-a-a-a-° *あ-*° a-a-a-a-a」に注目してほしい．これは02行目の「けっこう」に続く発話であることから，ある単語の語頭を産出する際に生じた吃音症状として認識可能である．同様に10行目「あめ」の「あ」も語頭で発生した吃音症状であり，不自然な力みを伴って発音されている．これらを考慮すると，遡及的ではあるが03行目の吃音症状「a-a-a-a-a-° *あ-*° a-a-a-a-a」は「あめ」の語頭「あ」の産出を試みていると言える．したがって，03

行目でYは，吃音症状「a-a-a-a-a-゜あ-゜a-a-a-a-a」が長く続かないように「雨」の発話を中断していると解釈できる．続いて「あのー」の直後に産出される「天気が悪いみたいで」(03行目)という発話を見てみよう．この「天気が悪い」という表現は，言い方は異なっているが「曇りとか」(07行目）および「雨とか?」(10行目）と同じ意味内容を持つことに注目してほしい．つまり断片(1)(2)とは異なり，Yは中断した語「雨」の産出を試みず代わりとなる表現を産出した．そして「天気が悪い」と想像の余地を残すことで，10行目で「雨」を産出する機会を確保できた．実際に，受け手であるHも04行目で1.0秒の間合いが空いてようやく「あーあーあー」とYの説明を受け止めている．したがって，「天気が悪い」という説明に対して理解の問題があったことが伺える．以上をまとめると，Yは言葉探しの活動を利用して，中断した語に代わる表現を産出していた．そしてその表現をさらに詳細に説明する過程で，中断した語を産出することに成功した．

4. おわりに

以上，吃音症状が生じた直後にフィラー系の発話を差しはさむ行為を分析した．データ分析の結果，吃音者は吃音症状によって語の産出が困難になった場合，それ以上症状が顕現しないように語の産出を一時中断していることが分かった。さらに，フィラーを用いることでその非流暢性を言葉探しのトラブルとして受け手に表明していた．このように吃音による非流暢を言葉探しの活動に組み込むことで，吃音者は中断した語を再度産出する機会を確保していた．本研究から吃音者は，非吃音者でも用いる言葉探しという何気ない活動を巧に利用し，吃音のトラブルに対処していることが分かった．

これまで発話を中断してやり直す行為や，フィラーを挿入する行為は，どもることへの恐怖心や羞恥心の表れと見なされてきた．本研究から，それらの行為を相互行為の視点から説明することが可能であることが示唆された．今後は事例数を増やしてさらに分析を進めていきたい．

5. 参考文献

Acton, Ciaran (2004). A conversation analytic perspective on stammering: Some reflections and observations. Stammering Research, 1(3), 249-270.

Corcoran, Joseph A., & Stewart, Moira (1998). Stories of stuttering: A qualitative analysis of interview narratives. *Journal of Fluency Disorders*, 23, 247-264.

Crichton-Smith, Isobel (2002). Communicating in the real world: accounts from people who stammer, *Journal of Fluency Disorders*, 27(4), 333-352.

Guitar, Barry (2006). *Stuttering: An integrated approach to its nature and treatment. 3rd ed.* Philadelphia: Lippincott, Williams & Wilkins.

Hayashi, Makoto (2003). Language and the body as resources for collaborative action: A study of word searches in Japanese conversation. *Research on Language and Social Interaction*, 36(2), 109-141.

Hayhow, Rosemarie, & Stewart, Trudy (2006). Introduction to qualitative research and its application to stuttering. *International Journal of Language & Communication Disorders*, 41(5), 475-493.

菊池良和・梅﨑俊郎・安達一雄・小宗静男 (2013). 吃音症のブロック発生時の声帯運動 喉頭, 25(2), 79-82.

Lowe, Robyn, Helgadottir, Fjola, Menzies, Ross, Heard, Rob, O'Brian, Sue, Packman, Ann, & Onslow, Mark (2017). Safety behaviors and stuttering. *Journal of speech, language, and hearing research*, 60(5), 1246-1253.

小澤恵美・原由紀・鈴木夏枝・森山晴之・大橋由紀江・餅田亜希子・坂田善政・酒井奈緒美 (2013). 吃音検査法(解説) 学苑社.

Starkweather, Woody C. (1999). The effectiveness of stuttering therapy: An issue for science. In Bernstein, Ratner N., & Healey, Charles E (Eds.), *Stuttering research and practice: Bridging the gap*, pp. 231-244, UK: East Sussex, Psychology Press.

Vanryckeghem, Martine, Bruttena, Gene J., Uddin, Nizam, & Borsel John Van. (2004) A comparative investigation of the speech-associated coping responses reported by adults who do and do not stutter. *Journal of Fluency Disorders*, 29(3), 237-250.

Weiner, Adeline (1984). Stuttering and syllable stress. *Journal of Fluency Disorders*, 9(4), 301-305.

短単位 n-gram を用いた看護実習記録の「情報収集」から「アセスメント」への展開における表現の分析

山元一晃(国際医療福祉大学)　浅川翔子(慶応義塾大学)　加藤林太郎(国際医療福祉大学)

1. 研究背景と目的

看護系大学に対する調査（日本看護系大学協議会, 2017; 2018）によれば, 2017 年の時点で看護系大学で学ぶ留学生が 321 名いることが分かっており, 2016 年は 234 名だったことから, この数は増加傾向にあることが予想される[1]. 一方で, 看護の知識なく入学し 4 年の課程を経て看護師を目指す留学生のための知見は多くない. それでも, 経済連携協定（EPA）により来日する看護師候補生に対しては, 海外人材育成協会 (2011)などの教材が整えられつつあり, その中でも看護師が実際に記入する記録様式への記入が扱われているが, これは, 看護学生が記入することを想定したものではない. また, 実習記録は独特の様式に記入するもので, 一般的なアカデミックライティングのテキストで扱われるような論文やレポートと大きく異なっており, 留学生が記述する際に困難を感じることが予想され, その指導のための知見が必要である.

看護の実習記録に用いられる表現についての研究には, 山元・浅川（2019）, 山元・加藤（2019）などがある. 前者は, 品詞の分布や使用語彙について分析し, 様式や項目によって, その分布が異なることを明らかにした. また, 山元・加藤（2019）は, 文末の表現について分析し, 項目により, 使用される動詞も含め, 記入の仕方に明確な違いが認められることを明らかにした. 看護留学生への日本語教育にあたって, これらの知見は重要な資源となる.

一方で, 前者は, 品詞の分布, 使用語彙の研究であり, そのコロケーションについては明らかとなっていない. また, 後者は文末表現のみに着目したものであり, 文末以外ではどのような表現が使われているのかは明らかにはなっていない.

そこで, 本稿では, 語彙の特徴や文末表現に限らない看護の実習記録における表現を明らかにするため短単位 n-gram[2]を用いて分析することとした.

2. 方法

分析対象として, 山元・浅川（2019)や山元・加藤（2019）と同様に, 任（2015）に含まれる実習記録の手本を対象とした. このテキストは,「成人看護学」など 5 領域の手本が示されており, また, それぞれの領域について, 複数の実習記録の記入例が示されている. 今回は, そのうち「アセスメント（情報収集と解釈・判断)」を対象とした. SOAP 展開[3]における, S データ（主観的データ), O データ（客観的データ）およびそれに基づく A データ（アセスメント）が含まれるためである. これにより, 情報収集の流れに沿った表現形式の差異が明らかになると考えられる.

分析に先立ち, 形態素解析機 MeCab 0.996 および形態素解析用辞書 UniDic 2.3.0 を用いて短単位[4]に分かち書きした. その後, コンコーダンサーである AntConc 3.5.8[5]を用いて「アセスメント（情報収集と解釈・判断)」の各項目について, 3-gram, 4-gram, 5-gram の連鎖を抽出し, 頻度が 5 以上のものについて詳しく観察した. n-gram を用いたのは, 文末以外も含めたよく用いられる表現を抽出したかったためである.

3. 分析結果と考察

本発表において対象とした「アセスメント（情報収集と解釈・判断)」の様式は, 図 1 のように「情報」「情報の解釈と分

---

1 ただし, 看護系大学は増加傾向にあり, このことが各大学に在籍する留学生数の増加を示すわけではない.

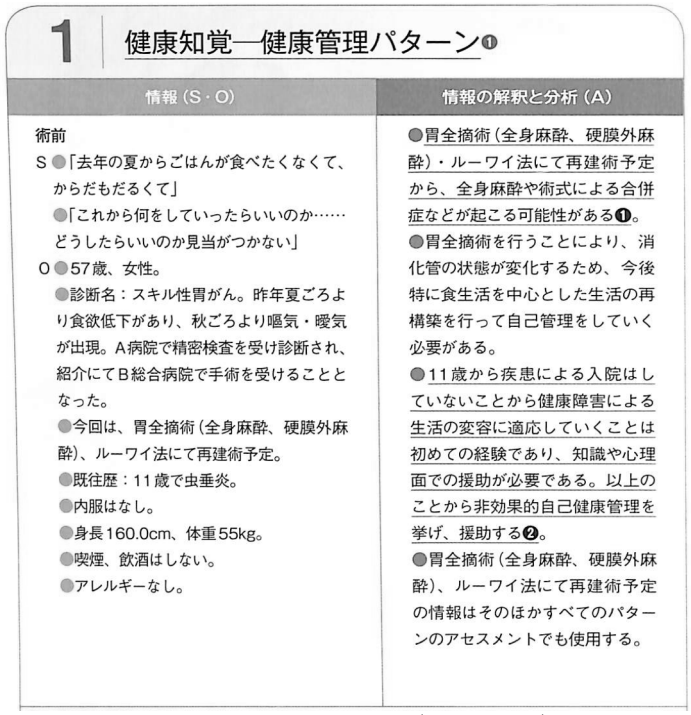
2 n-gram とは「テキスト内に出現する任意の長さの文字（または形態素）の連鎖のこと」(李ほか, 2018, p. 241) である. 本発表では, 形態素として短単位を用いた, 短単位 n-gram を使用する.

3 「看護課程の第 4 段階である実施において用いられる経過記録の様式の一つ. 問題志向型看護記録において開発され, ①主観的データ (S) subjective data：患者の訴え, ②客観的データ (O) objective data：観察, 検査等, ③アセスメント (A) assessment：これらのデータに基づく記録者の査定, 評価, ④計画 (P) plan に分けて記録する.」（五十嵐隆ほか (編) (2013)『看護学大事典』, メジカルフレンド社. ）

4 短単位については, 小椋ほか (2011) に詳しく説明されているので, 参照されたい.

5 AntConc は Laurence Anthony 氏が開発しているコンコーダンサーである. 詳細は, Anthony 氏のウェブサイト [https://www.laurenceanthony.net/software/antconc/, 2019 年 12 月 4 日確認]を参照のこと.

析」に分かれており，「情報」はさらに主観的データであるSデータおよびOデータに分かれている．また，「情報の解釈と分析」はアセスメントであるAデータに相当する．以下，Sデータ，Oデータ，Aデータに分けて分析結果と考察を示す．



1 健康知覚―健康管理パターン❶

情報（S・O）	情報の解釈と分析（A）
術前 S ●「去年の夏からごはんが食べたくなくて、からだもだるくて」 ●「これから何をしていったらいいのか……どうしたらいいのか見当がつかない」 O ●57歳、女性。 ●診断名：スキルス性胃がん。昨年夏ごろより食欲低下があり、秋ごろより嘔気・曖気が出現。A病院で精密検査を受け診断され、紹介にてB総合病院で手術を受けることとなった。 ●今回は、胃全摘術（全身麻酔、硬膜外麻酔）、ルーワイ法にて再建術予定。 ●既往歴：11歳で虫垂炎。 ●内服はなし。 ●身長160.0cm、体重55kg。 ●喫煙、飲酒はしない。 ●アレルギーなし。	●胃全摘術（全身麻酔、硬膜外麻酔）・ルーワイ法にて再建術予定から、全身麻酔や術式による合併症などが起こる可能性がある❶。 ●胃全摘術を行うことにより、消化管の状態が変化するため、今後特に食生活を中心とした生活の再構築を行って自己管理をしていく必要がある。 ●11歳から疾患による入院はしていないことから健康障害による生活の変容に適応していくことは初めての経験であり、知識や心理面での援助が必要である。以上のことから非効果的自己健康管理を挙げ、援助する❷。 ●胃全摘術（全身麻酔、硬膜外麻酔）、ルーワイ法にて再建術予定の情報はそのほかすべてのパターンのアセスメントでも使用する。

図1　アセスメントの一例（任 2015, p. 14）

4.　Sデータ

Sデータは原則的にカギ括弧（「」）を用いて，患者やその家族の言葉をそのまま記述している．

3-gramで連鎖を抽出したところ1532種類，1765トークンがみられ，そのうち，以下の表現が頻度5以上であった．（ ）内は，頻度を示す．

し て いる (10)	て い ます (10)
し て い (7)	て い た (6)
に し て (6)	に つい て (6)
よう に し (6)	

「している」「ています」のようなアスペクト表現がいずれも10例みられた．「ていた」も6例あることがわかる．また，「ようにし」が6例あった．これらはいずれも「ようにしている」または「ようにしています」であり，患者が普段気をつけていることを示している．Oデータ，Aデータではいずれも，「ようにし（ている）」は頻度5以上の連鎖には含まれていなかった．これはSデータの特徴であるといえる．

4-gramで連鎖を抽出したところ，3482種類3902トークンみられた．「ようにして」が6例あったほかは，頻度が5以上のものはなかった．5-gramについては，頻度が5以上のものはなかった．

5. Oデータ

Oデータには，患者の基本情報，病気の状態，数値など，客観的な情報が記述される．3-gramで連鎖を抽出したところ，3250種類，3903トークンがみられ，そのうち，以下の表現が頻度5以上であった．

し て いる (37)	錠 日 分 (12)	ｍｇ 錠 日 (12)
行っ て いる (9)	て い ない (8)	時 ｋｇ 時 (8)
ｋｇ 時 ｋｇ (7)	が み られる (7)	て い た (7)
て いる が (7)	数 回 分 (7)	産褥 日 目 (7)
は み られ (6)	内服 し て (6)	ｍ ｅ ｑ (6)
身長 ｃｍ 体重 (5)	通っ て いる (5)	ｃｍ 体重 ｋｇ (5)
ｈ ｂ ｇ (5)		

まず下線を引いた連鎖に分かるように，「ている」のようなアスペクト表現が多いことが分かる．この傾向は，Sデータに類似している．一方，単位が含まれる連鎖も多い．これは数値を含む客観的な情報が示されているためだと考えられる．その他，「がみられる」「はみられ」がそれぞれ，7例，6例みられ，医療者の観察によることを示すために「みられる」という表現が使われることがわかる．

4-gramで連鎖を抽出したところ，3482種類，3902トークンがみられ，そのうち以下の表現が頻度5以上であった．単位の連鎖が多いことがわかる．

ｍｇ 錠 日 分 (12)	時 ｋｇ 時 ｋｇ (8)	身長 ｃｍ 体重 ｋｇ (5)

なお，5-gramでは，頻度が5以上の連鎖はみられなかった．

5. A データ

A データには S データと O データに基づいて解釈・分析が記述される．3-gram の連鎖を抽出したところ 4955 種類，6093 トークンがみられ，そのうち以下の表現が頻度が 5 以上であった．上位の 2 表現が「ている」「ていない」であり，アスペクト表現が多いことが分かる．これは S データや A データと類似しており，どのデータを記述する際にも多様される表現だと考えられる．

一方，「必要」や「可能性」を含む連鎖も多くある．また，「あることから」「いることから」のように，「根拠に基づき判断する」（二通ほか 2009，p. 192）表現や，「いるため」のように原因を示す表現が用いられていることが分かる．また，「ているが」「はないが」「であるが」のように，「相反することを述べる表現」（二通ほか 2009，p. 186）も用いられている．これは S データや O データでは見られない特徴であった．

し て いる (43)	て い ない (26)	必要 が ある (26)
に つい て (23)	て いる こと (19)	し て いく (16)
でき て いる (16)	する 必要 が (15)	て いる が (15)
可能 性 が (14)	と し て (12)	性 が ある (12)
つい て は (11)	は み られ (11)	いく 必要 が (10)
て いく 必要 (10)	み られ て (9)	を し て (9)
セルフ ケア レベル (9)	が み られ (8)	が 必要 で (8)
こと が でき (8)	さ れ て (8)	と 考え られる (8)
れ て いる (8)	必要 で ある (8)	が でき て (7)
が 考え られる (7)	られ て い (7)	可能 性 も (7)
性 も ある (7)	ある こと から (6)	い ない こと (6)
いる こと から (6)	こと は ない (6)	し て おり (6)
する こと が (6)	する こと で (6)	する こと は (6)
て い た (6)	て いる ため (6)	て いる と (6)
なっ て いる (6)	なる 可能 性 (6)	は ない が (6)
問題 は ない (6)	援助 する 必要 (6)	が ある ため (5)
し て い (5)	て おら ず (5)	で ある が (5)
で ある こと (5)	でき て い (5)	と なっ て (5)
に なる 可能 (5)	の 体重 増加 (5)	を とる こと (5)
を もっ て (5)	低 栄養 状態 (5)	情報 を 収集 (5)
自立 し て (5)	o 氏 の (5)	

4-gram では，5530 種類 6092 トークンの連鎖が抽出され，頻度 5 以上のものは以下のとおりである．「する必要がある」「いく必要がある」「可能性がある」といった表現が多く抽出されていることが分かる．A データでは，「必要がある」「可能性がある」という表現を用いて，これからの看護において必要とされることを述べたり（判断），根拠から導かれる解釈を記述していることが分かる．また，「については」のような複合助詞も上位に用いられている．

する 必要 が ある (15)	可能 性 が ある (12)	に つい て は (11)
て いく 必要 が (10)	いく 必要 が ある (9)	し て いる が (9)
し て いる こと (9)	が 必要 で ある (8)	し て いく 必要 (7)
られ て い ない (7)	さ れ て いる (6)	て い ない こと (6)
て いる こと から (6)	み られ て い (6)	可能 性 も ある (6)
援助 する 必要 が (6)	こと が でき て (5)	でき て い ない (5)
と なっ て いる (5)	なる 可能 性 が (5)	に なる 可能 性 (5)

また，5-gram では，5772 種類 6091 トークンの連鎖が抽出され，以下の連鎖が抽出された．3-gram，4-gram と同様に「必要」を含む表現が多く抽出されている．また，「ていることから」「みられていない」など現在の状況を表す表現が見ら

れた.

て いく 必要 が ある (9)	し て いく 必要 が (7)	み られ て い ない (6)
援助 する 必要 が ある (6)	し て いる こと から (5)	なる 可能 性 が ある (5)

根拠に基づき判断する表現などの接続表現や,「必要である」や「可能性がある」のように解釈や分析を述べるような表現が用いられていることから,Aデータの記述については,よりマクロな分析が必要であると考えられる.

6. まとめと今後の課題

本発表では,看護の実習記録における「アセスメント」の Sデータ,Oデータ,Aデータにみられる表現の特徴を明らかにするため,短単位 n-gram を用いて,頻度の比較的高い表現を抽出した.その結果,いずれのデータにも共通してみられる特徴として「ている」などのアスペクト表現が用いられていることが分かった.Sデータの特徴として,「ようにしている」という表現を用いて,患者が心がけていることを記述していることがあげられる.また,O データにおいては,S データの特徴に加え,単位の連鎖,「がみられる」「はみられ(ない)」のような表現を用いて,観察される(されない)ことが示されていることが分かった.Aデータにおいては,さらに「必要がある」「可能性がある」のような解釈や判断を表す表現や,接続表現などが用いられ,論理的な記述が行われていることが明らかとなった.これらの表現は,実習記録の記述を指導する際に役立つ知見であると考えられる.

Aデータにおける論理的な記述について,教育に活かすためには,よりマクロな分析が必要であると考えられる.生天目・大島 (2018)が史料引用における引用・解釈表現の特徴を分析している.このような先行研究を参考にして,看護の実習記録において,論理的な記述を求められる箇所において,どのようなパターンが用いられるのかを明らかにする必要がある.

また,本研究においては,頻度の高い表現を概観したに過ぎず,客観的な知見が得られたとは言いがたい.一般的なテキストや,実習記録に用いられている他の様式,論文など様々な書き言葉との差異や類似点を明らかにするためには,データを増やし比較していくような分析も求められる.

謝辞 本研究は JSPS 科研費 JP19K00744 の助成を受けたものです.

参考文献

海外産業人材育成協会 (2011). 専門日本語入門場面から学ぶ看護の日本語 凡人社

李在鎬・石川慎一郎・砂川有里子 (2018) 新日本語教育のためのコーパス調査入門 くろしお出版

生天目知美・大島弥生 (2018). 資料分析型論文の史料引用における引用・解釈表現の特徴-歴史学/国際政治学/地域研究を対象に- 専門日本語教育研究, 20, 19-26.

日本看護系大学協議会 (2017). 『看護系大学の教育等に関する実態調査』2016 年度状況調査 日本看護系大学協議会

日本看護系大学協議会 (2018). 『看護系大学に関する実態調査』2017 年度状況調査 (日本看護系大学協議会と日本私立大学協会との協働実施) 日本看護系大学協議会

二通信子・大島弥生・佐藤勢紀子・因京子・山本富美子 (2009). 留学生と日本人学生のためのレポート・論文表現ハンドブック 東京大学出版会

小椋秀樹・小磯花絵・冨士池優美・宮内佐夜香・小西光・原裕 (2011). 「現代日本語書き言葉均衡コーパス」形態論情報規定集第 4 版 文部科学省科学研究費特定領域研究「日本語コーパス」データ班

山元一晃・浅川翔子 (2019). 手本として示される実習記録の語彙の特徴の分析 言語資源活用ワークショップ 2019 発表論文集, 258-272.

山元一晃・加藤林太郎 (2019). 看護の実習記録の表現の分析-留学生への支援のために- 2019 年度日本語教育学会秋季大会予稿集, 259-264.

調査対象教材

任和子 (2015). 領域別看護課程展開ガイド 照林社

日本語日常会話における「直接的不満表明」と「愚痴」

–不満のターゲットと談話シークエンスに着目して–

Marina B. ASAD（立命館大学大学院生）

1. はじめに

不満表明行為はこれまで，相手の好ましくない行為への反応として話し手が相手に対して行う心的態度の表出行為として扱われてきた (初鹿野ら, 1996). また多くの先行研究での分析対象は，不満を感じる側からの一方向的な不満表明の発話に限定されていた (初鹿野ら, 1996; 李, 2004; 2006). それに対して, 不満表明を談話シークエンスの中で分析することで，不満談話シークエンスの構成が「開始部，主要部，終結部」に分かれ，疑問とその応答から成り立つ開始部の後に，主要部の中で，様々な発話のタイプが使用されることが不満表明に当てはまると指摘する研究（Monzoni, 2008）も存在する. そうした背景から，本研究では新たに，不満表明を談話シークエンス全体の中で遂行される行為だと考え，実際の日本語日常会話において不満表明行為が行われた場合に，不満談話がどのような不満表明のコア要素によって構成され，不満の対象（＝ターゲット）が直接の対話相手であるか否かによって相手の応答がどのように異なるのかを，不満談話シークエンスの観点から明らかにする.

2. 不満表明の定義と分類

2.1 不満表明の定義

不満表明の定義に関しては，①「好ましくない行為への反応として，話し手が直接的，あるいは間接的に行う心的態度の表出行為」（初鹿野ら，1996）や，②「不満な状況を引き起こした相手に対しての反応であると同時に，話し手にとって好ましくない不満な状況を改善してもらう目的を持つ行動」(李, 2006)，そして③「不利な立場を訴えることで，正当性が認められることを期待している語り」(釜田, 2017) などがある．以上の定義から，不満表明行為の性質を整理してみると，不満表明は表出行為 (Expressives[1]) である（①）と同時に，相手に改善あるいは補償行為の遂行を要求する策動行為 (Directives) でもあり（②），不利な立場を主張するという側面から演述行為 (Assertives) でもある（③）と考えられる.

そこで，本稿では，不満表明を，ある種の期待行為や当然と見なされる文化規範に反するような状況を好ましくないと感じることを元に，その望ましくない状況・行為・発話の事態について語ってその状況にいることを訴えるとともに，その状況によって引き起こされた感情を表出することで，主に相手に正当性が認められることを期待し，対話の相手が不満の対象である場合，謝罪，責任承認または行為の改善などを期待する言語行為として捉える.

2.2 不満表明の分類

これまでの研究では，不満を表明される対話者がその不満のターゲットであるか否かに拘らず，話者が望ましくない事態について語ることをすべて不満表明行為として捉えており，不満の発話者が選ぶ発話タイプをはじめ，相手から期待される応答，不満表明の談話シークエンスなどがどのようにターゲットの違いに影響されるのかは未だ明らかではない．そこで，本研究では，不満表明行為を，「不満」の対象が直接の対話相手である「直接的不満表明」と，その場にいない第三者に対する不満（ここでは「間接的不満表明」と呼ぶ）を，不満の対象ではない，または責任がない相手に向ける「愚痴」の2種類に分類し，明確に区別する．この時，「直接的不満表明」を，対話の相手によって引き起こされた好ましくない状況に対する反応である (李, 2006) と同時に，相手に謝罪，責任承認または改善などを期待する言語行為として捉える．それに対し，「愚痴」を，望ましくない事態について嘆くことで，相手に同調してもらい，自分の状況や気持ちを理解し共感してもらうことを求める行為 (釜田, 2017) として捉える．この両者の行為の目的や志向性の違いにより，談話シークエンスの中で不満表明がどのような形態をとるのかが異なっていくのではないかと予想される.

[1] ここで指摘している発話行為の分類における Expressives / Directives / Assertives は，Searl (1979) の分類に基づくものである.

3. 先行研究

これまで「直接的不満表明」行為の遂行には，前述したように同じ行為を遂行する複数の発話デザイン，あるいはストラテジーの間の選択の観点から取り上げた研究が多いが，複数の行為を行う発話が連なる不満談話シークエンスの観点から不満表明行為を分析した研究は依然少ない．本節では，主に「直接的不満表明」(Monzoni, 2008; 釜田, 2017; Asad, 2018) と「愚痴」(Traverso, 2008; 釜田, 2014) のそれぞれを，談話シークエンスの観点から分析してきた研究から得られた知見を整理する．

3.1 「直接的不満表明」の談話シークエンスの特徴

Monzoni (2008) は，サービス提供者に対する利用者からのクレーム電話といった「制度的場面」と，通常に行われる家族内の多人数の対面的コミュニケーションの場面において，「直接的不満表明」の開始部で使用される疑問文の機能の分析を行った．その結果，疑問によって不満談話が開始されることは，相手と共有基盤を作成する働きを果たすことが明らかになった．一方，「不満」と「愚痴」の語りについて論じた釜田 (2017) では，「不満」と「愚痴」の行為の区別を明確せずに両方の行為の分析データに，その場にいない第三者の行為・状況に対するものであったため，二つの行為の相手に共感が示されることが指摘された．

Asad (2018) では，相手に待ち合わせ時間に 45 分待たされた不満の状況に対する日本語とアラビア語エジプト方言の不満談話シークエンスを分析した結果，日本語の不満談話シークエンスの場合，不満を言われる側が談話開始時に 74.4%行う《謝罪》による責任承認を行うことに対して，不満を言う側は前半では《非難》の明示的不満表明を使用する傾向が強いが，後半では，明示的不満表明の発話機能の使用頻度が著しく低下し《忌避》による非明示的不満表明の使用がはっきりと見られた．

3.2 「愚痴」の談話シークエンスの特徴

Traverso (2008) は，フランス語による友人関係を持つ参与者間の「愚痴」（third-party complaint）の対話を談話シークエンスの構成の観点から分析した結果，愚痴の談話構造は，①愚痴の話題内容が導入される「開始部 (initiation)」，②相手に愚痴の話題を理解され，同意される段階といった「コア部分 (core part)」，③「コア部分」でうまく相手に同意されたら，話者が徐々に話題を詳細または明確に述べ続ける部分である「展開部分 (complaint development)」，そして④「終結部 (closing)」，から成り立つことを明らかにした．そして，「愚痴」は，必ずしも円滑に行わることに限らず，しばしば愚痴の話題 (complainable matter) の事実認定が否定される可能性が存在し，この時，相手に交渉 (negotiation)，または話題変移が行われたりすることも見られたので，「愚痴」の相互行為は，無秩序な行為だと主張している．

釜田 (2014) では，「愚痴」をネガティブな評価の語りとして取り扱い，それに対して行われる共感表明の行為を分析した結果，共感が行われる前になされる愚痴の発話によって，共感の示し方や行うタイミングが影響されることを明らかにした．そして，「愚痴」談話シークエンスに関しては，「評価→共感発話→具体的な評価/気持ち→共感発話」といった連鎖が繰り返されると主張している．

4. 研究目的と研究手法

以上のように，先行研究では不満表明の二者の行為の談話シークエンスが持つそれぞれの特徴が独立して論じられてきたが，本研究はこうした議論を踏まえたうえで，日本語の日常会話における雑談のデータにおいて起こり得る不満表明の行為が産出された場合，「直接的不満表明」であるか「愚痴」であるかによって，不満談話においてどのような不満表明行為のコア要素が選ばれ，どの順序で現れるのか両者の行為を比較しながら分析することにより，それぞれの行為には，どのような談話シークエンスの特徴があるのかを明らかにすることを目的とする．

ここで指摘している不満表明行為のコア要素というのは，不満表明行為を行う際に，不満の発話者によって採用される発話の様々なタイプだと定義する．以下の表 1 は，Asad (2018) で用いたロールプレイデータをもとに，先行研究を参考にしつつ整理した不満表明とその応答のコア要素である．不満表明のコア要素には，(1) 有責性の確認，(2) 問題提起，(3) 正当化，(4) 改善要求，(5) 補償要求，(6) 感情表出，(7) 評価といった 7 つの要素があると考えられる．そして，不満表明への応答を分類した結果，全ての応答が不満表明の「正当性」をめぐるものと捉えることができることが分かった．つまり，不満発話者の「正当性」に対して，(I) 確認，(II) 承認，(III) 否定，のいずれかを不満表明の受け手が行っていると考えられる．

研究手法としては，実際の日本人の日常会話において「直接的不満表明」と「愚痴」の談話シークエンスにどのような違いがあるのかを明らかにするために，データとして『日本語日常会話コーパス』モニター版 (小磯他, 2019a; 2019b) を使用する．なお，コーパス中の「直接的不満表明」と「愚痴」の会話断片データの情報を以下の表 2 に示す．

表1：不満表明とその応答のコア要素

不満表明のコア要素						
(1) 有責性の確認	**(2) 問題提起**	**(3) 正当化**	**(4) 改善要求**	**(5) 補償要求**	**(6) 感情表出**	**(7) 評価**
a. 状況説明の要求 b. 動機説明の要求 c. 共有知識の確認	a. 望ましくない行為や状況の指摘 b. 結果として生じる不利益の告知 c. あるべき行為や状況の反実仮想	a. 不満の根拠の提示 b. 表明する理由の開示 c. 要求の正当化	a. 依頼・命令 b. 忠告 c. 警告 d.その他	a. 謝罪要求 b. 代償要求	a. 怒り b. 悲しみ c. 落胆 d. その他	a. 明示的な否定的評価 b. 皮肉 c. その他

	不満表明への応答のコア要素		
	(I) 正当性の確認	**(II) 正当性の承認**	**(III) 正当性の否定**
直接的不満表明への応答	a. 問題状況の確認 b. 共有知識の確認 c. 不満の根拠の確認 d. 表明する理由の開示要求	a. 責任承認 b. 問題の承認 c. 改善の申し出 d. 謝罪 e. 代償の申し出	a. 自己弁護（責任の否認） b. 不満表明者への非難（非難返し）
愚痴への応答	a. 問題状況の確認 b. 不満の根拠の確認 c. 表明する理由の開示要求	a. 問題の理解提示 b. 心情への共感 c. 類似経験の開示 d. 不満対象への否定的評価	a. 事実認定の否定 b. 心情への反対 c. 対立経験の導入 d. 不満表明者への非難 e. リフレイミング

表2：「直接的不満表明」と「愚痴」の会話データの情報

「直接的不満表明」	【断片1】	C002-003 自宅で夫とテレビを見ながら朝食 (00:07:57〜00:08:46)
	【断片2】	K002-007 自宅で娘と娘のスケジュールを確認 (00:19:10〜00:22:28)
「愚痴」	【断片3】	C002-013a 福祉施設にいる母を訪問し母の部屋で雑談 (00:03:23〜00:07:36)
	【断片4】	T016-006a 自宅で妻と食事・晩酌をしながら (00:06:18~00:08:58)

これらの会話データから抽出された「直接的不満表明」と「愚痴」の対話データにおいては，対話者間の人間関係に関して著しく違いが見られた．「直接的不満表明」の場合，対話の参与者が，夫婦関係や，親子関係などといった家族関係によるデータしか見られなかった一方,「愚痴」のデータの場合，家族関係の参与者によるものもあれば，親しい間柄の参与者によるものもあった．そこから，「直接的不満表明」は「愚痴」と比べたら，参与者が非常に親密な関係を持つ家族内関係にいない限り，現実の日本語の日常会話に産出されないことが示唆される

5. 結果と考察

上述したように，本研究では，日本語における「直接不満表明」と「愚痴」にどのような談話シークエンスの特徴の違いがあるのかを考察するために，それぞれの不満談話においてはどのような不満表明とその応答のコア要素が選ばれ，どのような順序で現れるのかという点に着目し分析を行った．その結果として，(i) 不満表明開始時に採用される不満表明のコア要素，(ii) 談話シークエンスの中のやり取りによる満表明とその応答のコア要素の対応，そして両者の行為で使用される共通の特徴の違いという点について「直接不満表明」と「愚痴」の談話シークエンスの特徴の異同が明らかとなった．以下，具体例を交えて説明する．

5.1 不満表明開始時に採用される不満表明のコア要素

本研究では，日本語の現実の日常会話において参与者の双方が互いに予定していなかった不満行為が行われた場合のデータを分析対象としているので，それぞれのデータの独特な状況により独特な開始の仕方が見られた．

まず，「直接的不満表明」が産出された場合，【断片 1】では，不満の発話者である奥さんが自分の主人に昼ご飯を家で食べるかどうかの質問をしたことに対して主人が答えた「どっちでもいい」という応答の曖昧性に対して奥さんが不満に思い，望ましくない行為や状況の指摘を行うという《問題提起 (2-b)》を使用したが，主人が明示的な応答を返さなかったため，奥さんが続けて望ましくない行為や状況の指摘を詳細化し，同じように《問題提起 (2-b)》による一人称の言語形式を使用した．それに対して,【断片 2】では，お母さんが娘の相談内容の中で不満に思った娘の行為に対して，後で指摘する不満の内容について娘と共有知識の確認をまず行ってから,《問題提起 (2-a)》を行い，娘がすべきだったこと《問題提起 (2-c)》による二人称の言語形式を使用した．

それに対して,「愚痴」のデータの場合,【断片 3】では，母娘間の愚痴の対話であったためか，娘から「お父さんへの訪問」の勧誘発話に対して，お母さんがその勧誘を拒否するために，第三者である自分のの第一息子夫婦に対して《評価 (7-a)》を即時に使用し，愚痴をこぼし始めた．つまり,【断片 3】では「愚痴」の行為は，相手からの行為の勧誘への拒否

の機能を果たすことが分かる．その一方，【断片 4】では，愚痴の行為は，純粋に愚痴の発話者から自分の話の語りであるかのように開始された．

5. 2 談話シークエンスの中のやり取りによる満表明とその応答のコア要素の対応

前節ではそれぞれの行為の開始時において使用された要素を明確にしたが，本節では，「直接的不満表明」と「愚痴」のデータを談話シークエンスの観点からみた結果を以下のようにまとめる．「直接的不満表明」では，【断片1】と【断片2】では共通して，不満の受け手に《正当性の承認》よりも《正当性の否定 (III-a)》の要素の方が談話の流れの全体で多く使用されたことに対し，不満を表明する側が《正当化 (3-a)》を使用することが見られたが，【断片2】では，対等の立場ではなく，目下の立場にいる娘に対してお母さんが《正当化 (3-a)》するとともに，相手の行為を否定的に評価したり皮肉を言ったり《評価 (7-a, b)》，改善を求めながら《改善要求 (4)》・《補償要求 (5-b)》に加えて《正当化 (3-c)》として改善要求の根拠を指摘したりするという風に不満談話が行われることが分かった．それに対して，「愚痴」の場合，必ずしも相手に正当性を承認され，共感を示されるわけではなく，相手に共感を示される対話【断片4】と相手に共感されず否定される対話【断片3】を比較すると，《正当性の承認 (II-a, b)》によって共感を示されるときに愚痴を言いやすくなり，《問題提起 (2-a)》，《感情表出 (6)》，《評価 (7-c)》によって対話が続いて収束しやすくなるが，《正当性の否定 (III-a, d, e)》の使用によって相手に否定される場合は，《問題提起 (2-a)》，《正当化 (3-a)》，《感情表明 (6)》によって愚痴が会話の最後まで繰り返され，不満の感情が表明されやすくなる．最後に，「直接的不満表明」と「愚痴」のデータの談話の長さの観点から見ると，「愚痴」の談話のほうがより長く続き，参与者が互いにターンを対等に交代する傾向があるのに対し，「直接的不満表明」の談話は，より短く，不満の対象になっている相手より，不満の発話者のほうが談話シークエンス全体にわたってターンを支配しており，相手からの割り込みの発話が非常に少ないことが明らかになった．

6. おわりに

本研究では，これまであまり扱われることのなかった日本語の現実の日常会話データにおける相互行為としての不満表明を談話シークエンスの観点から分析を行い，不満表明行為の談話相手と不満対象の関係によって「直接的不満表明」と「愚痴」を明確に区別し比較した結果，行為の目的や談話相手が異なることによって，いかに談話シークエンスの特徴も異なってくることを明らかにした．しかしながら，本研究での対象となった不満表明データ数が限られていたため，結果の妥当性がまだ十分とは言えない．そこで，今後の課題として，不満表明行為のデータ数を拡大し，さらにアラビア語エジプト方言による日常会話に見られた不満表明の談話シークエンスの特徴の分析も行うことで，両言語の不満談話の特徴を明らかにしたいと考える．

謝辞

本稿の執筆にあたって指導教員である立命館大学大学院文学研究科の岡本雅史先生から有益なコメントを頂きました. この場を借りてお礼を申し上げます.

参考文献

Asad, M. B. (2018). 日本語とアラビア語エジプト方言における不満表明に関する考察—不満表明と応答からなる不満談話シークエンスに着目して— 社会言語科学会第 42 回大会発表論文集, 55-58.

初鹿野阿れ・熊取谷哲夫・藤森弘子 (1996). 不満表明ストラテジーの使用傾向—日本語母語話者と日本語学習者の比較— 日本語教育, **88**, 128-139.

釜田友里江 (2014). ネガティブな評価に対する共感表明-発話の連鎖を中心に- 表現研究, **100**, 60-69.

釜田友里江 (2017). 日本語会話における共感の仕組み—自慢・悩み・不満・愚痴・自己卑下の諸相— 名古屋大学大学院国際言語文化研究科, 博士学位論文, 平成 29 年 2 月.

小磯花絵・天谷晴香・石本祐一・居關友里子・臼田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・伝康晴・西川賢哉 (2019a). 『日本語日常会話コーパス』モニター公開版の設計と特徴 言語処理学会第 25 回年次大会発表論文集, 367-370.

小磯花絵・天谷晴香・石本祐一・居關友里子・臼田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・伝康晴・西川賢哉 (2019b). 『日本語日常会話コーパス』モニター公開版 コーパスの設計と特徴 国語研究所日常会話コーパスプロジェクト報告書 3.

李善姫 (2004). 韓国人日本語学習者の不満表明について 日本語教育, **123**, 27-36.

李善姫 (2006). 日韓の不満表明に関する一考察—日本人学生と韓国人学生を比較して— 社会言語科学, **8**(2), 53-64.

Monzoni, C. M. (2008). Introducing direct complaints through questions: the interactional achievement of pre-sequences. *Discourse Studies* **10**(1):73-87

Traverso, V. (2008) . The dilemmas of third-party complaints in conversation between friends. *Journal of Pragmatics*,.

初対面会話における日本語母語話者の談話展開

―日本語学習者との比較から―

若松史恵(一橋大学大学院)

1. はじめに

初対面会話は，相手に関する情報量がゼロの状態から始まり，情報交換を行いながら，お互いに相手との共有知識を積み上げていく．そのような場面で参加者は相互にやりとりを行いながら，臨機応変に話題を導入，展開している．初対面会話において選択される話題には，同一文化内での共通性が見られると同時に，各文化間では相違が見られることが指摘されており(三牧，2013)，多くの日本語学習者が話題選択に難しさを感じている(田所，2013)．そのような話題選択の難しさを解消するためには，「何を話すか」だけでなく，会話の流れの中で「どのようにその話題を導入するか」という談話展開についても明らかにする必要があるだろう．しかし，これまでの研究では，談話展開について時間の経過に伴う分析があまり行われておらず，日本語母語話者の談話展開の特徴が十分に明らかになっているとはいえない．そこで本稿では，初対面会話を一定の時間軸を有した動的なものとして捉え，母語話者が時間の経過に伴いどのような後続話題を導入し，談話を展開しているのかを学習者との比較から明らかにする．

2. 先行研究

樋口（1996）は母語話者同士の初対面会話では，会話の初期段階において名前，学年等の個人的情報が交換されるのに対し，母語話者と学習者の会話では，そのような個人的情報の交換が会話全体に点在しているとしている．このため，母語話者同士の会話では，個人的情報は自己紹介部というまとまりをなすことになる．さらに，このような自己紹介部が存在する理由として，母語話者は，会話の初期段階において，その後の話題選択の方向性と話題の展開の方向性について，共通の理解を構築しようとしている可能性に言及されているものの，その後どのように談話が展開していくのかについては明らかにされていない．また，村上・熊取谷（1995）は，隣接するトピック間の談話内容から，トピックの連結型を新出型，派生型，再生型に分類してトピックの展開構造を捉えた．しかし，トピックとしてのまとまりの内部であっても，隣接する発話間ではその内容が緩やかにシフトしていく可能性が考えられる．そこで，本稿では村上・熊取谷（1995）を参考に，隣接する発話間の内容の繋がりから談話の展開を判断し，分析を行う．なお，本稿では，話題境界調査により区切られた一定のまとまりを持つ部分を談話とし，談話にまとまりをもたらしている内容を話題とする．

3. 分析方法

3.1 話題境界調査

会話資料は「BTSJ による日本語話し言葉コーパス」(2011)から，日本語母語話者（以下，NS）と中国語母語の上級学習者（以下，CJL）の初対面二者会話を用いる．母語場面 6 資料，接触場面 6 資料の合計 12 資料を用い，NS は母語場面の話者（6 資料×話者両名分），CJL は接触場面の上級学習者（6 資料×話者 1 名（学習者）分）とする．話者数は NS が 12 名（異なり話者 7 名），CJL が 6 名（異なり話者 4 名）であり，すべての会話は異なる話者の組み合わせで行われている．話者の属性により会話のスタイルが異なる影響を最小限に抑えるため，資料はいずれも 20 代前半の女性，学生のものを選定した．CJL は全員日本の大学に所属している．資料は全て会話開始から 14 分までで[1]，総発話数は，NS は 4,039 発話，CJL は 1,709 発話である．会話を一定のまとまりとしての単位に区切るため，日本語母語話者 9 名に対し話題境界調査（若松，2018）を実施した．そして，5 名以上が話題の切れ目であると指摘した箇所を話題境界と認定した結果，NS には 94 の，CJL には 31 の話題境界が認定された．本稿では，話題境界の次の 1 発話を話題開始部（以下，開始部）とし，開始部と先行文脈との繋がりから談話展開を分析する．なお，発話の単位は長い発話単位（JDRI，2017）とする．

[1] 最も早く会話終了のタイマーが鳴ったペアに合わせ，すべての会話資料について，タイマーが鳴る前までの 14 分間を分析対象とした．

3.2 談話展開の型

開始部と先行文脈との繋がりという観点から談話展開の型を定義する．談話展開の型は村上・熊取谷 (1995) を参考に，前接発話と開始部という，連続する 2 つの発話間の繋がりから以下の 3 つに分類する．「新出型」は今まで話されていない内容について話題化されるもの，「前接展開型」（以下，前接型）は前接発話で話された内容の中から選択され，話題化されるもの，「前出展開型」（以下，前出型）は前接発話以前の発話で話された内容の中から選択され，話題化されるものである．なお，開始部が感動詞のみの場合は，その次の実質的な内容を持つ発話も分析に含める．また，前接発話とは開始部の直前の発話を指すが，直前の発話が途中で中断されたり，あいづち等である場合は，その前の実質的な内容を持つ発話とする．以下に例を示す．→は前接発話，⇒は開始部，横線は話題境界を表す（以下，同様）．

① 新出型

開始部 04 では住まいについて質問して，後続話題が導入されている．その直前の 02，03 はあいづちと考え，前接発話は 01 とした．前接発話 01 では年齢について話されており， 01 と 04 の間に内容的な繋がりは見られない．また，住まいについては前接発話以前の発話でも話されていないため新出型とする．

→	01	A	［年齢について］21 です〈笑い〉
	02	B	うん
	03	A	そっか
⇒	04	B	え どちらにお住まいなんですか？

② 前接展開型

前接発話 01 で A はバイトの経験について語っている．その後，開始部 04 で B は前接発話で話されたバイトの探し方について質問して後続話題が導入されている．01 と 04 の間には「バイト」という繋がりが見られるため前接型とする．

→	01	A	なんか でも出版社でバイトするのは面白かった
	02	B	〈そうですよねー〉{く}
	03	A	〈うーん〉{う}
⇒	04	B	え バイトどうやって見つけたんですか？〈その…〉{く}
	05	A	〈なんか〉{う}その「大学名 1」にいた時に(はい) あの一学生課ってゆうところで

③ 前出展開型

開始部 93 では， A に対し，英語について質問して後続話題が導入されている．前接発話 89 では日本文学について話されているため，89 と 93 の間に内容的な繋がりは見られないが，発話をさらに遡ると 01 で A が英語科に所属していることが語られている．開始部 93 ではこの 01 で話された内容に基づいて後続話題が導入されているため前出型とする．

	01	A	今英語科のー 2 年でーす
			〔88 行省略〕
→	89	A	［日本文学について］高校の時ちょっと頑張ったかなぐらいで
	90	B	うーん
	91	A	へー
	92	B	そっかー
⇒	93	B	でも英語科だったら もう 英語もペラペラで？

なお，繋がりを示す表現に省略や言い換えがあった場合には文脈により内容の繋がりを判断するが，言語表現や文脈に繋がりが認められないものであっても，以下のものには繋がりを認める．以下に基準と例を示す．

1. 言語内及び言語外の文脈や知識に基づく推論により繋がりが判断されるもの
   例：(第二文学部に通う相手に対し)「え じゃあお昼は何やってんですか？」と質問するもの．「第二文学部」から「夜間に授業が行われ，昼間は大学の授業がない」という推論が行われたと考えられる．
2. 同一のカテゴリーに属すると判断されるもの
   例：(小学校の思い出について語った後)「えっ 中高は？」と中高の思い出について後続話題が導入されるもの．「中高」は先行文脈で話されていないが，「子供の頃の思い出」として小学校の思い出と同じカテゴリーに属している．

4. 分析結果

4.1 NS と CJL の談話展開の全体的傾向

NS と CJL の会話全体の談話展開を分類した結果を表 1 に示す．NS と CJL の新出型，前接型，前出型それぞれの出現数についてカイ二乗検定を行ったところ，有意差が見られた（$\chi^2(2) = 8.913$, $p < .05$）．残差分析の結果，NS は前出型が有意に多く，CJL は新出型が有意に多いことがわかった（$p < .05$）．NS は新しい内容よりも，既に話された内容から後続話題を選択し導入する（前出型）ことが多いのに対し，CJL は会話の中で以前話された内容を話題化する（前出型）ことは少なく，今まで話されていない新しい内容を話題化する（新出型）することが多く，NS と CJL の談話展開には異なる特徴がみられることがわかった．

表 1　NS と CJL の話題展開

	新出型	前接型	前出型	合計
NS	14	40	**40**	94
CJL	**12**	12	7	31

次に NS と CJL の談話展開を時間軸に沿って検討する．NS の談話展開を時間の経過に伴って見ると，NS の会話の開始直後には新出型が多く現れており，また，終盤にかけて前出型が増える様子が見られた．そこで，会話開始から 5 分を基準に，会話の序盤（会話開始から 5 分まで），中盤（5 分以降 10 分まで），終盤（10 分以降会話終了まで）に分けて，NS の談話展開を表 2 に，CJL の談話展開を表 3 に示す．表 2 に示した NS の新出型，前接型，前出型の会話序盤，中盤，終盤におけるそれぞれの出現数についてフィッシャーの正確確率検定を行ったところ，有意差が見られた（$p < .01$）．Holm 法による多重比較の結果，序盤には新出型が，終盤には前出型が多く出現することがわかった（$p < .01$）．これに対し，表 3 に示した CJL の談話展開についても同様にフィッシャーの正確確率検定を行った結果，有意差は見られなかった．CJL は 3 つの談話展開の型が会話全体に分散して出現していることがわかる．

初対面会話は相手に関する情報量がゼロの状態から始まり，情報交換を行いながら，お互いに相手との共有知識を積み上げていく．NS の会話では，話者に関する情報交換が多く行われる序盤に新しい話題を導入する新出型が多く出現したと考えられる．そして，終盤には新出型は現れず，以前に話された内容が再度話題として取り上げられる前出型が多く出現することがわかった．NS の会話終盤では新しい話題は導入されず，話者が情報交換する中で積み上げた共有知識から後続話題を導入して会話が進行されていると考えられる．

表 2　NS の話題展開

	序盤	中盤	終盤	合計
新出型	**11**	3	0	14
前接型	16	15	9	40
前出型	10	11	**19**	40

表 3　CJL の話題展開

	序盤	中盤	終盤	合計
新出型	5	3	4	12
前接型	3	4	5	12
前出型	2	3	2	7

4.2 NS の談話展開の質的分析

前節の分析から，NS の初対面会話では，会話序盤に新出型が多く現れ，終盤に前出型が多く現れることがわかった．そこで，NS の会話序盤の新出型と終盤の前出型について質的に分析し，CJL と比較する．

(1)は会話開始直後の断片である．07 及び 10 で両者とも横浜に住んでいることが話され，08 や 11 からは互いに驚いている様子が見られる．しかし，その後，住まいは話題として取り上げられず，12 で大学について新出型で後続話題が導入されている．(2)は(1)と同じ会話の終盤である．この断片の前では，両者の地元が共に横浜の「地名」であることが明らかになっている．前接発話 575 では自転車を購入した店について話されており，開始部 578 との間に内容的な繋がりは見られないが，発話を遡ると，108 で A が「地名」に住んでいることが明らかになっており，この共有知識に基づいて後続話題が導入されていると考えられる．また，「地名」は両者の共通点になっており，578 の他にも，再度「地名」に繋がる話題が導入される様子が見られた．

樋口(1996)は，母語話者の初対面会話には，会話初期の自己紹介部において，話題の展開を回避するストラテジーが見られるとしている．つまり，自己紹介部で交換される個人的情報には話題としての発展は見られず，その結果，個人的情報が羅列されることになる．本稿のデータの会話序盤でも，(1)の 12 のように，話題として発展させることよりも，新たな情報の交換が優先される様子が多く見られた．一方，終盤では(2)のように，それまでに情報交換する中で作り上げたお互いの共有知識に基づいた話題が導入される様子が多く見られた．このような終盤における談話展開には，序盤における談話展開が関わっている可能性が考えられる．すなわち NS の初対面会話では，序盤では，交換した情報をすぐに話題として発展させることよりも，お互いの情報をさらに交換して共

(1)NS「住まい」－「大学」(序盤　新出型)

	07	NS2	住まいは一横浜ですが
	08	NS3	[驚いたように]あ 横浜ですか?
	09	NS2	はい えっ どこ…?
→	10	NS3	横浜です
	11	NS2	あれま
⇒	12		えっ 東大の方なんですか?
	13	NS3	いえ 違います

【会話番号　253】

有知識を作り上げることが優先される．そして，その後はその共有知識に基づいた話題を導入することで談話を展開していくのだと考えられる．

次にCJLの新出型を検討する．NSは会話終盤では新出型が全く現れなかったのに対し，CJLの終盤には，序盤及び中盤と同程度の出現数が見られた．そこで，CJLの終盤の新出型を(3)に示す．(3)の直前では，CJL2の所属サークルについて話されており，479でNS3の所属するサークルについて質問されている．これに対し，480，482でNS3のサークルについて語られるものの，直後の483で新出型により後続話題が導入されている．CJLの会話終盤には，483のように新出型で「授業」や「キャンパス」について質問する場面が見られた．NSの会話では，会話の初期段階で授業の様子やキャンパスについて話されることはあったが，CJLのように終盤では見られなかった．CJLの談話展開と比べることで，NSの談話展開には，時間の経過に伴った一定の傾向が見られ，それには会話序盤の談話展開が大きくかかわっているといえるだろう．

(2)NS「自転車」－「バス」(終盤　前出型)

	107	NS2	え 横浜のどこなんですか?
	108	NS3	私は「地名」
			[465行省略]
	574	NS2	[自転車について] 私もオリンピックで買った うん
→	575		オリンピックは良い
	576	NS3	うん
	577	NS2	うーん
⇒	578		でも「地名」だとー 4丁目の辺りっていったら バスは…?

【会話番号　253】

(3)CJL「サークル」―「授業」(終盤　新出型)

	479	CJL2	じゃ サークルは?
	480	NS3	私は 今はもう入ってないんですけど
	481	CJL2	ふーん
→	482	NS3	前は登山のサークルに入ってました
⇒	483	CJL2	月から土曜ま まで 毎日授業入ってる?
	484	NS3	毎日 あ 木曜日だけ入ってない

【会話番号　261】

5. おわりに

本稿では，初対面会話において，母語話者が時間の経過に伴いどのような後続話題を導入し，談話を展開しているのかを学習者との比較から明らかにした．分析の結果，母語話者の会話では，会話序盤で新しい情報が多く交換され，終盤では，それまでに話した内容から話題が選択，導入されることが多いのに対し，学習者にはこのような特徴が見られなかった．このことから，母語話者には，時間の経過に伴った談話展開に一定の傾向があるといえるだろう．また，母語話者の会話序盤では，交換した情報をすぐに話題として発展させることよりも，お互いの情報をさらに交換することを優先する様子が観察されたが，そのような行動は，お互いに背景知識を共有しない初対面会話において，時間の経過と共に相手との共有知識を作り上げ，さらにお互いの共通点を見つけ出すことに貢献していると考えられる．このようにして積み上げられた共有知識は，その後の談話展開に大きく影響していると考えられる．母語話者は，そのような共有知識に基づき，直前だけでなく以前話された内容に再度言及して談話を展開し，会話を進行しているといえよう．

文字化の記号　文字化の記号は，「基本的な文字化の原則」(2011)に従った．以下に，本研究で主に使用した記号を記す．

〈〉{〈}　：重ねられた発話　　〈〉{〉}　：重ねた発話　　(　)　：短いあいづち　　[　]　：文脈情報

参考文献

樋口斉子 (1996)．初対面会話での話題の転換 日本人の談話行動のスクリプト・ストラテジーの研究とマルチメディア教材の試作，研究成果報告書，pp.75-110.

Japanese Discourse Research Initiative (2017)．発話単位ラベリングマニュアル version2.1

三牧陽子 (2013)．ポライトネスの談話分析 くろしお出版

村上恵・熊取谷哲夫 (1995)．談話トピックの結束性と展開構造 表現研究，62，101-111.

田所希佳子 (2013)．初対面会話教育における重要項目の選定に関する考察―母語話者・非母語話者に対する意識調査から― 早稲田日本語研究，22，13-23.

若松史恵 (2018)．話題境界に出現する言語的要素についての考察―話題開始部に着目して― 2018年度日本語教育学会秋季大会予稿集，208-213.

使用コーパス

宇佐美まゆみ監修 (2011)．BTSJによる日本語話し言葉コーパス 2011年版

価値観をめぐるやりとりにおける成員カテゴリー化装置
－日本語を母語とする大学生の雑談の分析から－

髙井 美穂(大阪大学)

1. はじめに

本研究は，日本語母語話者の雑談における価値観の共有のやりとりにみられる規範を，会話分析の手法を用いて明らかにしようとするものである．私たちは，親しい友人との雑談において，互いに私見を述べ合ったり，価値観を述べ合ったりすることがある．意見を交換するという行為はこれまで，公的な性格の強い「議論」「討論」「ミーティング」「シンポジウム」といったものを対象とし，テレビ番組や実験的環境のもと行われた話し合いの録音データをもとに，談話の構造や運営にかかわる手続き的発話にかんする研究が蓄積されてきた（柏崎 1996，椙本 2000，寅丸 2006，星野 2010 等）．一方，雑談において自然発生的に生起する私見のやりとりがどのようになされるのかは管見のかぎりまだ十分明らかにされておらず，日本語学習者を対象とする会話教材でそうした方法を学習項目として取り上げたものも見当たらない．本稿では，日本語非母語話者を対象とする日本語の会話教育への応用を念頭に，友人間の雑談にみられる価値観をめぐるやりとりを取り上げ，会話参加者らが何者としてふるまい，どのように自らのカテゴリー化を実践しているのかを会話分析の手法によって明らかにしたい．

2. データと分析方法

データは日本語を母語とする同性の大学生及び大学院生の友人二者間の雑談（のべ約 6 時間）の録音，およびその文字化資料である．会話参加者は 9 組（男性ペア 3 組，女性ペア 6 組）18 名で，録音は近畿地方の大学の食堂や研究室にて行った．IC レコーダーの録音ボタンを押した後，筆者は退席し，自由に行ってもらった雑談を 30 分から 1 時間程度録音した．録音中の飲食は制限しておらず，話題も指定していない．

まず，録音の文字化資料から価値観にかかわるすべてのやりとりを抽出し，会話分析の転記記号を用いてトランスクリプトを作成した．次に，これらのやりとりを，連鎖組織，及び成員カテゴリー化装置（Sacks 1972）の 2 つの観点から分析した．

成員カテゴリー化装置とは，少なくとも一つのカテゴリーと一人の成員を含む母集団に適用される成員カテゴリーの集合とその適用規則からなるしくみである（Sacks 1972）．適用規則には一貫性規則と経済規則がある．一貫性規則とは，同じ母集団内の人をカテゴリー化するさいには同一のカテゴリー化装置の中の同じカテゴリーまたは別のカテゴリーを選択する，というもので，経済規則とは，ある人をカテゴリー化するのに用いるカテゴリーは一つで十分である，というものである．

抽出した価値観のやりとり全 6 事例[1]は，ライフプランにかんするもの（4 事例）と，それ以外にかんするもの（2 事例）に分類できた．本稿では，後者の 2 事例のうち会話参加者らの価値観の相違がみられた 1 事例を取り上げる．本事例は，観光資源としての原発が話題となっていたもので，録音は 2009 年に行われた．

3. 分析結果

3.1 分析のターゲット

本事例は，岡田と島田の 2 人の女子大学生による会話である．分析のターゲットは、観光資源としての原発に対する岡田の評価（54 行目）とそれに対する島田の不同意（58 行目）である．なお，トランスクリプト中の人名はすべて仮名であるが，後述するように出身地が重要な鍵を握っているため，便宜上，福岡県出身の会話参加者を「岡田」，鹿児島県出身の会話参加者を「島田」とする．

[1] 結婚相手の年齢，経済的豊かさ，進路，オフィスでの身だしなみ等をめぐるやりとりがあった．

(1)

49	岡田:		¥あみんな見に行くんだ¥.
50			(0.6)
51	島田:		[うん
52	岡田:		[へ:::
53			(0.5)
54	岡田:	⇒	そっか:.でも,鹿児島の原発見るよりは福井の原発見たくない?
55			(0.4)
56	岡田:		どっちかっていうと.
57			(0.87)
58	島田:	⇒	ん:なんで原発:見たがるの?(0.45)か分からない.
59	岡田:		確かにね:[:.
60	島田:		[ん:
61			(4.66)

岡田の評価発話は,「・・・たくない?」という否定疑問文による同意要求の形式をとっている．この発話の直後は，この評価に対する島田の同意あるいは不同意が期待される位置であるが，島田の発話が産出されるのは 58 行目である．そして，その産出に至るまでの間には，次の三つの特徴が観察される．第一に，岡田の評価発話の後，0.4 秒の間が生じ（55 行目),島田の応答は遅延されている.この遅延は,続く発話が非選好応答である不同意であることを予示(Pomerantz 1984)するものである．岡田が先の評価発話を拡張させ,「どっちかっていうと」という条件を加えることによって譲歩を示している（56 行目）こともそれを裏付けている．第二に，岡田の譲歩の後再び訪れた TRP においても，島田の発話の産出は 0.87 秒の間によって遅延されている（57 行目）．第三に，島田の発話冒頭に「ん:」という preface が用いられており（58 行目)，やはり実質的な不同意の産出が遅延されている．これら非選好応答の特徴から，58 行目の島田の発話は，岡田の評価に対する（少なくとも）同意ではない，といえるだろう.

さて，島田の発話は,「ん:なんで原発:見たがるの?」というものであった．ここで注目したいのは，岡田の評価が「見たい」という一人称でなされているのに対し，島田の不同意には,「・・・たがる」という形式が用いられている点である．このことは,「見たい」という願望をもつ主体が，第三者であることを示している．島田の不同意は，目の前の岡田ではなく，第三者に差し向けられているのである．以下では，このねじれが成員カテゴリー化装置の切り替えによって生じたものであることを論じる.

3.2 成員カテゴリー化装置

先行話題では，2 人の出身である九州の各県の序列が話題となっていた．このやりとりにおいては，成員カテゴリー化装置「出身県」が利用され，岡田は「福岡県民」，島田は「鹿児島県民」[3]としてカテゴリー化されている．以下に示す 1 行目からのやりとりでは，鹿児島のセールスポイントが話題となっており，福岡出身の岡田が「空は青いし」「海も青いし」(7, 9 行目）とその美しさを挙げ，鹿児島出身の島田がそれを承認する（10 行目）形でやりとりが進んでいる．岡田が最後に挙げた「砂浜は白いし」（12 行目）は島田によって「ちょっと灰色だったりする」と修復され（14 行目)，岡田がそれに理解を示し（16, 18 行目）た後，今度は島田が，岡田の用いた「・・・は（も)・・・し」という言語形式を利用して原発の存在をセールスポイントとして挙げる（23 行目).

(2)

1	岡田:	すごいやん鹿児島.		6		(1.75)
2	島田:	んん.		7	岡田:	空は青いし,
3	岡田:	もっと,売り出しなよ.		8		(0.4)
4		(0.9)		9	岡田:	海も[青いし,
5	島田:	ん::.		10	島田:	[゜ん:゜

[2] 福岡出身の岡田が島田の出身地である鹿児島を終始からかうやりとりになっている.

[3] 両者とも録音時は大阪府在住であったが，ここでは「○○県出身者」と同義のものとして「○○県民」と称することにする.

11 (0.3)
12 岡田: 砂浜は白いし,
13 (0.5)
14 島田: >ちょっと灰色だったりする<.
15 (0.23)
16 岡田: あ,ね?
17 島田: うん.
18 岡田: °はいはい°,灰がね?[hhh
19 島田: [うん,灰が.
20 岡田: .h::
21 (1.0)
22 岡田: ね:.°( )°もっと,[( )
23 島田: [原発もあるし,
24 (0.4)

「セールスポイント」であることに岡田が不同意を示す（25 行目）と，地元・鹿児島県民である島田は，原発は観光地になっており，実際に観光バスが敷地内に入っていくのだと語る（27-29，33-42 行目）．観光バスに乗って原発を「見に行く」人々を，島田は「おじいさんおばあさん」と説明している（37 行目）．

(3)

25 岡田: 原発売れないよね.
26 (0.3)
27 島田: え原発ね,ときどき:h
28 (0.4)
29 : ¥観光地に¥なってる[よ.
30 岡田: [>うそん<
31 (0.4)
32 岡田: ¥ほんな[きれいなんや¥.
33 島田: [¥なんかあ:¥.h ¥きれい
34 : じゃ¥ないけど,
35 (0.27)
36 岡田: あ:[¥ものめずらしい¥
37 島田: → [なんか,おじいさんおばあさん
38 : [を,満載した,
39 岡田: [はいはいはい
40 (0.4)
41 島田: 観光バスがhhやってきて,
42 : [入っていくよ.
43 岡田: [デ(h)モ(h) じゃ(h)な(h)い(h)？
44 (0.4)
45 岡田: .h.hそ(h)れ(h)反(h)対(h)デ(h)モ
46 : (h)と(h)か(h) じゃ(h)な(h)い(h)？
47 (0.4)
48 島田: ¥デモじゃないよ¥.
49 岡田: ¥あみんな見に行くんだ¥.
50 (0.6)
51 島田: [うん
52 岡田: [へ:::

再びターゲット発話に戻ろう．岡田の評価に対する島田の不同意における，「見たがる」の主体，すなわち島田が不同意を差し向けているのは，目の前の岡田ではなく，第三者であった．そしてこの第三者は，先の島田の説明，すなわち原発が観光地になっていることの説明に登場した「おじいさんおばあさん」として岡田に理解されている．58 行目の島田の問いの答えにあたる 73 行目の岡田の発話には「おじいちゃんおばあちゃんたち」というカテゴリー名称が用いられているからである．

(4)

53 (0.5)
54 岡田: ⇒ そっか:.でも,鹿児島の原発見るよりは福井の原発見たくない?
55 (0.4)
56 岡田: どっちかっていうと.
57 (0.87)
58 島田: ⇒ ん:なんで原発:見たがるの?(0.45)か分からない.
59 岡田: 確かにね:[:.
60 島田: [ん:
61 (4.66)
62 島田: なんか原発の,どこが,美しいのだか分からない.
63 岡田: ↑美しさを,↓を求めて,行っとうわけやなくて,
64 (0.2)
65 島田: ん[:
66 岡田: [原発が見たいんやない?
67 島田: hhなん[で?
68 岡田: [こう世間があれほど騒ぐ,原発とはなんぞやと.

69 島田: hahaha° .hh°
70 岡田: ね.あれだけのお金を投じて,>作[られた原発とは<なんぞやと.
71 島田: [ん:
72 島田: なんぞやと.
73 岡田: → ん:.>それを,おじいちゃんおばあちゃんたちは見に行くんじゃない<?
74 (0.37)
75 島田: へえ::↑:

先行するやりとりでは，岡田と島田は出身県というカテゴリー化装置によって，自らをカテゴリー化していた．観光資源としての原発にかんするやりとりの開始における岡田の評価，「鹿児島の原発見るよりは福井の原発見たくない？」（54行目）は，「非鹿児島県民」としてなされた発話として聞かれうる．一方，それに対する島田の不同意「なんで原発:見たがるの?」は，自身と岡田ではなく，自身と「おじいさんおばあさん」をカテゴリー化するもので，カテゴリー化装置「年齢」が利用されている．この装置の切り替えは，「鹿児島県民」と「非鹿児島県民」という対立関係を解消し，対関係にある「おじいさんおばあさん」を登場させることによって岡田と自身を同じ「若者」としてカテゴリー化し，岡田との共-成員性を可視化させることに成功していた．

4. おわりに

以上の分析から，不同意の産出に際して，対立を回避する手段として，成員カテゴリー化装置を切り替え，対関係にある第三者を登場させることによって相手と自身を新たな装置によってカテゴリー化し直し，共-成員性を可視化させようとしていたことが明らかになった．髙井（2019）では，女子大学生２名による結婚相手の年齢をめぐる価値観のやりとりにおいて，成員カテゴリー化装置「ジェンダー」が利用されていたこと，「『女の子』とはこういうものである」という形で提示された意見は会話参加者間で一致しなかったが，一致させる方向へは向かわず，対関係にある「男の子」について語ることによって、「女の子」としての共-成員性が維持され続けていたことを明らかにした．本稿で取り上げた事例では，出身県の装置のままではカテゴリーの対立が生じるため，装置そのものを切り替える行為が観察されたが，話者らと対関係にある第三者を評価することによって自身らの共-成員性を維持しようとする行為は共通するものであるといえる．以上のことから，日本語母語話者の雑談としての価値観のやりとりにおいて，会話参加者間の意見の一致だけでなく，カテゴリーの対立の回避や共-成員性の維持への指向も重要な規範となっているのではないかと考える．

謝辞 本研究はJSPS科研費（課題番号JP19K13231）の助成を受けたものである．

参考文献

星野祐子（2010）．課題解決型話し合いにおける手続き的発話　都留文科大学研究紀要，**72**，都留文科大学，41-59.

柏崎雅世（1996）．インフォーマルな［と］相談における談話運営の発話　東京外国語大学留学生日本語教育センター論集，**22**，東京外国語大学，15-31.

Pomerantz, A.（1984）Agreeing and disagreeing with assesments; some features of preferred/ dispreferred turn shapes. In J.M. Atkinson & J. Heritage (eds.), *Structures of Social Action*. Cambridge University Press. 57-101.

Sacks, H.（1972）An Initial Investigation of the Usability of Conversational Data for Doing Sociology. In D. Sudnow (ed.), *Studies in Social Interaction*. The Free Press, 31-73.（(北澤裕・西阪仰（訳)会話データの利用法―会話分析事始め― 北澤裕・西阪仰 編訳（1995）日常性の解剖学，マルジュ社，93-174）

椙本総子（2000）．人間関係からみた課題解決の会話の連鎖構造　世界の日本語教育，**10**，国際交流基金，221-239.

髙井美穂（2019）．日本語母語話者の価値観の共有における成員カテゴリーの利用と実践―ライフプランをめぐる女子大学生の雑談の会話分析から― 日本語・日本文化研究，**29**，大阪大学大学院言語文化研究科日本語日本文化専攻，86-103.

寅丸真澄（2006）．日本語の討論の談話における「意見表明」の構造分析　早稲田大学日本語教育研究，**9**，早稲田大学大学院日本語教育研究科，23-35.

日本語におけるジェンダーに関わる表現の考察

—「女子力」及び「女子力が高いね」に対する返答を中心に—

馬雯雯(筑波大学大学院生)

1. はじめに

「女子力」は名詞「女子」と接尾辞「力」の結合による派生語である. その語構成からもわかるように, 「女子力」はジェンダーおよび能力に関わる語である. 2009 年のユーキャン新語・流行語大賞にノミネートされた. インターネットで「女子力」を検索したら, それと「アップ」「持ち物」「診断テスト」といったことばとのコロケーションが見られる. 現在, 「女子力が高いね」は日常生活で普通に使われている. では, 「女子力が高いね」に対し, 男女それぞれどのような返答の様相を呈しているのか, その返答の様相からどのようなジェンダーに関わる要素が見られるのかは本研究で探ってみたい.

2. データと分析方法

本研究のデータは,「女子力」についての記述式のアンケート調査から収集した文字データである. 調査対象は首都圏のある大学の 10 代～20 代の大学生・大学院生（合計 : 64 名, 女性 : 33 名 男性 : 31 名）で, 調査期間は 2019 年の 8 月から 9 月上旬にかけてである. なお, アンケート調査はGoogle フォームを利用して, 実施した.

アンケートは九つの調査項目について行ったが, ここではその中から次の一つの調査項目に対する回答をとりあげて分析する.

「女子力が高いね」と言われたら, それに対しての返事はしますか. するなら, どのような発話をしますか. しないなら, その理由を教えてください.

「女子力が高いね」に対し, 「返事しない」および「返事する」という二つのパターンが見られる. 本研究では, この二つのパターンを分けて分析を行う. 具体的な分析手順としては, まず,「返事しない」理由を男女別に分析する. そして, 「返事する」場合の発話内容を寺尾（1996）金（2002）清水（2017）の「ほめ」に対する返答の分類方法を参照し, 男女別にカテゴリー化しながら, 分析を進めたい. 最後に, 男女の返答の様相に見られる「女子力」に関わるジェンダーの要素を炙り出す.

3. 分析と考察

3.1「女子力が高いね」と言われたら

「女子力が高いね」と言われたら, 「返事する/しない」人数および割合は下記の表 1 のようである.

表 1 「女子力が高いね」に対する返事する/しない人数および割合

返事する/しない / 性別	返事する	返事しない
女性	30(47%)	3(5%)
男性	27(42%)	4(6%)
合計	57(89%)	7(11%)

表 1 からわかるように, 「女子力が高いね」と言われたら, 89%の人はそれに対し, 返事する. そして, 「返事する」女性の割合は男性よりやや高い. 11%の人は「女子力が高いね」に対し, 「返事しない」と答えた. そのうち, 女性と男性の割合は大体同じである. 以下では, 「返事しない」理由および「返事する」具体的な発話内容を提示, 分類しながら, 分析する.

3.2 「返事しない」とその理由

3.1 節から, 調査協力者の 11%は「女子力が高いね」と言われたら, 返事しないということがわかった. その理由は, 以下のようなものが挙げられる.

【データ 1】：返事しない理由

(1) 広げるほどの話の内容を自分が持っていないから. (女性, 10 代)

(2) はずかしい. (男性, 20 代) (3) 女子じゃないので. (男性, 20 代)

(4) なんと反応すればよいかわからない. (男性, 20 代)

【データ 1】から, 「女子力が高いね」と言われたら, 返事しない理由としては「広げるほどの話の内容を自分が持っていないから」「はずかしい」「女子じゃないので」「なんと反応すればよいかわからない」といった内容がある. このような理由から, 女性も男性も「女子力」ということばに対し, 距離感があるということがうかがえる. しかし, 男女別にその理由を分析してみれば, その距離感の拠り所は異なっていることが垣間見える. 「広げるほどの話の内容を自分が持っていないから」という理由から, 「女子力」に対する知識がないことは女性のそれに対する距離感を持つことの拠り所になっている. 一方, 「はずかしい」「女子じゃないので」「なんと反応すればよいかわからない」といった理由から, 男性の「女子力」に対しての距離感はジェンダーによるものである. つまり, 「女子じゃないので」という「女子力」に関わるジェンダー領域は自身の属するジェンダー領域のミスマッチの説明から, 男性は「女子力」に対し, 距離感を持つのは, ジェンダー・アイデンティティの不一致からなのであることがわかる. 「女子力」は一種の能力として, その形式に表われるジェンダーの境界線を越え, 男性のジェンダー領域に入っても, 男性はそれに対し, 距離感を持っていることは, 「女子力が高いね」に対する返答しない理由からうかがえる.

3.3「返事する」とその発話内容

3.1 節から, 調査協力者の 89%は「女子力が高いね」と言われたら, 返事するということがわかった. その返事する発話内容の回答には, 以下の例①-②のように, 「「ほめ」ことばに対する返答」の内容と重なるものが多く見られる. そして, 下記の例③のように, 発話内容を記入しつつ, その発話内容を巡るメタ語用的な解釈を記入したデータも見られる. さらに, 下記の例④のように, 発話内容ではなく, 直接発話内容に関わる解釈的な回答を記入したデータもある. 本節では, まず, 寺尾 (1996) 金 (2002) 清水 (2017) を参照し, 「女子力が高いね」に対する返答の発話内容の分類を行う. その分類の対象は例①ー②のように, 直接発話内容を記入したデータおよび例③のように, メタ語用的な解釈が伴う発話内容を対象とする. そして, 男女別に分析を行う. 分析に際し, カテゴリー化された発話内容だけではなく, その発話内容を巡る解釈および直接に記入された解釈的なデータも射程に入れ, 行う.

例：①ありがとう. ②そんなことないよ. ③「やったね」とか「でしょ？笑」とか,とりあえず喜ぶ. ④女子力が高いということはいい意味だと思うので,肯定して受け入れる発言をする.

女性の返答スタイル

【受け入れ型】

①感謝　②控えめな同意

③賛同の発言・喜び

【否定型】

①的確さへの疑問　　②不賛成の発言

③的確さへの疑問＋不利な情報の提示

【回避型】

①冗談

【複合型】

①的確さへの疑問（否定型）＋感謝（受け入れ）

②感謝（受け入れ）＋説明（回避）③不賛成の発言（否定型）＋感謝（受け入れ）

男性の返答スタイル

【受け入れ型】

①感謝

②賛同の発言　③感謝＋控えめな同意

【否定型】

①的確さへの疑問　②不賛成の発言

③的確さへの疑問＋不賛成の発言

【複合型】

①説明（回避）＋感謝（受け入れ）

②的確さへの疑問（否定型）＋照れ（回避型）

【受け入れ型】

女性の返答スタイルにおいては, 「受け入れ型」にあてはまる発話内容はさらに「感謝」「控えめな同意」「賛同の発言・

喜び」に分けられる. 男性の返答スタイルにおいては, 「受け入れ型」にあてはまる発話内容をさらに「感謝」「賛同の発言」「感謝＋控えめな同意」に分けられる. その中の女性, 男性の「感謝」の具体的な発話内容は主に以下のようなものにまとめられる.

①ありがとう. (女性・男性)　②どうも. (男性)

女性の「控えめな同意」の具体的な発話内容および男性の「感謝＋控えめな同意」の具体的な発話内容は以下のようなものがある.

①まあね～ (女性)　②ありがとう. まあね (男性)

また, 女性の「賛同の発言・喜び」の具体的な発話内容と男性の「賛同の発言」の具体的な発話内容およびそれに対する解釈は以下のようなものがある.

①「やったね」とか「でしょ？笑」とか, とりあえず喜ぶ. (女性) ②女子力ある系男子だから. (男性)

③だろ？でしょ？ (男性) ④でしょー(肯定する). 自分の行為に対して誉められた気分になるから(私自身が男なので, 女子力が高いと言われると誉められたように感じる) (男性)

上記の発話内容およびそれを巡る解釈から, 「女子力が高いね」に対し, 女性も男性も感謝, 賛成, および同意を表す表現で返答する. また, 「とりあえず喜ぶ」「自分の行為に対して誉められた気分になるから」といった解釈的な回答から, 「女子力が高いね」は「ほめ」ことばとして受け入れる場合がある.

【否定型】

女性の「否定型」の発話内容はさらに「的確さへの疑問」「不賛成の発言」「的確さへの疑問＋不利な情報の提示」に分けられる. 男性の「否定型」の発話内容はさらに「的確さへの疑問」「不賛成の発言」「的確さへの疑問＋不賛の発言」に分けられる. その中の「的確さへの疑問」「不賛成の発言」の具体的な発話内容は以下のようなものにまとめられる.

表2 「的確さへの疑問」および「不賛成の発言」の発話内容

的確さへの疑問	不賛成の発言
①そう？ (女性)	⑤そんなことないよ. (女性・男性)
②あっ, そうかな. (女性)	⑥高くないよ. (女性・男性)
③そうかな？ (男性)	⑦そんなに高くないと思う. (男性)
④そうですか？等聞き返すような返答. (男性)	⑧僕は〈女子〉ではありません. (男性)
	⑨「僕,男だよ」と返答します. (男性)
	⑩いや俺男やし(笑). (男性)

そして, 女性の「的確さへの疑問＋不利な情報の提示」および男性の「的確さへの疑問＋不賛成の発言」の具体的な発話内容は以下のようなものである.

①「え,そう？ 性格は男っぽいからせめてちょっとは気にしないと」という. (女性) ②「本当？そんなことないよ」と謙遜します. (男性)

「そう？」「そうかな」「そうですか」といった言語形式から, 女性も男性も「女子力が高いね」という発話に対し, 疑問の意味を表す表現で返答する. そして, 「ほめ」に対する定型の返答ともいえる言語形式の「そんなことないよ」で「女子力が高いね」に対し, 否定的な返答をする. また, 女性も男性も「女子力が高いね」における述語の「高い」を「高くない」で否定し, 「高くないよ」「そんなに高くないよと思う」といった形式で「女子力が高いね」に対し, 不賛成の発言をする. 一方, 男性の場合には, 「僕は〈女子〉ではありません」という否定の発言を用い, 「女子力が高いね」に対し, 不賛成の態度を表す回答が見られる. 具体的にみれば, 一人称詞「僕」およびジェンダーを表すことばの「女子」を「女子ではありません」の形で否定し, 「女子力が高いね」という発話に対し, 否定的な態度を表す. そして, 「僕,男だよ」という男性が多用する一人称詞「僕」およびジェンダーを表すことばの「男」で自分のジェンダー・アイデンティティを主張する発言も見られる. また, 「いや俺男やし (笑)」で「女子力が高いね」に対し, 不賛成の発言をする回答も見られる. この言語形式から, 「いや」という否定を表すマーカーで「女子力が高いね」に対し, 不賛成の態度を表す, その後, 男性が多用する一人称詞の「俺」およびジェンダーを表すことばの「男」を用い, ジェンダー・アイデンティティを主張することが見られる. このような「女子力が高いね」に対する返答のスタイルにおける「否定型」の「不賛成の発言」から男性は否定的なマーカーの「ではありません」を用い, 「女子力」の前接語の「女子」に表われるジェンダーを否定し, また, 否定的なマーカー

の「いや」を用い,「女子力が高いね」という発話を否定し,その上に,一人称詞の「僕」「俺」およびジェンダーを表すことばの「男」を用い,ジェンダー・アイデンティティを主張することがうかがえる.

【回避型】

あんたも真似しろ！と冗談交じりに言う.（女性）

「回避型」の返事スタイルは今回の集めたデータには,女性だけに見られる.「あんたも真似しろ！」という相手に対しての働き,命令の言語形式で「女子力が高いね」という発話を回避した.その「冗談交じりに言う」というメタ語用的な解釈からわかるように,この発話は「冗談」とつながり,「女子力が高いね」という発言を回避したストラテジーである.

【複合型】

女性の二つの返答スタイルが併存する発話内容は「的確さへの疑問（否定型）＋感謝（受け入れ）」,「感謝（受け入れ）＋説明（回避）」,「不賛成の発言（否定型）＋感謝（受け入れ）」という三つの下位カテゴリーに分けられる.その具体的な発話内容は以下のようなものである.

①えー？本当？？ありがとう！②ありがとう！ もっと女子力高くなれるよう頑張る！③そんなことないよ,と言って謙遜しつつ,お礼を言う

一方,男性の二つの返答スタイルが併存する発話内容は「説明（回避）＋感謝（受け入れ）」「的確さへの疑問否定型（否定型）＋照れ（回避型）」にまとめられる.その具体的な発話内容は以下のものである.

①男だけど,ありがとう.

②ほんとー！ ちょっと照れる.

①の「男」に逆接を表す接続助詞の「けど」をつけることから,「女子力が高いね」に対し,「男」として元々返答しないが,そう言われたら,感謝するという意味が読み取れる.

【その他】

①友だち同士であれば冗談で威張るような返事をする.（女性,20 代）②お礼を言う.（女性,20 代）③女子力についての議論（男性,20 代）④女子力が高いということはいい意味だと思うので,肯定して受け入れる発言をする.（男性,20 代）

「女子力が高いね」に対し,直接な発話内容を記入せず,解釈的な回答を記入したデータには,以上の①～④のものがある.女性の場合は「女子力が高いね」に対し,「お礼を言う」という解釈的な返答が見られる.また,相手は友達なら,「冗談で威張る」ような返答をすると回答した.男性の場合は,「女子力が高いね」における「女子力」について議論する回答および肯定して受け入れる発言をするという解釈的な回答が見られる.

4. 終わりに

女性にも男性にも「女子力が高いね」と言われたら,「ありがとう」という感謝を表す「受け入れ型」の返答が見られ,「だろ」「でしょう」という賛同の発言をする返答も見られる.そして,女性の場合は「やったね」という喜びを表す返答も観察された.また,女性,男性の返答にも「そう？」「そうかな」「高くないよ」という「否定型」の返答が見られるが,男性は「僕は〈女子〉ではありません」「「僕,男だよ」と返答します」という返答が見られる.男性の「女子じゃないので」という返答しない理由を合わせてみると,男性の中には「女子力」におけるジェンダーを表す「女子」に引っかかりをおぼえて,自分のジェンダー・アイデンティティを主張する返答が見られる.つまり,「女子力が高いね」に関する返答においては,男性も女性もそれをほめとして受け入れながら,お礼を言うスタイルが見られる.また,そのほめに対し,否定しながら,謙遜を表すスタイルも見られる.同時に,男性の返答では,「女子力が高いね」と言われたら,ジェンダー・アイデンティティを主張する場合があることから男性は「女子力」ということばに対し,ジェンダーを拠り所に距離を置くことがうかがえる.

参考文献

金庚芬（2002）.「ほめに対する返答」の日韓対照研究 言語・地域文化研究, 8, 179-195.
清水由希（2017）.ほめ言葉に対する返答について 国文目白, 56, 31-47.
寺尾留美（1996）.ほめ言葉への返答スタイル 日本語学,15, 81-88.

相互行為を通して達成されるポライトネス

―話者間の意図が対立する際のスタンス調整によるポライトネス達成―

木村恭大（明治学院大学大学院生）

1. はじめに

本研究は，職場で指示型の発話がなされる場面において，発話者と聞き手双方の指示への意図が対立する場合，人々はどのようにポライトネスを達成していくかを明らかにすることを目的とする．職場では様々な指示がなされる．それらは指示型発話といい，Searle(1979)にならい，聞き手に何かをさせようとする話者の試み，と定義する．指示型発話は，フェイス侵害の度合いが高く，ポライトネスに関連が深い発話行為であると考えられる．本研究では，指示型の談話を分析対象とし，その際のポライトネスを，近年注目を集めるスタンステイキングの観点から観察する．このように双方の意図が対立する際の指示型談話を観察すると，たとえ意図が対立していても，双方が自身のスタンス，特に認識的スタンスを調整し，双方が納得する形に収まると，ポライトネスも達成されると考えられる．

2. 研究背景・研究課題

Brown & Levinson(1987)は，フェイスの概念(Goffman, 1967)をもとにポライトネスを捉えた．人は自分のイメージ，フェイスを常に保っていたいという基本的な欲求があるが，発話はそれを脅かす可能性を持つ行為(FTA)であるとした．その上で，ポライトネスを，話し手が様々な言語的方策を用いてフェイスに配慮することであるとした．それに対して，Watts(2003)などでは，話し手の発話やそのポライトネスの意図だけでなく，聞き手のポライトネス解釈も考慮すべきとされた．その中でGrainger(2011)は，ポライトネスは相互行為の中で達成されるものであるとした．またその上で，相互行為の担い手双方のコミュニケーションの目的が円滑に達成されるかがポライトネス理解の一つの尺度となるとした．

以上の先行文献から，ポライトネス達成は，コミュニケーションの目的や意図が円滑に達成されるかを基準とする場合，相互行為を行う段階で目的や意図が対立する際は，談話全体でのポライトネス達成が可能なのか，という疑問が生じる．そこで本研究は双方の目的達成という点に着目して，指示型発話遂行時の話者間の意図が対立する際に，Grainger(2011)のいうポライトネスが達成されうるのかを探る．また，達成されるとする場合，どのような過程を経るのかを観察する．

3. 方法論

今回は，ある学習塾で行われる職員(先生)間の会議を録音，書き起こしたものをデータとして使用する．会議の参加者は，室長，男1，女1，男2の4名である．室長はこの塾の責任者で，授業を受け持つ講師でもある．4名の中で最もパワーのある人物である．次に男1はこの塾で3年ほど勤めるアルバイト講師．女1は，専任職員であり，勤続3年ほどであるが，他の分校から異動してきたため，室長とは1年ほどの付き合いである．最後の男2は専任の新入職員である．

以上 4 名の間で行われる会議の際の指示型談話を分析対象とする．コミュニケーションの目的・意図という点に着目すると，指示を出す側は，指示の受け手にその指示を理解させ，受諾させる意図があると考えられる．しかし一方，受け手がその指示の承諾を望まない場合，双方の意図に対立が生じる．このような場合の相互行為を，スタンステイキングの観点から分析する．

Du Bois(2007)は，スタンステイキングを対話的で間主観的な社会的行為であるとし，評価，位置づけ，相手との位置づけの調整，の三行為によって構成されているとした．また，スタンスには大きく，認識や知識に関するものと感情に関わるものの二種類あるとされる(Du Bois, 2007; Jaffe, 2009)．さらに，Du Bois(2007)は，スタンスの理論は意味のあるコミュニケーションであればどのようなものでも分析可能な理論であるとした．彼の理論に沿うと，指示型の談話もスタンスの観点から捉えていくことが可能であるといえ，本研究では Du Bois(2007)のスタンス理論を採用し，指示型談話に現れるポライトネスを観察する．

4. データ分析・考察

以下の抜粋は，指示に対する出し手・受け手の意図が異なる際の一場面であり，両話者がスタンスを調整することでポライトネスを達成する過程が観察できるデータである．抜粋 1 では，室長からアルバイト講師の男 1 に対して，週末の土曜日，模試監督業務のために普段より早めに出勤してほしいと指示する場面である．前提として，アルバイト講師は普段午後 6 時半までに出勤する必要があるが，模試の運営がある際は午後 4 時に出勤する必要がある．[1]

抜粋 1
1 室長：よしじゃあ(5.0)そんな形で(4.0)じゃあむねさん((男 1))土曜日ー(0.5)模試があるんだけどー
2 男 1：はい．まあ可能な限り(0.5)早く来ますけど．
3 室長：5 時とかってこれるかなー？
4 男 1：5 時には来れると思います．ちょっと 4 時はきついです．5 時ですね．
5 室長：じゃあ５時でいいっすか？
6 男 1：はい．

1 行目で，室長は男 1 に対して指示を出す．その際，約 4 秒の間があり，指示を躊躇していること，さらには模試があると言うだけで直接的な指示を避けていることから，模試の運営のために男 1 を早く出勤させることにマイナスの評価をし，それに基づき，自身を，FTA を避けるべき者であると位置づけている．それに対し男 1 は，模試があるという情報を聞くことで早く来いという指示であると認識するが，その指示内容，4 時に来ること，は大きな負担になると評価し，完全には承諾しないという位置づけをし，室長のスタンスには同調しないというスタンスをとる．これは 4 行目の発話からも観察できるが，ここで双方の指示に対する意図が対立していることがわかる．

男 1 は，可能な限り早くは来る，と直接的な FTA，つまり，直接的に断るという行為を避け，間接的に指示を断ることで，ネゴシエーションを持ち掛けている．それを受けて，室長は，アルバイト講師を普段より二時間以上も早く来させることは，元の自身の認識よりも負担が大きいものであると認識的スタンスを改め，午後 5 時にくるようにと妥協点を提示する形で指示を出しなおす．これを受け，男 1 は，5 時という時間に対し，妥当であると評価し，5 時に来ると自身を位置づける．その位置づけは，3 行目の室長の認識的スタンスと

[1] 文字化の際，個人の名前に関する箇所は同一モーラ数の仮名に変更している．

同様なことから，男1が，室長のスタンスに同調していることがうかがえる．

そして5行目で室長は，再度出勤時間を確認し，男1もそれを了承して，双方のスタンスが，午後5時に出勤するという妥協点に一致する．またその際，双方の目的が，一部ではあるが大きな衝突なく達成されることから，談話全体でポライトネスも達成されていると考えられる．

そこには指示に対する意図のみではなく，双方が会話をポライトに進めていこうという意図が働いていると考えられる．これは室長の間接的な指示，および妥協案の提示の際も，5時には来られるか，と形式的には相手に選択肢を与えるような方策を用いている点からもわかる．受け手である男1も，直接的に断るのではなく，ネゴシエーションを持ち掛けている点，さらに，4行目で4時には来られないと言う際も，ちょっと，とヘッジを使用してFTAの度合いを下げようと試みていることからもわかる．以上のように，指示に対する双方の意図が対立する場合でも，双方にポライトネスへの意図があり，そこでスタンスの調整が行われることで，談話全体のポライトネスも達成できると考えられる．

抜粋2は，室長から男2と女2に，生徒に関する情報データの更新作業を指示する場面である．生徒の情報は塾の運営に必要な情報であり，可能な限り早く更新することが求められる．しかし，このデータ更新作業は専任職員しかできないため，アルバイトが集めた情報は専任職員が更新する．1行目に室長が「その内容」と言っているのは，アルバイト講師が集めた情報のことを指す．

抜粋 2
1 室長：じゃーその内容を(0.5)紙に書いて・さかきばらさん((女1))更新できるか？
2 女1：今日はちょっと無理ですね．
((中略：室長と男1の間で紙に書く内容をシェア))
3 室長：よし(0.5)じゃあきくち先生((男2))とさかきばら先生((女2))は自分のところを更新して．
4 男2：あはい．
((中略：室長が男1に後ほど紙を渡すよう指示))
5 女1：わたしも自分のはやります．
6 室長：おっけー

1行目で，室長は女1に指示を出すが，そこから彼の認識的スタンスがうかがえる．この場面は会議の終盤で，これから自分が集めた情報に加え，アルバイトからの情報の更新作業をするのは，負担が大きいと評価し，間接的に指示を行うよう自身を位置づけている．ここには女1への配慮があり，先ほどの例と同様，選択肢を与えていることからポライトネスの意図も現れている．それに対し，女1は，その指示を断っているが，ここに指示に対する両者の対立がうかがえる．しかし，女1も，ちょっと，というヘッジを用い，直接的に断るというFTAを避けようという意図が表れている．

指示を断られたため，室長は，アルバイトからの情報の更新は求めず，自分のもののみ更新するよう自身の認識的スタンスを改める．これは，1行目で室長が示したスタンスの評価以上に，女1には両情報の更新は負担であると改めたと考えられるからである．しかし，負担であるとはいえ，その情報更新は急務であることに変わりはなく，少なくとも自分のものは今日中に更新するようにと妥協点を示している．それを理解し，女1も5行目で，少なくとも自分のものはやると自身のスタンスをはっきりと表明し，室長の示した妥協点に自身のスタンスを同調させている．これを受け，6行目で室長もそれを確認し，両者の意図が一部達成されている．また同時に，この談話全体でのポライトネスも達成されたと考えられる．

抜粋1と同様に，双方の指示に対する意図が対立する場合でも，双方のスタンスの認識に関わる部分を

調整することで，談話全体のポライトネスが達成可能であると考えられる．また，両抜粋の談話の進行とスタンスの取り方という点に着目すると，指示の出し手は，最初に出した指示が断られた後には自身の認識的スタンスを調整し，妥協点を示すという流れが見てとれる．また，指示の負担度も考慮し，ポライトネス方策もとることが観察された．指示の受け手が指示を断る際は，直接的に指示を断るというFTAを避けようとする意図が働き，間接的に断るスタンスを取るのに対し，示された妥協点には，自身のスタンスを明示的に同調させていきポライトネスを達成させようとするという一連の流れが観察された．そこには，双方が会話をポライトに進行しようとする意図もあることも，談話全体のポライトネス達成を可能にする要素であると考えられる．

5. まとめ

本研究は，指示型談話の際，指示の出し手・受け手双方の指示に対する意図に対立がある場合，談話全体のポライトネスが達成可能なのかという研究課題に沿ってデータの分析を行った．データでは，指示に対する意図が対立する場合でも，双方が自身のスタンス，特に認識的スタンスを調整しあうことで，一定の妥協点に双方のスタンスを同調させあうことが観察された．これにより，双方が一部ではあるが自身の意図を円滑に達成することで，Grainger(2011)のいう談話全体のポライトネスも達成可能であると考えられる．また，ポライトネス達成には，指示に対する意図が異なっていても，双方が会話をポライトに進行しようとする意図が働いていると考えられ，スタンスの調整もこの意図により行われると考えられる．以上のように，話者のスタンスを観察することはポライトネス理解に有用である可能性が示された．

文字化の記号
(数字)：間，数字は秒数
．：イントネーションが落ちている
？：イントネーションが上がっている
(( ))：補足情報

参考文献

Brown, P., & Levinson, S. (1987). *Politeness: Some universals in language usage*. UK: Cambridge University Press.

Du Bois, J. (2007). The stance triangle. In R. Englebretson (Ed.), *Stancetaking in discourse* (pp. 139-182). Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.

Goffman, E. (1967). *Interaction ritual: Essays on face-to-face behavior*. New York, USA: Pantheon Books.

Grainger, K. (2011). 'First order' and 'second order' politeness: Institutional and intercultural contexts. In Linguistic Politeness Research Goup (Ed.), *Discursive Approaches to Politeness* (pp. 167-188). Berlin, Germany: De Gruyter Mouton.

Jaffe, A. (2009). Introduction: The sociolinguistics of stance. In A. Jaffe (Ed.), *Stance: Sociolinguistic perspectives* (pp.3-28). New York, USA: Oxford University Press.

Searle, J. R. (1979). *Expression and meaning: Studies in the theory of speech acts*. New York, USA: Cambridge University Press.

Watts, R. J. (2003). *Politeness*. New York, USA: Cambridge University Press.

ビジネス場面におけるタイ人と日本人による尊敬語・謙譲語の使用に関する考察
－指標性の観点から－

チッターラーラック チャニカー （お茶の水女子大学大学院）

1. はじめに

ビジネス場面においては，敬語を含めた言葉遣いが重要とされている．敬語は人間関係の距離を示すものとしても捉えられているため（滝浦，2008），敬語を使用する際，相手，場面，内容などの要素に配慮した上で使い分けることが求められる．しかし，非母語話者のタイ人にとっては，それらの要素を理解した上で，使い分けることがまだ困難と考えられる．また，タイ人と日本人による敬語使用からそれらの要素をどのように指標しているかはまだ課題として残されているため，本研究では指標性(Silverstein，1976)の観点からビジネス場面において社会人のタイ人(以下，TNS)と日本人(以下，JNS)が使用した敬語，特に尊敬語と謙譲語を中心に分析して考察する．

2. 先行研究

2. 1 敬語

日本語の敬語とは，滝浦(2008)によれば，話し手と聞き手又は話題の人物の上下関係・親疎関係のような社会的・心理的距離を示すものとされている．敬語には意味を表するとともに，相手や第三者に対する敬意や丁寧さを示す機能があると捉えられているため，文化庁の『敬語の指針』(2007)，蒲谷・金・吉川・高木・宇都宮（2010）などはその概念に基づき，敬語を尊敬語・謙譲語Ⅰ・謙譲語Ⅱ・丁寧語・美化語という5項目に分類している．5分類の中で人間関係などを配慮した上で敬意を示すのは尊敬語，謙譲語Ⅰ，謙譲語Ⅱがあると指摘されている（文化庁，2007；蒲谷他，2010）．

2. 2 指標性と敬語

指標性に関しては，Silverstein (1976) などによって，言語使用において言語形式から意味を示す機能の他に，特定の場面における社会的特性を指標する機能もあると説明されている．敬語に付随する意味を含めて説明するにあたって，指標性(Silverstein，1976)の概念を援用し，敬語使用の特徴について分析することが有効であると考えられる．指標性を用いて日本語の敬語を分析した研究の中で，コミュニケーションにおける敬語使用に厳密に着目した研究は徳地(1996)などがある．

公的な人間関係を持つビジネス場面のように日常会話より敬語を多く使用される状況では，ビジネス場面に触れた指標性の観点から分析すべきだと考えられるが，まだ課題は多く残されている．そこで，本研究ではビジネス場面での尊敬語・謙譲語Ⅰ・謙譲語Ⅱの使用を取り上げ，会話参加者の間の人間関係や内容に関わる人物との人間関係がどのように指標されているかということに着目するため，指標性の概念を用いて社会的特性と関連させて分析を行う．

3. 研究課題

本研究ではビジネス場面における社会人の TNS と JNS による敬語使用の中で尊敬語・謙譲語Ⅰ・謙譲語Ⅱの使用を取り上げ，指標性の観点から使用の特徴を明らかにすることを目的とした．研究課題は以下のように設けた．

研究課題：TNS と JNS による尊敬語・謙譲語Ⅰ・謙譲語Ⅱの使用からは人間関係がどのように指標されているか

4. 研究方法

4. 1 データの概要

本研究はタイと日本における日系企業及び日系機関で働いているタイ人と日本人を対象にした．タイ日接触場面と日本語母語場面，それぞれ 13 組の会話データを収集した．接触場面の場合はタイ人女性(20 代後半-30 代前半，上級日本語話者)が部下役，日本人男性(40 代)が上司役となり，母語場面も同様に日本人女性(20 代後半-30 代前半)が部下役，日本人男性(40 代)が上司役という設定をした．上下関係のある上司・部下間の社内会話を収集するために，ロールプレイ手法を採用した．ロールプレイの場面設定に関しては，上司役と部下役の二者間会話で社内の忘年会・社員旅行・出張に関する企画について相談するという設定である．

4. 2 分析方法

分析対象は部下役による①尊敬語，②謙譲語Ⅰ，③謙譲語Ⅱのみとなったため，文化庁の『敬語の指針』(2007)と蒲谷他(2010)の敬語 5 分類の基準に基づき，分類した上，さらに相手及び話題の第三者に向ける使用と分析した．その中で特に尊敬語・謙譲語Ⅰ・謙譲語Ⅱには話し手と聞き手の間の人間関係及び第三者との人間関係を示す機能があると指摘されている．尊敬語・謙譲語Ⅰ・謙譲語Ⅱの概念について文化庁(2007)と蒲谷他(2010)によると，尊敬語は相手側及び第三者である行為や状態の主体を高くし述べるのに使用，謙譲語Ⅰは自分側から相手側及び第三者と関わる行為を述べる際に動作に関係する人物を高くし述べるのに使用，謙譲語Ⅱは相手に向けて自分側を高くせず，丁重さや改まりを足して述べるのに使用と説明されている．この概念に基づき,会話例を考察する．

先述の通り，敬語には敬意や丁寧さや人間関係を示す機能あると指摘されているため，本研究では尊敬語・謙譲語Ⅰ・謙譲語Ⅱの使用を分析対象として扱い，尊敬語・謙譲語Ⅰ・謙譲語Ⅱの言語的な意味を超えて人間関係という社会的要素を含めた付随的な意味までを指標性の観点から分析する．

5. 結果と考察

TNS と JNS の発話における尊敬語・謙譲語Ⅰ・謙譲語Ⅱは，相手に対する使用と第三者に対する使用と分類した．以下の表に割合と使用回数で結果を示す．

表 1:相手及び第三者別の尊敬語・謙譲語Ⅰ・謙譲語Ⅱの使用率と使用回数

	尊敬語			謙譲語Ⅰ			謙譲語Ⅱ		
	相手	第三者	合計	相手	第三者	合計	相手	第三者	合計
TNS	91% (20 回)	9% (2 回)	100% (22 回)	100% (29 回)	0% (0 回)	100% (29 回)	100% (24 回)	0% (0 回)	100% (24 回)
JNS	69% (40 回)	31% (18 回)	100% (58 回)	85% (114 回)	15% (20 回)	100% (134 回)	100% (77 回)	0% (0 回)	100% (77 回)

両者による尊敬語の結果に関して，TNS は相手に対する使用が約 91%となり，第三者に対する使用は 9%のみである．JNS の場合，相手に向けて尊敬語を使用した結果は 69%，第三者に対する尊敬語の使用は 31%となった．謙譲語Ⅰの結果，TNS による謙譲語Ⅰはすべて相手に対する使用であるが，JNS による使用は 85%が相手向け，15%第三者向けである．謙譲語Ⅱの使用に関しては，TNS・JNS 両者とも相手に対する使用のみ見られた．全体的に結果を見ると，相手に対する敬語使用は第三者に対する使用より圧倒的に多かったことが確認できた．会話の内容によって，第三者に対する使用は見られたが，JNS による使用の方が多かったという特徴が確認できた．

次に TNS と JNS による使用についてより理解を深めるために，接触場面と母語場面の会話例を提示する．TNS と JNS の発話に着目し,相手・第三者に向けた尊敬語・謙譲語Ⅰ・謙譲語Ⅱの使用例を通して人間関係をどのように指標されているかについて考察する．

表 2: 尊敬語の使用例

接触場面	母語場面
会話例① 相手に対する使用例 →01 TNS13　A さん今ちょっとお時間よろしいですか? 02 T-JNS5 どうぞ	会話例② 相手に対する使用例 →01 JNS1　今お忙しいですか? 02 J-JNS1 大丈夫です
会話例③ 第三者に対する使用例 →45 TNS2　ああ、つまり、じゃわかりましたトップの方のご都合を確認して 46 T-JNS2 都合確認して 47 TNS2　それから決めましょうか?	会話例④ 第三者に対する使用例 →103 JNS9 ちょっとここ何人ぐらい参加されるかというのを確認してみます 104 J-JNS9 はい、そうですね

以上の会話例①と会話例②は相手に対する尊敬語の使用例を示している．会話例①と②の TNS13 と JNS1 両者は発話 01 で「お時間」と「お忙しい」という尊敬語を使用している．部下の TNS13 と JNS1 が以上の尊敬語を使用することによって，上司に都合を確認すると共に，上司への敬意を示している．この使用は社会的な上位と下位の立場に基づいた使用と見られ，会話における敬語の使用で上下関係の構築を指標していると考えられる．会話例③と会話例④の場合は，第三者及び会話の話題の人物に対する尊敬語が使用されている．会話例③では TNS2 が部下の立場としてトップの方の都合について述べているため，「ご都合」の使用で敬意を示しつつ，上位のある第三者との上下関係を示していると考えられる．しかし，発話 46 の T-JNS2 は「都合」の使用で繰り返していることから，おそらく T-JNS2 はトップの方との関係がそれほど遠くないと推測できる．会話例④の場合は，社員旅行について会話している際，発話 103 での「参加される」の使用で第三者に対して敬意を払っていると見られる．しかし，人物は同じ会社の社員であるが，特定していない人物のため，JNS9 と J-JNS9 の 2 人の空間外の第三者と考えられる．この使用からソトとの人間関係を構築することを指標しているだろうと解釈できる．

表 3：謙譲語 I の使用例

接触場面	母語場面
会話例⑤ 相手に対する使用例 →119 TNS12　はい、今のところは以上です また何かあのうちょっと困っていたら、また相談させていただいてもよろしいでしょうか? 120 T-JNS12 はい、大丈夫ですよ	会話例⑥ 相手に対する使用例 →131 JNS11　そちらも部長の予定を見ながら、 やらせていただきます 132 J-JNS11 はいはい
第三者に対する使用例はなし	会話例⑦ 第三者に対する使用例 →133 JNS5　じゃちょっと本部長の秘書の方にご相談させていただいて、ちょっと日程をあのういただいてという形で進めたいと思います 134 J-JNS5 そうですね

会話例⑤と会話例⑥における発話からは「相談させていただく」，「やらせていただく」という謙譲語 I の使用が見られた．TNS12 と JNS11 の使用はいずれも，上司である相手に向けて自分の行動について話しているため，相手に対する謙譲語 I と分析できる．会話例⑦の場合は「ご相談させていただく」，「いただく」の謙譲語 I が使用されているが，この例の使用は相手である上司ではなく，本部長の秘書と関わるため，第三者に対する使用と解釈できる．謙譲語 I の使用例から，本部長の秘書に向けて使用していることで，向ける先との人間関係や敬意を含めた付随的な意味が捉えられる．これらの例から発話者は上司又は本部長の秘書との関係を理解した上で，敬意を示すべき対象に謙譲語 I を使用することで，職場における社会的関係を示すという指標性があると捉えられる．

表 4：謙譲語Ⅱの使用例

接触場面	母語場面
会話例⑧ 相手に対する使用例 →69 TNS8　私がまあこれから，あのう調整して、 またあのう結果でき次第、 お知らせ致します 70 T-JNS8　はい	会話例⑨ 相手に対する使用例 →175 JNS1　宜しくお願いします またあのう進捗情報を今日 ご連絡致しますので 176 J-JNS1 わかりました

会話例⑧と会話例⑨は相手に対する謙譲語Ⅱの使用例である．会話例⑧の発話 69 の TNS8 による「お知らせ致します」の使用と，会話例⑨の発話 175 の JNS1 による「ご連絡致します」の使用に関しては，謙譲語Ⅱの概念から考えると，上司との上下関係の中で TNS8 と JNS1 が自身の行為を示す際，丁重に述べていることがわかった．このように上司との会話場面において丁重に述べるべき対象に謙譲語Ⅱが使用されていることから，丁寧な表現を通して話し手と聞き手の立場について理解でき，上下関係を示していることが見られる．

以上の結果を踏まえて総合的に考察すると，相手に対する尊敬語・謙譲語Ⅰ・謙譲語Ⅱの使用は TNS と JNS 両者に見られたため，上司との上下関係上で敬意や丁寧を含めた付随的な意味があると捉えられた．しかし，第三者に対する使用に関して，謙譲語Ⅱには JNS，TNS とも使用がなく，尊敬語・謙譲語Ⅰには使用が比較的に少なかった．特に JNS による尊敬語・謙譲語Ⅰの使用の中で，上位である第三者に対する使用もあり，特定していない第三者に対しても使用されているため，母語話者の JNS は TNS より日本の社会文化的範疇において構築されている人間関係を深く理解するとともに，敬語使用を通してそのような関係性をどのように指標するかについてもより熟達していると考えられる．

6. まとめと今後の課題

本研究ではビジネス場面における TNS と JNS の尊敬語・謙譲語Ⅰ・謙譲語Ⅱの使用を取り上げ，指標性の観点から敬語使用の対象について分析を行った．その結果，全体的に相手に対する使用が比較的に多く，第三者に対する使用は少なかった．謙譲語Ⅱの使用には相手に対する使用のみということがわかった．JNS より TNS の方が第三者に対する使用が少ないという特徴が見られたため，非母語話者の TNS にとってまだ課題であると推測できる．また，指標性の観点から見られた敬語使用の現象の中から，尊敬語・謙譲語Ⅰ・謙譲語Ⅱの使用によって，文字通りの意味を示す以外，話し手と相手及び第三者の社会的立場に基づき，会話において相手との上下関係及び第三者との人間関係の構築を指標している機能があると説明できる．本研究では部下役の TNS と JNS による尊敬語・謙譲語Ⅰ・謙譲語Ⅱにのみ注目したため，今後すべての敬語使用・不使用を対象とし，会話の展開にも配慮しつつより厳密に分析することを課題とする．

謝辞　本稿の執筆にあたって，ご指導いただいた本林響子先生，本林ゼミの皆様，調査にご協力いただいた皆様に，心より厚く感謝を申し上げます．

参考文献

蒲谷宏・金東奎・吉川香緒子・高木美嘉・宇都宮陽子(2010)．敬語コミュニケーション 朝倉書店．

滝浦直人(2008)．ポライトネスから見た敬語，敬語から見たポライトネス―その語用論的相対性をめぐって― 社会言語科学，11(1)，23-38.

徳地慎二(1996)．謙譲表現"お・ご～する"，"お・ご～いたす"と指標性について 日本プラグマティックス学会，6，77-98.

文化庁(2007)．敬語の指針 http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/sokai/sokai_6/pdf/keigo_tousin.pdf［2019 年 11 月 28 日閲覧］．

Silverstein, M.(1976). Shifters, Linguistic Categories and Cultural Description, in K. Basso & H.Selby (eds.),*Meaning in Anthropology*, University of New Mexico, 11-15.

実時間による敬語意識の経年変化と社会的要因

―岡崎敬語調査から―

李丹(専修大学大学院生)　引田梨菜(専修大学大学院生)

1. はじめに

敬語調査で代表的なものに，国立国語研究所が行った岡崎敬語調査がある.国立国語研究所が公開している「岡崎敬語調査データベース ver. 1.0」によると，岡崎敬語調査では被調査者情報，基礎項目，敬語行動（反応文)，敬語意識，社会生活意識が調査項目となっている.今まで基礎項目と敬語行動の関係性について述べている論文には柳村（2014）がある.敬語意識の研究には横山・朝日・真田（2008）がある.そこから，調査次・生年が身内に対する敬語意識の変化に影響を与えていることがわかった.しかし，横山ほか（2008）は身内に対する敬語意識であり，基礎項目と身内以外の敬語意識の関係性についても研究を行わなければならない.

社会的要因は敬語意識に影響を与えると思われるが，その影響の強さは時代とともにどのように変化するのか.本研究では，横山ほか（2008）で触れた調査次・生年以外の基礎項目（以下，社会的要因とする）も検討に入れ，その影響力の変化を明らかにする.

2. 先行研究

岡崎敬語調査の研究には，敬語行動に焦点を当てているものが多い.まず，敬語行動に関する先行研究をまとめる.井上（2017）では，岡崎敬語における 3 回の調査結果から，敬語の成人後採用が観察されたと述べている.つまり，実時間による敬語行動は成長とともに丁寧になるということである.また,「道教え」場面から，聞き手に対して配慮表現の増加が見られた.これは，聞き手と対面コミュニケーションが重視されているという方向に変化している.それと同時に敬語の成人後採用の丁寧さが認められた.

敬語意識に関する先行研究には横山・朝日・真田（2008）がある.岡崎敬語調査の第一次調査と第二次調査の結果から，身内に対する敬語意識のデータをロジスティック回帰分析に投入して，岡崎敬語調査第三次の結果を予測した.その結果，身内に対する敬語意識の変化は生年と調査年を独立した変数として，S 字カーブになったことから，敬語意識に変化があることがわかった.しかし，敬語意識に与える影響が時代とともにどのように変化するのかについて述べている先行研究は管見の限りない.

3. データ概要

国立国語研究所が公開している「岡崎敬語調査データベース ver. 1.0」を用いた.そこから，ランダムサンプルのみを抽出している.本稿で扱っているデータは無回答・回答不明瞭等を除いたサンプリングである.サンプルサイズは一次調査 186 名，二次調査 226 名，三次調査 187 名，計 599 名である.

本研究で扱うデータは岡崎敬語調査の質問番号 201 である.敬語があるかどうかを尋ね，敬語がある場合はそれがどの部分かを教えてもらう.質問項目は次の通りである.

(1)あの人は駅に行かれた

(2)一つお持ちください

(3)今日はお野菜が安い

(4)ここにあります

(5)これはいただいたものだ

(6)知事のお車はもう駅を出発した

以下では，6 種類の敬語は「行かれた」,「お持ちください」,「お野菜」,「あります」,「いただいた」,「お車」のみ表記する.岡崎敬語調査では 6 種類の敬語に 0〜2 点の点数を与えて分析を行った （2 点：正解（下線または二重下線），1 点：部分正解，0 点：不正解）.本研究は敬語の有無の判断について焦点を当てるため，敬語ありが 1 点敬語なしが 0 点として分析している.さらに，本研究では，6 種類の敬語意識に影響を与える社会的要因として，調査次，生年，性別，出生地，居住歴，学歴（種別），学歴（卒業の有無），役員経験，職務内容の 9 つを検討した.

4. 分析方法

身内に対する敬語意識の変化予測のために，横山ほか（前掲）ではロジスティック回帰分析を用いた.また，越智（2010）によると，ロジスティック回帰分析は「2 値の反応 Y に対して，可能な要因候補としての説明変数 X が関係するか否か，関係するとすればどのようにその関係を捉えればよいかについて考えるものとする」としている.本研究では，越智（前掲）の観点を踏襲し，社会的要因が敬語意識に与える影響の強さの変化を明らかにする.本研究では 6 種類の敬語意識の有無を目的変数とし，9 つの社会的要因を説明変数としている.ロジスティック回帰分析において，目的変数と説明変数の関係式は次のようになる.$y = \frac{1}{1+e^{-(a_1 \cdot x_1 + a_2 \cdot x_2 + a_0)}}$.

本研究は 3 回の調査を通して，敬語意識に対する社会的な要因の影響力の変化を明確にするため，オッズ比(e^{a_1}, e^{a_2})を求めて，解釈していく.

5. 結果

ここでは，調査結果について述べていく.6 種類の敬語意識に影響を与える 9 つの社会的要因をロジスティック回帰分析によって解析し，結果を整理する.最初にオッズ比(Exp(B))95 パーセントの信頼区間で，調査次ごとに 6 種類の敬語意識に対する社会的要因の影響力の強さを表にまとめた（表 1 から表 6）.表では，敬語意識に対する影響力の強さ（順位）を数字で表している.最も影響の強い社会的要因は 1 と示し，最も影響の弱い社会的要因は 8 と示している.影響のないものは――と表記している.また，偏回帰係数(B)で敬語意識に対して，正の方向に影響を与える社会的要因には(+)，一方，負の方向に影響を与える社会的要因が(−)を付けた.

表 1　「行かれた」の要因の影響力（順位）

	学歴(種)	学歴(卒)	生年	性別	出生地	居住歴	役員経験	職務内容	調査次
第一次	1(+)	7(+)	6(+)	5(−)	4(+)	3(−)	2(−)	8(+)	——
第二次	7(+)	1(+)	8(+)	6(+)	2(+)	5(−)	4(−)	3(−)	——
第三次	2(+)	1(+)	8(+)	6(+)	5(−)	3(−)	4(−)	7(−)	——

表 2　「お持ちください」の要因の影響力(順位)

	学歴(種)	学歴(卒)	生年	性別	出生地	居住歴	役員経験	職務内容	調査次
第一次	5(−)	4(−)	8(+)	3(+)	2(+)	6(−)	1(+)	7(−)	——
第二次	2(+)	1(+)	6(+)	5(+)	8(−)	3(−)	4(+)	7(+)	——
第三次	5(+)	1(+)	8(−)	6(+)	4(+)	3(−)	2(−)	7(−)	——

表 3　「お野菜」の要因の影響力(順位)

	学歴(種)	学歴(卒)	生年	性別	出生地	居住歴	役員経験	職務内容	調査次
第一次	3(−)	1(+)	6(+)	2(+)	8(+)	4(−)	5(+)	7(−)	——
第二次	1(−)	3(+)	8(−)	5(+)	6(+)	2(+)	4(−)	7(−)	——
第三次	1(−)	3(+)	8(+)	5(−)	7(+)	2(+)	6(+)	4(+)	——

表 4　「あります」の要因の影響力(順位)

	学歴(種)	学歴(卒)	生年	性別	出生地	居住歴	役員経験	職務内容	調査次
第一次	2(−)	7(+)	8(+)	3(−)	5(+)	4(−)	1(+)	6(+)	——
第二次	6(−)	7(−)	8(+)	5(−)	2(+)	1(−)	4(−)	3(+)	——
第三次	2(−)	1(+)	8(+)	6(−)	3(+)	5(−)	4(+)	7(+)	——

表 5　「いただいた」の要因の影響力(順位)

	学歴(種)	学歴(卒)	生年	性別	出生地	居住歴	役員経験	職務内容	調査次
第一次	3(+)	1(+)	7(−)	5(−)	4(+)	2(−)	6(+)	8(+)	——
第二次	3(+)	5(+)	8(+)	1(+)	6(+)	2(−)	4(−)	7(+)	——
第三次	2(+)	3(+)	8(+)	1(+)	4(−)	6(−)	7(−)	5(+)	——

表 6　「お車」の要因の影響力(順位)

	学歴(種)	学歴(卒)	生年	性別	出生地	居住歴	役員経験	職務内容	調査次
第一次	2(−)	4(−)	7(−)	6(+)	5(−)	1(−)	3(−)	8(+)	——
第二次	1(+)	2(+)	7(−)	5(−)	3(+)	4(+)	8(−)	6(−)	——
第三次	3(−)	1(+)	8(−)	2(−)	6(−)	4(+)	5(+)	7(−)	——

以下では，上記の表から，各敬語意識に対して，社会的要因が与えた影響の強弱について総括する．ここでは，各調査次で，4 つ以上社会的要因の影響力の順位が上昇したものを影響力が強くなったと判断している．それに対して，4 つ以上社会的要因の影響力の順位が下降したものを影響力が弱くなったと判断している．

〈a〉「行かれた」の敬語意識に対し，影響力が強くなった社会的要因は学歴（種別）（三次調査）・学歴(卒業の有無)（二次調査）・職務内容（二次調査）である．影響力が弱くなった社会的要因は学歴（種別）（二次調査）・職務内容（三次調査）である．

学歴(種別)・学歴(卒業の有無)・職務内容などの社会的要因の変化が激しい．そのうち，学歴(種別)・学歴(卒業の有無)は「行かれた」の敬語意識に対して，正の方向に影響を与える．一方，3 回の調査を通して，職務内容は順位が変わり，正の方向から負の方向に変わった．

〈b〉「お持ちください」の敬語意識に対し，影響力が強くなった社会的要因は出生地（三次調査），弱くなった社会的要因は出生地（二次調査）である．つまり，影響力の強弱が大きく変化した社会的要因は出生地である．出生地は調査次によって，影響力の強弱が変わるだけでなく，影響を与える正負の方向も異なる．

〈c〉「お野菜」の敬語意識に対し，社会的要因の影響力の順位は 3 つ以上変化するものがないことから，敬語意識に対する社会的要因の影響力は大きく変化していない．また，影響力の変化が少ないことから，影響の正負には言及しない．

〈d〉「あります」の敬語意識に対し，影響力が強くなった社会的要因は学歴(種別)（三次調査）・学歴(卒業の有無)（三次調査）である．影響力が弱くなった社会的要因は学歴(種別)（二次調査）・居住歴（三次調査）・職務内容（三次調査）である．つまり，影響力が大きく変化した社会的要因は学歴(種別)・学歴(卒業の

有無)・居住歴・職務内容である.

また，学歴(種別)・居住歴は影響力の強弱が変化するが，一貫して負の方向に影響を与える.逆に職務内容は影響力が下がっているが，正の方向に影響を及ぼす.居住歴の影響力は調査次によって異なるが，一貫して負の方向に影響を与える.

〈e〉「いただいた」の敬語意識に対し，影響力が強くなった社会的要因は性別（二次調査）である.影響力が弱くなった社会的要因は学歴(卒業)（二次調査)・居住歴（三次調査）である.そのうち，性別・学歴(卒業の有無)は正の方向に変化し，居住歴は負の方向に影響を与える.

〈f〉「お車」の敬語意識に対し，影響力が弱くなった社会的要因は役員経験（二次調査）である.役員経験は調査次によって，影響力が異なり，また負の方向から正の方向に影響を及ぼす.

ここまでで，3 回の調査を通した各敬語意識に対する社会的要因の影響力の強弱の変化と併せて，影響の正負の変化を見た.以下では，本研究で明らかになったことをまとめ，今後の展望を述べる.

6. おわりに

本研究は岡崎敬語調査のデータベースをロジスティック回帰分析に投入して，社会的要因が敬語意識に与える影響の強さの変化について，以下の 3 点を明らかにした.(1)敬語意識に対して影響を与える社会的要因は調査次以外が全て変化した.さらに，1 種類の敬語意識に対する社会的要因の影響力は調査次によって異なっている.(2)学歴(種別・卒業の有無)は「あります」以外の敬語意識に強い影響力がある.これは国立国語研究所（1983）と同様の結果である.(3)社会的要因のうち，生年と調査次は先行研究の横山ほか（前掲）と異なり，敬語意識に対する影響力が弱い.それは，横山ほか（前掲）では身内に対する敬語意識を調査対象としているが，本研究では 6 種類の敬語に対する意識を対象としているためと考えられる.同じように敬語意識を調査対象としていても調査内容が変わると，社会的要因が与える影響力が異なることがわかった.以上の結果から，敬語意識に対する社会的要因は時代とともに，変化していくことがわかった.

今後も，敬語意識に対する社会的要因の影響力は時代とともに変化する可能性が大いに考えられるため，本研究と同様に実時間の観点から，敬語意識とそれに関わる社会的要因の変化をまとめる必要がある.加えて，敬語意識に対する社会的要因の影響をさらに明らかにするために，個人を追跡したパネル調査のデータ（「岡崎敬語調査データベース ver. 1.0」）を利用して論じる必要がある.また，今回は敬語意識に対して，9 つの社会的要因で分析を行ったが，これからは他の社会的要因（階級等）も含めて分析したい.

参考文献

井上史雄(編)（2017）.敬語は変わる―大規模調査からわかる百年の動き 大修館書店

越智義道（2007）.ロジスティックモデル 杉山髙一他(編) 統計データ科学辞典，114-115 朝倉書店

国立国語研究所（1983）.敬語と敬語意識―岡崎における 20 年前との比較―（報告 77）秀英出版

国立国語研究所（2010）.敬語と敬語意識－愛知県岡崎市における第三次調査－ 科学研究費補助金 研究成果報告書 第 2 分冊 阿部貴人(編)【経年調査 基礎データ編】 国立国語研究所

鑓水兼貴・井上史雄（2017）.岡崎敬語調査の理論的成果―岡崎で何が分かったか 井上史雄(編) 敬語は変わる―大規模調査からわかる百年の動き 大修館書店

柳村裕(2014) ことばの丁寧さの経年変化と社会的要因:岡崎敬語調査から 国立国語研究所論集 **8**， 177-196.

横山詔一・朝日祥之・真田治子（2008）.記憶モデルによる敬語意識の変化予測 社会言語科学，**11**(1)，64-75.

映画ポスターのキャッチフレーズの日中比較

王珏奇（金沢大学大学院生）

1. はじめに

グローバル化の中で，日本と中国は英語圏の国から映画を輸入することが多い．英語圏の映画が日本と中国で公開される際，そのポスターのキャッチフレーズは日本人と中国人の好みにしたがってそれぞれ変更が加えられる．本研究では，意味内容と表現形式の観点から英米の同一映画の日本版キャッチフレーズと中国版キャッチフレーズを比較する．

2. 先行研究

映画のキャッチフレーズに関する研究としては，中国語映画のキャッチフレーズを修辞の観点から分析した焦(2015)，ハリウッド映画のキャッチフレーズを修辞の観点から分析した李(2015)，日米映画のキャッチフレーズを感覚のスキーマと行為のスキーマの観点から分析した尾野(2018)などがあるが，映画キャッチフレーズの日中比較研究は見られない．

対照という観点から映画ポスターのキャッチフレーズの日中比較に最も関係のある研究は尾野(2018)である．この研究には問題点がいくつかある．まず，データの収集方法に恣意性がある．次に，分析が体系的になされていない．そして，英語オリジナル版ポスターとその日本語版ポスターのキャッチフレーズを比較する場合，日本語版ポスターが英語版ポスターに影響されているのかどうかの判断が難しいといった問題点を指摘できる．

3. 問題提起

英語圏の映画が日本と中国で公開される際には，それぞれ日本版ポスターと中国版ポスターが作成される．そのようなポスターでは，オリジナル版キャッチフレーズの日本語訳と中国語訳が掲載されることがあるが，翻訳ではないキャッチフレーズが提示されることもある．では，翻訳ではないキャッチフレーズの場合，日本版キャッチフレーズと中国版キャッチフレーズは，それぞれどのような情報をどのような表現形式で提示しているのだろうか．本研究では，英米の同一映画の日本版キャッチフレーズと中国版キャッチフレーズを意味内容と表現形式の観点から比較し，その同異を明らかにする．

4. 分析対象と分析方法

分析対象は，同一英米映画の日本版キャッチフレーズと中国版キャッチフレーズなので，それぞれの日本語版と中国語版のポスターを収集する必要がある．そこで，日本と中国の映画年間興行収入ランキング Top30 の英米映画をそれぞれ 10 年分（2009 年～2018 年）収集し，その中から日中両国に共通して輸入された英米映画を抽出した結果，168 本の映画に絞られた．しかしながら，キャッチフレーズの内容や形式は映画のジャンルによって変わる可能性があるため，ジャンル分けを行った．知名度の高い iTunes Store[1]の分類により 168 本の映画を分類した結果，「アクション/アドベンチャー映画」106 本，「SF/ファンタジー映画」25 本，「キッズ/ファミリー映画」26 本，「ドラマ映画」6 本，「スリラー/ホラー映画」2 本，「ミュージカル映画」「ドキュメンタリー映画」「ロマンス映画」は各 1 本ずつとなった．本研究では，ある程度の数量がある上位 3 ジャンルの「アクション/アドベンチャー映画」「SF/ファンタジー映画」「キッズ/ファミリー映画」を対象にする．

本研究で分析するキャッチフレーズは，映画の内容をアピールする中心的キャッチフレーズ，時間情報，そして製作情報（監督，出演者，製作会社，受賞，興行成績など）の 3 つのフレーズとする．後二者の時間情報と製作情報は，中心的キャッチフレーズと同様に訴求力があると考えられるので，広義のキャッチフレーズと見なすことにする．時間情報は，その一部で映画の内容を紹介し，アピールすることが多いので，中心的キャッチ

[1] iTunes Store では，SF/ファンタジー，アクション/アドベンチャー，キッズ/ファミリー，コメディ，スポーツ，スリラー，ドキュメンタリー，ドラマ，ミュージカルなどのジャンルがある．

フレーズと時間情報を 1 つのセットとして扱う．したがって，意味内容の分析は，(1)「中心的キャッチフレーズ＋時間情報」と(2)「製作情報」という 2 つの枠組みで行う．

意味情報の分析には，テキスト分析ツール KH Coder を用いる．この分析ツールによって頻出するコード（語彙）を抽出する．表現形式は，呂(2016)の広告表現における表現分類を参考に，使用される構文の分析を行う．

5. 分析結果

5.1 意味内容

5.1.1 中心的キャッチフレーズと時間情報

中心的キャッチフレーズと時間情報の意味内容の分析結果をまとめてみると，3 ジャンルに共通して出現するのは日本版の「程度（極限)」のコードである（表 1)．

表 1　コード「程度（極限)」の例文

日本版キャッチフレーズ
史上最強の敵に，試される仲間の絆ー
最強の頭脳．最強のコンビ．最強の事件．

このコード「程度（極限)」の例の「最強」の多用から，日本版キャッチフレーズは誇張して物事を捉え，独特性を強調する傾向にあることがうかがえる．

次に，アクション/アドベンチャー映画と SF/ファンタジー映画の 2 ジャンルで，「人類」のコードが日中共通して出現するが，頻度は日本版のほうが高い（表 2)．

表 2　コード「人類」の例文

「Big Hero 6」（日本語タイトル「ベイマックス」，中国語タイトル「超能陆战队[超能陸戦隊]」）	
日本版キャッチフレーズ	中国版キャッチフレーズ
“優しさ”で世界を救えるか．/「あなたの心とカラダを守ります.」/彼の名はベイマックス．人を傷つけることを禁じられた，優しすぎる僕のロボット.	超能英雄 重装上阵 拯救世界[スーパーパワーを持つヒーロー 完全武装して戦いに行く 世界を救う]

このコード「人類」の例を見ると，中国版キャッチフレーズはヒーロー（ベイマックス）が世界を救うという意味があるが，日本版キャッチフレーズでは，ベイマックスはヒーローだけでなく，人間の友達でもある．アクション/アドベンチャー映画や SF/ファンタジー映画の主人公は通常「ヒーロー」であるが，日本版キャッチフレーズはその仲間としての「人類」にも焦点を当てているので，そこから人への関心や人との共感が読み取れる．

アクション/アドベンチャー映画の場合，「再度」のコードが日中で共通して出現するが，その頻度は中国版が有意に高い（表 3)．また，「戦い」のコードについても，出現頻度は中国版のほうが高い．

表 3　コード「再度」の例文

「Jason Bourne」(日本語タイトル「ジェイソン・ボーン」, 中国語タイトル「谍影重重 5[重なるスパイの影 5]」)	
日本版キャッチフレーズ	中国版キャッチフレーズ
取り戻した記憶すべてが覆された時, 新たな戦いが始まる.	8 月 23 日 强势回归[8 月 23 日 勢いよく回帰する]

このコードの例を見ると，中国版キャッチフレーズの「回归」という語から，この映画がシリーズものの一部として扱われているのに対し，日本版キャッチフレーズの「新たな戦いが始まる」から，この映画が単体として注目されていることが読み取れる．つまり，シリーズ映画であっても，日本版キャッチフレーズでは，新しい映画のオリジナリティをアピールしている．一方，中国版キャッチフレーズではシリーズ作品全体の影響力を借りて映画を宣伝しようとする傾向があると言えよう．

キッズ/ファミリー映画に関して，中国版には「歓楽」のコードが出現するが，日本版には見られない (表 4)．

表 4　コード「歓楽」の例文

中国版キャッチフレーズ
8 月 2 日 欢乐上映[8 月 2 日　歓楽公開]
超强呆萌搭档 爆笑冒险启航[ガチ強くて萌えるコンビ，爆笑の冒険が始まる]

「歓楽」のコードの例を見ると，中国版キャッチフレーズは子供や家族全員向けの映画の楽しい雰囲気を醸し出そうとしていることがわかる．

5.1.2 製作情報

製作情報の意味内容の分析結果として，3 ジャンルともに「受賞」のコードが出現するが，その頻度は中国版のほうが有意に高いことがわかった．

表 5　コード「受賞」の例文

「Ready Player One」（日本語タイトル「レディ･プレイヤー1」，中国語タイトル「头号玩家」[ナンバーワンプレイヤー]）	
日本版キャッチフレーズ	中国版キャッチフレーズ
スティーブン・スピルバーグ監督作品	奥斯卡金像奖最佳导演 史蒂文･斯皮尔伯格 科幻巨制[アカデミー監督賞受賞スティーブン・スピルバーグの SF 傑作]

この例では，中国版キャッチフレーズは映画監督がアカデミー賞を受賞したことを強調しているのに対し，日本版キャッチフレーズではそのような言及は見られない．したがって，中国版キャッチフレーズは権威によってアピールする傾向があると言える．

5.2 形式

5.2.1 中心的キャッチフレーズ

中心的キャッチフレーズの構文を分析した結果，日本版では平叙文，名詞文，体言止め，疑問文，助詞で終わる文など多様な構文が使用されているが，中国版では主に平叙文と名詞文で表現されることがわかった．

表 6　日本版キャッチフレーズ

構文	例文	出現率（数）
平叙文	生命は，新たな道を見つける	37.9%（85）
名詞文	世紀の対決.	20.5%（46）
体言止め	この島で，人類は最弱.	14.7%（33）
疑問文	国王として守るか？ヒーローとして戦うか？	12.5%（28）
助詞で終わる	最強の，終わりへ―	7.1%（16）
命令文	新世代 VR―ワールドで，3 つの謎を解け！	5.8%（13）
言いさし文	《シュガーラッシュ》最大の危機を救うため，大親友のふたりは《インターネットの世界》へ飛び出すが…	0.4%（3）

表 7　中国版キャッチフレーズ

構文	例文	出現率（数）
平叙文	这个世界需要一个不同的超级英雄[この世界は違うスーパーヒーローが必要]	83.7%（98）
名詞文	一条健忘的鱼 一段永生难忘的旅程[忘れっぽい魚　忘れられない旅]	13.6%（16）
命令文	绝对不要相信童話[童話を信じてはいけない]	0.9%（1）
疑問文	100 分钟能否创造奇迹[100 分間で奇跡を起こせるか]	0.9%（1）
言いさし文	当数字终结，世界将会……[数字が終わると，世界は…]	0.9%（1）

5.2.2 時間情報

時間情報の構文を分析した結果，日本版では主に名詞文と体言止めが使用されているが，中国版ではもっぱら平叙文と名詞文で表現されることがわかった．

表 8　日本版キャッチフレーズ

構文	例文	出現率（数）
名詞文	12.21（金）ロードショー	59.6%（34）
体言止め	4.27（金）アベンジャーズ，全滅.	24.6%（14）

平叙文	4.29〔金〕“禁断の戦い（チーム・バトル)”が始まる	7.0%（4）
助詞で終わる	11/30[金]美しき王国へ	5.3%（3）
命令文	4.6（金）生きて帰れ!!	1.8%（1）
疑問文	8.10FRI 勝つのはどっちだ.	1.8%（1）

表 9　中国版キャッチフレーズ

構文	例文	出現率（数）
平叙文	5 月 11 日 空前集结[5 月 11 日　空前集結]	95.9%（140）
名詞文	9 月 15 日 猩球终章[9 月 15 日　猿の惑星の終章]	4.1%（6）

5.2.3 製作情報

製作情報の構文を分析した結果，日本版は主に名詞文，体言止め，平叙文などを使用するが，中国版は主に名詞文，平叙文を使うことがわかった.

表 10　日本版キャッチフレーズ

構文	例文	出現率（数）
名詞文	大ベストセラー作家ビアトリクス・ポター原案	60.6%（40）
体言止め	美女と野獣のディズニーが“くるみ割り人形”をついに映画化	24.3%（16）
平叙文	ディズニーが“ネットの裏側”を描く！	10.6%（7）
助詞で終わる	『ズートピア』のディズニーが贈る，夢の《ネットの世界》へ！	3.0%（2）
命令文	米影評サイトレビュー『IT/イット“それ”が見えたら，終わり』超え！	1.5%（1）

表 11　中国版キャッチフレーズ

構文	例文	出現率（数）
名詞文	奥斯卡金像奖最佳导演 史蒂文・斯皮尔伯格 科幻巨制[アカデミー監督賞受賞スティーブン・スピルバーグの SF 傑作]	57.5%（42）
平叙文	美女与野兽金牌团队 再现经典[美女と野獣のゴールドチームが，名作を再現させる]	42.5%（31）

5.3 まとめ

内容面の分析結果をまとめてみると，中心的キャッチフレーズと時間情報について,「程度（極限)」のコードの出現頻度が 3 ジャンルに共通して日本版のほうが高い．アクション/アドベンチャー映画と SF/ファンタジー映画で,「人類」のコードの出現頻度が日本版のほうが高い．アクション/アドベンチャー映画の場合,「再度」のコードの出現頻度は中国版が有意に高く,「戦い」のコードの出現頻度は中国版のほうが高い．キッズ/ファミリー映画に関して，中国版には「歓楽」のコードがあるが，日本版にはない．製作情報について，3 ジャンル合わせて「受賞」のコードの出現頻度は中国版のほうが有意に高い.

形式面の分析結果をまとめてみると，日本版は多種多様な表現形式が見られるが，中国版は主に平叙文と名詞文で表現し，特に四文字言葉を利用した平叙文と名詞文が特徴的である．また，日中共通して平叙文と名詞文が多いことも見られた．その理由としては，平叙文の基本機能が情報伝達にあり，広告の目的と繋がっていること，名詞文は簡潔的に情報を提示する点でインパクトがあることが考えられる（呂，2016).

6. おわりに

本研究では，日・中それぞれの社会で好まれるキャッチフレーズの意味内容と表現形式の傾向を明らかにした．今後は，日・中それぞれの社会で製作される映画のキャッチフレーズを用いて本研究の結果を検証したい.

参考文献

焦振華 (2015). 国産影宣伝語的修辞探析 安徽文学, 4, 102-104.

国立国語研究所 (2004). 分類語彙表―増補改訂版― 大日本図書

李珂 (2015). 論广告宣伝語的修辞策略—以電影广告詞為例 湖北第二師范学院学報, 32(6), 129-132.

尾野治彦 (2018). 「視点」の違いから見る日英語の表現と文化の比較 開拓社

呂晶 (2016). 日本語広告表現の語用論的研究：形式と機能に着目して 北海道大学博士論文

「やさしい日本語」ニュースの見出しの機能

－見出しの主題成分に着目して－

湯浅千映子(大阪観光大学)

1. はじめに

今日，重要な情報源としてネットニュースが発達し，新聞社やテレビなどの既存のメディアが発信するニュースをタイムラグなしに，大量に手にすることが可能となった．このネットニュースを読む際，最初に目にし，また，ニュースを選ぶ手がかりとなるのが，「見出し（ヘッドライン）」である．

共同通信社『記者ハンドブック第12版新聞用字用語集』(2010）によれば，「見出しは読者を本文へと引きつけ，いざなう看板，案内標識であるとともに，記事の勘所を前もって知らせ，本文を読みやすくする役目を果たす．簡潔な記事の極致でもある」とある．また，小宮（2012）は，新聞の報道記事の「見出し」について，「ニュースの表題であり，読者に一目で記事の要点を知らせ，読む必要があるかのどうかの判断材料を提供する」という．

本発表が分析資料とするのは，一般向けNHK「NEWS WEB」(www.nhk.or.jp/news）と小中学生や外国人向けに「やさしい日本語」で書かれたNHK「NEWS WEB EASY」(www.nhk.or.jp/news/easy）の見出しである[1]．これらは，記事本文の内容が対応しながら，ニュースの受け手の属性が異なることで，表現を書き分けている．以下は，2019年5月14日配信のニュースで，aがNHK「NEWS WEB」・bがNHK「NEWS WEB EASY」である．「NEWS WEB EASY」で，「NEWS WEB」の記事本文を小中学生・外国人向けに書き換えるのと同様，見出しもパラフレーズがなされている[2]．

(1a)百舌鳥･古市古墳群 世界文化遺産登録へ

【記事本文】世界文化遺産への登録を目指している大阪府の「百舌鳥・古市古墳群」について，ユネスコの諮問機関は世界遺産に登録することがふさわしいとする「記載」の勧告をまとめました．これにより，「百舌鳥・古市古墳群」はことしの世界遺産委員会で世界文化遺産に登録される見通しとなりました.

(1b)百舌鳥・古市古墳群」がユネスコの世界遺産に決まりそう

【記事本文】日本は，大阪府にある「百舌鳥・古市古墳群」をユネスコの世界遺産に推薦しています．「百舌鳥・古市古墳群」は，４世紀から５世紀ごろの偉い人たちの墓です．全部で４９の墓があります．仁徳天皇の墓だと言われているとても大きい墓は長さが４８６mあります．ユネスコに協力しているイコモスは「百舌鳥・古市古墳群」について調べました．そして，世界遺産にしたほうがいいとユネスコに伝えました．「百舌鳥・古市古墳群」は，今年のユネスコの会議で世界遺産になることが決まりそうです.

ニュースの見出しは，記事本文の「リード」部分を中心に重要とされる情報を取り出し，それらをつなぎ合わせることで作られる．ニュースの読み手は，限られた文字数の中で記事内容を予測し，読み進める．不完全な文である見出しに，適当な語句を補い，完全な文の形に復元して読み取ることで，ニュースの概要をつかむ．こうした見出しの読み取りは，日本語を学ぶ外国人にとって，困難さを感じる場合も少なくないだろう．

（2a）今年の漢字は「輪」	（2b）ことしの漢字かんじは「輪」になる
（3a）ドコモが小・中学生向けスマホを発表	（3b）小学生や中学生が使うスマートフォンを発表
（4a）東京おもちゃショー始まる	（4b）おもちゃショーにタブレット端末やスマートフォンのおもちゃ
（5a）アップル ｉＰｈｏｎｅ５発表	（5b）アップルが新しいｉＰｈｏｎｅを発表

（5a）の場合，主語「アップル」と述語「ｉＰｈｏｎｅ５」の間に置かれた「半角の空白」が主語と述語の境目

1 本発表では，配信日が2012 年4月～2014年12月の「NEWSWEB」・「NEWS WEB EASY」の見出しとその記事本文を分析資料とする.

2 田中 (2018）によれば，「NEWS WEB EASY」へとやさしく書き換える方法に，旧日本語能力試験３，４級の語彙を使用する，文の長さを短く，受動態や慣用表現を避ける，専門用語や固有名詞の説明の追加，冒頭のリード文や周辺的情報の削除があるという.

を示すマーカーとして機能している.（5b）では，助詞を補い，１文化している. NHK「NEWS WEB」をはじめ，さまざまなニュースの見出しにおいて，この「半角の空白」が多用される.

（6a）ＮＹ 炭酸飲料の大きさ規制へ	（6b）太りすぎないように飲み物の入れ物を小さくする
（7a）米　１０２歳の女性が空を舞う	（7b）アメリカで１０２歳の女性が空を飛ぶ
（8a）アジアの学生招き就職面接会 東京	（8b）アジアの学生を東京に招待して就職の面接

「半角の空白」の前に位置し，見出しの文頭となれるのは，主語だけとは限らない.（5a）は，その記事本文で「ニューヨーク市は」と始まり，出来事の主体を指すのに対し，（6a）・（7a）は，「アメリカで」・「東京に」といった出来事の行われた場所を示している.

本研究は，内容を同じくするNHK「NEWS WEB」・NHK「NEWS WEB EASY」の両記事を比較対照し，小中学生向け・外国人向けとされる見出しの表現上の特徴を明らかにすることを目的とする. 本発表では，一般向けの「NEWS WEB」の見出しで，特にその内部に「半角の空白」を含む見出しに着目し，①「半角の空白」を介した，見出しの前部分と後部分でどんな有機的なつながりがあるのか，また，②「半角の空白」を伴うことで，見出し単体で記事内容を予測することが難しくなった一般向け「NEWS WEB」の見出しを，「NEWS WEB EASY」でどう言い換えて表現し，小中学生や外国人向けのやさしさをどう実現しているのかを見ていく.

2. 先行研究

・「見出し」の構造について…寺川（1991）／はんざわ（2018）
・「見出し」の省略について…野口（2002）／森山（2009）
・「見出し」の「無助詞化」について …黒崎　(2007)
・「見出し」の「半角の空白」について…野口（2002）／尹（2015）／はんざわ（2018）

3. 分析の方法

本発表では，寺川（1991）・はんざわ（2018）などを参照し，NHK「NEWSWEB」の見出し上の語句の連続を「文」としてとらえ，見出し上の「話題」部分と「説明」部分をつなげ，「文（有題文もしくは無題文）」を生成できるかという観点から，見出しの全体的構造を整理した. さらに，黒崎（2007）に沿って，助詞「が」や「は」の代わりに「半角の空白」を置くNHK「NEWSWEB」の見出しが，記事本文のどんな内容を見出し上に取り立ててまとめているか，意味上の分類を行った. 以上の結果をふまえ，NHK「NEWS WEB EASY」の見出しとの比較分析を通し，小中学生や外国人向けとされる見出しの特徴を考察する.

4. ニュース見出しの構造，形式的分類

図1　ニュース見出しの全体的構造

Ⅰ	「話題」・「説明」…単文に相当 a「話題」「説明」（無助詞）　東京おもちゃショー始まる b「話題」助詞「は」or助詞「が」「説明」　今年の漢字は「輪」　ドコモが小・中学生向けスマホを発表 c「話題」半角の空白「説明」　アップル　ｉＰｈｏｎｅ５発表 d「説明」半角の空白「話題」　アジアの学生招き就職面接会 東京
Ⅱ	「説明」のみ…句に相当　プーチン氏と秋田犬の写真公開　北京で日本語のアナウンス大会
Ⅲ	「話題」or「説明」or「話題・説明」半角の空白「話題」or「説明」or「話題・説明」…２文に相当 海外でエビ大量死　輸入冷凍エビの価格高騰　中国のスパコン世界最速に 日本は4位 ※見出し内部に半角の空白が２箇所以上存在し，２～３文に相当する場合もある. 米 世界最大 ゲーム業界の見本市開幕　韓国 旅客船沈没 死者１００人超に
Ⅳ	会話の引用　赤崎氏「これ以上の名誉はない」　「ニワトリ鳴くのは体内時計が機能」

「NEWSWEB」・「NEWS WEB EASY」とも，Ⅰの「話題」と「説明」の組み合わせで構成される見出しが最も多く見られた.「NEWSWEB」では，中でも半角の空白ありのⅠｃが最も多く，全体の７割以上を占める. これを「NEWS WEB EASY」で助詞を伴い，１文化するⅠｂの言い換えパターンが最も多い. その場合，（6b）のように，NYという行為の主体

を見出し上で明示せず，叙述部分に注視させる見出しも見られた．こうした「NEWSWEB」の半角の空白ありのⅠc（単文相当）やⅢ（２文相当）の見出しで，「NEWS WEB EASY」で半角の空白なしの「文」となる例は，全体の５割以上であった．

また，「NEWS WEB EASY」では，ニュースの書き手の語りを引用し，再現したようなⅣの例があった．

（9a）「乳幼児の歯磨き中の事故に注意を」／（9b）「小さい子どもが歯を磨いているときは気をつけて」

助詞止めの「を」の後には，希望や要望，当然，適当を表す「よう」「たい」「べきだ」などの形式が省かれている．これが（9b）の見出しで「気をつけて」となっており，まるでニュースを受け取る側の子どもや外国人のそばにいて，語りかけるような口調がある．

5. ニュース見出しの「半角の空白」が何を表すのか

見出しの話題部分と説明部分の間に「半角の空白」を置くⅠcの見出しについて，見出しの文頭でどんな内容の語句が主題化するのか，黒崎（2007）の分類によって見たところ，「A　特定の個人または団体」・「B　出来事または出来事の中心事物」・「C　読者の目をひくための言葉」の３タイプが見られた[3]．aがNHK「NEWS WEB」・bがNHK「NEWS WEB EASY」である．

図２　「半角の空白」を伴うニュース見出しの意味的特徴

A	地名 （10a）中国　ネット利用者５億人超え　（10b）中国 インターネット利用が５億人以上に 個人名 （11a）若田さん アイソンすい星撮影　（11b）アイソンすい星を国際宇宙ステーションから撮る 会社組織名 （12a）農水省 和食の魅力の海外発信強化へ　（12b）和食のすばらしさを世界にもっと知ってもらう
B	出来事 （13a）三陸沖の地震 Ｍ７前後の地震ほぼ同時発生　（13b）２つのＭ７の地震が起きていた （14a）五輪開催 東京の支持率は約７０％　（14b）“オリンピックを東京で” 東京で賛成する人は７０％ （15a）ボストン爆発　容疑者２人の映像と写真公開　（15b）ＦＢＩが爆破テロ事件の容疑者のビデオを発表 出来事の中心事物 （16a）太平洋クロマグロ 絶滅危惧種に指定　（16a）太平洋のクロマグロが「絶滅危惧種」になる （17a）上野のパンダ 公開を再開　（17a）上野動物園の「シンシン」 赤ちゃんはできなかったが元気
C	（18a）世界初 アンドロメダ銀河の鮮明全体像 （18b）「アンドロメダ銀河」がはっきり見える写真を撮ることに成功 （19a）理化学研究所 世界初ｉＰＳ臨床研究を申請　（19b）世界で初めて ｉＰＳ細胞で目の病気を治す研究 （20a）世界最高齢 １１６歳男性死亡　（20b）世界でいちばん長生きをした１１６歳の男性が亡くなる （21a）思い浮かべるだけ 家電や車いすを操作　（21b）頭で考えるだけで電化製品や車いすが動く （22a）グランドキャニオンで綱渡り（22b）高さ４６０ｍ アメリカのグランドキャニオンで綱渡り

Bは，見出しの文頭で，ニュースの出来事やそのニュースにまつわる中心事物をまず目にすることで，そのニュースが一体どんな種類のニュースなのかを即，認識できる．知りたいニュースに素早くアクセスする，インデックスのような効果が期待できよう．これらの見出しの記事本文のリード部分を見ると，（13a）「先月，宮城県で津波が観測された三陸沖の地震について」など，「～について」で始まる．「～について」は，「前提となる事柄の中から範囲を限定する」という意味をもつ．その「前提となる事柄」とは，既に人々の間で常識として共有されている情報と解釈できよう．（15a）「ボストン爆発」の場合，過去にボストンのマラソン会場での爆発事件が第一報として報じ

[3] Cについては，黒崎（2007）で，話題が提示されない見出しに位置づけていたが，本分析資料の見出しの場合，AにもBにも該当しない内容を文頭に置き，話題として注目させる見出しが存在していた．よって，Cも読者の目をひく話題を文頭に提示される見出しとして，A，Bに並ぶものとする．

られ，既知の出来事である．「NEWS WEB EASY」の読者である小中学生や外国人に対しては，その既有知識がないものと判断し，一般向け「NEWSWEB」の見出し上には現れない，行為の主体（「ＦＢＩが」）を見出しの文頭に置く．

Ｃは，ニュース記事の主たる内容を示す前に，周辺的・補足的な情報を冠のように見出しの文頭に添えて，読者の注目を引き，読者を記事本文へと誘う例である．「NEWSWEB」・「NEWS WEB EASY」の両者で見られた．(18a)「世界初」，(19b)「世界で初めて」など，読者が記事内容に興味を抱き，表現の目新しさや意外性でニュースの価値を高める効果が期待できる．

6. さいごに

本発表は，小中学生や外国人を対象のNHKやさしい日本語ニュースの見出しと，内容を同じくする一般向けのNHKニュース記事を比較し，見出しの文頭を中心に，その形式面（見出しの文頭がどんな形式で話題を提示するか）と内容面（見出しの文頭にどんな内容の話題が来るか）について分析した．

「NEWSWEB」・「NEWS WEB EASY」とも，見出しの文頭の主語に相当する部分と述部との間に「半角の空白」を置くことで，「半角の空白」が見出しの話題を示すマーカーとしての機能を果たすことがわかった．その「半角の空白」見出しの文頭で「出来事や出来事の事物」を示し，これを主題化・話題提示とするものも多く見られた．また，「NEWSWEB」の見出しと視点を変え，記事本文の中でニュースの読み手の興味・関心を引く内容を見出し化することで，小中学生や外国人にニュースへの親近感を持たせる手法も見られた．

日本語を学ぶ外国人がニュースを読む際には，見出し特有の助詞の用法など，見出しの文法の理解が求められる．また，学習者にとって初見のニュースであっても，見出し解読のルールを適用し，さらに，記事本文だけでは知り得ない既存の非言語知識を総動員させ，情報の欠けた部分に適当な語句を補うなどの高度な読み取り技能が要求される．「NEWS WEB EASY」は，そうした負担を軽減し，見出しを眺める中で学習者自らがニュースを選び，ニュースに親しむことを可能にしている．

参考文献

はんざわかんいち（2018）．即題―新聞投稿　題名の喩楽　明治書院

小宮千鶴子（2011）．新聞の文体 文章・談話・表現の事典 明治書院

黒崎佐仁子（2007）．話題提示に見られる無助詞文の条件―ニュース見出しを中心として― 早稲田大学日本語教育学，1，67-80.

共同通信社（2010）．記者ハンドブック第12版新聞用字用語集 一般社団法人共同通信社

水内純清（2001）．新聞の見出しに見る助詞の省略と効用　東アジア日本語教育・日本文化研究，3，181-188.

森山卓郎（2009）．新聞見出しの文法・序説　日中言語研究と日本語教育，２，13-20.

野口崇子（2002）．見出しの文法―解読への手引きと諸問題　講座日本語教育，38，94-123.

高橋太郎（1993）．述語によってできた述語形式 日本語学，12(10)，18- 26.

田中英輝・美野秀弥・越智慎司・柴田元也（2013）．やさしい日本語ニュースの公開実験　NHK技研R&D，139，20-29.

田中英輝・美野秀弥（2018）．ニュースのためのやさしい日本語とその外国人日本語学習者への効果　NHK技研R&D，168，36-48.

寺川みち子（1991）．新聞見出しに見る装定と述定 田島毓堂・丹羽一弥（編） 日本語論究３：現代日本語の研究 和泉書院 pp.109 - 128.

打浪文子・岩田一成・熊野正・後藤功雄・田中英輝・大塚裕子（2017）．知的障害者向け「わかりやすい」情報提供と外国人向け「やさしい日本語」の相違―「ステージ」と「NEWSWEB EASY」の語彙に着目した比較分析から― 社会言語科学，20(1)，29-41.

湯浅千映子（2014）．ネットのニュース記事における見出しの機能 早稲田日本語研究，13，13-23.

湯浅千映子（2016）．NHK「NEWSWEBEASY」のヘッドラインの機能　NHK「NEWSWEB」との比較と日本語授業への活用 埼玉大学日本語教育センター紀要，10，17-28.

尹盛熙（2015）．新聞見出しにおける日韓の省略と縮約―形式的違いを中心に― 日本学報，104，33-50.

「ことばによる傷つき」に関する言語コミュニケーション論的問いの導出

―心理学的研究のレビューから―

中川佳保(大阪大学大学院生)

1. 導入

本稿の目的は，話し手の発話によってその聞き手が傷つくという現象(以下，「ことばによる傷つき」と表記)について，言語コミュニケーション論においてはどのような問いからその現象に迫れるのかを明らかにすることである．具体的には，心理学における先行研究を概観し，ことばによる傷つきの一種であるモラル・ハラスメントの特徴と照らし合わせることで，問いを導出する．ことばによる傷つきが起こる場面は多岐にわたるが，本稿では，家族や友人，同僚などより親しい人間関係において起こる傷つきに焦点を絞る．

2. 心理学における先行研究

心理学においては，傷つくという感情(hurt feelings)がどのようなものかを知るための一つのアプローチとして，ことばによる傷つきに関する研究が展開されてきた．特に，Vangelisti(1994)が，傷つくという感情を引き起こす要因として発話(message)に注目したことに端を発する．

Vangelisti(1994)は，学部生約 180 人(一回目は 179 人，二回目は 183 人)を対象とした二度の質問紙調査を通じて，調査協力者が傷ついたことのある発話を収集した．質問紙調査において，調査協力者は，誰かの発話によって傷ついた状況を思い出し，その時のやりとりのスクリプトを回答した．スクリプトには，調査協力者が傷ついた発話の前に何が言われたか，傷ついた発話はどのようなものであったか，それに対して調査協力者はどのように反応したかが記述された．さらに，スクリプトの他に，その発話によって傷ついた度合いも調査された．

その結果，収集された発話は，その発話がなにを為しているかという観点から，情報伝達，評価，非難，指示，願望の表明，忠告，冗談，脅し，嘘，疑問の 10 タイプに類型化された[1]．また，何についての発話かに着目してトピックという観点からも分類が行われ，その類型として，恋愛関係(romantic relationship)，友人や家族といった非恋愛関係(nonromantic relationship)，性的振る舞い(sexual behavior)，容姿(physical appearance)，能力や知性(abilities/intelligence)，個人の性格(personality traits)，自尊心(self-worth)，時期(time)，民族や宗教(ethnicity/religion)が挙げられた．

このような類型化に加えて，Vangelisti(1994)は，どのようなタイプおよびトピックの発話が聞き手を傷つける度合いが高かったのかを分析し，その理由を考察している．発話のタイプでは情報伝達が，トピックでは恋愛関係と個人的な性格が，傷ついた度合いが高かった．情報伝達については，非難や評価と違って，相手の言ったことを訂正する余地がほとんどないために傷ついた度合いが高かったのではないかと考察されている．また，恋愛関係についても，相手の面目をつぶさないようにしなければならないため，結果的に相手の言ったことを修正することが難しくなり，より傷つくのではないかと考察されている．

Vangelisti(1994)はさらに，聞き手が傷ついた出来事が話し手と聞き手の人間関係に与える影響について議論している．特に，聞き手が感じた話し手の意図(話し手は聞き手を傷つける意図を持っていたと感じたか)，関係の親密さ，関係の種類(家族か否か)という三つを変数として，それぞれの変数が聞き手と話し手の人間関係に及ぼす影響をいかに左右するか，具体的には，それぞれの変数と対人的な距離の変化(distancing effect)の間にどのような相関が見られるかを検討している．質問紙調査の結果，話し手の発話が意図的であったと思われているほど人間関係がより疎遠になっており，関係が親密で

---

[1] Vangelisti(1994: 61)で示された各類型の発話例は以下の通りである．“You aren’t a priority in my life.”(情報伝達)，“Going out with you was the biggest mistake of my life.”(評価)，“You’re such a hypocrite.”(非難)，“Just leave me alone, why don’t you”(指示)，“I don’t ever want to have anything to do with you.”(願望の表明)，“Break up with her so you can have some fun.”(忠告)，“The statement was really an ethnic joke against my ethnicity.”(冗談)，“If I find out that you are ever with that person, never come home again.”(脅し)，“The worst part was when he lied about something.”(嘘)，“Why aren’t you over this [a family death] yet?”(疑問)

あるほど，また，家族の方が，人間関係が疎遠になるという影響が小さいということが明らかになった．

以上が Vangelisti(1994)の概要である．Vangelisti(1994)では，①聞き手が傷ついた発話のタイプとトピック，②タイプおよびトピックと傷ついた度合いとの関係，③聞き手が感じた話し手の意図，関係の親密さ，関係の種類という変数と，聞き手がどの程度対人的距離をとったかとの関係，④傷ついた際の反応といったテーマが扱われた．Vangelisti(1994)から，③については，聞き手が感じた意図に焦点を置いた Vangelisti & Young(2000)や，傷ついた度合と距離の関係に着目した McLaren & Solomon(2008)がさらに考察を発展させている．また，Vangelisti(1994)では質問紙調査で収集するにとどまっていた④についても，Vangelisti & Crumley (1998)が詳細に分析をおこなっている．また，これらの問題を，恋愛関係や家族関係といった特定の人間関係に焦点を絞って調査したものもある(e.g. Feeney, 2005；Vangelisti et al., 2007).

他に，Vangelisti et al.(2005)は，聞き手が思う傷ついた原因(perceived causes)をテーマとしている．この研究では，二度の質問紙調査を通じて，聞き手が傷ついた原因として，次の 8 種類の要因が抽出された．その要因とは，自分との関係が軽視されること(relational denigration)，屈辱を受けること(humiliation)，言語的な又は非言語的な攻撃であること(verbal/nonverbal aggression; 聞き手が傷ついた発話の言い方の特徴の問題)，変えることのできない内在的な欠点に対するものであること(intrinsic flaw)，不適切なあるいは悪意が感じられるユーモアであること(ill-conceived humor)，考えを誤解されること(mistaken intent)，失望させられること(discouragement)，ショックを受けさせられること(shock)である．

Vangelisti(2016)は，これまでの研究に不足している点として，次の三つを挙げている．一つ目は，誰かが傷ついている進行中のやりとり(ongoing, situated hurtful interactions)の分析である．特に，傷つきの中でも，一回限りの出来事(isolated hurtful events)と，くり返し起こる出来事(events that occur repeatedly)を区別する必要があるとされている．また，複数の参与者の視点から分析するために二者間あるいはグループ談話のデータを使用する必要があるとも述べられている．二つ目は，傷つくという出来事に関する社会化の過程の分析である．具体的には，子どもや大人がいかに他人を傷つけるようになるのか，また，社会的苦痛(social pain)に対して反応するようになるのかを体系的に調査する必要があるとされている．三つ目は，傷つきを生じさせる上でテクノロジーが果たす役割の分析である．ネット上でのいじめであれ一回きりの侮辱であれ，人がいかに社会的苦痛を解釈するか，またそれに反応するかはメディアに影響を受けると考えられるからである．

ここまでをまとめると，これまでの研究では，①聞き手が傷ついた発話のタイプとトピック，②タイプおよびトピックと傷ついた度合いとの関係，③聞き手が感じた話し手の意図，関係の親密さ，関係の種類という変数と，聞き手がどの程度対人的距離をとったかとの関係，④傷ついた際の反応，⑤聞き手が思う傷ついた原因といったテーマが扱われてきているといえる．また，指摘されている不足点として，誰かが傷ついている実際のやりとりの分析，一回限りの出来事とくり返し起こる出来事の区別，傷つきに関する社会化の分析，テクノロジーの役割の分析がある．

3. モラル・ハラスメント

前章では心理学における先行研究を概観したが，ここで，イルゴイエンヌ(1999)をみてみよう．これは，臨床医である著者が，家庭と職場で起こるモラル・ハラスメントの実例を挙げながら，その進行の段階や加害者の戦略，加害者や被害者の行動心理を分析したものである．イルゴイエンヌ(1999)によると，モラル・ハラスメントにおいてはことばによる攻撃が主流である．このことから，モラル・ハラスメントにおいてもことばによる傷つきが起きていると考えられる．そこで本章では，イルゴイエンヌ(1999)を参考にモラル・ハラスメントという観点からことばによる傷つきの特徴を考察する．

その前に，モラル・ハラスメントそのものについて，簡単に説明しておく．モラル・ハラスメントとは，精神的な暴力のことであり，それを通じて「ある人間が別の人間を深く傷つけ，心理的に破壊してしまう」(イルゴイエンヌ，1999, p.17)ようなもののことである．モラル・ハラスメントは，その加害者と被害者の関係の変化を基軸に，支配の段階と暴力の段階という，二つの段階にわけられる．支配の段階では，加害者が被害者を惹きつけ，つまり，加害者から離れられないようにし，精神的に不安定にさせ，徐々に自信を失わせていき，被害者の考えや行動をコントロールしていく．この段階では，ちょっとした嫌味や皮肉，ほのめかしや，相手を拒否するような口調が用いられる．被害者が加害者の支配に気づいて反抗するようになると，暴力の段階が始まる．この段階では，侮辱や嘲弄，中傷や悪口，罵倒などが用いられる．

このように，モラル・ハラスメントでは，いずれの段階においてもことばが主な暴力の手段となっている[2]．このようなことばがもつ暴力性には，次の二つの特徴がある．

一つ目は，ひとつひとつのことばは取るに足らないものであり，その暴力性が加害者と被害者にしかわからないというコンテクスト依存性である．このことは，イルゴイエンヌの，「加害者の攻撃は巧妙で，ひとつひとつのことをとってみ

2 支配の段階と暴力の段階の間では，攻撃の仕方は重複している．支配の段階と暴力の段階の違いは，前者においては被害者を支配することが目的となっているのに対して，後者においては被害者の精神を攻撃することが目的となっているという点にある．

れば＜暴力＞だとは言うことができない」(同上，p.35)，「加害者の口から被害者の精神を動揺させるようなことがほのめかされても，それ自体は取るに足らないことで，また背景の事情を知らないため，周りの人間にはそれがどれほど被害者を傷つけているかわからない」(同上，p.165)，「被害者を攻撃するのに，加害者はよく悪意のほのめかしを使うが，これは本人たちにしか分からないものが多い」(同上，p.202)といった記述にあらわれている．

例として，ある夫婦間でおきたモラル・ハラスメントでなされた，以下のやりとりをみてみよう(同上, p.52; 53)．この事例では，夫のポールがモラル・ハラスメントの加害者，妻のアンナが被害者である．

(1) 夫婦で参加したパーティで，ポールが友達をつかまえて「知ってるかい？アンナは古くさい音楽ばっかり聞いてるんだぜ」，「アンナはこんなことも知らないんだぜ．そんなの常識だっていうのに……」などと言う．
(2) 友達と一緒に夫婦で週末旅行に出かけた時，みんなの前でポールが「すごい荷物だろ？アンナはぼくのことを引っ越し屋だと思ってるんだ．浴槽を持ってこなかったのが不思議なくらいだ」と言った．アンナが「いいじゃないの．私のスーツケースは私が持って歩くんだから……」と反論すると，ポールは「そうだよ．でも，きみが疲れたりしたら，ぼくはおつきの者のようにそいつを持って歩かなくちゃならないんだぜ」と言った．

このようなポールのことばに対して，アンナは，ポールが自分を攻撃していると感じた一方で，ポールのことばは冗談としても受け取ることができるもので，周りにいる人たちもそれを悪意の言葉だと思っていないようだ，とも感じている．また，(1)や(2)のようなアンナを嘲弄するやりとりは，特に人前でアンナが返事をできないような状況を選んで行われ，あとでアンナがそのことを話題にしようとすると，そんな小さなことで騒ぎ立てるなんてきみは恨みがましいと非難されると証言されている．

(1)や(2)では，ポールのことばはアンナにしか暴力性をもっておらず，周りにいる人間にはそれが伝わっていない．冗談としても受け取ることができるポールの言葉にアンナだけが暴力性を感じたのは，(1)や(2)までになされてきた，例えばあとで非難されるといったやりとりや，それによって形成されてきたポールとアンナの間の支配関係があるからであると考えられる．すなわち，アンナとポール以外の人間は知らない，アンナとポールの関係というコンテクストに依存して，ポールの言葉がアンナにとって暴力性のあるものになったのである．

ここで，二つ目の特徴があらわれる．それは，ひとつひとつのことばは取るに足らないものでありながら，それらが繰り返されることで，ひとつひとつのことばが暴力性をもつものになる，また，それらが全体としてまとまりを持ったひとつの暴力になるという累積性である[3]．イルゴイエンヌによれば，「ひとつひとつの言葉をとってみれば，それほど暴力的であるとは言えない．だが，そういった言葉が繰り返し言われることで，一つの暴力を形づくっていく」(同上, p.201)．アンナとポールの例でいえば，(1)や(2)だけをみれば，個々のことばは単なる冗談ともとれるもので，その暴力性は明らかではない．しかしながら，(1)や(2)のようなやりとりが繰り返されてきたことで，(1)や(2)におけるポールのことばもアンナにとっては暴力性のあるものになっている．また，そのようなやりとりが繰り返されることによって，アンナは，最終的にポールと離婚し，精神科を訪れるようになるほどに，精神が破壊されるという暴力を被っている．

ここまで，モラル・ハラスメントにおけることばの攻撃がもつ暴力性には，加害者と被害者にしかわからないコンテクスト依存性，それまでに繰り返されてきたやりとりをへて生まれるという累積性の二つの特徴があるということをみてきた．このことから示唆されることはなにか，前章でみた先行研究と照らし合わせながら次章で考察する．

4. 問いの導出

前章の内容を踏まえると，2 章でみた先行研究に対して，次の二つの点が指摘できる．

一つ目は，ことばによる傷つきは必ずしも一回限りのやりとりで完了するわけではないという点である．既述の通り，イルゴイエンヌ(1999)からは，モラル・ハラスメントにおけることばの攻撃がもつ暴力性には，コンテクスト依存性，累積性という二つの特徴があることが明らかになった．これを踏まえて 2 章でみた先行研究を振り返ると，先行研究では，ある一回のことば，つまり，一つの発話による傷つきしか扱われていないことがわかる．これは，Vangelisti(1994)において聞き手が傷ついた発話の例が一文単位で示されていることや，質問紙調査で回答を求められている出来事が一つだけであることにあらわれている．

しかしながら，Vangelisti(2016)が一回限りの出来事とくり返し起こる出来事を区別する必要があると指摘している通り，

[3] モラル・ハラスメントにおける攻撃には，進行するにつれて徐々に暴力性が上がるという特徴もあるが，ここでいう累積性はそれとは別である．

ことばによる傷つきは必ずしも一つの発話による一回限りの出来事であるとは限らない．さらに，３章でみた累積性という特徴を踏まえると，モラル・ハラスメントにかぎらず，複数の出来事が連なって一つの傷つきを生むという可能性も考えられる．

二点目は，分析の射程に関する問題である．先行研究で扱われていたテーマは，聞き手が傷ついた発話のタイプやトピック，傷ついた度合い，聞き手と話し手の人間関係，傷ついた原因，傷ついた際の反応といった，傷ついた時点における事柄や，傷ついた後どの程度話し手と対人的距離をとったかといった傷ついた後の事柄であった．しかしながら，イルゴイエンヌ(1999)からは，聞き手を傷つけたことばの暴力性は，それまでに参与者間で起きたやりとりやそれによって形成された参与者間の関係といった，ことばによる傷つきが起こるまでの要素に起因するものであることがわかった．すなわち，２章でみた先行研究では，Vangelisti(2016)が社会化の問題について言及しているものの，ことばによる傷つきが起こるまでのやりとりを見落としていることになる．

以上の二点を踏まえると，ことばによる傷つきの研究について，聞き手が傷ついた発話がなされた単一のやりとりだけではなく，また，聞き手が傷ついたやりとりを単一のものに限定することなく，それまでに起きたやりとりを考慮する必要があるといえる．

では，それまでに起きたやりとりをみることで明らかにできることはなにか．それは，聞き手を傷つけたことばがいかにその暴力性をもつようになるのか，聞き手を傷つけるものになるのかという問題である．先行研究で考慮された要素に加えて，ことばによる傷つきが起こるまでになされたやりとりを分析の射程に入れることによって，いかなるコンテクストをもって，あることばが聞き手を傷つけるものになったのかを追究できるようになる．これは，複数のやりとりの関係や，使用された言語的あるいは非言語的記号とそれを取り巻くコンテクストとの関係を分析することが求められるという点で，言語コミュニケーション論において取り組まれうる問題であろう．

参考文献

Feeney, J. A. (2005). Hurt feelings in couple relationships: Exploring the role of attachment and perceptions of personal injury. *Personal Relationships*, 12, 253-271.

イルゴイエンヌ，M.（高野優訳）(1999). 『モラル・ハラスメント―人を傷つけずにはいられない』東京：紀伊国屋書店. (Hirigoyen, M. (1998). Le harcelement moral: La violence perverse au quotidien. Paris: La Découverte)

McLaren, R. M., & Solomon, D. H. (2008). Appraisals and distancing responses to hurtful messages. *Communication Research*, 35, 339-357.

Vangelisti, L. A. (1994). Messages that hurt. In W. R. Cupach & B. H. Spitzberg (Eds.), *The dark side of interpersonal communication* (1st ed.) (pp. 53-82). New Jersey; London: Lawrence Erlbaum.

Vangelisti, L. A. (2001). Making sense of hurtful interactions in close relationships: When hurt feelings create distance. In V. L. Manusov & J. H. Harvey (Eds.), *Attribution, Communication Behavior, and Close Relationships* (pp. 38-58). New York: Cambridge University Press.

Vangelisti, L. A. (2016). Hurtful communication. In C. R. Berger & M. E. Roloff (Eds.), International encyclopedia of interpersonal communication. New York: Wiley Blackwell.

Vangelisti, L. A., & Crumley, P. L. (1998). Reactions to messages that hurt: The influence of relational contexts. *Communications Monographs*, 65(3), 173-196.

Vangelisti, L. A., Maguire, C. K., Alexander, L. A., & Clark, G. (2007). Hurtful family environments: Links with individual, relationship, and perceptual variables. *Communication Monographs*, 74, 357-385.

Vangelisti, L. A., & Young, S. L. (2000). When words hurt: The effects of perceived intentionality on interpersonal relationships. *Journal of Social and Personal Relationships*, 17, 393-424.

Vangelisti, L. A., Young, S. L., Carpenter, K., & Alexander, A. L. (2005). Why does it hurt?: The perceived causes of hurt feelings. *Communication Research*, 32, 443-477.

現代日本語のヴォイスの非対称性について

ー「-aru」と韓国語「-jida（지다）」の対照を例にー

金谷由美子(同志社大学)

1. はじめに

本発表は,統語的にも語彙的にも平行する韓国語との対照を通じて,日本語を単独で見ているときには気がつきにくい現代日本語のヴォイスの非対称性について論じるものである.野田（1990）は日本語のラレルによる受動化とサセルによる使役化が「対称的（symmetrical)」であるとしたが,日本語は使役化と他動化が未分化である反面,自動化と受動化は分かれており,双方向に未分化な韓国語と比較すると，対称的とは言えないのではないかというのが本発表の主旨である.その根拠として,まず,第2節では,日本語では有対自動詞(早津 1987)[1]に残る「自発」「可能」「受動」の意味が,韓国語では語彙だけでなく接辞「-jida」により生産的に表出されていることを見る.有対動詞の自他の分化は双方向であるため対称的に見える日本語も,生産的な形式においては「自発」接辞を失い,「受動／能動」の対立へと移行しつつあり（柴谷2000),「自発／能動」が対立する韓国語（鄭2004）と比べると,「自発」領域の欠落が明確になる．第3節では,漢語接辞のヴォイス体系の変化において,日本語は自動化接辞が欠けていたため双方向に分化できず（永澤2007),日韓で大きく漢語ヴォイスにズレが生じることになったことを挙げる（金谷2018）.第4節では,日本語では「使役余剰」（定延2000）のみが観察されるが,韓国語では「使役余剰」以上に「二重被動」が目立ち,双方向に「余剰」が存在することを指摘し,まとめとする．尚，本発表では,「自発」を「ある動作や事象の生起が,有情の動作主や経験者にとって非意図的または完全にはコントロールが効かないこと,あるいは,ある変化が，変化主体にとって,何らかの外部の影響が存在する場合でも,外部から一方的に力が加えられて生起するのではないこと」を表すヴォイスであると暫定的に定義する.

2. 現代標準日本語には,生産的な「自発」接辞がないが,韓国語には jida[2]（지다）がある.

韓国語も膠着言語であり,動詞語彙のヴォイスは語幹に接辞（-i,-hi,-ri,-ki,-u,-gu,-chu,-ji 等）を接続させ自他の分化が形成され,漢語動詞のヴォイス接辞（hada,doeda,sikida 等）や分析的なヴォイス形態も接辞（補助用言)によって形成される点で日本語と類似の体系を持つ．有対動詞は，個別には異なりがあっても双方向に自他の分化が進み，全体として日本語と平行的であると考える．意味的にも,韓国語の有対自動詞や「被動」系の接辞は,「自発」「可能」「受身」にまたがる点で日本語の有対自動詞や古典語ラル等と共通する．ところが，生産的な「自発」接辞に関しては日韓でかなり事情が異なる．Ahn&Foong(2017)の通時的研究によれば，韓国語の「自発」接辞「-jida」は，15世紀の「tida(落ちる)」が語源とされ,動詞に接続し動詞連続体として変化結果を表すようになり文法化が進んだ（15C）．次第に完了相以外にも使用されるようになると，変化の始動部分や過程を表すようになり（17C）,その結果，受身文でも使用されるようになった（18C）.そして,20世紀では，否定文を中心に可能を表す形式になるとともに,受身文の接辞としても多用[3]され現在に至り，ますます生産性を高めている（但し，受身の解釈はその事象が人為的な外部からの影響によってのみ生起するという条件を満たすときだけに成立し，基本的には「自発」接辞である)．一方，日本語では「自発」接辞としてのラレルは「思い出される」「考えられる」等の限られた思考動詞に接続する以外の使用は廃れ,現代語で「自発」を表出しようとすると,一部の可能形や「〜てしまう」等の形式,副詞（うっかり,いつのまにか,つい等）を用いて迂言的に表現することになる（渋谷 2006）.つまり,無対他動詞や無対自動詞に「自発」的意味を付加する術が限られていることになる.「門[扉]이 NOM 안 NEG 열어져(열［開ける]語幹+linker+ji[jida]語幹+linker)」は，日本語でも有対自動詞語彙を使用して「扉が開かない」と言えるが,自他交替領域ではない無対他動詞の場合,「(靴のサイズが小さくて）안 NEG 신어져(신［履く]語幹+linker+ji[jida]語幹+linker)」を通常の可能形「履けない」で訳したのでは,「-jida」が表す自発的可能否定の意味と

[1] もともとは有対だった自動詞でも「座る」等,意味的変化から,所謂非能格自動詞になったものは,早津（1987）同様,有対自動詞には含めない.

[2] ハングル文字のアルファベットについて,本発表では韓国文化観光部2000年式を採用する.紙面の都合上,すべてをアルファベット表記にはしない.

[3] 20世紀に入り,欧文翻訳,そして直接的には日本語のニヨッテ受身文の影響により韓国語でも所謂受動文が増加したことがしばしば指摘されている.

は微妙に異なる[4]．表１は，日韓の「自発」系の意味領域を担う形式の一部[5]を対照させたものである[6]．「-aru」[7]を「-jida」の比較対象として取り上げたのは，「つかまる」のように，多義的で動作主を背景に残す用例[8]が見つかることもさることながら「-jida」以外の韓国語の「被動（自動化）」接辞が「使動（他動化）」接辞と共用[9]であるのに対して「-jida」は自動化方向にしか語彙を導かない点で「-aru」に似ているからである．対応が無い部分を網掛で示した．

表１　日本語ラレル・日本語自動詞（－aru 系）・韓国語の自動詞（-i 系）・生産的な接辞 jida の意味役割対照

	ラレル	日本語 有対自動詞 －aru	韓国語有対自動詞　-i 系 (-i,-hi,-ri,-ki)	～지다 jida
語彙としての使用について［説明］	慣用的に語彙化したものはある 例：振られる，つられる，駆られる	自動詞の語形成の一部を担う．古くから存在し，明治期まで生産性があった．	他動化と自動化の双方向に使用される接辞である点で日本語の動詞の自他分化の語形成における「-e」と類似．	自動詞の語形成の一部を担う． 例：깨지다[kkaejida:　kkae 割る語幹+jida］→「割れる」
①自発(狭義)	（～が～と）感じられる．			느껴지다[Neukky eo jida:　neukki 感じる 語幹+linker +jida］→「感じられる」
②受身関係	放火犯がつかまえられた／真実が検察によって明らかにされた．	放火犯がつかまった	放火犯이 NOM 잡혔다[jap hy eotda:jap つかむ 語幹+hi 被動接辞 +linker 過去]→` 「放火犯がつかまった」	真実이 NOM 検察에 依해서[に依って]밝혀졌다[balkhyeo jyeotda:　balkhi 明らかにする語幹+linker +jida 過去]→「真実が検察によって明らかになった／された」
③尊敬	先生が黒板に見本を書かれた．			★韓国語では，尊敬の形式が別に存在している．
④動作主側の能力や状況可能	（私の PC では） この添付ファイル｛が／を｝あけられない．			★別の可能形式が対応[10] 첨부파일[添付 file]을 ACC ｛열 수 없다／못 열어｝ (添付ファイルがあけられない)
⑤自発ベースの事態日実現[可能の否定]		(この教室は)Wi-Fi がつながらない	Wi-Fi 가 NOM 안 NEG 잡혀[jap hy eo:jap つかむ語幹+hi 被動接辞+linker 現在]→「Wi-Fi がつながらない」	문[扉]이 NOM 안 NEG 열어져[yeor eo jyeo:yeol 開ける 語幹+ji[jida]語幹 +linker 現在]→「扉が開かない」
⑥自発ベースの事態実現[可能の場合]		(この教室は)Wi-Fi がよくつながる	Wi-Fi 가 NOM 잘[よく] ADV 잡혀[jap hy eo:jap つかむ語幹 + hi 被動接辞+linker 現在] →「Wi-Fi がよくつながる」	詩가 NOM 술술 ADV[すらすら] 쓰여진다［sseuyeo　jinda:　sseu 書く語幹+i 被動接辞+jida 現在］ →「詩がすらすら書ける」
⑦状態変化(形容詞類に接続)	形容詞は通常「～｛く／に｝なる」構文を用いる	(お茶を飲んで) 体があたたまった．	×形容詞＋i 系統→他動詞となる．Ahn&Foong(2017)例：넓히다[neolphida:neolp 広い 語幹 ＋hi 使動接辞]→「広げる」	몸[体]이 NOM 다따뜻해졌다 [ttatteuthae jyeotda: ttatteutha 暖かい 語幹　+linker +jida 過去]→「体があたたまった」

[4] 有対自動詞でも接辞「-jida」でも可能の意味が出ることについて，Ahn&Foong(2017)では，可能の意味が後発で主観化によるものという．可能用法が中相であるとの見方から副詞（잘[jal:よく］等）や副詞節の存在を強調しているが，渋谷(2006)等で指摘されている日本語の自発系可能表現では動作主（または話し手）の事態実現に対する「期待」の有無が可能の意味表出と関係していることが韓国語にも当てはまると考えられる．

[5] 尚，日韓の有対自動詞が表１のような意味を担うのは，ここで扱うタイプ（日本語－aru 系や韓国語　-i 系）に限らない．

[6] 「-jida」と「自発」接辞を有する日本語方言との比較は既にある．表１は北海道方言ラサルと「-jida」を対照させた円山（2016）を参考にした．

[7] 「-aru」による自動詞形成の詳細に関しては，小池(2019)を参照した．

[8] 影山（1996）では，表１の「つかまる」のように，動作主を要求する他動詞の自動詞化（例：助ける→助かる）は，英語のようなゼロ形態による自他交替が起きる言語では通常見られないが，日本語では「-aru」による自動詞が形成されることに注目し，反使役に対して脱使役と名付けている．

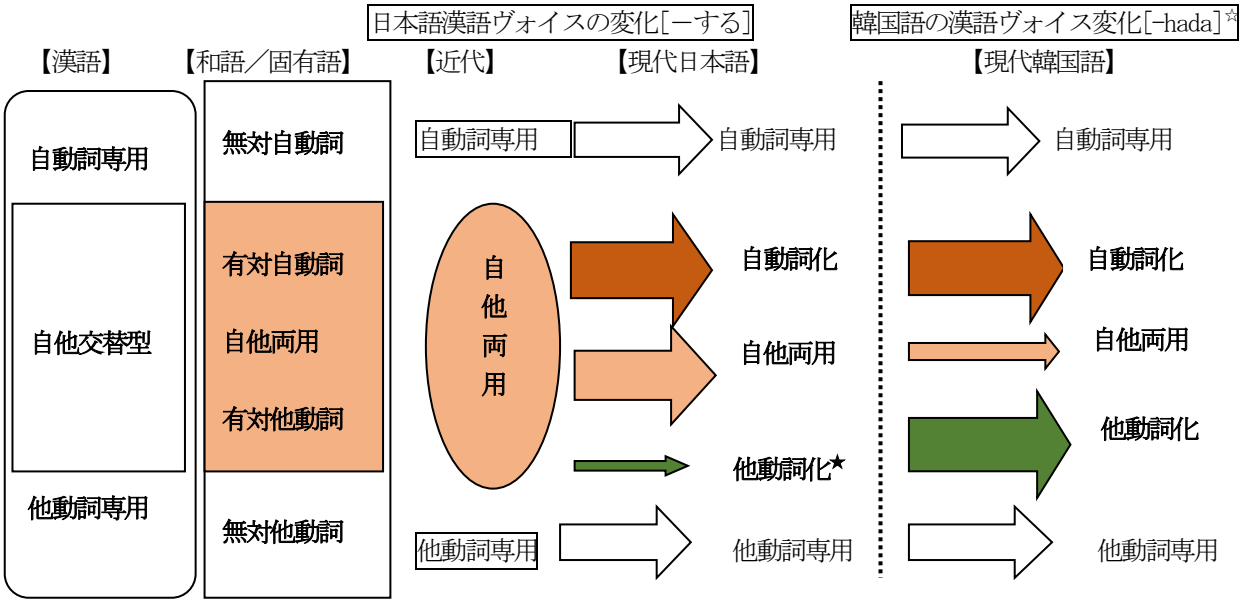
[9] Ahn&Foong(2017)の韓国語歴史コーパス(UNICONC)を用いた通時的研究によれば，これらの「被動」「使動」共有の接辞（-i,-hi,-ri,-ki）は，CAUSATIVE > (CAUSATIVE REFLEXIVE) > SPONTANEOUS MIDDLE > PASSIVE > FACILITATIVE という経過を経て，重層的な意味を有するようになり，SPONTANEOUS MIDDLE 以降の文法化に関しては意味的に隣接する「-jida」と影響関係を持ちながら現在の用法に至ったと考えられる．

[10] 韓国語では動作主の会得した能力を表す形式「을 줄 {알다/모르다} eur jur {alda/moreuda}」，能力・状況・心情可能の否定「못 mot」，潜在的可能と蓋然性を表す形式「을 수 {있다/없다} eur su {itda/eoptda}」が存在し，自発系の可能表現とは棲み分けが見られる(高 2015)

3. 日本語の漢語動詞接辞に「-なる」はないが, 韓国語には「-doeda（되다）」がある.

第３節では, 現代日本語のヴォイスが非対称的であることを如実に見せてくれる現象として, 漢語動詞のヴォイス接辞における日韓のズレを紹介する. 韓国語母語話者の「*戦後日本経済は発展された」のような誤用は, 長年日韓対照研究で論じられてきた（生越 1982, 田窪 1987 等）が, 金谷（2018）では, 永澤(2007)の通時的研究にヒントを得て, 現代日本語の漢語動詞に自動化接辞がなかったことが日韓のズレの原因であることを指摘した. 永澤(2007)は, 近代には自他両用の漢語動詞が多かったことに着目し「-する」接続時の漢語動詞の自他の変遷を調査した. その結果, ①近代で自動詞専用(移住する・行動する・死亡する等)は現代でも自動詞専用のまま, ②近代で他動詞専用(印刷する・準備する・排除する等)は現代でも他動詞専用のまま, ③近代で自他両用だったもの（自他交替型の語幹）に関しては, 自動詞専用化したもの（破裂する・発展する・減少する等）と自他両用のまま留まったもの（移転する・実現する・閉鎖する等）に分かれた. 永澤(2007)によれば, ③に見られる現象は, 漢語動詞が日本語への定着度を増すなかで , 和語に倣い自他を分化させる方向へ力が働いたため起きた現象であり, この「自動詞専用化の流れ」を可能にしたのが他動化接辞として機能する「-させる」の存在である. 「-する」で自動詞専用化しても, 「－させる」を用いて同じ語幹を他動詞としても使用できるため不都合はない（例 : vi. 発展する／vt. 発展させる）. しかし, ある語幹が「-する」接続で他動詞専用化してしまうと, 同一語幹を自動詞として使用するための接辞がなくなるという不都合が生じる. 「-される」はあくまで人為的な外部の力を背景にする受動化接辞であるからである（例 : 停止される≒止められる≠止まる→「停止する」は自他両用にとどまっている）.

一方, 近代化の時期に日本語との接触により多くの共通の漢語動詞を使用するようになった韓国語では, 同時期に自他の分化が進行したとみられるが, 韓国語の場合, ③にあたる自他交替型の語幹において, 漢語用言のデフォルト接辞「-hada（하다）」で自動詞専用化が進んだもの（変化・発展・減少）と, 他動詞専用化が進んだもの（実現・拡大・移転）の両方が観察された. 韓国語では, 図1に見られるように, 自他交替型の語幹のうち, 自動詞化するものと他動詞化するものが双方向に分化したのである. それを可能にしたのが, 「-させる」と似た「-sikida（시키다）」と, 日本語にはない自動化接辞「-doeda（되다）」であると考えられる. 「-doeda（되다）」は本動詞では「なる」の意味に近く, 漢語接辞として自動化接辞の役割を担った. 日本語でも「-なる」が自動化接辞として採用されていれば, 漢語動詞の自他の分化が双方向に対称的になった可能性がある. 興味深いことに, 山形市方言では, 漢語語幹に直接「-なる」を接続させるという現象がみられ, 「-なる」が自動化接辞として機能していることを須賀（2015）が報告している. 須賀（2015）が挙げている「漢語+なる」の36 例は, そのほとんどが韓国語の「-doeda」に翻訳可能である. 自他交替型のうち, 日韓で自動詞化が進む語幹「減少」も韓国語では他動詞化が進む「実現」も「-doeda／なる」の接続で自動詞となり, もともと他動詞用法しかない「設置」「採用」は, 「-doeda／なる」が接続すると受身として解釈される. このような現象が山形市方言で見られるのは, 生産的な「自発」接辞を持ち（渋谷 2006）, ヴォイス体系の中に「自発」領域を維持しているからではないかと推測される.



★自他両用から他動詞化意味の特殊化したもののみ（例 : 変更, 隔離, 短縮）
☆韓国語の交替型の漢語動詞は, 現在「－hada」ではなく, 「-doeda」で自動詞, 「-sikida」で他動詞が定着しつつある.
図１　永澤（2007）を発表者が図式化したもの(左)に韓国語漢語動詞ヴォイスの現在の状況（右）を対照させたもの

4. まとめ：「使役余剰」は韓国語にもあるが，韓国語の「二重被動（二重自発）」は日本語にはない.

定延（2000）では「はっきりしろ／させろ」のような「する」でも「させる」でも項体制が変わらない文について論じ，このような現象を「使役余剰」と名付けた.第3節でも見たように，「させる」は「人が人に何かをさせる」という“典型的な”使役文を作る接辞というよりも，他動化接辞としての役割が寧ろ中心的である（森2012）.使役主が動作主とは別に存在するという条件が整ったときにだけ使役と解釈されるのである.「使役余剰」は韓国語にも見られる．図1の自他交替型語幹の漢語接辞は「-hada」よりも「-sikida」で他動化するのを自然だと感じる母語話者が増えており，辞書の記載とのズレが目立つ.ところが，韓国国立国語院は市民からの質問に対して，「-hada」で十分であるのに使動接辞「-sikida」を使用するべきではないと回答しており，このような「-sikida」の使用は余剰だと考えているようである（例：「癌을 ACC ×誘発 sikida→ ○誘発 hada」）.日本語と異なるのは，韓国語には「使役余剰」だけでなく，「二重被動」と呼ばれる現象があることである（例：right to be forgotten 訳語「잊혀질 권리[権利]：잊[忘れる]語幹+hi（被動接辞）＋ 질 jida ADN」）.韓国語学では，有対自動詞語彙や「-doeda」が存在する用言にさらに「-jida」を接続させることを「二重被動」と呼び，韓国国立国語院はこれについても，「使役余剰」以上に「好ましくない」という立場[11]を発信しているが，そもそも「-jida」の中心的意味は「自発」であり，前項動詞（または語幹）の意味によって自発的事態実現，状態変化，可能，受身まで多義であることから，実質的には「二重被動」ではないものがほとんどである.翻って，「受動／能動」の対立が目立つ標準日本語には，「縮む／縮まる」のような語彙的な「二重被動」はあっても，生産的な「二重被動」は存在しない[12].韓国語は日本語が失いつつある「自発」領域をヴォイス体系にしっかりと持つ「自発／能動」対立型言語であり，おおいにこれらの自発形式を多用する言語内的な理由を持つと考えられる.日本語／韓国語の語学教育関係でよく耳にする「韓国語は日本語より能動的であり，日本語は韓国語よりナル的言語である」というような「常識」も見直されるべきだろう.

以上，「受動」と「自発」，「他動」と「使役」がそれぞれ未分化であり，双方向に対称的なヴォイス体系を持つ韓国語に比べると，「自発」がもはや生産的でなくなり，「受動」や「可能」が分化した日本語のヴォイス体系は非対称的に見えることを論じた.

「参考文献」

Ahn, Mikyung and Foong Ha Yap (2017) From middle to passive A diachronic analysis of Korean *-eci* constructions. *Diachronica* 34:4, 437-469.

鄭聖汝（2004）「韓国語の自動詞とヴォイス―自発と受身の連続性―」影山太郎・岸本秀樹（編）『日本語の分析と言語類型 : 柴谷方良教授還暦記念論文集』319-335.

早津恵美子(1987)「対応する他動詞のある自動詞の意味的・統語的特徴」『言語学研究』6, 79-109.

影山太郎(1996)『動詞意味論ー言語と認知の接点』くろしお出版

金谷由美子(2018)「漢語サ変動詞のボイスに関する一考察ー自他交替型と無交替型に分ける試みー」日本語／日本語教育研究会（編）『日本語／日本語教育研究』9, ココ出版, 135－150.

韓国国立国語院「Online GANADA 온라인가나다」（2019/12/20 最終閲覧）

高恩淑(2015)『日本語と韓国語における可能表現』ココ出版

小池康(2019)「類型性から見た有対自他動詞の研究ー終止形活用語尾[-aru]自動詞と[-eru]他動詞を中心に」大阪大学言語文化研究科・日本語日本文化専攻(編)『日本語日本文化研究』29.（近刊）

円山拓子(2016)『韓国語 cita と北海道方言ラサルと日本語ラレルの研究』ひつじ書房

森篤嗣（2012）「使役における体系と現実の言語使用－日本語教育文法の視点から」『日本語文法』12(1), 3－19.

永澤済(2007)「漢語動詞の自他体系の近代から現代への変化」『日本語の研究』第3巻4号, 17-31.

野田尚史（1990）「日本語の受動化と使役化の対称性」筑波大学文藝・言語学系(編)『文芸言語研究 言語篇』19, 31-51.

生越直樹（1982）「日本語漢語動詞における能動と受動」『日本語教育』48：53-65. 日本語教育学会

定延利之(2000)『認知言語論』大修館書店

柴谷方良(2000)「第3章　ヴォイス」仁田義雄・益岡隆志編『文の骨格』岩波書店, 117-186.

渋谷勝己(2006)「第2章　自発・可能」『シリーズ方言学2　方言の文法』岩波書店, 47-92.

須賀一好（2015）「形式動詞としての〈なる〉－山形市での漢語動詞の用例観察から」『金沢大学国語国文』 40, 1-8.

田窪行則（1987）「誤用分析5」『日本語学』6: 8, 133-138, 明治書院

11 「二重被動」は受動文の多い日本語や欧文翻訳調の影響であるとされ,国立国語院が掲げる「国語醇化」からみても不適切であるためかと思われる.

12 「この字,読め（ら）れません」のような所謂「レ足す」ことばは「使役余剰」とは異なり,一般的に非文とみなされる.

日英語による課題達成対話の空間参照枠

ー参与者間での言語・非言語の相互作用ー

谷村緑(京都外国語大学)　吉田悦子(三重大学)　仲本康一郎（山梨大学)

1. はじめに

空間参照枠には，“your right” や「私の右」といった自己中心的参照枠（Egocentric frame of reference）と，曖昧性を排除できる“the door side” や「窓側」といった固定的参照枠（Fixed frame of reference）があることが知られている（細馬，2003）．しかしこれらの表現は方向を示すだけで，これらの情報だけで正確な空間的位置を特定することは難しい．そこで本稿では，レゴブロックを使用した課題達成対話においてブロックを置く位置を決定する際に，右と左といった直示的な空間参照枠が参与者間でどのように利用されるのか，また，その際具体的にどのような手続きを経て位置が決定されるのかについて，日・英語母語話者を対象に調査する．特に，自己中心的参照枠で，基点となる相対的な位置が課題参与者両者で共有され，そのあとに探索項目の同定がなされる，という仮説のもと，日・英語の特徴を示すことを目標とする．

2. 先行研究

モノの位置を捉える参照システムとして，Hart & Moore (1973) は，egocentric（体を基点とする e.g. “my right”）, fixed（landmark など認識可能なものを利用する e.g. “from my house”）, coordinated（東西南北や経度・緯度などの抽象的な概念を利用する e.g. to the east）の３種類の参照枠を提案している．Hart & Moore (1973) のシステムは，子供の概念獲得の研究を出発点としており，具体的な概念から抽象的な概念へと獲得が進むことが示されている．一方，Levinson (1996) は行動的，認知的，脳科学的観点から，relative（自己を中心とする e.g. “ my right”），intrinsic（非対称的な内在的特徴を利用する e.g. “in front of the house”），absolute（太陽，海などを利用した方位を基礎とする e.g. “north of me”）という３種類の参照システムを提示している．Levinson の提案するシステムは地球の表層を中心とした方位によって決定されるという点で前者と異なる．吉村(2002) によると，位置は，地上空間の重力の存在により，空間位置の絶対的な基準として下がまず認識される．そして下が決定されると上が自動的に決定され，その後，前後，左右が決定される．ただし左右の場合は，基準となる視点の変化に伴い左右を表わす対象も変化するという特徴がある．一般に左右の特定の際には，参与者らが言語・非言語を用いて知識共有を行うことが知られており (Özyürek, 2000; Haviland, 2000)，本稿が扱う課題の場合においても参与者は対面で座っているため，左右の方向の特定が，課題を成功させるための重要な要素の一つとなっている．

3. 研究方法

データには，英語母語話者ペア５組と日本語母語話者ペア５組が行ったレゴブロックの課題達成対話を用いた（計 10 時間）．この課題は，指示者 (Giver: G) が複数の色からなるレゴブロックのモデル（３，４段の高さで６個から８個使用）の写真を見ながら指示を出し，作業者 (Follower: F) が同じ型になるようにブロックを積むというものである (Clark & Krych, 2004) ．実験参加者は練習を一度行ったのち，本実験を対面条件・非対面条件各 10 モデル分に取り組んだ．今回は物理的な共有空間における共同作業において，言語・非言語的てがかりがどのように利用されるかを明らかにすることを目的としているため，対面条件場面を使用する．

4. 結果・考察

結果，作業者は，指示者の指示を待たずに自発的に動作を開始し，ブロックの相対的な配置場所を決定していること，また，配置場所を修正する場合にはそこを基点に再配置場所を決定していることが日・英語両言語で確認された．更に，日英語の情報構造がブロックの配置の仕方に影響していることも示された．以下では，①作業者が指示者の説明を待つまでもなく作業を終えているパタン，②作業者が指示者の説明を誤って理解し，修正を行うパタンの２つを例として紹介する．例１の発話断片は，図１に示されている６つのブロックからなる形の説明部分で，指示者が１段目のブロックの配置

を説明している箇所である. 興味深い点は, 具体的なブロックの配置説明前にすでに作業者がブロックを置き終えており, 指示者の説明が作業者にとっては確認のための情報として利用されているという点である.

(1) 発話断片１



図１タスク１の出来上がりイメージ



1 G: eh: ok so this time you: take a big blue one
[F:G の説明の後，左手で青のブロックを取る]





2 →G: a::nd a big red one
[F：G の説明の後，左手で赤のブロックを取り右手に持ち変える]

[F：ブロックを右側に置く]



3 G: hahaha this is so different (hh) a:nd you put the blue one on the: left hand side
[G：自分の左手で左方向を指しながら説明する]
[F：手は机の上にあり，動きはない]

4 F: Yep

5 G: and the red one o:n the right hand side, already done that (hh)
[F：手は机の上になり，動きはない]

発話番号２の時点で，指示者は赤と青のブロックの配置に関する説明を開始していない．しかし，作業者はすでにブロックを配置し終えているという一見不思議なことが生じている．実際，指示者の説明は次の発話番号３で始まっており，自身の左方向を指しながら説明を始めている (e.g. *thinking for speaking*, Alibali, Kita, & Young, 2000). そして発話番号５では，指示者は反対の右方向の説明を行う．したがって，すでにブロックの配置を終えている作業者は，その発話を自身の作業に対する確認のための情報として利用していると考えられる．これは指示者が発話番号５で，“already done that (hh)”と笑いながら，すでにブロックの配置が終わっていることを認める発話を行っていることから明らかである．ではなぜ作業者は情報を受け取ってすらいない時点でブロックの配置をするのだろうか？この作業者の行動は一見不思議に見えるが，説明を待たずに作業者がブロックを置くことで，指示者はその成否を確認することができる．つまり作業者のより積極的な作業へのかかわりが，作業効率を高めていると考えられる．言い換えると，作業者と指示者による相互的で共同的な行為を通して，空間的な位置関係が共有されることを示している．

例２の発話断片は，図２に示されている６つのブロックからなる形の説明部分で，一番上の層に関するものである．例１とは異なり，ブロックを置いた場所が間違っていたために，指示者から説明をうけて，作業者が一度置いたブロックの場所を起点に，正しい位置にブロックを置き直している場面である．



図２　タスク３の出来上がりイメージ

(2) 発話断片２



1 G: A:nd then on the LEFT side,
[G が発話しながら自分の左を指さす]
[F が左手を待機させる]



2 G: you: put a:: yellow one on top of the left side blue one
[G が左手を上下に２回揺らす]
[F が G の発話の後に，黄ブロックを取って手を引き戻す]

3　G: the little yellow one
　[G が左手をくるっと回す]
　[F が左側の青ブロックを黄ブロックで全部カバーするようにはめ込む]
4 →G: but you put it

5　G: so that there's two
　[F が黄ブロックを青ブロックから取り外す]

6　G: facing over the edge.
　[F がブロックを左に一列分ずらして，青ブロックの端一列分だけをカバーするようにはめ直す]



作業者は説明を全部聞き終わる前に，自発的に発話番号３で左側の青ブロックを黄ブロックで全部カ―バーするようにはめ込む．ところが説明はまだ続いており，発話番号４で"but"という談話標識を耳にする．"but"は予測を否定する機能をもつ談話標識であるため，作業者は別の説明が続くことを認識する．そして，発話番号５ "there's two"で置く場所が限定されたことをうけて，作業者は一列分を外にずらしてブロックをはめなおしている．つまり，作業者は最初に入ってきた情報に反応して作業を開始し，その後の説明によって修正を行っている．これは発話された順に情報が線的（liner）に作業者に取り込まれることを示している．

次の例３は，例２と同じタスクを日本語母語話者が行ったときの発話断片である．２段目に青のブロックを置くべきところ，誤って黄色の上に置いたために修正している場面である．

(3)　発話断片３

1　G：赤の正方形を横に　置きます(.)で真ん中に(2)　あ(.) ↑赤の長方形でした(hhh)
2　F：　(hhh)はい
　[F がブロックを取り換える]
3　G：でその真ん中に(.)黄色の正方形
　[F が説明の後，黄色のブロックを赤の上にくっつける]
4 →G：で横に跳びぬけるように左右に(.)青の正方形
　[F が誤って，黄色の正方形の上に青の正方形を２つくっつける]
5 →G：あ(.)えっと赤の長方形にくっつけます
　[F が赤の上にブロックを置きなおす]
6　F：こう，こう？はい
　[F の手は机の上]

作業者は赤の長方形の真ん中に黄色の正方形を置いた後，発話番号４で，その黄色の正方形の上に２つの青のブロックを誤って置いてしまう．これは例２と同様に，指示を最後まで聞くことなく作業者が自発的に作業を開始してしまったことによる．この作業者の解釈の誤りは，発話番号３「でその真ん中に黄色の正方形 」と４「で横に跳びぬけるように左右に青の正方形」が構文的に似通っていることに起因すると考えられる．これらの発話は，接続詞の「で」，場所に関する表現，体言止めという類似した情報構造になっている．そのため，黄色の正方形を基点に発話番号４の説明に従って，誤って上に積み上げてしまったと考えることができる．その後の発話番号５の指示者の「あ」は，誤ったブロックの配置への気づきを示しており，「赤の長方形にくっつけます」と指示の修正を行っている．興味深い点は，この修正ではブロックを置く場所の詳細な説明がなされていないという点である．それにもかかわらず作業者は，「こう，こう？」と，質問の形を取りながら，自身で「はい」と言って自己完結する．細間他（2004）では，作業者の自発的な動作を指示者が追

認するという指摘しており，本稿でも作業者が指示者の説明を待つことなく，作業を自発的に開始することが確認された．

最後に，日・英語発話のブロックの配置における誤りの違いが日英語の構文に起因する可能性を示唆したい．以下の例は上記の例（2），（3）の一部で，ブロックの配置に誤りが生じた箇所である．

(4) you put a yellow one on top of the left side blue one, but you put it so that there's two facing over the edge.
(5) で横に跳びぬけるように左右に 青の正方形．あ えっと赤の長方形にくっつけます．

(4)のように英語の場合，左右の大まかな場所といった大局的な説明がなされたあと，結果の状態を示す配置の詳細な部分の伝達がなされる．つまり， on top of でどの層かという位置が伝達されると，詳細を待たずに，作業者はブロックを一番もっともらしい場所に配置し，結果として間違いを生じさせている．一方，(5)のように，日本語の場合は結果の状態の説明が先にくるため，どのような形でブロックを左右に配置するのかの説明がまず伝達され．次にどこの層に置くのかといった配置場所の指示が続く．そのため，形状は正しいが，配置場所に誤りが生じている．谷村，仲本，吉田 (2018)では，構文上の日英語の違いによる情報構造の違いを指摘しているが，日英語の情報構造上の違いが，日英語の課題参与者の行動の違いに反映されることが本稿で示された．

5. 結論

本稿では，自己中心的参照枠で，基点となる相対的な位置が課題参与者両者で共有され，そのあとに探索項目の同定がなされるという仮説をもとに，日・英語の課題遂行対話におけるブロックの配置を分析した．結果，例２と３にみられたように，日・英語とも，作業者は自発的に探索的に作業を行うこと，修正が必要な場合には誤ったブロックの配置を基点に再配置がなされることが示された．このような日・英語の課題達成対話を詳細に比較分析した研究はまだなく，空間関係と情報構造の関係を明らかにするうえで意義があると考える．今回は，対面条件場面における分析に限ったが，非対面場面における自己中心的参照枠の特定は曖昧性を伴うことから，さらに複雑なやり取りが予想される．今後は，非対面場面における課題参与者による空間位置の特定方法について議論していきたい．

謝辞　本稿の執筆にあたり細間宏通先生から有益なコメントを頂きました．また，データの整理，分析にあたりアレクサンダー　フォード氏に協力頂きました．感謝いたします．本研究は JSPS 科研費 17K02953 の助成を受けたものです．

参考文献

Alibali, M. W., Kita, S., and Young, A. J. (2000). Gesture and the process of speech production: We think, therefore we gesture, *Language and Cognitive Processes* 15(6), 593–613.

Clark, H.H., and Krych, M.A. (2004). Speaking while monitoring addressees for understanding, *Journal of Memory and Language* 50(1), 62-81.

Hart, R. A. & Moore, G. T. (1973). The development of spatial cognition: A review. In P. M. Downs, & D. Stea (Eds.), *Image and Environment: Cognitive Mapping and Spatial Behavior*, pp. 246−288, Chicago: Aldine Publishing.

Haviland, J. B. (2000). Pointing, gesture spaces, and mental maps. In D. McNeill (Ed.), *Language and gesture*, pp.13-46. New York: Cambridge University Press.

細馬宏通 (2003). 対面会話におけるジェスチャーの空間参照枠と左右性　社会言語科学会第 11 回研究大会予稿集 209-212.

細馬宏通，石津香菜，繁松麻衣子，中村智代，矢野雅人 (2004). 身体を示し合う会話− 自分の身体で相手の身体を語ること−　社会言語科学会第 14 回大会発表論文集 67-70.

Levinson, S. (1996). Frames of reference and Molyneux's question crosslinguistic evidence. In P. Bloom & M. Peterson (Eds.), *Language and Space*, pp. 109-169. Cambridge: MA MIT Press.

Özyürek, A. (2000). The influence of addressee location on spatial language and representational gestures of direction. In D. McNeill (Ed.), *Language and Gesture*, pp.64-83. New York: Cambridge University Press.

谷村緑，仲本康一郎，吉田悦子 (2018). 課題達成対話における談話構造の違い―目的を表す「ように」 と 「so that」 を中心に―　社会言語科学会第 41 回研究大会予稿集 186-189.

吉村浩一 (2002). 逆さめがねの左右学　ナカニシヤ出版

会話の進行における「はい」の機能について

― 韻律的特徴との関りから ―

甲斐 朋子（大阪大学）

1. はじめに

人々が日々行う社会的行為の中で多様な使われ方をする日本語の１つに,「はい」ということばがある.「はい」の用法は,質問や依頼などに対する肯定応答だけでなく，あいづちや名前を呼ばれたときの返事,「はい！チーズ！」などのかけ声と数多い.本研究では，このように様々な用法をもつ「はい」の機能のうち，会話の進行に寄与する機能を「はい」の現れる位置によるものと音声面によるものに分け，両者の関係を明示する.

甲斐(2016；2019a)では，電話会話データにおいて，進行中の話題が終了に向かい，別の話題へ移行する箇所に現れる「はい」について分析を行った．具体的には，電話のかけ手である発話者(C)が電話の受け手である発話者(R)の発話に対して発した「そうですか」が発話連鎖の第１発話部となり，受け手(R)の「はい」が第２発話部として続き，続くかけ手(C)の「はい」が第 3 発話部として連鎖の最後に現れるというターン構成に着目した．これらの一続きの発話の連なりは，Schegloff(2007)による「発話連鎖を終了に向かわせるのに特化した発話連鎖 」として機能していた．そして，電話の受け手(R)の発話の不在や，両話者の発話に重複が発生した事例も，この一連の発話連鎖のターン構成が元になっていることを明示した.(これらの３つのターン構成を「はい」の出現パタンとよぶ).この３つの「はい」の出現パタンはいずれも進行中の話題の発話連鎖を終了に向かわせることが可能となっていた.そして，このターン構成の最後の位置に現れる「はい」がこの出現位置によって,「ひとまとまりの話題の区切れ」を示すという働きを担っていることについて論じた．また，甲斐(2019a；2019b)では,「はい」の出現パタンとその後に続く発話について音響分析を行い，会話の進行と「はい」の韻律的特徴について考察を加えた．具体的には，３つの「はい」の出現パタンの第３発話部に位置する「はい」は，出現位置にともなう役割の他に，韻律的な特徴によって会話進行上，次のような役割を担っていることが推察された．a.進行中の話題が終了に向かうことへの承認，b.新たな話題の開始の指向，c.進行中の話題を含む目的行為の継続の指向である．b と c の韻律的特徴については，Couper-Kuhlen(2004)などでもすでに指摘されている．しかし，a の進行中の話題が終了に向かうことへの承認の発話の韻律的特徴については，充分に明らかにされたとは言えない．そこで，本研究では，進行中の話題が終了に向かう一連の発話連鎖の中で，同じターン構成の第３発話部に現れ，承認として機能している「はい」に着目し，進行中の話題が終了に向かう，または継続していると感じられる場合の「はい」の韻律的特徴はどのようなものかについて聴取実験を用いて検証する.

2. 「はい」の出現パタンと韻律的特徴

2.1 同一ターン構成における３つの「はい」の出現パタン

甲斐(2016； 2019a)で分析対象とした電話会話(18 組,合計約 41 分)の中で観察された「はい」(かけ手 81，受け手：366）の特徴として，受け手の「はい」はあいづちや，相手の先行発話（隣接対の第１発話部）への応答（隣接対の第２発話部）としての使用が多いのに対し，かけ手の「はい」では先行発話を持たない「はい」が多く観察された.本研究ではそれらのうち,「はい」の後に新たな話題が続くものに着目した.この「はい」は，いずれも進行中の話題から次の話題へと移行する場所に見られ,「そうですか/そうなんですか」に始まる進行中の発話連鎖を終了に向かわせるのに特化した発話連鎖（図１）の第３発話部に位置するものであった.この「はい」の出現の仕方は，図１のパタンを基本(＝パタン A)とし，そこからの派生的な使用としてパタン B,パタン C が観察されたが,いずれのパタンにおいても会話参加者が協働で話題終了作業を達成することが参加者間で共有されていた.表 1 に 甲斐(2016；2019a)で観察された「そうですか」に始まる３つの「はい」の出現パタンを示す.



図１ 進行中の発話連鎖を終了に向かわせるのに特化した発話連鎖
C＝ 電話のかけ手，R＝ 電話の受け手

3. 聴取実験

3.1 分析課題

2.1 で述べた「はい」の出現パタンに着目し，会話の進行に対する音声面での「はい」の機能を調査する．分析課題は次の 2 点である．表 1 の出現パタン A から C の【第 3 発話部】の「はい」（以後，③C1～C3：「はい」）を原音声の「はい」と異なる韻律的特徴の「はい」と入れ替えたときに，「はい」の種類によって，(1)③C1～C3：「はい」までの時点で，進行中の話題に対する終了感/継続感は変わるか．(2)④C1～C3：「じゃー/あのー」までを聞いた時点で，進行中の話題に対する終了感/継続感は，(1)の場合と比べて変化するかである．

表 1　3 つの「はい」の出現パタン

	「はい」出現パタン A C1：電話のかけ手， R1：受け手	「はい」出現パタン B C2：電話のかけ手， R2：受け手	「はい」出現パタン C C3：電話のかけ手， R3：受け手
【第 1 発話部】 【第 2 発話部】 【第 3 発話部】	進行中の話題 ↓ ① C1：そうですか ② R1：はい ③ C1：はい ④ C1：じゃー ＋ 別の話題	進行中の話題 ↓ ① C2：そうですか ② R2：（　　） ③ C2：はい ④ C2：あのー ＋ 別の話題	進行中の話題 ↓ ① C3：そう[です]か ② R3：　[はい] ③ C3：はい ④ C3：あのー ＋ 別の話題

3.2 分析対象音声

2015 年 2 月に筆者が収録した調査依頼の際の電話会話（全 18 会話）の中で，先述の進行中の話題が終了に向かう一連の発話連鎖が観察された 5 つの会話の中から，原音声「はいａ」，「はいｂ」，「はいｃ」の F0 値をもとに音形（F0 曲線のパタン）と高さレベルを操作し，原音声と合成音声，合計 18 種類の「はい」を作成した．合成音声の作成には Praat[1]を用いた．音形は下がる［˥はい］型と下がらない［˥はい］型の 2 種類を対象とした．図 2 に 18 種類の「はい」の音声特徴を示す．

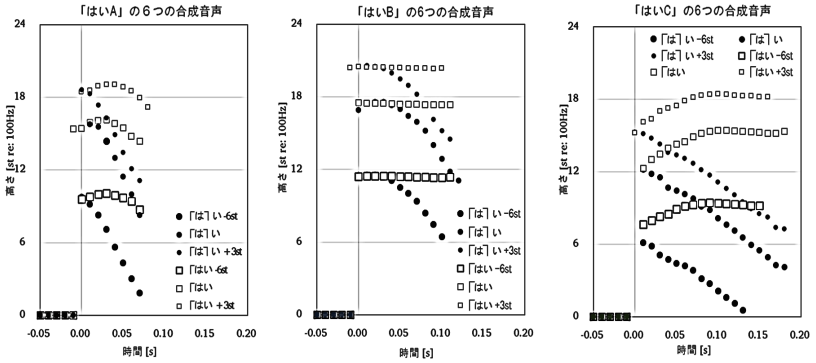


図 2　「はい」の 18 種類の合成音声：
（左）「はいａ」群_6 音，（中央）「はいｂ」群_6 音，（右）「はいｃ」群_6 音

3.3 実験方法

日本語を母語とする近畿圏在住の某大学の大学生（2 年生から 4 年生）30 名に，3 つの「はい」の出現パタンの「はい」の位置に 18 種類の韻律的特徴の異なる「はい」を挿入した電話会話を提示した．具体的には，出現パタン A から C の③C1～C3：「はい」までの会話をそれぞれ 18 種類の「はい」に入れ替えた 3 種類の会話枠と，この 3 種類の会話枠にそれぞれ後続する「あのー/じゃー」を加えた会話枠の合計 6 セットを提示した．聴取者は提示された状況の会話について，進行中の話題が終わったように聞こえるか（終了感），または，終わっていないように聞こえるか（継続感）を二者選択の形式で判断した．各種類の会話音声はＣＤによって提示され，18 種類の「はい」の出現はすべての会話でランダムな順で提示された．1 回の質問につき，一定の間をおいて同じ会話音声を 2 度提示する方法を取った．

3.4 聴取実験の結果と考察

表 1 の出現パタン A から C の③C1～C3 の位置にある「はい」に 18 種類の韻律的特徴をもつ「はい」を挿入した際の 2 つの分析課題の結果を示す．進行中の話題に対する終了/継続の判断率を音形別，高さレベル別にまとめたものを図 3 から図 5 に示す．分析課題(1)：表 1 の③C1～C3：「はい」までの時点で，進行中の話題に対する終了感/継続感は変わるか．全体的な傾向として，3 つの傾向が観察された．1 つは［˥はい］型は終了感が生じやすいが，［˥はい］型は，終了感，継続感の想起に関係しているものは多いとは言えない（図 3）．次に，「はい」の

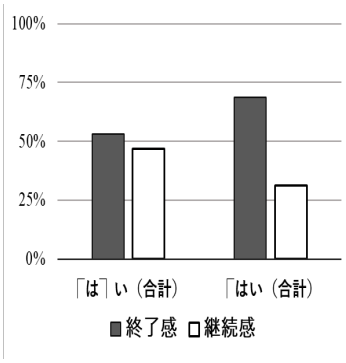


図 3「はい」の音形別：「進行中の話題に対する終了／継続の判断率

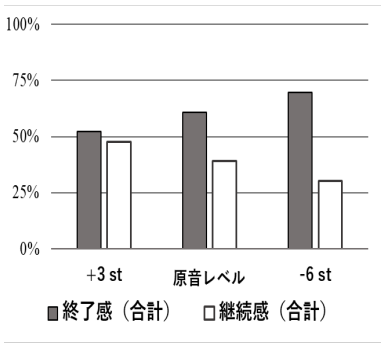


図 4「はい」の高さレベル別：「進行中の話題に対する終了／継続の判断率

[1] Praat：Praat version 5.3.63 を使用．　www.praat.org

高さレベルでは，高くない音，特に低い音は終了感を生じやすいが，高い音は終了/継続の判断に関係していないものが多い(図 4, 図 5). 最後に，継続感を確実に生じさせる韻律的特徴は本研究の実験の範囲では該当がないことを示している(図 5). 分析課題(2):④C1～C3:「じゃー/あのー」までを聞いた時点で，進行中の話題に対する終了感/継続感は，(1)の場合と比べて変化するか. 図 6 から図 8 に会話枠 A から C の当該の「はい」までの会話を聞いたときに進行中の話題が終ったと判断された割合と，会話枠 A′から C′の「じゃー/あのー」までを聞いたときに進行中の話題が終ったと判断された割合を示す. 黒丸は「˥はい」型を示し，白い四角は「˥はい」型を示している. 黒丸，白い四角の大きさは，大きいものから順に，音の高さレベルの高いものを示している. 図の縦軸に会話枠 A′，B′，C′(④C「じゃー/あのー」まで)を聴取したときの判断率を示し，横軸には会話枠 A，B，C(③C「はい」まで)を聴取したときの判断率を示す.

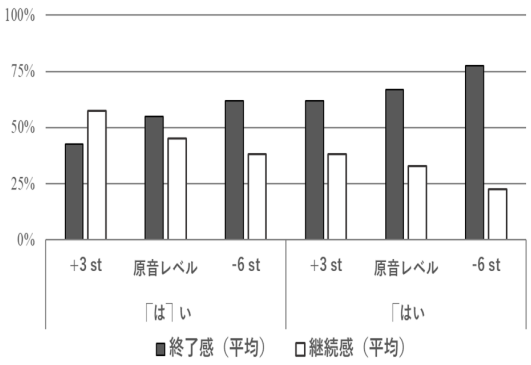


図 5「はい」の音型／高さレベル別：
「進行中の話題に対する終了/継続の判断率

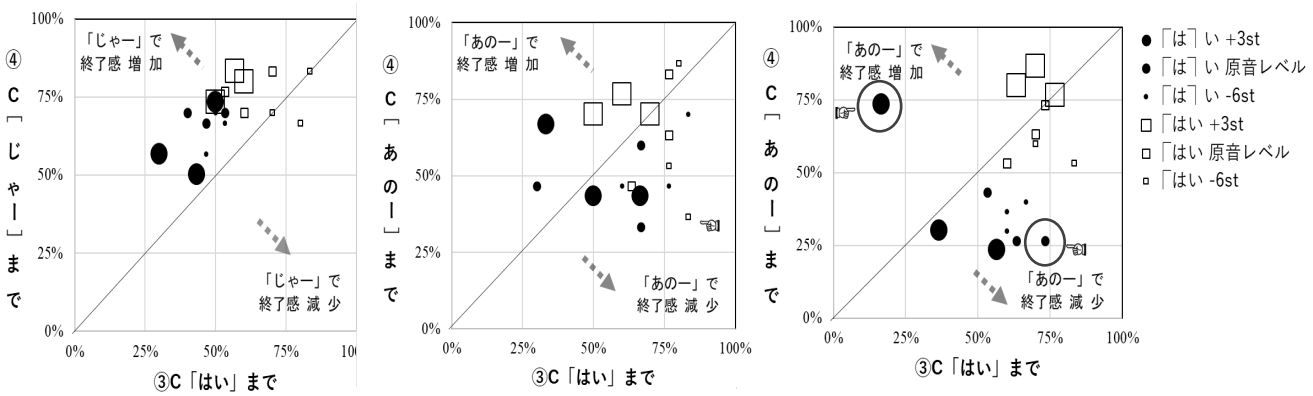


図 6(左) 会話枠 A/A', 図 7(中央) 会話枠 B/B', 図 8(右)会話枠 C/C'：
第 3 発話の③C「はい」までと後続発話④C「じゃー」/「あのー」までの場合の進行中の話題終了との判断率

会話枠 A/A' の聞き取り結果：「はい」の種類による「はい」までの進行中の話題に対する終了感の回答傾向と，「じゃー」まで聞いた時の回答傾向に統計的に有意な差は見られなかった[2]. ただし，図 6 の聞き取り結果の散布図を見ると，「はい」の種類を表す●や□の凡例記号が図表の縦軸と横軸の間の中心線よりも多少左側にずれた状態で布置されている. このことは，「はい」までの会話音声を聞いたときと，「はい」に続く「じゃー」までを聞いたときとでは，「˥はい」型，「˥はい」型ともに，「じゃー」までを聞いたときの方が，進行中の話題が終了したと判断された割合が高くなったものが多いことを示している. そして，それは特に「˥はい」型に顕著に見られる.「はい」までの進行中の話題に対する終了感と，「じゃー」までを聞いた時の終了感の判断率について相関関係は r＝0. 57 で，両者には中程度の相関がある.

会話枠 B/B' の聞き取り結果：「はい」の種類による「はい」までの進行中の話題の終了感の回答傾向と，「あのー」まで聞いた時の回答傾向に統計的に有意な差は見られなかった[3]. ただし，図 7 の●と□の散布の状態が示すように，「あのー」までを聞いたときの方が，終了感が減少している「はい」が多いことが特徴としてあげられる.

会話枠 C/C' の聞き取り結果：「はい」までの進行中の話題の終了感の回答傾向と，「あのー」までを聞いた時の回答傾向に「はい」の種類による差が見られた[4]. どの種類の「はい」を含む会話の判断率がこの有意性に寄与しているかを調べるため，残差分析を行った. 結果，2 つの要因が示された. 1 つは，「はい b」の原音より 3st 高い「˥はい」において，③C:「はい」までを聞いた時の終了感が有意に少なく，③C:「はい」の後の「あのー」までを聞いた時の終了感が有意に多いこと(図 8 の左上側にある指印のついた丸枠内の大きな●). もう 1 つは，「はい a」の原音レベルの「˥はい」において，③C:「はい」までを聞いた時の終了感が有意に多く，「はい」の後の「あのー」までを聞いた時の終了感が有意に少ないこと(図 8 の右下側にある指印のついた丸枠内の中程度の●)である. このように図 8 から，④C:「あのー」の有無によって，進行中の話題の終了感に対して顕著な違いを示す「はい」に加え，「˥はい」型と「˥はい」型が「あのー」の有無によって，異なるふるまいを

2 カイ二乗検定の結果，$\chi^2(17)= 6.182, p =0.992$ となり，両者に有意差は見られなかった. (有意水準 p=0.05)
3 カイ二乗検定の結果，$\chi^2(17)= 20.027, p =0.273$ となり，両者に有意差は見られなかった. (有意水準 p=0.05)
4 カイ二乗検定の結果，$\chi^2(17)= 32.042, p =0.015$ で，両者の間に有意差が見られた. (有意水準 p=0.05)

見せていることがわかる.これは,「↑はい」型は「あのー」の有無に関わらず,進行中の話題への終了感が高いものが多いのに対し,「↑はい」型は「あのー」を聞くことで,進行中の話題への終了感が減少するものが多いことを示している.

以上を踏まえ,全体として言えることは,③C:「はい」までと④C:「じゃー/あのー」までを聞いた時の進行中の話題の終了感の判断率は会話枠によって異なる傾向にあること,それは特に「↑はい」型に著しいと見られる.つまり,「↑はい」型は話題の終了/継続との関係に関して中立的であるということをここでも示していると言える.

このような「はい」自体の韻律的特徴にともなう会話進行への働きかけが認められる一方で,「はい」の出現する環境,ここでは会話枠内の他の発話が進行中の話題に対してどのような役割を担っているかということも進行中の話題の終了感,継続感に寄与していることが窺えた.この点について会話枠によって進行中の話題に対する終了感/継続感に違いが生じる理由を考えてみたい.

まず,会話枠A/A'では,電話のかけ手の③C:「はい」のあと,同じ話者の④C:「じゃー」という発話が続いている.「じゃー」ということばは先行内容を踏まえて次の話題に移る際に使われる.そのため,「はい」までの時点よりも,「じゃー」を聞いた後の方が進行中の話題の終了感が増加したと考えられる.また,この「じゃー」の発話の韻律的特徴がためらいの際に見られる勾配のなだらかな発話ではなく,十分な勢いと高低差(6st)のある下降調で発せられたことも,進行中の話題から次の話題へと移ることへの合図となり,進行中の話題が終了したと判断された一因と推測される.次に会話枠B/B'と会話枠C/C'については,「はい」までの時点と比べ,「あのー」が続いた場合の方が,進行中の話題は「終っていない」という判断が増えている.その理由として,「あの」ということばが何か続きのことばが見つからないときに,つなぎのことばとしても使われることから,進行中の話題に関して引き続き何か話が続くと判断された回答が多くなったと考えられる.一方,会話枠B/B'と会話枠C/C'の違いとして,両会話枠の①C:「そうですか」の前に先行発話「あ」があり,会話枠B/B'の「あ」に比べ,会話枠C/C'の「あ」の長さが約4倍長くなっていた.この「あー」が進行中の話題に対して,話者が十分に納得していないことを伝えているように聞こえることがあげられる.また,③C:「はい」の前の吸気が会話枠B/B'に比べ,会話枠C/C'は2倍近く長いことと,吸気の際の音が顕著であること.このような韻律的特徴が,話者のことば探しの合図として機能していることが考えられる.以上のことから,上述のような会話枠内の発話の(ことばの)意味や,出現のタイミング,発話に伴う韻律的な特徴,発話と発話の間に現れる吸気の仕方の違いによっても,終了感に対する判断率に差が生じたと推察される.

4. まとめ

今回の聴取実験により,「発話連鎖を終了に向かわせるのに特化した発話連鎖」という同じターン構成の位置に現れる「はい」について,出現位置は「ひとまとまりの話題の区切れ」を示しているが,「はい」の韻律的特徴が異なる場合,進行中の話題が終了したと判断されやすいものと,終了と継続に対し中立的なものがあることがわかった.このことは,「はい」ということばが,出現位置という会話の構造面では,進行中の話題への区切れを示すのに使われる一方で,進行中の話題が終了に向かうことへの発話者の態度を韻律的な特徴によって提示していると考えられる.本研究の限界として,本研究で明らかになった「はい」の韻律的特徴は,「はい」のもつ多様な音声的特徴の一部を調査したものであること,また,「はい」と同じ会話枠に現れる他の発話の出現位置,および韻律的特徴のもつ機能について体系的な分析が行われる必要があることがあげられる.今後の課題として,進行中の話題が終わりに向かう際に現れる「はい」以外の談話標識として機能することばについても,それらの韻律的特徴が伝える発話者の態度と会話の進行との関係について明らかにされることが望まれる.

参考文献

Couper-Kuhlen, E. (2004). Prosody and sequence organization in English conversation. *Sound patterns in interaction*, Couper-Kuhlen, E.・ Ford, C. E.(Eds) JohnBenjamins Publishing pp.335-376.

甲斐朋子(2016). 隣接対の第1発話部を持たない「はい」の使用について―「そうですか」で始まる話題終了に向けたターン構成から見た場合― 言語科学会第18回年次国際大会予稿集, 62-65.

甲斐朋子(2019a). 日本語の「はい」の表すもの ―「はい」の機能と韻律的特徴をめぐって― (博士論文, 大阪大学)

甲斐朋子(2019b). 進行中の話題の終了可能地点に現れる「はい」―機能と韻律的特徴との関係について― 言語文化共同研究プロジェクト2018: 音声言語の研究, 13, 1-16.

Schegloff, E. A. (2007). *Sequence organization in interaction: A primer in conversation analysis I* (Vol.1). Cambridge University Press.

「質問ー応答」連鎖で繰り返して質問すること

ー 連鎖の後方拡張を中心にー

梁 勝奎（名古屋大学大学院生）

1. はじめに

日常会話でよく見られる質問-応答連鎖では,質問に対する応答が産出されるとその連鎖は完了可能点に到達する.しかし,質問者がそこで会話を完了せずに先行発話で産出した質問を再び産出して受け手に応答を要求することで連鎖を拡張する場合もある.本稿ではこのような質問-応答の連鎖で応答が産出されたにもかかわらず,質問者が再び質問することでその連鎖を後方に拡張することに注目する.再び質問することで受け手に応答を求めるこのプラクティス(実践)がどのような相互行為的働きをしているかを会話分析の方法を用いて明らかにすることが本稿の目的である.

2. 先行研究

連鎖の後方拡張(post-expansion)に関して,Schegloff(2007)は大きく「最小限の後方拡張(minimal post-expansion)」と「最小限ではない後方拡張(non-minimal post-expansion)に分類した.この分類に基づいた連鎖の後方拡張に関する多くの研究では,第二成分で選好する(preferred)反応が行うと連鎖をそれで終了させるか,最小限の後方拡張だけが行われる傾向があると指摘され,好まない(dispreferred)反応や,質問に適合しない反応が産出された後には最小限ではない後方拡張が行われると指摘されていた(Davidson, 1984; Schegloff, 2007; Liddicoat, 2011 など).

しかし,質問-応答連鎖で再び質問することで最小限ではない後方拡張を行うのは必ずしも質問に適合しない反応や好まない応答の後にだけ産出されるのではない.質問に対して適合する応答や選好する応答の後にも連鎖の最小限ではない後方拡張が行われ、受け手の反応を求めることがよく見られた.本研究では従来の研究で行われた質問に適合しない応答の後の連鎖の拡張とともに,質問に適合する応答の後に行われる連鎖の後方への拡張についても考察する.

3. データ

本研究では筆者が独自的に収録した日常会話のデータと,The talk bank project(MacWhinney, 2007) 似て配布されている「Callfriend Japanese Corpus」,「Callhome Japanese Corpus」を用いて本研究の研究対象になる現象を収集し,応答の後に質問することを形式的に「質問を繰り返す」現象と「質問をやり直す」現象に分類した.

本稿では第一成分で産出した質問を第三の位置で新しい要素を付け加えずに全体またはその一部を繰り返すことを「質問の繰り返し」と言い,第一成分で産出した質問に新しい要素を付け加えたり,新しい発話形式で第一成分と同じことを質問したりすることを「質問のやり直し」と言う.また,位置的には,第一成分の質問に「適合する応答」の後に再び質問するケースと,「適合しない応答」の後に質問を産出したケースに分類した.質問に「適合する応答」ということは,質問が制約する応答の形式に当てはまる応答を意味するが,これは「選好する・先行しない」応答のことを表すのではない.質問に「適合しない」応答とは質問にたいしてうまく答えずに応答を回避するように見えたり,質問が制約する応答形式に違反する形の応答を産出したりすることを意味する.このような分類に基づいて本稿では(1)質問に適合する応答の後に質問を繰り返す,(2)質問に適合しない応答の後に質問を繰り返す(3)質問に適合する応答の後に質問をやり直す(4)質問に鄭号しない応答の後に質問をやりなおす,の4つに分類し,分析を行った.

4. 分析

4.1. 質問に適合する応答と繰り返し

応答の後に同じ質問を繰り返して産出するということは,第一成分である質問に対して産出された応答を受け入れることを保留し,応答者に再び確認を求めることである.断片 1 は友達同士の電話会話場面で,アキラはカズヤに成田空港から東京都内の新宿まで行くのにどのぐらい時間がかかるかを聞いている.

断片(1) [Callfriend_JAPN_6166_22:28~]

01 アキラ： u:m>どれぐらいかかんの?<
02 (0.4)
03 カズヤ： .hh[hh
04 アキラ： [一時間ぐらい¿
05 (0.5)
06 カズヤ： まず#::#日暮里まで一時間だろう?
07 (.)
08 アキラ： あそんなかか(h)るんだhh.=
09 カズヤ： =50何分°#とか(だよね)確[かに#°
10 →アキラ： [スカイライナーで?
11 (0.2)
12 カズヤ： °#う:ん#°.
13 (0.3)
14 →アキラ： スカイライナーで?
15 (0.2)
16 カズヤ： スカイライナーでね
17 (0.3)
18 アキラ： 五十分かかんの?
19 (0.2)
20 カズヤ： そうだよ.
21 アキラ： うわhhh (0.9) マジか(h)いhh.
22 (0.5)
23 カズヤ： HHhhき[み(0.3)使ったときないの?
24 アキラ： [うん.
25 (0.3)
26 アキラ： ああ:,ずっと使ってっけど覚えてねえよ.

空港から新宿までどのぐらいかかるかという01行目のアキラの質問に対して,06 行目でカズヤは成田空港から東京の日暮里駅まで1時間ぐらいかかると応答する.その次の順番である08行目でアキラが知識状態の変化標識(Change of state token)である「あ」(Endo, 2018)を冒頭で発話してから「そんなか(h)かるんだhh」と発話することで自分の予想より時間がかかるということを表す.そして,10行目で「スカイライナーで¿」と質問し,スカイライナーという具体的な列車の名前を出すことで,カズヤが話しているそのルートが空港から東京までの特急列車である「スカイライナー」を利用した場合かかる時間なのかを確認する.この質問にカズヤは「°#う:ん#°」と応答することで,スカイライナーで移動しても五十何分はかかるということを表す.その応答の後,アキラは「スカイライナーで?」と発話することで10行目の質問を繰り返している.

この断片の1行目から9行目までの成田空港から東京都内まで行く方法や所要時間について,アキラはカズヤより知識がないスタンスを見せている.それにもかかわらず,14行目で10行目質問をそのまま繰り返して再び質問を産出し,カズヤに応答を求めるということは 12 行目で産出されたカズヤの応答を受け入れることを保留し,12 行目の応答に何か問題があるのではないか確認していると分析することができる.

しかし,カズヤは16行目で「スカイライナーでね」と応答することで 12 行目と同じスタンスを見せることで,自分の応答には問題がないことを主張する.この応答の後,アキラは五十分かかるかを再び確認し(18 行目),それに対してカズヤが 20 行目で確認を与えたらアキラが21行目で「うわhhh (0.9) マジか(h)いhh.」と発話することで自分の想定と違ったということを表している.この 21 行目の発話でようやくアキラはカズヤの応答を受け入れてようとしていると認識できる.

その後,カズヤが23行目でスカイライナーを使ったことがないかを聞くと,アキラが26行目で「ずっと使ってっけど」と発話して自分もスカイライナーを使っていることを表明してから「覚えてねえよ」と発話して所要時間がどのぐらいだったかは記憶が不確かかだと述べる.この26行目の発話から見ると,14行目で10行目の質問を繰り返したことはアキラがスカイライナーの所要時間について完全に知識がなかったということではないので,自分が想定していた時間と,カズヤが答えた時間の違いが原因となり,質問を繰り返して応答を受け入れることに保留し,カズヤの応答に問題がないのかを確認したと考えられる.このように,質問に適合する応答の後に質問をそのまま繰り返すことで応答に何か問題(または間違い)がないかを確認することが見られた.

4.2. 質問に適合しない応答と繰り返し

質問に適合しない応答が産出された後に再び質問が産出されるプラクティスは本研究のデータで2例か見つかったが,厳密には質問の繰り返しだけではなく,応答に対する新しい質問として産出した可能性も含んでいると思われるものであった.

断片(2)は友達同士のメグミとリラの電話会話場面である.01 行目でメグミはリラと共通の友達であるユウコと仲違いしてしまい,一緒に遊ぶ人がいないと言う.それに対してリラが 03 行目で自分もユウコを敵に回したと告知する.この発話を

断片(2) [Callhome_JAPN_0696_00:11:02]

01 メグミ： >なんかさ=ユウコとかもさ:=敵に回しちゃって今さ:<
02 : も[うどう°すること- °
03 リラ : [>私も敵にまわしちゃったの<
04 →メグミ： なんで?
05 (0.7)
06 リラ : u::hmま-(.)なんか (0.2) ¥それ::は今度手紙に書くよhuh¥.
07 →メグミ： なん[で::?
08 リラ : [今日書くから.
09 (0.6)
10 メグミ： うそ=書いて:::¿

聞いたメグミが 04 行目で「なんで?」と疑問詞を用いて質問することでなぜユウコを敵に回したか理由を聞いている. しかし, リラは 04 行目の質問に対してすぐ応答せずに 0.7 秒の間をおいて(05 行目), 発話の冒頭に「u::hm」と発話したり, 「なんか」と発話してから 0.2 秒の間を置いたりすることで応答を産出することを遅延させてから「¥それ::は今度手紙に書くよ hhuh¥」と発話する(06 行目). 言い淀むことと沈黙を置いてからこの場ですぐ答えるのではなく手紙で書くということから、リラがユウコと仲が悪くなった理由をデリケートなことだと扱っていると分析することができる. このような応答方法でリラは 04 行目の質問に適合な応答を産出することを回避している. リラの応答に対してメグミは 07 行目で再び「なんで::?」と 04 行目の質問を繰り返す. これを通じてメグミは 06 行目のリラの応答に受け入れないスタンスを示し, 質問に回避する応答に対して, 再び応答を追求している. ただし, この質問は理由を聞く「なんで」という疑問詞だけを使った質問であるため, 06 行目の「ここでは話さずに手紙で書く」理由を聞いているようにも見える. 07 行目のメグミの質問に対してリラは 08 行目で「今日書くから」と発話することで「ユウコを敵に回した」理由を聞く質問についても, 「今はなさずに手紙で書く」理由を聞く質問についても適合しない答を産出する. しかし, メグミが 10 行目で「うそ=書いて:::ね」と発話することでその応答を受け入れているので 07 行目でメグミが 04 行目を繰り返していたのか, 06 行目に関する新しい質問を産出したのかは明確ではない. このように質問に適合しない応答の後に質問を繰り返すことは第二成分で産出した反応をなかったことにし, 同じ質問に再び反応を追求していることが見られた.

4.3. 質問に適合する応答と質問のやり直し

質問に対して適合する応答が産出された後の位置で, 質問者が第一成分で産出した質問をやり直すことは, 質問のやり直しにより質問をより明確にすることで, 一度は第二成分が産出されたにも関わらず, まだ尋ねたことについて質問者が理解できていないことがあるということを提示している. これを通じて, 質問者は応答者に自分が要求する情報を含む応答を提示することでベース連鎖の第二成分で産出された応答では物足りないことを表す. このようなプラクティスを実際の断片を用いて確認していきたい. 断片(3)では最近引っ越したフミコが妹のカオリを家に招待している. フミコの新しい家について詳しく知らないカオリはフミコの家の状況について質問している.

断片(3) [Callhome_JAPN_1461_00:26:25~]

01 カオリ： 私がそう-例えば行ったとしたらさ:
02 フミコ： うん.=
03 →カオリ： =部屋あるの?私の.
04 フミコ： え?あるよ.
05 (1.0)
06 →カオリ： まるまる空いてんのま[る-
07 フミコ: [まるまる空いてる.
08 (0.5)
09 カオリ： ふ::ん.何畳ぐらい?
10 (.)
11 フミコ： .hhhhhhh 八畳.六畳から八畳.

01 行目でカオリがフミコの家に行くということを仮定にしている. そして, 03 行目で「部屋あるの?」と質問することで自分が使える部屋の有無を尋ね, 間を開けずに「私の」を付け加えることで自分が泊まる部屋があるかどうかを質問する. この質問に対してフミコは「え?あるよ.」と応答することでカオリが使える部屋があると応じている(04 行目).

03-04 行目の連鎖は問題がないように見えるが, 03 行目のカオリの質問で触れられている「私の部屋」という語彙が示しているのは「他の人(例えばフミコ)が使っている部屋だけど, カオリも泊まれる部屋」を示しているようにも聞こえるし, 「カオリ一人で使える個室」を示しているようにも聞こえる. しかし, フミコの「あるよ」という 04 行目の応答は上で述べた二つの意味のうち, どちらに当てはまる応答かは明らかではないが, フミコは 03 行目のカオリの発話を問題があるものとしては扱っていない.

04 行目のフミコの応答の後, 06 行目でカオリは「まるまる空いてんの」と質問することで, 他の人が使っていいなくてまるまる空いている部屋があるかを聞く. つまり, 03 行目の「私の部屋」があるかという質問と, 06 行目の「まるまる空いている部屋」があるかという質問は両方ともカオリが「一人で使える部屋」の存在の有無について聞いている同じ質問である. 従って, 06 行目のカオリの発話は 03 行目と同じことを聞いている質問であるが, 03 行目の「私の部屋」を明確にすることで, 質問では明らかではないところをより明確にすることで質問をやり直していると分析することができる. このようにカオリは 06 行目で自分の質問をやり直して 03 行目の質問を再産出することでこの 03-04 行目の質問-応答連鎖で知りたかったことが第二成分の応答では足りないことを表し, 応答者に再び応答を要求している.

4.4. 質問に適合しない応答と質問のやり直し

第二成分の位置で質問に適合しない応答が産出された場合に行われる二回目の質問は, 応答者が自分の質問に適合する応答を産出するように反応を追求していると考えられる. 断片(4)は研究者同士であるヒロシとタクヤの電話会話場

面である. 通話が始まる前に, 研究のため, この通話は録音されているというアナウンスが流れた. 断片の直前にタクヤがどのような話をしたらいいかヒロシに聞いた. そしてヒロシはタクヤのところに送った論文について話し始める.

01 行目でヒロシは論文が届いたかどうかを尋ね, 03 行目でタクヤは届いたと答える. ヒロシが 04 行目で「どうですか?」と送った論文について聞く. この質問に対してタクヤが 06 行目でまず「うん」と発話することで質問を受け入れたことを表すが, その後すぐ発話を産出できずに「あれ::::」と言い淀んでいる. それを聞いたヒロシは 07 行目で 04 行目の質問を「なんか:(.)ありますか?」と質問を変えて, 論文について何か言いたいことがあるかと聞く. それに対してタクヤは 09 行目で「そこそこ」という表現 を使って細かい問題はあるかもしれないが, 全体的には良いという評価をする. この評価に対してヒロシは 11 行目の冒頭で「う:ん」と発話することでタクヤの応答を受け入れるように見えるが, すぐ「でも」と付け加えることでタクヤの応答に何か抵抗することを表し(Mori, 1999), 07 行目の質問を繰り返して産出するが, 11 行目の質問をそのまま繰り返すのではなく, 「質問」という語彙を発話の中に入れて, 「う:::んでも なんか::質問ありますか?」と質問する. この発話を通じてヒロシは 07 行目の質問で求めていた反応は 09 行目のような大まかな評価ではなく, 論文に関する質問だったということを表すことでタクヤに再び反応を要求している. 12 行目の質問の後, タクヤは「う::::んとね::」と発話したり, 0.3 秒の間を置いたり, 「え:::::t」と発話したりして言い淀んだ後, 14 行目で「これからの展開をどうするかですね:」と発話することで質問をしようとしている. 07 行目でヒロシが産出した極性疑問文を用いた質問にタクヤは「はい」または「いいえ」の応答や, 「ありますか?」に対する何かを発話するなど, 07 行目の質問に適合する応答を産出しなかった. そのため, ヒロシは 11 行目で「質問」という言葉を入れて 07 行目の質問をやり直すことでタクヤに質問に適合する応答を求めている. その後, 実際にタクヤは質問を産出してはないが, 14 行目で 11 行目のヒロシの質問に沿う反応を産出しようとしたことでヒロシの反応の追求に対応していると分析できる.

断片(4) [Callhome_JAPN_1418 00:00:14~]

01	ヒロシ：	例えば論文届いたんですね:.
02		(0.5)
03	タクヤ：	あ届きました届きました.=
04	ヒロシ：	=どうですか?
05		(0.3)
06	タクヤ：	うん.h(.)あれ::::[(い い っす)]
07	**→ヒロシ：**	**[なんか:(.)あ]りますか?**
08		(.)
09	タクヤ：	そこそこいいですね:
10		(0.3)
11	**→ヒロシ：**	**う:ん でも なんか::質問あります:?**
12	タクヤ：	.hh う:::んとね::(0.3)え:::::t
13		(0.3)
14	タクヤ：	t-これからの展開をどうするかですね:
15	ヒロシ：	う:ん.

5. おわりに

再び質問することは全部同じ活動をしているように見たが, 詳しく分類して分析すると, 応答の形や質問の形式によって異なる働きをしていることが分かった.

質問に適合する応答の後に産出される質問は産出された応答を確認したり, 不確かな部分を明確にしたりする働きをしていることが見られたが, 質問に適合しない応答の後にはそれよりもまず, 質問に適合する応答が産出されるようにしていることが分析の結果明らかになった.

本稿では再び質問するときの質問形式だけに注目したが, それと共に行われるジェスチャーや視線の動きなどの資源が再び質問をすることについてどのように使われているかについてはこれから続けて研究を進める必要がある.

参考文献

Davidson, J. (1984). Subsequent versions of invitations, offers, requests, and proposals dealing with potential or actual rejection. *Structures of Social Action*, 102-128.

Endo, T. (2018). The Japanese change-of-state tokens a and aa in responsive units. *Journal of Pragmatics*, 123, 151-166.

串田秀也・平本毅・林誠 (2017). 会話分析入門 勁草書房.

Liddicoat, A. J. (2011). *An Introduction to Conversation Analysis*. Bloomsbury Publishing.

MacWhinney, B. (2007). The TalkBank Project. In J.C. Beal., K. P. Corrigan. and H. L.Moisl. (Eds.), *Creating and Digitizing Language Corpora: Synchronic Databases*,Vol.1. (pp.163-180). Houndmills: Palgrave-Macmillan.

Mori, J. (1999). *Negotiating Agreement and Disagreement in Japanese*. John Benjamins

Schegloff, E.A. (2007). *Sequence Organization in interaction: A Primer in Conversation Analysis1*. Cambridge University Press.

入院前患者情報聴取における看護師の質問デザイン

大西美穂 (名古屋短期大学)　舩田千秋 (名古屋大学)
菊内由貴 (国立病院機構四国がんセンター)　服部兼敏 (奈良学園大学)

1. はじめに

入院前の患者基礎情報聴取の際の看護師–患者間のやり取りにおいて，看護師は経験的で幅広いフレーム的知識を利用して会話を進めることが指摘されており（菊内 他 2018），熟練技術として継承が難しいことが課題とされてきた．この言語技術の実態を解明することで，看護師の医療的貢献を正当に評価することが可能になるほか，看護教育や看護システム構築への応用も期待できる．そこで患者基礎情報聴取の会話の全体的な構造と，その文脈や話題のもとになされる看護師の質問のデザインを分析した．

2. データと分析方法

データは2018年8月から9月の間に四国がんセンター会議室において行ったロールプレイである．5パターンをICレコーダで録音した．参加者は四国がんセンターで長年の経歴を有する2名（現在は研究や教育に携わる），医療情報学他を専門とする1名，および言語学を専門とする1名の合計4名である．1つのロールプレイを2名（看護師役と患者役）あるいは3名（看護師役，患者役，患者家族役）で構成し，実際の患者基礎情報の項目をほぼ省略することなく聴取した．ロールプレイでは患者役の病識の不足や体調認識との矛盾が生じることもあったが，看護師の対応については実際の聴取の技術が十分に発揮されたものと言える．分析は制度的な場面であることに留意した上で，看護師の質問デザインに注目し，言語行為理論およびフレーム意味論の観点から行った．

3. 入院前患者基礎情報聴取の背景

四国がんセンター（https://shikoku-cc.hosp.go.jp/）は四国の「がん」に関する中心的施設で，高度な専門医療を提供しながら臨床研究，教育研修，情報発信などの機能も備える．地域の関連機関やかかりつけ医，ケアマネージャーらとの体系的な体制づくりを実践する他，がん相談支援センターを設け，看護師やソーシャルワーカーによる相談窓口としている．

患者基礎情報聴取は入院初日にプライバシーが確保できる部屋において「看護診断」の理論（ゴードン 1998）に基づく確認項目（表1）に従って進められる．項目ごとに確認事項が示された書式があり，「アナムネ」と呼ばれる．聴取には看護師と患者に加え家族が入ることも多い．栄養摂取-健康管理パターンなど，本人より家族の情報が頼れる場合もある．聴取の前後には，患者は入院施設の案内を受けたり病室に荷物を入れたりの入院準備を行う．一方看護師は，他の入院患者や他の業務との兼ね合いで時間を調整しながら動いており，適切なタイミングを見計らって情報聴取の時間を確保する．

	看護診断の指針（理論）	確認事項の例1（乳がん女性）	例2（肺がん男性）
1	健康知覚-健康管理パターン	飲酒や喫煙の習慣の確認	服用中の薬の確認
2	栄養-代謝パターン	水分・栄養摂取の確認	水分・食事，口腔内の状況確認
3	排泄パターン	排尿，排便行動，問題対処確認	排泄行動の確認
4	活動-運動パターン	仕事で動かす身体部位	仕事は重労働かどうか
5	睡眠-休息パターン	睡眠状況の確認	睡眠状況の確認
6	認知-知覚パターン	聴取を行えるかどうかの確認	不快症状・聴取を行えるか確認
7	自己知覚-自己概念パターン	がんに対する受け止めの確認	病気の自覚，病識の確認
8	役割-関係パターン	支援体制を含む勤務先，家族の確認	家族，自営業の代行者確認
9	セクシュアリティ-生殖パターン	（ロールプレイでは実施せず）	（ロールプレイでは実施せず）
10	ストレス-コーピングパターン	ストレス発散の方法や趣味の確認	趣味や生きがい（仕事）の確認
11	価値-信念パターン	宗教の確認	仕事や家族への道義的信念

表1　ゴードンの機能的健康パターン／乳がん患者のロールプレイでの確認例

4. 分析１：ジレンマの解消による医療への主体的な態度引き出し

がん患者の入院前情報聴取において看護師が解決しておきたい数ある課題の一つに，医療上の目標（治療や入院による回復）と患者の生活上の関心（仕事や育児）の競合の解消がある．この競合を扱った研究として，医師の「生物医学」による見方と患者の「生活世界」への関心が，双方の相互行為上のジレンマとして特徴づけられるとする Heritage & Maynard（2006: 116）の問診場面の分析がある．入院前患者基礎情報聴取時の看護師-患者の会話では，このジレンマ解消に焦点を当てた行為が特徴的に見られる．ジレンマが生じやすいトピックとしては，入院日程の確保，患者本人の病識と治療方法への理解，会社業務や家庭での育児や家事の代行者の確保，勤務先の理解，退院後の仕事復帰に伴う問題などである．これらを入院前に調整することで入院後のトラブルが抑えられる．

抜粋(1)は，入院日程の潜在的問題を予め解決する場面である．看護師の質問は「お仕事」(01 行目)「職場」(09 行目)「お休み」「有給」(11 行目)などの生活世界の話題で表現されているが，同時に，入院日程調整という医療上の目的を達成する行為としても機能するものである（N は看護師，P は患者を示す）．

(1) 入院日程の調整（針生検での検査入院）
01 N: お仕事は (.) なさってますか?
02 P: =今日入院で明日あさっ[て (.) 金曜日検査[して，土日様子見てよかったら帰っていいよというふうに言わ[れているから::=
03 N: [ふん [ふん [ふ :: ん はい
04 P: =ええと，その期間分ぐらいの休みをもらっている[んです.
05 N: [ふ: ん，なるほどなるほど：
06 そうすると：あの :: ま (.) 予定で帰れたら：お仕事も大丈夫なんだけどっ (.) てことですね=
07 =月曜日からもう (0.2) お仕事[される予定なんですか?
08 P: [月曜日は一日もう１回お休みで : (0.2) 次の日から-
09 N: なるほどなるほど.°そうですか：°. (0.6) ちなみに職場には : (0.4). ご病気のこととか（そういう）理由[は-
10 P: [まだです.
11 N: あ，そうなんですね : (1.0) もし (0.2) あの：月曜日以降入院が長引くという場合には，お休みは有給などで可能なんですか
12 P: ん：まあ (0.2) 大丈夫だと思います.

看護師の１行目の極性疑問文は仕事の話題（生活世界）を開始しながら，入院日程についての患者の気がかりな点を解決する行為を目指す意図（医療上の目的）がある．2 行目の患者の応答は極性疑問文に期待される「はい」「いいえ」から逸脱しており，看護師の意図に応答したことが分かる．看護師は 6 行目で患者からの情報を要約引用しながら質問形式は維持し，「お仕事も大丈夫なんですね」で入院日程調整という行為をより明確に示す。続く 7 行目は，休める期間を問う質問デザインでありながら入院延長も示唆する．9 行目以降は質問前にためらいが観察され，11 行目ではためらいの後に「入院が長引くという場合」という表現を入れて行為を明示する．患者は 12 行目で「まあ」と「と思います」を用いてわずかながら抵抗を見せ，予定日程内で検査が終わることを望むことを示唆はするものの，この交渉によって，今後起こりうる入院延長問題の未然解決は達成した．

ジレンマの調整の効果はトラブル抑制にとどまらず，患者の医療への態度を変える効果もある．ロールプレイでも，解体業を営む肺がん患者が，入院中も現場に作業の指示を出すことを希望するが，看護師は丁寧に各従業員の役割を聞き出し，また咳などの症状と仕事環境との関係を示唆しながら，患者の態度を治療優先に調整する場面がある．

5. 分析２：患者の歴史的文脈を構築する会話から鮮明な情報を得る

Boyd & Heritage（2006）は，1 件の問診全体が医師と患者がともに一貫した文脈を構築する行為であると分析する．この方法は，文脈から切り離した質問形式より効率がいいという．本研究の患者基礎情報聴取の会話も，看護師と患者が協同して患者の日常や病歴を含む歴史的文脈を構築する性質を持つことが分かった．熟練した看護師は質問リストを消化するような聴取方法を取らない．この点は新人看護師や看護学生との主な違いでもある．

表 2 は乳がん患者のロールプレイの会話が進んだ順序である．会話がどのように構築されたかを示す目的でおおよその順序を示したが，実際には 4 節で見たように，ひとつの発話が多義的に機能するため，もう少し複雑な構造を持つ．右端の番号は表 1 のリストと対応する．つまり，少なくとも聴取はアナムネの質問項目の順序ではないことが確認できる（表中の N は看護師，P は患者を示す）．また，確認しながら承認をしている箇所もある．

以下で，表 2 の太枠内の会話を具体的に見ながら，確認と承認の方法を分析する．

開始	聴取内容の提示，N-P の関係性構築
6	身体状況の確認
7	乳がんに対する受け止めの確認　抜粋(2)
10/8	ストレス耐性／子どもへの心情確認
5	睡眠状況の確認
10	ストレス対処行動への承認　抜粋(3)
5	睡眠状況の確認
8	子どもの状況の確認
8	支援体制を含む家族状況の確認　抜粋(4)
8	子どもの状況の確認
1	入院経験の確認
2	栄養摂取の確認
	食事制限情報提供
2	口腔状況の確認
1	喫煙状況の確認

1	酒量の確認
2	水分摂取量の確認
3	排尿行動の確認
3	排便状況の確認
3	排便に対する対処法の確認
8	支援体制を含む家族状況の確認　抜粋(5)
8	仕事状況の確認
8	支援体制を含む家族状況の確認
8	仕事状況の確認
4	生活上の身体負荷の確認
8	対処行動の実行可能性を確認
10	ストレス対処行動の確認
終了	患者からの質問の誘導
7	子どもの状況の確認
	子どもに関する相談可能の明示的提示

表2　看護的背景知識・収集内容（乳がん40代女性のケース）

看護師からの質問は患者の個人史に関心を示す個別のデザインに調整される．抜粋(2)は，49行目で「7 乳がんに対する受け止め確認」を意図した質問をして回答を得た後，57行目で「10 ストレス耐性」の認識を「今のように」という表現で既発話内容に関連付けながら質問する．58行目以降，患者が語り始めると，看護師は聞くことに専念する．なお，この抜粋(2)の直後には，患者の語りを要約する方法で共感や承認を示す．

(2)（乳がん手術入院）3.02秒「7 乳がんに対する受け止め確認」から「10 ストレス耐性承認」「8 子どもへの感情」へ
49 N: 聞かれた時はどうでしたか．ちょっと（.）びっくりされた-
((約15秒省略，患者はガンを取ればいいと考えて気持ちを切り替えた経緯を説明))
57 N: ちょっとこう：，ストレスな感じの出来事があったときに，今のように少し前向きに考えられるという：:-
58 P: (0.2) いや（.）そうでもなくて：: あの：::1回（.）割り切っちゃったらこのこんな感じなんです[けど：::
59 N: [ふん：: ん
60 P: 今回は：: だからもうこどもちっちゃいし[：: 早く取った方が [いいってすぐ思ったんで：: もうきりかえたんです[けど-
61 N: [はい [はい はあ：（略）

抜粋(3)の78，85行目は睡眠の質問としてデザインしているが，乳がんの受け止めやストレス耐性の話題に関連付けており，個人史や文脈による調整がなされた質問デザインと言える．88行目からは看護医療の質問としてのデザインになる．

(3)（乳がん手術入院）4.14秒「10 ストレス耐性の確認」から「5 睡眠状況の確認」へ
78 N: そうすっと今回のことで：特に眠れなくなったりとか：(0.2) そういったことは-
79 P: （略）でもま：仕事していまして：，ちょっとまあ：あの：先週からは休んでいるんで[すけど：=
80 N: [ん ん
81 P: =仕事してくると疲れる (h) ん (h) で，まあ寝てましたけどね，[はい．
82 N: [なるほど：
83 P: あの手術するって決めてからはもう寝て，[寝てます
84 N: [あ，そう：
85 じゃ，きのうもよく[眠れましたか?
86 P: [は：ものすごく寝ました.=>今日ちょっと[寝坊したぐらいです(h h)<
87 N: [はあはあはあ，そうですか．
88 あの，眠れるってかあの（.）普段だいたい平均的にはどのぐら[いの時間寝てらっしゃるんですか
89 P: [あ，えっとね：:(0.2)<6時間ぐらいですかね：::::>

以上の抜粋を含め，患者は生活体験を描写的に語り，看護師は患者の生活を自ら体験したかのように鮮明に理解する．一方の患者も，この物語的性質から自らの客観的な人間像を認識する．これによって自らの生活や医療の方針への最適化を図り，自律的な意思決定を進めることになる．自律的な意思決定を促すことは基礎情報聴取の大きな目的でもある．

6. 看護師のネットワーク的な知識と質問デザインとの関係

抜粋(2)では，この患者が「7 乳がん受け止め」を「子ども」（60 行目）に関連付けて語っていた．この語りから，看護師は「10 ストレス耐性」，「8 家族の支援体制」の情報も同時に得ていることや，常に関連する他の質問を待機させていることが直後の抜粋(3)や，その後の会話から見て取れる．**つまり**，看護師は患者ごとに聞き出すべき情報を予め計画するための知識の枠組み（フレーム）を持っており，このフレームの情報ネットワークを完成させるように聴取を進めていると分析することができる．短時間で達成すべき課題は多く，特にジレンマ解消や意思決定支援には丁寧な聞き取りや患者の判断への承認が必要である．一方，体調や生活習慣を問う場面では，患者のプロファイルや病気から予測し、極性疑問文を連ねる端的な形式（例：「持病があるとかそういうことは」「いやないですね」、「飲んでいるお薬とか言うのも」「ない」）にデザインされることもある．

例えば，抜粋(3)に続く会話で，患者は仕事と家事・育児を両立させているが，近所に住む親族が家事と育児をかなり分担していることもあり，入院中の支援体制に楽観的すぎることが明らかになってくる．看護師は抜粋(4)の 97 行目の質問で99 行目の情報を得て以降, まずは育児の支援体制に話を進めるが, 約8 分後に, 育児以外の支援の話題に戻る（抜粋(5)）．

(4) （乳がん手術入院）5:12 秒「8 支援体制を含む家族状況の確認」

95 N: 2 歳のおとこの子は，今は，保育園とかに行かれてるんですか?
96 P: あ，うん家，家にいます：．もう，そろ，来年から[：保育しようと思いまして,[はい
97 N: [あ そうなんですね [そうすると：仕事されている[間（ ）
98 P: [はい=
99 =あ：あの，近所の，主人の，あ：えっと：お母さんが（．）あ：あの，その間だけ(．) 見てくれてます.

(5) （乳がん手術入院：看護師の質問のみ）13.14 秒「支援体制を含む家族状況の確認」

N: おうちでは，まあ (0.4) あの：〇〇さんフルタイムのお仕事されてるっていうことなんですけれども：まあ (．) 日中お子さんの事は (．) おばあちゃんに：：力を借りてっていうことがあるし，他にはなんかその，家の中で (．) だんなさんとこう，家事を分担したりとか：なんかこう： (0.2) どんなふうにされているんですか? (．) ご飯は：

抜粋(5)の質問を患者は相槌を打ちながら聞き，近所の義母と小学生の娘に任せることを答えるが，少し楽観していることを問題視した看護師は，「洗濯なんかは-」「だんなさんもやろうと思えばできるんです?」など家族全員の役割を確認する質問を網羅的にすることで，暗に家事の支援体制の再考を促す．この患者は子供の心的なケアや自身の仕事復帰についても楽観している．看護師は，「お子さんには今回のご病気とか入院について，どのように」と子供の病気受け止めの問題と，「こう荷物をこう、重いの，どんなお仕事-」と，仕事復帰時の商品運搬作業の問題の 2 つにも取り組む．子どもの心的ケアについては，看護師が専門の心理士の存在を知らせるにとどまったが，運搬について患者は「傷口がすごい開くんですか？」と病識不足を明確に示し，改めて仕事復帰の負担を最小限に抑える方法を自律的に考え始めて口にしている．

7. おわりに

本分析で以下の 2 点を論じた．まず，入院前の患者基礎情報聴取において，看護師は生活世界の話題で質問し，同時に医療面の行為を遂行することで，患者の生活優先的態度と，医療者の医療優先的態度の衝突から生じるジレンマを解消する．また，聴取は課題中心型の相互行為で，質問リストの消化ではなく複雑な構造を持つ．会話を一貫性のある物語的なものに構築することでより鮮明な患者情報を得ることにつながり，患者は適切で自律的な意思決定に向かう．

謝辞 本研究は科研助成金研究（17K12078：研究代表 舩田）を受けたものである.『研究課題名：エキスパートナースの認知行動のフレーム意味論的解析の看護支援システムへの統合』

参考文献

Boyd, E., & Heritage, J. (2006). Taking the history: questioning during comprehensive history-taking. In J. Heritage & D.W. Maynard (eds.), *Communication in Medical Care*, Cambridge: CUP. pp.151-84.

Gill, V.T., & Maynard, D.W. (2006). "Explaining illness: Patients' proposals and physicians' responses. In J. Heritage & D.W. Maynard (eds.), Communication in Medical Care, Cambridge: CUP. pp.115-50.

ゴードン，マージョリー (2009 [=1998]). アセスメント覚書：ゴードンの機能的健康パターンと看護診断. 東京：医学書院

菊内由貴・舩田千秋・大西美穂・服部兼敏 (2019). エキスパートナースの実践の可視化による看護師教育方法の検討, 第 11 回日本医療教授システム学会総会・学術集会,発表要旨集, p.61.

英語の多様性とグローバル人材の習得英語について

五十嵐優子(立命館大学)

1. はじめに

文部科学省は，現在，国際社会で活躍できるグローバル人材の育成を目標の一つとして英語教育を実施しているが，ここから国際社会で使用されている言語は「英語」であると文科省は認識し，日本人がそこで活躍していくためには十分な英語力が必要であると考えていることが分かる．ところが「英語」と言ってもそれには様々な変種が存在し，それぞれが独自の言語学的特徴をもっている．そして各変種は多くの話者にとって自分たちのアイデンティティを形成するための重要な構成要素の一つとなっている．Kachru (1985)は多様な英語を Inner Circle varieties (イギリス，アメリカ，カナダ，オーストラリア，ニュージーランドの英語)，Outer Circle varieties (Inner Circle 国の植民地だった国の英語)，Expanding Circle varieties (上記に含まれない国の英語) に区分けしたが，日本人を含めた多くの外国人英語学習者は Inner Circle の英語を習得目標としている．しかしながら，国際ビジネス等で使用される共通語としての英語は，必ずしも Inner Circle の英語とは限らない (末延，2010)．もちろん英語母語話者同士の会話では Inner Circle のものが使用されているが，非英語母語話者同士の会話では Inner Circle の英語にはない特徴を持った英語が使用されている (末延，2010; Pedrazzini & Nava，2010)．このような国際社会での英語使用状況から，日本人大学生が文科省や日本のビジネス界が期待しているような国際社会で活躍するグローバル人材となるには，様々な英語に対応できる能力を身につける必要がでてくる．また英語教育では，多様な英語の中で日本人が習得目標とするべき英語とはどのようなものなのかも考えなければならない問題となってくる．

そこで筆者は，日本の大学生が，将来グローバル人材となるには多様な英語に対応できる能力を身につける必要があり，様々な英語を実際に学びたいと考えているのかを調査するため，2018 年にアンケートによるパイロット・スタディを実施した．本稿ではこの調査結果を紹介し，これを踏まえて大学生が国際社会で必要となる多様な英語に対応できる能力を養えるよう英語教育においてどのような英語を習得目標とするべきなのかを考察していく．

2. グローバル人材のための習得目標となる英語

今日の EFL 学習者用教科書に使用されている英語はアメリカ英語かイギリス英語である (久保田，2018)．しかしながら，国際社会では様々な背景を持った話し手により多様な英語が使用されていることから，アメリカ英語／イギリス英語並びにその他の Inner Circle の英語を学習者の習得目標とすることに異議を唱える研究者や教育者が増加してきている．例えばCanagarajah (2007)は，「Inner Circle の英語を学習者の習得目標とするのではなく，世界で話されている様々な英語と英語使用者の多様性に適応できる能力を養う教育をする必要がある」と主張している．では Inner Circle の英語以外で日本人がグローバル人材となるために習得するべき英語の選択肢としてはどのようなものがあるのだろうか．

まず単純に候補として挙げられるのは Outer/Expanding Circle の英語であるが，ある特定の地域の英語を選択した場合，その英語にステータスが与えられ，他の英語は劣ったものという見方が人々に新たに生まれてくる可能性がある．現にこのような態度は日本の社会において確認できる．日本人の多くは英語圏の中流階級に属する白人が使用する英語をモデルとみなす英語母語話者中心主義を持っているが(Kubota，1998)，これは言い換えると日本人が Inner Circle の英語を習得目標と認識しステータスを持ったものとして受け取り，その一方で他の英語には無関心な態度を取っていることを示している．そして自分たちの使う英語に対しても自信を持つことが出来ず，更に Inner Circle の英語と比較して劣ったものと見る英語学習者も存在する (藤原，2013)．よって，日本人にとっては特定の国や地域に属さない英語を習得目標と設定することが適していると言え，その候補としてグローバルな視点から生まれてきた変種である English as a lingua franca (ELF) と English as an international language (EIL) が挙げられる．

English as a lingua franca (ELF)は，基本的に非英語母語話者同士の会話で使用される英語変種を指すが，最近では英語母語話者と非英語母語話者との会話で使用される英語も ELF と見る場合もある (Ur，2010)．ELF は，元々英語学習者

の習得目標となるように考えられたものではなく（Jenkins, 2006），英語を既に習得している話し手が使用するそれぞれの母語からの影響がある多様な形態をもった変種と理解されている（Canagarajah, 2007; Meierkord, 2004).

English as an international language（EIL）は国際社会で使用されている特定の国や文化とは関連のないニュートラルな英語であるため，どの国の英語としても機能することができるもので，ELF と同様に非英語母語話者が使用する英語と理解されており（McKay, 2018），EIL を ELF と同じものとして扱う研究者(例えば，Kirkpatrick や Rubby & Saraceni 等)もいる（Maley, 2010）．EIL は英語学習者の習得目標となる英語と位置付けられており，EIL 習得のための授業では他国の文化を学んで「自分と異なること」に敬意を払い，同時に自分たちの文化に対する理解を深めることも目標としている（McKay, 2018）.

上記のことから，グローバル人材として国際社会で活躍したいと考える日本人が習得目標とするべき英語は EIL が適していると言える．しかしながら，EIL は「国際社会で使用される言語」という概念であり，現時点では言語学的な特徴（文法，音声，語彙等）を持っていない実態のないものであることから，英語教師は EIL の考え方に理解は示すがこれを習得目標とはせず，むしろ目標となる言語形態が明確なアメリカ英語／イギリス英語を英語学習者の習得目標としている場合が多い（Dogancay-Aktuna & Hardman, 2018）.

3. 調査対象者と調査方法

本調査は，パイロット・スタディとして 2018 年に筆者が勤務する大学の 1 年生 39 名を対象にアンケートを実施した．調査被験者は全員 intermediate レベル（TOEFL ITP 440-480）のクラスに属している．アンケートの質問事項は下記の 4 つである.

(1) グローバル人材として英語を使って国際社会で活躍したいか.
(2) 日本人は多様な英語に対応できる能力を持つ必要があると思うか.
(3) アメリカ英語とイギリス英語以外でどのような英語を聞いたり読んだりしたことがあるか．それらを理解できたか.
(4) 英語の教科書に様々な英語の言語学的特徴（語彙，文法，発音）の説明を掲載するべきか.

質問(1)(2)(4)は「はい」「いいえ」で回答するもので，質問(3)は英語の変種名を挙げた後，理解できたかどうかを「はい」「いいえ」で回答するものとなっている．被験者はオンライン上のアンケートに日本語で回答し，彼らの回答は全て自動的にオンライン上に集計された.

4. 調査結果

まず最初の質問である「グローバル人材として英語を使って国際社会で活躍したいか」に対しては，79%の被験者が「はい」と回答しており，「いいえ」と回答した 5%と「わからない」と回答した 16%よりも遥かに多くの被験者がグローバル人材を目指していることが示された.

次に「日本人は多様な英語に対応できる能力を持つ必要があると思うか」を尋ねたが，84%の調査被験者が「はい」と回答したのに対し，「いいえ」が 11%「わからない」が 5%という回答を得た．このことから，被験者は，国際社会で活躍するには多様な英語に対応できる能力が必要だと認識していることが分かる.

三つ目の質問は「アメリカ英語／イギリス英語以外の英語でどのような英語を聞いたり読んだりしたか」で，被験者にはその英語の変種名を挙げてもらった．下記の表はその結果である.

表1 アメリカ英語とイギリス英語以外で聞いたり読んだりした英語

Inner Circle varieties	オーストラリア，ニュージーランド，カナダ
Outer Circle varieties	インド，フィリピン，アフリカ，シンガポール
Expanding Circle varieties	アフリカ，韓国や中国を含むアジア，ヨーロッパ，中東

表１が示すように，被験者はInner Circleの英語のみならず，Outer/Expanding Circlesの英語を挙げていることから，彼らは実際にアメリカ英語／イギリス英語以外の英語に遭遇しており，これらの英語の存在を認識していることが分

かる.被験者は,日本の学校教育でアメリカ英語／イギリス英語の教科書を使用して英語を6年以上学んできているが,これ以外の英語に出会う機会としては,最近では教科書でも多様な英語を扱っているが,教科書以外からのケースもあり,その出会いの例としてAssistant Language Teacher (ALT) の存在が挙げられる. Japan Exchange and Teaching Programme(2019) のデータによると,大多数のALTはInner Circle国の出身であるが,Outer Circleの英語を話す国から採用されたALTもいることが示されている.また被験者はExpanding Circleの英語も挙げていることから,彼らは教科書やALT以外からも英語に触れており,地域や個人レベルでの国際交流や報道・広告・テレビ番組・映画・音楽等により様々な英語に遭遇していると考えられる.

またアメリカ英語／イギリス英語以外の変種を聞いたり読んだりした時にそれらを理解できたかどうかを尋ねたが,41%の被験者がアメリカ英語／イギリス英語以外の英語を理解できなかったと回答し,「理解できた」と回答した32%と「覚えていない」と回答した27%の被験者よりもわずかならが多いことが分かった.

最後に「英語の教科書に様々な英語の言語学的特徴（語彙, 文法, 発音）の説明を掲載するべきかどうか」を尋ねた.被験者の82%は多様な英語の特徴をEFL教科書に掲載するべきだと考えており,この割合は「いいえ」の10%と「わからない」の8%と回答した被験者よりも極めて多く,大多数の被験者が教科書にアメリカ英語／イギリス英語以外の英語の言語学的特徴を紹介するべきだと考えていることが分かった. この結果は,被験者が様々な英語を教科書で学びたいと考えていることを示していると言える.

5. 考察

本調査の結果から,被験者の多くは英語を使って国際社会で活躍したいと考えており,英語の多様性に対応できる能力を持っている必要があると認識していることも明らかになった. また,被験者は自分たちが学校で学んできた英語とは異なる英語に実際に遭遇し,その英語を理解できなかった経験をしているが,この経験が被験者に国際社会で活躍していくにはアメリカ英語／イギリス英語以外の英語を理解できる能力が必要であることを認識させ,学校教育で使用されていない英語も教科書で学びたいと思うようになり,多様な英語を教科書に掲載するべきだと考えさせたと推察できる. これらを踏まえて,習得目標となる英語をここで考察していく.

現在,日本のEFL教科書はアメリカ英語／イギリス英語で書かれている. これは習得目標もこれらの英語であることを示しているが,一般的に言って日本人は英語母語話者中心主義を持っているため,Inner Circleの英語を習得目標とした場合,英語と英語話者の多様性に敬意を払わなくなり,またInner Circle以外の文化や人々を尊重するという考えも持ちにくくなってしまうが,このような態度は多様な背景を持った英語話者とコミュニケーションを図っていくには不都合なものとなる. 国際社会で多様な英語話者とうまくコミュニケーションを図っていくには,彼らの使う英語と彼らの文化に敬意を払うことが重要で,自分たちとは異なることを認識しそれを尊重する必要がある (McKay, 2018). よって,Inner Circleの英語を習得目標とするのは,日本人をグローバル人材とするには不適切ということになる. そこで本稿では,基本的にはMcKay (2002) が示しているような国際社会で通用するどこの国の文化にも属さないニュートラルなEILを習得目標として提案するが,この英語は架空のもので,現実には存在していないため,実際に日本人大学生の習得目標となるものを考えていく.

Hino (2012) は英語に精通している日本人の英語教員が使用している英語を習得目標として提案している. またHonna & Takeshita (2014) は,日本の教育機関において今までと同様にアメリカ英語／イギリス英語を使って日本人を教育していくが,アメリカ人やイギリス人が使う英語ではなく,日本人独自の発音や表現を持ったアメリカ英語／イギリス英語とは異なる特徴をもった英語が使えることを習得目標としている. そこで本稿では上記の考え方に倣って「国際社会で実際に活躍している英語に堪能な日本人が使っている英語」,言い換えると「日本人であることが分かる特徴を持った国際社会で通用している英語」を習得目標として提案する. これは,アメリカ英語／イギリス英語による教育を受けた日本人が使う日本語からの影響が見られるEILであって,英語母語話者の英語とは異なるものである.

グローバル人材を目指す日本人学生に本稿が提案している英語を身につけもらうため,教育機関では英語の言語学的特徴を習得するための手段としてアメリカ英語／イギリス英語を使って教育していく. そしてそこで重要となる点は,学生に英語母語話者中心主義を持たせないよう注意深く教えていくことである. 英語母語話者中心主義の考え方は人々に非英語母語話者の英語は正当ではないという考えを持たせる要因の一つとなっており,非英語母語話者の英語に対する差別や非英語母語話者である自分たちが使う英語への劣等感を生み出すことにもつながっている.

Yamada (2010) は1981年から2010年までに使用された中学生用英語教科書の内容調査を実施し,そこで1990年代以降はアジアやヨーロッパに関連する内容も取り上げられるようになったが,一貫してアメリカに関する内容が教科書に多

く使用されていることを示した．従って，グローバル人材育成のための英語教育ではアメリカ英語／イギリス英語を使って学生を教育していくが，これらの文化に重点を置く教育を実施するのではなく，Outer/Expanding Circle の内容の割合を増やし，英語母語話者中心主義を学生の心に植え付けないようにしていくことが必要となる．また多様な英語の特徴を教科書に載せて，英語の多様性に対する学習者の知識と認識を高めることも重要である．これはCanagarajah (2007)が主張している「英語圏の英語を学習者の習得ターゲットとするのではなく，世界で話されている様々な英語と英語使用者の多様性に適応できる能力を養う教育をする」という考え方にも合致していることから，このような教育が日本では必要となっているのではないだろうか．

参考文献

Canagarajah, S. (2007). Lingua franca English, multilingual communities, and language acquisition. *The Modern Language Journal, 91*(Focus Issue), 923-939.

Dogancay-Aktuna, S., & Hardman, J. (2018). Teaching of English as an international language in various contexts: Nothing is as practical as good theory. *RELC Journal, 49*(1), 74-87.

藤原愛 (2013). 日本人英語学習者の発音習得に対するビリーフ 育英短期大学研究紀要, **30**, 37-46

Hino, N. (2012). Negotiating indigenous values with Anglo-American cultures in ELT in Japan: A case of EIL philosophy in the Expanding Circle. In A. Kirkpatrick & R. Sussex (Eds.), *English as an international language in Asia: Implications for language education*, (pp.157-173). Springer.

Honna, N., & Takeshima, Y. (2014). English as an international language and three challenging issues in English language teaching in Japan. In R. Marlina & R.A. Giri (Eds.), *The pedagogy of English as an international language: Perspectives from scholars, teachers, and students* (pp.65-7). Springer.

Japan Exchange and Teaching Programme (JET) (2019). JET プログラム参加者数. 2019年8月16日 http://jetprogramme.org/ja/countries/

Jenkins, J. (2006). Current perspectives on teaching World Englishes and English as a lingua franca. *TESOL Quarterly, 40*(1), 157-181.

Kachru, B.B. (1985). Standards, codification, and sociolinguistic realm: The English language in the outer circle. In R. Quirk & H. Widdowson (Eds.), *English in the world* (pp.11-30). Cambridge, England: Cambridge University Press.

Kubota, R. (1998). Ideologies of English in Japan. *World Englishes, 17*(3). 295-306.

久保田竜子 (2018). 英語教育幻想 ちくま書房

Maley, A. (2010). The reality of EIL and the myth of ELF. In C. Gagliardi & A. Maley (Eds.), *EIL, ELF, Global English: Teaching and Learning Issues* (pp.25-44). Bern, Switzerland: Peter Lang.

McKay, S.L. (2002). *Teaching English as an international language: Rethinking goals and approaches*. Oxford, UK: Oxford University Press.

McKay, S.L. (2018). English as an international language: What it is and what it means for pedagogy. *RELC Journal, 49*(1), 9-23.

Meierkord. C. (2004). Syntactic variation in interactions across international Englishes. *English World-Wide, 25*, 109-132.

Pedrazzini, L., & Nava, A. (2010). The ELF of English language teachers. In C. Gagliardi & A. Maley (Eds.), *EIL, ELF, Global English: Teaching and Learning Issues* (pp.283-300). Bern, Switzerland: Peter Lang.

末延岑生 (2010)『二ホン英語は世界で通じる』東京，平凡社

Ur. P. (2010). English as a lingua franca: A teacher's perspective. *Cadernos de Letras*, 27, 85-92. Retrieved from http://www.letras.ufrj.br/anglo_germanicas/cadernos/numeros/122010/textos/cl301220100penny.pdf

Yamada, M. (2010). English as a multicultural language: Implications from a study of Japan's junior high schools' English language textbooks. *Journal of Multilingual and Multicultural Development, 31*(5), 491-506.

コードスイッチングとアイデンティティの揺れ

―在日中国人留学生を対象にした一考察―

胡　顕傑（南山大学大学院生）
森泉　哲（南山大学）

1. はじめに

第二言語の習得過程を通して，新たな言語環境との相互作用により，個人のアイデンティティは変容していくと指摘されている（堀場, 2013）. アイデンティティ変容の言語的表現として，コードスイッチング（以下，CS）が挙げられる. また，留学という文化間の移動もアイデンティティを再構築していくきっかけになるという（Block, 2007）. そのため, 異文化にいる留学生が言語環境の変化に伴い, 様々なアイデンティティを保持しており，文脈・状況・他者との関係性によって異なるアイデンティティが顕在化され，その間を揺れ動く可能性があると言われている（Collier, 2009）. よって，本研究では，日本に留学している中国人学生を対象として，アイデンティティの変容や揺れがどのように言語的に顕在化されているのかについて，CS を例にとり，その一端を明らかにすることを目的とする.

これまでの研究では，話者の多言語使用を話し手の言語に対するマルチ能力の表現として認識され, 会話の場面や相手との関係など社会的，文化的な側面から CS の機能分類を研究するものが多く見られるという（Andry, 2012）. 例えば，会話内 CS の機能分類に着目した代表として，Gumperz（1982）は談話分析の手法で CS の機能を，引用，聞き手の特定，挿入，繰り返し，メッセージの限定と個人的・客観的情報の区別の６分類に分けている（田崎, 2006）.

また, 日本に居住する中国朝鮮族話者の朝鮮語から日本語または中国語への CS を考察した権（2016）は量的と質的分析の両面から CS の機能を命題的機能，補償的機能，語用論的機能，社会的機能と談話調整機能の５種類に区別している. とりわけ，話者の言語習慣として日常に使用される言語表現は社会的機能として，話者のアイデンティティや社会的帰属意識の表出であると報告された.

このように，CS の機能に関する研究は散見されるものの，中国語・日本語バイリンガルの CS を中心に研究したものがほとんど見られない. また，上記の分類は包括的な分類であると考えられるが，一方，それぞれの下位カテゴリーの詳細な機能についてはあまり分析されていない. そこで，本研究では現有の先行研究の知見を参照した上で，日本で生活している中国人留学生を対象に，自然会話中に起こった話者のアイデンティティの表出と強い関連のある CS の社会的機能を分析対象として絞って，それらの関連性について明らかにする.

2. 調査概要

調査対象者と調査の手続きは以下のとおりである. 愛知県の大学に在籍している 14 名の中国人留学

生を対象に，異文化適応に関する内容を中心に，１時間程度の半構造化面接による個別インタビュー調査を行った. インタビュー調査の過程に使用する言語について，中国語と日本語のどちらでも構わないと対象者に教示されたが，全ての調査対象者は中国語を選択した. そこで，中国語で語られた会話の中で，日本語が使用された箇所を CS の生起と判断し，日本語がどのような文脈で発話されたのか，またそこから見られるアイデンティティの変容や揺れ動きを，筆者の解釈を踏まえて分析した.

インタビュー調査を実施した時点で，本研究の調査対象者全員が日本語能力検定試験１級を取得済であることを口頭で確認しており，また日本への留学期間も１～６年と多少のばらつきはあるものの，調査対象者の日本語能力は上級と見なすことができ，日中の文化経験も比較的豊かであると考えられる. また，調査を実施した際に，CS のことについて一切対象者に伝えていなかったため，インタビュー中に中国語から日本語に変換した箇所は全て自然会話の中に生じた CS と見なせる. そこで, アイデンティティの表出と関わる CS の社会的機能に絞って，中国人留学生の言語使用について分析を行った. なお，社会的機能以外の CS については，本研究の対象外とした一方で，社会的機能と他の機能の両義的な働きを持つ CS については，本研究の対象とした.

3. 分析結果

3.1 日中の文化差異への気づき：「有什么事情你不是先道歉，而是先*言い訳*的话，你会被别人认为不好.」

調査対象者の CS において，最も多いパターンは一つの文の中で，ある特定の言葉のみを中国語から日本語に切り替えて発言したものである.

R：「有什么事情你不是先道歉，而是先*言い訳*的话，你会被别人认为不好.」
（何かがあった時，先に謝らずに言い訳を言っていたら，ダメな人だと見なされる.）

Y：「我觉得*お疲れ様*这么一个非常有*重さ*的词语被平凡地像一个*あいさつ*一样使用，会觉得很不适应.」
（お疲れ様という非常に重さのある言葉は普通のあいさつのように使われているのに適応できない.）

H：「当时就觉得大家都很*優しい*，都会来帮助你.」
（その時はみんな助けてくれて，日本人優しいなあと思った.）

以上のように，前後とも中国語である文脈の中で，対象者が「言い訳」，「お疲れ様」，「重さ」，「あいさつ」，「優しい」などの和語のみを日本語で語った. この現象を CS の社会的機能と関連付けて考慮すれば，対象者が和語を自然に使用することは，自分の言語習慣を表し，日本で生活している自分の社会的アイデンティティを示す側面が読み取れよう. しかも，このパターンの CS の多数は対象者が日本人に対するイメージや態度について言及した際に生じたため，対象者は CS を通して自分が感じた日中の文化差異の特徴を描く一方，日本社会で生活している自分の社会的アイデンティティも強調しているといえるであろう.

例えば，日本人は何事にも先に謝ることに対して，中国人は言い訳を先に探すと言った R が「先に言い訳を言っていたら，ダメな人だと見なされる」と語ったように，R にとって，「言い訳」は日本社会の規範に合わない行動だと思われるため，日本で生活している一員として，言い訳を探すという中国的な行動を抑えるべきであることを CS によって強調する. また，Y と H の語りにも見られるように，中国人にとって重さのある言葉を普通に使用している日本人の言語習慣も，予想より優しくしてくれた日本人の助け合いも，対象者が日本社会で生活してから実感した日本人の特徴である.

3.2 日中２言語併用者としてのアイデンティティの顕現：「因为我们不认识路，所以电车地图查不了就很*大变*.」

上記のような中国語から日本語に切り替える CS のパターンの他，日本語の漢字を中国の読み方で表現する現象も確認された.

P：「因为我们不认识路，所以电车地图查不了就很*大变*.」
（道がわからないから，電車や地図を調べられないのは大変なことだ.）

L：「塑料袋*有料*了以后，我说你应该花钱去买更结实更大的塑料袋.」
（レジ袋が有料化になってから，もっと固い，もっと大きな袋を買うべきだと思った.）

C：「他说如果你一次都没有去过的话，他就会算你*欠席*，你要跟老师去*相談*一下.」
（もし一回行ったこともなければ，欠席者と見なされるので，先生に相談する必要があると言われた.）

「大变」，「有料」，「欠席」，「相談」はいずれも中国語にない日本語の漢字言葉であるが，対象者がそれぞれの漢字が対照する中国語読みで発音して対話を続けた. 自然会話の中で生じた言語現象であるため，3. 1 と同様に対象者の日常的な言語習慣と捉えられ，日本で生活している自分の社会的アイデンティティの現れと解釈できる. しかし一方で，このような使い方は中国語・日本語のバイリンガルでしか理解できないものでもあるため，日本語がわかる中国語母語話者の集団語として捉えることもできよう. 換言すれば，対象者が CS を通して，日本語と中国語のバイリンガルである中国人留学生同士という集団的意識を聞き手である筆者と共有し，「日本語がわかる中国人」という日中２言語併用者としての集団的アイデンティティを強調していると考えられるであろう.

3. 3 中国人としてのアイデンティティの表出：「前面的一个日本人就说：*中国人うるさいね*」

単語レベルの他，文単位の CS も多く見られた.

B：「前面有一个孩子在哭闹，他的父亲在斥责他，但他说的不是中文，然而前面的一个日本人就说: *中国人うるさいね*.我当时真是很气.」
（私の前に歩いていたお父さんが泣いていた子供を叱っていたが，中国語を話したわけでもないし，前の日本人が「中国人うるさいね」と言ってしまった. それを聞いて，本当に怒ったよ.）

Z：「老师一进来就跟我说“*すみませんでした*”，还说了好几回”*ありがとうございました*“.我就觉得很没有必要.」
（先生が入ってきたら「すみませんでした」と言ってくれて，「ありがとうございました」も何度言ってくれたけど，それほど言う必要はないなあと思った.）

例のように，B も Z も第三者の話を引用した際に，文単位で言語を切り替えた. これは第三者が語った日本語をそのまま引用した方が，より当時の状況を聞き手に再現できると判断して使用した CS の引用的機能の一つと考えられる. 加えて，引用した箇所に続いて語った対象者の評価が示されたことにより，引用した内容もしくは第三者との距離を保つ対象者の態度を示している側面もあると読み取れよう. 証拠なしに中国人の悪口を言っていたような発言に対して，不満を感じた B が CS を通して不満な感情を表しながら，自分の中国人としての民族的アイデンティティを高揚する姿が読み取れる. 類似的に，お礼の言葉を繰り返して言う必要がないと思っていた Z は CS を通して不理解を表示しながら，自分がそれほど言わない人であるという距離感を強調しているといえるであろう.

3. 4 過去や未来のアイデンティティの表出：「留学以前就是一个*わがまま*的*一人っ子*. 」

最後に，上記のような文化的・集団的アイデンティティとは異なる機能をもつ CS も確認された.

O：「留学以前什么都不懂，就是一个*わがまま*的*一人っ子*.」

（留学する前には何もわかっていないわがままな一人っ子だった.）

E：「我是想成为一个在国际世界上，就是*国際的に活躍できる人*这个方向的.」

（国際世界の方向に，いわゆる国際的に活躍できる人になりたい.）

例に挙げたように，O が留学前の自己について言及した際に，「わがまま的一人っ子」と語っており，E が未来の自己像を展望した際に，「国際的に活躍できる人」と話した. このような CS はこれまで述べてきた社会的機能の解釈に該当できず，上記のアイデンティティの現れと捉えることもできない. それゆえ，本研究の新たな知見として，自分の過去を振り返したり，将来を想像したりする際に生じた CS は，話者が時間的境界や参照点を作り出し，異なるタイムラインにある自己を区別するための機能として働くと考えられる. つまり，バイリンガルが CS を介して，自己認識の違いを過去から未来という時間軸上で示しており，言語の切り替えに伴い，それぞれの自己が現れるアイデンティティの間を揺れ動いていると考えられよう.

4. まとめと課題

本研究では，在日中国人留学生を対象に，中国語・日本語のバイリンガルが自然会話中に生じたコードスイッチングと話者のアイデンティティとの関係を，CS のパターンごとに分析した. その結果，文脈や状況などに応じて話者が日本で生活している人としてのアイデンティティ，中国人としての民族的アイデンティティ，日中２言語併用者としての集団的アイデンティティなど多様なアイデンティティの間を行きつ戻りつしながら，それぞれの態度や感情も示していることが明らかになった. しかし，CS の社会的機能では適切に解釈できなかった現象も確認されたため，今後さらに他の機能との関連性などにより詳細な研究を進める必要がある.

参考文献

Andry Sophocleous (2012). Switching code and changing social identities in face-to-face interaction. *Sociolinguistic Studies, 5,* 201-233.

Block, D. (2007). Second language identities. NY: Continuum

Collier, M. J. (2009). Negotiating intercommunity and community group identity positions: Summary discourses from two Northern Ireland intercommunity groups. *Negotiation and Conflict Management Research, 2*,285-306.

Gumperz, J. J. (1982). Conversational code switching, In J. Gumperz (Ed.), Discourse strategies. Cambridge: Cambridge University Press. （井上逸兵・出原健一・花崎美紀・荒木瑞夫・多々良直弘訳（2004）. 認知と相互行為の社会言語学　ディスコース・ストラテジー　松柏社）

堀場裕紀江（2013）. 第二言語とアイデンティティ : 言語文化教育学の観点から　言語科学研究 : 神田外語大学大学院紀要, 19,37-56.

権 成花（2016）. 日本に居住する中国朝鮮族の言語使用 ―内的場面におけるコード・スイッチングの使用を中心に―　千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書 307, 相互行為における接触場面の構築 接触場面の言語管理研究,13,73-94.

田崎敦子（2006）. コードスイッチング研究の概観－多言語社会のコミュニケーション分析に向けて－ 言語文化と日本語教育,2006 年 11 月増刊特集号, 54-84.

日本語学習者の語り文における習得階層

―表現形式に注目して―

横浜国立大学大学院生　代弟

1. はじめに

日常生活の中で、外国人、いわゆる日本語学習者の発話を聞くと表現の仕方が何となく違和感を与えることが感じる。筆者自分自身も発話した後に良く振り替えてみると日本人母語者と違う表現していることがよくある。例えば：以下の例からわかると思う。

A さん：昨日隣の部屋の赤ちゃんに泣かれて、寝られなかった。（母語話者）

B さん：昨日隣の部屋の赤ちゃんが泣いて、 寝られなかった。（学習者）

C さん：箱を開けたら、犬が出てきました。（母語話者）

D さん：箱を開けて、.... 急に犬が出てきました。（学習者）

このように日本語学習者の語り文に日本語学習者の語り文と違うところが良く見られる。日本語学習者の語り文は意味として伝わるがが、日本語母語話者のように適切な表現の使用ができていない印象を与える。

そこで、本研究では、日本語母語話者の語りと日本語学習者の語り文の接続表現と評価表現の使用の違い明らかにしたうえで、日本語学習者の語り文の表現形式の習得階層を明らかにしたい。

本研究を似て、日本語学習者の語り文における構造と表現形式の習得階層を明確にして、今後の教育で日本語学習者が意識していないことを教師の方から意識させることで、教授に役に立つと考えられる。さらに、習得階層を持ち、易しいものから教えると効果があるのではないと考えられる。

2. 先行研究

語り（ナラティブ）とは「体験談を含めた話で、一連の出来事を時間の流れに沿って、より遠い過去の出来事から現在により近い過去の出来事へと語る行為」と定義されている（南 2018)。語りにおける論理展開のまとまり、すなわち「一貫性」と、節や文の相互関係、話の連鎖的構造における場面同士の「結束性」は、語り手・書き手が聞き手・読み手に話の内容を適切かつ効果的に明示するために重要な役割を果たしている（南 2018)。

小口（2018)、砂川（2017）は日本語母語話者と学習者の評価表現また順接接続詞の違い

を明らかにした。

これらの研究では日本語母語話者と学習者の語り文における評価表現また接続表現の違いを明らかにしたが、学習者の習得階層をまだ明らかにしていない。以上を踏まえて、本研究で学習者と日本語母語話者の語り文の評価表現と接続表現の違いを明らかにして、学習者の語り文の評価表現と接続表現の習得階層を明確にすることを目的にする。

3. 調査方法

3.1 対象と手順

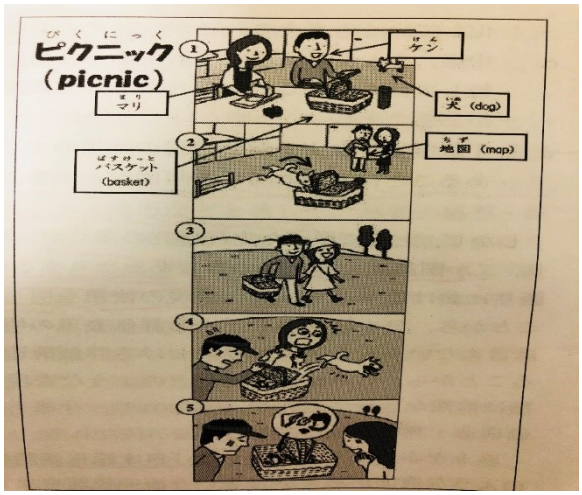


図1『ピックニック」のイラスト（迫田他　２０１６）

中国語とモンゴル語を母語とする日本語学習者 30 名（SPOT を実施して初・中・上級各 10 名に分けた）と日本語母語話者 5 名を対象に 5 コマ漫画を見せて、それぞれ日本語で話してもらい、録音した。

まず、協力者に「この漫画を見ながら、漫画を見ていない人に漫画の内容を伝えてください」という課題を与えた。下にタイトル「ピックニック」と第一段「朝、ケンとマリサンドイッチを作りました」と書いてある 5 コマの漫画を見せて、2−3 分の考える時間を与えた。次に、協力者が漫画を見ながら筆者に漫画の内容を伝える。それを録音した。最後に、録音した音声を文字化して分析した。

3.2 分析方法

表 1　日本語母語話者の語り文の分析例

朝、ケンとマリはサンドイッチを作りました。
サンドイッチを作っている様子を遠くから犬が見ていました。
そして、二人はピックニックに行くために地図へ場所を、確認をしていました。
二人は地図を見ている時に犬がサンドイッチを入れたバスケットの中に潜り込んでしまいました。　場面 1
二人はそれに気付かず、ケンがバスケットを持って二人でピックニックに行きました。
そして、二人が昼ご飯を食べようと思った時に、思って、バスケットを開けたときに何と犬がそこから出てきて、ケンとマリはとてもびっくりしました。　場面 2

そして、バスケットの中を見て見ると二人が作ったサンドイッチは犬に食べられており、食べられてしまっていました。 場面 3

録音したデータを文字化して、表 1 のような三つの場面を設定して、評価表現と接続表現を抽出して、日本語母語話者と学習者のデータをそれぞれに分析した。

4. 結果と考察

表 2　日本語母語話者の語りの使用表現（接続表現／評価表現）

	場面1	場面2	場面3
J1	～時に／ ～てしまいました	～ようと思った時／ ～た	Vると（見ると）／ ～られてしまっていました
J2	～時に／ ～てしまいました	～ようとしたら／ ～た	Vると（確認すると）／ ～られてしまいました
J3	～ところ／ ～ていました	～たら／ ～た	Vると（見ると）／ ～られちゃっていました
J4	～うちに／ ～てしまいました	～すると／ ～た	Vると（見ると）／ ～られてしまいました
J5	～間に／ ～てしまいました	（なし） ～Vし＋驚きました	Vると（見ると）／ ～られていて．．．．

日本語母語話者の語りに関して、A. 評価表現の観点から場面 1 では J3 以外に全員が「～てしまいました」を用い、場面 3 では全員が「～られてしまいました／しまっていました」を用いている。母語話者が「てしまう」「受身」を用い、話者の気持ち・感情を表していることがわかる。B. 接続表現に関して、場面 2、場面 3 ではほぼ全員が「ようとしたら」「たら」「すると」などの接続表現を用い、話者の意外性や大きな出来事が起る前兆を表している。

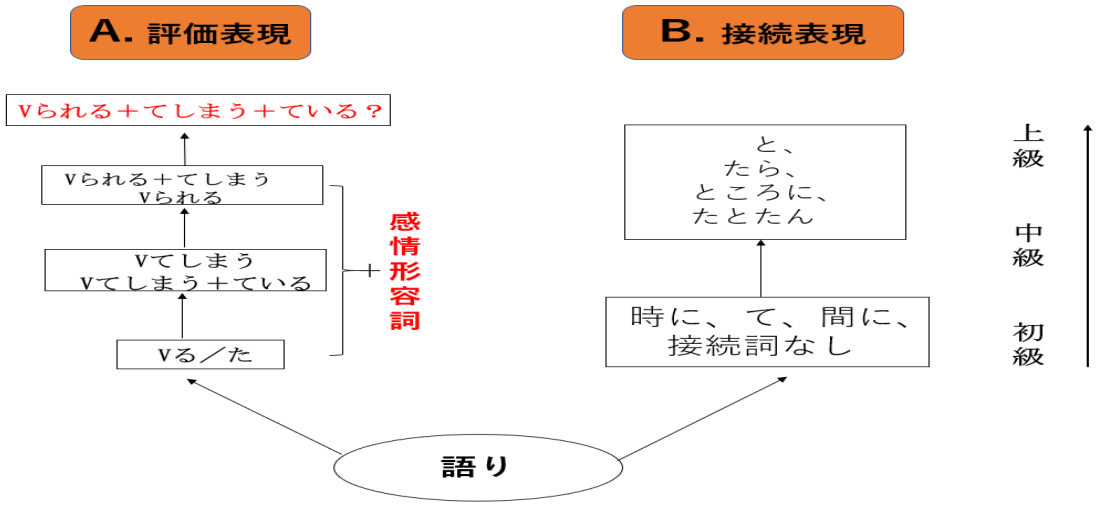


図 2　日本語学習者の語りにおける評価表現と接続表現の習得階層

日本語学習者の語りに関して、A.学習者の評価表現の習得階層は、レベルが上がることにつれて「V る／た」から「V てしまう／てしまっている」また「V られてしまう／られる」を使えるようになるが、これらの表現を用いた上で半分以上の学習者が「＋感情形容詞」を用い、「＋感情形容詞」が上級までに続いていることが分かった。ここから学習者のレベルに関わらず「V てしまう」のような表現はすでに話者の意図や気持ちいわゆる評価が含まれていることを意識していないことがわかった。最後に「Ｖられる＋てしまう＋ている」を使えるようになることが予測される。B.接続表現の観点から学習者が初級の段階に接続詞の使用が少ない、80%の学習者が使用しても「時に、て、間に」を使用している。これらの接続詞を用いて、出来事を並列している印象を受け、出来事の意外性や話者の気持ちを表すと言い難いである。中級段階から上級に入ると、60%以上の学習者が「と、たら、ところに、たとたん」という表現を用いて、出来事の意外性、前兆を表すことがわかった。

5.まとめ

日本語学習者と母語話者の語り文の表現形式の違いを明らかにした。更に、習得階層を明確にして、学習者のレベルによって習得される項目があるがレベルが上がっても認識していない項目もある事がわかった。今後の教育で日本語学習者が意識していないことを教師の方から意識させることで、教授に役に立つと考えられる。さらに、習得階層を持ち、易しいものから教えると効果があるのではないと考えられる。

参考文献

奥野由紀子（2017）.日本語学習者に共通して見られる現象と母語による違い―I-JAS におけるストーリー描写課題の分析より―　日本語教育連絡会議論文集，30，67-75.

小口悠紀子（2018）.日本語学習者の物語発話に現れる評価表現　第四回学習者コーパス・ワークショップ&シンポジウム第二言語習得における語彙の役割予稿集，20-29.

迫田久美子・小西円・佐々木藍子・須賀和香子・細井陽子（2016）.多言語母語の日本語学習者横断コーパス　国語研プロジェクトレビュー，112，1-31.

砂川由里子（2017）.ストーリーテリングにおける順接表現の談話展開機能　庵功雄・石黒圭・丸山岳彦（編）時間の流れと文章の組み立て　ひつじ書房 pp.183-215.

南雅彦（2018）.日本語学習者の「語り」から見てくる習熟度―語彙・時制・視点　第四回学習者コーパス・ワークショップ&シンポジウム第二言　語習得における語彙の役割予稿集，10-19.

引用形式「と」の性質から見た繰り返し表現の機能

―繰り返し表現による「感情的機能」を中心に―

カンジャマーポンクン　サティダー　大阪大学大学院

1. 研究目的

本研究では、「繰り返し表現＋引用形式「と」および「って」[1]」という表現形式を対象として、会話における繰り返し表現そのものの機能を再考察し、繰り返し表現に後続する「と」「って」の機能について明らかにしていく。また、「と」「って」の有無によって繰り返し表現および発話の意図がどのように影響を及ぼすかについて探っていくことを目的とする。

2. 研究背景と問題の所在

繰り返し表現とは書き言葉においても話し言葉においても、ある文脈に既に現れた語や文などを何度か再現することである（中田 1992)。また、繰り返し表現は我々の日常会話では下の（1）の「結婚」のように発話者が相手の発話をオウム返しすることで先行発話をそのまま繰り返すという形で出現するのが、繰り返し表現の中での一般的な表現形式である。

（1）（藤本はまだ若いにもかかわらず、急に結婚することにしたと言い出した。）

藤本「お久しぶりです。・・・実は私結婚することになったんです。」

ミチコ「**結婚**！？ なんで？ ふじもっちゃんまだ若いのに。」[2]　　（ダメな私に恋してください 第 1 話）

一方、実際の会話では繰り返し表現のみという形にとどまらず、下記の（2）と（3）のように発話者は先行発話のみ繰り返すのではなく、引用形式「と」「って」が繰り返しの部分に後続するという形で出現するものも少なくない。しかし、繰り返し表現と引用形式「と」「って」については従来から多く研究されてきたのにもかかわらず、「繰り返し表現＋引用形式「と」「って」」という繰り返し表現と「と」「って」の複合形についての研究は管見の限り見当たらない。

（2）（半沢が出向されたにもかかわらず、まだ会議に参加している。）

浅野「半沢くん、なぜここにいるのかね？」

半沢「**なぜ**とは？」

浅野「君は他にやるべきことがあるんじゃないのかね？」

半沢「**やるべきこと**とは何でしょうか？」

---

[1] 引用形式「と」「って」は、「～とは？」「～というと？」「～ってなに？」「～ってどういう意味？」などという様々な形式で表現されることが非常に多く見られる。本研究では便宜上、それぞれの表現を全て「と」「って」という形で示す。

[2] 以降、「＿＿＿」の線は、発話者が繰り返した相手の先行発話を指す。「＿＿＿」の線は、発話者が相手の発話、つまり「＿＿＿」というところを繰り返した箇所を指す。加えて、繰り返した発話は直接繰り返しあるいは間接繰り返しである。また、「＿＿＿」の線は、発話者が繰り返した発話に主な関係性がある要素を指す。

浅野「荷物の整理ですよ。」　（半沢直樹 第5話）

（3）（滋はつくしの家について話している。）

滋「なんかこの部屋懐かしい感じするなあ。あっ、何でか分かった！

昔うちで飼ってたハトの巣に大きさも汚さも似てるからだ～」

つくし「ハトの巣って・・・」　（花より男子2（リターンズ）第4話）

従来の研究では引用形式「と」「って」の典型的機能は「引用の機能」であると述べており、上記の（2）と（3）の場合は典型的機能から派生したものであると述べている（池谷 2018、加藤 2010、鈴木 2007、藤田 2000）。藤田（2000）は、（2）のような「トハ」形式は一つの独立した複合辞となっていると述べている。また、藤田（2000）によれば、「トハ文」は「コトバをとり上げて、それを定義づけたり解説もの」と「そんなコトバを言われたということを承けて、それに対する判断・評価・所感・とがめ立てを述べるもの」という2タイプにあると説明している。また、（3）のような派生した機能は「終助詞機能」と呼ばれ、「強調」、「独り言」や発話者の「意外感」「不満」「驚き」などの感情を表明する機能を持つと主張している（池谷 2018、加藤 2010、鈴木 2007）。しかし、（3）の場合は以下の（3'）の「ハトの巣・・・」のように引用形式「って」が付加されなくても、発話者の「驚き」「意外感」や「不満」などの感情は表明されていることが読み取れる。従って、発話者の感情は引用形式「って」によって生じるものではなく、むしろ「って」の前の要素、つまり繰り返し表現によって生じるのではないだろうか。

（3'）　**つくし**「ハトの巣・・・」　（筆者作例）

3. 考察と結論

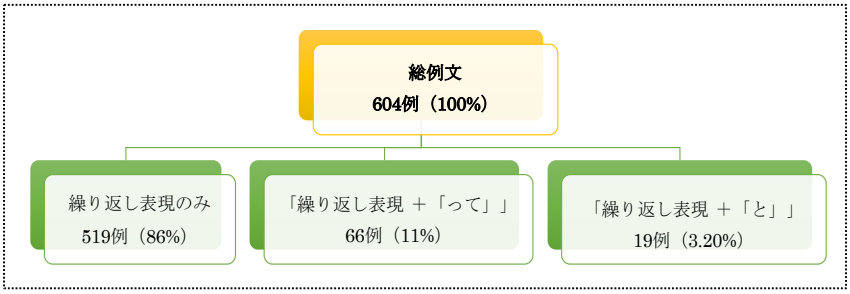
3.1 繰り返し表現の発話機能

日本のテレビドラマとテレビアニメという実際の会話例合計604例を資料として繰り返し表現の機能を再考察したその結果、繰り返し表現の機能は「時間稼ぎ」「相手の発話の促進」「説明要求／確認要求」と「感情の表出」という機能が見られた。繰り返し表現における「時間稼ぎ」は発話者が質問された際に用いられており、相手に何らかの情報を要求されすぐに返事することができなかったため、相手の質問の主な部分を繰り返しながら、自分に考える時間を与えるのである。繰り返し表現における「相手の発話の促進」とは相手が発話している途中、急に話が止まり話が進まない状態になった時に、発話者が相手の話が止まった時の最後の語や句を繰り返し、相手の話の進行を促すことである。また、繰り返し表現における「説明要求／確認要求」とは発話者が相手の言っている語や句の意味または内容について把握できなかったため、相手の発話を繰り返しそれぞれの語や句に対する説明や確認を求めるということである。一方、繰り返し表現における「感情の表出」は前述した「時間稼ぎ」「相手の発話の促進」「説明要求／確認要求」と異なり、相手から何らかの情報を要求するおよび相手に情報の説明を与えるのではなく、むしろ発話者は相手の発話に対してある種の「感情」を表出するのである。また、本調査から「感情の表出」としての繰り返し表現は総例文604例の中に501例（83%）見られた。それに対して、「時間稼ぎ」「相手の発話の促進」「説明要求／確認要求」としての繰り返し表現は総例文604例の中に103例（17.1%）見られ、98例は「説明要求／確認要求」の例であり、「時間稼ぎ」「相手の発話の促進」と比べると、最も多く用いられたことが観察された。このように、繰り返し表現の機能

は「感情の表出」を通常の「時間稼ぎ」「相手の発話の促進」「説明要求／確認要求」と比較すると、「感情の表出」の方が多く用いられていることがわかった。

3.2 繰り返し表現に後続する引用形式「と」「って」の出現率

本研究で日本のテレビドラマとアニメを資料として収集したデータ用例合計 604 例を考察した結果、以下の図（1）が示すとおり、繰り返し表現のみという形式は 519 例（86%）見られ、全体の大部分を占めていることがわかった。それに対して、本研究の対象である「繰り返し表現＋引用形式「って」」という形式は全体の用例の中で 66 例文（11%）が見られ、「繰り返し表現＋引用形式「と」」という形式は 19 例（3.20%）が見られたが、繰り返し表現のみという形式と比較すると、圧倒的に少ないと言える。



図（1）　繰り返し表現と引用形式「って」の出現率

3.3 繰り返し表現に後続する引用形式「と」「って」の機能と繰り返し表現との関係性

本調査からの用例のほとんどは、以下の（4）と（5）のように発話者は「繰り返し表現＋引用形式「と」「って」」という表現形式で相手から何らかの情報を求めているということが観察された。しかし、この場合は（4'）と（5'）のように引用形式「と」「って」が付加されていない、「最高のエンディング？」「助かる？」という繰り返し表現だけでも「説明要求／確認要求」が伝達されていることは明らかである。つまり、「バラの花束」と「通ってる銭湯がたまに平日休むんです」という相手からの情報提供や説明からわかるように、（4）と（5）の繰り返し表現は通常の「説明要求／確認要求」という機能を表していることが明らかである。

（4）（社員用のジムについて話している。）

堀「美咲さ～ん、すごいですよ。ここサウナにジェットバスまで付いてます。」

柴山「それは助かる。」

三浦「ん？ **助かる**って？」

柴山「通ってる銭湯がたまに平日休むんです。」　（世界一難しい恋　第 1 話）

↓

（4'）**三浦**「ん？ **助かる**？」　（筆者作例）

（5）（女性にサプライズをする方法について話している。）

和田「最後の最後まで何もないと思わせといて、最高のエンディングを用意するんだよ。」

鮫島「**最高のエンディング**とは？」

和田「バラの花束。」　（世界一難しい恋　第 4 話）

↓

（5’）**鮫島**「最高のエンディング？」　（筆者作例）

一方、次の（6）と（7）は一見すると、発話者が情報を求めているように見えるが、実際は上述した（4）と（5）とは異なり、発話者が相手の発話を繰り返した後に相手からの説明や確認が後続しない。要するに、発話者の意図は相手から「同窓会」「乱暴な高校生」という言葉の内容の説明または確認を要求することではなく、むしろ相手が言った「同窓会」「乱暴な高校生」に対する「不満」「苛立ち」などの否定的感情を表出することである。加えて、（6’）と（7’）のように「（だ）と」「って」が付加されなくても、明らかに発話者が繰り返した「同窓会」「乱暴な高校生」自体に既に相手に対する「不満」「苛立ち」が内在していると言える。

（6）（事務所の仕事がたくさんあるにもかかわらず、黛は同窓会に行くことにした。）

黛「高校の同窓会です。今日これから。」

古美門「同窓会だと？ 事務所の苦境をほったらかして、過去を美化してお互い慰め合うだけの何の発展性もない集会に出るというのか？」　（Legal High 2 第2話）

↓

（6’） **古美門**「同窓会？・・・（略）・・・」　（筆者作例）

（7）（高校生たちがアルバイト先の上司と喧嘩している。）

上司「なんて乱暴な高校生なんだ。」

高校生たち「乱暴な高校生って！？」　（クレヨンしんちゃん）

↓

（7’）**高校生たち**「乱暴な高校生！？」　（筆者作例）

以上の考察から、引用形式「と」「って」が後続されなくても、繰り返し表現のみでは（4’）と（5’）のような通常の「説明要求／確認要求」および（6’）と（7’）のような「感情の表出」の両方が伝達されることが明らかになった。しかし、本調査の繰り返し表現の機能からわかるように、実際の会話では繰り返し表現は「時間稼ぎ」「相手の発話の促進」より「説明要求／確認要求」という機能として用いられることが多く見られたが、「感情の表出」という機能と比較すると、圧倒的に少ないことが明らかになった。要するに、繰り返し表現のみでは、通常の「説明要求／確認要求」、つまり相手からの情報を要求することを表すには向かない表現であると考えられる。一方、本調査において見られた繰り返し表現に「と」「って」が後続する場合は「感情の表出」より通常の「説明要求／確認要求」を表す用例が非常に多く見られたため、引用形式「と」「って」が付くことによって、通常の「説明要求／確認要求」の機能へと傾くのではないかと考えられる。

参照文献

池谷知子（2018）．引用形式「って」における終助詞的機能 神戸松蔭女子学院大学研究紀要言語科学研究所篇，21巻，pp. 41-69.

加藤陽子（2010）．話し言葉における引用表現 くろしお出版

鎌田修（2000）．日本語の引用 ひつじ書房

中田智子（1992）．会話の方策としてのくり返し 国立国語研究所報告104，研究報告集13，267-302.

藤田保幸（2000）．国語引用構文の研究 和泉書院

多国籍アングロフォンコミュニティの言語変化：
—イギリス人話者による「所有を表わす英語表現」の言語内的要因—

平野　圭子 (北九州市立大学)

1. はじめに

本研究の目的は方言接触 (Britain 2018, Trudgill 1986, 2004)の初期段階において，どのように言語変化が起こり進行していくかを検証することにある．様々な英語圏から来日し，少なくとも 1 年間英語教師として日本で働いている英語母語話者で構成される多国籍アングロフォンコミュニティを調査対象に, a－c 下線部の「所有を表す英語表現」(Jankowski 2005; Kroch 1989; Tagliamonte 2003, 2013a, 2013b; Tagliamonte, D'Arcy, & Jankowski 2010)の使用法に焦点を当て，実時間における言語変化のメカニズムを探る．

a. I*'ve got* an elder sister.
b. I *have* an apartment.
c. You *got* the west coast beaches for surfing.

本発表では「所有を表す英語表現」の主語の種類（名詞句/代名詞；1人称/2人称/3人称；単数/複数），主語の指示対象（総称/非総称），目的語の指示対象（抽象的/具象的）等の言語内的要因と言語変化の関係を考察する．イギリス，アメリカ，ニュージーランド出身の英語母語話者約40人から収集した合計34時間におよぶ自然談話の言語データより，900個以上の「所有を表わす英語表現」を採取した．この自然談話は被験者の来日直後（第1データ）とその1年後（第2データ）に，同じ出身国のペアによる自然談話を同一被験者から録音したものである．本発表ではイギリス人被験者に着目し，統計解析ソフトSPSSの「ロジスティック回帰分析」[1]の分析結果を提示する．日本で観察される英語方言接触の初期段階において，イギリス人被験者による*have got*の使用が他の言語内的要因に拡大されていく過程を解き明かす．

2. 多国籍アングロフォンコミュニティ

本研究でいう多国籍英語母語話者コミュニティとは，世界各地の英語圏より JET プログラム (The Japan Exchange and Teaching Programme) や語学学校などの英語教師等の在留資格で来日し，1 年から数年間日本に滞在する英語母語話者の集団をさす. 2019－2020 年の JET プログラム参加者は世界 57 ヶ国から約 5700 人に上る (CLAIR 2019). 彼らは来日直後から様々な英語方言話者や日本人を含む非英語母語話者らと多種多様な社会的ネットワークを形成し，母国とは異なる言語環境の中で新たなコミュニティを築き上げる．

3. 「所有を表す英語表現」の先行研究

本発表と同じ言語データを利用して Hirano (2016)と Hirano & Britain (in press)はソーシャルネットワーク分析の手法 (Milroy 1980)を用い，「所有を表す英語表現」を方言接触と言語アコモデーション (Coupland 1984; Giles & Powesland 1975)の観点から考察した．**表 1** は第 1 データ(来日直後)と第 2 データ(1 年後)の「所有を表す英語表現」のバリエーション分布を被験者の出身国別に表したものである．イギリスとニュージーランドグループは *have got* の使用率が最も高い．*Have* は 2 番目に高く，*got* の使用率は極端に低い．アメリカグループは *have* の使用率が圧倒的に高く，*have got* と *got* の使用率は低い．三ヶ国のバリエーション分布は先行研究の傾向とほぼ一致する (Quinn 2004; Tagliamonte 2013a, 2013b).

来日 1 年後，イギリス人はアメリカ英語で頻繁に使用される *have* の使用率を減少させ，かわりにイギリス・オーストラレーシア英語に特徴的な表現 *have got* の使用率を増加させている．*Have got* はアメリカ英語ではあまり使われることのない表現である (Tagliamonte 2013a, 2013b). イギリスグループに見られる変化はイギリス英語をより特徴づける現象であり，アメリカ英語からのダイバージェンスと言える．

[1] ロジスティック回帰分析は特定の変異形(*have got*, *have*, *got*)選択にどの言語内的要因がどの程度統計的に有意な影響力を及ぼすかを予測する.

表1の結果によるとイギリスグループは一見アコモデーション理論の唱える言語行動とは反する傾向を示しているように見える．しかし個々の話者が示す「所有を表す英語表現」の変化の方向や増減の幅は一様ではなく，グループ全体の傾向と必ずしも一致するものではない．個々の話者別に「所有を表す英語表現」の変化と社会的ネットワークの関係を重回帰分析にかけると，イギリス人被験者に関しては，あらゆる英語圏出身の英語母語話者とのネットワーク強度が 1 年間の「所有を表す英語表現」使用率変化に対し，統計的に有意な影響力を持つことが判明した(**表 2**)．イギリス人は英語母語話者とのネットワーク強度が高い人ほど，来日 1 年後に *have got* の使用率が減少し，逆に *have* の使用率が増加する傾向を示す．

表1：「所有を表す英語表現」バリエーション分布[2]

出身国	表現	*Have got*		*Have*		*Got*	
	データ	第1	第2	第1	第2	第1	第2
イギリス	N	**119**	**136**	**91**	**76**	**7**	**7**
	%	**54.8%**	**62.1%**	**41.9%**	**34.7%**	**3.2%**	**3.2%**
アメリカ	N	13	15	79	104	15	5
	%	12.1%	12.1%	73.8%	83.9%	14.0%	4.0%**
ニュージーランド	N	87	82	40	44	5	8
	%	65.9%	61.2%	30.3%	32.8%	3.8%	6.0%

Pearson Chi-Square (2-sided): **significant at $P < .01$.

表2：イギリス人の使用率変化とネットワークの重回帰分析

Variant	Predictor Variable	Beta	*p*	Adjusted R^2; F; Sig.
HAVE GOT	英語母語話者	–.326	.046	Adjusted R2=.216;
1年後の使用率変化	ネットワーク			F1,13=4.859; p=.046
HAVE	英語母語話者	.321	.034	Adjusted R2=.247;
1年後の使用率変化	ネットワーク			F1,13=5.09; p=.034

4. 方法論

4.1 被験者

本発表の被験者[3]は 2000 年に来日した英語母語話者で，JET プログラム参加の外国語指導助手 36 名，語学学校の英会話講師 3 名の計 39 名からなる．イギリス人 15 名 (男 5/女 10)，アメリカ人 11 名 (男 7/女 4)，ニュージーランド人 13 名 (男 3/女 10)で構成されている．2000 年調査時の被験者の年齢は 21 歳から 34 歳で，平均年齢は 24 歳である．全員ほぼ同レベルの学歴 (大学卒以上) を持つ．

4.2 言語データ

福岡県，佐賀県，熊本県在住の英語母語話者に来日直後 (第 1 データ) と来日 1 年後 (第 2 データ) の二度にわたって調査に協力してもらい，同一話者からそれぞれ 45 分間の自然談話を収録した．会話はリラックスした雰囲気の中で同じ出身国話者とのペアで行われ，合計 34 時間，約 40 万語分の会話データを本研究のために用いた．

4.3 分析対象

本発表は肯定文に表れる「所有を表わす英語表現」‘*have got*’，‘*have*’，‘*got*’を分析対象とする．*Have got*はイギリス・オーストラレーシア英語で最も頻繁に用いられ (Kroch 1989; Quinn 2004, 2009; Tagliamonte 2013a)，*have*や*got*は北アメリカ英語に特徴的な表現である (Tagliamonte 2013a, 2013b; Tagliamonte, D'Arcy & Jankowski 2010).

4.4 言語内的要因

表 3 に示される 5 つの言語内的要因（主語が名詞句か代名詞か，1 人称か 2 人称か 3 人称か，単数か複数か，総称か非総称か，目的語が抽象的か具象的か）をロジスティック回帰分析にかけ，その後要因ごとに詳細に分析する．

表 3：「所有を表す英語表現」の言語内的要因

言語内的要因			例
主語	①種類	名詞句	**My sister *has*** the most amazing collection of bikinis.
		代名詞	**He*'s*** always ***got*** this big smile on his face.
	②人称	1 人称	**I*'ve got*** no idea where it came from.
		2 人称	**You *have*** no idea when you listen to it.
		3 人称	I suppose **people *have*** different ideas.
	③数	単数	**I*'ve got*** something to tell you.
		複数	**They *have*** so many national holidays.
主語	④参照内容	総称	It's the same as any city if **you *have*** friends there.
		非総称	**You*'ve got*** a beautiful family.
目的語	⑤種類	抽象	You ***have* much closer contact** with people.
		具象	You***'ve got* a nice blanket.**

表 4：「所有を表す英語表現」の出現回数

出身国	第1データ	第2データ	計
イギリス	**217**	**219**	**436**
アメリカ	107	124	231
ニュージーランド	132	134	266
計	456	477	933

4.5 出現回数とバリエーション分布

第 1 データから 456 個，第 2 データから 477 個，計 933 個の使用例を抽出した(**表 4**)．否定文と疑問文で用いられたものは除外し，肯定文で用いられた使用例のみ分析対象とする．本発表ではイギリス人のデータに限定して分析を行う．

2 *印はカイ二乗検定で 1 年間の変化に有意の差がある．統計分析には SPSS Version 22 を利用した．

3 被験者や言語データに関する詳しい情報は Hirano (2013)を参照されたい．

5. 結果

「所有を表す英語表現」の *have got, have, got* を選択する上で，どの言語内的要因がどのくらい強い影響力を持つのかを見るため，SPSS のロジスティック回帰分析を利用する．ロジスティック回帰分析は特定の変異形を選択する上でどの言語内的要因が統計的に有意か，また影響力の強さの順位を評価するものである．

表 5：*Have Got* の言語内的要因のロジスティック回帰分析

データ	***Have Got* の言語内的要因**	B	S.E.	Wald	df	Sig.	Exp(B) **Odds Ratio**	95% C.I. for EXP(B) Lower	Upper
第1データ	**名詞句 / 代名詞（主語）**	2.869	.804	12.739	1	**.000**	**17.618**	3.646	85.148
	単数 / 複数（主語）	-1.152	.343	11.306	1	**.001**	**.316 (3.165)**	.161	.619
	総称 / 非総称（主語）	.598	.466	1.646	1	.200	1.818	.729	4.532
	具象的 / 抽象的（目的語）	.446	.302	2.181	1	.140	1.562	.864	2.822
	1/2/3 人称（主語）	.328	.170	3.733	1	.053	1.388	.995	1.937
	Constant	-6.254	2.135	8.582	1	.003	.002		
第2データ	**名詞句 / 代名詞（主語）**	1.648	.539	9.329	1	**.002**	**5.195**	1.805	14.955
	具象的 / 抽象的（目的語）	.725	.298	5.935	1	**.015**	**2.065**	1.152	3.700
	総称 / 非総称（主語）	.759	.522	2.114	1	.146	2.136	.768	5.941
	1/2/3 人称（主語）	.213	.197	1.166	1	.280	1.238	.841	1.822
	単数 / 複数（主語）	-.188	.354	.284	1	.594	.828	.414	1.656
	Constant	-5.243	1.935	7.340	1	.007	.005		

5.1 第 1・第 2 データのロジスティック回帰分析

第 1 データと第 2 データそれぞれのロジスティック回帰分析結果を**表 5** に提示する．*Have* の結果と *have got* の結果はほぼ対照関係にあり，スペースの関係上ここでは *have got* の結果のみを提示する．被験者の来日直後に収集した第 1 データでは，*have got* か *have* の選択を決める上で主語が名詞句か代名詞か，また単数か複数かの 2 要因が統計的に有意な結果となった．来日 1 年後に収集した第 2 データでは，主語が名詞句か代名詞か，目的語が具象的か抽象的かの 2 要因が統計的に有意な結果となった．第 1・2 データともに主語が名詞句か代名詞かは *have got* か *have* を決定する上で最大の影響力を持つ．

5.2 言語内的要因による *have got* と *have* 使用率の変化

表 5 のロジスティック回帰分析で統計的に有意な影響を示した言語内的要因をここでひとつずつ詳しく見る．

5.2.1 主語の種類（名詞句/代名詞）

表 6 が示すように，第 1 データに関しては主語が代名詞の時には *have got* が使用されやすく，名詞句の場合は *have* が選択されやすい．第 2 データも第 1 データと同様，主語が代名詞の時には *have got* が，名詞句の場合には *have* が選択されやすい．しかし名詞句の時に *have* が使用される割合は第 1 データから 17%減少し，*have got* は 22%上昇している．

表 6：主語の種類別「所有を表す英語表現」分布

主語	変異形	***Have Got***		***Have***		***Got***	
	データ	第 1	第 2	第 1	第 2	第 1	第 2
名詞句	使用数	2	8	15	16	1	0
	使用率	11.1%	**33.3%**	**83.3%**	**66.7%**	5.6%	0.0%
代名詞	使用数	117	128	76	60	6	7
	使用率	**58.8%**	**65.6%**	38.2%	30.8%	3.0%	3.6%

表 7：主語の数別「所有を表す英語表現」分布

主語	変異形	***Have got***		***Have***		***Got***	
	データ	第 1	第 2	第 1	第 2	第 1	第 2
単数	使用数	94	97	47	48	5	6
	使用率	**64.4%**	**64.2%**	32.2%	31.8%	3.4%	4.0%
複数	使用数	25	39	44	28	2	1
	使用率	35.2%	**57.4%***	**62.0%**	**41.2%***	2.8%	1.5%

Pearson Chi-square (2-sided): *significant at $P < .05$.

表 8：目的語の指示対象別「所有を表す英語表現」分布

目的語	変異形	***Have got***		***Have***		***Got***	
	データ	第 1	第 2	第 1	第 2	第 1	第 2
抽象的	使用数	49	65	51	49	2	5
	使用率	48.0%	**54.6%**	**50.0%**	41.2%	2.0%	4.2%
具象的	使用数	70	71	40	27	5	2
	使用率	**60.9%**	**71.0%**	34.8%	27.0%	4.3%	2.0%

5.2.2 主語の数（単数/複数）

表 7 が示す通り，第 1 データに関しては主語が単数名詞の時には *have got* が選択されやすく，複数名詞の場合は *have* が選択されやすい．第 2 データも第 1 データと同様，主語が単数名詞の時には *have got* が好まれるが，複数名詞の場合は *have* に替わって *have got* が選択されやすくなっている．*have got* の使用率の変化は統計的に有意な上昇であり，*have* の使用率の変化は統計的に有意な減少である．元々 *have* が優勢であった複数名詞主語の領域に，1 年後には *have got* の使用が拡大されるようになったわけである．

5.2.3 目的語の指示対象（抽象的/具象的）

表 8 が示すように，第 1 データに関しては目的語の指示対象が具象的な場合は *have got* が選択されやすい一方，抽象的な場合は *have* が選択されやすい．第 2 データでは目的語が具象的な場合は *have got* がより一層好まれるようになり，抽象的な場合は *have* に替わって *have got* が選択されやすくなっている．*Have got* の使用率は抽象的・具象的目的語の両方とも 1 年後に上昇している．

6. 考察と結論

本発表は中期的な方言接触環境においてどのように言語変化が起こり進行していくかを検証するために，進行中の方言変化の実証を試みた．研究対象は英語を第一言語とせず特定の優位英語方言が存在しない地域で，移動性の高い英語母語話者が構成する多国籍アングロフォンコミュニティを調査対象に，英語方言接触の初期段階における文法項目の中期的な方言変化を考察した．来日 1 年後，イギリスグループは「所有を表す英語表現」の中でもアメリカ英語で頻繁に使用される *have* の使用を減らし，そのかわりにイギリス・オーストラレーシア英語で頻繁に使われる *have got* の使用率を増加させていた．その言語変化を言語内的要因の側面から分析することで，英語方言接触の初期段階において，イギリス人被験者による *have got* の使用が他の言語内的要因に拡大していく過程が一部明らかになった．来日直後は *have* が優勢だった言語内的要因のうち，主語が複数の場合，また目的語が抽象的な場合は，1 年後に *have* にとって代わり *have got* の使用が優勢になった．主語が名詞句の場合は *have* が優勢なことに変わりはないが，*have got* の使用率が大きく増加した．具体的な言語内的要因と変化の関係を検証することにより，方言接触の初期段階においてどの言語内的要因に顕著な変化が現れるかが浮かび上がった．長期間に及ぶ方言接触における文法的要素のバリエーションの変化の過程とメカニズムを解明するには，方言接触の初期段階の変化や中間的な変化の経緯を今後さらに明らかにする必要がある．

参考文献

Britain, D. (2018). Dialect contact and new dialect formation. In C. Boberg, J. Nerbonne and D. Watt (eds), *Handbook of Dialectology*. Oxford: Wiley Blackwell. 143–158.

CLAIR（一般財団法人自治体国際化協会）. (2019). *JET Programme, Participating Countries*. <http://jetprogramme.org/en/countries/> (2019.11.4 閲覧).

Coupland, N. (1984). Accommodation at work: Some phonological data and their implications. *International Journal of the Sociology of Language* 46: 49–70.

Giles, H., and Powesland, P. F. (1975). *Speech style and social evaluation*. London: Academic Press.

Hirano, K. (2013) *Dialect contact and social networks: Language change in an Anglophone community in Japan*. Frankfurt: Peter Lang.

Hirano, K. (16 June 2016). Convergence or divergence?: Social network and grammatical variation in a community of expatriate English speakers. Paper presented at the 21st Sociolinguistics Symposium. University of Murcia, Murcia, Spain.

Hirano, K. and Britain, D. (in press). Accommodation and Social network: Grammatical Variation in a Community of Expatriate English Speakers in Japan. *Proceedings of Methods XVI: Papers from the sixteenth international conference on methods in dialectology, 2017*. Frankfurt: Peter Lang. 89–102.

Jenkowski, Bridget, L. (2005). *"We've got our own little ways of doing things here": Cross-variety variation, change and divergence in the English stative possessive.* PhD General Paper, University of Toronto. Retrieved on 5 November 2017, from http://twpl.library.utoronto.ca/index.php/twpl/article/view/19589/19646.

Kroch, A. S. (1989). Reflexes of grammar in patterns of language change. *Language Variation and Change* 1: 199–244.

Milroy, L. (1980). *Language and social networks*. Oxford: Blackwell.

Quinn, H. (1 October 2004). Possessive *have* and *(have) got* in New Zealand English. Paper presented at NWAV 33. University of Michigan, USA.

Quinn, H. (2009). Downward reanalysis and the rise of stative HAVE *got*. In P. Crisma and G. Longobardi (eds.), *Historical syntax and linguistic theory*. Oxford: Oxford University Press. 212–230.

Tagliamonte, Sali A. (2003). Every place has a different toll': Determinants of grammatical variation I cross-variety perspective. In G. Rohdenburg and B. Mondorf (eds.), *Determinants of grammatical variation in English*. Berlin: Mouton de Gruyter. 531–554.

Tagliamonte, S. (2013a). *Roots of English: Exploring the History of Dialects*. Cambridge: Cambridge University Press.

Tagliamonte, S. (2013b). The verb phrase in contemporary Canadian English. In B. Aarts, J. Close, G. Leech and S. Wallis (eds.), *The verb phrase in English: Investigating recent language change with corpora*. Cambridge: Cambridge University Press. 133-154.

Tagliamonte, S., D'Arcy, A., and Jankowski, B. (2010). Social work and linguistic systems: Marking possession in Canadian English. *Language Variation and Change* 22: 149–173.

Trudgill, P. (1986). *Dialects in contact*. Oxford: Blackwell.

Trudgill, P. (2004). *New dialect formation: The inevitability of colonial Englishes*. Edinburgh: Edinburgh University Press.

中国人友人同士の食事場面における「遊び」としての対立

儲叶(葉)明（筑波大学大学院）

1. はじめに

本研究の目的は相互行為における「冗談」，特に「『遊び』としての対立」(大津 2004:45)を中心に，それが相互行為の中でどのように実現されているのか，その実態の一端を解明することである．

相互行為における「遊び」としての対立に関わる研究は，これまで様々な分析・記述がなされてきた(大津 2004, 2007, 高梨 2016, ウォンサミン 2018)．その手掛かりとして，笑い，発話の繰り返し，韻律の操作，感動詞の使用，スタイル・スイッチング(大津 2004, 2007)などが指摘されているが，記述が十分とは言えない．例えば，張(2016)で，韓国語母語話者同士は相互行為においてコンテクスト化の合図(Gumperz 1982)なしに「冗談」のやりとりが達成できると指摘されているように，様々な言語，文化において存在する「冗談」や「遊び」としての対立について，その様態や方法は必ずしも一致するものではない．このような「遊び」としての対立の方法を理解し合うことは，異文化接触における衝突，不愉快，軋轢を避けることの一助となり得る．しかし，これまでの相互行為における「遊び」としての対立に関する研究は，英語，日本語を対象としたものが多く，中国語母語話者の相互行為に基づいた考察が十分に論じられているとは言い難い．そこで，本研究では，中国人の友人同士の食事場面における自然会話を分析し，「遊び」としての対立を相互行為の中で実現する方法に関して，その実態の一端を明らかにする．

2. 先行研究

「遊び」としての対立に言及した先行研究には，女性同士の自然会話を音声で分析し，「遊び」としての対立がどのような手続きによって実現されているかを分析するもの(大津 2004, 2007)，同じく日本人女性同士の会話を用いて間主観的な個性の構築に注目して分析したもの(高梨 2016)，ロールプレイを用いてタイ人の不満表明のフレーミングシフトを実証したもの(ウォンサミン 2018)，そして先述の張(2016)がある．これらの研究の共通点として，参与者の笑いを，相互行為における冗談認識の標識としていることがある．しかし，笑いを伴わない「遊び」としての対立も日常生活には存在する．確かに，そのようなやりとりは一見冗談と解釈しにくいものであるが，本研究では，「遊び」としての対立と本当の対立の境界線を跨ぐような事例を呈示し，その解釈に挑戦する．なお，私たちの日常生活に生じる相互行為は，同性同士だけではなく，異性を含めた，また，多人数によるものも多い．加えて，実際のコミュニケーションでは，音声的な要素だけではなく，表情やジェスチャーなど非言語的な要素もみられ，相互行為の理解には必要不可欠である．これらを踏まえ，本研究では，中国人の異性を含む多人数の食卓場面における自然会話を映像に基づいて分析する．

3. 研究方法

キャラクタや人の個性は「指示的に言及する」(高梨 2016: 105)ことが難しく，メタ的に伝達されることが多い(定延 2011, 高梨 2016)．この点に関しては「遊び」としての対立も同様である．これから対立することを宣言しても(むしろ，したからこそ)「対立」とは見なされず，さっきのは冗談だと説明すればかえって疑われてしまう可能性がある．したがって，「遊び」としての対立を考察するには，相互行為に見られる言語，パラ言語，非言語的な要素を緻密に記述すること，また，相互行為によって指標されるものを分析することは不可欠であり，刻々と変容する相互行為の分析が適切と考える．そこで，本研究は約120分の中国人友人4人の食卓における自然会話を用いて，その中に出現した「遊び」としての対立の現象を分析していく．

4. 考察

4.1「理不尽な不満の放任・参与」

断片①では，大阪にあるｆのアパートへ友人ｗ，ｙ，ｈの3人が火鍋を食べに集まっていた．4人は同じ大学出身で親友といえる関係にある．ｆの部屋には，人数分のコップがなく，やむをえずコーヒー用のコップも使うことになった．しかしそのコップは小さく，誰も使いたがらなかったため，誰がどのコップを使うかはくじを引いて決めた．その結果，ｙが，その小さいコップを使うことになった．この断片の直前で，ｗはみんなに飲み物はどうかと聞いた後，全員に順番に飲み物を注いでいる．

4人の位置関係は図1の通りである.

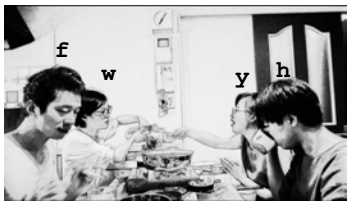


図1　w, f, y, hの位置関係

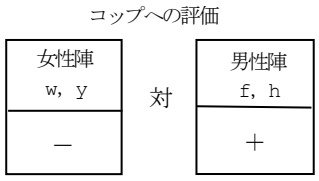


図2　「コップ」の評価(-/+)と女性/男性陣

この断片では, 小さいコップを使うことになったyが, そのコップは価値のないものと主張し(1, 9, 11行目), コップ所有者であるfが, それに反論する(3, 8, 13行目). wは途中でyの肩を持ち(10行目), hはfの肩を持つ(7, 12行目). なお, 図2に示した通り, この断片では男性陣と女性陣が分かれて,「コップの価値」を巡る「対立のフレーム」を構築している. その根拠は, yが提起した「コップ」(1行目)というキーワードを巡って, 男性陣のfとhが3, 7, 8行目で共同で「コップ」に関する情報を添えていることと, 9, 10, 11行目のyとwの順番交替にある. fとhの3, 7, 8行目の手続きに類似のものとしては,「指示対象の範囲の狭窄化(narrowing a reference, 筆者訳)」(乐 2018:128)という手続きが報告されている. 断片①の場合, yはそもそも「コップ」に関する詳しい情報を求めていないため, yの1行目の内容に対する反発として, fとhが共同でこの手続きを進めていると考えられる. また, 3行目のfの発話は,「ペルー」の部分が強く発音されており, 同時に首を傾げてyに笑顔を見せながら産出されていることから, 自慢話のように発話を構築するスタンスが見て取れる. 一方, 8行目のfの発話の後, 女性陣のwとyは, 9〜11行目で,「有何用(だからなーに)」(9行目),「然后呢(それから)」(10行目),「就被所有人嫌弃(みんながいやがる)」(11行目)と反発を立て続けに産出し, 結束を示している. 9行目でyは, fの「城市杯(シティーマグだよ)」(8行目)という説明を受けた後, 発話の前に, 息を吐く音を産出した. ここでの息を吐く音は, 8行目の発話から間髪入れず, 短く産出されており, 冗談を志向するというよりも, fの8行目の主張に対して軽蔑のスタンスを表出することが見て取れる. 実際にその後,「有何用(だからなーに)」(9行目),「就被所有人嫌弃(みんながいやがる)」(11行目)のように, 対立を志向する発話が続いた. しかし, これらの発話が産出されたときに, いずれも明らかな笑いが伴われていたことから, 冗談フレームを志向するスタンスが見て取れる. それに対して13行目でfは, 先行のhの発話(12行目)を先取りする形でyに対する反発を示した. しかし, 13行目のfの発話は, 笑い, 韻律の操作を伴っていることに加えて, 速く発話されていることから, fが先行文脈にあるyの一連の行為を深刻なものとしてではなく, 冗談として捉えているというスタンスが見て取れる.

断片①【コップ】

01　y: (将杯子递给w)一口的量 真(h)是(h)
醉(h)了(h)下次来你们家吃我还得自备(打嗝)自备个杯子.
(コップをwに渡し) 一口のコップ(h)
参っ(h)た(h)な(h)今度来るときはコップまで自分で用意(しゃっくり)用意しなきゃ

02　h: 你下次(　　)
今度来るときは(　　)

03　f: (边接饮料边微笑朝y看)我这个还是从秘鲁带回来的［好不好
(飲み物を注いでもらいながら笑顔でyに向かって)おい, こう見えてこれはペルーから持って来たんだよ

04　h:　　［啊哈
hhhhh 天哪:::hhhh
(hhhhh アハオーマイゴドhhhh)

05　y: 看到写了
(指着杯子上的文字)
見たよ
(コップの文字に指差して)

06　w: 秘鲁=
ペルー=

07　h: =而且还是秘鲁的星巴克
=しかもペルーのスタバだよ

08　f: 对啊 城市杯(微笑)=
そう シティーマグだよ(微笑み)
(y看杯子上的文字)

09　y: =hh(1.4)￥有何用￥
(停止往嘴里送的筷子朝f)
=hh￥だからな::に￥
(食べるのを一旦やめてfに向かって)

10　w: (转身放饮料)然后呢(0.75)
だから(code switching)
(後ろに向き飲み物を戻す)それから
だから

11　y: 就被(h)所(h)有(h)人(h)嫌(h)弃
み(h)ん(h)な(h)が(h)嫌(h)が(h)る

12　h: 因为它是=
だからそれは=

13　f: ￥>=因为它是喝咖啡:::的<￥
￥>=コーヒー用のコップだから<￥

以上の記述を通して, この断片では女性陣(y, w)と男性陣(f, h)がそれぞれ結束し, 対立のフレームを構築していることが示唆される. しかし, 冒頭で触れたように, yは「コップ」がコーヒー用のものであるという情報を既に知っており, また, そのコップをyが使用することも,「くじを引く」という平等なプロセスを経た結果である. それでも, yが1行目のように文句をこぼしたことは, 通常,「理不尽な不満」と理解され, 本来ならば, fが「コーヒー用のものだから」のように事実へ言及することによって, yの文句に対して素早く反発することもできる. しかし, 1行目の直後, 3行目でfが産出したのは, yの発した理不尽さを真正面から指摘するものではなく, 笑顔と韻律の操作を伴った「自慢話」であった. このことから, yの理不尽な不満に対するfの放任が見られ, さらにhもそれに参与するスタンスが見て取れる. そのまま放任した「遊び」としての対立のフレームは, 11行目のyの発話をきっかけにして, 13行目でfが「コーヒー用のコップだから」と事実を持ち出すことで収束する. 紙幅の関係で断片①には示していないが, 13行目以降, yは文句を止め, 会話はwによってほかの話題に移行した. 断片①からは, fがyの理不尽な不満に対する放任・参与, yは理不尽な文句を始めることによって,「遊び」としての対立を構築する手続きが見られた. この断片①は, f, yから笑いや韻律の操作など(3, 9, 11, 13行目), 明確なコンテクスト化の合図が見られる事例である. 次に, コンテクスト化の合図が少ない事例を示す.

4.2 「対立」と「冗談」の境界線を跨ぐ

断片②(a)(b)では，ｙとｆの位置が断片①から変わっている(図3)．２つの断片は，共に断片②(a)１行目で，ｈがｙに対して産出した評価(食べる量が多い)を巡るものである．この断片の前で，満腹になったｈが立ちあがり，少し休憩してから食べると告げた．その後，鍋に次から次へと食材を入れるｙを見ながら，断片②(a)の会話に差しかかる．１行目のｈの評価に対して，ｙとｗは2，4，6行目でｈに対する一連の非難を産出した．注目すべきは，ｙとｗの，これらの非難の産出に伴う冗談を志向するパラ言語，非言語的な要素の少なさである．ｙは2行目で，鍋にレタスを入れている手を鍋の上に浮かせたまま，一瞬ｈを睨み，小さい声かつ速いスピードで「黙れ」を産出した後，3行目でレタスを鍋に入れる作業を再開した(図3)．その後，ｈの説明を待たずに4行目でｗは非難と考えられる疑問文を産出した(林 2015)．しかし，これに対して，ｈは明らかに声が出るような形で笑いを産出した(5行目，図4)．この笑いは2秒ほど続き，口を開けて声を出すような形だった．その後，6行目でｙが笑いを伴わずに，もう一度「黙れ」を産出したにもかかわらず，ｈは7行目で「ｙなら平気」と断言した．このｈの5，7行目の反応から，ｙとｗの発話にはパラ言語，非言語的な要素に冗談を志向するコンテクスト化の合図が少なかったにもかかわらず，自分に対する一連の非難をｈが深刻に捉えていないスタンスが見て取れる．

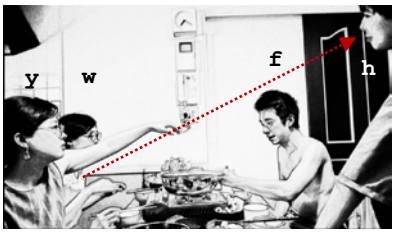


図3　鍋の上に手を浮かせるｙ


図4　笑いを産出するｈ

次の断片②(b)では，ｈのこのような応答に対して，ｗとｙの非難がエスカレートしている．断片②(b)は(a)の続きである．ここでも，ｙとｗはｈへの非難を産出している(11, 12, 15行目)が，ｙは目線をｈに向けることはなく，表情も乏しい(図5)．対して，ｗは韻律の操作や笑顔などのコンテクスト化の合図を産出し，冗談を志向した(12行目，図5)．13行目と14行目ではいきなり「野菜の食べ方」に関する話題にシフトし，15 行目からは，再びｗによる「遊びとしての対立」がｈに向けて開始された．ここで「遊びとしての対立」と解釈した理由として，15行目でｗがドラマの中のセリフ(注釈ｉ)を使用し，また，手を顎に当てて笑顔を見せるなどの手続きを踏まえたこと(図6)，16行目の修復によってｗの真意を理解した後，18行目でｈが笑いを産出したことが挙げられる(図7)．


図5　笑顔がないｙと笑顔のｗ


図6　笑顔で頬っぺたに手を当てるｗ


図7　笑いを産出するｗとｈ

断片②(a)【食べる量が多い(a)】

01→ h: ｙ(ｙ的姓名)我觉得ｙ食量很大(认真表情微笑)(.)其实(.)真的很大(小声)
ｙ(ｙの名前)は食べる量がとても多いと思う(真剣そうな表情で微笑みながら)(.)実は(.)本当に(.)多い(小さい声)

02→ y: (手悬停在锅上，朝ｈ瞪)>闭嘴<(小声)=
(レタスを入れる手を鍋の上で浮かせながら，ｈを睨む)>黙れ<(小さい声で)

03 h: =因为从之前我们做那个=(ｙ重新开始往锅里放菜)
=前あれをやった時=(ｙがレタスを鍋に入れる動きを再開)

04→ w: =你这样说一个女生你觉得真的很好嘛?
=女の子に対してこういう評価をするって本当にいいと思う？

05 h: hhhhhhhhh.

06→ y: 闭嘴(边往锅里放菜边说)
黙れ(鍋にレタスを入れながら)

07 h: 没事ｙ(ｙ的姓名)可以说hhhhh(朝ｙ看)
大丈夫ｙ(ｙの名前)なら平気hhhhh(ｙを見る)

断片②(b)【食べる量が多い(b)】

08 w: 什(h)么(h)叫(h)ｙ(ｙ的姓名)可(h)以(h)说(脸朝ｈ方向,朝下看)ｙ(h)不(h)可(h)以(h)说(h)啊(朝向ｙ耳边)
ｙ(ｙの名前)な(h)ら(h)平(h)気(h)って(h)な(h)あ(h)に(h)
ｙ(h)こ(h)そ(h)言(h)え(h)な(h)い　だよね(h)(ｙの耳元に向かって)

09 y: 小心我把=
その口を=

10 h: =¥ｙ(ｙ的姓名)不让我说¥
=¥ｙは俺に言わせない=¥

11→ y: =小心我把你嘴缝上(1.5)
=その口を縫い付けるぞ
図4

12→ w: 撕烂你的嘴(张嘴笑着看ｈ)(1.0)
その口を千切ってぐったぐったにしてやるぞ(口を開け笑いながらｈを見る)
図4

13 y: 这个(野菜を指す)(.)就涮一下吃这个可好吃可好吃了
それ(野菜を指す)(.)ちょっとしゃぶしゃぶしているだけでめっちゃくちゃうまい

14 w: 是是是是::::
そうそうそう::::

15 w: 今年御花园的枫叶好像不够红啊(手托腮笑着看ｈ)
今年御苑の紅葉はあまり赤に染まっていないな[i]
図5

16 h: 什么花 方圆啊¿
(理解できず音声をまねし確認している)

17 w: 赏ｈ(ｈの綽名)「一丈红」
ｈ(ｈの綽名)に「一丈紅」を賜る

18 h: 哦hhhh 一丈红
なるほどhhh,「一丈紅」ね
図6

断片②(a)(b)の一連のやりとりは，特にｙの目線，笑顔，韻律の操作の少なさから，「冗談」として解釈する絶対的な根拠はないように思われる．要するに断片②は「冗談」と「対立」の境界にあるような事例と言える．しかし，以下に示す理由から，筆者はこの２つの事例を「遊び」としての対立と位置づけたい．

▲断片②(a)のｈの笑いや弁解の反応から，少なくとも７行目までは真剣にとらえていないことは会話の中でも裏付けられる．▲断片②で，ｆは積極的に相互行為には参与していないが，表情に緊張感はなく，微笑みながら，ｙ，ｈ，ｗのやりとりを見守るような姿がみられた．▲ｙ，ｈ，ｗ，ｆを知らない中国人４人と日本人３人に断片会話の動画を見せたところ，中国人の多く(3 人)は冗談と捉えた．しかし，例えば「そのロを縫い付けるぞ」(11 行目）のような発話については、女性から男性に対するものである場合にのみ冗談として許容されるという意見があった．この点は筆者の判断と合致していた．つまり，中国語母語話者の「遊び」としての対立にはジェンダー性が関与する可能性がある．一方，日本人は全員，本当の対立と判断した．▲断片②(b)後のｙとｈの相互行為から導くことができる．この断片の 40 秒後では，ｙとｈが大きな笑いを産出し，さらにその１分後，ｙとｈが通常通りに言葉を交わしていた．▲最後に，後日動画をｙに見せて確認すると，「仲が良いから怒るわけがないだろう」，「もともと大食いなんだから」と答えた．

5. 結果

考察の結果，中国人の「遊びとしての対立」は，従来の研究(大津 2004，2007)で指摘された笑い，韻律の操作などのコンテクスト化の合図だけでは説明できない一面を持つことが明らかとなった．そこで，以上の事例に基づきながら，中国語母語話者の「冗談」を行う際の手続きに関する解釈を示す．

① 理不尽なことを言って遊びのフレームを開始し，その理不尽なことを他の参与者が一時的に放任・参与する遊びとしての対立フレームのやり取りが見られた．

② 断片②(b)の 13，14 行目からはフレームの切り替えの速さがうかがえる．中国語母語話者の談話の切り替え手続きが短いことは楊(2007，2011)でも報告されているが，遊びのフレームとほかのフレームの切り替えにおいても，同じく，手短な手続き，または手続きを踏まなくてもよいことが示唆された．

③ 遊びのフレーム構築の手法として，笑い，韻律の操作などこれまで報告された方法だけではなく，ドラマのセリフの引用，誇張された表現の使用によって逸脱を強める方法が見られた．

また，コンテクスト化の合図が極めて消極的で，「冗談」と「対立」の境界線を跨ぐようなやりとりも見られた．このような事例の解釈として，筆者及びほかの３名の中国語母語話者の主観に基づき，ジェンダー性に依拠したやりとりの可能性と，中国語母語話者同士の冗談フレームの構築には，お互いの関係についての間主観的認識が重要であるということを提案する．なお，これらの解釈の検証は今後の課題とする．本研究全体の結果として，多人数の中国語母語話者の友人同士の相互行為における遊びとしての「対立」は，いくつかのコンテクスト化の合図だけを拠り所に説明することが困難な一面を持つことが示唆された．

---

[i] 15～18 行目のｗとｈのやりとり（16 行目のｈの修復以外）は、中国の人気ドラマ「甄嬛传」（日本語訳:宮廷の諍い女）のセリフに基づいたものである。「一丈红」はドラマにあった架空の刑罰の名前であり、「処刑された人の血は紅葉を赤く染める」ことから由来するとドラマの中で説明されている。(ゆえに 15 行目の発話がある)。しかし、15 行目のようなドラマのセリフを使用した冗談フレームの開始はあまりにも突然だったため 16 行目のｈによる修復が始まった。このことからも、中国語母語話者のフレームの切り替え手続きが短いことが裏付けられる。

主要参考文献

林始恩(2015)「親和の関係における否定的評価の研究:日韓母語話者の言語行動の比較」筑波大学人文学社会科学研究科　博士学位論文

ウォンサミン(2018)「日本語会話におけるタイ母語話者の不満表明の言語行動:不満表明フレームから遊びフレームへのリフレーミングに着目して」,『社会言語科学』21(1)，239-254.

大津友美(2004)「親しい友人同士の会話におけるポジティブ・ポライトネス:「遊び」としての対立行動に注目して」,『社会言語科学』，6(2)，44-53.

大津友美(2007)「会話における冗談のコミュニケーション特徴―スタイルシフトによる冗談の場合」,『社会言語科学』10(1)，45-55

片岡邦好・池田佳子・秦かおり(2017)『コミュニケーションを枠づける:参与・関与の不均衡と多様性』くろしお出版

Gumperz，J. J.(1982)*Discourse strategies*．Cambridge: Cambridge University Press.

高梨博子(2016)「遊びのフレームにおける間主観的個性の形成に関する考察:スタンステーキングの視点から」,『社会言語科学』，第 19 巻 1 号，103-117

張允娥(2016)『友人同士の自由会話におけるポライトネス・ストラテジー:同性間の会話からみる日韓差とジェンダー』，大阪大学大学院　博士論文

Bateson，G.(1972)．“A theory of Play and Fantasy”．In Bateson，G. Steps to an ecology of mind. Chicago: The University of Chicago Press.

乐耀(2018)「汉语会话交际中的指称调节」，方梅・曹秀玲編 『互动语言学与汉语研究』北京社会科学文献出版社

楊虹(2007)「中日母語話者の話題転換の比較ー話題終了のプロセスに着目して」,『世界の日本語教育』17，37-52

楊虹(2011)「中日母語場面の初対面会話における話題開始の比較」,『立命館大学言語文化研究』22(3)，185-200

一般公開を視野に入れた「携帯メイルコーパス」整備の試み

ー加藤安彦氏の遺志を受けてー

宮嵜由美(明治大学)　林直樹(日本大学) 田中ゆかり(日本大学) 三宅和子(東洋大学)

1. はじめに

本発表は，故加藤安彦氏が 2004 年よりデータを収集し，構築を行っていた「Senshu-Univ. Keitai-mail Corpus」（以下，SKC と仮称）を，同氏の遺志により引き継いだ発表者らが，一般公開[1]を視野に入れ 2016 年より再整備を行った経過報告である．

加藤氏は国語研究所在任中よりコーパスの重要性を提唱し，SKC は「打ちことば」コーパスの実現を目指したものとして位置づけられる．具体的には，2004 年より構築が開始され，xlsx 形式によってまとめられたおおよそ 10 年間（メイル[2]送受信時期は 2002 年～10 年），延べ 262598 通，約 463,000 行に及ぶデータである．

SKC の基本設計は加藤（2004，2007）に詳しい．本発表では，今後広く研究者に公開するため検索性と再現性を主眼に再整備を行った際に改善した点を示し，研究の一例として，頻出語彙が親疎によってどのように異なるかを調査した結果を報告する．

2. 「Senshu-Univ. Keitai-mail Corpus (SKC)」の意義

現在日本では，「話しことば」では『日本語話し言葉コーパス』『日本語日常会話コーパス』や『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』など，「書きことば」では，現代日本語書き言葉均衡コーパス，『日本語歴史コーパス』等々，共時的にも通時的にもコーパスの整備が進んでいる．しかし，2000 年以降，日本語社会における主要なコミュニケーション媒体の一つとなった「打ち言葉」を記録し，コーパス化されているものは存在していない．「打ちことば」は，この 20 年間の日本の言語生活の大部分を占めるようになってきたが，すでにスマートフォンにシフトしてしまった現在，携帯メイルの記録は言語資源としても非常に貴重なものである．

SKC が整備・一般公開されれば，近年年齢を問わず利用が謙虚になってきた LINE によるコミュニケーションを収集したコーパス（例えば宮嵜 2018）などとの比較も可能になる．

収録されているデータは，実際に送受信された自然データである点でも，日本語学や社会言語学以外の他分野で利用が可能であり高い資料性をもつと位置づけられる．

3. SKC データ入力概要

3.1 SKC データ入力方針　-全体を通して-

発表者らが加藤氏から引き継いだ原 SKC は，2004 年度から 2010 年度にかけて，専修大学文学部加藤安彦ゼミナールにおいて収集された，データ入力者（データ属性では「送受信主体者」）とデータ提供者間において公開承諾を得た自然データが収録されている．

入力は，加藤（2004，2007）を元に，ゼミ生による手入力であった．また，経年により新たに追加されたメイル機能に付与する記号の検討と統一など，多様な背景を持つ研究者への一般公開に向け再度整備を行う必要があった．再整備後，現在以下の情報が付与されている．

➢メイルの送受信時の情報

A 列：（入力）年度　B 列：通し No.（本文行の通し番号．年度毎）　O 列：送受信年月日　P 列：送受信時刻

➢メイル送受信主体者（以下，データ入力者）の情報

C 列：送受信主体者生年月日　D 列：（データ提供者の）出身地　E 列：性別　F 列：送受信主体者携帯会社名　G 列送信／

[1] 同氏の遺志により「言語資源協会」での公開を予定している．

[2]本研究では故加藤氏の用いた表記「携帯メイル」を使用する．

受信（データ提供者が送信者であったか，受信者であったか）

➢データ受信者の情報

H 列：相手携帯会社名　I 列：相手 ID　J 列：相手生年月日　K 列：相手出身地　L 列：相手性別

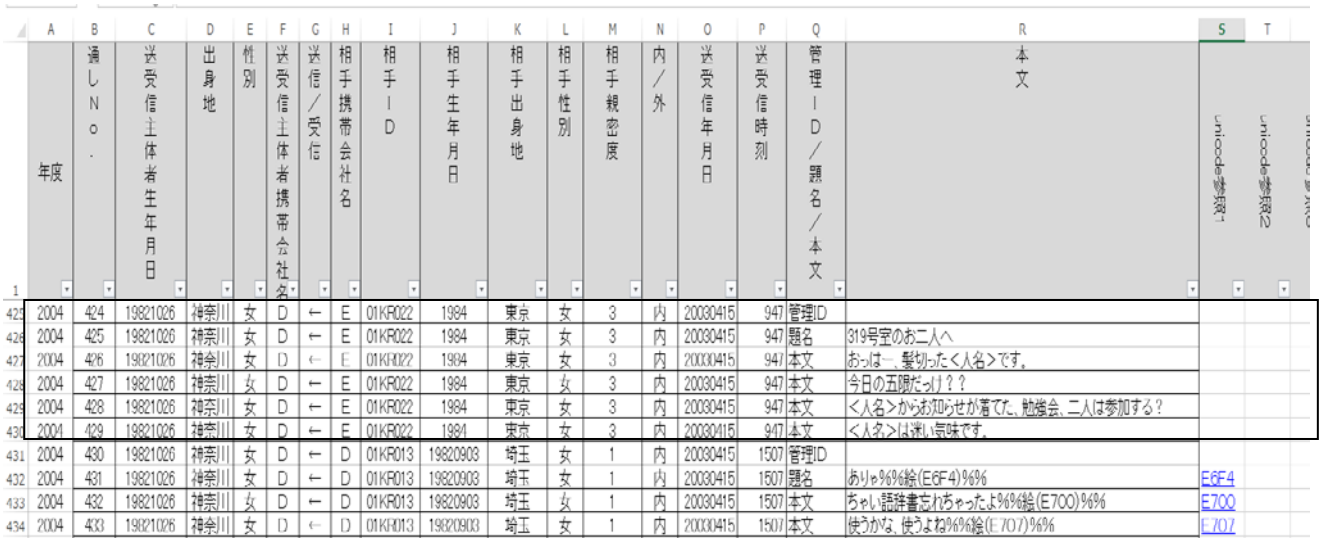
M 列：相手親密度（提供者による判断）　N 列：内／外（相手が同大学内の関係であるかどうか）

➢メイル本文に関する情報

Q 列：管理 ID／題名／本文　R 列：本文　S 列以降：絵文字 Unicode 参照行

個人情報はデータ提供者による公開を前提とした任意の部分であるため，例えば，生年月日などは，生年のみの入力もみられる．同様に男女の別が入力されていないケースもみられる．

１通のメイルの構成例として，下記図１の四角で囲んだ「通し No.」424 から 429 を挙げる．メイル開始行には Q 列に「管理 ID」が入力されており，次に題名行，本文行が続く．本文は，元データに改行が挿入されていた場合は行を変えて入力される．従って，１通のメイルは「管理 ID」行をはじめに，「通し No.」を目安に管理される．以上の入力規則によって整備された年度毎メイルデータ数を表１に示す．



	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T
1	年度	通しNo.	送受信主体者生年月日	出身地	性別	送受信主体者携帯会社名	送信／受信	相手携帯会社名	相手ID	相手生年月日	相手出身地	相手性別	相手親密度	内／外	送受信年月日	送受信時刻	管理ID／題名／本文	本文	unicode参照1	unicode参照2
425	2004	424	19821026	神奈川	女	D	←	E	01KR022	1984	東京	女	3	内	20080415	947	管理ID			
426	2004	425	19821026	神奈川	女	D	←	E	01KR022	1984	東京	女	3	内	20080415	947	題名	319号室のお二人へ		
427	2004	426	19821026	神奈川	女	D	←	E	01KR022	1984	東京	女	3	内	20080415	947	本文	おっは一、髪切った<人名>です。		
428	2004	427	19821026	神奈川	女	D	←	E	01KR022	1984	東京	女	3	内	20080415	947	本文	今日の五限だっけ？？		
429	2004	428	19821026	神奈川	女	D	←	E	01KR022	1984	東京	女	3	内	20080415	947	本文	<人名>からお知らせが着てた、勉強会、二人は参加する？		
430	2004	429	19821026	神奈川	女	D	←	E	01KR022	1984	東京	女	3	内	20080415	947	本文	<人名>は迷い気味です。		
431	2004	430	19821026	神奈川	女	D	←	D	01KR013	19820903	埼玉	女	1	内	20080415	1507	管理ID			
432	2004	431	19821026	神奈川	女	D	←	D	01KR013	19820903	埼玉	女	1	内	20080415	1507	題名	ありゃ%%絵(E6F4)%%	E6F4	
433	2004	432	19821026	神奈川	女	D	←	D	01KR013	19820903	埼玉	女	1	内	20080415	1507	本文	ちゃい語辞書忘れちゃったよ%%絵(E700)%%	E700	
434	2004	433	19821026	神奈川	女	D	←	D	01KR013	19820903	埼玉	女	1	内	20080415	1507	本文	使うかな、使うよね%%絵(E707)%%	E707	

図１　SKC データ属性付与状況

表１ 各年度メイル数　　(通)

年度	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010
メイル数	17461	35755	54935	20438	33394	48812	51803

3.2 SKC データ入力方針　-再整備点-

今回の再整備において変更を行った点は，大きく以下の４点である．

①各年度 A～R 列の名称統一と，本文行に含まれる絵文字・顔文字を機械的に検索する際に使用される記号の統一

②顔文字以外の文字記号「形[3]」を含む記号の削除　「%%形（orz）%%」→再整備後「%%（orz）%%」

③本文には絵文字画像に対応する Unicode が入力されている．再整備時にはこれらを「Unicode 参照」として Q 列以降に出現順に抽出．xlsx 画面と同期した画像とのリンクを貼った．

画像リンクの具体例として表２に 2004 年 12 月 24 日 10 時 57 分，1982 年生まれの女性（愛知県出身）に対し 1942 年生まれの女性．親密度２）から送られたメイルを示す．Unicode 参照欄にはき出された Unicode には画像が個別にリンクされており，検索画面上にポップアップされる．

表２ 1942 年生まれ女性（福島県出身）のメイル送信履歴

題名	おはようございます%%絵（Ｅ０３３）%%	Ｅ０３３

[3] 「形」について，加藤(2007)pp.6-7 によれば，「意味を持たされた記号の組み合わせに対しては，すべて「%%(」と「)%%」でくくり，「形」の文字を付与しておく.」とあり，さらに詳細な定義がなされているが，付与基準に対し入力者による揺れが顕著であるため，再整備時に「形」は削除した．

本文	昨夜は２時に帰宅して起きたらこんな時間でした%%顔（f^_^;）%%	
本文	今＜＜人名＞さん＞からのプレゼント開けました%%絵（Ｅ１１２）%%	Ｅ１１２
本文	何やら箱も小物入れかティッシュケースに活用できるみたいだし，タオルも私好みな色柄でしたよ～☆	
本文	有難うございましたっ%%絵（Ｅ０５６）%%	Ｅ０５６



Unicode の入力も手入力によるものであるため，「おやすみ%%絵（9）%%」のように，Unicode 自体の判別が難しいものがある．このような場合，参照列に「未処理」を入力，現在対応する画像が確認できない場合は「現在不明」画像がポップアップされるよう変更を行った．

④「デコレーションメール」機能や「フレーム」機能の処理（例 1，2 下線部参照）

例 1：「残念%%デコメ（(φ)(リラックマ)(落ち込む)）%%＜人名＞も行かないって%%絵（ＥＡＣ０）%%」

例 2：「%%フレーム(ＨＡＰＰＹ ＢＩＲＴＨＤＡＹ to you) %%)」

デコレーションメールは 2009 年度，2010 年度のデータにみられたが，統一された入力規則がなかったため，「%%デコメ () %%」で囲み，括弧内に既に入力された情報をそのまま挿入する方針を取った．ただし画像は特定できないため，Unicode 参照欄にはその出現順と出現頻度のみ「デコメ」として抽出した．

2010 年度に 2 件のみ見られたフレーム機能も同様の処理を行った．

3.3 メイル送受信者の概要

１通の目安となる「管理 ID」に入力されている SKC 収録のメイルの送受信者の概要を説明する．

データ入力者の生年は，1982 年から 1989 年である．メイル相手の生年には戦前の 1932 年，1933 年，1942 年生まれがおり，戦後は 1947 年から 1950 年代，60 年代，80 年代，そして 1996 年生まれのデータとなっている．

送受信者間における男女の別を表 3 に示す．また，表 4 には「性別」とデータ入力者によって判断された「相手親密度[4]」の別を示す．それぞれ，属性情報の付与されていないデータは除いた．

表 3　送受信者間性別　（通）

		送信者	
		男	女
受信者	男	12681	27000
	女	89868	12680

表 4 男女別送受信者との親密度　（通）

	親密度１	親密度２	親密度３	合計
男	8986	3180	514	12680
女	57353	18765	6250	82368

4.　親密度別高頻度語（上位語）

本稿では，親密度 1 と 3 と判断されたメイルデータの中から空白行を除き，ランダムサンプリングにより各年度 300 行を抽出した．それぞれの高頻度語[5]を表 5 に示す．算出した高頻度語では，語彙的形態素（名詞・動詞・形容詞）のみを取り上げたが，形態素解析ソフトによっては名詞と感動詞との分別が揺れるものがあるため，本稿では感動詞も含めた．また，携帯メイルにおける「打ちことば」の文体は，いわゆる「書きことば」とは違い，表記の揺れが激しい．そこで，表 5 では語彙素読みを挙げ，必要に応じ括弧内に相当する漢字表記を付与した．

親密度による大きな違いは見られず，親密度 1 と 3 ともに最頻出語は「人名」である．ただし，親密度 3 の場合には，相手[6]を呼び捨てにせず，「サン（7 位），チャン（16 位）」が付与されることが多い．その他，親密度 1 に頻出し親密度 3 には頻出しない語として，否定を表す「ナイ」や，今回欄外となったが 22 位に「バイト（29 件）」23 位に「ダイジョウブ（28 件）」などが挙げられる．「フィラー」は，親密度 1（「エ」が最多で 31 件出現／延べ 77 件），親密度 3（「ナンカ」が最多で

[4] 加藤（2007）p.10 によれば，親密度は「深刻な内容の話をすることのできる相手，家族や親友と呼べる関係の友人を「親密度 1」，「親密度 1」に比べると親しさは薄れるが，比較的行動を共にすることの多い仲のよい友人などを「親密度 2」とし，顔を知っていて，ことばも交わす普通の友人を「親密度 3」としてある．これは必ずしも厳密な分類ではないが，例えば顔文字を使用する頻度を分析すると，親密度による傾向が見てとれるということから有意味な情報であるといってよい．」との基準により，データ入力者によって判断されたものである．

[5] 表 5 における高頻出語は，絵文字・顔文字・パラ言語表現等に関連する記号類は除いた．具体的には数字，絵文字の一部，「（笑）」，これら表現を囲むデータ整備上の記号類である．

[6] 話題の人物が，送受信者間であるか，第三者であるかは今回分析の対象としていない．

10 件出現／延べ 36 件）の約 2 倍の使用がみられた.

表 5　親密度別高頻度語（上位 20 語）

順位	親密度1		
	語彙素読み(漢字表記)	品詞	語数
1	ジンメイ(人名)	名詞	189
2	シ	動詞	166
3	テ	動詞	83
3	テル	動詞	83
5	イイ	形容詞	77
6	ノ	名詞	71
7	キ(着／来)	動詞	64
8	キョウ(今日)	名詞	63
9	ワタシ	名詞	57
10	イッ(言／行)	動詞	55
11	イ(居る)	動詞	54
12	アシタ(明日)	名詞	52
12	ジ(時)	名詞	52
14	スル	動詞	49
15	コト(事)	名詞	48
16	ニチ(日)	名詞	45
17	アル	動詞	43
18	ゴメン	感動詞	39
19	ナッ	動詞	38
20	イマ(今)	名詞	37
20	ナイ	形容詞	37

順位	親密度3		
	語彙素読み(漢字表記)	品詞	語数
1	ジンメイ(人名)	名詞	211
2	シ	動詞	209
3	テル	動詞	92
4	ニチ(日)	名詞	74
5	キョウ(今日)	名詞	67
6	テ	動詞	64
7	イイ	形容詞	61
7	サン	名詞	61
9	イ(居る)	動詞	60
10	アシタ(明日)	名詞	56
11	ワタシ	名詞	54
12	コト(事)	名詞	50
13	ナッ	動詞	49
14	キ(着／来)	動詞	48
15	ジ(時)	名詞	45
16	スル	動詞	40
16	イマ(今)	名詞	40
16	チャン	名詞	40
19	イク(行く)	動詞	39
19	イッ(言／行)	動詞	38
20	クダサイ	動詞	38

4. おわりに

2018 年, 2019 年に筆頭執筆者が担当する私立女子大学（東京都内）のある授業時の「親しい友人への依頼」という課題に対し, 約 700 名の半数近くが選択したコミュニケーション媒体は「直接会う」であった. 携帯メイルの使用が一般化しはじめて 20 年を経た現在でもなお, 対面時に得られる非言語の要素を排したツールでのコミュニケーションに困難を感じている者は少なくない. (携帯) メイルや LINE など,「打ち言葉」によるコミュニケーションは, その多くの場合, 対面や通話と連続的に位置し, それぞれの特性と不足を補い合って我々の言語生活に存在していると考えられる.

なお, 形態素解析にあたっては, 前述の通り「打ちことば」の表記のゆれの問題がある. 例えば,「ありがとう」を伝える際の特殊拍の記述の有無,「ありがとーう」「ありがと～う」「ありがとっ」「ありがとん」「サンキュ」, 絵文字との組合せ「🙇 がとう」, 敬体の場合は「あざっす」など, その処理と位置づけについては「話しことば」同様今後の課題となる.

5. 謝辞

本研究は JSPS 科研費 16K02714, JSPS 科研費 18H00680, 平成 28 年度・29 年度日本大学文理学部人文科学研究所総合研究費, 平成 30 年度・31 年度日本大学学術研究助成金社会実装研究の助成を受けたものである。

参考文献

加藤安彦 編(2004)「加藤ゼミ携帯メイル入力マニュアル」『加藤ゼミ研究報告集１ - 携帯メイルによるコミュニケーション研究 - 2004 年度』pp. 7-10 私家版

加藤安彦(2007)「ケータイメイルにおける顔文字と記号の出現頻度とその関係ーケータイメイルコーパスの紹介とともにー」『専修国文』81 巻, pp. 1-17 専修大学日本語日本文学会

三宅和子 (2019)「モバイル・メディアにおける配慮-LINE 依頼談話の特徴-」山岡政紀編『日本語配慮表現の原理と諸相』第 11 章 pp. 163-180

宮嵜由美(2018)「LINE データベースの設計と属性情報付与の現状について」『言語資源活用ワークショップ 2018 発表論文集』3 巻 pp. 176-184 言語資源 WS2018　国立国語研究所 学術情報リポジトリ(http://doi.org/10.15084/00001651)

田中ゆかり(2019)「5-2 携帯メイルコーパス（限定公開版）に基づく絵文字の出現状況」荻野綱男他「コーパス言語学の学際的研究」『研究紀要』第 97 号 pp. 284-289 日本大学文理学部人文科学研究所

日用品表記における連濁の不定状況

浅井 淳（大同大学）

1. はじめに

日本語の連濁現象は，統語論，意味論，音韻論，語彙層，語彙史，語用論，認知心理などさまざまな観点から，多くの検討がなされてきた(バンス・渡邊, 2017, など)．その対象音形は連濁形か非連濁形のいずれかと共時的に判定され，通時的に議論されることがあった(戸田, 1988)．例えば，「水銀」，「柴垣」は古くは非連濁形/みず+かね/，/しば+かき/であったが，やがて連濁形/みず+がね/，/しば+がき/になった[1]．そのような変化は，後部要素の連濁傾向が強くなり，前部要素最終モーラ頭に有声阻害音がある場合に連濁しにくくなるという拡張版ライマンの法則に反してでも(三宅, 1932; Vance, 2005)，有声化作用が働いた結果と推測される．今回，基本2モーラのうち造語力が高い「口」などを後部要素とする比較的新しい合成名詞に関して，(1)身近な用品記載に関する実態調査と(2)話者の認知調査を実施して，連濁の現状把握ならびに作用過程に関する一つの検討を試みた．

2. 社会における実態調査

まず，現時点での連濁現象の(1)実態調査として，日用品に記載されている表記に着目した．液体洗剤や飲料などを入れるために，ビニル製の袋状または紙製の直方体状の容器が多く用いられている．その開封箇所には「切り口」，「つめかえ口」などの合成語，「OPEN」などの英語，「手で切れます」などの文章，そして破線，矢印やハサミの絵など多様な表示により，場所と方向が指示される．その表記には，製造販売業者がターゲットとする使用者に向けた商品の特性が反映されているようである．

2.1 牛乳容器の表記

今回，目にする機会が多く均質性の高い容器形態をとる牛乳を取り上げる(酒井, 2013)[2]．対象表記は，紙パックのいわゆる開け口を手前に向けた場合，折りを開く上辺(ここでは屋根と呼ぶ)の右側と左側の記載と注ぎ箇所(ここでは引き出し，略して引出部と呼ぶ)すぐ下の記載とした(図1a)．その「開け口」の場合，2019年1月から12月の間に中部地方および東京・仙台・神戸地区の小売店舗で入手した，北は北海道から南は高知県まで108業者の383種類の牛乳商品における連濁生起率は0.76とやや連濁形/あけ+ぐち/が多かった．ここでの連濁生起率は，漢字や英字表記の場合を除く，後部要素がかな表記の場合における連濁形件数の割合である．

製造業者と販売業者が異なる場合，原則として販売業者の商品とした[3]．同じ商品でも地域により製造業者が異なり，かな表記が連濁形～非連濁形と異なる場合，業者数に関わらず，表記種類数に基づき各0.5件と数えた．調査期間内に容器が変わり，合成樹脂製で回転式の注ぎ口になった場合，紙容器のときの表記情報とした．紙容器の模様が変わった場合は，新しい表記情報を採った．表記の大きさは問わず，表記内容に従った(図1b)．片側のみ記載の場合，その表記を採った(図1c)．屋根開け口の表記が左右で「あけぐち」と「OPEN」のように異なる場合(図1de)，記載数は0.5件，連濁生起数は1件とした．記載が両側とも「OPEN」で，引出部の横または下の説明文に「あけぐち」と記されていても(図1f)，記載，連濁とも0件とした．このように，引出部の横や下の説明文中の表現は計数対象外とした(図1fg)．「注ぎ口」の場合も，引出部の下方にある別の表記(図1ci)や，注ぎ口箇所の指示ではない開け方の案内(図1cj)などは対象外とした．

価格は店による違いがある．ある品の例では店間距離5kmにある2店で平常価格において1.8倍の違いがあった．そこ

[1] 読みは/ひらがな/で示し，ここでは形態素境界を+，連濁形・非連濁形の交代を～印，任意の文字(列)を〇印で示す．

[2] 対象商品は牛乳，成分調整牛乳，加工乳および乳飲料とした．低脂肪や栄養素添加タイプを含むが，コーヒー牛乳，豆乳，ヨーグルト飲料などは含まない．対象は1*l*クラスであり，開け口が合成樹脂の回転式の場合や1*l*クラスが無い場合は500*ml*品の記載を採った．上辺の三角端を切る形態の商品は対象外とした．特定季節向けの絵柄の場合は，調査範囲内では通常期と同じISBN番号で同じ表記であったため，通常期と同一商品とした．なお，ストローを入れる箇所がある場合は識別性のために，字数を使ってでも，かな表記/ストロー+ぐち/になることが多いと推測される．

[3] 地方製造会社が製造の場合，問い合わせ先となるグループ統括会社の商品とした．

で，広く流通している代表的ナショナルブランド3品の地区大規模店における平均価格を基準に中価として[4]，それより3割以上高い品を高価，2割以上安い品を安価と3区分に設定した．商品展開度については，広い，中程度，狭い，ならびに販売店が限られる流通業者系商品の4区分とした．業者別に見るため，規模に関して判明した中で資本金が50億円以上[5]，1億円以上，1億円未満の3区分とした．業務歴に関しては，1945年以前に前身を含めて設立，1972年までに創業，そして1973年以降の創業の3区分とした．終戦から1972年までの復興・高度成長期の場合，学校給食への牛乳の採用，冷蔵庫の普及，流通の整備，所得の向上などがあった時代における開業である．1973年以降の場合，運送や利用に便利な飲料用紙容器が普及してからの事業開始になる．業者別の集計では，業者ごとに商品数により平均値を算出して，その業者間平均値を取る．表1aのとおり，価格による連濁生起率に差は観られなかった．なお，表中，連濁率は連濁生起率を示し，漢字割合は漢字表記件数，英語割合は英語表記件数，無割合は無表記件数がそれぞれ全体に占める割合を示す．

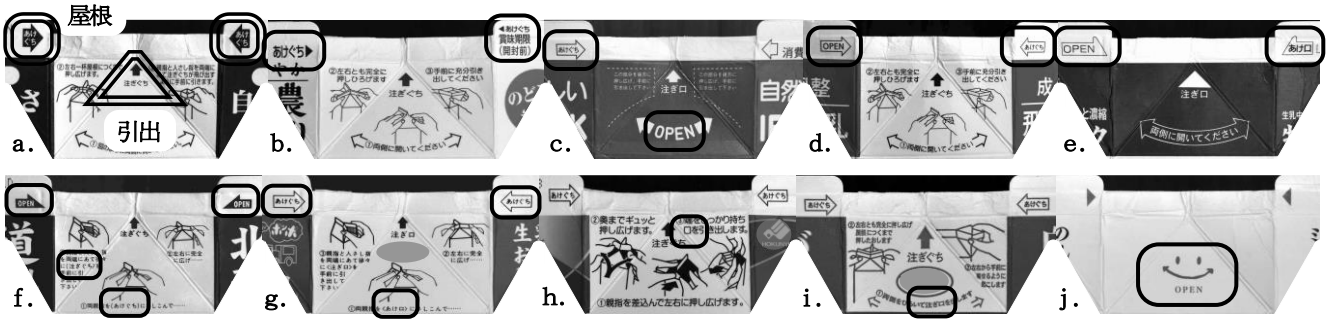


図1. 「開け口」「注ぎ口」表記対象箇所と表記例

表1. 牛乳紙容器「開け口」表記の商品別分布

a. 商品価格による表記

価格	商品数	連濁率	漢字割合	英語割合	無割合
高価	49	.84	.02	.10	.01
中価	191	.72	.01	.06	.01
安価	143	.78	.00	.05	.00

b. 商品展開度による表記

分布	商品数	連濁率	漢字割合	英語割合	無割合
広い	17	.59	.00	.03	.00
中程	42	.62	.05	.08	.00
狭い	302	.78	.00	.05	.02
流通	22	.83	.00	.18	.00

表2. 牛乳紙容器「開け口」表記の業者属性別連濁生起率

規模＼業歴	～1944年	1945～1972年	1973年～
大	.29	.31	.50
中	.72	.75	.63
小	.97	.91	.61

表1bのように，牛乳商品のうち，広汎に売られているナショナルブランドの方がストアブランド(渥美，1994)や地域生産消費型商品よりも連濁生起率がやや低かった．また，地域に根付いた歴史ある小規模業者は，表2のとおり，連濁生起率が高かった．また，全国に独自の流路が張られるストアブランドやプライベートブランド(大野，2010)ではOPENという英語表記も増えている．小規模業者は図1djのように真新しい包装を作る場合もあり，英語表記率の割合も高かった．その場合，前述のとおり，連濁生起率には影響しない．これらの傾向には，商品開発における新しさや高級感など独自性の創出，ならびに年少者や非日本語話者などへの社会的配慮が推測される．

2.2 食料品名の表記

次に，「口」以外の不定状況を持つ形態素を見る．調味料の「つゆ」の場合，自然物の「露」/つゆ/と同様に非連濁傾向で，「粥」/かゆ/の場合は連濁傾向であった．一方で，調味料の「たれ」の場合[6]，連濁生起率平均値は0.56と，普通

[4] 購入者の全国平均196円/*l*(農林水産省，2019)より約6%，地区の大規模店における販売商品平均より約8%ほど高かったため，安価品数が多かった．
[5] 大規模業者の数が少なく，特にデータ精度が低い．
[6] 「たれ」，「つゆ」ともに，商品の名称，副題および付属調味料名表記で合成語後部要素となる各245，261種類を対象とした．

名詞の場合の 0.62 と同程度であったが，前部要素を見ると分化する．「胡麻+たれ」は連濁形に収束していたが，「〇酢+たれ」，「味噌+たれ」，「醤油+たれ」，「塩+たれ」は連濁生起率がそれぞれ 0.43，0.56，0.57，0.83 と中程度であった．形態素の原意表出意図が強いと連想しやすい標示記号(門脇，2004)としての商品名など新造語における連濁生起率は低くなり，実体性の低い仮想合成名詞の場合には高い連濁傾向の後部要素においても話者認知では連濁生起率が低くなる[7]．今回調べた範囲の「〇+たれ」合成語については，統語条件がそろっており，「胡麻だれ」以外は「開け口」などの場合と同様に音形が未定着の状態と解釈され，今後が注目される．

2.3 普通名詞「口」の連濁状況

普通名詞「口」の連濁状況を見ておく．表 3 に撥音または鼻音に由来する母音に後接する場合を除く後部要素「口」の連濁生起率を示す．前部要素が 2 モーラの場合，表 3b に示す通り，形態素境界前，すなわち前部要素最終モーラの頭子音が有声阻害音でも，連濁生起率は下がらない．合成語が作られやすく連濁形，非連濁形ともに頻出語がある形態素の場合は普通名詞でも音形が収束しにくく(浅井・大野，2017)，「口」も，その一例である．

表 3. 普通名詞「〇+口」の連濁傾向

a. 前部要素長

前部要素長[モーラ数]			
1	2	3	4 以上
.77	.54	.83	.88

b. 直前の阻害音の種類

境界前モーラ頭子音	(前部 2 モーラ)
有声阻害音以外	有声阻害音
.51	.68

3. 話者の認知調査

同期間に(2)日本語母語話者 122 名の認知調査を実施した．対象者は近畿，四国，九州西南部，沖縄の方言ではない話者として(早田，1999；金田一・秋永，2001)，軟口蓋鼻音を有するかは問わなかった[8]．対象語は「口」を後部要素とする合成名詞のうち，「切り口」，「飲み口」，「受け口」，「挿し口」，「開け口」，「注ぎ口」，「逃げ口」，「袖口」として，日用物品や設備の一語義に特定するために対象物のイラストを用紙に付け，読み方を尋ねて，自記してもらった．その結果，「切り口」は非連濁形，「注ぎ口」，「逃げ口」，「袖口」は連濁形にやや偏った．確認のために加えた「取り出し口」，「差し込み口」は，前部要素が合成素で長く，連濁形に偏った．全体の連濁生起率は 0.60 となり，表 3a に示す普通名詞の連濁生起率 0.54 とほぼ同等であった．「開け口」のような比較的新しい合成名詞の場合に現象イメージスキーマが段階的に適用されて，後部要素に特有の値に漸近化すると認知主義的に解釈される(山梨，2016)．

連濁音形認知には個人差が大きいことがある(Vance，1980)．今回，「開け口」，「飲み口」，「受け口」，「挿し口」は連濁形・非連濁形に偏らず，年齢が上がるほど連濁生起率が高くなった．牛乳紙容器に使われる「開け口」と「注ぎ口」の年齢層による連濁生起率を表 4 に示す[9](年齢層 3 区分で「開け口」の場合，χ^2=16.4，df=2，p<0.001***；「注ぎ口」の場合，χ^2=1.1，df=2，p>0.05)．この「開け口」のような年齢依存性があるとすると，「口」を後部要素とする普通名詞，地名，姓の平均連濁生起率 0.68，0.83，0.96 に近づき，生活経験によって現象スキーマが単純化され過剰に適用されやすくなるバイアス特性が示唆される．

表 4. 参加者層

年齢層	参加者数 計 (男・女)	連濁生起率 「開け口」	「注ぎ口」
10・20 代	45 (25・20)	.33	.84
30〜50 代	45 (22・23)	.62	.91
60〜80 代	32 (15・17)	.78	.84

[7] 固有名詞は，直接指示のために記述性がなく(Kripke，1971)，意味を伴わないという見方もある(田中，1996)．

[8] 対象者は言語，教育，認知科学，社会学，広告など関連する分野を専門としない一般話者で，無償で参加した．これまでのところ，東京共通語と異なるアクセントパターンを有する方言話者が，異なる連濁傾向を示す結果は得られていない．

[9] 「開け口」の読みは/あけ+くち/，/ひらけ+くち/を非連濁形，/あけ+ぐち/，/ひらけ+ぐち/を連濁形，「注ぎ口」の読みは/つぎ+くち/，/そそぎ+くち/を非連濁形，/つぎ+ぐち/，/そそぎ+ぐち/を連濁形と，前部要素長が異なるがそれぞれ内包的同型とまとめて(Carnap，1956)，集計した．

牛乳の場合，差別化しにくい日常食品と考えられるが，年齢層が高いほど，購入単価が高くなる傾向がある(農林水産省，2019)．しかし，今回の調査では，表 1a の通り，商品価格による連濁生起率の差は観られなかったため，なじみ度や安心感から地域商品や高品質商品を選びやすいことが推測されるものの，話者の連濁形認識との合致までは見られなかった．

言語は私的経験に基礎を置き(飯田，1997)，意味の現象は，志向性意味と慣習的意味という二つの位相に大別されるとすると(黒田，1985)，普通名詞は連濁・非連濁形に分化しやすいが，その発話意図や受け取り方により多様化することが考えられる．このように，音形が言わば揺らいでいる状況は，姓や地名で「中島」/なか+しま～じま/，「高田」/たか+た～だ/などと連濁形・非連濁両形があっても指示性に影響しない経験により日本語第一言語話者はあまり意識しないが，日本語学習者にとっては理解や習得に困難を伴うことが推察される．

4. まとめ

今回，一例として牛乳紙容器の表記における連濁の状況を調べ，広く売られている商品では平易な非連濁形が増えているという製造販売業者が使用者に向けた商品の特性が反映されていること，ならびに年齢が高くなるほど連濁形を選ぶ場合があるという話者が生活経験により音形を認識する可能性が推測された．このように，生活上，接する形態素について，その時点における商品表記に対する(1)社会実勢調査と(2)話者認知調査により，連濁の程度に関する現状把握が進むとともに，その不定状況に関与する要因に関しても部分的に理解され，連濁現象の遷移過程は社会言語的な議論になると考えられる．

今回の調査は，特定の形態素の限られた合成と東海地区中心の限られた商品数と人数が対象であり，現象過程のごく一端を見たに過ぎない．今後さらなる調査検討が必要と考えられる．

謝辞　連濁現象検討にあたり，国立国語研究所連濁プロジェクト（2011～2016 年）では有益なご議論ご助言をいただき，ました．今回の調査に協力いただいた参加者の皆様に感謝いたします．問い合わせに応じていただいた業者にお礼申し上げます．

参考文献

浅井 淳・大野和敏（2017）．連濁における使用領域差と造語表象因 社会言語科学会第42回研究大会発表論文集，161-164.
渥美俊一（1994）．ディスカウンティング．実務教育出版.
Carnap, R.（1956）. Meaning and necessity: A study in semantics and modal language (2/e). Chicago: The University of Chicago Press.
早田輝洋（1999）．音調のタイポロジー 大修館書店.
飯田 隆（1997）．現代思想の冒険者たち第 7 巻 ウィトゲンシュタイン―言語の限界 講談社.
門脇俊介（2004）．フッサール 心は世界にどうつながっているのか 日本放送出版協会.
金田一春彦(監修)・秋永一枝(編)（2001）．新解明日本語アクセント辞典 三省堂 pp. 16-22.
Kripke, S. A.（1971）. Identity and necessity. In M. K. Munitz (Ed.) Identity and Individuation. New York: New York University Press, 135-164.
黒田 亘（1985）．言語と経験．大森荘蔵・滝浦静雄・中村雄二郎・藤沢令雄・市川 浩・加藤尚武・木田 元・坂部 恵・坂本賢三・竹市明弘・村上陽一郎(編) 新岩波講座哲学 2 経験 言語 認識 pp. 1-34.
三宅武郎（1932）．濁音考 音声の研究，**5**，135-190.
農林水産省（2019）．令和元年版食料・農業・農村白書．農林統計協会.
大野尚弘（2010）．PB 戦略―その構造とダイナミクス―．千倉書房.
酒井仙吉（2013）．牛乳とタマゴの科学―完全栄養食品の秘密 講談社.
田中克彦（1996）．名前と人間 岩波新書 472 岩波書店.
戸田綾子（1988）．和語の非連濁規則と連濁傾向－『日葡辞書』と『和英語林集成』から－ 同志社国文学，**30**，80-96.
Vance, T. J.（1980）. The psychological status of a constraint on Japanese consonant alternation. Linguistics, **18**, 245-267.
Vance, T. J.（2005）. Sequential voicing and Lyman's law in old Japanese In S. S. Mufwene, E. J. Francis & R. S. Wheeler (Eds.) Polymorphous linguistics: Jim McCawley's legacy, 27-43. Cambridge, MA: MIT Press.
ティモシーJ バンス・金子恵美子・渡邊靖史（編）連濁の研究－国立国語研究所プロジェクト論文選集－ 開拓社.
山梨正明（2016）．理論言語学における意味研究の歴史と展望．山梨正明・辻幸夫・西村義樹・坪井栄治郎(編)認知言語学論考 No. 13 ひつじ書房 pp. 1-34.

「〇〇方言らしい」という意識とその形成過程について

―北海道方言を例に―

工藤 詩織(北海道大学大学院生)

1. はじめに

方言意識に関する研究は, 大規模な全国調査を行った佐藤・米田(1999)や, 特定地域を対象にネイティブがノンネイティブに与える影響を考察した上野(2004)など, 幅広く存在する. そういった研究の中では, 「方言らしさ」や「地域らしさ」といった表現が垣間見られるが, こういった「らしさ」というものが具体的にどのようなものなのかは, 管見のところ詳しく論じられていない. そこで本発表では「方言らしさ」という意識を対象に, その形成要因や過程, 形成される対象を調査・考察する.

今回の調査対象は北海道方言である. 上記の様な意識研究のうち, 北海道方言を扱ったものは全国調査が多い. さらに北海道は「共通語中心社会」(佐藤・米田, 1999)であることから, その方言意識の特徴は他地域との比較の中では表れない部分が多い. そこで本発表では北海道方言を単独で扱うことで, その方言意識の特徴を絶対的に, かつより詳細に抽出することを目指す.

2. 調査手順

調査は, 北海道方言のネイティブ・ノンネイティブ両方に対して行った. 調査ではまず, 北海道を中心とした日本各地の方言や標準語形を含む語彙・文法的要素(以下まとめて「表現」と呼ぶ)のリストから, 「北海道方言らしい」と感じるものを選択してもらった. 次に「北海道方言らしさ」の形成要因として発表者が予測した因子について, 協力者に個別インタビューを行った. 以下で, 上記それぞれの手順を詳述する.

表現のリストには井上(1981), 見野(2005; 2009a; 2009b; 2018a; 2018b), 都竹(1981), 西田(1981), 渡辺(1955)の掲載項目を全て用いた. ただし項目数が膨大になるため, 予備調査を行ってあらかじめ数を削減している. 予備調査ではネイティブ・ノンネイティブの協力者計57名に, 左記文献の全項目中から「北海道方言らしい」と感じる項目を選択してもらった. それぞれの協力者数は均等になるよう配慮したが, 有効回答数はネイティブ33, ノンネイティブ23の計46となった. 以上の結果をもとに, 選択率が3割未満のものと7割より多いものを削除し, 残された項目を本調査用リストとして用いた. ここでの集計・削除処理はネイティブとノンネイティブ別々に行っているため, 残された項目も両者で異なっている. 残された項目の数はネイティブ 65, ノンネイティブ40となった.

本調査は, 20代(若年層)・40代(中年層)・60〜70代(高年層)のネイティブ・ノンネイティブそれぞれ1名ずつ, 計 6 名を対象に行った. なお, 予備調査と本調査の協力者はすべて異なっており, いずれも性別は女性である. また, 既述の通り本調査では, 発表者が予測した形成要因を扱った. その要因とは, 当該表現を周りで見聞きした頻度(①) ・当該表現の使用頻度(②)・当該表現が北海道特有のものであるという認識(③/特有性)・北海道方言へのイメージと当該表現へのイメージとの関連性(④/方言イメージ)・北海道という地域へのイメージと当該表現へのイメージとの共通性(⑤/地域イメージ)である. 以上に加え, 当該表現が標準語形ではないという認識(⑥/限定性)と, インフォーマントの身近にいる北海道方言話者について(⑦)も補足的に調べている. したがって, 本調査で扱った因子は計7つである.

本調査ではまず, 本調査用リストから「北海道方言らしい」と感じる項目を選択してもらった. なおここでの選択理由を, 後述するインタビューにて尋ねている. つづいて, 同リスト中の項目について①・②の頻度を 4 件法で自己評定してもらった. 続く③〜⑦はインタビューにて尋ねており, ③・④はそれぞれ同リスト中の項目に対し「北海道以外で使っていないもの」「標準語にもあるもの」の有無をそれぞれ尋ねたものである. ⑤・

⑥は自由回答を求め,⑤をインタビューの最初,⑥を最後に尋ねた.これはこの二つの質問が近似しており,一方の回答が他方に影響を与えうると考えたためである.以上の手順に従って調査を行った.次章にて,調査結果とその分析・考察を論じる.

3. 結果と考察

3.1 北海道方言らしい表現は「なげる」「ざんぎ」等

ここでは「北海道方言らしい」との評価傾向が特に強い項目として,予備調査での選択率が7割を超えた項目を示す(図1).太字はノンネイティブでも同様に7割を超えた項目であり,「北海道方言らしさ」がより強固に意識されている項目だといえる.

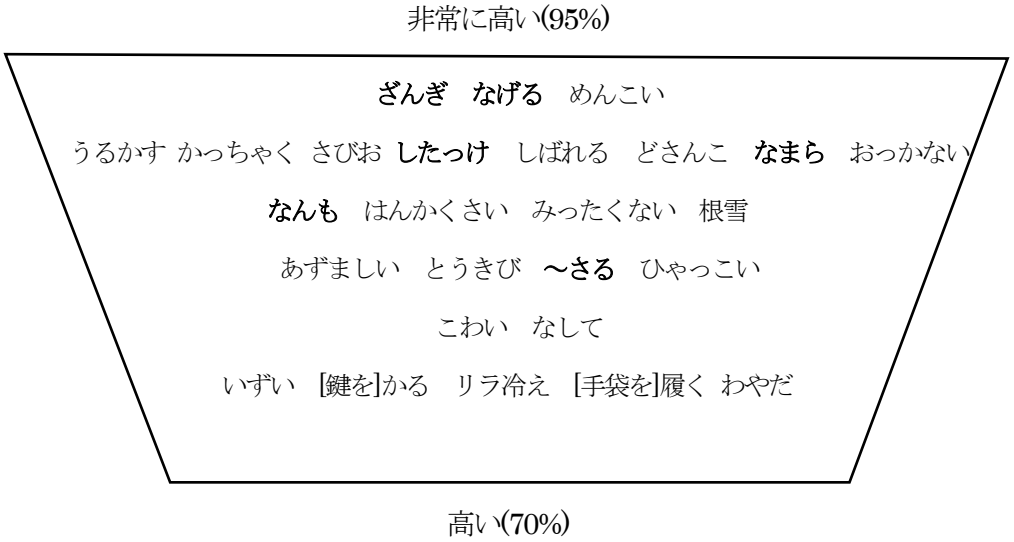


図1:「北海道方言らしい」との評価傾向が特に強い項目

では,上記の項目選択にはどのような要因が隠れているのであろうか.紙幅の都合を鑑み,次節以降ではE(ノンネイティブ・中年層),F(ノンネイティブ・高年層),A(ネイティブ・若年層)の3名の協力者に焦点を当てながらこの問題を考察してゆく.

3.2 自分が使うようになった北海道方言は「北海道らしくない」

協力者Eは,言語形成期を京都府で過ごした中年層のノンネイティブである.「北海道方言らしい」表現の選択には,「雪国のイメージ」という地域イメージに加え,限定性・特有性が影響していた.ただし,いずれも主要因ではあるものの,これだけではEの選択を説明しきれなかった.ここで,Eが述べた選択理由「何回か聞いたことがあると思ったもの」に注目してみる.これはつまり,「見聞きした頻度」との関連を表していよう.ただし既述の通り,限定性と特有性が一定程度要因になっているため,仮に「見聞きした頻度」が高くても,Eの地元でも使われる表現やE自身が移住後に使うようになった北海道方言は選択されまい.また「雪国のイメージ」という地域イメージも影響していることから,このイメージに当てはまる項目はE自身が見聞きした頻度に関わらず選択されうる.こういった交絡の有無を調べるため,「雪国のイメージがある」「地元でも使う」「(北海道の言葉だと思うが)自分も使う」とされた項目を抜き出し,それぞれ単独で除外した上で見聞きする頻度との相関係数を求めた.また上記3要因を複数組み合わせて除外し,その場合についても求めた.それぞれの結果は表1のとおりである.各数値の上に記されているすべての因子が,その分析で除外したものである.

表 1: 見聞きした頻度と「北海道方言らしさ」との相関における交絡因子の有無

除外した因子	雪国のイメージがある				雪国イメージ
		自分も使う[1]			
			地元でも使う[1]		
相関係数	.202 [3]	.212 [3]	.572 [2]	.374 [3]	.459 [2]

表をみると,「自分でも使う」の影響が比較的弱いものの,どの因子もおおむね等しく相関係数に影響している.すなわち見聞きした頻度に関わらず,「雪国のイメージがある」項目は選択され,「自分も使う」「地元でも使う」項目は選択されない傾向があると分かる.表 1 の通り,3 つの因子をすべて除外した相関係数は,r=.572(p<.01)であった.限定性・特有性・地域イメージにくわえ「(北海道方言でありかつ)E 自身が使用しないこと」「E の地元で使われないこと」がおおむね等しく要因となり,それに次ぐ要因として見聞きした頻度が挙げられると分かる.

以上の要因のうち特に興味深いのは,「E 自身が使用しないこと」であろう.というのも,E 自身が移住後使うようになった北海道方言は,見聞きする頻度や限定性があったとしても,一切選択されていないのである.その具体例は「お晩です/でした」と「なして」であり,いずれも限定性を持つ物として挙げられた.また見聞きする頻度も 4 段階中 3 と高い.それにもかかわらず,この両者は選択されていない.このことから,自身が北海道方言を使うようになってもなお,自身の発話とネイティブの発話は別物だと認識されている E の様子がうかがえる.そのため,見聞きする頻度も高くかつ限定性をも持つ(と認識された)表現であっても,「自分が使う」ものはそれだけで「北海道方言らしい」とは感じられなくなるのである.

3.3 「北海道でしか使わない」から「北海道方言らしい」

協力者 F は, 言語形成期を新潟県で過ごした高年層のノンネイティブである. 「北海道方言らしい」という評価形成の要因は, 完全に特有性で占められていた. これは特有性を尋ねた際の「選択したもの全部」という回答や, 選択理由の「北海道に来て初めて知ったもの」という発言から示される. F には北海道以外の移住経験がないことから, 「北海道に来て初めて知ったもの」=「北海道でしか使われないもの」=「北海道方言らしいもの」という認識が形成されていると分かる. インタビューでは, 選択しなかった表現についてその根拠を教えてくれたが, それはすべて「北海道にいる今も見聞きしないもの」「地元でも使うもの」「山形の方でも使っていたと思うもの」のいずれかであった. なお, 限定性を持たない, つまり標準語形であると判断された表現は全て「地元でも使うから」という根拠であった. F は限定性の認識に誤りが多く, この点も踏まえると, F は自身が用いる方言量を過小評価しているといえよう. しかし F の言語形成地を考慮すれば, これは自然なことだと考えられる. F の言語形成地である新潟県の方言は, 北海道方言との語彙・語法的共通性が最も高い(金田一・市河, 1955; 佐藤, 1976; 柴田, 1996)ためである. とはいっても, 「地元でも使うもの」が全て限定性を持たないと判断されたわけではなく, 自分の発話が通じなかった経験などから限定性を認識しているものもあるようだ. ただ高年層という年代に比してその経験が少ないのは, 上記のような理由があろう.

以上の傾向は, 特有性の影響が大きい点で E と非常に類似している.

3.4 「イメージ希薄方言」の「イメージ」は誰が作ったものか

最後に, ネイティブの協力者を 1 名取り上げる. ここでは, ノンネイティブと共通する特徴は省略し, ネイティブ特有の傾向に注目してゆきたい. ネイティブはノンネイティブに比べ, 見聞きする頻度と使用頻度が要因に大きく関わっていた. これは協力者が述べた選択理由や, 使用頻度・見聞きした頻度と項目選択との相関性からも言える. しかし若年層の A だけは例外的である. 選択理由は「いかにも北海道弁というイメージの物」であり, 「自分が使う/聞く項目でも, 北海道以外での使用有無が分からないものは選ばなかった」との発言も聞かれた. 経験基盤的なイメージではなく, プロトタイプ的なイメージが根拠となっている. しかしそれにもかかわらず, 使用頻度・見聞きした頻度と項目選択との相関性は, A も他のネイティブと同程度に高いのである.

---

[1] それぞれ単独の除外では有意な相関がみられなかった.

[2] p<.01

[3] p<.05

これはどういうことか.他のネイティブにおいては,使用経験・見聞きした経験の多さが「北海道方言らしい」という評価に繋がったと考えて矛盾ない,しかしAの場合はその逆を考えるべきだろう.つまり,世間一般的な「いかにも北海道弁」というイメージがAに受容され,それがA自身の言語使用にまで影響を与えた,ということである.

ここで,上野(2004)の論を紹介したい.上野氏は,高知県方言を例に,「イメージ濃厚方言」(友定, 1999)における方言イメージの形成・伝播傾向を論じている.それによれば,「イメージ濃厚方言」においてはネイティブの抱く方言イメージがノンネイティブに無批判に受容され,当該方言における諸現象の理由付けに使われることが多い.すなわち,方言イメージの伝達経路は「ネイティブ→ノンネイティブ」の順である.なお,この「イメージ濃厚(希薄)方言」(同)とは,ネイティブがもつイメージの濃厚/希薄さを意味する.一方,本節でみられたAの方言イメージ受容は「ノンネイティブ→ネイティブ」という順序に見える.この現象は上野氏の議論とは対照的であり,また北海道方言が「イメージ希薄方言」(同)に含まれる点も対をなしている.「イメージ希薄方言」における方言イメージ伝達経路は,「イメージ濃厚方言」におけるそれの逆をゆくのだろうか.

北海道方言は,そのネイティブにはさほど特定のイメージをもたれていない.しかし同時に,北海道という地域がもつ特色は,貴重な観光資源として,また物語作品の格好の舞台としていたる場面で利用されている.そのような他地域との差別化やキャラクター付けとして地域の特色をアピールする時,方言は第一の表現手段として盛んに用いられる.そのようなメディア・観光行政による利用を通し,北海道方言へのイメージは人為的に植えつけられてきたことがいえよう.ネイティブもまた,そのような物語作品に触れ,あるいはそれらの影響を受けたノンネイティブと関わる中で,人為的なイメージを受け取ってきたといえる.こう考えると,北海道方言における方言イメージ伝達のプロセスは,「イメージ濃厚方言」におけるそれの逆進形とは言い難い.より正確には,後者がネイティブ→ノンネイティブと前後関係を成すのに対し,前者は人為的なイメージ付けがネイティブ・ノンネイティブへと,同時に伝わったものと理解すべきだろう.

「イメージ希薄方言」はほかに,仙台方言や千葉方言などが上げられているが,それらでも同様の現象が起きているのだろうか.これは今後の課題としたい.

参考文献

井上史雄 (1981). 北海道内の方言差 五十嵐三郎先生古稀祝賀記念論文集 北海道のことば(北海道方言研究会叢書第3巻) 北海道方言研究会 pp. 72−83.

見野久幸・菅泰雄 (2005). 北海道方言は今 形容詞語彙四〇語の意味・用法と分布・動態

見野久幸(編) (2009a). グラフで見る高校生と北海道方言: 北海道方言の地理的分布と勢力の現況 科学研究費基盤研究 研究成果報告書

見野久幸 (2009b). 北海道方言の地理的分布と動態: 日常生活語としての方言の使用現況の諸相

見野久幸 (2018a). 北海道方言の地理的・勢力的分布と動態(1) 調査データグラフ集 語彙編

見野久幸 (2018b). 北海道方言の地理的・勢力的分布と動態(1) 調査データグラフ集 語法編

金田一春彦・市河三喜(編) (1955). 世界言語概説(下) 研究社

西田直敏 (1981). 方言の共通語化の一面 五十嵐三郎先生古稀祝賀記念論文集 北海道のことば(北海道方言研究会叢書第3巻) 北海道方言研究会 pp. 23−28.

佐藤亮一 (1976). 北海道方言の地理的背景—「日本言語地図」第4集について— 佐藤喜代治教授退官記念国語学論集刊行会(編) 佐藤喜代治教授退官記念国語学論集 桜楓社 pp. 583−601.

佐藤和之・米田正人(編著) (1999). どうなる日本のことば 方言と共通語のゆくえ 大修館書店

柴田武 (1996). 北海道方言と新潟県方言 新潟県方言と山形県方言 言語学林, **1995-1996**, 825-831.

田中ゆかり (2011). 方言コスプレの時代—ニセ関西弁から龍馬語まで— 岩波書店

友定賢治 (1999). 「つくられた」方言イメージと共通語イメージ 佐藤和之・米田正人(編著) どうなる日本のことば 方言と共通語のゆくえ 大修館書店 pp. 98−100.

都竹通年雄 (1981). 私が観察した北海道方言 五十嵐三郎先生古稀祝賀記念論文集 北海道のことば(北海道方言研究会叢書第3巻) 北海道方言研究会 pp. 108−122.

上野智子 (2004). 方言イメージの危うさ—高知県方言「ハシ」と「バッサリ」の間— 高知大国文, **35**, 1-15.

渡辺茂 (1955). 北海道方言集 楡書房

ストーカー犯罪報道から考えるメディア・リテラシー
ー「みだりにうろつく」のは誰かー

宿利由希子（京都精華大学）

1. はじめに

我々は日々マスメディアをとおして大量の情報を入手し，マスメディアが用いる表現から個人や団体の存在を認識する．たとえば，「女性宅周辺をみだりにうろついた」として男性がストーカー犯罪で逮捕されたという新聞記事を見つけたとする．我々読者は，この男性がただ道に迷っていただけなのか，女性宅の場所を知ったうえで周辺をうろうろしていたのか，真実を知らないにもかかわらず，「みだりにうろついた」という悪印象を伴う表現から，この被疑者[1]を自動的にストーカー犯罪者と認識することになる．「殺人」や「強姦」など，戦争以外なら文脈にかかわらず行為自体が一般的に犯罪とみなされるものと異なり，ストーカー犯罪の多くは「家の近くを歩く」「メールを送る」「告白する」といった，日常的に行われる行為が文脈次第で犯罪となる．そのため，言動をどのように表現するかによって，情報受信者の被疑者に対する印象が左右される可能性がある．

では，「みだりにうろついた」のような悪印象を伴う表現の使用は，被疑者が犯罪行為を行った確実性の高さに起因するのであろうか．このような疑問を背景に，本研究は，ストーカー関連犯罪についての報道で被疑者の言動を表すのに用いられる「つきまとう」「うろつく」「押しかける」「送りつける」などの，悪印象を伴う表現の使用要因を探る．辞書[2]において，これらの表現はそれぞれ「いつもそばに付き従う」「目的もなくあちこち歩き回る」「招かれないのに，かってに出向いていく」「先方に送り届ける」という意味を持つとされる．行為自体は犯罪者以外でも取りうるものだが，いずれも悪印象を伴う表現であるため，このような表現で書き表された行為者は犯罪者として受け取られる可能性が高いと考えられる．特に「つきまとう」「うろつく」「押しかける」は「ストーカー規制法」[3]で「つきまとい等」の行為とされている．

情報化が進む現代において，「メディアを社会的文脈でクリティカルに読み解き主体的に使いこなすことのできる力（鈴木 1997）」，すなわち「メディア・リテラシー」の向上が重要な課題となっている（Masterman 1985）．一方，日本語社会におけるマスメディア報道が，個人や団体の言動を表すのに特定の印象を抱かせる表現を用いるということは，非日本語話者の英語インタビューの和訳記事に関する役割語研究（太田 2009）や，選挙報道を扱った批判的談話研究（名嶋 2018）などですでに明らかにされている．本研究は，犯罪報道においても個人の言動を表すのに特定の印象を抱かせる表現が恣意的に用いられることを示し，日本語社会におけるメディア・リテラシー向上のための材料を提供するものである．

2. 調査概要

調査では，まず「朝日新聞デジタル」[4]を用い，「ストーカー」を検索語として閲覧可能な 2014 年 10 月～2019 年 10 月のストーカー関連記事 493 本を収集した．朝日新聞を用いたのは，発行部数が読売新聞に続いて 2 番目に多いことに加え，他社より記事の保存期間が長くデータが収集しやすいためである．493 本から，ストーカー規制法の内容を説明する記事や同法違反件数の増減に関する記事，犯罪傾向に関する記事などを除いたところ，被疑者の言動を具体的に示している記事は 49 本であった．次に，これら 49 本の記事で用いられた被疑者の言動を示す動詞および動詞句 90 種（計 207 個）を，「つきまとう」「つきまとい行為をする」「つきまとい行為を繰り返す」「つきまといをする」「うろつく」「押しかける」「送りつける」という悪印象を伴う 7 種の動詞および動詞句（以下，悪印象表現）と，「電話をかける」「投函する」などの客観的に行為を表現する動詞および動詞句に二分した．さらに，悪印象表現の使用と，被疑者の年齢，性別，職業，容疑お

[1] 被疑者とは警察が犯人であると認める者を指す（警視庁「刑事手続きの流れ」[https://www.keishicho.metro.tokyo.jp/smph/sodan/shien/hanzai2.html] 2019 年 12 月 16 日最終確認）．本研究では，不起訴となった者，捜査が検察に渡り厳密には「被告人」と呼ばれる者も便宜上被疑者と呼んでいる．
[2] 辞書として『デジタル大辞泉コトバンク（小学館［https://kotobank.jp/dictionary/daijisen/］2020 年 1 月 7 日最終確認）』を用いている．
[3] 警視庁「ストーカー規制法」[https://www.keishicho.metro.tokyo.jp/smph/kurashi/higai/dv/kiseho.html]2019 年 9 月 25 日最終確認．
[4] 「朝日新聞デジタル」[https://www.asahi.com]2019 年 12 月 30 日最終確認

よび警察の執行内容，被疑者が犯行を是認しているか否かなどの項目との関連を統計的に分析した．

3. 調査結果と考察

調査の結果，記事単位で見ると，被疑者がストーカー規制法違反以外の容疑で逮捕または指名手配されたという記事，被疑者が警察職員または職業不明の記事では，悪印象表現が使われない場合が多くなることがわかった．一方，表現単位で見ると，被疑者が犯罪行為を行った確実性の高さにかかわらず，悪印象表現が恣意的に用いられていることが明らかになった．悪印象表現が使用されない記事では，「しつこく復縁を迫る」「駐車場で，計8回にわたり同じ女性を待ち伏せる」「訪問する」「送り続ける」などの代替表現が観察された．以下，記事単位，表現単位の順に詳しく述べる．

3.1 悪印象表現使用記事と不使用記事

49本の記事のうち，悪印象表現が1つ以上使用された記事は26本，悪印象表現がまったく使用されなかった記事は23本であった．このことから，同じストーカー関連報道記事であっても，悪印象表現をまったく用いない記事が半数近く存在する一方，1本の記事に複数の悪印象表現が使用される記事もあることがうかがえる．クラメールの連関係数を求めた結果，悪印象表現の使用記事／不使用記事と，容疑および警察の執行内容との関連は弱いこと（I^2=0.293），悪印象表現の使用記事／不使用記事と，被疑者の職業との間にはある程度の関連が見られること（I^2=0.321）が明らかとなった．悪印象表現の使用／不使用の記事本数を，容疑および警察の執行内容別（表1参照）と，被疑者の職業別（表2参照）に示す．表1，2から，被疑者がストーカー規制法違反以外の容疑で逮捕または指名手配されたという記事，警察職員または職業不明の被疑者の記事では，悪印象表現が使われない場合が比較的多くなることがわかる．

表1　ストーカー犯罪報道記事49本における悪印象表現の使用／不使用と容疑および警察の執行内容

	ストーカー規制法違反で逮捕	ストーカー規制法違反で警告/書類送検のみ	他の容疑で逮捕/指名手配	計
使用記事	13本	5本	8本	26本
不使用記事	5本	7本	11本	23本

表2　ストーカー犯罪報道記事49本における悪印象表現の使用／不使用と被疑者の職業

	会社員	警察関係	アルバイト	不定・無職	不明	その他	計
使用記事	6本	4本	2本	5本	4本	5本	26本
不使用記事	3本	5本	0本	2本	7本	4本	23本

3.2 悪印象表現の使用

観察された動詞・動詞句207個のうち悪印象表現は48個で，「つきまとう」は17個，「つきまとい行為をする」は10個，「うろつく」は5個，「押しかける」は9個，「つきまとい行為を繰り返す」と「送りつける」はそれぞれ3個，「つきまといをする」は1個であった．

悪印象表現を含む207個の動詞および動詞句の使用と，被疑者の年齢，性別，職業，容疑および警察の執行内容，被疑者が犯行を是認したか否かなどの項目との関係について，クラメールの連関係数を求めた．その結果，いずれの項目も悪印象表現の使用との関連は弱いことが明らかとなった（順に I^2=0.175，I^2=0.196，I^2=0.215，I^2=0.287，I^2=0.293）．比較的関連の強かった犯行の是認／否認に関する悪印象表現の使用個数内訳を表3に，悪印象表現別の使用内訳を表4に示す．表3を見ると，部分的是認の場合悪印象表現の使用率が高くなっているが，是認，否認，不明の場合はいずれも不使用率が高い．また表4を見ると，被疑者が容疑を否認している場合でも，悪印象表現が用いられていることがわかる．以上の結果から，被疑者が犯罪行為を行った確実性の高さにかかわらず，悪印象表現が恣意的に用いられていることが明らかになったと言える．

表3　悪印象表現の使用／不使用と犯行を是認したか否かの関係

	是認	部分的是認	否認	不明
悪印象表現個数	26個(26.5%)	8個(66.7%)	3個(20.0%)	11個(13.4%)
非悪印象表現個数	72個(73.5%)	4個(33.3%)	12個(80.0%)	71個(86.6%)
計	98個(100.0%)	12個(100.0%)	15個(100.0%)	82個(100.0%)

表 4　悪印象表現の使用内訳

	被疑者年齢	被疑者性別	被疑者職業	容疑および警察の執行内容	容疑是認/否認
つきまとう（17 個）	10 代（1 個） 20 代（5 個） 30 代（1 個） 40 代（4 個） 50 代（4 個） 不明（2 個）	男性（11 個） 女性（6 個）	会社員（7 個） 不定/無職（3 個） 不明（2 個） アルバイト（1 個） 警察職員（1 個） その他（3 個）	ストーカー規制法違反で逮捕（12 個） 他の容疑で逮捕/指名手配（5 個）	是認（9 個） 部分的是認（3 個） 不明（3 個） 否認（2 個）
つきまとい行為をする（10 個）	20 代（1 個） 30 代（1 個） 40 代（4 個） 50 代（4 個）	男性（9 個） 女性（1 個）	不定/無職（3 個） アルバイト（2 個） 警察職員（2 個） 会社員（1 個） 不明（1 個） その他（1 個）	ストーカー規制法違反で逮捕（5 個） 他の容疑で逮捕/指名手配（4 個） ストーカー規制法違反で警告/書類送検のみ（1 個）	是認（5 個） 不明（3 個） 部分的是認（2 個）
つきまとい行為を繰り返す（3 個）	30 代（1 個） 50 代（2 個）	男性（3 個）	警察職員（2 個） 不定/無職（1 個）	ストーカー規制法違反で警告/書類送検のみ（2 個） ストーカー規制法違反で逮捕（1 個）	不明（2 個） 是認（1 個）
つきまといをする（1 個）	50 代（1 個）	男性（1 個）	警察職員（1 個）	ストーカー規制法違反で逮捕（1 個）	否認（1 個）
うろつく（5 個）	20 代（1 個） 30 代（1 個） 40 代（3 個）	男性（4 個） 女性（1 個）	不定/無職（3 個） 会社員（2 個）	ストーカー規制法違反で逮捕（5 個）	是認（4 個） 否認（1 個）
押しかける（9 個）	20 代（1 個） 30 代（4 個） 40 代（2 個） 50 代（2 個）	男性（8 個） 女性（1 個）	不定/無職（4 個） 会社員（2 個） その他（3 個）	ストーカー規制法違反で逮捕（5 個） ストーカー規制法違反で警告/書類送検のみ（4 個）	是認（4 個） 部分的是認（3 個） 不明（2 個）
送りつける（3 個）	40 代（1 個） 50 代（2 個）	男性（3 個）	会社員（2 個） その他（1 個）	ストーカー規制法違反で逮捕（2 個） ストーカー規制法違反で警告/書類送検のみ（1 個）	是認（2 個） 不明（1 個）

3.2 代替表現の使用

では，ストーカー関連報道記事 49 本において，悪印象表現が使われなかった記事では代わりにどのような表現が用いられているのであろうか.

悪印象表現が使用されなかった 23 本の記事を観察した結果，「しつこく復縁を迫る」「駐車場で，計 8 回にわたり同じ女性を待ち伏せる」「訪問する」「送り続ける」などの具体的かつ客観的な表現が使われる場合があることがわかった．これらはそれぞれ「つきまとう」「うろつく」「押しかける」「送りつける」に置き換えることが可能であり，悪印象表現の代替表現と考えることができよう．次の(1)～(4)に，代替表現の実際の使用例を，報道された年月日，被疑者の年齢・性別，職業，容疑および警察の執行内容，容疑を是認したか否かとともに示す（下線は引用者による）.

(1)　知人の女性に対し，無料通信アプリ「LINE」を通じて<u>しつこく復縁を迫った</u>などとして，愛知県警は 15 日，県警中村署地域課の巡査，［個人名］容疑者（23）をストーカー規制法違反の疑いで逮捕し，発表した.

［朝日新聞 2018 年 11 月 15 日報道，20 代女性，警察職員，ストーカー規制法違反で逮捕，認］

(2)　県警監察課によると，男性巡査長は昨年 8 月，同県内の店舗で 20 代の女性従業員のスカート内を隠し撮りしたうえ，昨年 8 月～今年 1 月に同じ店舗の<u>駐車場で，計 8 回にわたり同じ女性を待ち伏せる</u>などのストーカー行為をした疑いがある.

［朝日新聞 2017 年 2 月 9 日報道，30 代男性，警察職員，ストーカー規制法違反で書類送検，容疑是認／否認不明］

(3)　女性が出なかったため，鹿児島から車で上京し，事件前日の 24 日朝，東京都中野区の女性宅を<u>訪問した</u>.

［朝日新聞 2017 年 5 月 26 日報道，20 代男性，職業不明，監禁致傷で逮捕，是認/否認不明］

(4)　［個人名］は，甲府地家裁都留支部長だった 08 年 2～3 月に女性にメールを送り続けたとして同法違反の罪に問われ，懲役 6 カ月執行猶予 2 年とした甲府地裁判決が確定した．
［朝日新聞 2016 年 6 月 8 日報道，年齢不詳男性，裁判所職員，ストーカー規制法違反で逮捕，是認／否認不明］

第 3.1 節で述べたとおり，被疑者がストーカー規制法違反以外の容疑で逮捕または指名手配されたという記事，警察職員または職業不明の被疑者の記事では，悪印象表現が使われない場合が多い．上の(1)～(3)はまさにこのことを示す例と言える．(4)の被疑者は警察の職員ではないが，裁判所職員であり，警察関係者と考えることができる．犯罪報道の多くは警察発表をそのまま用いると予想されるが，被疑者が警察関係者の場合悪印象表現が避けられるという事実は，警察発表に身内意識が影響を与えている可能性をも感じさせる．

4. まとめ

本研究では，ストーカー関連犯罪についての報道で被疑者の言動を表すのに用いられる「つきまとう」「うろつく」「押しかける」「送りつける」などの，悪印象表現の使用要因を探った．調査の結果，記事単位で見ると，被疑者がストーカー規制法違反以外の容疑で逮捕または指名手配されたという記事，警察職員または職業不明の被疑者の記事では，悪印象表現が使われない場合が多くなることがわかった．一方，表現単位で見ると，被疑者が犯罪行為を行った確実性の高さにかかわらず，悪印象表現が恣意的に用いられていることが明らかとなった．悪印象表現が使用されない記事では，「しつこく復縁を迫る」「駐車場で，計 8 回にわたり同じ女性を待ち伏せる」「訪問する」「送り続ける」などの代替表現が観察された．

放送法第 4 条（情報通信振興会）には，「報道は事実をまげないですること」と定められており，報道機関は事実を伝えることが求められる．しかしながら，本調査の結果，同様の容疑および警察の執行に関する記事であっても，悪印象表現が使われる場合と使われない場合があることがわかった．特に警察職員が被疑者の場合，記事にまったく悪印象表現が使われないというケースも見られ，恣意的な悪印象表現の使用実態が認められた．犯罪報道では警察による発表をそのまま記事にすることも多いと考えられるが，報道機関が使用する表現によって被疑者に対する読者の印象が結果的に左右されるとすれば，報道機関も情報操作に加担していると言わざるを得ない．

メディア・リテラシーや情報操作に関する研究では，たとえば嘘をつく，ある情報を誇張する，あるいは矮小化するというように，情報の内容自体を変えてしまう情報操作の実験的研究が主になされてきた（たとえば川上 1994）．これに対し，犯罪報道において特定の印象を抱かせる表現が恣意的に用いられることを示した本研究の結果は，日本語社会が言語的側面から情報操作の影響を受けやすい社会である可能性を示唆するものである．世界的に，日本は新聞や雑誌等のメディアに対する信頼度が他国に比べて高いことが報告されている[5]．本研究の知見が，日本語社会において，報道をただ鵜呑みにすることなく，クリティカルに読み解く力を育てるための一歩となることを期待する．

参考文献

一般財団法人情報通信振興会「放送法第 4 条」［https://dsk.or.jp/dskwiki/index.php］2020 年 1 月 3 日最終確認
川上和久（1994）．情報操作のトリック その歴史と方法 講談社現代新書．
太田眞希恵（2009）．ウサイン・ボルトの"I"は，なぜ「オレ」と訳されるのか―スポーツ放送の「役割語」 放送研究と調査 56-73.
Masterman, L.（1985）．*Teaching the media*.［マスターマン，L.（著）宮崎寿子（2010 訳）メディアを教える―クリティカルなアプローチへ 世界思想社］
名嶋義直（2018）．批判的談話研究をはじめる ひつじ書房
鈴木みどり（1997）．メディア・リテラシーとは何か 鈴木みどり(編) メディア・リテラシーを学ぶ人のために 世界思想社，2-22.

[5] 世界価値観調査（World Values Survey[http://www.worldvaluessurvey.org/wvs.jsp］2019 年 10 月 7 日最終確認．）によると，日本では 7 割以上の回答者が新聞，雑誌等を信頼している．

診療場面における「間主観性」

ー会話分析の視点からー

企画責任者：串田秀也(大阪教育大学)
話題提供者：阿部哲也(関西医科大学)　大石直子(関西医科大学)　川島理恵（京都産業大学）
串田秀也（大阪教育大学）　佐久間博子（関西医科大学）

1. はじめに

今日，医療のさまざまな領域において「患者中心の医療」が主導的理念として強調されている．この理念には，まず，医師が患者のニーズ・価値観・好み・個人的経験などを踏まえて，患者の抱える問題を共感的に理解する関係を構築することが含まれる．また，共同での意思決定（shared decision-making），すなわち医師と患者の両者が情報を共有し，両者が合意形成のために対策を講じ，両者の同意に基づいて意思決定を成し遂げること(Charles et al. 1997)も含まれる．だが，これらの理念と実際の臨床との距離は依然として大きく，理念がどのようにして実現されうるのかについては模索が続いている状態である．たとえば，共同での意思決定という理念は日常的診療ではほとんど実現されていないことが指摘されている（Stevenson et al. 2000 など）．すべての患者が意思決定に積極的に参加することを求めているわけではないこともつとに指摘されている（Des la Cuevas & Penate 2014 など）．また，患者参加を促進させるはずの手続きは，実際には医師主導で診療を進めるための手段として機能する場合があることも報告されている（Landmark et al. 2016 など）．こうした複雑さを踏まえたとき，理念に基づいてトップダウンに介入プログラムを考えることに加えて，会話分析のようなアプローチから実際の診療で生じていることを記述し，その中から理念に近づくための手がかりを見出すことも重要であると思われる．

実際の診療で生じていることを記述する研究は，1970 年代後半から 80 年代にかけて，録音・録画されたデータを使用することによって開始された．これら初期の研究は，医師による主導権の独占や医師から患者への情報の非開示などの相互行為の非対称性を見出した．Mishler（1984）が，そうした非対称性を「医療の声による生活世界の声の抑圧」と論じたことは有名である．これに対し，90 年代以降に大きく進展した会話分析研究は，そうした非対称性の存在を再確認しつつも，よりきめの細かい知見を積み重ねてきた．その中で，医師が患者のパースペクティヴに敏感な形で診療を進める手続も記述されてきた．たとえば，医師は身体診察中に観察したことを声に出して述べることで，患者の心配事を正当化したり医師の推論が向かう方向性を患者に開示したりする（Heritage & Stivers 1999）．医師が患者に診断名を伝えるとき，その診断を患者が受け入れにくいと思われる文脈がある場合には，医師は診断の根拠を丁寧に説明して，診断を受け入れやすくする（Peräkylä 1998）．また，ガン告知などの悪いニュースを伝えるとき，医師はあらかじめ患者が事態をどう捉えているかを聞き出して，患者の視点を取り込んだ形でニュースを伝える工夫をする（Maynard 1992）．これらの研究は，日常的診療の多くがおおむね医師主導で進行するとはいえ，そのなかにも一定程度，患者との共感や相互理解や合意形成を促進する可能性が含まれていることを明らかにしている．

以上のような背景を踏まえ，本ワークショップは，日本の診療場面において医師が用いている手続の中に患者との共感・相互理解・合意形成などを促進するどんな契機が存在しているのかを探索的に記述し，それに基づいて医師と患者とのパートナーシップが促進される可能性をボトムアップに考えてみたい．表題にある「間主観性」という言葉は，いささか牽強付会であるが，こうしたわれわれの関心をカヴァーする見出しとして便宜的に用いている．すなわち，本ワークショップで取り扱うのは，医学の専門家である医師と病気経験の当事者である患者とのあいだで，共感・相互理解・合意形成などの「間主観性」を促進すると思われる（あるいは促進することをめざして用いられる）相互行為手続やプロセスである．

企画責任者と話題提供者は現在，以上のような問題意識を緩やかに共有しつつ，共同研究を進めている．本ワークショップは，その予備的研究成果を提示し，参加者との討論を通じて研究のより一層の進展を期す

るものである．この共同研究は，会話分析を専門とする社会学者（串田，川島）と会話分析に関心を寄せる医師（阿部），看護師（佐久間），臨床心理士（大石）からなる学際的チームが，診療場面のビデオ録画データを共有する形で実施している．現有データは，A 大学附属病院の総合診療科外来で現在までにビデオ録画された 271 診療場面（うち初診 98 場面，患者数 98，医師数 30）である．総合診療科とは「特定の臓器に偏った治療ではなく，プライマリ・ケア，全人的医療を実践するとともに，そのような能力を備えた医師の養成を目的とする」（福井 2002）病院の一部門である．2017 年時点で全国の大学病院の約 85%に設置されており，半数以上は外来診療のみを行う（武岡他 2017）．A 大学附属病院においても，総合診療科は原則として外来診療のみを行っており，患者の訴える問題に初期診断をつけて，病院内の適切な診療科や地域の病院・診療所へと患者を紹介するのが主な仕事である．なお，われわれのデータ収集は A 大学附属病院倫理委員会の承諾を得て行い，診療にかかわるすべての人から文書で同意を得た．

ワークショップでは，このデータに基づいて 5 つの話題提供を行う．当日の進行は以下の予定である．

1) 企画の趣旨説明（串田秀也）5 分
2) 医師による定型的共感表現が果たす診療場面での機能の検討（阿部哲也）25 分
3) 症状描写の協働的産出（串田秀也）25 分
4) 検査の勧め方（大石直子）25 分
5) 異常のない検査結果の伝え方（佐久間博子）25 分
6) 総合診療科における gatekeeping work（川島理恵・串田秀也）25 分
7) 全体討論　20 分

2. 医師による定型的共感表現が果たす診療場面での機能の検討（阿部哲也）

診察場面における医療面接の目的は，1.効果的な医療者・患者関係の確立，2.患者からの適切な情報収集，3.患者教育の 3 つであり，後二者の質の高さには前者の有無が関与すると考えられている．効果的な医療者・患者関係は，患者から医療者が信頼に足る人物であると認識されることによって構築されるものである．これには，診察室で患者が医療者と出会った瞬間の印象から数ヶ月の期間で繰り返される相互交流，医療面接以外でも的確な診断を伝えることから手術での執刀など，様々なレベルでの関与が考えられる．

医療者による共感がこの関係性の構築に関与することも，以前から指摘されている（Rogers 1975）．また，共感的態度は患者の精神的苦痛の軽減（Olson 1995）や満足度向上（Kim et al. 2004）にも関連することが報告されている．しかし，共感が実際にどのようにこれらの望ましい変化に作用するのかは解明されていない．そのために医学教育場面の教員にとってはその指導が困難であり，医学生にとっては学習への意欲が高まりにくい状況が存在する．

われわれは，診療中に医療者が共感的態度を示す場面での相互行為や医療者の実践を具体的に明らかにして，医療面接教育での共感の評価・指導方法を確立することを目指している．医学教育では，患者が苦悩を表現する場面で「それは大変でしたね」のような定型的な共感発言を用いることが指導されており，今回そのような発言がなされている 20 場面を抽出して分析した．これにより共感発言が，その使用場面や医師が併用する非言語的コミュニケーションとの組み合わせによって，たんなる「共感」とは異なる，その前後の文脈に密接に関与した 4 種類の機能を持つことを明らかにしたので，これを報告する．

第一は主に，患者が主訴を自発的に語り始める場面での共感実践であり，新たな語りを誘い出す機能を有するものである．医師は，診察前に患者が記述した問診票を確認しているので，前もってある程度の症状把握が可能な状況にある．通常は患者が示す苦悩への理解を医師が伝えることを共感としてイメージするが，この場面では患者が十分に語る前に，医師が定型的な共感表現を用いることがある．医師は，問診票の内容を言語的・非言語的に共有しながら，かつ患者の目を見ながら話しており，これに対して患者は，はい/いいえの回答とは異なる語りを始めることが多い．一般的に患者は，問診票に記載した内容を再説明する必要性の判断に苦慮し，医師からの問いかけに対してそれをもう一度語ることが多い．しかし，このような共感表現で患者の苦悩への理解が先に示されることで，患者は同じことを語る必要がなくなり，それに類縁する新たな語りの機会を与えられることになる．

第二は，診療早期での患者による自発的な語りや医師による情報収集がなされる場面において，患者の受

診の正当性を承認する役割を示すものである．概して患者にとって，その日の受診の正当性が医師に容認されるかどうかは大きな懸案事項の１つである．そのため患者は主訴を提示する際，しばしば症状の重篤度や自己対処の十分さを伝えて受診の正当性を示そうとする．こうした患者の発話の後に医師が定型的な共感表現を用いる時，医師は必ずしも患者に目を向けているとは限らず，その後には患者の応答を要求せずに情報収集のための質問を展開させることも多い．そしてその問診は，緊急性や来院理由の把握目的からより診断目的へと変化することが多い．つまり患者の語りは続くものの，その質が変化するわけである．このタイミングでの共感表現は，医師が受診を妥当だと判断したことを反映しており，患者の懸念を解消する役割を果たしている．これによって患者は，安心して症状の語りを続けることができるようになる．

第三には，患者の語りの方向性を医師が変える際に生じる抵抗を緩和する機能がある．医師が主訴の情報収集を進める中で，患者はときに生活世界上の内容など，医師には脱線に見える発話を行うことがある．そのような場面で医師が定型的な共感表現を用いる時，第二のパターンと同様に患者を見ていることもいないこともあるが，その直後にはそれまでと異なる話題が医師によって開始される．患者の語りを当人の意に反して終結に持ち込むことに対して患者は不快感を、医師はためらいを通常感じるものであり，このような共感表現が主訴から離れた話題への理解を一時的に示すことで，その次の話題への展開をスムーズにさせる機能を担っていると考えられる．

第四は，患者から提供される情報に前もって重み付けを与えることで，その後の治療方針の共有を円滑にする機能である．患者の語りには，医師にとっては重要な内容であっても患者にその自覚がないものもある．そのような語りに視線を向けて共感表現を示すことで，まずその話題への医師の関心の高さが伝わり，それに関する患者の語りが産出されやすくもなる．さらに診療の後半で診断・治療のためにその情報を医師が活用する際に，共感を示して患者に印象付けておいたことが伏線となって治療方針の共有が進みやすくなる．

このように，医師による定型的共感表現から 4 つのタイプが抽出された．共感という間主観的行為は，治療関係という曖昧なものとの関わりで理解されているが，ほとんど具体化されていない．共感表現を用いることによる医師の実践は，主に患者への関心と了解の 2 つを示すことであるが，それが使用される状況によって異なる役割を果たすことが明らかになった．本知見の医学教育への応用によって，文脈に呼応して共感表現を意図的に活用するバリエーションが増え，医療面接の質を向上させることができると考える．

3. 症状描写の協働的産出（串田秀也）

問診（history-taking）とは，患者が問題を提示したあと，症状の詳細，他の症状の有無，病歴・治療歴，生活習慣などについて医師が追加情報を収集する活動である．問診に関する初期の研究は，医師が質問によって相互行為の進行を主導し，患者のふるまいは質問が要請する短い応答を返すことのみに切り詰められ，医師が応答から何を受理したのかは患者に開示されないなどの非対称性を見出し，それを医師と患者のあいだの権力関係の産物だと論じた（Fisher 1984; Frankel 1984; Mishler 1984）．だが，より近年の研究では，非対称性が医師と患者の役割の自動的な帰結ではなく相互行為における交渉の産物であることが明らかにされ，患者が医師の質問デザインや医師の追求する情報収集の方向性に抵抗する場合もあることが例証されてきた（ten Have 1991; Stivers & Heritage 2001; Stivers 2007）．

本報告は，この近年の研究動向を発展させ，問診で患者の症状に関する描写が確定されていく過程に見られる 1 つのタイプの交渉を記述する．医師はしばしば「どんな X？」型の質問を用いて，患者に症状の身体感覚の描写を求める．この活動には，1 つのジレンマが伴う．一方で，身体感覚は患者の認識的テリトリー（Heritage 2012）に独占的に属すると見なされる事象なので，医師は患者がそれを自分の言葉で表現するのを尊重する必要がある．他方で，身体感覚を言語的に表現するのは難しい作業なので，医師は医学的に意味のある情報が得られるよう患者を方向づける必要もある．医師と患者は，患者の身体感覚に対する言語的描写を確定していくに当たって，この 2 つの要請のバランスをとることに指向しながら，互いの出方を交渉している．事例(1)はその一例である．

(1)
01 医師:　　どん::な頭痛ですか¿ <ズキズキジンジンピリピリ>とかなんかそういう(.)
02　　あの::::.hhh う::んそれぞれ痛みって.hh＝

03 患者:　　＝[う::::ん]
04 医師:　　＝[ヒリヒリも]痛みやし[°(どうゆ-]どうですか　[　　)°]
05 患者:　　[う:::ん]　　[.hhhh](.)ど:::う
06 患者:　　ゆったら°>ええんやろ<°　<締め付けられる>よう-なんかこう目::とかももう
07　　.hh なんやろ>こう<(0.8)飛び出るん>ちゃうか-<　ど::うゆったら　>いんですかね
08　　こうやっぱ<　締め付けられる感じ::?
09　　(0.2)
10 医師:　　ふ:::[:ん_]
11 患者:　　[で　]すかね:::.ん- ん::ん_=

((6 行省略))

18 医師:　　例えば:あの:::(0.3)<ズキズキズキ>ってゆうような::,
19 患者:　　う::ん.
20 医師:　　え:::と::::(.)脈を打つような,
21 患者:　　あ[それはない.]
22 医師:　　[そういう　]痛みではな[く,
23 患者:　　[う::ん.((nod))
24 医師:　　ずっ-ギュ::::[:(とかって)]どっちかっていうと[鈍痛　]みたいなの[がずっと]続くってこと_
25 患者:　　[う:::ん.　](3 nods))　　[う:ん.]((nod))　[う:ん.]((nod))
26　　(.)((患者 nod))
27 医師:　　°あ::あ°


図１　「ズキズキズキ」(18 行目)


図２　「ギュ:::::」(24 行目)

医師は，WH 質問によって患者が応答の仕方を選択する余地を与えつつ，応答の「ターム」を例示することで応答を方向づける工夫もする（01-02, 04 行目）．この工夫は応答の「候補」を提示することに比べてより控えめであり，患者がまだ応答を開始していないこの位置では，医師は控えめな方法を用いている．これに対し，患者は自分の言葉で頭痛の身体感覚を描写しつつも，応答の困難さや描写の不確かさを示すことで，医師がより積極的な方法で身体感覚の描写を援助する余地を作り出している（05-08, 11 行目）．こうして，医師の援助の適切性が保証されると，医師は「Y じゃなくて Z？」形式の応答候補を提示し，確認を求める(18, 20, 22, 24 行目)．医師は，患者の身体感覚への代替的描写を提案する（24 行目）とともに，それと識別可能な別の身体感覚との対比を通じて(18, 20, 22 行目)，描写をより医学的に明確な意味を持つものへと変形する．医師はまたこのとき，「ズキズキズキ」と言いながら緩く握った右手を 3 回自分の頭部に近づけ，「ギュ::::」と言いながら前方の空気を押すように右手を動かす（図 1，図 2 参照．　左側が医師）．医師はこうして 2 種類の身体感覚の相違を身ぶりで例示し，患者がそれを参照して自分の身体感覚を再分析することを促している．患者が医師の身ぶりをモニターし，医師の応答候補に確認を与える（25-26 行目）ことで，両者は医学的にレリヴァントな症状描写を協働で産出している．

別の事例では，両者の出方がうまく噛み合わない場合も観察される．そこでは，患者が自分の症状の身体感覚を身ぶりで実演しつつ描写しようとすると，医師の方も医学的に識別すべき身体感覚を身ぶりによって

例示する形で応答候補を提示しようとし，両者のあいだで参加の枠組みをめぐる競合が生じる．そして，患者は医師の応答候補に対して自分自身の描写を繰り返すことで，医師による描写の変形作業に抵抗を示している．このように両者の出方が噛み合わない事例を合わせて考察することで，患者の身体感覚に関する言語的描写を確定するという作業が，両者の参加の調整をめぐるデリケートな交渉から成り立っていることがわかる．

4. 検査の勧め方（大石直子）

急性疾患の診療場面では，1.患者が問題を訴え，2.医師が必要な情報収集を行い，3.医師が診断を下し，4.治療方法を決める，という一連の活動が原則としてこの順になされる（Robinson 2003）とされる．

医師にとって「検査」とは上記 2.のステップに該当する．患者の訴える症状を医学的診断，ひいてはその治療法と結び付けるために，問診や身体診察に加えてより詳しい情報収集を行うという目的で行われる．しかし，医師と患者の相互行為としては，医師が検査を勧めて患者の同意を得るという意思決定を伴うので，上記 4. の治療方法を決める活動に似た面もある．過去の研究では，問診（Boyd & Heritage 2006）や身体診察（Heath 2006），診断の伝達（Peräkylä 2006），手術や投薬といった処置に関する意思決定を扱ったもの（Stivers 2006）は多くみられるが，医師が検査をどのように勧めるかについての研究は管見の限りほとんどない．しかしわれわれのデータにおいては医師が検査を勧める場面が非常に多くみられる．

そこで本報告では，医師が検査を勧めるさいにどのように発話を組み立てているかに注目したい．初回診察データの中で，医師が検査を勧めている 19 ケースを選び，検査を勧める発話の組み立てを分析した．その結果，検査を勧める発話はシンプルな構造を持つ場合もあれば，より複雑な構造を持つ場合もあることが分かった．本報告ではその中から 2 つの事例に焦点を当て，検査を勧める発話の構造の違いが，患者の受診理由やニーズの違いを反映していることを示す．

(1)は，検査を勧める発話がシンプルな構造を持つ事例である．患者の主訴は腹痛であり，診療の最初に患部を見せながら今も痛いと訴える．だが，症状を提示するだけで検査や処置についての希望は述べていない．医師は身体診察で痛い部位を突き止めたあと，胆嚢や腸の問題が考えられるという所見を述べ，それから検査を勧めている．

検査を勧める発話は，2 つの要素からなるシンプルな構造を見せている．第一の要素は，大まかにどんな検査をするかを提示することである．第二の要素は，具体的な検査項目の提示である．

(1)
01 医師: =だからちょっとそういう可能性は考えんといかんので[え::，>え<とにかくその今日できる::u-=
02 患者: [は:い．
03 医師: =じょう(k/きょ)-あの今日できる検査で:<u>:</u>,今からざっと:できる-ことは:,((患者を見る))=
04 患者: =はい．=
05 医師: =しとこうと思うの．((患者を見る))
06 患者: はい．((医師と視線合わせ頷く))

((8 行省略))

15 医師: とにかくちょっと検査は:えっと:[してほしい．
16 患者: [はい,はい．
17 医師: .hh で,して欲しいのは:血の<u>検査．</u> ((指折り数える))
18 患者: はい．

((19-26 行目：医師が指折り数えながら検査 4 項目を提示．患者はそのつど頷く))

27 医師: ちょっとその辺取らせていただきます[の<u>で:</u>,((視線はモニターの方))
28 患者: [はい
29 (.)
30 医師: ちょっと今から順番に行っていただ[きます<u>ね?</u>]

31 患者:　　[はいはい.]((医師と視線合わせ頷く))
32 医師:　　[よろしいですか?
33 患者:　　[°はい° ((頷きながら))

医師は01-05行目で,「今日できる検査」という表現によって,検査の内容を明確に特定せずに検査することを勧め,患者の同意を得ている(06行目).また,17-28行目では,具体的に検査内容をリストアップしたうえで,患者の同意を取り付けている.医師は,検査をすぐに行う必要があることを示す勧め方をすることで,今現在お腹が痛いと訴えた患者のニーズを理解していることを示している.

これに対して事例(2)は医師の発話構造がより複雑な事例である.主訴はふらつきで,約1年前より時折自覚症状がみられていた.患者には本症状の原因に対する解釈(低血圧)と対処の希望(昇圧剤の処方)があり,問診内でこれを医師に伝えている.しかしその希望に対し医師は「原因を特定するためしっかり診察したい」と返答し身体診察に入っている.診察内では安静時の血圧には異常がなく,血圧の変動に異常がみられることがわかった.

(2)
01 医師:　　で:通常であれば((患者を見る))(0.4)あの:(0.9)
02　　そ-ここまで大きく↑下がらない.
03　　(0.8)((遅れて患者頷く))

((12行省略))

16 医師:　　こんだけ血圧が下がるってことは

((6行省略))

24 医師:　　何:らかの原因があると思われるんで:?あのそれら(0.6)
25　　血の検査であったりとか[心臓]の検査であったりとかっていうのをこれから=
26 妻:　　[う:ん]
27 医師:　　=進めて行こうと[思います.]
28 患者:　　[((頷く))]
29 妻:　　[((頷く))]

((12行省略))

42 医師:　　.hh で:(.)さっき血圧の:↑上げたらいい:

((3行省略))

46 医師:　　上げたらいいと言われてたんですけど:

((6行省略))

53 医師:　　恐らく血圧を上げるようなお薬なんか使うと(.)寝てる時に?160とか70とか(0.3)
54　　余計あの:ものすごく高くなって:しすぎ::↑ちゃうこともあるんで?
55　　.hhh ちょっとそのお薬今日導入するのは:見送らさせてください危ないんで.
((56-88行目:医師が検査6項目を提示.患者と妻はそれぞれの提示に共に頷く))

医師は,安静時の血圧ではなく血圧の変動に問題があること,この原因を探る必要があることを説明(01-03, 16, 24行目)した上で検査を提案し(24-25, 27行目)患者たちの同意を得ている(28-29行目).その後医師は患者の希望する対処は不適切であることを説明し,希望を却下する(42, 46, 53-55行目).医師のこの工夫は,患者に提案する検査の必要性を伝わりやすく,また患者の希望の却下を受け入れやすくしている.

検査提案の場面では，医師は患者の受診理由や検査の必要性などの事情に応じて提案の構造を工夫していた．患者の持つ不安や希望が明確な場合は，医師はそれに沿った形で検査提案の発話を組み立てている．

5. 異常のない検査結果の伝え方（佐久間博子）

この報告では，医師が検査結果をどのように伝えるかを，特に，検査結果に異常がない場合の伝え方に注目して記述を試みる．異常がないことは，重大な病気の可能性が除外されたという意味では，良いニュースである．しかし，症状があるにもかかわらず異常がないという検査結果がでることは，患者にとって不確実さを残し不安を喚起する（Fitzpatric & Hopkins 1981）．医師が良いニュースとして結果を伝えても，患者はそれに抵抗し，それならばなぜ症状が続くのかと質問することがある（Maynard & Frankel 2006）．したがって異常のない検査結果の説明は，たんに検査の結果を患者に分かりやすく伝えるだけではなく患者の心情への配慮や抵抗への対処といった医師の工夫と，それに対する患者の反応によって形作られる側面がある．

この報告において「検査結果に異常がない場合」とは，客観的データ内に患者の主訴に関する兆候を見いだせない状態を指す．検査結果に異常はなかったが新たに検査を追加することなく終診や様子観察となった13ケースを分析対象として整理したところ，異常のない検査結果の説明は①良いニュースとしてのheadline，②良い評価の根拠となる検査結果の説明，③主訴と関係ない軽微な異常の説明，④主訴の原因に対する仮説の提示，が基本構造となっていることが見出された．(1)はこの基本構造があらわれている1事例である．

「胸の苦しさ」を主訴に夫同伴で受診した患者の初回診察で，医師は検査の意図を説明することなく心電図と血液検査をオーダーしている．以下に示すデータは一連の検査後に行われた相互行為であり，この相互行為は初回診療と同日に行われている．

(1)
01 医師:①→ あの:いろいろ検査してきていただいて:
02 夫: はい
03 患者: はい
04 医師:①→ あの:今の時点では特におお-あの心配はないということはわかりました(.)はい
05 (0.4)
06 医師:②→ あの:::一番ね(0.4)あの:ゥ::こういった症状で心配なのが心筋梗塞という[状態なんですけれ]ども
07 夫: [はいはいはい]
08 患者: ((頷く))
09 医師:②→ あの:(.)心臓の動きも調べてもらったら(0.3)あの壁の動き問題がないし(0.3).hあ:の::(0.3)
10 → まいろんな(.)膜がね(.)あの(0.8)え:心臓の中弁膜というものがあるんですけれどもその:(.)
11 → あの::(0.7)動きも:(.)問題がなくて
12 夫: うんうん.
13 医師:②→ 今の時点での心臓の動きには(0.4)問題がないですね

((12行省略))

26 医師:②→ [ですから]ね心臓に何かあったと思われるんですけれど[も:]
27 夫: [うん]
28 医師:②→ あの筋肉が壊れることころまではいってないことが[わかりました]
29 夫: [うんうん]

((8行省略))

38 医師:③→ ただねちょっとね[あの]
39 夫: [うん]
40 (1.4)
41 医師:③→ 肝臓のね酵素が少し上がってるんですよ.
42 患者: ((頷く))

((55 行省略))

97 医師:④→　あの::症状はね狭心症と呼ばれるような:もの(0.5)だと思われま[すね]

①で良いニュースとしての headline が産出される．04 行目の「心配はないということはわかりました」という自己修復された発話において，客観的データが患者にとって心配のない内容であることを断言しており，検査結果は患者にとって良いニュースとして提示されている．しかし患者から反応はなく（05 行目）患者にとって headline の内容は受け入れがたいことが暗に示される．医師には患者の受け入れ難さに対する対処の必要性が生じ，②において良い評価の根拠となる検査結果の説明を始める．具体的には，一番の懸念事項が心筋梗塞であることに言及したうえで（06 行目），部位ごとに「問題がない」ことを示し（09-11 行目），心筋梗塞の可能性を否定している（13 行目）．さらに 28 行目で「筋肉が壊れるところまではいってないことがわかりました」と心筋梗塞が否定できた検査のプラス面を強調している．このように検査の意義を示すことで患者の受け入れ難さに対処している．そして 38 行目より③主訴と関係ない軽微な異常の説明が始まる．偶然軽微な異常が見つかることは患者にとって検査を行ったメリットといえ，これを伝えることは検査が十分に精密に行われたアピールになる．④で主訴の原因に対する仮説の提示がされる．先行研究では，診断に不確実性が伴うときは単刀直入な発話以外のデザインが使われると指摘されている（Peräkylä 1998）．事例においても 97 行目は直接的でないデザインで発話されている．

(1)とはタイプの異なる事例を分析したところ，以上の基本構造が柔軟に適応されているのが見出された．1 つの事例では，患者は半月前に同じ検査を受けて異常はなかったが，医師は念のために検査を行った．検査をすることがオプションに近いこの事例では，基本構造の②「良い評価の根拠となる検査結果の説明」は省略されていた．もう 1 つの事例では，患者は長年にわたって原因不明の多彩な症状を抱え，それらの原因を検査で究明することへの強い期待を表明していた．検査の結果に異常が見つからないことは，この患者には特に受け入れがたいことが予想される状況だった．この事例では，医師は①「良いニュースとしての headline」を用いず，③「良い評価の根拠となる検査結果の説明」の中に④主訴の原因に対する仮説の提示を組み込む形で検査結果を説明していた．

これら複数の事例の比較から，医師は患者の状況に合わせて，異常のない検査結果を説明するときの発話の組み立てを調整し，患者の不安に対処した形で説明を行っていることが分かった．

6.　総合診療科における gatekeeping work（川島理恵・串田秀也）

日本の医療システムの特徴として高い柔軟性が挙げられ，その最たるものがオープンアクセスと言える（OECD 2014）．患者は自由にどの診療科にかかるのかを選択でき，脳外科といったかなり専門的な診療科でさえ自身の決定によってかかることが可能である．しかし，こうした医療システムにおいて十分な自由を享受しているように見える患者は，同時に最適な選択を行う責任を負うことになる．またこのシステムの特性上，大病院に患者が集中するのを避けることはできない．そのため大学病院の外来では，軽症患者の病院へのアクセスを制限するための gatekeeping が必要となる．

本発表では，総合診療科において医師が担う gatekeeping work に着目する．医師が「様子見」や「かかりつけ医の受診」など，今後継続して大学病院では治療を行わないことを勧める際，患者の抵抗をどのように扱い，治療方針の話し合いを行なっているのかを分析した．対象としたデータは，医師が患者に今後の治療方針として「様子をみる」や「かかりつけ医の受診」，または「紹介医への差し戻し」などを提案した 31 ケースである．

これまで会話分析の研究では，意思決定過程のやり取りにおいて医師が患者の反応に極めて敏感に提案を組み立てていることが明らかにされている（Koenig 2011; Stivers 2006）．たとえば，患者の抵抗が何らかの形で示された場合，治療をしないことをわざと肯定的なデザインで述べる（Stivers 2006）などである．そうした相互行為上の工夫を通じて，医師は患者が受け入れやすい形に提案を組み立てている．本発表で対象とする医師からの提案は，基本的には大学病院での治療を終えることがその中心にある．患者の病気の原因がまだ解明されていなかったり，症状がまだ継続していたりする場合，これは患者にとって受け入れづらい提

案である．本発表では，患者の抵抗が予見されるこのような提案がなされるとき，用いられる主要な相互行為的リソース３つの記述を試みる．

第一は，継続的な関わりを保証する提案のデザインである．医師は，提案を複合的に構成していた．たとえば，中心的な提案が様子見である場合，そこに補助的な提案として，「もちろんまた心配ならきてもらえれば」といった継続的な関わりの保証を付け加えていた．第二は，制度の仕組みや使い方についての教示である．医師は，治療方針の提案理由について説明する際，医学的な説明だけではなく，医療システムを参照しつつ，その仕組みを患者に教示することがしばしば見受けられた．たとえば，「ここは大学病院なのでふだん風邪とかでは」と大学病院の役割を説明し，その上で「今後近くで内科さんとか探してもらった方がええと思います」と提案を行う．その際，患者にこのシステムをどう使うべきかかなり具体的かつ詳細な教示が行われていた．第三は，より深刻な事態への言及である．患者が医師の提案に抵抗し，大学病院内の他の診療科に紹介してもらうことを希望する場合もある．その際，医師はその診療科で扱うにふさわしいより深刻な症状やその治療に言及する．そうすると，患者のほうからその必要性を否定し，抵抗が取り下げられることがあった．

日本特有のオープンアクセスにおける大学付属病院の総合診療では，診療の最初に大学病院を選んだことを患者が正当化しつつ問題を提示する．同じように医師も，患者に治療方針としてかかりつけ医での受診や様子見を勧める場合は，その提案を正当化する必要が生じてくる．その際，医師は医学的な理由の説明だけでなく，医療システムの説明，すなわち，大病院とかかりつけ医の役割分担や，各診療科の守備範囲の違いや，他の医療機関を利用するための具体的手順などの説明を付加していた．今回の分析から，そうした制度的な局面が参照されることが，治療方針の話し合いを進める上で有効なリソースとなっていることが明らかになった．

参考文献

Boyd, E. & Heritage, J. (2006) Taking the history: questioning during comprehensive history-taking. In Heritage, J. & Maynard, D. W. (eds.) *Communication in Medical Care: Interactions between Primary Care Physicians and Patients* (pp. 151-184). Cambridge, England: Cambridge University Press.

Charles, C., Gafni, A. & Whelan, T. (1997). Shared decision-making in the medical encounter: What does it mean? (or it takes at least two to tango). *Social Science & Medicine* 44(5): 681-692.

De las Cuevas, C. & Pe ñ ate, W. (2014) Preferences for participation in shared decision making of psychiatric outpatients with affective disorders. *Open Journal of Psychiatry* 4: 16-23.

Fisher, S. (1984) Institutional authority and the structure of discourse. *Discourse Processes* 7: 201-224.

Fitzpatrick , R. & Hopkins, A. (1981) Patients' satisfaction with communication in neurological outpatient clinics． *Journal of Psychosomatic Research* 25(5): 323-478.

Frankel, R. M. (1984) From sentence to sequence: Understanding the medical encounter through microinteractional analysis. *Discourse Processes* 7: 135-170.

福井次矢 (2002) 特集 : 内科―100 年のあゆみ（内科横断領域） Ⅰ. 内科横断領域の 100 年 1. 総合診療科. 『日本内科学会雑誌』91(11): 16-20.

Heath, C. (2006) Body work: the collaborative production of the clinical object. In Heritage, J. & Maynard, D. W. (eds.) *Communication in Medical Care: Interactions between Primary Care Physicians and Patients* (pp. 185-213). Cambridge, England: Cambridge University Press.

Heritage, J. (2012) Epistemics in action: Action formation and terittories of knowledge. *Research on Language and Social Interaction* 45: 1-29.

Heritage, J. & Stivers, T. (1999) Online commentary in acute medical visits: A method of shaping patient expectations. *Social Science & Medicine* 49: 1501-1517.

Kim, S. S., Kaplowitz, S. & Johnston, M. V. (2004) The effects of physician empathy on patient satisfaction and compliance. *Evaluation & the Health Professions* 27(3): 237-51.

Koenig, C. J. (2011). Patient resistance as agency in treatment decisions. *Social Science and Medicine* 72: 1105–1114. doi:10.1016/j.socscimed.2011.02.010

Landmark, A. M. D., Svennevig, J. & Gulbrandsen, P. (2016) Negotiating treatment preferences: Physicians' formulations of patients' stance. *Social Science & Medicine* 149: 26-36.

Maynard, D. W. (1992) On clinicians co-implicating recipients' perspecrtive in the delivery of diagnostic news. In Drew, Paul & Heritage, John (eds.) *Talk at Work: Interaction in Institutional Settings.* Cambridge: Cambridge University Press, pp. 331-358.

Maynard, D. W. & Frankel, R. M. (2006) On diagnostic rationality: Bad news, good news, and the symptom residue. In Heritage, J. & Maynard, D. W. (eds.) *Communication in Medical Care: Interactions between Primary Care Physicians and Patients* (pp. 248–278). Cambridge, England: Cambridge University Press.

Mishler, E. G. (1984) *The Discourse of Medicine: Dialectics of Medical Interviews*. Norwood, NJ: Ablex.

OECD. OECD reviews of health care quality: Japan raising standards assessment and recommendations. 2014. https://www.oecd.org/els/healthsystems/ ReviewofHealthCareQualityJAPAN_ExecutiveSummary.pdf

Olson, J. K. (1995) Relationships between nurse-expressed empathy, patient-perceived empathy and patient distress. *Journal of Nursing Scholarship* 27(4): 317-22.

Peräkylä, A. (1998) Authority and accountability: the delivery of diagnosis in primary health care. *Social Psychology Quarterly* 61(4): 301-320.

Peräkylä, A. (2006) Communicating and responding to diagnosis. In Heritage, J. & Maynard, D. W. (eds.) *Communication in Medical Care: Interactions between Primary Care Physicians and Patients* (pp. 214–247). Cambridge, England: Cambridge University Press.

Robinson, J. (2003) An interactional structure of medical activities during acute visits and its implications for patients' participation. *Health Communication* 15(1): 27-59.

Rogers, C. R. (1975). Empathic: An unappreciated way of being. *The Counseling Psychologist* 5(2): 2-10.

Stevenson, F. A., Barry, C. A., Britten, N., Barber, N., & Bradley, C. P. (2000) Doctor-patient communication about drugs: the evidence for shared decision making. *Social Science & Medicine* 50, 829-840.

Stivers, T. (2006). Treatment decisions: Negotiations between doctors and patients in acute care encounters. In Heritage, J. & Maynard, D. W. (eds.) *Communication in Medical Care: Interactions between Primary Care Physicians and Patients* (pp. 279–312). Cambridge, England: Cambridge University Press.

Stivers, T. (2007) *Prescribing under Pressure: Parent-Physician Conversations and Antibiotics.* New York: Oxford University Press.

Stivers, T. & Heritage, J. (2001) Breaking the sequential mold: answering 'more than the question' during comprehensive history taking. *Text* 21(1/2): 151-185.

武岡宏明・堀端謙・増井信太・鰺坂和彦・鍋島茂樹 (2017) ウェブサイトから調査した大学病院総合診療部門の現状. 『福岡大学医学部紀要』 44(2): 81-86.

ten Have, P. (1991) Talk and institution: a reconsideration of the "asymmetry" of doctor-patient interaction. In Boden, Deidre & Zimmerman, Don H. (eds.) *Talk and Social Structure: Studies in Ethnomethodology and Conversation Analysis* (pp. 138-163). Cambridge: Polity Press.

社会言語科学における対照研究の可能性

企画責任者：多々良直弘(桜美林大学)
話題提供者：新井保裕(東洋大学)　植野貴志子(東京都市大学)
櫻田怜佳(日本女子大学)　ツォイ・エカテリーナ（一橋大学)
野村佑子（順天堂大学)　望月雄介（名古屋大学)
八木橋宏勇（杏林大学)

1. はじめに

言語の対照研究は，複数の言語を比較対照し，様々な言語現象において観察される相違点と類似点から分析対象とする諸言語の言語体系やコミュニケーションの特徴を明らかにすることを目的としている. 対照研究は社会言語科学と非常に関連性の強い研究分野であり，これまでも社会言語科学会において対照研究をテーマにしたシンポジウムやワークショップが開催され，学会誌『社会言語科学』においても第 21 巻第 1 号で特集号「人・文化・社会を理解することばの対照研究」が組まれた. これまでは日英語を中心に日韓や日独など二言語を対象にした研究が多かったが，近年では三言語以上の比較対照研究も行われている. 様々な言語文化的背景を持つ人々がコミュニケーションをとる機会が増えている現代社会において，複数の言語を対象とした研究を更に進めること，また複数の比較対照研究の成果を統合的に解釈し，さらなる発展の可能性を模索することも重要であるだろう.

言語の対照研究を行うための理論的枠組みや方法論は言語学の諸分野において様々であるが，本ワークショップでは，自然会話やメディア・ディスコース，翻訳などの様々な言語データを用いて日本語と英語，韓国語，中国語，ロシア語などを比較対照した研究について各話題提供者がその成果を報告し，その後それぞれの研究成果の関連性や社会言語科学においてどのような対照研究を今後展開していくことができるのかを考察して行く. また，このような対照研究の成果が国際化が進む現代社会においてどのような貢献ができるのかという点についても議論を展開する.

2. 日米女子大学生の言語行動と自己対社会観―「ミスター・オー・コーパス」をデータとして―

（植野貴志子）

本研究では，日本人およびアメリカ人の女子大学生ペアが「びっくりしたこと」という同一のテーマを与えられて会話をするとき，二者が互いにひとまとまりの経験談を話すのか，あるいは，まとまった経験談を話すことなく，とりとめのない雑談のようなやりとりを展開するのか，といった「談話タイプ」の傾向を明らかにしたうえで，その背後にある自己対社会観を「ウチ・ソト・ヨソ」（三宅，1994）の概念に基づいて考察する.

データとして使用するのは，「ミスター・オー・コーパス」（井出・藤井編　2014）に含まれる日本語およびアメリカ英語の二者会話，各 10 組である. 会話参加者は，日本人およびアメリカ人の親しい間柄にある女子大学生ペアである. カメラの前に着席した二者に対して，指示者が「びっくりしたことについて，5 分間自由に話してください」と伝え，退室した. その後，二者のみが部屋に残って会話を行った.

日本人ペア，アメリカ人ペアの言語行動を把握するため，市川・徳永（2007）を参考にして，各会話をトピック毎に分割した. 市川・徳永（2007）は，本研究と同じデータを分析し，(1) 明示的なトピック遷移の合図，(2) 初出の内容語を含む発話，(3) 会話の主導権の交代等，トピックの区切りを同定する発話の特徴を提示している. これに基づいて日英語会話をトピックの区切りで分割したところ，日本語会話 10 組には合計 48，英語会話 10 組には合計 38 のトピック区分が検出された. さらに，各トピック区分におけるやりとりを観察した結果，日英語共通して，トピック区分は次の 3 つの談話タイプに分類された. (1)一人語り：一方がひとまとまりの経験談を語り，他方が聞く. 聞き手の反応の 9 割以上をあいづち的反応が占める. (2)協働語り：一方がひとまとまりの経験談を語り，他方があいづち的反応と実質的発話の両方を用いて働きかける. 語りの内容をめぐる二者のやりとりを含む. (3)雑談：まとまった経験談を含まず，二者が自由度の高いおしゃべりを展開する.

表1. 日本語会話と英語会話における談話タイプ別トピック区分数(%)

	日本語会話	英語会話
一人語り	9 (18.7)	18 (47.5)
協働語り	21 (43.8)	18 (47.5)
雑談	18 (37.5)	2 (5.0)
合計	48 (100.0)	38 (100.0)

表1に示す通り，英語会話では「一人語り」と「協働語り」の合計が全体の95%を占めている．このことは，アメリカ人ペアは，全般に，一方がまとまった経験談を話し他方が聞く，または一方の経験談に他方が反応し，その話をめぐって二人でやりとりを展開する，という言語行動をとっていることを意味している．日本語会話では「協働語り」(43.8%) に続いて，アメリカ人ペアにはほとんど見られなかった「雑談」が37.5%を占めていることから，日本人ペアには自由度の高いおしゃべりを展開する傾向が顕著であることが分かる．この違いは，どのように説明されるだろうか．

三宅 (1994) は，日本人とアメリカ人の自己対社会観の異なりを「ウチ・ソト・ヨソ」の概念を用いて説明している．ウチは自己の周りの親しい人々，ソトは自己やウチと関連のある人々，ヨソは自己やウチとは関係がない人々を指す．日本人の場合，自己とウチの境界は曖昧であり，ときに自己はウチと同化する．またウチとソト，ソトとヨソの境界ははっきりと区切られていて，自己はソトに対しては丁寧な態度をとるが，ヨソに対しては無関心である（教授（ソト）には敬語を使うが，全くの他人（ヨソ）には気配りをしないといった具合に）．一方，アメリカ人は，自己は周りのウチとはっきりとした境界で区切られ，親しい間柄であっても自己の内面と一線を画すが，ウチ・ソト・ヨソの境界は曖昧である．アメリカ人のスモールトークを分析した井出 (2014) は，三宅 (1994) が指摘するアメリカ人の自己対社会観は，公的場面での自己開示の重視，個と個を基軸とした会話といったアメリカ社会の理念に沿うものであると論じている．

日本人ペアがカメラの前で普段のおしゃべりのような会話を行うのは，ウチの関係にある二者の境界が曖昧であるため，同化し合って二人の狭い場をつくり，ある種の排他性を醸しながら，その中で行動しているためであろう．二者にとっては，指示者もカメラの向こうの未知の人々もヨソである．アメリカ人ペアが，個々に経験談を語るのは，親しい友人同士（ウチ）であっても，相手の内面とは一線を画しており，率直な自己開示に価値を置いて，個と個を基軸とした会話をしているためであろう．ここには，ソト・ヨソに対する排他性や無関心はほとんど感じられない．日本人，アメリカ人の言語行動や自己対社会観は，各々の言語文化のあり様を反映している．異なる言語文化において暗黙に了解されている言語行動パターンを明らかにする対照研究は，異文化理解のための基礎知識を提供するという重要な役割を担っている．

3. パブリック・スピーチにおける聴衆への働きかけの表現に関する日英語対照研究（櫻田怜佳）

3.1 研究の目的

パブリック・スピーチとは，語り手が自分のアイデアを公にすることであり，人々とアイデアを共有したり，人々に影響を与えたりする手段であると考えられている (Lucas 2011)．スピーチの語り手は，聴衆に影響を与える工夫として，どのような言語表現を用いているのだろうか．本研究は，アメリカ英語母語話者と日本語母語話者がそれぞれの母語で行うパブリック・スピーチ (TED Talks) において，聴衆に働きかける機能を持つと考えられる言語表現のうち，命令（行為指示）表現と疑問形式の表現が用いられる場面に焦点を当て，その特徴を明らかにすることを目的とする．

3.2 先行研究

命令（行為指示）表現や疑問形式の表現は，発話行為理論 (Searle, 1969) や行為要求表現に関する研究（仁田，1991）において，聞き手に行動を促す表現として説明される．政治家による演説や商品の宣伝などのコンテクストにおけるパブリック・スピーチでは，注目を引く (attention getter) 修辞的手段としてあげられることがあるが，命令表現や疑問形式の表現のスピーチにおける形式や機能について，異なる言語を均等な立場から比較するものは見当たらない．

3.3 データと分析方法

本研究では，TED Talks というパブリック・スピーチをデータとして用いる．これは，多様な分野の人物が登壇し，多人数の聴衆に向けて「広める価値のあるアイデア」というコンセプトのもと，15 分程度のスピーチを行うものである．現在60ヵ国以上の世界各地で開催されており，異なる言語を比較対照して研究することが可能なデータであると考える．本研究では，以下のスピーチを用いる．

- アメリカ英語母語話者が英語で行う TEDGlobal (2012 年) におけるスピーチを計 12 本
- 日本語母語話者が日本語で行う TEDxTokyo (2011～2013 年) におけるスピーチを計 12 本

3.4 分析結果

3.4.1 命令（行為指示）表現

スピーチにおいて用いられる命令（行為指示）表現は，1)聴衆に行動を促す機能を持つものと，2)スピーチの進行に関わる機能を持つものという2種類に大別できる．本研究では，聴衆に行動を促す機能に着目する．

英語母語話者のスピーチでは，命令文の形をとる発話や，話者の判断を表す modal operator を伴う発話が観察された．発話に用いられる動詞は，思考（consider，think）や参加・共有（participate，get involved，share）という要素を含むものが使用される傾向が見られた．一方，日本語母語話者のスピーチでは，スピーチの最後に，「試してください」「覚えてほしい」「見直していただけたら」など，聴衆に望む具体的な行動を表現する発話が観察された．

3.4.2 疑問形式の表現

疑問形式の表現を用いて聴衆に問いかける場面では，問いに対する解答が直後に示される局所的なもの（local theme）と，問いの対象が広い範囲にわたり解答が引き伸ばされる大局的なもの（global theme）という2種類の構造が見られた．

英語母語話者のスピーチでは，global theme に関わる問いかけは，スピーチの中核をなす主題を提示する際に用いられ，疑問詞を伴う疑問文（open-ended question）によって発話されることが多く見られた．local theme に関わる問いかけは，問いと解答が直結し，用語や概念の解説を導いたり，話題の焦点を絞ったり，確信を持たせる機能を有し，スピーチの至る所に用いられていた．日本語母語話者のスピーチでは，特に，文末に「～ではないか」という否定疑問の問いかけが多くなされていた．否定疑問には，聞き手の反応に関する何らかの判断への予測（bias）がはたらいていると考えられており（安達 1999），スピーチにおいて語り手が使用する際には，問いかけに対して聴衆も理解や共感を示してくれるであろうという語り手の判断が含まれていると考えられることから，聴衆と理解の基盤を構築できていると想定した上でなされた発話であるといえる．

3.5 考察とまとめ

英語母語話者のスピーチでは，命令（指示）表現や疑問形式の表現が発話されるまさにその時に，これを聴衆が共に考えるというあり方が望まれていると考えられる．日本語母語話者のスピーチは，各エピソードまたはスピーチ全体の最後に用いられる傾向があり，積み重ねられるエピソードの中で聴衆と理解の基盤を共有した上で，聴衆に働きかける言語的機能が用いられているといえる．英語母語話者と日本語母語話者のスピーチを比較することによって，同じ発話行為の中に位置づけられる表現にも，それぞれの言語話者に異なる使用の実態があることを観察することができた．さらに，各言語話者がスピーチをどのように運んでいるかが見出され，異なりがあることが分かった．

4. 解放的語用論から見る日本語談話コーパスにおける「思う」を伴う引用

―英語談話コーパスとの比較から―（野村佑子）

日本語の談話を観察すると，「思う」という思考動詞が見られる．例えば，TOKYO2020 の公式HP でインタビューに答えるアンバサダーは「しっかり盛り上げたいと思っております」のような発言をしている．これは，「しっかり盛り上げたい」という被引用部と「思っております」という引用部を「と」でつなぐ，引用形式の発話である．「盛り上げたいです」と言っても，同様の内容は伝わるものの，「～たいと思っております」のように思考動詞「思う」を伴う引用形式を用いるのである．ところが，同 HP の英語版では，“We’ll liven up the event as much as we can”のように訳され，字義通りの翻訳となる think を伴った引用形式は用いられない．ここには，英語では日本語のような「思う」をここで用いることは不自然となるという語用の傾向の違いがあると考えられる．本発表では，日本語談話に見られる「思う」を伴う引用に焦点を当て，英語談話の比較を通して，その使用に関する特徴を明らかにすることを目的とする．

これまでの引用研究において，日英語の引用の違いについては，直接・間接の区別・差異を中心に詳細な記述がある（中園, 2006 他）．さらに，日本語の引用における文法に関する説明は，西欧言語に見られる観点からのものであるという指摘もある（山口，2009）このような文法上の説明は，西欧言語にも共通する観点から日本語の文法をも説明したものと言える．談話における引用については，引用は「ある場で成立した言葉や思考を，現在の語りの場に引いてくること」（鎌田, 2000）と定義され，どの言語にも存在する現象として言語ごとの差異は注目されてこなかった．直接引用は会話においてその発話を際立たせる効果があることが主な指摘である（Clerk&Gerrig, 1990；Besnier, 1992；Fujii, 2006；大津, 2005；甲田, 2016；他）．従って，日英語の引用の差異は，文法上では取り上げられてきたものの，談話上では注目されてこなかった．そこで，本発表では，コーパスデータにおけるに日英語の引用の分析により，談話上の差異を明らかにすることを目指す．さらに日

本語の「思う」を伴う引用に焦点を当てるため，その特徴については，西欧言語に基づいた理論からではなく，解放的語用論（井出&藤井, 2014）の枠組みの中で解釈するものとする. そのため，「日本語の論理」（山口, 2004）や「純粋経験」（西田, 2018）を用いる. 本発表が扱う談話データは，日英語間で比較可能なコーパスデータ（日英語母語話者同士二人組の会話（日英それぞれ 20 会話）の録音・録画）である. この中から，「思う」と，それに相当する think，be like などを抽出し，使用頻度と引用内容（どのような内容に対して「思う」が用いられるのか）を比較した. その結果，日本語母語話者は，英語母語話者の think 等よりも，高い頻度（約 2 倍）で「思う」を使用し，且つ，引用内容は独り言のような発話（e.g.「あまり意味がないな」と思って）や，感嘆詞のみ（e.g.「へっ」と思って）が多いことがわかった.

考察では，このような引用内容が，話者がその場で思わず発した独話であることを指摘し，独話＋「思う」の形式を繰り返しながら語るという話し方は，聞き手に対し，心に浮かんだことをありのままの「純粋経験」として表出するものであることを示し，それを支えるのは，文構築は主語と「その時頭に浮かんだ内容」を結ぶことだとする「日本語の論理」があることを示唆する.

5. 聖書の対照研究（八木橋宏勇）

5.1 翻訳言語としての聖書と対照研究

聖書協会世界連盟(UBS)の 2012 年度資料によれば，聖書翻訳言語の総数は 2,551 言語に達したという[1]. 聖書の多言語化に際しては，翻訳者や校正者に「オリジナル言語の内容を正確に意味深く表現してもらう」ことを目的に，聖書翻訳指導員なる専門家が「新しい翻訳の質を確かなものにすることで，とりわけ，ギリシア語（新約）とヘブライ語（旧約）の原典に忠実なものにすること」（一般財団法人日本聖書協会ホームページ）において重要な役割を果たしているという. 換言すれば，聖書のメッセージが正しく理解されるように厳格に翻訳がなされていると言える.

言語の対照研究に際しては，研究のデザインとして，比較の軸を設定することが求められる. その点，翻訳言語という性質上，聖書は多言語間での多様な比較を可能にし，対照研究に有益な言語資料を提供しうる文献であると言える.

5.2 聖書の対照研究

成瀬（1996）が指摘しているように，一般的に望ましい翻訳は「原文と訳文の理解価値の等価」が実現されていることだとしても，こと聖書に関してはいくつか注意が必要である. 聖書を対照研究の題材とする際には，数千年に渡る時間的隔たりや，社会文化的背景の相違は当然のことながら，「直接訳と間接訳にかかわらず聖書の翻訳者には，できるだけ原典の言語表現や表現形式を翻訳する側の言語に伝えようとする力が働く」（橋本 2005）ために，理解が容易に達成されない場合もある. たとえば，「創世記」(2.23) にある This is now bone of my bones, and flesh of my flesh. （ついに，これこそわたしの骨の骨，わたしの肉の肉（新共同訳））は，2 つの名詞を属格で結ぶことで最上のものを表すヘブライ語を逐語訳したもの（寺澤 2013）であるため，意味が分かりづらくなっている. ヘブライ語起源による分かりづらさの事例は，統語論に関わるものが多いが，代名詞化されずに繰り返される名詞の反復，同一ないしは類似の内容を異なる語句や文構造を用いて繰り返す平行体といった文体論やレトリックに関わる言語現象に対しても聖書は豊富な事例を提供してくれる. ここでは，メタファ表現を事例に，聖書を題材に対照研究を行う意義を論じたい.

5.3 聖書のメタファ分析とその意義

古英語期から現代英語期にかけて翻訳された英訳聖書・日本語訳聖書のメタファ表現は，（口承を経て長い年月をかけて文字化された経緯から不明な点も多々あるものの）そのほとんどが原典の言語のメタファに遡ると想定される（以降，紙幅の関係で日本語訳のみ記す）. 1)「三日したら，ファラオーはあなたの頭を上にあげ，あなたを職務に復帰させます」（「創世記」40：13），2)「顔の前で水のようにあなたの心を注ぎ出し」（「哀歌」2：19），3)「怠け者は言う. 道に子ライオンが，広場に雄ライオンがいると」（「箴言」26：13）を例にすると，1)は概念メタファ GOOD IS UP，2)は概念メタファ MIND IS A CONTAINER，FEELING IS A FLUID IN A CONTAINER，3)は概念メタファ LIFE IS A JOURNEY，STATE IS LOCATION に基づくと考えられ，現代を生きる私たちにも比較的理解が容易なメタファだと思われる.

一方で，メタファ（メトニミやシネクドキ等を含む）を機能させる「百科事典的知識」は，時代・文化・宗教などが異なれば質的に大きな相違があると推測される. たとえば，4)「ヤハウエは私を遣わし，あなたに油を注いで，彼の民の王とされた」（「サムエル記上」15：1）は，国王を任命する儀式を描写した一文で，「聖化」を表す. 古代パレスチナ地方において上質のオリーブ油を身体に塗る儀式が行われていたことを知らなければ理解ができないだろう.

---

[1] この数には，方言訳聖書（e.g. ケセン語）が含まれるほか，手話訳聖書（e.g. 日本手話）の製作も鋭意進行中のようである.

聖書を題材とするメタファの対照研究は，共時的な研究に基づいて構築されたメタファ理論の検証（場合によっては修正）や発展に有益な視座を与えてくれる可能性がある．メタファを生み出したり，理解されたり／されなかったりするメカニズムの精緻化に寄与する言語資料となりうるわけである．また，原典に忠実に翻訳される聖書であっても，その原則から外れる訳があるのも事実である．たとえば，「禁断の果実はリンゴである」と特定できる記述は聖書には本来はなく，ヘブライ語原典ではfruitのように総称を表す語が用いられていたようである（橋本・八木橋 2011）．古英語訳聖書ではリンゴを中心としつつも果物一般を表すことができたæppelbæとなっているものの，中英語訳聖書では明確にリンゴを表すappleと訳されている．ヘブライ語では上位概念を用いて表現する傾向があるという言語的特徴はあるにせよ，原典とは異なる訳がなぜ作られたのか，翻訳論的に大変興味深い事例も多々見つかる．

5.4 さいごに

聖書の翻訳は実に多岐にわたる．たとえば，ハワイのピジン英語聖書 *Da Jesus Book* は言語変種の言語資料になるほか，PC運動に関連した*NTPIV*（『新約聖書と詩篇：差別のない聖書』）（寺澤 2013）といった取り組みは，差別表現をなくそうとする社会的な動きが聖書の翻訳に反映されており，社会言語学的な分析資料となりうるだろう．

6. 日韓語の対照研究（新井保裕）

6.1 日韓対照の意義

本節では日韓対照研究に焦点を当て，その意義，及び研究成果について述べる．

日本語と韓国語は，SOV語順，膠着語，発達した敬語体系，漢語系語彙の使用という共通した特徴を持ち，類型論的に最も類似した言語だと言われることもある．またその言語を主に使用する，日本人と韓国人は「ひと」が類似している．さらにその言語が主に使用される日本や韓国は社会・文化的な共通面も多い．このように日韓では言語だけではなくひと・社会・文化も類似しており，言語体系及びコミュニケーションの特徴において大きな違いはないように思われる．しかしいくら類似しているとしても日韓が完全に同一というわけではなく，むしろ類似しているからこそ小さな違いが大きなものとして認識される．そうした違いは言語やコミュニケーションの習得にとって大きな困難となるが，一方でその違いこそが日本語または韓国語の特徴と言え，類似した言語との対照という別の視点を通じて，言語の特徴が新たにわかる．日韓対照は対照研究，及び多様な視点というアプローチで共通する社会言語科学の意義をより明瞭な形で示し得る．

6.2 日韓語の言語体系とメディア[2]

日韓語の言語体系についてはこれまで多くの対照研究が成されてきたが，言語単位の結合様式に注目すると，日本語は言語単位が高い独立性及び結合性を持つ一方で，韓国語はそれと同程度の言語単位では独立性を持たず，ある程度の言語単位の融合性が成立するとなかなか崩れにくいと言える．言い換えれば，日本語は「磁石」的な構造，韓国語は「チェーン」的な構造を備えている．そしてこの言語体系の構造差は通常の話しことば，書きことばだけではなくSNSというメディアの中にも現れる．日本語ではコピュラまたは形式動詞が省略された名詞止め文が多く現れるが（例：森チョコビ改めて爆誕），韓国語では名詞述語文からコピュラが省略されずに，さらに名詞化辞「-m/um」が接続している例が多い（例：swuep ency-i-m（授業いつだ））[3]．「磁石」な日本語は言語単位の独立性が高いため名詞という言語単位だけで文を実現する一方で，「チェーン」な韓国語は各言語単位が融合してこそ文が実現される．こうした「磁石」と「チェーン」という言語構造差がメディアを問わず維持された日韓両語の特徴であることがわかる．

語尾が省略された表現に焦点を当てると，日本語の話しことば，書きことばでは「あつ-∅」などイ形容詞の語幹のみが独立した発話となるが，韓国語では難しい（例：*tep-∅）．「磁石」な日本語では一つの言語単位をより小さく分けて用いることができるが，「チェーン」な韓国語では異なると解釈できるが，韓国語のSNSでは語尾が省略されたものが見られる（例：kuleh-ci anh-∅？（そうではない？））．磁石やチェーンが条件によっては働きが変わるように，言語単位の融合性が高い韓国語もSNSというメディアの条件下ではその融合性が弱まり，言語単位の独立性が高まると言えるかもしれない．このように言語構造の基準となる共通モデルを設けることによってSNSという共時的変異についても分析及び考察しやすくなる．メディアが多様化した現代社会において言語とメディアの相関関係にも学際的に注目する必要があるが，言語だけでなくメディアの対照研究へと発展していくだろう．

[2] 6.2節の内容は新井(2019a, b)による．

[3] 韓国語のアルファベット表記はイェール式に従う．

6.3 日韓コミュニケーションの特徴[4]

日韓コミュニケーションの対照研究も多くの先行研究があるが，中でも尾崎（編）（2008）は対人意識について日韓 2175 名にアンケート調査し，その結果をまとめた代表的なものである．しかし各アンケート項目を一つずつ分析しており異なる項目間の分析は行われていない．そこで二次分析を行い，複数項目を比較すると，「空間の公私性」は日韓それぞれの対人行動に与える影響が異なること，親近度の相対的な序列関係は日韓で等しくとも絶対的な親近度合いは異なることが示唆された．日韓対人行動モデルも次図のように修正できる可能性がある．

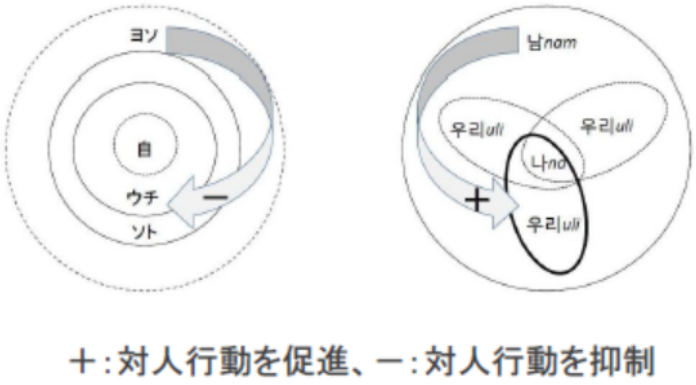


図 1　日韓対人行動モデル

例えばこの図をもとに「人前○○○いちゃつく」ということばについて考えれば，日本は「人前なのにいちゃつく」，韓国は「人前だからいちゃつく」と言える．国際化が進む現代社会において日韓両国人が対面コミュニケーションをとる機会が増加しているが，日韓は類似部分が多いゆえに，相手国に対して自国の「常識」を期待してしまい，そこに存在するコミュニケーション行動の小さな違いが却って誤解を生みやすい．対照研究の成果はこうしたミスコミュニケーションの防止，そして相互理解にも大きく貢献できるだろう．

6.4 小結

本節では日韓対照研究の意義及び研究成果について述べ，その展開可能性に言及した．日韓対照研究だけを取り上げても，言語の対照研究が現代社会に資するものは学術的にも実践的にも大きい．対照研究と社会言語科学に共通する学際・国際性が多様な言語社会に存在する課題の解明に繋がっていく[5]．

7.　三者間課題解決会話における相互行為の日露対照分析（ツォイ・エカテリーナ）

これまでの日露語対照研究では，主に文法や表現の意味が注目されており，分析資料として文学作品や映画の台本等のデータが広く用いられてきた．その中には，テンスやアスペクト，待遇表現等に見られる言語形式の相違を記述するもの（Кронгауз&Такахаси，2002；中尾，2003；金子，2018 等）があれば，表現の意味概念の違いから言語の社会文化的な特性を論じるもの（田中&ケキゼ，2005；ウェインベルグ&松村，2015 等）もあり，様々な観点から比較が行われてきた．しかし，これらの研究は文レベルの分析を中心とするものが多く，自然会話データを扱った日露語対照研究は少ない．一方、会話研究においては、日本語およびロシア語，それぞれについて話者間の発話の重なりが多いという言及が見られる．Hayashi（1988）が報告しているように，日本語の会話ではあいづちによる発話の重なりが非常に多く，その重なりが３～４秒ほど続いても会話にはマイナス効果が生じないという．ロシア語についても，母語話者同士の会話には発話の重なりが多く（Земская，Китайгородская&Розанова，1993；Ларина，2009；Прохоров&Стернин，2007），英語やドイツ語に比べ，会話への割り込みに対する許容度が高いという指摘もなされている．このように他言語との対照研究からは日本語と

[4] 6.3 節の内容は新井(2019b)による．

[5] 中国朝鮮族の言語使用・意識を扱った新井ほか(2019)などが『社会言語科学』22 巻 1 号の特集「日本語と日本社会をめぐる言語政策・言語計画」に掲載されたことも，国際化社会において一つの言語社会の研究がほかの言語社会研究に繋がっていることを示唆していると言える．

ロシア語で共通性が窺えるが、日本語とロシア語を比較した実証的な研究は管見の限りでは行われてこなかった。そこで、ツォイ(2016)は，三者間会話における話者交替の仕組みに焦点を当て，発話の重なり(「同時発話」，「オーバーラップ」とも言う)を対象に日露語の対照分析を試みた．その結果、ロシア語の会話における発話の重なりは，日本語よりも長く，頻度が高いものの，相手の発話を中断させるものであり，話者間の発話権の取り合いの際に生じるということがわかった．

本発表では，日露語対照研究のさらなる展開を目指し，日本語およびロシア語の自然会話における参加者の相互行為の異同について述べる(ツォイ，2018)．本研究で用いた分析データは，親疎の異なる 3 人が課題解決に取り組んでいる会話であり，日露語ともに条件を統制した上で収集したものである．分析では，課題解決への提案が交渉される部分を抽出し，親疎関係による「提案交渉」への参与パターンの相違を検討した．ここでいう「提案交渉」とは，同意されなかった提案について参加者間で合意が得られるまでの話し合いを指す．本会話データにおける話し合いは，日露語ともに友人同士の「提案交渉」に初対面話者が参入する場合および，初対面話者と友人話者一人の「提案交渉」にもう一人の友人話者が参入する場合，という 2 つのパターンで展開していた．参入方法としては，3 人目の参加者が「交渉中のどちらか一人を支持」することによって交渉に加わる場合および，「どちらも支持」せず「話し合いを方向転換する」，あるいは「交渉中の話者からアイディアを引き出す」場合が見られた．いずれの場合も 3 人目の参与が会話展開を大きく左右していた．日本語とロシア語のデータを比較したところ，両言語とも，後から交渉に加わる参加者からの支持により「2 対 1」の状況が作られ，多数決で話し合いの合意が得られることが共通して観察された．作業者間の協調性から見ると，言語にかかわらず共同課題解決においてはこのような相互行為は無標のものと考えられる．しかし，何らかの理由で相手に支持を示すことが困難である場合は，話し合いの方向を変えるという，有標の相互行為が行われることもある．これについては，本会話データでは日露語で多少の相違が窺えた．ロシア語では，「支持」という談話行為は心理的距離が小さく共感度の高い相手に対して行われ，心理的距離が大きい話者は中立の立場で「話し合いの方向転換」や「アイディアの引き出し」により「提案交渉」のやりとりに参入する傾向が見られた．一方，日本語のデータでは，後から「提案交渉」に参入する話者が「交渉中のどちらも支持しない」事例は少数であり，友人同士の話者は「親」の関係を利用し，友人のほうに支持を示すことにより話し合いに加わっていた．このように「交渉中のどちらも支持しない」という「提案交渉」への参入方法の事例からは日露語で親疎による差異が示唆された．

本研究は個々の事例の質的分析を通じて，全く異なる言語体系を持つ日本語およびロシア語での対人コミュニケーションのあり方を探求することを目指したものである．会話状況を統制することにより対照研究において重要である分析データの等価性の条件を満たすことができたが，量的な検討は今後の課題となる．

8. 中国語のあいづちから見る対照研究の可能性—談話スタイルとの関連性—（望月雄介）

8.1 あいづち研究

自然な会話を成立させるため，聞き手があいづちを打つことは一般的であり，あいづちは「会話を促進させる」，「話を聞いていることを表す」という役割を果たしているとされている．日本語のあいづち研究では，水谷（1983），メイナード（1993），堀口（1997）などが挙げられ，あいづちの形式，頻度，生起環境，日本語教育への応用といった，様々な観点から研究されてきた．本発表では，日本語のあいづち研究における定義や枠組みを援用して中国語のあいづちの実態を明らかにし，さらに，談話スタイルという観点から中国語と日本語のあいづちを比較分析したい．

8.2 あいづちの定義及び分析方法

本発表では，中国語・日本語共に初対面会話をデータとし，あいづちを以下のように定義する．

「あいづち」とは，話し手が発話権を行使しているときに，聞き手が話し手に対し情報を共有している，または理解していることを示す表現であり，話し手の発話権を奪う発話や承諾・拒否といった返答を表す発話はあいづちとしない．

本発表では，談話スタイルという観点から，中国語のあいづちの生起環境を分析する．あいづちと談話スタイルの関連性を分析するために，まず，談話スタイルを「語り」スタイルと「非語り」スタイルに大別する．スタイルは，「情報要求」，「情報提供」，「情報量」，「コメント」，「経験」，「状況」，「説明」，「意見」などのキーワードを以て判断し，それぞれの談話スタイルにおいて，あいづちがどのように打たれているかを分析する．そして，中国語の分析と同様に日本語のあいづちを分析し，中国語と日本語のあいづちの生起環境を比較分析する．

8.3 中国語のあいづち分析

中国語初対面会話に現れるあいづちを談話スタイルという観点から分析すると，「非語り」スタイルではあまり打たれず，以下の会話例のような「語り」スタイルで多く打たれるという特徴が見られた．ここから，中国語のあいづちの生起環境は，その発話がどのようなスタイルで発話されているかということに大きく関連していることが分かった．

OM16：我们…其实…搞对外汉语的话，其实我们更更偏向于语言学这边儿(嗯)．对，学的都是，都是跟中文系的一起上的(哦哦哦)．
［僕たち…，実際に…，対外漢語を研究するんだったら，実際は言語学にもっと偏ってるんだよね（うん）．うん，勉強していることは，全部中文系の学生と一緒に授業を受けてるんだよね．（ああ）］

本発表では，中国語と日本語におけるあいづちの特徴を記述することを通じて，今後のあいづちに関する対照研究の可能性について述べたい．

参考文献

安達太郎（1999）．日本語疑問文における判断の諸相　くろしお出版

新井保裕（2019a）．SNS における省略現象の日韓対照研究―メディアに現れる「磁石」な日本語と「チェーン」な韓国語― 科研費成果報告公開シンポジウム日韓両語の「省略」は何を語るか―言語の個別性と普遍性に向けて―，63-82.

新井保裕（2019b）．社会言語科学と対照言語学―日韓対照を中心に― 社会言語科学会事業委員会主催 2019 年度第 1 回講習会『社会言語科学の射程』講義資料

新井保裕・生越直樹・孫蓮花・李東哲(2019)．中国朝鮮族言語使用・意識の多様性に関する研究―朝鮮族学校でのアンケート調査― 社会言語科学，22(1)，125-141.

Besnier, N.（1992）. Reported speech and affect on Nukulaelae Atoll, J.H.Hill and J.Irvin （eds.） *Responsibility and Evidence in Oral Discourse*. New York: Cambridge University Press, 161-181.

Clerk, H. H., & Gerrig, R.J.（1990）. Quotation as demonstrations, Language, 66-4, 764-805.

Crystal, D.（2010）. *Begat: The King James Bible and the English Language*. New York, NY: Oxford University Press.
［邦訳：橋本功・八木橋宏勇（2012）『聖書起源のイディオム 42 章』．慶應義塾大学出版会］

Fujii, S.（2006）. Quoted thought and speech using the mitai-na ‘be like’ noun-modifying construction, Suzuki, S（ed.）. *Emotive Communication in Japanese*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company, 53-95.

橋本功（2005）．英語史入門 慶應義塾大学出版会

橋本功・八木橋宏勇（2011）．聖書と比喩―メタファで旧約聖書の世界を知る― 慶應義塾大学出版会

Hayashi, Reiko(1988). Simultaneous talk – from the perspective of floor management of English and Japanese speakers. *World Englishes*, 7(3), 269-288.

堀口純子(1997)．日本語教育と会話分析 くろしお出版

市川宙・徳永健伸（2007）．情報探索雑談における自然なトピック遷移の実現　言語処理学会第 13 回年次大会予稿集，151-154.

井出里咲子（2014）．スモールトークの公共性―アメリカ社会におけるおしゃべりとその詩的機能をめぐって　論叢：現代語・現代文化，12 号，87-101.

井出祥子・藤井洋子（編）（2014）．解放的語用論の挑戦―文化・インターアクション・言語　くろしお出版

一般財団法人日本聖書協会ホームページ「世界の聖書翻訳状況について（08.04）」
〈https://www.bible.or.jp/soc/hotnews0805.html〉（2019 年 12 月 30 日閲覧）

鎌田修（2000）．日本語の引用　ひつじ書房

金子百合子(2018)．アスペクトの緩急とモダリティの濃淡：ノダ文をめぐる日露対照研究(Mark Campana 教授退職記念号) 神戸外大論叢，69(1)，123-149.

Кронгауз, Максим & Такахаси, Кэнъитиро(2002). Обращение по имени в русском и японском языках. *Труды по культурной антропологии: Памяти Григория Александровича Ткаченко.* 252-274.

古代語研究会（編）・谷川政美（監修）（2009）．聖書ヘブライ語 サン パウロ

甲田直美（2015）．語りの達成における思考・発話の提示　社会言語科学，17(2)，1-16.

Ларина, Татьяна(2009). *Категория вежливости и стиль коммуникации: Сопоставление английских и русских лингвокультурных традиций.* Москва: Рукописные памятники Древней Руси.

Lucas, Stephen E. (2011). *The Art of Public Speaking*. New York: McGraw-Hill Education.
水谷信子(1983). あいづちと応答 水谷修編 話しことばの表現 筑摩書房
三宅和子(1994). 日本人の言語行動パターン―ウチ・ソト・ヨソ意識― 筑波大学外国語センター日本語教育紀要, 9, 29-39.
メイナード, 泉子・K (1993). 会話分析 くろしお出版
中尾裕子(2003). ロシア語における指小接尾辞と日本語の 接頭辞「オ-」の対照研究 ロシア語研究, 16, 27-49.
中野清治 (2014). 英語聖書の修辞法と慣用句 英宝社
中園篤典 (2006). 発話行為的引用論の試み―引用されたダイクシスの考察― ひつじ書房
成瀬武史 (1996). 英日日英翻訳入門―原文の解釈から訳文の構想まで― 研究社出版
仁田義雄 (1991). 日本語のモダリティと人称 ひつじ書房
西田幾多郎 (2018). 善の研究 岩波書店
大津友美(2005). 親しい友人同士の雑談におけるナラティブ―創作ダイアログによるドラマ作りに注目して― 社会言語科学, 8(1), 194-204.
尾崎喜光(編) (2008). 対人行動の日韓対照研究―言語行動の基底にあるもの― ひつじ書房
Прохоров, Юрий&Стернин, Иосиф (2007). *Русские: коммуникативное поведение*. Москва: Флинта-Наука.
Searle, John. (1969). *Speech Acts*. Cambridge University Press.
田中聰子&ケキゼ, タチアナ(2005).「顔」と《л и ц о》― 〈顔〉 概念の日露対照研究― 世界の日本語教育, 15, 103-116.
ツォイ, エカテリーナ(2016).「課題達成談話における発話の重なりに関する日露対照分析―重なった発話の構造および機能に着目して―」ロシア語研究, 26, 65-89.
ツォイ, エカテリーナ(2018).「三者間の共同課題解決における「提案交渉」の日露対照分析―親疎関係の違いに着目して―」社会言語科学, 21(1), 207-224.
寺澤盾 (2013). 聖書でたどる英語の歴史 大修館書店
ウェインベルグ, ナジェージダ&松村瑞子(2015)日本語の「丁寧さ」とロシア語の「ウェジリボシチ」―類似点と相違点― 言語文化論究, 35, 57-69.
山口明穂 (2004). 日本語の論理―言葉に現れる思想― ひつじ書房
山口治彦 (2009). 明晰な引用, しなやかな引用 話法の日英対照研究 くろしお出版
Земская, Елена, Китайгородская, Маргарита&Розанова, Нина(1993). Особенности мужской и женской речи. *Русский язык в его функционировании. Коммуникативно-прагматический аспект*.(под ред. Земской Е.А. и Шмелева Д.Н.) Москва: Наука, 90-136.

児童作文の評価システムの構築

－紹介文をテーマとして－

企画責任者：白勢 彩子（東京学芸大学）
話題提供者：大澤 千恵子（東京学芸大学）　土屋 晴裕（東京学芸大学附属大泉小学校）　成家 雅史（東京学芸大学附属小金井小学校）　齋藤 ひろみ（東京学芸大学）
指定討論者：安部 真治（東京学芸大学教職大学院生/大分市立南大分小学校）

1.　はじめに（白勢・大澤）

本ワークショップは，従来，我々が整理・提案してきた，小学校国語科の「書くこと」領域における作文指導のための評価項目・手法を示して，広く知見を開示するとともに問題を共有し，児童作文の評価の改善および充実を目標として実施する.

小学校の新学習指導要領（平成29年3月告示）の国語科では内容構成が変更され，「書くこと」においても思考力，判断力，表現力等の育成が求められている．自己の内的省察から思考を深め，それらを適切な言語を用いて表象し，相手に伝えることで相互交流が可能となるような表現力を養うことが必要となった．児童の「書く」力に関しては，全国学力・学習状況調査の結果から課題があることが指摘され，外国人児童などリテラシーに困難さのある児童への対応等，「書くこと」指導は多様化し，柔軟な評価が求められるようになってきてもいる．また，公立小学校では若手教員が増え，「書くこと」の指導や評価に苦手意識があると言われている．こうした中，小学校においては2020年4月から新学習指導要領の全面導入が始まるのである.教育現場の「書くこと」指導に資する児童作文の評価項目や方法の確立は急務である．また，児童の視点に立って考えると，大熊（2016）が，書いたことの成就感，達成感を実感することが，次に書く時の意欲につながると指摘するように，前に書いたことを次に書く時の前段階であるとすれば，前作文の評価が，次作文への意欲に直結していることになろう．したがって，児童が書いたことに対する成就感，達成感を実感するためには，発達段階に応じた教師の適切な指導につながる評価システムの確立は不可欠である．加えて，こうして開発した評価システムは，教員を志す教職課程の学生が，作文を的確に評価するための観点と方法を知り，評価に基づいた指導の重要性を学ぶ上でも活用が可能であり，小学校の「書くこと」指導の課題を解決する一つの方途となる可能性をもつ.

しかしながら，従来，児童作文を評価する項目や手法は明示的でない．この背景には，児童作文に関わる基礎的な研究が限られているために実践的に扱うことが難しい現状や，さらに，教育実践と基礎研究の立場に認識の相違があるために成果の統合に難しさがあり，研究が進展しにくかったことがあると考えられる．児童の作文の力に関する大規模な基礎的データを取った調査研究の代表的なものとして，国立国語研究所（1964）の作文スキルの発達に関する調査研究が挙げられる．内容・計量・形式の側面からの，多角的な考察がなされ，学年による発達の様相も把握することができる．以降，語彙量など計量的な特徴に関する研究が多くなされてきているものの（江本，1980；野村・靍岡，1986；石井，1996 など），構造的な特徴についての研究は少なく，土部・宝示（1966）など，限られているようである．近年では，阿部・他（2019）の研究があり，指導要領の改訂に対応し，指導法の開発や作文コーパスなども活用されるようになってきている.

我々は，これまで，教科実践を専門とする小学校教員と，実践研究・基礎研究に携わる研究者が協働して，児童作文を多面的に解析し，新たに，実践的かつ実証的に作文評価システムを提案することをねらいとして研究を推進してきた（土屋・他，2019）．今回のワークショップでは，研究により得られた作文評価の方法とその項目を概説し，その項目に基づいて実際に児童作文を評価するワークを実施し，作文間，評価者間の相違を観察する．そこから，言語学を専門とする参加者から示唆を得て，国語科教育における作文の評価の精度を高め，運用面でのシステム化の進展を図りたい.

2.　「書くこと」指導における評価の課題と協力校教員の評価（大澤・土屋・成家）

本研究が開発している評価を実施する教育現場の問題を，小学校国語科における「書くこと」指導とその評価，学習指導要領の改訂にともなう教育内容の変更による評価自体の意味づけの変容に関して，整理して示す．さらに，本研究が収集した作文データから，国語科教育における評価の収集方法について述べる．

2. 1　問題の所在

「書くこと」は，「話す・聞くこと」「読むこと」と並んで，国語科の重要な学習領域に位置づけられるが，浜本（1996）は，これらを国語科固有の基礎学力として子どもたちに生きて働く言語活動力であると捉えた．なかでも「書くこと」は，木下（2018）によれば，「しっかりとしたひとまとまりの文章，自分や自分を取り巻く世界を書き言葉で表現すること」であり，作文は，思考力・判断力・表現力のすべてを組織的に活用し，ある程度の時間をかけて熟考する総合的学習である．それゆえに抵抗感を持つ児童も少なくない．しかし，同時に他の言語活動以上に「書けた」ことによる充実感・達成感が大きいのもまた作文であるともいえる．書けたことによる達成感・充実感は次に書く時の意欲を喚起するし，即時的な音声言語とは異なり持続性を持つ文字言語だからこそ，教員による評価が他の領域以上に重要な役割をもっているともいえる．しかしながら，作文は総合的な学習であるがゆえに評価が難しいともいえる．作文指導を得意とする教員であっても，その評価においては，観点項目の多さには悩まされている．谷（2008）が，「一つの作文で誤字脱字から，段落構成から，修辞法から，内容から，何から何まで見るのは非常に困難である」と述べるように，教員にとって適切な評価を行うことは容易ではないのである．

2. 2　「書くこと」の指導と評価の課題

その大きな要因として，「書くこと」の指導に含まれる多義的要素と資質能力に関わる評価の多様性が挙げられる．作文評価において，これらは複雑に絡み合っている．学校教育における「書くこと」の指導では，子どもたちに何を書くかとどう書くかの，内容と形式の両面を教えなければならない．さらに，書かれたものだけではなく，書く以前あるいは書かれている途中段階も評価する必要がある．内容と形式の問題や書くプロセスへの注目は書くことの評価にも大きく関わってくる．田中（2010）は，形式面，すなわち言語形式習得を重視した評価は内容面で明らかに優れている作品を見落とすことがあることを，実例を挙げながら指摘している．また，書かれたものだけでなく，書こうとする力や，書いている途中のものに対する評価は，平成元年の学習指導要領以来刷新され継続している学力観である．田中（2010）は，内容と形式を相前後するように一体化して指導することが重要であるとするが，それは学習過程の様々な段階で，柔軟な評価と指導が必要であるとの指摘だともいえよう．結果としての評価ではなく，評価それ自体がより深い学びに繋がる支援となるのである．

新学習指導要領である平成29年版ではその傾向はさらに強まり，「主体的・対話的で深い学び」が目指され，評価にも子どもたちの主体的な学習が促されたかが問われる．東京都の小学校国語教育研究会の「書くこと」部では，現在，研究主題「児童の深い学びを目指す，主体的・対話的な書くことの単元づくり」を設定し，児童が主体性をもって，より柔軟な学習過程の中で，自己評価しながら書くための学習指導と評価の工夫を行っている（東京都小学校国語教育研究会，2019）．児童が主体的に書こうとする単元の開発は，図1で示すように，個々の児童の実態把握に基づいた柔軟な学習過程と，学習指導要領に示されているような「自分の文章のよいところを見付ける」自己評価との循環によって形成していく必要がある．

(1)　児童が書きたくなるような単元開発
(2)　書くことの個人差を配慮した柔軟な学習過程
(3)　実感を伴った評価

評価は循環の（3）番目に当たるが，図1に示すように次に書くための動機づけとなるもので，（1）の前の



図1　主体的に書く単元開発の流れ

(0) としても位置付けられるのである．また，評価には，二通りあり，①児童の自己評価と②教師の評価とである．児童が適切に自己評価を行えるようにするためには，児童自身が達成できたかどうかを把握できる具体的なめあてが必要となる．そのための手立てとして，学習計画表や振り返りの学習は有効であるといえる．

一方，②教師の評価には，めあての達成の他に，「書いたもの（成果物）」のみならず，その過程で見られる取材や構成等の「書く前の段階」，あるいは「書いている途中」も含まれる．そのため，そのどの段階で児童がつまずいているかを的確に把握する必要がある．また，「書かれたもの（成果物）」には，これまで児童の中に培われてきた総合的な書く能力が含まれており，それらをも総合的に評価していることになる．次時の指導や支援，その時間の目標には含まれていない力なども含めて，長期的に，そして総合的な視野で，「書くこと」学習のつまずきを把握することが不可欠なのである．つまり，教員による評価には，各単元のめあて・目標に照らし，総合的かつ系統的に書く力を評価し育成する観点が必要なのである．こうした観点は，推敲や共有の段階で，児童自身に自己評価を通して意識させたい総合的な書く力を捉えさせる上で必要なものであり，その育成にも繋がる．

以上，子どものたちに主体的な学びを促すための評価として，「書くこと」の指導に合わせて，個々の児童の学習過程を的確に評価し，それを支援につなげられる評価システムを構築することが求められていることがわかる．

2．3　国語科教育からみた作文調査と評価の意義

本研究では，小学校の協力を得て作文を収集し，量的・質的観点で項目を設定して分析を試み，その結果から，評価項目を精選してきた．ここでは，項目設定の前段階で行った調査「小学校教員の作文評価の観点」について報告する．さらに，指導のために，子どもの実態として作文の力を評価することが重要であることを確認する．

この予備調査では，収集した作文について，小学校で国語科を専門とする３名の現職教員に，直感的に評価してもらい，その評価においてどのような観点を立て，どのような理由で善し悪しを判断したかを調査した．

作文収集を行った小学校には，2018 年度現在，国語を専門とする教師が複数名いる．各々に得意とする領域があり，その多くは「読むこと」あるいは「言語」の領域である．「書くこと」について授業は行っているが，書かせ方や評価方法についての研究に取り組む教師はいない．このような状況下で，国語科専門の教師が担当する学級を選んで，児童作文の収集を行った．学校教育においては，基本的に単元目標やめあて（児童に意識させる学習目標）に基づく指導・学習があり，その成果を評価することが基本であるが，今回の作文データは，「あなたの学校を，知らない人に紹介してください」という紹介文課題を設定し（表 1），指導を行わずに，児童に自由に書かせて収集したものである．

収集した作文（4 年生 92 件）に関し，国語を専門とする小学校の現職教員３名が，それぞれに「A（上）」～「C（下）」の三段階で評価を行った．その後，評価の観点について意見交換を行った．すると，三者に共通して，次の①～③の観点が浮かび上がった．それは，当該課題作文を小学校の国語科学習指導要領に基づき評価する場合に，一般的に立てられる評価観点でもあった．

表１　紹介文を書かせる際の指示

作文のテーマ 「あなたの学校を，知らない人に紹介してください．」
・いつもの原稿用紙の使い方にしたがいますが，名前は聞きません． ・１行目から本文を書き始めます．段落もつけましょう． ・先生の指示にしたがって，原稿用紙の右上に番号を書いて下さい． ・20 分間で書きます．時間がきたら，途中でも終わりです． ・１枚目が終わったら，２枚目，３枚目と増やしていっても構いません． ・原稿用紙は自分で前に取りにきましょう． ・早く書き終わった子は，作文を読み直して，時間まで待っているようにしましょう．

①自分の学校を紹介する
　→学校の「何」を紹介しようかということを考える思考力
②知らない人に紹介する
　→誰に向けて紹介するのかという相手意識にもとづく表現
③具体的なめあてがなく，時間制限　がある
　→限られた時間の中で段落を構成したり，まとまりや一貫性をもたせたりする判断力

「A」評価となった作文には，①・②・③の思考が見られた．しかしながら，「B」評価の作文は①・②はできていても③は不十分な場合が多く，「C」評価の作文は，おおむね①で留まっていた．「C」評価の作文では，これまでの経験や自分自身を振り返ることに精一杯で，とにかく頭の中に浮かんできたことを箇条書きで書き始めたと考

えられる作文や，内容のまとまり云々関係なく，全文一段落になっている作文も見られた．以上のことから，この４年生の児童グループの作文の力として，「紹介している事項がバラバラ」「呼びかけ表現がなく，誰に対する紹介なのか不明瞭」「段落意識が弱く，構成が整っていない」などを改善することが課題として浮かび上がった．

「作文する」という行為には，「メタ認知」が働くかどうかが大きく関わっていると考えられる．上記の結果からは，学習者である児童は，指導がない場合，作文課題の遂行において，どのような文章がよいのかを具体的にイメージできなければメタ認知を機能させることが難しいということが推察される．他方，児童の作文の力の実態と指導者である教師の認識には大きな差があることもまた，作文指導に関して教師がメタ認知を働かせ，内省する上では課題になっているといえる．

児童の作文の力と指導との間にこうした問題があることは，指導せずに書かせた作文だからこそ，明確化できたと考えられる．本来，教育活動として，教師は子どもたちに「学習のねらい」を示して学習を展開していく． 3 で示す本研究における評価項目と方法によって得られる子どもたちの「作文の力」の実態を踏まえ，2.2 で示した循環に基づく「指導と評価の一体化」を図ることが，本研究が提案する評価システムを利用することによって可能になるようにしたいと考えている．次の 3 では，本調査研究が実施した作文評価に関し，具体的な手続きと項目について説明し，現段階までの分析結果から「紹介文」の評価項目を提示する．

3.　評価項目の設定（齋藤・白勢・安部）

3.1　概要

評価項目の設定にあたっては，中学年による作文の質の変化に着目し，教師の経験をもとに設定する内容評価の項目と計量的に分析する項目とを立てた（土屋・他，2019）．児童作文は，首都圏の小学校２校の協力により収集した．作文の課題は，どの児童も比較的取り組み易いと考えて，「学校紹介」とした．この課題から，学校生活を振り返るという内的省察から深まる思考力や，学校の様子を詳細かつ適切な言葉を用いて表す表象力，知らない相手との相互交流が可能となるような相手意識を持った表現力を見取ることができると考えている．

作文の収集は，「あなたの学校を紹介してください」と口頭で伝え，20 分で書くよう指示をし，指導は行わずに実施した．具体的な指示内容は先に示した表 1 に対応している．同様の手続きにより，第 1～6 学年までの作文を収集しており，現在，分析を進めている．研究デザイン・分析・考察においては，小学校教員，教科教育・教科専門の大学教員が協働して取り組んでいる．

3. 2　内容的観点に基づく項目の設定

評価項目は，次の手順で抽出した．

1）評価者３名（小学校の現職教員）が対象作文 92 件を，直感に従って総合的に評価（5 段階）
2）評価者が上記の評価過程で重視した要素を記述
3）2）を整理し，評価項目を抽出（6 項目）

表２　内容的項目

A 課題把握：学校紹介という課題を理解し，**相手意識**をもって，紹介する内容として**相応しい事柄**を選んで述べたり**読み手への呼びかけ・働きかけ**をしたりしているか．
B 内容記述：紹介したい事柄について，**具体的な内容**や特徴，**紹介したい理由**などを詳しく述べているか．
C 独自性：紹介する事柄について**自分にとっての意味や価値**が伝わるエピソードや考えが述べられているか．また，**他の児童とは異なるユニークな視点**で紹介する事柄を選んでいるか．
D 段落：形式段落が，**内容のまとまり**を備えて作られているか．（**形式段落**に着目）
E 一貫性：テーマを軸に，事柄の順序や関係などが，**一定の見方や考え方**で貫かれていたり，**論理的に組み立て**られていたりしているか．
F 構成：**文と文のつながり**が明確で，内容の**まとまりがわかる構成**で書かれているか．（**意味段落**に着目）
※太字：各項目の重要な要素

これら 6 項目を用いて，改めて，3 名の評価者が 92 件の作文について，　3 段階で評価を行った．3 名による評価を「評定値」とする．評定値の合計は，6 項目×1 点×3 名＝18 点が最低点，6 項目×3 点×3 名＝54 点が最高点となる．評価の結果を，表 3 に示す．評定値（合計）は，最低点の 19 点から最高点の 51 点まで分布し，概ね正規分布となっている．項目別の評定では，D 段落・E 一貫性・F 構成は分散値が大きいのに対し，A 課題把握・B 内容記述は分散値が小さい．この結果からは，文章の構成力には児童による差が見られるが，課題に応じて内容を記述する力の差に関しては，相対的には小さいということになる．

表 3　内容的項目による分析結果（評定値）

	A 課題把握	B 内容詳述	C 独自性	D 段落	E 一貫性	F 構成	合計
平均値	6.59	6.30	6.73	6.12	6.25	5.90	37.89
中央値	6	6	7	7	6	6	38
最大値	9	9	9	9	9	9	51
最小値	3	3	4	3	3	3	19
分散	1.44	2.06	1.59	3.54	2.30	2.89	40.68

3. 3　計量的観点に基づく項目の設定

計量的観点に基づく項目を整理し，設定していくため，まず，先行研究（江本，1980；石井，1996 など）で扱われることの多い，a)から g)までの 7 項目と，読み手・書き手の意識を反映するものとして考えられ，かつ計量的に扱うことのできる，h)から j)までの 3 項目を立てた（土屋・他，2019）．

事前に作文は，誤字脱字等も含めて原文通りを原則として，パソコン上でテキスト入力した．d)，e)の算出にあたっては，常用漢字の範囲内で作文テキストを，適宜，漢字かな交じり文に変換した上で，形態素解析システム「Web 茶まめ」（http://chamame.ninjal.ac.jp/）を用いて形態素に分けた．「東京|学芸|大学」のように，複合語の固有名詞を中心に解析誤りが見られたが，一次結合を目安に手動で修正を行った．f)については，本稿で扱う文章が短いものであることを踏まえ，異なり語数を延べ語数で除した値を用いた．値の大きさが語彙の豊富さを表す．g)は，漢字等表記の誤り，原稿用紙の使い方の誤り（例：促音を行頭に置く）等である．

表 4　計量的項目

a)総文字数（句読点，符号等含む），b)段落数，c)文数，d)延べ語数，e)異なり語数，f)d)と e)の比， g)間違い数 h)呼びかけ表現数，i)主語（「わたし{が，は}」等）の出現数 j)所有表現（自称詞＋「の」，「わたしの」等）の出現数

h)は，「～ください．」（例：「見に来てください．」）等の勧誘表現の出現数を指す．読み手を意識した表れとして，分析項目に置いた．i)，j)は，話題に対し書き手の主体性を表すものとして，項目に加えた．

3. 4　内容的観点と計量的観点とによる評価項目の精査

評価項目が適切であるか検証し，より適切な評価項目とすることを目的に，内容評定と計量的項目との相関関係を検討した．結果の例として，評定値を x 軸，a)総文字数，e)異なり語数，h)呼びかけ表現数を y 軸とした散布図（図 2，3，4）を示す．

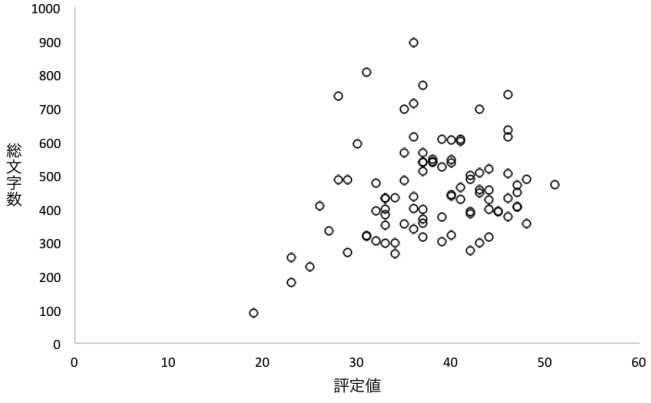


図 2　評定値と総文字数

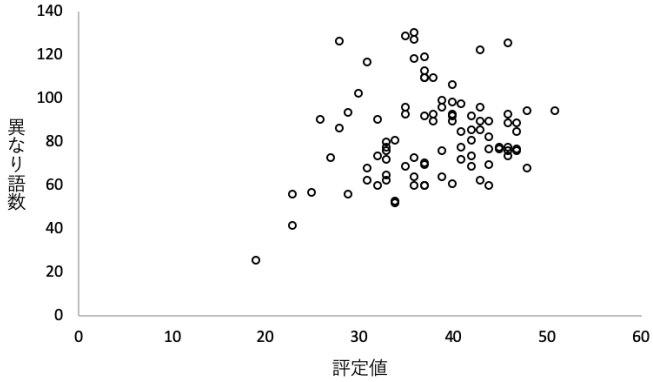


図 3　評定値と異なり語数

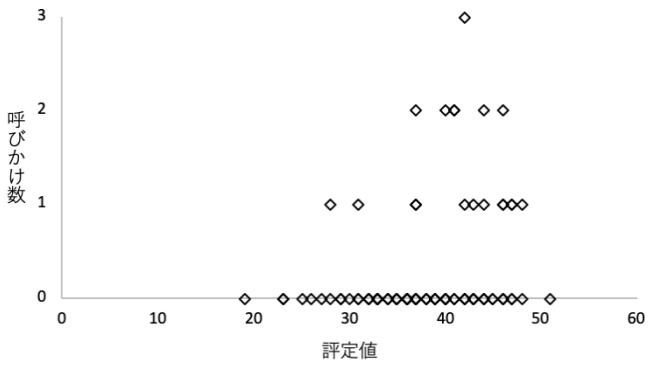


図4　評定値と呼びかけ表現数

評定値が低い方では，評定値が上昇するに伴い，異なり語数，呼びかけ数が増加する傾向が見られ，高い方では，このような線形の相関関係をとらえにくかった．これらの傾向は，ほぼ全ての組合せに見られ，評定値の低い群とそうでない群との，少なくとも 2 群に分けられることが考えられた．

ここではデータが 2 群に分かれると仮定し，2 本の直線回帰のモデルで説明できると考えた．評定値と 10 項目それぞれの組合せに対し，試験的に解析を実施したところ，評定値と「e」異なり語数」の分析において最も当てはまりがよく (R^2=.75)，他，比較的良好だった項目として「f) : d) 延べ語数と e) 異なり語数の比」，「i) 主語の出現数」，「j) 所有表現の出現数」が挙げられる．最も当てはまりがよかった評定値と「e) 異なり語数」との関係において，下位群として 8 データが取り出されることが示され，仮に，上位群を 7 名，下位群を 8 名とし，土屋・他 (2019) では，各項目の分析を行ない，項目そのものの評価を行なった．

内容的項目に関しては，「F構成」において上位・下位群間で差が最大となり，次いで「D段落」で差が大きかった．最小の項目は「A課題把握」であった．つまり，下位群の児童は，課題把握をし「伝えたいこと」に独自の意味や価値をある程度は見いだせても，内容構成における一貫性の保持や形式段落を作るスキルにおいて発達が不十分であることが示唆され，内容のまとまりを備えた段落を作れるかが，評価項目として重要だといえる．

さらに，記述的な観察を実施し，作文の質的分析を群ごとに行なって，補完的な評価を実施した．その結果，2 群間で「○○小学校を知らない相手に」という相手意識に違いが見られた．また，上位群の作文は，第一段落で特に伝えたい話題を明瞭に焦点化し，それに従って一貫性をもって書き進めていることがわかった．また，相手が知らないであろう学校の行事や特徴について具体例やその目的を挙げるなどの詳述があった．一方，下位群の作文は，相手意識が低い傾向が観察された．自分との関わりや自身の視点で物事をとらえるという独自性においても上位群，下位群で傾向が分かれており，取材能力・観察力の違いによると推察される．

計量的項目に関しては，2 群を比較して全般にいえることとして，下位群での分散が大きいことがあった．例えば，把握しやすい項目として「b)段落数」の項目では，上位群では 1 件を除き，3～5 段落に収まっていた．下位群では，文章全体が 1 段落となっている作文が多いが，一方で 14 段落にも分かれた作文がある．下位群では，「段落意識」が未定着であるのに対し，上位群では定着があり，一定の水準で安定しているものと推測され，内容的項目の分析で示した「F 構成」での差が適切に反映されているといえる．

上記に基づいて，大きく 2 点，指摘したい．1 点目は，評価によって示される，児童の作文を書く力である．ここでは，第 4 学年を対象としたが，この学年は作文を書く力の大きな変容・転換点にある．国立国語研究所 (1964) は，「主題の統一度」「取材能力」「記述力」「段落意識」等が中学年で伸びるとする．今回の評価項目により，内容的観点では，下位群において「段落」「構成」で評定値が低いという，上位群にはない傾向が見られ，質的にも，上位群は「相手意識」「詳述」「テーマの焦点化と一貫性」等において優れていることがわかった．計量的観点でも，下位群では項目全般に分散が大きく，上位群との相違が明らかとなった．これらから，評価項目が，中学年の作文の力の特徴をある程度描くことができていると考えられ，概ね妥当であったといえるのではないだろうか．

もう 1 点は，評価項目の抽出である．本稿では，内容的観点による評価項目「A」～「F」の 6 点と，計量的観点による評価項目 5 点を提案するのが適切だと考えている．内容的観点の項目は，記述的な分析でもあり，判定が比較的容易だと思われる．計量的観点の項目は，形態素解析など，特定のツールを使う必要があり，直接的な判定がしにくい．上記の内容をふまえた，「直観的な」計量的項目に置き換えることが実際的ではないだろうか．そこで，次の 4 項目を提案する：「ア) 複文の数」「イ) 語彙の豊かさ」「ウ) 呼びかけ表現数」「エ) 書き手の主体性」．

「ア) 複文の数」は，a)総文字数，c)文数に対応しており，一文の長さに現れる．「イ) 語彙の豊かさ」は，d)延べ語数，e)異なり語数，および f)それらの比の指標に対応した項目である．「エ) 書き手の主体性」は，i)主語 (「わたし{が，は}」等)，j)所有表現 (自称詞＋「の」，「わたしの」等) の出現数に対応した項目である．話題の明確な提示を反映すると考えられる．「ウ) 呼びかけ表現数」は，相手意識のあらわれと捉えられる．これらの項目により，作文を評価するワークショップを実践する．

4. 本評価システムを生かした授業実践の提案（大澤・土屋・成家）

本研究で構築する評価の項目や手法は，教育実践として，小学校国語科の作文指導に生かすことを目指している．現在，3 で紹介した作文の評価項目の精選の他，2.2 で示した指導と評価の関係を考慮しつつ，国語科の「書くこと」領域の単元構想や学習活動に即した評価規準などについても検討を進めている．その内容は，今回のワークショップでの活動を充実させる手がかりになるものと考え，一例を下記に示す．

4. 1 実践の概要

本研究で構築された評価観点を生かし，指導と評価の一体化を意識し，以下のように単元を構想した．なお，本研究の評価観点に関連のある部分を太字ゴチックで示してある．

⑴ 単元名：「今日のスターはキミだ！」～友だちのよいところを**しょうかい文**にしよう～
⑵ 対象学年：小学校第 2 学年
⑶ 単元の目標：**友達のよさが伝わる**ように，必要な事柄を集めたり確かめたりして，**紹介したいことを明確にして書く**ことができる．
⑷ 学習の方法：取材段階では，**取材カード**にメモを取るようにする．その際，紹介対象となる児童について，**二人組で観察・取材する**．構成段階では，**紹介対象となる児童について，二人組で互いの「情報」について話し合い，共通点や相違点を整理する（新学習指導要領〔知識及び技能〕⑵ア）．記述については，紹介したい内容が一人一人異なることに配慮して，一人ずつが行う．発達段階を考える**と，構成から記述段階について，「情報」を整理することの困難さが予想できるため，**取材カードの中から 2 つの事柄を選んで**記述するようにする．．

4. 2 本実践における評価

⑴ 単元の評価規準と学習活動に即した具体的な評価規準

	ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
単元の評価規準	○身近な友達のことを表す語句を増やしている． ○共通，相違など情報と報との関係を理解している．	○友達と経験したことや観察をして分かったことから書くことを見付けて，紹介したいことを明確にして文章を書いている．	○友達のよさを見付け，進んで相手に伝えたいという思いや願いをもって，文章を書こうとしている．
学習活動に即した具体的な評価規準	①身近な友達のことを表す語句を増やし友達を紹介する際に使っている． ②友達のよさを複数人で共通するするところ，相違するところを分けて書いている．	①友達のよさを紹介するために，必要な事柄を集めている．【情報の収集】 ②**友達のよさについて**複数人の情報を整理して，**紹介したいことを明確にしている**．【内容の検討】 ③内容のまとまりに沿って簡単な構成を考えている．【構成の検討】 ④文と文との続き方に注意しながら，内容のまとまりが分かるように書き表し方を工夫している．【記述】 ⑤自分たちが書いた文章の誤り，相手のことを考えながら読み返し確かめている．【推敲】 ⑥文章に対して，感想を伝え合い，内容のよいところを見付けている．【共有】	①自分も書きたいという思いをもち，観察対象となる相手を意識した文章を書こうとしている．

『学習評価の在り方ハンドブック』(国立教育政策研究, 2019) に示された学習指導要領に示す目標や内容に基づいた「観点別学習状況評価の各観点」をア，イ，ウと示し，単元の評価規準に即した学習活動の具体的な評価規準を設定している.

⑵ 単元の計画における評価の表し方

次	時	学習活動	指導事項	・評価規準　★評価方法
二	4	・取材カードをもとに,「そうだねシール」と「どうかなシール」「スターシール」を貼り，情報を整理する. ・どの順番で紹介するかを話し合って決める. ・取材カードから構成表と記述紙をかねた,「スターしょうかい紙」に記述する.	◎**友達のよいところがわかりやすく伝わるように情報を整理し，構成を考えること.**【構成の検討】 ・身近な友達のことを表す語句を増やし友達紹介に使うこと. ・文の中における主語と述語の関係に気付くこと.【知識及び技能】 ・語と語や文と文との続き方に注意しながら，内容のまとまりが分かるように書き表し方を工夫すること.【考えの形成・記述】	◎書くために，必要な事柄を整理し，構成を考えている．イ－③ ★取材カード，記述紙 ・身近な友達のことを表す語句を増やし紹介する際に使っている．ア－① ◎文の中における主語と述語の関係に気付き，使うことができる．ア－② ・語と語や文と文との続き方に注意しながら，内容のまとまりが分かるように書き表し方を工夫している. イ－④★記述紙

表5　評価規準

<u>満足できる児童の評価規準</u>
・自分が取材してわかった**友達のよいところ（スター）を**，他の友達の情報も関係付けて（共通点，相違点），**書くことを決めたり書いたりすることができる**.
<u>概ね満足できる児童への手立て</u>
・前時の友達の作文や教師の文例と比べたり，取材カードを確かめたりして，自分とのエピソードを想起できるように声をかける.
<u>概ね満足できる状況を目指す児童への手立て</u>
・取材カードを並べて,「そうだねシール」から一つ,「どうかなシール」から一つ選び，書くことを決めさせる.

4. 3　本評価システムの活用可能性

ここで示した授業では，右に示したような「満足できる児童の評価規準を設定して，その規準に到達できるように教師の手立てを想定している．実際の学習活動としては，ペアで取材カードを読み合っている児童がいたり，取材カードから早々に書くことを選んで書いている児童がいたりと，進め方も進み具合も大きく異なる．このように「書くこと」の学習では，複線型の授業（つまり，一人一人の進度に応じた授業）が展開されることが多く，授業の中で，個々の児童の作文の力を多面的に評価することが難しい.

3 で示したように，上位群，中間群，下位群の児童それぞれに，作文の力には特性があることが明らかとなったが，現場のこうした状況においては，本評価の項目を利用するなどして事前に作文の力を統合的に把握することによって，個々の児童の特性に合致した目標の設定や支援の方法を探ることができる．さらに，本研究の評価システムを生かし，個々の児童に的確な評価と支援を行い，書く能力の総合的育成に繋げることが期待できる.

5. ワーク作文評価活動（齋藤）

上記の内容を受け，本ワークショップにおいて，本研究プロジェクトが提示する項目で実際に作文の評価を行う．その流れは，次の通りである.

＜ワークの流れ＞

(1) 個人活動：複数の作文を，本研究プロプロジェクト提案の項目で評価する．
(2) グループ活動：個々の評価結果について話し合う．
(3) 全体の活動：グループの話し合いで話題になったこと（各作文の特徴，子どもの作文の力，評価項目とその基準について）を共有する．
(4) ディスカッション：全体で，本研究プロジェクトが提案する作文の評価項目，教育現場における活用の可能性と課題について議論する．

表6　WS　分析項目

内容的観点	A　課題把握
	B　内容記述
	C　独自性
	D　段落
	E　一貫性
	F　構成
計量的観点	ア　複文の数
	イ　語彙の豊かさ
	ウ　呼びかけ表現数
	エ　書手の主体性

評価は，3.2 および 3.3 で示した内容的観点 6 項目と計量的観点 4 項目の計 10 項目（表 6）で，ルーブリックを用いて得点化する．ルーブリックの評価点（3 段階を予定）と評価基準（行動ベースで記述）については，会場で提示する．なお，先述の通り，このワークにおいては，現場での運用を想定し，計量的観点の 4 項目についても数量化をせずに，直感的な判断で実施する．

最後のディスカッションでは大きく２つの点について検討したい．第一に，本研究プロジェクトが提示する評価項目の妥当性，第二に，学校における「書くこと」指導に本評価方法を活かすための評価システムの構築である．

第一の論点に関しては，「内容的観点と計量的観点による評価項目が作文の力の総合的評価のための項目として妥当か」「異なる作文ジャンルの評価においては，今回提示した「紹介文」の評価項目をどう変更する必要があるか」「学年による作文の力の発達を可視化する装置として機能させるために，評価項目・評価基準・評定値にどのような操作を加える必要があるか」等について参加者よりコメントをいただきたい．第二の論点の具体的な問いとしては，「国語科の指導目標・内容にいかに関連づけられるか」「「書くこと」領域の単元開発・実施・評価の過程でどのように活用できるか」「子ども自身の自己評価に関わらせることが可能か」等が考えられる．会場の皆さんとのディスカッションを通して，作文の評価方法の精緻化と学校教育現場における実用化の両側面で示唆を得られることを期待する．

謝辞

本研究は，東京学芸大学特別研究プロジェクト「国語科教育における作文評価の項目設定と手法の設計」の助成を受け，実施している．協力校の皆様にこの場を借りて感謝申し上げる．

参考文献

安部朋世・橋本修・西垣知佳子・田中佑・永田里美（2019）. 児童・生徒の作文における誤りの発生と修正　全国大学国語教育学会要旨集（仙台大会）　pp. 315-318
江本明子（1980）. 学校文集における児童作文の計量的考察　文教大学国文学 9 号　pp. 19-30
浜本純逸（1996）. 国語科教育論　渓水社
土部弘・宝示重美（1966）. 文章意識の発達（第３報）　大阪学芸大学紀要 C 教育科学 6 号　pp. 78-89
石井健介（1996）. 児童生徒作文の計量的分析の試み　学芸国語国文学　28 巻　pp. 82-90
木下ひさし（2018）. 書くこと　田近洵一・中村和弘他（編）小学校国語科授業研究　第五版　教育出版　pp. 126-133
国立国語研究所（1964）. 小学生の言語能力の発達　明治図書
国立教育政策研究所（2019）. 学習評価のハンドブック　pp. 6-9
野村雅昭・靍岡昭夫（1986）. 小・中学生の作文の語彙調査　計量国語学　15 巻 5 号　pp. 168-179
大熊徹（2016）. 真の「做多」とは，相手・目的・そして必然性に対応して書くこと　日本国語教育学会編 月刊国語教育研究 2　pp. 2-3
田中宏幸（2010）. 言語形式習得の形骸化を防ぐ　日本国語教育学会編　月刊国語教育研究 6　pp. 46-49
谷周平（2008）. 楽しむ作文と鍛える作文　日本国語教育学会編　月刊国語教育研究 5　pp. 34-37
東京都小学校国語教育研究会（2019）. 東京都小学校国語教育研究会研究紀要　第 40 号
土屋晴裕・成家雅史・安部真治・大澤千恵子・白勢彩子・中村和弘・齋藤ひろみ（2019）. 児童作文の評価項目に関する予備的検討―紹介文に見る内容的観点と計量的観点―　全国大学国語教育学会要旨集（仙台大会）　pp. 311-314

言語創発学の試み

－言語の個人基盤と社会性をつなげるインターフェースの解明に向けて－

企画責任者：中山俊秀(東京外国語大学)
話題提供者：中山俊秀（東京外国語大学）
伝康晴（千葉大学）
細馬宏通（早稲田大学）
木村大治（京都大学）

1. はじめに

本ワークショップは，個人の中で実現されながら社会レベルで維持されている知識・行動体系である言語に関して，個人基盤と社会性という一見相矛盾する側面をつなぐメカニズムとして「通じる」「共創する」「同調する」「連携する」といった広い意味でのコーディネーションに着目し，個体内体系性と社会的体系性の研究を橋渡しし統合させうる研究の必要性を多面的に論じ，その方向性を示すことを目的とする。

知識・行動体系としての言語が個体の中での体系であると同時に社会の中での体系であるという二重性を持っていることは議論の余地のないことである。文法やコミュニケーション規則は個体内の認知プロセスによって組織化され体系化され，個体の行動の中のパターンとして表れる。それと同時に，知識・行動上の規則性はコミュニティーの中で形づくられ変化しつつ制約づけられる。言語の研究もそうした個体・社会の二重性を反映したかたちで進んできた。シンボル操作の規則体系としての文法，コミュニケーションにおける言語使用や解釈の規則体系，そうした言語活動の背景にある認知能力の研究など，個体内体系に着目した研究がある一方で，コミュニケーションを成立させている個人間にまたがる社会規範や会話の規則，社会的関係性のネットワークの構造，規則体系の時空間的多様性の研究など，社会的体系に着目した研究が進められている。こうしてみると，言語の個人基盤と社会性の両側面がカバーされているように一見したところ見える。

しかしながら，現在の研究状況の重要な問題は，言語の個人基盤と社会性のそれぞれがほぼ別個に考察され，個体内体系と社会的体系という相矛盾するようにも見える側面がどのように繋がり一つの現象を形成しているのか，というインターフェース部分が十分に考察されていないという点である。言語という体系は，個体内という次元と個体間の社会という次元の接点に生じ，維持されている体系である。この個人基盤と社会性を橋渡しするしくみの核にあるのが「通じる」「共創する」「同調する」「連携する」といった広い意味でのコーディネーションであり，このコーディネーションが個体内体系と社会的体系の間の

相互フィードバック機構を取り持つ場として機能していると言えるのではないか。個体的次元と社会的次元をもつ言語の体系性を本質的，統合的に理解するためには，個体内体系が社会の中でどのように他の個体内体系と関係し相互作用するのか，あるいは，社会的体系が個々人の個体内体系の組織化にどのように影響するのかを明らかにしていくことが不可欠である。

言語コミュニケーションの中でのコーディネーションは共通コードによる正確な意味の伝達・共有によって実現されると考えられる傾向が強かった。複数の個体が共通したコードを持ち，その共通コードに従って送り手がメッセージを組み立て受け手がそれを正確に解釈することによって，理解の同期が取られることによりコーディネーションが成立する。つまり，コーディネーションは，同一のコードを使う複数の個体の間の正確なカップリングによって実現される副次的な状態であると考えられてきた。

しかしながら，我々の言語コミュニケーションの実態を振り返ると，コーディネーションが共通コードに依存した副次的状態であるという捉え方に問題があることに気づく。実際のやり取りでは，意味の理解を共有しない「形だけ」の同調や協調は少なくなく，「宇宙人」のようにコードの共有を全く期待できない相手であっても通じさせることは不可能ではなさそうである。一方，コーディネーションのないコミュニケーションはあり得ない。つまり，言語コミュニケーションにおいて，より上位に置かれる中心的要素はコーディネーションであって，共通コードではない。むしろ，コードはコーディネーションを取るためのリソースであって，コードに従って話すのもコーディネーションを取るための戦略の一つでしかない。

そう考えると，言語コミュニケーションを，個体的知識体系（コード）によって保障された現象と捉えるのではなく，逆にコーディネーションのためにコードを道具として活用する活動として捉えることができる。このワークショップで提示しようとする「言語創発学」構想は，言語コミュニケーションを，言語を道具として活用したコーディネーションの創発の一形態として捉え直し，そこから個体的知識の体系性，そしてその個体面と社会面の新たな理解に到達しようとするものである。

「言語創発学」は言語コミュニケーションとそこで形成される言語知識の特性について問い直す中で構想されたものであるが，本ワークショップでは，その構想の可能性をより広く探求するため，議論を狭い意味での言語のドメインに限らず，コミュニケーション現象における個体性（伝達手法の身体性，個体内体系性）と社会性（社会的共有性，コミュニティーレベルでの体系性）をコーディネーションの観点から捉え直し融合させる可能性と方向性を考える。

2. 「通じる」ためのリソースとしての文法（中山）

従来の言語研究では言語表現の構造的体系性に主たる関心を向けてきたが，その中では言語表現形成の規則性・体系性がコミュニケーションを支えていると考えられてきた。言語の規則性・体系性は話者個体が持つ構造規則の知識（文法）によって生み出され，言語コミュニケーションは，文法規則による言語表現の構築・選択と，同じ文法規則による言語表現の正確な理解によって成立すると考えるのである。

このような，言語現象に見られる規則性をもっぱら認知的な文法知識に還元するモデルをとると，言語は基本的に個体的な現象として捉えられ，コミュニケーションや言語の社会性も個体を基盤に考えざるをえない。従来，個体的文法知識が個体間で共有・連携される仕組みについて，「普遍文法」や一般的認知能力などの漠然とした枠組み以上のものは提案されてこなかったが，基本的に個体的文法知識が同一形に保たれる仕組みによって保障されていると考えるほかないであろう。言い換えれば，コミュニケーションや社

会性は共通コードによって保証されているということである。

しかしながら，実際のコミュニケーションにおける言語使用を見ると，コミュニケーションの正否や言語知識の社会的共有は，コードの厳密な共通性には依存しないようである。例えば，「役不足」「話が煮詰まる」などといった日常よく使われる慣用表現であってもその意味用法の理解にかなり大きな個人差があることは知られているし，「マジ卍」などの流行り言葉（この特定の表現はもう流行っていないかもしれないが）を意味をよく理解しないままに使うことは少なくない。こうした事例では厳密な意味での共通理解は成立していないかもしれないが，コミュニケーションの破綻をもたらすとも言えない。コミュニケーション成立のカギとなる「通じている」状態，もしくはコーディネーションが取れている状態とは言語表現の正確なやり取りよりも大きな概念であるようだ。言語使用はコーディネーションに向けての戦略として行われ，文法規則はコーディネーションを作り出すための道具，もしくはリソースであると考える方がより実態に即している。

以上から，コミュニケーションの中での言語の役割を考えるとき，「文法知識体系がコミュニケーションを支えている」という捉え方から「文法規則がコミュニケーション（コーディネーション）のためのリソースである」という捉え方に変える必要があるが，この転換が文法の研究にもたらす影響は非常に大きい。新たなコミュニケーション観ではコーディネーション構築というニーズが言語の使い方を第一に動機づける。そのため，よく意味がわからないままに流行り言葉を使うように，文法の構造規則，意味用法規則を超えて言語表現が使われることもありうる。言語コミュニケーションに見られるパターンの全てが文法（構造規則・意味規則）で形作られているわけではなく，コーディネーションを作り出すための行動パターンとして生じたものもある。これを踏まえれば，特に対面コミュニケーションにおける文法はコーディネーション創出メカニズムに埋め込まれており，その正確な理解には，コーディネーションという機能的コンテクストの理解と，そこでの言語使用の役割の研究が不可欠となる。また，文法知識の記述，モデル化においても，もっぱら個別規則体系としての最適化（整合性・統合性・効率性）を前提とする発想から，個別体系間のコーディネーションというニーズを満たす最適化圧力を合わせて考える発想に切り替える必要がある。

3. 規則の二重性と個人基盤・社会性（伝）

ここでは，言語コミュニケーションの個人基盤と社会性の関係について，認知科学の観点から考察したい。筆者は，言語コミュニケーションの社会的側面，とくに順番交替や連鎖組織など，おもに会話の規則に関わる研究に長年従事してきた。ともすれば，会話分析に傾倒した研究者だと見る向きもいるかもしれない。しかし，認知科学・人工知能出身の研究者として，そのような規則の認知的基盤についてつねに意識している。以下では，会話の規則が社会的であり，かつ，個人的であるとはいかなることかについて考えたい。

会話における順番交替が順番構成単位（TCU）の完結可能点において繰り返し適用される以下のような規則に支えられていることは，会話分析の主たる発見の一つである。(a) 現行の話者が呼びかけなどの次話者を選択する手段を用いてその TCU を構成していたなら，選択された者が次の順番を取る権利と義務を負う。(b) 次話者選択手段が用いられていなければ，聞き手の中で最初に話し始めた者が次話者になる権利を得る。(c) 以上のいずれも適用されなかった場合は，現行話者が話し続けることができる。これら

の規則は，同じ共同体に属する人々のあいだで共有されている社会規範である。だからと言って，これらの規則が「このような形で」個々人の心の中に表象されていて，それを操作しながら円滑な順番交替を実現しているわけではない。ましてや，このような規則を「コード」として共有し，それを援用しながら会話しているわけではない。むしろ，個々人の振る舞いのコーディネーションの結果として実現されているのだろう。

では，個々人の振る舞いのコーディネーションの結果として社会的規則が実現されるというのは，どのような認知的基盤によるのであろうか。我々は，子どもの頃からの発達の過程で日常的に会話に参与し，会話の規則に従う「やり方」を習得する。その「やり方」はコードでもなければ，記号的な表象でもないかもしれない。ある状況に対してどのように反応するか，といった反応特性（入出力の対応関係）なのかもしれない。このような反応特性は，生理・心理的な要因から社会・文化的な要因までさまざまな要因に影響されて決まるだろう。しかし，同じ種に属し，同じ文化・共同体に生活する個体間では概ね類似しているのではないだろうか。そうであれば，個体間の反応特性の類似性が，コードに変わって，社会的規則を「創発」させる原動力となることは十分にありうる。実際，筆者らは順番交替に関して，類似した反応特性を持つ話し手と聞き手とのあいだの自律的な発話／非発話選択のコーディネーションの結果として，会話コーパス中に見られる，非円滑な順番交替（同時開始や同時沈黙）を含む順番交替のパターンの分布を予測できることを示している。

その一方で，会話の規則は別の形でも利用される。たとえば，質問を宛てられた参与者（次話者として選択された参与者）がすぐに返答しなかったとしよう。質問者や他の参与者たちはその理由を求めるだろう（聞いていなかった，答えたくない，否定的であることを暗に伝えるなど)。このとき，参与者たちは，「次話者として選択された者は次の順番を取る義務を負う」という規則を「このような形で」参照している。あるいは，当の返答者としては，この規則を利用することによって，ことばによらない含みを伝えることができるのである。これは，上記の創発現象としての順番交替とは区別されるべきものであり，会話の規則の社会性と個人基盤との別の側面である。

以上のように，会話の規則の社会性と個人基盤の関係に関しては，（1）個人間の反応特性の類似性に支えられた創発現象としての社会性という側面と，（2）自分たちの社会的振る舞いを自己参照的に捉えて個々人が会話運用に利用するという側面の二重性がある。言語コミュニケーションを支える我々の認知メカニズムは，このような二重の側面のあいだを行きつ戻りつしながら，他者とのコーディネーションを実現しているのではないだろうか。

4. 予測と修正連鎖のマイクロ分析に向けて（細馬）

わたしたちは，誰かと何かを成し遂げようとするときに，相手の（発話を含む）行動が何を指し示しているのか，相手が次にいつどのように振る舞うかについて何らかの予測を立てる。これらの予測は，予測の時点では当たっているかどうかはわからない。次の相手の行為が明らかになったときに，初めて妥当だったかあるいはズレていたかが明らかになる。ズレていた場合，わたしたちは自分の予測を立て直したり，次の自分の行動を変更することで，ズレを修正したり，相手の次の行動に変更を促したりする。予測や行動の変更オプションは無限にあるわけではなく，自他のそれまでの行動やお互いのいる物理的環境によって限られている。そのおかげで，わたしたちは予測や行動の変更を無限の可能性から選び取るというフレ

ーム問題を回避し，限られた可能性のいずれかに絞り込むことができる。

たとえば指示行動について考えてみよう。他者が指や身体を使って離れたものを指さすとき，もし，指し示しの対象をその指先の方向のみから正確に推量しなければならないとしたら，わたしたちは他者の身体から離れた場所から，指し示しの方向をいちいち正確に測量し，把握せねばならない。しかし，実際に黒板上に密集した点の中から他者の指さしのターゲットを推測してもらうと，なかなかうまくいかない。どうやら，わたしたちはただ指先を延長しているのではなく，まずおおまかに指先の方向から対象の範囲を推測し，そこに分布しているもののなかから，お互いの現在の活動にとって有用そうなものを選択しているに過ぎないらしい。指し示しの対象は自他のそれまでの活動からある程度絞り込むことができ，指し示し対象の候補は物理的環境内にごくまばらに存在しているおかげで，わたしたちはすばやく指さし対象を探し当てることができるし，たとえ予測がはずれても，次の対象候補にすばやくたどり着ける。

同様に，たとえ指さしのない，あいまいな指示語を使った表現（たとえば「それとって」「あれどこだっけ」）でも，その場の物理的環境や状況，あるいはお互いの位置関係によって対象を（たとえば「塩」「申請書」のように）予測することができるし，「それじゃなくて」と修正を求められても（たとえば「胡椒」「許可書」のように）予測を限られたものへと絞り込むことができる。

これらの指示対象の予測と修正は，秒単位の比較的時間のかかるできごとであるため，わたしたちの意識にのぼりやすい。一方，わたしたちが相手と緊密な身体動作の連鎖を行っているとき，お互いのことばや行動はコンマ秒単位で起こっているため，予測と修正は微細な発声のやり直しや動作の変更に顕れ，意識にはのぼりにくい。このような予測と修正の実態を明らかにするには，ことばや動作の変更を詳細に記述し，それぞれの時間構造を考慮しなくてはならない。また，ことばや動作の予測を絞り込ませる物理的環境要因は何かを明らかにしなくてはならない（たとえば環境の持つアフォーダンスはこうした要因の一つだろう）。

わたしたちは，たとえ同じ物理的環境内にいるときでも，全く同じ環世界 Umwelt を持っているわけではない。相互行為は，何かのゴールを達成するだけでなく，予測と修正の連鎖によって，参加者どうしがお互いの環世界の相違を発見し，新しい予測と修正の方法を発見するプロセスでもある。このような相互行為＝創発的なプロセスを繰り返すことで，わたしたちの世界に対する知は更新されている。しかしコンマ秒単位の予測と修正を当人が意識したり言語化するのは難しい。その創発の様態を言語化するためにも，さまざまなフィールド＝物理的環境での観察に基づくことばと動作の分析が今後必要である。

5. コードなきコミュニケーションはいかにして可能か －「宇宙人との出会い」の思考実験から（木村）

「他者性」を捉えることは，人類学の究極の目的(のひとつ)と言えるが，私はこれまで，本業のアフリカ研究と並行して，もっとも極端な「他者」としての宇宙人を対象とする「宇宙人類学」なる領域を研究してきた．ただし言うまでもなく，一部の人々の主張を除けば，われわれはまだ宇宙人と遭遇してないのであって，そこではフィールドワークで他者と長期間つきあうという人類学の基本的な方法が使えない．しかしわれわれは，SF における想像という形で，宇宙人との出会いに関する豊富な思考実験の成果を参照することができる．宇宙人との出会いの「極端さ」とは，彼らがわれわれと共通のコードを持ってないという事態に存する．「コードなきコミュニケーション」は，果たして可能なのだろうか．本発表ではまず，

ファースト・コンタクト SF のひとつである，カール・セーガン『コンタクト』を例にとって話を始める．

『コンタクト』の主人公エリーは，ある日ヴェガ星からの信号をキャッチすることに成功する．まず検出されたのは素数の列であった．素数の列が自然現象として送られてくるわけはないから，それは地球外知性からのものだと判断された．この方法は，(厳密にはコードとは言えないが)コード的な手法によってコミュニケーションを交わそうというやり方であると言える．

さて，エリーたちがヴェガ人からの信号をさらに分析してみると，そこには動画の情報も織り込まれていることが明らかになる．分析の末，その画像をコンピュータ上に表示できる準備が整った．そこに現れたのは，何と 1936 年のベルリンオリンピックにおける，ヒットラーの演説の映像であった．ヴェガ人はこの，地球においてはじめて大規模におこなわれたテレビ中継を受信し，そしてそれを「そのまま」送り返したのだった．ヴェガ人は，この映像がヒットラーという人物だということは知るはずもないのだが，それを「そのまま送り返す」ことによって，たしかに地球人の信号を受け取ったということを示したのである．このやり方は，第一のやり方とはまったく違っていることに注意されたい．そこでは，「同じメッセージを送り合う」と言う意味での「相称性」という形の規則性が生まれてきており，それがまさにコミュニケーションなのである．たしかに人間同士，さらには動物同士の挨拶を見ても，その行動自体は多様ではあるが，そこに相称性(あるいは相補性)という形での規則性が見られる．私はこのように，相手との関係性のパターンの中に規則性を構築する，というのがコミュニケーションの本質だと考えている．

もちろん，そういった構築の過程で，いわゆるコードなるものが大きな役割を果たしていることは事実である．しかしそれは，「コミュニケーションはコードによって成立している」というということではない．本ワークショップで中山氏が主張するように，コードは関係性の中に規則性を作り上げるための道具，あるいはリソースとして「使われて」いると考えるべきなのである．

さて，規則性の構築ということを考えるとき，そういった規則性(「やり方」と言ってもよいだろう)にはどのような種類があるのか，ということが問題になるだろう．このことは，行為に対するタグづけ，と言い替えることができる．先に述べたように，「相称性」とはもっともわかりやすい，あるいは構築しやすい規則性のひとつだと言えるだろう．しかし，現実に起こっている相互行為においては，相称性という範疇ではとても捉えきれない多様な規則性が形作られている．そういった規則性に，「やり方はこれこれの種類があります」という形で有限のタグがつけられるのか，というと(サールの言語行為論はそのような発想が基本にあるように思われるが)，私はそれは不可能であると考えている．時間が許せば，その理由を「コルモゴロフ複雑性」の理論を援用して論じてみたい．すなわち，規則性の種類を枚挙することは不可能であり，いつ何時，思わぬ規則性(やり方)が発見されるかわからない，そういったある種の不安の上に，コミュニケーション論は座しているのである．

規則性の話を中山氏の言う個体内体系性と社会的体系性の関係性に適用するならば，以下のような議論ができるだろう．宇宙人はさておき，われわれ人間同士に与えられたもっとも基本的な規則性は，互いの身体(そして精神？)の相似である．しかし，それぞれの身体，精神がどのような規則性で動いているのかを記述すること(「心」に関して言えば，理論説における「心の理論」ということになるだろうが)はたいへん困難である．そこでわれわれが用いることができるのは，それぞれがどう動くかという理論ではなく，「それがどう動いているにせよ，似たもの同士のインプットとアウトプットの対応は非常に近い」ということなのである．このことを私は「共有されるブラックボックス」という名で呼んでいる．こういった論点に関しても活発な議論ができれば幸いである．

話し合いの可能性

ー異なる他者との対話を通した相転移ー

企画責任者：村田和代（龍谷大学）
話題提供者：水上悦雄（情報通信研究機構）村田和代（龍谷大学）森本郁代（関西学院大学）
ディスカッサント：佐藤 徹（高崎経済大学）佐野 亘（京都大学）

1. はじめに

近年，地域の課題探究や政策形成，あるいは組織活性化やコレクティブインパクトのプロセスで，セクターを超えたひとびとによる話し合い実践が積極的に取り入れられるようになってきた．本ワークショップでは，このような（成人による）課題解決型の話し合い実践をターゲットとし，話し合いの可能性を探究することを目的とする．既存の研究では，話し合いを合意形成や意見集約のツールとしてみなす場合が多いが，本ワークショップでは，こういった機能以外の話し合いの可能性について考える．とりわけ異なる他者との対話を通した個人の「相転移」（大きな転換，変容を意味する）（佐野ほか，2017）について，「学び」という観点から考察を試みる．

本ワークショップで着目したい成人の話し合い実践に伴う「学び」の側面については，近年の状況的学習論に端を発する学習に関する理論および生涯学習分野における成人の学習についての理論をてがかりとする．変容的学習論（メジロー，2012）では，子ども期の発達に伴う形成的学習と，成人の学習＝変容的学習とを明確に区別し，成人の学習を，1.意味スキームによる学び，2.新たな意味スキームを学ぶこと，3.意味スキームの変容による学び，4.（意味）パースペクティブ変容による学びの４つの形態に分類する．意味スキームとは特定の態度や信念，意味パースペクティブとは意味スキームのまとまりであり，習慣化された志向と期待である．特に3や4の「変容の学習」は，社会的実践の中で他者との対話によって生み出されるものと考えられる．

話題提供者（及びディスカッサント）らは，成人による課題解決をめざした話し合い実践現場のエスノグラフィーと話し合い談話の収録を続けている．これらを通して，異質な（世代，所属組織等が異なる）他者とのフェイストゥフェイスの対話を通して参加者に相転移が起こっていることを発見した．具体的には，「当事者性がうまれる」「他者とつながろうという志向性がうまれる」等である．また参加者の変容は，地域や組織の相転移にもつながる可能性がある点も共有した．

ワークショップでは，まず話題提供者から実証研究報告を行う．話し合い参加者の変化が相互行為上どのように現れているのかを考察し，それらは何を意味するのか，「学び」という観点から解釈を試みる．通時的考察（水上，村田①），談話比較による考察（村田②）ミクロな視点からの考察（森本）といった異なる観点からの報告を行う．４つの報告の後に，個人の変容の意義や，個人の変容と組織・地域の変容との関係性について，行政学の観点からコメントをいただく．

WS の後半では，参加者で3～5名程度のグループになって，異なる他者との話し合いを体験してもらいながら，話し合いの可能性について会場全体で考える．

2. 通時的な観点からの事例分析（水上，村田）

本報告では，異質な他者，特に立場の異なるメンバーとの継続的な話し合いを含む協働活動を通じた意識の変化を，発言や相互行為の変化から逆照射することを試みる．

筆者らの関心は，立場や考え方の異なる他者との対話や協働活動を通じて，個人の意識や，判断の前提となる枠組みが変わる（変容する）学習の側面にある．そのような学習過程は本来的には特定の対象者を長期に渡り観察する必要があるうえに，いつ，それが生じるのかの予測もできないため，容易には研究素材を得難い．そこで本報告では，その過程を垣間見ることができる一例としてイノベーション・コンサルティングやファシリテータ育成などを事業とする民間企業が主催したまちづくりプロジェクトを取り上げる．このプロジェクトは“企業，NPO，行政からさまざまな立場の人たちが参加し，地域課題を解決するビジネスモデルをつくるまちづくりプロジェクト”であり，30名の参加者が半年間，月1回集まって，様々なファシリテーションワークの実施手法を学びながら，地域の課題を自ら考え，それを解決する事業を立ち上げる．それは実現可能かつ持続可能な事業として提案，継続していくものであり，参加者はその過程で多くの気づきと学びを得て，一社会人としても，人としても成長していく様を見て取ることができる（村田，2019；水上，2019）．

2.1　通時的な観点からの事例分析―その１（水上）

本報告では，プロジェクト中に形成された行政１名，NPO1 名，大学教授１名，企業４名の７名からなるチームを対象にする．このうち事前に収録の承認を得た行政からの参加者０氏を対象として，この０氏が行政からの一参加者という立場から，チームメンバーとともにプロジェクトを作り上げて行くプロセスの中で，如何に意識が変容していったかを，その言動やコミュニケーション行動から読み解くことを試みる．分析対象は，７回（Day1～Day7）に渡るセッションのうち，チームができる前の最初の段階（Day1：フェーズ 1），暫定チームができた直後の段階（Day3：フェーズ 2），チームとしての活動を試行錯誤しながら進め，一度チームでトライアルとして観光ツアーをしてみた後の段階（Day4：フェーズ 3），事業としての形が見えてきた段階（Day5：フェーズ 4）のそれぞれの話し合い場面における対象者０氏の活動である．

以下の会話事例 2-1 は，とりあえずのチーム形成後のフェーズ２（Day3）における典型的な０氏の発言を含む会話である．このチームは地域密着型の体験プログラムや観光ツアーを通じて地域内外の人々をつなげるような事業を立ち上げることをテーマとして選んだ．この場面は事業に関連して体験コンテンツについて意見を出し合う中で，農業体験の一環として，昔ならではの農家スタイルの民家に泊まる「農泊」を例に挙げている状況であり，A と B はこの農泊について０氏よりも良く知る立場にある．

[事例2-1]（フェーズ2）
01 A: 本当にオフィスとかに泊めようと思ったら:(.)>もう<民泊の届け出をしないと[（いけない）.
02 O:　　[う:::[:ん.
03 A:　　[農泊って，農家（　　が）前提だったから::.
04 (0.6)
⇒05 O: 農泊って農で泊ま[る¿
06 A:　　[そうそう．>だから<旅館には特例でできる(.)んですけど:.
07 O: ふ::::ん.

ここで注目したいのは，５行目の０氏の発言の形式，特に問いの形である．０氏はA に対して，「農泊」とは何か（どのような漢字をあてるのか）を確認するフォローアップ質問をしている．このフェーズ２に限らず，Day4 までは，「認識上の権威（epistemic authority)」(Heritage, 2012）の観点から言えば，自分がより知る立場にない者（K-）あることを前提とした，他のチームメンバーに対する情報確認要求のための確認質問が発言の多くを占めていた．それがフェーズ３以降，次第に減っていく．ではどういう発言が増えたのか，フェーズ４（Day5）における０氏の典型的な発言例を見てみたい．この場面は，C が自ら関わっている企画（おとなりサンデー）について，うまくプロジェクトに取り込めないか，提案しているところである．

[事例2-2]（フェーズ4）
01 C: （　）メディアにもとりあえず[いってもらえるんで.
02 D:　　[そうそう.
⇒03 O: おとなりサンデーの企業版っていう::(.)感じですか?
04 C: >そうで[す<
05 O:　　[う::[ん.
06 C:　　[うち，うちどういう立ち位置（　）なのかわかんないんですけど:．エスサップ:で:
07 (0.9)
⇒08 C: >おとなりサンデー<ってほんとは何，何課になるんですか?
09 (0.4)
⇒10 O: 住民，完全住民の[:フランスからはじまった[こ
11 C:　　[完全住民なんだ.
12 B:　　[隣人の日みたいな感じですよ[ね.
13 D:　　[そうそうそう.
14 O:　　[孤独（　）孤独死とかがないように[:，予めこう顔見知りを
15　作っておこうっていう意味合い（　）.
～中略～
16 B: ０さんが:>そうですね<ここなのか:（　　）ここのなのか[:.
17 D:　　[全体なのかです[ね.
18 O:　　[まあそうですね.
⇒20　((地名))のま(.)盛り上がればわたしｈ的にはｈ

０氏の３行目における問いは，一見事例 2-1 で見た確認質問と同型である．しかし，聞かれた C が逆に，０氏に質問を返していて（8 行目），それに０氏が答えている（10 行目）．３行目における０氏の確認質問は，事例 2-1 のときのような純粋な K-としての確認質問というよりも，その後のやり取りに見られるように，議論を深めるための質問として機能していることがわかる．つまり，C の提案内容を端的な言葉で要約する（「おとなりサンデーの企業版」）ことで，自分の理解が

それよいのか，言い換えが的を射ているのか，の確認をしており，明らかに事例 2-1 の確認質問とは異なる．さらに言えば，C の 0 氏への問い返しが可能であったのは，そもそも 0 氏が自分より知る立場（K+）であることを知っていて，そういう意図のもと，自分に対して問われているのだということを理解したうえで，0 氏に質問していることが見て取れる．これだけではなく，「行政の立場としての意見を求められる相手」として，チームメンバーから問いを投げかけられ，かつそれに明確に答えている場面がフェーズ 3 以降に多く見られた．さらに 0 氏の立ち位置が，「行政の一員としての自分」というものを明確に示しているのが，20 行目の発言であり，どういう立場で発言したらよいのかわからなかったフェーズ 2 までとは異なり，何らかの変化を経て，自らも，チームメンバーからも，確固とした立ち位置で話し合いの場で活動をしていることがわかる．

以上見てきたように，0 氏はチームメンバーとの様々な活動を通じて，「変化」しているのがわかる．前項最後に取り上げた 0 氏の要約による確認質問は，実はファシリテーションスキルの一つである（村田,2013）．特段このプロジェクト期間中にそのような具体的な指導や指摘があったわけではないので，0 氏が自ら獲得した，あるいはそのようなスキルとは気づかずに実践したものであると考えられ，そのようなスキル獲得という意味での学習は確かに 0 氏に生起していたと言える．しかし，0 氏に生じた変化はそれだけではない．参加者は何らかの肩書を持った者として，このプロジェクトに参加しており，最初から 0 氏は「行政の側の人間」である．しかし，何者としてその場に参加し，何者としてメンバーに認識され，それがどのように話し合い活動に現れるかは，実は大きく変化している．0 氏に限らず，参加メンバーの多くは，会社や上司に指名されて研修に参加した者が多く，最初の自己紹介でも「とりあえず言われたから来た」という者が少なくない．ところが，Day1 が終わった後の感想として，「楽しかった」と述べた者が多かった（村田，2019）ように，まずは普段接点がないような異なる立場の人々と，普段とは違う場所で，未来について考えると言う活動をすることで，「個人として」この活動に関心を持つようになる．プロジェクトに目鼻立ちがついてきてチームを形成した頃までは，会社や組織の立場が見え隠れするものの，各人の個人としての立場をベースに話し合いが進められる．否定的な意見を言われたり，批判されたりすることもなく，次々と新しいアイデアが提示され，笑いが絶えない．ところが，プロジェクト実践を仮に試行してみたり，様々なステークホルダーを考慮に入れたり，マネタイズの問題や持続可能性の問題等，実際の課題が明確になるにつれ，沈黙が増え，現実的でない提案や意見は批判的に吟味されるようになる．一方，この頃から，プロジェクトに対して，各々の立場としての自分が何ができるのか，についての発言が増え，自然と「組織の一員である個人」として活動に参加するようになり，メンバー間でもそれが共有され，かつ，それをあえてその場で明示することなく議論が進んでいく．事例 2-2 の後半のやり取りにおいても，「行政として」「行政はどうですか？」のような問い方ではなく，「0 さんが」「私的には」のように，行政の人間であることを前提とした発言に変わっていることからも，その変容が見てとれる．つまり，0 氏自身が変容しただけでなく，0 氏に対するチームメンバーの認識そのものが同時に変容している．

この変容はたまたま 0 氏に生じたのか，0 氏以外にも生じているとすれば，同じような変容なのか，異なる形なのか，このプロジェクトだからこそ生じたのか，同じ設計であれば，別のプロジェクトでも任意の人に生じるのか，など更なる調査，分析を要するため，我々は継続的にクロスセクターの人々の話し合い実践の調査をしている．WS においては，時間が許せば，今年度別の場所で行われた同様のまちづくりプロジェクトを対象とした分析結果も報告したい．

2.2　通時的な観点からの事例分析―その 2（村田）

2.1 水上の報告では特定の個人の変容に焦点を置いたが，本報告では話し合いの場（参加者全員）の変容を報告する．特に本報告では，Day1 と Day7 の終わり（チェックアウト）の発言を比較する．Day1，Day7 とも，セッションの最後は，全員が円座になって顔の見える状態で，一人ひとことずつ話していた．何れも，セッション全体のファシリテータから，今日の感想について一人ひとことずつ発言するよう指示された後に一人ずつ発言していた．

発言にみられるアイデンティティ（自分自身や他の人をどのようにとらえているかについてで，発言例では(i)と表示），挨拶表現（(g)と表示），参加者の発言に共通してみられる表現（(s)と表示）を軸に，それぞれの回の特徴や Day1 から Day7 への変化について論じることとする．

Day1 のチェックアウトの所要時間は 15 分間であった．チェックアウトでの発言例（省略なし）である．

(1)
(i)タムラです．(s)楽しい時間，過ごせました．すごい，(g)ありがとうございました．皆さんの熱い，いろんなアイデアだけじゃないんですよ，思いがすごくって，ここにいる人たちだけじゃないと思うんですけど，これなら何か面白いことできそうだなっていう，すごい力をもらえたので，インスピレーションをもらえたので，この先(s)楽しみです．(g)よろしくお願いします．

(2)
あらためまして，(i)ヤマダです．結構，僕，つらいんだろうなと思って，来たんですけど，気付いたら，結構，時間，早くたって，びっくりしてます[笑]．

次回，(s)楽しみに．(g)ありがとうございます．

各参加者からの発言は 20～30 秒と「一言」という指示通り短く簡潔であった．自身の名乗り方についてであるが，名乗った参加者のうち「○○（苗字）です」が 14 名で，「△△（所属）の○○（苗字）です」(7 名）よりはるかに多かった．Day1 の話し合いでは，まずは一般的なテーマから始めて終わりの方では参加者個人に関するテーマを考える設えとなっているが，そのような実践を通して，それぞれが△△（所属先）のメンバーはなく，「個人」としてのアイデンティティが前面に出るようになったのかもしれない．

続いて，挨拶表現についてであるが，「よろしくお願いします」が多用されている．これは，初日ということで，初対面の参加者へのあいさつと考えられる．「ありがとうございます」も大多数の参加者にみられた．これは 1 日の実践を通した学びに対するお礼とみなすことができるだろう．

参加者間で共通して多用されている表現が「楽しい」（楽しみ，楽しかった等の活用も含む）である点に着目したい．加えて「○○（当該地域名）」という言葉も多く見られた．一日のセッションを通して「接点を見出した」「これから関わりたい」という変化が発言にみられた．

これに対して Day7 ではどのように変化したのか以下に考察する．Day7 のチェックアウトの所要時間は，Day1 の 3 倍以上の 50 分である．これは，各参加者の発言量が増えたことによる．以下はチェックアウトでの発言であるが，それぞれ長いため一部省略している．

(3)
(g)お疲れさまでした．（中略）(i)うちのチームは，すごい議論すると「なんか(s)○○って，もっと地域の人に力を使ったら盛り上がるよね」みたいな夢や目標があるんですけど，それで，(i)自分たちでどういう形で初めのアクションに落とせるんだということを考えると，もうちょっと詰めないといけないのかなとは思った．（後略）

(4)
(g)お疲れさまです．（中略）そこからまた何か変化が生まれるかなと思っていて，それはそれ(s)楽しみかなと思ってます．あとは，(i)会社としてどう関わっていくかっていうのは，今回，まとめたものをいったん会社に持ち帰って，(i)うちの会社もそんな俊敏な会社じゃないので，話をしていく中でどう関わっていくことができるかっていうのは，真剣に議論していかなきゃいけないかなとは思っています．（後略）

アイデンティティに関して Day1 から大きな変化がみられる．個人の感想を述べるよう指示されていたのにもかかわらず，「うちのチーム」「僕たち」にみられるように，チームメンバーとしてのアイデンティティが顕著に表れている．自分自身のことを言う際には「個人的には」「自分自身としては」といった表現を用いて追加的に表明されている．もう一点特徴的なのは，「うちの会社」「うちの商店街」「自分の団体としては」といったように，所属先に言及している点である．所属先に言及している箇所は(4)にみられるように，所属している機関（会社）とチームのプロジェクトの推進との関連性を見出そうとしている発言である（例「うちはファッションの会社なので，それをファッションに落とし込んでいきたい」）．さらにメンバーシップの構築は，あいさつ表現の変化からも明らかである．Day1 では，初対面同士の挨拶である「よろしくお願いします」が用いられていたのに対し，Day7 では，ほぼ全員が参加者たちにむけて「お疲れ様でした」とあいさつしている．一例のみ「ご苦労様でした」もみられた．「お疲れ様」は同僚や仲間で用いられ，「ご苦労様でした」は通常目上には用いられない表現であることからも，メンバー間のフラットな関係や仲間である連帯感が読み取れる．挨拶表現からも，チームメンバーのメンバーシップやフラットな関係性が読み取れる．

発言の中で他の参加者について言及する表現についても着目したい．「○○さん」「○○くん」という呼び方に加えて「みっくん」といったニックネームも用いられている．参加者は 30 代，40 代が中心ではあるが，20 代から 50 代まで広い年齢層で構成される．年齢やセクターを超えたフラットな関係性が構築されていることがわかある．さらに，関係性を表す表現として，「大学のゼミみたい」「フォーマルな友人」「仲がいい関係性」といった表現からも心地よい関係性であることもわかる．また，Day7 で多用されている表現として特徴的なのが，自分ごととして関わっていきたいという意思表明をする直接的な表現である．「がんばります」「しっかりやっていきたい」「もっと頑張ろうと思いました」「どんどんチャレンジしていきたい」にみられるように，約半分の発言にみられた点は興味深い．そして Day7 でも「楽しい」が多数の参加者の発言用いられていた．

複数回の話し合い実践を通した参加者の変化は次の 3 点にまとめられる．1 点目として個人からチームのメンバーとしての変化，2 点目として参加者間の関係性（フラットな関係性の構築）の変化，そして 3 点目として地域や地域の社会課題に対する意識の変化（地域や地域課題を自分事ととらえるようになった）である．これらの変化を話し合い実践を通した学び（学習）ととらえれば，チームワーク力や公共マインドが醸成された（学んだ）と言える．そして，変化（学び）を支えているのが話し合い実践への肯定的評価（楽しみながらわくわくしながら進めている）にある点にも留意したい．

3. 談話比較による考察（村田）

本報告では，同質なメンバーによる話し合いと，そこに異質な他者が入った話し合い談話との比較を行い，そこにみえる変化を考察する．某全国組織A地区女性部の支部長会の2回分の話し合い談話を比較する．1回目が支部長だけの話し合い（話し合い1），2回目は大学生が参加した話し合い（話し合い2）である．当該女性部では，女性会の活動が停滞しているという課題をかかえており，一年かけて話し合いを通したA地区の女性会の活動の活性化をめざしている．

話し合い1は月一回の定例支部長会で行われた．参加者は19名（全員がA地区内にある各支部のの支部長）である．話し合いのテーマは，A地区女性会メンバー（約150名）にとったアンケート結果の概要（講義）を聞いた後，講義と資料（アンケート結果の資料：アンケートでは女性会の活動についての意見や要望が問われている）に基づいて，気づいた点について共有し，そこから今後の活動をどうすればいいかの話に発展させるというものである．

話し合い2は話し合い1の1か月後の定例支部長会で実施された．参加者は支部長が13名，大学生5名である．話し合い1の最後で，「A地区女性会を活性化するには若い人を入れる必要がある．まずは若い人と話すことから始めよう．」という点が参加者間で共有され，実験的に1チームに一人若者（大学生）に入ってもらって話し合いを行うことになった．話し合い2のテーマは，当該組織女性会の活動について話した後，話し合い1と同様JA女性会の今後の活動についてということを話し合った．

本報告では2つの話し合い談話の最初のフェーズ[3]に着目してその変化を考察する．以下，変化の大きかったトピックの推移と発言者のアイデンティティに焦点を絞って考察する．

話し合い1は，4つのグループで同時進行していたが，共通した特徴として際立ってみられたのが，テーマからの逸脱，個人的なエピソードの出現である．話し合い1の最初のフェーズでは，A地区女性会メンバー（約150名）にとったアンケート結果の概要（講義）を聞いた後，講義と資料をみて気になる点を各自付箋に記入した．それを見ながら気になる点を共有するというテーマで20分間話し合った．話し合い前の講義では，A地区女性会に入ってよかったこと・よくなかったことや女性会の活動についての意見を中心的に紹介されていた．アンケート結果の資料の最初に女性会メンバーの現在の関心事が年代別で記されていた．主催者側としてはアンケートの中心的設問の前の予備的情報の収集を目的に収集した項目であったのだが，それぞれのグループの話題の中心は，「私」（個人）の関心事であった．1つのグループの例を示す．口火を切ったのはWである．

[事例3-1]

01 W: このアンケートね，一つね．アンケートがあったときは12月で，ほで，今日で2月の初めで，ちょっとの期間の間[で 年いった]のもある=
02 M: [年いったん？]
03 W: =けども，生活面の優先事項が変わってきた．
04 F: どないしたん？
05 W: やっぱり，家族に，
06 M: この間，言うたから？[お父さん
07 W: [だから今までは関心のなかった，
08 M: 健康とかな．
09 W: 介護問題がすごく今一番の関心事に．ちょっとの期間で変わると

発言を開始したWは，自分自身の関心ごとである「介護」について話し始め，上記に続いて介護のエピソードを話す．それに続いて他のメンバーも，自身の家族の介護や健康について自身のエピソードを展開する．以下7分間のトピックの推移は以下のとおりである．

表1 話し合い最初の7分間のトピックの推移

W	おじいさんの介護
K	おばあさんの介護
M	おばあさんの認知症の介護
F	娘の病気

話し合いのテーマは，アンケート結果をみて気づいたことを共有するということである．想定されるのは，各地区の支部長として，女性会の活動についての意見がどのようなものかについて話し合うことであるが，発言を開始したWは，自分自身の関心ごとである「介護」について話し始めた．それに続いて他のメンバーも，介護のエピソードを語りはじめた．話し合いのテーマにようやく戻ったのが，Nの発言である．その後約10分間女性会の活動についての意見をめぐって話し合い，最後に約3分間，Mが介護の苦労エピソードが話され，全体司会者によってフェーズ終了となった．最初のフェーズは以下のようにまとめられる．

表2　話し合い最初のフェーズの構成

7分間	主テーマからの逸脱（個人的なエピソード）
10分間	主テーマについての話し合い
3分間	主テーマからの逸脱（個人的なエピソード）

一方，話し合い2では，上記のような個人的なエピソード（の連続）による主テーマからの逸脱みられなかった．

次に発言者のアイデンティティの変化について，例に挙げたグループのメンバーW に着目して考察する．話し合い 2 の最初のフェーズでは，学生(S2)に女性会について説明をしている．

[事例3-2]

01 W: だから，町内会に子ども会とか女性会とかあるやんか．その女性会の中の((組織目))に入ってる人の役は，
02 　集まり．うん．
03 S2: もっぱら親睦会みたいな感じなんですか？
04 H: もっぱらっていうか，まず一応，最初はそうですね．うん．
05 W: うん．だから，その女性会の人でも，町内会の人でも，入ったら，いろんな役があるでしょ．それが嫌で入ら
06 　ない人が，今，多いわけです．それを勧誘するために，こういう親睦会とか．
07 H: 親睦会とか楽しいことをね．
⇒08 W: 手芸の会とか．手芸の会なんか，**私**なんか苦痛しかないんだけどhh あるわけです．今は，だから，入って
09 　ない人を，彼みたいな家族をどういうふうに入れるかが，地域もそうだし，((組織名))も問題かなっていう．
10 S2: なるほど．

事例3-2において，一か所「私」が出てくる．これは私人としての個人的な「私」というアイデンティティからの発言である．W の発言中「私なんか苦痛しかないんだけど」の箇所だけ小声で独り言のように発言され，最後に笑いが付加されている．これは言いにくいことを発言する際に用いられる緊張緩和の笑い（Murata, 2018）であろう．客観的な説明が続く中で個人的な発言は控えるべきであるという思いから笑いが付加されていると考えられる．

[事例3-3]

01 W: だって反対に，町会の役がだんだん薄れてきている分，友だち探しに入ってこられる方もあるんですよ，最近．地域の女性会の活動が
02 　やっぱり少なくなってきたからじゃあ((組織名))の[（　）
03 H: 　[ああ：
04 S2: なるほど．
05 H: うちらの地域は割かしそういう人が少ないんですね．うん，でも，やっぱりお一人になられてね，いらっしゃって，お一人になられて
06 　寂しいからね，女性会に入ってはったらね，60代ぐらいの人やったら，それはあなたが入ってるか入ろうかというような方もそりゃ，
07 　いらっしゃるやろうけどね．
⇒08 W: **私**，一つ思うんですけどね．婚活を入れればいいんじゃないかなと．
09 S2: 婚活hh
10 W: 絶対，そういうのがあれば，入って．うんうん．地方の農家さんはやっぱりお嫁さん，農家を継いでくれるお嫁さんを探してるんやけど，
11 　都市部だとそういうこと関係なしに．

上記発言でみられる「私」は，私人としての私というアイデンティティというよりも，地区支部長としての「私」としての提案であると解釈できる．このように話し合い2では，私人としての「私」から支部長としての「私」というアイデンティティ変容がみられた．

異質な他者が入ることで，話し合いに向かう態度（意識）が変わっていると言える．話し合い1は，テーマから逸脱する傾向が高かった．しかも，支部長会の話し合いであることからも，支部長として発言することを望まれているという状況であるにもかかわらず，私人の「私」として発言している．加えて，求められる話し合い参加者としての一定の想定（ルール）である，話し合いのテーマを共有してそれに即して話を進めるといった想定からも逸脱する傾向があった．一方，話し合い2は，話し合いの最初から発言の主語は，私人の「私」ではなく，支部長としての（あるいは女性会メンバーとしての）私として発言されている．さらに，話し合い2当日の終了後にとったアンケートでは，複数のメンバーから「もっと女性会の活動にかかわっていきたい」「もっと当該組織の女性会の活動について知りたい」という前向きなコメントが書かれていた．このような変化は，意味スキームの変容やパースペクティブの変容と親和的で，異なる他者との対話によって，当該組織のメンバーであるというメンバーシップや自身がその組織（当該コミュニティ）で求められる社会的な役割を再認識したと言えるのではないだろうか．

4.　ミクロな視点からの考察―質問―応答連鎖を通した意味スキームの変容（森本）

本報告では，異質な他者が入った話し合いが生み出す相転移が，話し合いでの相互行為を通してどのように起こりうるのかを考察するために，3 の村田報告でも取り上げた全国組織女性部の別の地区 B で行われた話し合いにおける質問ー応答連鎖に注目する．

質問は，相手から特定の情報を得るために行われる行為であるが，その質問の発話構成には，相手に対する質問者の見方やスタンス，前提などが組み込まれている（Raymond，2003；串田・林 2015 など）．例えば，「明日は何時に行くの？」という質問は，相手が「行く」ということを前提にしている．そして，「10 時に行く」と答えることは，同時にこの前提に暗黙のうちに同意していることになる．ところが，他のメンバーは行くが自分は行かない場合など，応答する側がその前提に同意できない場合，この暗黙の前提に同意しないように応答を構成する必要が出てくる（串田・林，2015）[1]．したがって，質問ー応答連鎖において，質問と応答がそれぞれどのように組み立てられているのかを分析することで，質問者と応答者のそれぞれ相手に対して持っている見方やスタンス，前提を明らかにすることができる。さらに，応答に対する質問者の反応には，元の質問が体現していた前提やスタンスがどのように変化していったのか（もしくは変わらなかったのか）を見ることができる．本報告では，質問で体現されている前提や見方に対して，応答者が何らかの抵抗を示していることが観察される事例を取り上げ，話し合いの中で相手に対する見方や理解が変容していく過程の一端を捉える．

本報告で扱う全国組織女性部は，若手の加入率が減り，シニア世代が組織を支える構造になっていることから，若手の加入の促進が喫緊の課題である．B 地区は農業が主たる産業となっており，ここの女性部でも，若手や新しい人の加入がないことから，従来のメンバーの負担が年々増えており，組織の活力も失われてきているという状況でもあった．こうした現状を改善するための具体的な課題として検討されたのが，①メンバーの満足度を高める，②組織の課題を共有し，目的に向かって活動する，の 2 点であった．これらの課題に取り組む方法を探るために，支部長会のメンバー12 人が参加して第 1 回目のワークショップが開催された．ワークショップでは，①女性部の活動に参加してからこれまで魅力に感じていたこと，②今後実現したいこと，③今後どんな一歩を踏み出したいか，の 3 点について，順に話し合った．その結果，女性部が「地域に頼られる，必要とされる存在」となると同時に，「自身も若い人も気軽に参加できる場」となることをメンバーが望んでいることが明らかになった．この結果を踏まえ，5 か月後に，女性部に加入していない若手の女性を招き，若い女性の参加に関する情報収集と相互理解を促進することを目的に第 2 回ワークショップが開催された．

分析の対象とした第 2 回のワークショップでは，まず，女性部のメンバーであるシニア世代（5 名）と，この日招かれた非加入の若手女性（4 名）の 2 つのグループに分かれ，それぞれが相手に聞いてみたいことについて話し合い，女性部メンバーは質問カードを作成した．次に，両世代が入ったグループを 2 つ作り，質問カードを使いながら対話を進めた．

第 1 回目のワークショップ及び第 2 回目の対話前の話し合いにおいて，シニア世代は，女性部非加入の若手女性に対して，「最近の若い人は忙しいから女性部を敬遠している」「農業に対する関心がそれほど高くない」などの印象を話していた．シニア世代が作った質問カードにも，そうした印象を体現するような質問が含まれていた．ところが，話し合いが始まると，シニア世代の質問が示す前提や見方，スタンスに対して，若手女性が抵抗を示す場面がいくつか見られた．以下では，こうした場面において，質問がどのような前提を体現し，若手女性がその前提への抵抗もしくは同意の回避をどのように行っているのか，さらに，若手女性の応答に対してシニア世代がどのように反応していくのかを，事例を通してみていく．なお，以下の事例のうち，S は女性部部長，A と B は女性部メンバー，C と D は若手女性を示す．

[事例 4-1]（20190125_B 0:02:43）
⇒01 C: 農家のことで学びたいことや知りたいことは¿ ((質問カードを読む))
02 (1.2)
03 D: 学びたいことでは::,
04 A: やりたいこと.
05 B: ( ) ((D に指さしをしながら A に向かって))
06 A: 何もない. hu hu huh
⇒07 C: >なんか<わ-わたし-うち農家だから:[>なんか<最低限の[こと分かるんですけど:
08 A: [うんうん [うん
09 A: うんうんうん.
⇒10 C: 友達で:非農家も-d-[あもう自分たちだけで暮らしてる人とか[って:,(0.8)あの:

1 そのような応答の構成の例として，Raymond（2003）は，英語会話における Yes/no 疑問文に対しては Yes ないし No を含んだ応答（type-conforming responses）がなされることが選好される一方で，応答者が質問者の質問の前提やスタンスをそのまま受け入れることに問題を見い出したり抵抗したりする際に，Yes/no が含まれない応答（nonconforming responses）を行うことを明らかにしている．また，串田・林（2015）は，WH 質問に対する応答の冒頭に産出される「いや」が，質問が体現する前提への抵抗を示す方法として用いられていることを例証している．

11 A: [うんうんうん. [うん
12 (1.0)
⇒13 C: >も<畑が:言ったらない(.)うち[も結構あるんです[[よ. でそれで: なんか(.)どうしたらいいのって=
14 A: [うんうんうんうん.
15 S: [うん.うん.
16 B: [[うん,あ:
⇒17 C: =逆に聞かれるん(.)ですよ.
18 S: うん
19 B: [あ::
⇒20 C: [>では<プランターでやったらとかゆっても:プランターで何をどう用意してなにをどうどの時期にどこまで
⇒21 やればいいのっ[てゆう:どんどん質問質問質問質問で:,[.h
22 S: [うん. [うん.
⇒23 A: あ:やっぱりそうゆう人(.)[でも:>なんか,<] 栽培してみたい[って気持ち[は,あるんだ.
24 C: [いる-(.)います.] [みたい. [はある.
25 C: あるよう(です.)=やっぱ子供たちに見せたいとか:,

1行目の質問「農家のことで学びたいことや知りたいことは」は，C とDが農家のことを知らないことを前提としている．つまり，この質問には，農家である，もしくは農家についての知識を持っている女性部メンバーのS，A，Bと，非農家で農家についての知識がないCとDという，農家―非農家というカテゴリー対が導入されている（Sacks, 1972）．それに対し，Cは7行目で「わたし，うち農家だから，最低限のこと分かるんですけど」と述べ，「非農家」で「農家についての知識がない」者という，Cに対するカテゴリー化に抵抗している[2]．その上で，非農家の友人が自分に質問をしてくるという話を持ち出す（10，13，17，20，21行目）．この応答を通して，Cは，「農家―非農家」という，質問が導入したカテゴリー対を，自分と自分の知り合いの間に適用し，「農家について学びたいことや知りたいこと」という質問を，自分個人に向けられたものではなく，「農家について知らない人」に向けられたものとして取り扱っている．

このCの応答に対する質問者側の受け取り方を見てみると，23行目でAは，「あ：やっぱりそういう人でもなんか栽培してみたいって気持ちはあるんだ」という気づきを述べて，C の応答を自分たちの質問に適合的なものとして扱い，C自身についての回答は追求していない．このことから，Aもまた，1行目の質問を，C個人に対するものではなく「農家について知らない人」に対するものとして遡及的に取り扱っていると言える．「そういう人でも」という表現も，Cの非農家の友人や知人のみを指示することで，すでにCを「非農家」に含まれない者として扱っており，この時点で，Cに対する「非農家」という見方はすでに修正されているのである．

このように，異質な者同士の話し合いでは，質問によって体現された相手に対する前提や見方が，相手の応答によって修正されることで，相互の理解が促進されていくということがあると思われる．また，この事例では，Cが自分に対するカテゴリー化に抵抗を示しつつも，農家―非農家というカテゴリー対を利用して応答を組み立てていることで，質問者は「非農家の若い人」たちが農家について知りたいことは何かという情報を得ることができている．この場の活動が，農家のシニア世代と，農家について知らない（であろう）若い世代の話し合いであるという参与者たちの理解が，それぞれの質問と応答の組み立てに反映され，その場の参与者同士だけでなく，彼らを含むそれぞれの世代について知ることへとつながっているといえる．

以下の事例4-2は，質問の受け手である若手の女性が「女性部に参加しない」理由についての質問者の想定が、質問に組み込まれている例である．女性部メンバーのEとF，若手女性GとHの4人で構成されたグループでの話し合いである．

[事例4-2]（20190125_A 01:44:58 IC）
⇒01 E: 同年代の,仲間がいたら,活動に参加できますか.((質問カードを読む))
02 (0.4)
⇒03 E: 女性部に.
04 G: あ::::::::.
05 (1.0)
⇒06 E: #これもまた子供がいるから[#な::.
#((Fに視線)) #((Gに視線))
07 G: [°ん::う::::ん.°
08 (0.6)

[2] Cは同時に，「最低限のこと分かる」と，自分の農家に対する知識を「最低限のこと」として低く見積もることで，シニア世代の質問が全く的外れなわけではないことを示し，質問の前提を完全に否定することはしていない．

⇒09 F: でも子どもがいても:同年代だったら,=
10 E: =うん=
⇒11 F: =お互い子連れで来てるかもわかんない.
12 (0.6)
13 F: それにもよるでしょうけ[ど.
⇒14 G: [なんか,(0.5)時間とかにしばられなくて:ほんとに好きな活動だけ来ても
⇒15 いいよっ(.)とかだったらなんか(.)来やすい.(0.8)かな:: と.[huh
⇒16 F: [う:んその好き（な活動つうのもかならず）
⇒17 人それぞれだからね.=
18 E: =うん.
19 G: >なんかたとえば<さっき:出た>その<シニア世代にして[もらいこと[この:(.).h イベントの:
20 E: [うん,これ.
21 F: [うん.
22 企画,>とかだったら,<

1・3 行目の質問は,同年代の仲間がいないことが,若い女性が活動に参加しない理由になっているのではないかという,質問者である女性部メンバーの想定を体現している．これに対して，4 行目でＧは「あ:::::::::」と発話して，質問内容がまったく想定外ではないことを示す（Endo, 2018）が，質問自体には答えず，1 秒の間が空く．このＧの反応とその後の応答の不在が，Ｇの応答が否定的であることを予示している．すると，質問者のＥはＦに視線を向けて「これも子供がいるからな::」と発言し，発話末尾の「な:」でＧに視線を戻す．このＥの発話は，「子どもがいる」ことを女性部の活動に参加できない理由の候補として提示するものであると同時に，Ｇから「同年代がいても参加できない」という否定的な応答が返ってくることを想定して，その応答を先取り的に述べたものでもある．それに対し，Ｇは 7 行目で「ん::う::::ん」と応答するが，小声でしかも音が引き延ばされていることから，Ｅが提示した応答の候補を完全に承認しているわけではないことが見てとれる．さらに 0.6 秒の沈黙の後，Ｆが「でも子どもがいても:同年代だったら,お互い子連れで来てるかもわかんない.」とＥの発話に対して反論するが，「お互い子連れで」という表現から見てとれるように,この発話は,Ｇ個人ではなくＧを含む子供がいる若い女性全体を指している．つまり，事例 5-1 と同様，この質問はＧに向けられたものであると同時に，子どもがいる若い女性全体に対する質問としても投げかけられたものであることが遡及的に示されているのである.

他方，Ｇは 14・15 行目で，「時間にしばられず好きな活動だけ参加できるのであれば来やすい」と述べる．この発話は直前の 6 行目から 11 行目のＥとＦのやりとりに対する反応ではなく，1・3 行目の質問に対する応答として理解可能である．そしてこの応答は，「どうやったら」参加しやすいかを答えることで，質問が体現した想定を否定している．それに対し，16・17 行目でＦは「ひとそれぞれだからね」と否定的な評価をするが，Ｇの応答自体を質問に適合しないものとして取り扱ってはいない．ここでも質問―応答連鎖を通して，質問者の想定が応答によって修正され，それを質問者が受け入れるというプロセスが見られる.

以上，異質な他者との話し合いにおいて，お互いに対する見方や想定が変化していく過程が，実際の相互行為の中でどのように起こっているのかを，2 つの事例を通してみてきた．変容的学習論の観点からこの過程を見ると，2．新たな意味スキームを学ぶこと，もしくは 3．意味スキームの変容による学びと言えるかもしれない．この 2 つの事例は，これまで対話したことのない他者との話し合いの場で，質問に組み込まれた相手に対する見方，もしくは「若い女性は子育てが忙しいから活動に参加できない」「若い女性は農家について知らない」といった信念が，目の前の相手によってその信念を否定されたり修正されたりすることによって変容を迫られることがあることを示している．つまり，話し合いは，こうした信念を外化し，変化の可能性にさらすという効果があると言えるだろう．また，質問によって導入される質問者と応答者の間のカテゴリー対への志向は，その場の参与者同士の相互理解だけでなく，彼らと同じカテゴリーに含まれる人々についての理解にもつながっていた．ワークショップ後のアンケートでは，「楽しかった．若い人たちの考えている事，思っている事を知ることができた」「楽しかった．日頃気になっていたことも聞けた．いろんな世代の人の話を聞けたので参考になった」という声が多く見られた.

質問という行為は，こうしたワークショップに限らず日常生活においても，異質の他者同士がお互いについて知り理解を深めるありふれた方法である．話し合いを通して相互理解が深まると言われるが，なぜ深まるのか，そしてそれがどのようにして起こるのかについては，まだ十分に探究されていない．実際の相互行為で何が起こっているのかを精緻に記述し探究することは，話し合いを通した意味スキームや意味パースペクティブの変容の具体的なプロセスの解明に寄与し，相転移を引き起こす話し合いのデザインを考える手がかりを与えてくれるのではないかと思われる.

注

会話文内で使用しているトランスクリプト記号は，西阪・串田・熊谷（2008）に従っている．

参考文献

Crick, Bernard (2000). *Essays On Citizenship*. London: Continuum. (関口正司, 岡崎晴輝, 施光恒, 竹島博之, 大賀哲訳(2011). シティズンシップ教育論 : 政治哲学と市民. 法政大学出版局)

Endo, Tomoko (2018). The Japanese change-of-state tokens a and aa in responsive units. Journal of Pragmatics 123, 151-166.

Goffman, Erving (1981). Forms of talk. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.

Heritage, John (2012). Epistemics in Action: Action Formation and Territories of Knowledge. Research on Language and Social Interaction, 45(1), 1- 29.

Holzman, Lois (2009). *Vygotsky at work and play*. Lodon: Routledge. (茂呂雄二訳 (2014). 遊ぶヴィゴツキー――生成の心理学へ 新曜社)

Kania, J, and Kramer, M. (2011). Collective Impact. *Stanford Social Innovation Review 9*, no. 1: 36- 41.

串田秀也・林誠 (2015). WH 質問への抵抗：感動詞「いや」の相互行為上の働き. 友定賢治 (編) 感動詞の言語学 ひつじ書房, 169-211.

Lave, Jean, & Wenger, Etienne (1991). *Situated learning: Legitimate peripheral participation*. Cambridge: Cambridge University Press. (佐伯胖訳 (1993). 状況に埋め込まれた学習 産業図書)

Mezirow, Jack (2010). *Transformative Dimensions of Adult learning*. Jossey-Bass. (金澤睦, 三輪健二監訳 (2012). おとなの学びと変容―変容的学習とは何か 鳳書房)

水上悦雄 (2019). 話し合いで話し手/聞き手になるための声の間合い～「仲間」になるまでのプロセスの分析～ 日本認知科学会分科会間合い―時空間インタラクション第 13 回研究会発表予稿集, https://sites.google.com/site/jccsmaai/history/13th/

Murata, Kazuyo (2018). Humor and Laughter in Japanese Business Meetings, *Japanese at Work: Politeness, Power, and Personae in Japanese Workplace Discourse Cook*, Haruko Minegishi, Shibamoto-Smith, Janet S. (Eds.), Palgrave Macmillan, 151-175

村田和代 (2013). まちづくり系ワークショップ・ファシリテーターに見られる言語的ふるまいの特徴とその効果―ビジネスミーティング司会者との比較を通して― 社会言語科学, 第16 巻第1 号, 49-64

村田和代(2019). 〈つなぎ・ひきだし・うみだす〉ためのコミュニケーションデザイン, 白石克孝・村田和代編 包摂的発展という選択―これからの社会の「かたち」を考える 第7章, 日本評論社, 152-173.

西阪仰・串田秀也・熊谷智子(2008). 特集：相互行為における言語使用：会話データを用いた研究について. 社会言語科学, 第10 巻2 号, 13-15.

Raymond, Geoffrey (2003). Grammar and social organization: Yes/no interrogatives and the structure of responding. *American Sociological Review*, 68, 939-967.

Sacks, Harvey (1972). On the analyzability of stories by children. In Gumperz, J. John & Hymes, Dell (Eds.), Directions in Sociolinguistics: The Ethnography of Communication, 325-345. Holt, Rinehart and Winston, Inc.

佐野亘・井関崇博・森本郁代・村田和代 (2017). コミュニケーションと関係性の相転移――市民教育の観点から (分科会) 日本地域政策学会第１６回全国研究大会, 中央学院大学, 2017 年7 月2 日.

招 待 講 演

講演者のプロフィール

中村　桃子（なかむら　ももこ）

【略歴】

上智大学大学院博士課程前期修了。博士（人文科学）。専門は言語学。関東学院大学経済学部講師，助教授，教授を経て，2017 年から関東学院大学経営学部教授（現職）。この間、ブリティッシュコロンビア大学、ハワイ大学マノア校客員研究員。

受賞　2008『「女ことば」はつくられる』ひつじ書房(第２７回山川菊栄賞)
学会活動　2006-　Editorial Board, *Gender and Language* (Journal of International Gender and Language Association)
2012-2014 Board member, 日本女性学会

【主要業績】

『翻訳がつくる日本語―――ヒロインは「女ことば」を話し続ける』(白澤社, 2013)
『女ことばと日本語』(岩波新書, 2012)
『ジェンダーで学ぶ言語学』編著（世界思想社，2010）
『〈性〉と日本語―――ことばがつくる女と男』(日本放送出版協会, 2007)
『「女ことば」はつくられる』(ひつじ書房, 2007)
『ことばとジェンダー』(勁草書房, 2001)
『ことばとフェミニズム』(勁草書房, 1995)
『婚姻改姓・夫婦同姓のおとし穴』(勁草書房, 1992)
Challenging Leadership Stereotypes Through Discourse: Power, Management and Gender. 共著 (Springer, 2017)
The Handbook of Language, Gender, and Sexuality. 共著 (Blackwell, 2014)
Gender, Language and Ideology: A Genealogy of Japanese Women's Language. (John Benjamins, 2014)
The Political Economy of Affect and Emotion in East Asia. 共著(Routledge, 2014)
The Language and Sexuality Reader. 共著(Routledge, 2006) 他

新敬語「マジヤバイっす」

―日常会話からメディアへ―

中村　桃子（関東学院大学）

近年、「スタイル」が注目されている。「スタイル」とは、集団のアイデンティティと結びついた話し方や服装などを指す。スタイルによる区別は、集団を差別したり、集団をステレオタイプ化するのに利用される。そこで、スタイルがどのようにつくられるのか、スタイルにはどのように意味が与えられるのかが研究されている。

その中でスタイルの形成に大きな役割を果たしていると考えられているのが、メタ語用論的言説、特にメディアの言説である。従来の研究では、メタ語用論的言説がスタイルを形成する過程が明らかにされてきた。一方で、メタ語用論的言説がスタイルの形成を阻止する過程は明らかにされていない。

そこで今日は、「マジヤバイっす」に代表される「ス体」とでも呼べるスタイルを題材に、男子大学生の日常会話で使われている「ス体」が、『発言小町』というメディアのメタ語用論的言説によってどのように意味付けされるのか、その結果、「ス体」はどのようなスタイルとして認識されるようになるのかを見る。

データは、同じ大学の運動部に属するふたりの 1 年生男子とひとりの 2 年生の 30 分の会話をビデオ撮影した日常会話と、『発言小町』に投稿された「ス体」に関するトピとそれに対する３４４のレスである。

分析の結果明らかになったのは、男子大学生は「ス体」を部活の先輩に対する〈親しい丁寧さ〉を示すために使うことが多く、それ以外にもさまざまなスタンスを表現するのに用いている。一方、『発言小町』のレスは、「ス体」を使わないレスと「ス体」を使ったレスの主に 2 つの手法によって、「ス体」の〈丁寧さ〉を否定している。「ス体」を使わないレスは、「ス体」を「正しい日本語」から排除し、「ス体」の話し手を特定の集団に限定することで、「ス体」の意味の可能性を狭めている。「ス体」を使ったレスは、面白おかしいパーフォーマンスとして「ス体」を用いることで、＜面白さ＞という意味を前景化し、その結果、＜丁寧さ＞を薄めている。

この分析結果は、『発言小町』のメタ語用論的言説が、「ス体」の〈丁寧さ〉を否定することで、「ス体」が丁寧なスタイルとして成立することを阻止し、日本語の敬語イデオロギーを維持管理する役割も果たしていることを示している。

招 待 講 演

講演者のプロフィール

土屋　俊（つちや　しゅん）

【略歴】

1980 年東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得退学後、日本学術振興会奨励研究員を経て、1982 年千葉大学助教授（文学部）、1994 年同教授、2011 年独立行政法人大学評価・学位授与機構（現在は、大学改革支援・学位授与機構）教授。

大学では、哲学、倫理学、認知科学、文書処理等について教育、研究指導、研究を行った。現職では、高等教育質保証の研究および業務支援に従事。

【主要業績】

土屋俊、加藤浩 『記号論理学』放送大学教育振興会、2014 年 3 月.
土屋俊他『グローバリゼーション，社会変動と大学（シリーズ　大学第 1 巻)』岩波書店、2013 年 3 月、(共著、「デジタルメディアによる大学の変 容または死滅」pp.167--196 を分担執筆）.
土屋俊 『デジタル社会の迷いと希望』くろしお出版、2011 年 8 月、400 ページ.
池澤夏樹編『本はこれから』岩波書店 、2010 年 11 月、(土屋俊「最悪のシナリオ」,pp.133-139 を分担執筆).
土屋俊 『なぜ言語があるのか』くろしお出版、2009 年 9 月、435 ページ.
土屋俊『心の科学の可能性』くろしお出版、2009 年 5 月、420 ページ.

言語の哲学が社会言語学に解消しないのはなぜか

土屋俊 (大学改革支援・学位授与機構)

2020 年 3 月 6 日

1　問題解説と解答例

■短い回答　簡潔かつ実情に則して回答するならば、そのようなタイトルにしないと講演をすることに意味を与えにくいからということになる。しかし、そのような目的論的回答を避けるならば、以下のように説明することができる。

■長めの回答: 偏見に満ちた問題解説

1. 1980 年代において、言語行為論、指標意味論、談話理論及び implicature の理論は語用論という経験科学の分野に包摂されるようになったと思われ、個人的には、それは広い意味の社会言語学的テーマであるとも考えられた。
2. 言語行為論は、言語行為 (発語内行為) の成立の必要十分条件を発見する経験科学となった。発語内行為は明白に言語の使用を不可欠とする社会的活動を分類するものであるので、「社会」言語学という経験科学の一分野になったはずであった。
3. 指標意味論は、(部分的) 可能世界意味論を一般化した形で形式化され、可能な枠組みのどれを選ぶかは、話し手、聞き手、発話時点等に関する経験的事実をどのような指標によって説明するかの理論となるはずだった。
4. これらの理論的指向を方向づけていた基礎的な前提は、意味の合成性 (compositionality) という信念であったと考えられる。すなわち、
   (a) 文は完結した意味の単位である。(「語は文の脈絡のなかでのみ意味をもつ」という文脈原理とも、一般的な言語学的意味論とも整合的な前提。)
   (b) 文の意味は、その要素の意味と要素の結合具合 (構造) によって決定される。(こちらは、文脈原理とは不整合。)
   (c) ただし、個別に文を発話したときのその文の意味は、かならずしもその要素の

意味と要素の結合具合 (構造) によって決定されるわけではなく、その発話の状況 (文脈、脈絡、コンテクスト) の要素の助けを得て、最終的に完結したものとして決定される。

5. 文を完結した単位として見なすとはかぎらない、談話 (discourse) に関する「意味」の研究も指標意味論の一変異となるはずであったし、談話するという行動は社会的行為なので、広い意味の「社会」言語学と考えることも可能であろう。
6. Implicature の理論は、聞き手側の推論の心理的過程という経験的事実に関する研究として展開することが期待されるようになった。この辺りは、「社会言語学」の範囲にはいっていたのか、いるのかは不分明である。
7. 相互作用的な側面もまた心理的な側面として記述されることになるはずであった。
8. したがって、言語哲学は、十分な概念装置を準備したうえで、それ以降は (広い意味の) 社会言語学あるいは (経験科学としての) 言語学に発展的解消するものと考えた。

しかし、どうもそうは展開しなかった。その理由、原因を検討したい。これらの原因、理由ゆえに、言語哲学の課題は残っていると考えざるを得ない。

■長めの回答　言語の哲学が社会言語学に解消しなかった理由は暫定的には以下の 2 つであると考えられる。

1. 言語哲学は、まさに「言語とは」という定義を行おうとしている以上、言語の多様性を前提としない、ないし無視することに関心の本質がある。この点は理解されてはいたが、結果として、生物学的還元論に帰着してしまった。(しかし、生物学的還元論は、説明ための枠組みとしては同語反復に陥る危険をつねに孕む。) したがって、少くとも社会的特性に起因する多様性を説明するための道具立てを用意することはできなかった。他方、社会言語学的関心は、方言学的研究を端的な事例として、言語の多様性を前提し、その名のもとに総括され得る現象について、記述し分析することを促している。この関心の違いが前者を後者に解消することを不可能としている。
2. (文の) 意味の合成性が十分に検討されてはいなかったので、解消するための概念的、分析装置的な準備が不足していた。指標的可能世界意味論や、おそらく implicature の理論によれば、文の意味は (広義の) パラメタを含むものであり、パラメタの値は文脈 (使用の状況) によって補われると考えられたが、これが実現するためには、どのようなパラメタが必要であるかが、文の使用に先立って「文法」

的に定まっていないといけないように思われる。しかし、文の使用の状況は、象徴的な例としての皮肉のように予想が原理的にできないものであるので、それがあらかじめ定まっていると想定することは困難である。

本講演の目的は、このような状況にあることの意味を理解し (つまり、学説史的の正しさを主張するのではなく)、できれば、社会言語学に解消しきれなかった言語哲学の残差を明確にすることにである。そのために、まず、以上のような認識の背景となる 20 世紀後半の言語研究のいくつかの、しかし、もちろんすべてではではない側面を顧みつつ、問題を意図的に単純化して整理する。そのうえで、現段階における基本的考え方として、言語の使用による行為の内容が使用された言語の意味をその使用の脈絡によって補われて特定されるとするのではなく、言語の使用の脈絡が言語の使用によって特定されるとする考え方を提案する。その方向での分析の端緒として、道路を通行する自動車よるパッシングランプの使用における行為と言語との関係を論じ、さらに、矢印、交通標識の「意味論」の構造について議論する。(と言えばちゃんとした議論をするように思われるが、実際には懐古的に美化した大雑把な理論にすぎないともいえる。)

2　素人社会言語学遍歴

大学生の頃以来のいわゆる言語学や社会言語学とのお付き合いについて、歴史回顧の意味で若干紹介する。内容的には、Noam Chomsky, G. H. Mead, William Labov, Derek Bickerton, Irving Goffman, Emanuel Schegloff, Peter Trudgill 等に言及するが、たんなる回顧にすぎない部分が大きいので、ここでは詳述しない。

3　言語行為論と語用論

3.1　J. L. Austin の言語行為論と John Searle の言語行為論

J. L. Austin の言語行為論は、言語の使用を以下のように分析する。

1. 言語を使用するときには、すくなくとも 3 つの区別される行為を「同時」に遂行している
   (a) 言語的要素を使っている。音声の場合には発話している。
   (b) 同時に、発語内行為を遂行している。
   (c) (同時に、) 発語媒介行為を遂行している。

2. 発語内行為は、なんらかの言語的要素の使用を必須とする社会的慣習を分類する行為である。分類の結果は、いわゆる行為遂行動詞 (performative verb) として命名されている。
3. 発語内行為は、「成功」の条件ではなく、「失敗」の条件 (infelicity) によって特徴づけられる。
4. 発語媒介行為は、発語行為の遂行の結果としてもたらされる事態によって分類される行為である。同じ事態を言語的要素の使用によらずに意図的にもたらすことが可能である。

John Searle の言語行為論においては、とくに発語内行為について以下のよう想定が受けいれられている。それぞれの発語内行為は、心理的、社会的な内容の必要十分条件によって特徴づけられている。そららの条件が満たされたとき、その行為は「成功」したとされる。

このふたつの理論の相違は明白である。Austin の発語内行為は失敗の条件によって、Searle の発語内行為は成功の条件よって特徴づけられる。この特徴づけの差異は、いわゆる間接的言語行為の扱いにおいて顕著となる。後者においては、間接的発語内行為は、字義通りの発語内行為 (たとえば、質問) が失敗した (成功しなかった) とい事実の認識から聞き手が推論し (しばしば慣習的なものとなることはあるにせよ)、意図された発語内行為 (たとえば、依頼) の理解の至るとものとして理解される。それにたいして前者においては、間接的発語内行為

3.2 語用論

語用論の理論的な意味での形式化は 1960 年代に Montague と Scott による様相論理のクリプキ意味論の一般化によって実現したと考えられるが、それをとくに一般的な意味での語用論すなわち言語の使用の理論と結びつけたのは David Kaplan であった。前者が基本的には、文のタイプの意味をパラメタを含む内容としてとらえて「意味論」を合成性の原理によって構築したのに対して、後者はその形式化を引き継ぎつつも、とくに指示表現の意味論と語用論において状況的、歴史的脈絡・文脈の役割を明確したものと理解できる。この理解は、後述の状況意味論にさらに継承されていくことになる。

3.3 Grice: 話し手の “Meaning” から聞き手の implicature へ

1957 年の Grice の “ Meaning” は、言語的意味が話し手の意図が聞き手に信念を形成させるというモデル (“causal theory”) を否定するところからはじめて、言語を使って意味するということが多重的な意図の構造、とりわけで、聞き手における理解の要素を含んだ意図の構造が存在することを明らかにした。しかしのちに、Grice は、聞き手が理解する内容は、言語的に何が言われた (what was said) かということ以上に、どのように言われたか (the way things are said) から理解して行動しているという点を強調することになる。この理解された内容が implicature であるが、Grice はこれを会話の協調原理、4 つの格率とそれからの逸脱、その逸脱の察知に発する聞き手の推論という枠組みによって説明する枠組みを提案することになった。ここで重要なことは、これらの枠組みを基礎として、経験的事実を説明するための経験科学としての展開したそれ以降の諸研究よりも、この枠組みそのものの妥当性である。そもそも、会話は協調的なものなのであろうか。逸脱は、推論の切っ掛けにすぎないものなのか、それとも逸脱の察知が推論の方向性を決めると言えるのか。そして、推論は停止することが保証されているのか (保証されていないとすると、理解したと言えることが保証されていないことになるが、そうしたら理解に基づいて次の行動を取ることができないはずだろう)。

4 状況意味論から

これらの哲学的な背景を前提とする。

4.1 意味の関係説

状況意味論が説く「意味の関係説」とは、言語表現の意味は、意味表現に付与されるなんらかの (狭い意味での) 対象ではなく、関係であるという主張である。関係を規定する項は、状況のタイプと状況のタイプである。状況のタイプはかならずしも決定的、全体的なものである必要はなく、また、関係は、自然的、因果的、慣習的等である必要はない。

4.2 書き言葉の自律性

使用の脈絡から

4.3　音声対話

課題指向的な音声対話の検討から、1990 年代において、以下の議論に関係するかぎりで次のような知見を得たと考えている。

1. Overlap 発話 (相手が話し終わないうちに話し始める) が多い。(雑談会話で多いのは理解可能かもしれないが、相手の言うことを理解してはじめないといけないと思われある課題指向対話において同様である)
2. あいずち発話は、理解したことを表示している場合よりも、理解してなくても会話を進めるために生じていると考えられることが多い。
3. 課題の遂行は、(たとえ一方的指示によって課題達成するような状況にあっても) 相手発話をそのままなぞるようなものではない。
4. 対話を介した課題遂行は、相手の発話を「理解して」課題の一部を遂行するとか、相手の理解を確認して次の発話を行うという形で進行するとはかぎらない。

5　言語使用による文脈の補完

5.1　コミュニケーションモデルからの脱却

Grice に従って、意味の理解は意図の理解であり、かつ、そのような意味の理解は、「勝手な」理解であり得る。すなわち、話し手の意図を正解、すなわち成功の条件とする意図の理解ではない。それは、話し手が伝達するという状況自体が、聞き手にとっては全体的状況の一部だからである。しかも、話し手の意図はかならずも明確に特定されているとは限らない。「中途半端な」理解で話しては行動する。コミュニケーションモデルの不成立については、すでに多くの議論がなされてきたが

5.2　状況意味論再考

言語使用とその文脈ではなく、文脈における欠落を補完するものとしての言語言語の使用コミュニケーションのためではないというのは正しいが、そこから心の言語にはいかない。

6　標識の意味:序論 (1) パッシング

自動車を運転をしているときに、前照灯のロービームとハイビームを高速で切り換えたり、点滅させたりするパッシングをする場合がある。これによって運転者は、以下のような意思を伝達しているとされている (*Wikipedia*(日本語版)「パッシング」)。

1. 本来は、自車が先行車に追い付いた際に「先に行きたいので進路を譲って欲しい」という意思表示として使用する。
2. 道を譲るとき（例：対向右折車に進路を譲る、合流時に自車の前を譲る等)。
3. 感謝の意思を伝えるとき（対向車に進路を譲ってもらった場合など)。
4. 道を譲りたくないとき（例：対向右折車の無理な右折をさせたくないとき、合流時の無理な割り込みを制する
5. 等)。
6. 前照灯が眩しいことを対向車に警告するとき。
7. 無理な割り込みや停車などに対して抗議するとき。
8. 発見した異変（何らかの危険や交通取り締まりなど）を対向車に知らせるとき。
9. 前照灯の消し忘れや点け忘れを対向車に知らせるとき。
10. 旅客運送車両であれば、車内で発生している喫緊の事案（バスジャックなど）を車外に知らせるとき。
11. 自動車レースでは、オーバーテイクを行うことを先行車に伝えるとき。

たしかに、「本来」その使用によって伝えようとしているとされる意思は、追い付き、追い抜こうとする内容であるので、”passing”という通称されることは理解できるが、それ以外の「意味」はその「本来」の意味とはかなり異なっている。実際 2. と 4. とはあきらかに同時に主張すれば矛盾している内容である。5. は、むしろパッシングするほうが眩しくなるのだから何をしているのかわからない。6. と 3. もあきらかに矛盾する感情の伝達である。本来の意味で使われているのは自動車レースにおいてだけではないかとすら思われる。

この単純な考察からだけでも、パッシングに「曖昧な」「意味」があり、それが文脈によって特定化されるという説明が十分でないことは理解できる。しかし、前照灯という装置の動作がなんらかの伝達機能をもつとして、その機能は自然な意味伝達とはいえず、慣習的な意味伝達でしかないことは、自動車の製造と利用もそのための環境 (道路、運転免許制度等々) の整備も社会的制度があって始めて可能であることを考えれば当然である。

たしかに、英語の”sanction” のように二義的でありかつそれぞれの意味が互いに対立的な内容であるような場合もあるが、ほとんどの場合「語源」に遡れば矛盾が表面的なものであるわかる。しかし、パッシングの場合にはそのような理解は不可能であろう。

では、どのようにして、パッシングの意味論、すなわち、個々の状況においてパッシング動作がどのような意味をもつかということを規定する理論を確立することができるのであろうか。

(予稿においてはここまで。)

7　標識の意味:序論 (2) 矢印

正規の道路標識においてだけでなく、生活、とくに公共的空間のあらゆる部分で矢印を掲げてなんらないの表示を行う標識が多数設置されている。なんの説明もなく掲げられている以上、その矢印標識は、その社会で慣習的な意味をもつと考えることが当然であるが、たとえば、天井に吊り下げられた板に描かれた下向き矢印が、「この場所」というべき内容をもつのか、「このまま直進せよ」という内容をもつのか、「ここから下へ行け」という内容をもつのかということはわからない。さりとて、慣習的であったとしても、文化的、社会的に決定されているということも断言しにくい。これらの内容がその場その場ごとに決まっているといういわざるを得ない場合が多い。こののような状況について、多義的な記号が使用の脈略によって曖昧性を解消されて一義に決定するということが適切なのであろうか。

これらの矢印標識に関する議論は本論において行うこととして、以上のような問題提起の意義について、言語の文脈補完機能という枠組みで考察する。

JASS カフェ～ゆったり気分で研究のよもやま話をしませんか～

2016 年度に開始した JASS カフェを今大会でも実施します．JASS カフェは，素朴な質問から学術的議論まで，昼食を取りながら堅苦しくない自由な雰囲気で語り合うことを目的としています．普段はゆっくり話せないような専門領域や研究歴の異なる多様な研究者同士が交流できる場です．

今大会の JASS カフェでは次の 3 つのテーマのテーブルを準備しています. 出入りも自由．昼食持参でぜひお気軽にお立ち寄りください．**大会初参加の方，大歓迎です．**

- **よもやま話**

  学会に関して，研究について等，ざっくばらんに語りましょう．

- **特集号「「共生」を問い直す社会言語科学」エディタを迎えて**
- **2019年度徳川宗賢賞（優秀賞・萌芽賞）受賞者を迎えて**

  第 44 回大会より受賞者講演がなくなります。そこで JASS カフェでカジュアルに研究についてお話を伺う機会を設けました。

詳細は学会当日に配布するチラシをご覧ください．

JASS カフェのテーブルテーマやゲストの希望がありましたら，会員マイページ内の「ご意見の送付」から提案をお送りください．

（企画委員会）

『社会言語科学』特集論文募集のお知らせ

学会誌編集委員会では，以下の要領で特集「「共生」を問い直す社会言語科学」の論文を募集いたします．特集に投稿された論文は，通常の投稿論文と同じく，査読を経て掲載が決定されます．

なお，特集では最終投稿期限が設定されていますのでご注意ください．投稿論文は基本的に投稿され次第，査読作業に入ります． したがって， より早く投稿された論文ほど， 査読が早く済み， 論文を修正する機会が多くなります．最終投稿期限は特集論文の投稿を受け付ける最終期限という意味ですので，早く投稿できる方は早めに投稿されることをお勧めします．刊行時期までに採択とならないときは，特集号以外の号に掲載されることもありますのでご了解ください．

特集論文の最終投稿期限：2020年9月30日（水）
掲載号の発行：2021年9月（第24巻第1号に掲載予定）
特集論文の投稿先：電子投稿システムを通じて投稿してください
（本学会HPの「学会誌」ページ参照）

タイトル：「共生」を問い直す社会言語科学

担当エディター：
鄭　惠先（北海道大学）
筒井　佐代（大阪大学）
平田　未季（北海道大学）
義永　美央子（大阪大学）

近年、母語や国籍、宗教、職業や雇用状況、年齢、性的指向、身体的・情緒的または知的なディサビリティやハンディキャップといった様々な面において、社会の構成員の多様性がますます可視化されつつある。特に 2018 年から 2019 年にかけて、入管法の改正による新しい在留資格の創設、「日本語教育の推進に関する法律」の施行、参議院選挙での障がいを持つ候補者の当選など、様々なバックグラウンドを持った人々が共に生きる社会のあり方を改めて考えさせる出来事が次々に起こっている。このような現代社会において、社会と言語の関わりを研究する私たちはどのような貢献ができるのだろうか。本特集号では、「共生」という概念をキーワードに、マイノリティとマジョリティという二項対立的な捉え方から脱却し、多様な文化的社会的背景を持つ他者同士が、互いに認め合い関わり合いながら共に暮らす社会のあり方を考える上で、社会言語科学の研究に携わる者として、どのような立場に立脚するべきか、またどのような新たな視座を提示できるのかを考えたい。

従来から、社会言語科学会は「社会の福利に資する」ウエルフェア・リングイスティクスの実現を目標に掲げている。『社会言語科学』においても、これまで直接的・間接的に共生に関連する特集がいくつか組まれてきた（例えば、第 13 巻第 1 号（2010 年）特集「日本社会の変容と言語問題」、第 16 巻第 1 号（2013 年）特集「ウエルフェア・リングイスティクスにつながる実践的言語・コミュニケーション研究」、第 17 巻第 1 号（2014 年）特集「多言語社会日本の言語接触に関する実証研究」など）。本特集号では、こうしたこれまでの研究の蓄積を踏まえつつ、「共生」に関連する今日的課題に取り組む研究を歓迎する。

「共生」というテーマを改めて取り上げるのは、現実に共生への取り組みが進む一方で、共生が叫ばれるほど逆行する動き（ヘイトスピーチなど）が激化したり、共生のための取り組み自体がマジョリティとマイノリティという二項対立を強化したりするといった、皮肉な状況が見受けられるように、「共生」というスローガンが掲げられても、それを実現することが難しい現状があると考えられるからである。

このような状況が生じる一因として、「共生」を語る際に用いられる「日本人」「外国人」あるいは「障がい者」「健常者」などのカテゴリーを表す言葉によって、カテゴリー内での多様性が看過され、結果的にステレオタイプによる見方が固定化されるといったことが指摘できる。「言語権」に関する議論においても、外国人年少者の母語保持の権利保障のように、常に社会的弱者の権利と受け入れ社会の義務という側面から論じられることが多い。そのような二極化した議論ではなく、普遍的な人権の問題として「言語権」を取りあげて相互承認の過程として捉え直すためには、既存のカテゴリーに安易に囚われることなく、多様性に満ちた現実を捉えるための新たな視座を獲得することが必要であろう。近年、複言語・複文化主義的な価値観、複言語意識の重要性が強調され、個人の中に複数の言語・文化が存在することを認める考え方も浸透しつつある。現実の状況が刻々と変化していくこの時代において、多様性を包摂するインクルーシブな社会を構築していくためには、多様な個人が集まった多様な共同体における「共生」の実態を知り、「共生」の概念を当事者の視点から改めて問い直し、すべての構成員にとって暮らしやすい社会を構築していく方法を模索することが求められていると考える。

共生に関するこのような現状を踏まえ、国内外における、様々な面での多様性を持った人々の共生の現状、取り組みを批判的に検討する意欲的な研究を歓迎する。本文の冒頭で、母語や国籍、宗教、職業や雇用状況、年齢、性的指向、身体的・情緒的または知的なディサビリティやハンディキャップなどの多様性を指摘したが、本特集号ではこれにとどまらず、様々な面で多様性を有する人々の共生を取り上げたいと考えている。ウエルフェア・リングイスティクスの観点からは、「弱者や少数派の話者の言語的差別の是正のためだけではなく、多数派を含むコミュニティの全構成員を豊かにする」という視点の重要性が指摘されている（平高 2013）。そうした視点を現実化するにはどうすればよいのか、地域社会、施設、学校などの現場での取り組みに注目した実践的観点、および学際的観点から論じることも重要であろう。多様な領域・観点からの論考が集まることによって、学術上の「共生」のあり方をも示す特集号になることを期待している。

引用文献

平高 史也 2013. 「ウエルフェア・リングイスティクスから見た言語教育」『社会言語科学』16 (1), 6-21.

学会誌 社会言語科学
(The Japanese Journal of Language in Society)

投稿規定(2015 年 7 月 19 日改訂)

1．投稿内容は未公刊のものに限る．ただし学会での口頭発表ないし予稿集に掲載された原稿，科学研究費補助金などの研究報告書に掲載された原稿，公刊されていない修士論文や博士論文の一部は投稿して差し支えない．なお，機関リポジトリなどウェブ上で公開されているだけの博士論文は未公刊のものとして扱う．
2．他の学術誌に投稿中の原稿と同じ内容で投稿すること（二重投稿）は認めない．
3．原稿の投稿者は社会言語科学会の会員でなければならない．共著の場合は，筆頭著者が会員であればよい．なお，編集委員会が原稿を依頼する場合は，この限りでない．
4．投稿は随時受け付ける．ただし特集の原稿に関しては受付の期限を定める．
5．投稿原稿の執筆は「執筆要項」に従うこととする．提出された原稿は，原則として返却しない．
6．投稿原稿は，編集委員会が審査し，掲載の可否を決定する．
7．掲載される原稿の原稿料は支払わない．
8．掲載原稿の執筆者には，1 編につき抜刷 20 部を無料で贈呈する．
9．掲載原稿の印刷に要する費用は，原則として本学会の負担とする．ただし，特殊な活字，図版の作成等により特別な費用がかかるときには，その費用は投稿者の負担とする．
10．図やイラスト，写真などの掲載に際して著作権・肖像権に関する処理が必要な場合は，執筆者自身が行うこととする．
11．掲載された論文等に関する国内外の著作権は，原則として本学会に帰属する．本学会は掲載原稿を電子化または複製の形態などで公開・配布する権利を有するものとする．
12．掲載原稿の執筆者は，掲載された論文等を機関リポジトリや個人のウェブサイトで公開することができる．ただし，学会誌刊行後 2 年間は公開できないものとする．

執筆要項(2020 年 1 月 20 日改訂)

1．投稿原稿の種類
- 投稿原稿の種類は研究論文，展望論文，資料，ショートノートとする．
  - a. 研究論文 —— 独創性のある実証的または理論的な論文
  - b. 展望論文 —— 重要な課題に関する内外諸研究を幅広く検討し，独自の観点から総合的に概観する論文
  - c. 資料 —— 言語資料，実験・調査の結果などの報告で，従来の学説の吟味検討や今後の研究展開に資することを目的とする論考
  - d. ショートノート —— 萌芽的な問題の指摘，新事実の発見や興味深い観察及び少数事例に関する報告，研究装置や研究方法に関する指摘・提案など
- 原稿の種類は著者が投稿時に指定する．ただし編集委員会は判定結果に基づき，審査途中で著者に種類の変更を求めることがある．
- 編集委員会は，上記の種類の原稿のほかに，巻頭言，特別寄稿，書評，報告などを会員に依頼することがある．
- 依頼原稿も含め，投稿原稿はすべて編集委員会が主体となって査読を行う．

2．投稿原稿の書式・分量
- 原稿本文は日本語または英語で書くこととする．表題と要旨とキーワードは日本語と英語の両方とする．
- 執筆言語が母語でない場合は、専門的な知識を有する母語話者等のチェックを受けること．
- 原稿は縦置き横書きとする．句読点は「．，」とする．
- 原稿は，原則として「投稿原稿テンプレート」（日本語用 Word ファイル，英語用 Word ファイル，日本語用 LaTex ファイル）を使い，その説明に従って書く．
- 投稿原稿の分量は，研究論文は本文のほか表題，著者名・所属，和文要旨・英文要旨，参考文献，

注，表，図等を含め，「投稿原稿テンプレート」の書式で 16 ページ以内とする．展望論文は同じく 16 ページ以内を，ショートノートは 8 ページ以内とする．その他の原稿については簡潔を旨とし，研究論文の基準を上回らないものとする．和文要旨はいずれも 600 字以内，英文要旨はいずれも 200 語以内とする．

・査読結果によって加筆修正が必要になった場合でも，原稿の分量は上記のとおりとする．そのため，投稿時の原稿の分量は規定より少なめにしておくのが望ましい．

・誌面はモノクロ印刷になるので，提出原稿は図表を含め，すべてモノクロにする．グラフなどはモノクロでも見やすいように工夫すること．どうしてもカラー印刷にする必要があるときは，著者の費用負担によりカラー印刷を認めることがある．

・図表は本文中の適当な個所に入れること．図表中の文字は 8 ポイント以上にする．

・本文のなかで章・節等の記号をつける場合には，章は 1.，2.，……，第 1 章第 1 節は 1.1 のようにし，以下これに準ずる．

・本文中の外国人名等の固有名詞は，原綴りあるいは英語綴りを原則とするが，公式の名称等として著名なものはカタカナでもよい．

・注は，必要最小限にとどめる．入れる場合は論文の末尾に入れる「末尾注」とし，脚注は用いない．

３．参考文献の書式

・本文中での参考文献の引用は，原則として以下のようにする．

安田・海野(1977)によれば……，Spitzberg & Cupach(1984)は，……

～である(安田・海野，1977)．，～という(Spitzberg & Cupach, 1984)．，～である(柴田，1978；竹内，1982)．

・参考文献の表記は，原則として以下のようにし，一般的な日本語とアルファベットによるものを原則とする．その配列は，和文文献と欧文文献を分けず，原則としてアルファベット順とする．なお，3 名以上の著者による論文を本文中で引用する場合，執筆者は自らの判断で初回から 3 名以降の著者名を省略できる（例えば「［筆頭著者名］ほか」）．また，参考文献には全著者の姓名を省略せずに記載する(ミドルネームはイニシャルのみ，あるいは省略可)こととする．

①和文の単行本（単著、共著、編著）の場合

柴田武（1978）．社会言語学の課題　三省堂

安田三郎・海野道郎（1977）．社会統計学　改訂 2 版　丸善

橋元良明（編）(2005)．講座社会言語科学 2　メディア　ひつじ書房

②和文の編著書中の論文の場合

竹内郁郎（1982）．受容過程の研究　竹内郁郎・児島和人（編）現代マスコミュニケーション論，pp. 44-79.　有斐閣

③和文の逐次刊行物の場合

・「巻」で通しページの場合，または「号」「集」等の上に「巻」がない場合：

芳賀純（1963）．日本人学生の学習した英語名詞の意味構造の比較研究　教育心理学研究，11，33-42.

・「巻」の下に「号」等があり，「号」ごとにページが変わる場合：

渋谷勝己（2000）．徳川学の流れ－方言学から社会言語学へ－　社会言語科学，2 (2)，2-10.

④欧文の単行本（単著、共著、編著）の場合

Norrick, Neal R. (2000). *Conversational narrative: Storytelling in everyday talk*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.

Spitzberg, Brian H., & Cupach, William R. (1984). *Interpersonal communication competence*. Beverly Hills, CA: Sage.

Dorian, Nancy C. (Ed.) (1989). *Investigating obsolescence*. Cambridge: Cambridge University Press.

⑤欧文の編著書中の論文の場合

Atlas, Jay D. (2004). Presupposition. In Horn Laurence R., & Ward, Gregory (Eds.), *The handbook of pragmatics*, pp. 29-52. Malden, MA: Blackwell.

Hymes, Dell (1972). Models of the interaction of language and social life. In Gumperz, John, & Hymes, Dell (Eds.), *Directions in sociolinguistics*, pp. 35-71. New York: Holt, Rinehart & Winston.

⑥欧文の逐次刊行物の場合

・「巻」で通しページの場合，または「号」「集」等の上に「巻」がない場合：

Zajonc, Robert B. (1980). Feeling and thinking: Preferences need no inferences. *American*

Psychologist, 35, 151-175.

・「巻」の下に「号」等があり，「号」ごとにページが変わる場合：

Sacks, Harvey, Schegloff, Emanuel, & Jefferson, Gail (1974). A simplest systematic for the organization of turn-taking for conversation. *Language*, 50 (4), 696-735.

⑦翻訳書

Lave, Jean, & Wenger, Etienne (1991). *Situated learning: Legitimate peripheral participation*. Cambridge: Cambridge University Press. (佐伯胖訳 (1993). 状況に埋め込まれた学習　産業図書)

⑧学会などでの発表（予稿集などに掲載されたもの）

山田寛 (2007). 顔面表情認知における情報処理過程　社会言語科学会第 19 回大会発表論文集, 346-349.

⑨インターネット上の資料の引用（かっこ内は資料にアクセスした日）

社会言語科学会 (2004). 原稿募集のお知らせ　社会言語科学会　2004年11月8日 <http://www.jass.ne.jp/ed/gakkaisi.html> (2007年6月20日)

⑩博士論文など

Kita, Sotaro (1993). *Language and thought interface: A study of spontaneous gestures and Japanese mimetics*. Doctoral Dissertation, Department of Psychology and Department of Linguistics, University of Chicago, Chicago, Illinois.

４．投稿方法

・原稿は，本学会の下記「電子投稿システム」内の新規投稿ページより投稿すること．
(https://www.bunken.org/jass/journal/applicant/top.php)

・投稿完了までの流れは以下のとおりである．

電子投稿システム → 論文情報入力 → 著者情報入力 → 原稿アップロード → 入力確認 → 投稿完了

・投稿を受理すると，編集事務局は自動的に原稿受理日，論文番号などを投稿者に電子メールで通知する（返信は不要）．

・不明な点があれば，下記編集事務局に問い合わせること．

〒169-0075　東京都新宿区高田馬場4-4-19
（株）国際文献社内　『社会言語科学』編集事務局
TEL: 03-5389-6492　　FAX: 03-3368-2830　　E-mail: jass-edit@bunken.co.jp

５．投稿の際に必要となる物

・投稿者は，原則として「投稿原稿テンプレート」（日本語用 Word ファイル，英語用 Word ファイル，日本語用 LaTex ファイル）に従って投稿原稿を作成すること．なお，本文や注，参考文献，謝辞，付記の書き方などで著者が特定できるような場合，その部分を削除するか伏せ字にして匿名性を確保すること．

・投稿原稿は，PDF ファイルにして新規投稿ページより電子的に投稿すること．なお，電子投稿システム内の PDF コンバート機能を用いて，投稿原稿を PDF 化することができる．なお，個人で PDF ファイルを作成する場合は，ファイルの「プロパティ」から作成者に関連する情報を必ず消去すること．

・電子投稿の際には以下の論文情報が必要になる．投稿原稿から転記すること．
(1) 論文表題（和文・英文），(2) 論文ジャンル(研究論文，展望論文など)，(3) 論文種別（一般／特集）(4) 特集名(特集号の場合のみ)，(5) 論文要旨(日本語600字以内，英語200語以内)．

・著者情報入力ページには，氏名（漢字，仮名，英字），所属機関（漢字，英字），会員番号（ID）を入力する．

６．査読及び刊行スケジュール

・原稿の査読は，担当編集委員及び2名の査読者によって行い，担当編集委員が査読者の評価を取りまとめ，編集委員会に判定結果を報告して承認を受ける．判定結果は，A (そのまま掲載可)，B (修正の上，掲載可)，C (修正の上，再審査)，D (掲載不可)のいずれかとし，原稿受理日から原則として3ヶ月以内に投稿者に電子メールで通知する．

・判定結果に基づき，第3査読者を依頼することがある．その際は，編集委員会からの電子メールにて著者に通知する．

・本誌は年度ごとに2回，8月末と2月末に刊行する．投稿は随時受け付けているが，刊行時期の3ヶ月前までに掲載が決定しない場合は，掲載が次号以降(特集のための投稿原稿についても同様)になる

ので，留意されたい．

7． 掲載決定後の入稿方法

・掲載が決定した場合は，修正後の投稿原稿に，前記(3) 著者名・所属と(7) 著者名ローマ字・英語の所属名を追加し，投稿原稿において削除または伏せ字にした著者関連情報を明示して，完成原稿を作成する．

・完成原稿は，プリントアウト原稿と電子ファイル原稿の両方の形式を用意する．なお，プリントアウト原稿は上記の編集事務局所在地宛に送り，電子ファイル原稿は編集事務局E-mailアドレスに送信する．

・プリントアウト原稿は，完成原稿と同じ体裁・内容とする．但し，図・表は本文(表題，著者名，和文・英文要旨，キーワードを含む)とは別にプリントアウトし，挿入希望個所をプリントアウト原稿の本文部分に指示する．

・図・表は1枚の用紙に一つだけ書く．また，図と表のそれぞれに一連番号をつけ，さらに題(説明，キャプション)をつける．

・図・表は，プリントアウトをそのまま利用して編集することがあるので，鮮明なものを用意する．刷り上がりの大きさは編集委員会の裁量による．

・電子ファイル原稿は，原則として「投稿原稿テンプレート」（日本語用Wordファイル，英語用Wordファイル，日本語用LaTexファイル）に入力したファイルとする．それに加えて，図・表部分はPDFファイルまたはMicrosoft Wordファイルとして別につける．

・著者校正は原則として二校までとする．校正の際の原稿への加除は認めない．

The Japanese Journal of Language in Society

Submission Guidelines (Revised December 20, 2015)

1. Submissions are limited to unpublished manuscripts. Manuscripts deriving from oral presentations at conferences or which have previously appeared in a conference booklet, papers which have been published as research reports for funding, and unpublished Master theses or parts of Doctoral theses may also be submitted. Doctoral papers published on institutional repositories and other such forms on the Internet are considered as unpublished.
2. Manuscripts of the same content of manuscripts that have been submitted to other journals will not be accepted.
3. Submissions are limited to members of the Japanese Association of Sociolinguistic Sciences. When there is more than one author, one author must be a member of the Association. Exceptions may be made if the editorial committee requests a manuscript.
4. Manuscripts may be submitted at any time. However, deadlines may be set for special issues.
5. Manuscripts should be prepared in accordance with the 'Style Guide.' In general, manuscripts will not be returned to the author.
6. Submissions will be reviewed by the editing committee who will decide whether or not the manuscript will be accepted.
7. Authors will receive no payment for accepted manuscripts.
8. 20 offprints of each paper will be supplied to the author for free.
9. The Association is responsible for publication expenses. If special expenses are required for specialized printing, the author will be responsible for these expenses.
10. The author is responsible for obtaining permission to reproduce any diagrams, illustrations, or photographs for which they do not own the copyright.
11. The Association retains the copyright of accepted papers. The Association retains the right to copy and reproduce accepted papers in both electronic or hard copy form.
12. The author of the manuscript may publish the manuscript on an institutional repository or on his/her own website. However, these may not be published within two years of publication in the Journal.

Style Guide (Revised January 20, 2020)

1. Manuscript types

Manuscripts should be one of the following types:

a. Research Paper: Should be original, verifiable/empirical, and theoretical.
b. Research Overview: Should provide an insightful and comprehensive overview of the subject, of which the author has extensively reviewed the related research.
c. Study of Material: Includes reports on linguistic material, and experiment and survey results. Papers should intensively review relevant theory and aim towards development of the topic.
d. Short Notes: Includes notes on new issues, reports on new findings or observations, case studies, and comments or suggestions related to research materials or methods.

The author should designate the manuscript type at the time of submission. However, while the manuscript is under review, the editorial committee may request the author to change the type of his/her manuscript.

The editorial committee may request members of the association to write manuscripts other than the types outlined above, such as introductory notes, solicited papers, book reviews, or reports.

All manuscripts, including requested manuscripts, will be reviewed by the editorial committee.

2. Submission format

Manuscripts may be submitted in either Japanese or English. The title, the abstract and the keywords must be written in both English and Japanese.

Manuscripts written by non-native speakers should be corrected and edited by a qualified native speaker with expertise in that area.

Manuscripts written in Japanese must be written horizontally and from left to right. The symbols "." and "," are to be used for punctuation.

Authors should prepare the manuscript in accordance with the manuscript template (Word file for Japanese, Word file for English, or La Tex file for Japanese).

The maximum length of the final version of a research paper written within the manuscript template, including the main text, title, author(s) and affiliation(s), Japanese abstract, English abstract, references, notes, tables and figures, is 16 pages. The maximum length of a research overview is also16 pages, while the maximum length of a short note is 8 pages. Other types of manuscripts should be concise, and not exceed the length of a research paper. The Japanese abstract should be no more than 600 characters, while the English abstract should be no more than 200 words.

Should corrections need to be made following peer review, these need to be made within the above maximum manuscript lengths. Authors are advised to allow for this when writing the initial manuscript.

As publication is in black and white, manuscripts, including any illustrations or drawings should be monochrome.

Tables and figures should be inserted within the main text. Letters used in tables and figures must be at least 8 point.

If chapters and sections within the text are to be numbered, use 1., 2., etc. for chapters and 1.1, 1.2, etc. for sections.

Non-Japanese proper nouns, including names, cited within the main text are to be written in their original form or in English. If an official name exists in *katakana*, that name may be used.

Notes should appear as endnotes after the end of the main text.

3. References

References in the text should use the author/date system, e.g.: (Spitzberg & Cupach, 1984), (Shibata, 1978; Takeuchi, 1982). When the author's name appears in the text, use: Spitzberg & Cupach (1984).

When citing a reference with three or more authors in the body, authors may omit the names of the second and later authors as in "(First author's name) et al." However, the full names of all authors must be included in the list of references (middle names may be abbreviated or obmited).

Japanese references should be written in Japanese, while references written in other languages should be written in alphabet. Japanese references and non-Japanese references should be listed together, in alphabetic order, and follow the following guidelines:

(1) Books in Japanese (single author, multiple author, edited book):

- Shibata, Takeshi (1978). *Shakai Gengogaku no Kadai.* Tokyo: Sanseido.
- Yasuda, Saburo, & Umino, Michio (1977). *Shakai Tokeigaku*. 2nd edition. Tokyo: Maruzen.
- Hashimoto, Yoshiaki (Ed.) (2005) *Koza Shakai Gengo Kagaku 2 Media*. Tokyo: Hitsuji Shobo.

(2) Chapters cited in edited books in Japanese:

- Takeuchi, Ikuo (1982). Juyo Katei no Kenkyu. In Takeuchi, Ikuo, & Kojima, Kazuto (Eds.) *Gendai Masukomyunikeshonron*, pp. 44-79. Tokyo: Yuhikaku.

(3) Periodicals in Japanese:

When only the volume or the issue number is given:

- Haga, Jun (1963). Nihonjin Gakusei no Gakushushita Eigo Meishi no Imi Kozo no Hikaku Kenkyu. *Kyoiku Shinrigaku Kenkyu*, 11, 33-42.

When both a volume and an issue number are given:

- Shibuya, Katsumi (2000). Tokugawagaku no Nagare - Hogengaku kara Shakai Gengogaku e -. *Shakai Gengo Kagaku*, 2 (2), 2-10.

(4) Books in European languages (single author, multiple author, edited book):

- Norrick, Neal R. (2000). *Conversational narrative: Storytelling in everyday talk*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Spitzberg, Brian H., & Cupach, William R. (1984). *Interpersonal communication*

competence. Beverly Hills, CA: Sage.

- Dorian, Nancy C. (Ed.) (1984). *Investigating obsolescence*. Cambridge: Cambridge University Press.

(5) Chapters in edited books in European languages:

- Atlas, Jay D. (2004). Presupposition. In Horn, Laurence R., & Ward, Gregory (Eds.), *The handbook of pragmatics*, pp. 29-52. Malden, MA: Blackwell.
- Winton, Ward M. (1990). Language and emotion. In Giles, Howard, & Robinson, W. Peter (Eds.), *Handbook of language and social psychology*, pp. 33-49. New York: John Wiley & Sons.
- Hymes, Dell (1972). Models of the interaction of language and social life. In Gumperz, John, & Hymes, Dell (Eds.), *Directions in sociolinguistics*, pp. 35-71. New York: Holt, Rinehart & Winston.

(6) Periodicals in European languages:

When the volume or the issue number is given:

- Zajonc, Robert B. (1980). Feeling and thinking: Preferences need no inferences. *American Psychologist*, 35, 151-175.

When both a volume and an issue number are given:

- Sacks, Harvey, Schegloff, Emanuel, & Jefferson, Gail (1974). A simplest systematic for the organization of turn-taking for conversation. *Language*, 50 (4), 696-735.

(7) Translated books:

- Lave, Jean, & Wenger, Etienne (1991). *Situated learning: Legitimate peripheral participation.* Cambridge: Cambridge University Press. (trans. Saeki, Yutaka (1993). *Jokyo ni Umekomareta Gakusyu*. Tokyo: Sangyotosho)

(8) Conference presentations (conference publications):

- Yamada, Hiroshi (2007). Gammen Hyojo Ninshiki ni Okeru Johoshori Katei. *Shakai Gengo Kagakukai 19 Kai Taikai Happyo Ronbunshu*, pp. 346-349.

(9) Online references (The information within brackets indicates the date of access):

- Shakai Gengo Kagakukai (2004). Genkoboshu no oshirase. Shakai Gengo Kagakukai 2004-nen 11-gatsu 8-nichi. <http://www.jass.ne.jp/ed/gakkaishi.html> (June 20, 2007)

(10) Doctoral dissertations:

- Kita, Sotaro (1993). *Language and thought interface: A study of spontaneous gestures and Japanese mimetics*. Doctoral dissertation, Department of Psychology and Department of Linguistics, University of Chicago, Chicago, Illinois.

4. Sending submissions

Manuscripts should be submitted using the journal's electronic submission system. (https://www.bunken.org/jass/journal/applicant/top.php). Follow the step-by-step instructions given by the system.

Upon receipt of a submission, the author will receive an email notification that the manuscript has been successfully submitted. This will include the date of submission and a manuscript submission number.

For any inquiries regarding the submission of manuscripts, please contact the journal's editorial office <jass-edit@bunken.co.jp>.

5. Submission procedure

Authors should prepare the manuscript in accordance with the manuscript template (Word file for Japanese, Word file for English, or La Tex file for Japanese). Any reference to the author(s) or the author's affiliation(s) in the main text, notes, references, or acknowledgements should be removed from the manuscript or indicated in a manner that maintains anonymity.

Manuscripts should be submitted in PDF format via the submission page of the web site. Manuscripts can be converted into PDF format by using the PDF conversion function provided on the web page. If the author creates the PDF prior to login, ensure that any information about the author is removed from the file properties before the file is uploaded.

The author will be required to input the following information: (1) the title of the paper in English and Japanese, (2) the manuscript type (research paper, research overview, etc.), (3) the

submission type (ordinary issue or special issue), (4) the title of special issue (if applicable), and (5) abstract in English (no more than 200 words) and Japanese (no more than 600 characters).

The author will also be required to provide his/her name (in *kanji*, *kana*, and alphabet), affiliation (in *kanji* and alphabet), and membership ID.

6. Peer review and publication schedule

Submitted manuscripts will be reviewed by three reviewers—a member of the editorial committee ("the editor-in-charge") and two referees requested to review the paper by the editor-in-charge.

The editor-in-charge will summarize the reports from the referees, and propose a final decision to the editorial committee. After the committee's confirmation, the author will be notified by email of the decision within three months of receipt of the manuscript. Notification will be in the form of, A (manuscript accepted), B (manuscript accepted after some corrections), C (manuscript to undergo peer review again after corrections), or D (not accepted).

Depending on the decision, the editor-in-charge may ask a third referee for additional judgment. In that case, the author will also be notified of the process.

The Journal is published biannually, in late August and late February. Submissions may be made at any time, however if publication has not been decided within three months of the publication date, publication will be extended to the following edition. The same applies for special editions.

7. Following acceptance:

After a manuscript has been accepted, the author will be requested to prepare the final manuscript. This manuscript should include the name(s) and affiliation(s) of the author(s) in both Japanese and English, and a revision of any places where names were removed to maintain anonymity.

Both a hard copy and an electronic copy of the final manuscript must be prepared. Please send a hard copy to the postal address of the editorial office (indicated below), and an electronic copy to the email address of the editorial office <jass-edit@bunken.co.jp>.

Postal address: The Editorial Office, the Japanese Journal of Language in Society
c/o Kokusai Bunken-sha
4-4-19 Takadanobaba, Shinjuku-ku, Tokyo, 169-0075 Japan
TEL: 03-5389-6492 FAX: 03-3368-2830

The hard copy of the final manuscript should be the same in form and content as the electronic manuscript. However, tables and figures should be printed out separately from the main text (which includes the title, author(s), Japanese and English abstracts, and keywords). Mark the approximate positioning of tables and figures in the text.

Tables and figures should each be on a separate page. They should be numbered consecutively and titled (a brief explanation or caption).

Clear hard copies of tables and figures need to be supplied as they may be reproduced in publication. The final size of tables and figures will be decided by the editorial committee.

The electronic copy of the manuscript should be a file using the manuscript template (Word file for Japanese, Word file for English, or La Tex file for Japanese). Tables and figures may be in either Microsoft Word format or PDF format.

The author may proofread up to the second proof for corrections. No additions or deletions can be made to the manuscript after the final proof stage.

学校英語教育のコミュニケーション論

榎本剛士 著



「教室で英語を学ぶ」ことの教育言語人類学試論

2019年9月刊行

本書では、日本の高校の英語授業で実際に起こったコミュニケーションから出発し、教師や生徒が使用する言語の「再帰性」という特徴に着目しながら、教室内で・教室外へ展開するメタ・コミュニケーション、および、その連鎖を辿る。「教室で英語を学ぶ」という社会・文化的実践の多層性、教室における英語の多機能性を明らかにし、「教室で英語を学ぶ」ことそれ自体をコミュニケーションとして捉え直すための枠組みを構築する。　**A5 判・上製・270 頁　本体 4900 円**

探索的コーパス言語学

石井正彦 著



データ主導の日本語研究・試論

2019年9月刊行

これまでコーパス言語学研究の主流は「データによって仮説を検証する確認的なアプローチ」であったが、本書は「データによってデータそのものを説明する探索的なアプローチ」、つまりあらゆる規模のコーパスを対象としてデータから構造やパターンを探り出し有意味な洞察や仮説を得るアプローチを提案する。統計学によるコーパス言語学の方法論的展開とは。　**A5 判・上製・388 頁　本体 5700 円**

「なる」構文の多義性とそのメカニズム

大神雄一郎 著



なぜスカートは短くなるのか？

2019年9月刊行

日常的に広く観察される「X が Y くなる」や「X が Y になる」といった、変化を表す動詞「なる」に様々なアスペクト形式の付いた日本語表現について、変化の「なる」構文と呼び、その実態とメカニズムについて論じた書。本書では、これらの表現の多義性に注目し、その意味、用法の拡がりについて日本語学・英語学・心理学などの知見も取り込みながら考察を行い、認知的要因に支えられて生じる現象であることを主張した。　**A5 判・上製・294 頁　本体 4800 円**

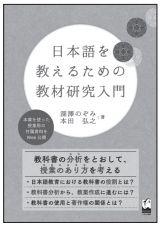
好評既刊書

- **聞き手はいつあいづちを打つのか**
  マレーシア語と日本語会話の対照研究
  勝田順子 著　258 頁 本体 5300 円
- **発話冒頭における言語要素の語順と相互行為**
  伊藤翼斗 著　306 頁 本体 6000 円
- **【改訂版 】日本語教育学の歩き方** 初学者のための研究ガイド
  本田弘之，岩田一成，義永美央子，渡部倫子 著　本体 2300 円
- **母語をなくさない日本語教育は可能か**
  定住二世児の二言語能力
  真嶋潤子 編著　336 頁 本体 5600 円
- **外国にルーツをもつ子どものバイリンガル読書力**
  櫻井千穂 著　340 頁 本体 5900 円
- **オンデマンド版 出産・子育てのナラティブ分析**
  日本人女性の声にみる生き方と社会の形
  秦かおり，岡本多香子，井出里咲子 著　286 頁 本体 3500 円

大阪大学出版会
〒565-0871　大阪府吹田市山田丘2-7　大阪大学ウエストフロント
TEL:06-6877-1614 FAX:06-6877-1617 e-mail:info@osaka-up.or.jp

くろしお出版

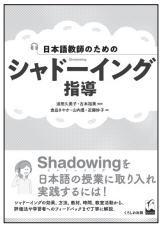
日本語を教えるための教材研究入門



■深澤のぞみ/本田弘之[著]／A5判／本体1,800円＋税

日本語教科書の分析をとおして授業のあり方を考える初の入門書。授業で教科書を使う前にどう分析すればよいのか？　教科書分析から教案を作成するには？　教科書と「著作権」の関係とは？　本書を使った授業用の付属資料を Web 公開。

日本語教師のための　シャドーイング指導



■迫田久美子/古本裕美[編著]　倉品さやか/山内豊/近藤妙子[著]／A5判／本体2,000円＋税

シャドーイングを授業に取り入れるための入門書。シャドーイングが日本語学習者の「わかる」を「できる」へとつなげられる有効な訓練法であることを紹介。さらに、それを実践するための指導法や評価の仕方、日本国外の実践例も。

日本語教師のための　実践・読解指導



■石黒圭[編著]／A5判／本体2,200円＋税

日々の授業に役立つ、好評「実践」シリーズ第三弾。学習者の「つまずき」を解消するポイントや教室活動を丁寧に解説、「読む力」と「考える力」を育成するための、優れた授業実践を紹介。読解授業の難しさを解決するヒントが満載。

超基礎・日本語教育



■森篤嗣[編著]　太田陽子/奥野由紀子/小口悠紀子/嶋ちはる/中石ゆうこ/柳田直美[著]／A5判／本体1,600円＋税

日本語教育の基礎的な知識から実習まで。最新でもっともわかりやすい日本語教育の入門書。まずは日本語の模擬授業を体験してみることを最短距離で目指す。日本語教育を知る、日本語教師になりたい人の入り口に。

中国朝鮮族の言語使用と意識



■髙木丈也[著]／A5判／本体4,500円＋税

中国東北地方に住む中国朝鮮族の言語と使用意識について、著者が 2014 年以降、単身現地を巡って独自に行った調査をもとに記述言語学的・社会言語学的観点から分析を行う。平成 30 年度新村出記念財団、刊行助成を受けて刊行。

日本語配慮表現の原理と諸相



■山岡政紀[編]／A5判／本体4,200円＋税

「つまらないものですが」などに代表される、日本語配慮表現について、研究を行うための原理を整頓する。また、その機能についてポライトネス理論をもとに考察、外国語との対照も試みる。研究の基本とその広がりが掴める好著。

日本語と世界の言語のとりたて表現



■野田尚史[編]／A5判／本体4,500円＋税

「だけ」「さえ」「も」といったとりたて表現が世界の言語ではどのように表されているか、日本語との共通点や相違点を通して明らかにする。これまでの研究動向や古代日本語、また日本語学習者の誤用なども含め幅広く検討する。

Tel 03-6261-2867　Fax 03-6261-2879　Mail kurosio@9640.jp　http://www.9640.jp

メタファー研究 2 特集：時間のメタファー



鍋島弘治朗・楠見孝・内海彰編　定価 5,000 円＋税

言語学、心理学、工学など、様々な立場からメタファーを研究するシリーズ。第 2 巻では、時間とメタファー表現のかかわりの検討を中心とした論文を掲載する。

使える日本語文法ガイドブック

やさしい日本語で教室と文法をつなぐ



中西久実子・坂口昌子・大谷つかさ・寺田友子著

定価 1,600 円＋税

「使える日本語」を教えるために必要な情報を平易な日本語で書いたガイドブック。

日本語教育における メタ言語表現の研究



李婷著　定価 7,200 円＋税

メタ言語表現の学習とコミュニケーションのメタ認知の向上を結びつける日本語教育を提案。

漫画に見られる話しことばの研究

日本語教育への可能性



福池秋水著　定価 5,000 円＋税

主に漫画作品を対象に、首都圏方言の表現のゆれと使い分けに注目。日本語学習者の表現の幅を広げるための基礎研究。

文脈情報を用いた 文章理解過程の実証的研究

学習者の母語から捉えた日本語理解の姿



石黒圭編　定価 6,800 円＋税

多義語や知らない語の意味を、どのように確定したり推測したりするのか。日本語学習者の頭のなかで起きている意味の理解過程を、学習者の母語の分析を通して迫る。

言語と慣習性

ことわざ・慣用表現とその拡張用法の実態

土屋智行著　定価 4,200 円＋税

日本語慣用表現や諺をはじめとした定型性の高い表現を多く収集し、コーパス言語学の手法を用いて分析。

近現代日本語の「誤用」と 言語規範意識の研究

新野直哉著　定価 6,500 円＋税

副詞“全然”や、「誤用」の定番例として知られている“気がおけない”等の使用実態と言語規範意識についての考察。

共同注意場面による 日本語指示詞の研究

平田未季著　定価 6,400 円＋税

日本語母語話者が目の前の対象へ共同注意を確立するために行うやりとりを観察。コ系・ソ系・ア系の新たな意味論および語用論的分析を提示。

■ひつじ書房の刊行案内や特別セールなどのお知らせは「ひつじメール通信」から配信しております。
ご希望の方は toiawase@hituzi.co.jp までメールでご連絡ください。

〒112-0011　東京都文京区千石 2-1-2 大和ビル 2F
TEL 03-5319-4916　FAX 03-5319-4917
toiawase@hituzi.co.jp　http://www.hituzi.co.jp/

ひつじ書房

社会言語科学会　第 44 回大会発表論文集

2020 年 2 月 14 日発行
編集・発行　社会言語科学会
〒162-0801　東京都新宿区山吹町 358-5
アカデミーセンター
Tel:03-6824-9377 Fax:03-5227-8631
E-mail:jass-post@bunken.co.jp
電子版作製　(株)国際文献社

© 社会言語科学会